山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡辻田地区の調査

第 7 集

上 巻

1978

福岡県教育委員会

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水字門田・辻田所在

門田遺跡辻田地区の調査

第 7 集

上 巻

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輌基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，春日市大字上白水所在門田遺跡辻田地区の生活遺構関係の調査報告を内容とするもので，『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが，本報告書が文化財保護の一助となり，学術・研究にも活用いただければ，望外の喜びとするものであります。

なお，調査に対してご協力いただいた調査員，地元の方々をはじめ関係各位のご援助とご配慮により本書を発刊することができましたことを，心から感謝申し上げます。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1. 本書は，昭和46年11月22日から昭和50年10月25日までに福岡県教育委員会が，日本国有鉄道下関工事局から委託されて，山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した7冊目の報告書である。

2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ	井上裕弘
Ⅱ	久村貞男・萩原博文
Ⅲ—1	井上裕弘・木下修 小池史哲・藤瀬禎博 石橋新次
Ⅲ—2	井上裕弘・木下修 佐々木隆彦・小池史哲
Ⅲ—3	井上裕弘
Ⅲ—4・5	木下修・小池史哲
Ⅲ—6・7・8・9・10	井上裕弘
Ⅲ—9・10	木下修
Ⅳ・Ⅴ	井上裕弘・小池史哲
Ⅵ—1	藤原宏志
Ⅵ—2	西田正規
Ⅵ—3	大澤正己
Ⅶ	井上裕弘・木下修 藤瀬禎博・石橋新次

3. 本遺跡のプラント・オパール分析・執筆には宮崎大学農学部藤原宏志助教授，炭化種子・炭化材の分析・執筆には近畿大学医学部西田正規助手，鉄滓分析・執筆には新日本製鉄大澤正己氏の協力を得た。また，先土器時代の調

査・執筆には，佐世保市文化科学館久村貞男・平戸市教育委員会萩原博文両氏の協力を得た。

4. 掲載の写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次と挿図目次に示すとおりである。遺物写真撮影は九州歴史資料館石丸洋・岡紀久夫氏の協力を得た。

5. 本書の編集は，井上裕弘があたった。

本　文　目　次

門田遺跡・辻田地区の調査

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　先土器時代の調査……9

1. 調査の経過……9
2. 調査の内容……9
3. 所見……9
4. 辻田地区出土の先土器文化石器……9

Ⅲ　弥生時代の遺構と遺物……19

1. 袋状竪穴……19
2. 竪穴住居跡……137
3. 方形竪穴遺構……204
4. 長方形竪穴遺構……211
5. 円形竪穴遺構……214
6. 長方形土壙……215
7. 屋外炉跡……218
8. V字溝……220
9. 溝状遺構……225
10. 包含層出土の土器・石器・青銅製品……226

Ⅳ　古墳時代の遺構と遺物……245

1. 竪穴住居跡……245
2. 方形竪穴遺構……262
3. 溝状遺構……264
4. 包含層出土の遺物……264

V　歴史時代の遺構と遺物 …… 266

1. 掘立柱建物跡…… 266
2. 柵　　列…… 272
3. 不整形竪穴遺構…… 274
4. 製 鉄 炉 跡…… 276
5. 溝 状 遺 構…… 276
6. 包含層出土の遺物…… 280

VI　自然科学系の調査…… 285

1. プラント・オパール分析…… 286
2. 炭化種子・木炭分析…… 291
3. 製鉄関係遺物の分析…… 293

VII　お わ り に…… 311

1. 調査の成果と問題点…… 311
2. 袋状竪穴の機能に関する諸問題…… 312
3. 前期末の地域性について…… 318
4. 弥生時代の石器について…… 345
5. 弥生終末～古墳前期の土器群について…… 357

図　版　目　次

本文対照頁

図版 1　(1)　伐採後の門田遺跡航空写真　西から（井上裕弘撮影）…… 1
　　(2)　伐採後の門田遺跡航空写真　北西から（井上撮影）…… 1
　2　(1)　昭和48年度・辻田地区の調査航空写真（井上撮影）…… 1
　　(2)　昭和48年度・辻田地区の調査航空写真（井上撮影）…… 1
　3　(1)　昭和48年度・辻田地区航空写真近景（井上撮影）…… 2
　　(2)　昭和48年度・辻田地区の調査全景（小池史哲撮影）…… 2
　4　(1)　昭和49年度・辻田地区の調査航空写真　北から（北澤廣撮影）…… 3
　　(2)　昭和49年度・辻田地区の調査航空写真　南から（北澤撮影）…… 3
　5　(1)　E5・6，F5・6区トレンチ全景　北から（井上撮影）…… 3
　　(2)　F5・6区トレンチ近景　北から（井上撮影）…… 3
　6　(1)　E6区トレンチ東壁（井上撮影）…… 3
　　(2)　F6区トレンチ南壁（井上撮影）…… 3
　7　(1)　昭和50年度・辻田地区の調査航空写真　西から（井上撮影）…… 4
　　(2)　昭和50年度・辻田地区の調査航空写真　東から（井上撮影）…… 4
　8　(1)　C3・4，D2～4，E3発掘区全景　東から（井上撮影）…… 4
　　(2)　C3・4，D3・4発掘区近景　東から（井上撮影）…… 4
　9　(1)　D3・E3発掘区全景　北から（井上撮影）…… 4
　　(2)　D2・3，E2・3発掘区全景　北から（井上撮影）…… 4
　10　(1)　先土器時代発掘区全景　南東から（久村貞男撮影）…… 9
　　(2)　土層断面（久村撮影）…… 9
　11　(1)　先土器時代石器（1）（木下修撮影）…… 9
　　(2)　先土器時代石器（2）（木下撮影）……12
　12　(1)　D5・6区袋状竪穴群全景　東から（井上撮影）……19
　　(2)　4・5・8・11号袋状竪穴群　東から（井上撮影）……19
　13　(1)　1号袋状竪穴（井上撮影）……19
　　(2)　2号袋状竪穴（井上撮影）……26
　14　(1)　3号袋状竪穴土層断面（井上撮影）……27
　　(2)　3号袋状竪穴（井上撮影）……27

15 (1) 4号袋状竪穴（井上撮影）……27
(2) 4号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）……27
16 (1) 5号袋状竪穴（井上撮影）……30
(2) 6号袋状竪穴（井上撮影）……35
17 (1) 7号袋状竪穴（井上撮影）……38
(2) 7号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）……38
18 (1) 9号袋状竪穴（井上撮影）……44
(2) 13号袋状竪穴（井上撮影）……48
19 (1) 14号袋状竪穴（井上撮影）……51
(2) 15号袋状竪穴（井上撮影）……58
20 (1) B6，C4～6，D4・5区袋状竪穴群全景　西から（井上撮影）……61
(2) B6，C5・6区袋状竪穴群全景　西から（井上撮影）……61
21 (1) 16号袋状竪穴（井上撮影）……61
(2) 17号袋状竪穴（井上撮影）……62
22 (1) 18号方形竪穴（井上撮影）……64
(2) 19号袋状竪穴（井上撮影）……64
23 (1) 19号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）……64
(2) 19号袋状竪穴内獣骨出土状態（井上撮影）……64
24 (1) 20号方形竪穴（井上撮影）……69
(2) 21号方形竪穴（井上撮影）……69
25 (1) 22号袋状竪穴（井上撮影）……70
(2) 23号袋状竪穴（井上撮影）……70
26 (1) 24号袋状竪穴（井上撮影）……75
(2) 24号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）……75
27 (1) 25号袋状竪穴（井上撮影）……79
(2) 25号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）……79
28 (1) 27号方形竪穴（井上撮影）……84
(2) 28号方形竪穴（井上撮影）……84
29 (1) 29号方形竪穴（井上撮影）……84
(2) 30号方形竪穴（井上撮影）……85
30 (1) 31号方形竪穴（井上撮影）……85
(2) 32号方形竪穴（井上撮影）……85
31 (1) 35号袋状竪穴（井上撮影）……88

(2) 35号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）……88
32 (1) 36号袋状竪穴（井上撮影）……94
(2) 38号袋状竪穴（井上撮影）……99
33 (1) 39号袋状竪穴（井上撮影）……99
(2) 40号袋状竪穴（井上撮影）…… 102
34 (1) 41号方形竪穴（井上撮影）…… 106
(2) 42号袋状竪穴（井上撮影）…… 108
35 (1) 43号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）…… 109
(2) 43号袋状竪穴（井上撮影）…… 109
36 (1) 44号袋状竪穴（井上撮影）…… 116
(2) 45号袋状竪穴（井上撮影）…… 119
37 (1) 46号袋状竪穴（井上撮影）…… 122
(2) 47号袋状竪穴（井上撮影）…… 127
38 (1) 48号袋状竪穴内土器出土状態（井上撮影）…… 131
(2) 48号袋状竪穴（井上撮影）…… 131
39 1・4・5号袋状竪穴出土土器（岡紀久夫撮影）……26
40 5・6号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……33
41 7号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……38
42 10・12・14号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……45
43 14号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……51
44 19号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……64
45 19・24・25・28号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……64
46 35号袋状竪穴出土土器（1）（岡撮影）……88
47 35号袋状竪穴出土土器（2）（岡撮影）……88
48 37号袋状竪穴出土土器（岡撮影）……96
49 39・40・42号袋状竪穴出土土器（岡撮影）…… 102
50 42・43・44・45号袋状竪穴出土土器（岡撮影）…… 108
51 46・47・48号袋状竪穴出土土器（岡撮影）…… 122
52 (1) 1・4・5号袋状竪穴出土石器（木下撮影）……26
(2) 6・7・9号袋状竪穴出土石器・土製品（木下撮影）……37
53 (1) 11～14号袋状竪穴出土石器・土製品（木下撮影）……48
(2) 15～17・19号袋状竪穴出土石器・土製品（木下撮影）……61
54 (1) 22・23号袋状竪穴出土石器（木下撮影）……73

(2) 24・25号袋状竪穴出土石器・土製品（木下撮影）……78
55 (1) 32・35・37号袋状竪穴出土石器（木下撮影）……87
(2) 39・40・42号袋状竪穴出土石器（木下撮影）…… 102
56 (1) 43号袋状竪穴出土石器（木下撮影）…… 114
(2) 43・45号袋状竪穴出土石器・土製品（木下撮影）…… 115
57 (1) 44・47号袋状竪穴出土石器（木下撮影）…… 119
(2) 46・48号袋状竪穴出土石器・土製品（木下撮影）…… 126
58 (1) 袋状竪穴群と1・2号竪穴住居跡群（井上撮影）…… 137
(2) 3・4号竪穴住居跡群（井上撮影）…… 137
59 (1) 1号竪穴住居跡（井上撮影）…… 137
(2) 2号竪穴住居跡（井上撮影）…… 138
60 (1) 3号竪穴住居跡（井上撮影）…… 138
(2) 4号竪穴住居跡（井上撮影）…… 140
61 (1) 5～9号竪穴住居跡群　西から（井上撮影）…… 141
(2) 5～7・9号竪穴住居跡群　南から（井上撮影）…… 141
62 (1) 5号竪穴住居跡（井上撮影）…… 141
(2) 7号竪穴住居跡（井上撮影）…… 143
63 (1) 8号竪穴住居跡（井上撮影）…… 143
(2) 9号竪穴住居跡（井上撮影）…… 155
64 (1) 10号竪穴住居跡（井上撮影）…… 157
(2) 10号竪穴住居跡屋内貯蔵穴内石庖丁出土状態（井上撮影）…… 157
65 (1) 11・12号住居跡群　北から（井上撮影）…… 158
(2) 11・12号住居跡群　南から（井上撮影）…… 158
66 (1) 11号竪穴住居跡　西から（小池撮影）…… 158
(2) 11号竪穴住居跡　北から（小池撮影）…… 158
67 (1) 11号竪穴住居跡内土器出土状態（1）（小池撮影）…… 158
(2) 11号竪穴住居跡内土器出土状態（2）（小池撮影）…… 158
68 (1) 12号竪穴住居跡と土器出土状態（佐々木隆彦撮影）…… 163
(2) 12号竪穴住居跡（佐々木撮影）…… 163
69 (1) 12号竪穴住居跡内上層土器出土状態（佐々木撮影）…… 164
(2) 12号竪穴住居跡内下層土器出土状態（佐々木撮影）…… 164
70 (1) 13～14号竪穴住居跡群航空写真（井上撮影）…… 182
(2) 13～18号竪穴住居跡群（井上撮影）…… 182

71 (1) 13号竪穴住居跡（井上撮影）…… 182
(2) 13号竪穴住居跡内石庖丁出土状態（井上撮影）…… 182
72 (1) 14号竪穴住居跡（井上撮影）…… 183
(2) 14号竪穴住居跡内石庖丁出土状態（井上撮影）…… 183
73 (1) 14号竪穴住居跡内鉄鉇出土状態（井上撮影）…… 183
(2) 14号竪穴住居跡内鉄鎌出土状態（井上撮影）…… 183
74 (1) 15号竪穴住居跡（井上撮影）…… 186
(2) 16・17・24号竪穴住居跡（井上撮影）…… 187
75 (1) 18号竪穴住居跡（1）（井上撮影）…… 187
(2) 18号竪穴住居跡（2）（井上撮影）…… 187
76 (1) 19号竪穴住居跡（井上撮影）…… 193
(2) 20号竪穴住居跡（井上撮影）…… 184
77 (1) 20号竪穴住居跡内土器出土状態（井上撮影）…… 194
(2) 21号竪穴住居跡（井上撮影）…… 196
78 (1) 20・22・23号竪穴住居跡群　東から（井上撮影）…… 196
(2) 22号竪穴住居跡（井上撮影）…… 196
79 (1) 22号竪穴住居跡内土器出土状態（井上撮影）…… 196
(2) 23号竪穴住居跡（井上撮影）…… 198
80 (1) 24号竪穴住居跡（井上撮影）…… 199
(2) 25号竪穴住居跡（井上撮影）…… 200
81 (1) 1・2号方形竪穴遺構（井上撮影）…… 204
(2) 1号方形竪穴遺構（井上撮影）…… 204
82 (1) 2号方形竪穴遺構（井上撮影）…… 208
(2) 3号方形竪穴遺構（井上撮影）…… 209
83 (1) 長方形竪穴遺構（井上撮影）…… 211
(2) 円形竪穴遺構（井上撮影）…… 214
84 (1) 1号長方形土壙（井上撮影）…… 215
(2) 1号長方形土壙落込み部近景（井上撮影）…… 215
85 (1) 2号長方形土壙（井上撮影）…… 218
(2) 4号長方形土壙（井上撮影）…… 218
86 (1) 屋外炉跡と土器出土状態（井上撮影）…… 218
(2) 土器除去後の屋外炉跡（井上撮影）…… 218
87 (1) V字溝全景　北から（小池撮影）…… 220

(2)　V字溝G４区近景　西から（小池撮影）…… 220
88　(1)　V字溝G５・６区近景　北から（小池撮影）…… 220
(2)　V字溝近景　南から（井上撮影）…… 220
89　(上)　V字溝内土層断面（井上撮影）…… 220
(下)　V字溝内土器出土状態（井上撮影）…… 220
90　(1)　溝状遺構A　東から（井上撮影）…… 225
(2)　溝状遺構B　南から（井上撮影）…… 225
91　８号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 144
92　８・９号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 144
93　11・12号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 158
94　12号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 164
95　18号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 190
96　(1)　18・19号竪穴住居跡出土土器，１・18号竪穴住居跡出土玉類（岡撮影）190
(2)　５・14・19号竪穴住居跡出土鉄器（岡撮影）…… 194
97　22号竪穴住居跡・１号方形竪穴遺構出土土器（岡撮影）…… 196
98　１号方形竪穴遺構・長方形竪穴遺構・円形竪穴遺構・屋外炉跡出土土器
（岡撮影）…… 204
99　V字溝・包含層出土土器（岡撮影）…… 221
100　包含層出土土器・青銅製品（岡撮影）…… 226
101　(1)　２～５・８・９号竪穴住居跡出土石器・土製品（木下撮影）…… 138
(2)　10・11・13～16・21・23号竪穴住居跡出土石器（木下撮影）…… 158
102　(1)　12号竪穴住居跡出土石器（木下撮影）…… 178
(2)　12号竪穴住居跡出土石器・土製品（木下撮影）…… 178
103　(1)　17・18・20・24号竪穴住居跡出土石器・土製品（木下撮影）…… 193
(2)　V字溝，その他遺構出土石器・土製品（木下撮影）…… 208
104　(1)　包含層出土石器（木下撮影）…… 238
(2)　包含層出土石器・土製品（木下撮影）…… 238
105　(1)　６号竪穴住居跡と土器出土状態（井上撮影）…… 245
(2)　完掘後の６号竪穴住居跡（井上撮影）…… 245
106　(1)　６号竪穴住居跡内土器出土状態（1）（井上撮影）…… 245
(2)　６号竪穴住居跡内土器出土状態（2）（井上撮影）…… 245
107　(1)　６号竪穴住居跡内土器出土状態（3）（井上撮影）…… 245
(2)　６号竪穴住居跡内土器出土状態（4）（井上撮影）…… 245

108 (1) 6号竪穴住居跡内土器出土状態（5）（井上撮影）…… 245
(2) 6号竪穴住居跡内土器出土状態（6）（井上撮影）…… 245
109 (1) 17号竪穴住居跡（井上撮影）…… 256
(2) 17号竪穴住居跡屋内貯蔵穴内土器出土状態（井上撮影）…… 256
110 (1) 17号竪穴住居跡内土器出土状態（1）（井上撮影）…… 256
(2) 17号竪穴住居跡内土器出土状態（2）（井上撮影）…… 256
111 (1) 溝状遺構H全景 北から（井上撮影）…… 264
(2) 溝状遺構G全景 西から（井上撮影）…… 264
112 6号竪穴住居跡出土土器・玉類（岡撮影）…… 245
113 6号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 245
114 6号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 245
115 6号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 245
116 6・17号竪穴住居跡出土土器（岡撮影）…… 245
117 17号竪穴住居跡出土土器・鉄器（岡撮影）…… 257
118 (1) 1～3号掘立柱建物跡群 東から（井上撮影）…… 266
(2) 1・2号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 266
119 (1) 5・6号掘立柱建物跡群（井上撮影）…… 269
(2) 5号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 269
120 (1) 6号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 269
(2) 7号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 269
121 (1) 8号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 270
(2) 9号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 271
122 (1) 1号不整形竪穴遺構（井上撮影）…… 274
(2) 2号不整形竪穴遺構（井上撮影）…… 275
123 (1) 製鉄炉跡と7号掘立柱建物跡（井上撮影）…… 276
(2) 製鉄炉跡 南から（井上撮影）…… 277
124 (1) 製鉄炉跡 東から（井上撮影）…… 277
(2) 製鉄炉跡断面 西から（井上撮影）…… 277
125 (1) 溝状遺構J全景 西から（井上撮影）…… 278
(2) 溝状遺構J内土器出土状態（井上撮影）…… 278
126 (1) 溝状遺構K全景 東から（井上撮影）…… 279
(2) 溝状遺構K近景 西から（井上撮影）…… 279
127 (1) 溝状遺構M遠景 南から（井上撮影）…… 279

(2) 溝状遺構M近景 東から（井上撮影）…… 279
128 不整形竪穴遺構・溝状遺構・包含層出土土器（岡撮影）…… 275
129 包含層出土土瓦（岡撮影）…… 280
130 包含層出土磁器（岡撮影）…… 283
131 プラント・オパール顕微鏡写真 (1)（藤原宏志撮影）…… 286
132 プラント・オパール顕微鏡写真 (2)（藤原撮影）…… 286
133 炭化種子（西田正規撮影）…… 291
134 製鉄炉出土鉱滓の顕微鏡組織（大澤正己撮影）…… 293
135 製鉄炉出土鉱滓の顕微鏡組織（大澤撮影）…… 293
136 鉱滓Sの Electron Probe Microanalyser 写真（大澤撮影）…… 293
137 辻田地区出土の砂鉄顕微鏡組織及び製鉄炉出土の分析木炭外観
（大澤撮影）…… 293
138 辻田地区出土物の顕微鏡組織（大澤撮影）…… 293

挿 図 目 次

第 1 図 発掘風景 (1)（井上裕弘撮影）…… 3
第 2 図 発掘風景 (2)（井上撮影）…… 3
第 3 図 発掘風景 (3)（井上撮影）…… 3
第 4 図 山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置（佐々木隆彦作成）…… 7
第 5 図 山陽新幹線関係主要遺跡分布図（木下修作成）……折込み
第 6 図 山陽新幹線博多車輛基地付近地形図及び遺跡分布図
（日本国有鉄道原図 木下作成）……折込み
第 7 図 門田遺跡調査地区全図 (1/5000)（日本国有鉄道原図，井上作成，製図）折込み
第 8 図 先土器時代石器実測図 (1)（久村貞男実測，製図）……10
第 9 図 先土器時代石器実測図 (2)（萩原博文実測，製図）……13
第 10 図 先土器時代石器実測図 (3)（萩原実測，製図）……14
第 11 図 1号袋状竪穴実測図（高田一弘実測，河鍋洋子製図）……19
第 12 図 前期末壺形土器分類図（井上作成）……20
第 13 図 前期末甕形土器分類図（井上作成）……21
第 14 図 前期末鉢形土器分類図（井上作成）……22
第 15 図 1号袋状竪穴出土土器実測図 (1)（石橋新次実測，製図）……24

第 16 図　1号袋状竪穴出土土器実測図 (2)（石橋実測，製図）……25
第 17 図　1号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……26
第 18 図　2号袋状竪穴土層断面図（高田実測，荒武麗子製図）……26
第 19 図　2・3号袋状竪穴実測図（高田実測，河鍋製図）……27
第 20 図　4・5号袋状竪穴実測図（桑田和義実測，手島道子製図）……28
第 21 図　4号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……29
第 22 図　4号袋状竪穴出土石器実測図（石橋実測，製図）……30
第 23 図　5号袋状竪穴出土土器実測図 (1)（石橋実測，製図）……31
第 24 図　5号袋状竪穴出土土器実測図 (2)（石橋実測，製図）……32
第 25 図　5号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……33
第 26 図　6・7号袋状竪穴実測図（高田・桑田実測，手島製図）……34
第 27 図　6号袋状竪穴出土土器実測図 (1)（石橋実測，製図）……36
第 28 図　6号袋状竪穴出土土器実測図 (2)（石橋実測，製図）……37
第 29 図　6号袋状竪穴出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）……38
第 30 図　7号袋状竪穴出土土器実測図 (1)（石橋実測，製図）……39
第 31 図　7号袋状竪穴出土土器実測図 (2)（石橋実測，製図）……40
第 32 図　7号袋状竪穴出土土製品（木下実測，製図）……41
第 33 図　8・9号袋状竪穴実測図（高田実測，白水千賀子製図）……42
第 34 図　8・9号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……43
第 35 図　9号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……44
第 36 図　10号袋状竪穴実測図（高田実測，手島製図）……45
第 37 図　10・11号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……46
第 38 図　11号袋状竪穴実測図（高田実測，白水製図）……47
第 39 図　11号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……48
第 40 図　12・13号袋状竪穴実測図（高田実測，勝野素子製図）……49
第 41 図　12・13号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……50
第 42 図　12号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……51
第 43 図　13号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……51
第 44 図　14号袋状竪穴実測図（高田実測，河鍋製図）……52
第 45 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 (1)（石橋・市川富久実測，石橋製図）……53
第 46 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 (2)（石橋・市川実測，石橋製図）……55
第 47 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 (3)（石橋実測，製図）……56
第 48 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 (4)（石橋実測，製図）……57

第 49 図　14号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……58
第 50 図　15～18号袋状竪穴実測図（高田・川村博・高田弘信実測，河鍋製図）……59
第 51 図　15・16・17号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……60
第 52 図　15号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……61
第 53 図　16号袋状竪穴土層断面図（小池史哲実測，勝野製図）……61
第 54 図　16号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……62
第 55 図　17号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……63
第 56 図　18号袋状竪穴土層断面図（小池実測，勝野製図）……64
第 57 図　19号袋状竪穴実測図（高田実測，手島製図）……65
第 58 図　19号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）……66
第 59 図　19号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）……67
第 60 図　19号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……68
第 61 図　20・21号袋状竪穴実測図（小田雅文・川村実測，河鍋製図）……69
第 62 図　21号袋状竪穴土層断面図（藤瀬禎博実測，勝野製図）……69
第 63 図　22・23号袋状竪穴実測図（小池・藤瀬・高田実測，白水製図）……70
第 64 図　22号袋状竪穴土層断面図（藤瀬実測，手島製図）……71
第 65 図　22・23号袋状竪穴出土土器実測図（藤瀬・石橋実測，石橋製図）……72
第 66 図　22号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……73
第 67 図　23号袋状竪穴土層面図（小池実測，河鍋製図）……73
第 68 図　23号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……74
第 69 図　24号袋状竪穴実測図（高田実測，白水製図）……76
第 70 図　24号袋状竪穴出土土器実測図（1）（藤瀬・石橋実測，石橋製図）……77
第 71 図　24号袋状竪穴出土土器実測図（2）（藤瀬・石橋実測，石橋製図）……78
第 72 図　24号袋状竪穴内遺物分布図（井上作成）……折込み
第 73 図　24号袋状竪穴出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）……79
第 74 図　25～28号袋状竪穴実測図（小池・川村・高田実測，白水製図）……80
第 75 図　25号袋状竪穴土層断面図（小池実測，手島製図）……81
第 76 図　25号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……82
第 77 図　25号袋状竪穴出土石器実測図（1）（木下実測，製図）……83
第 78 図　25号袋状竪穴出土石器実測図（2）（木下実測，製図）……83
第 79 図　26・32号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）……85
第 80 図　29～32号袋状竪穴実測図（小池・丸山康晴・高田実測，河鍋製図）……86

第 81 図　32号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……87
第 82 図　33・34号袋状竪穴実測図（藤瀬・丸山実測，河鍋製図）……88
第 83 図　35号袋状竪穴実測図（高田実測，白水製図）……89
第 84 図　35号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）……90
第 85 図　35号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）……91
第 86 図　35号袋状竪穴出土土器実測図（3）（石橋実測，製図）……92
第 87 図　35号袋状竪穴出土遺物分布図（井上作成）……折込み
第 88 図　35号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……94
第 89 図　36・37号袋状竪穴実測図（宮崎貴夫実測，河鍋製図）……95
第 90 図　37号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）……97
第 91 図　37号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）……98
第 92 図　37号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）……99
第 93 図　38・39号袋状竪穴実測図（藤瀬実測，手島製図）…… 100
第 94 図　38・39号袋状竪穴出土土器実測図（藤瀬実測，石橋製図）…… 101
第 95 図　39号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 102
第 96 図　40～42号袋状竪穴実測図（小池・藤瀬・高田実測，手島製図）…… 103
第 97 図　40号袋状竪穴出土土器実測図（藤瀬実測，石橋製図）…… 104
第 98 図　40号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 106
第 99 図　42号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）…… 107
第 100 図　42号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 108
第 101 図　43号袋状竪穴実測図（宮崎実測，白水製図）…… 109
第 102 図　43号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋・藤瀬実測，石橋製図）…… 110
第 103 図　43号袋状竪穴内遺物分布図（井上作成）……折込み
第 104 図　43号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）…… 112
第 105 図　43号袋状竪穴出土土器実測図（3）（石橋実測，製図）…… 113
第 106 図　43号袋状竪穴出土石器実測図（1）（木下実測，製図）…… 115
第 107 図　43号袋状竪穴出土石器実測図（2）（木下実測，製図）…… 116
第 108 図　44・45号袋状竪穴実測図（丸山・高田実測，手島製図）…… 117
第 109 図　44号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）…… 118
第 110 図　44号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 120
第 111 図　45号袋状竪穴出土土器実測図（石橋実測，製図）…… 121
第 112 図　45号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 122
第 113 図　46号袋状竪穴実測図（宮崎実測，河鍋製図）…… 123

第114図　46号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）…… 124
第115図　46号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）…… 125
第116図　46号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 126
第117図　47・48号袋状竪穴実測図（藤瀬実測，白水製図）…… 127
第118図　47号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）…… 129
第119図　47号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）…… 130
第120図　47号袋状竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 131
第121図　48号袋状竪穴出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）…… 133
第122図　48号袋状竪穴出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）…… 134
第123図　48号袋状竪穴出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）…… 135
第124図　49・50号袋状竪穴実測図（高田実測，河鍋製図）…… 136
第125図　50号袋状竪穴全景（井上撮影）…… 136
第126図　1号竪穴住居跡実測図（高田実測，白水製図）…… 137
第127図　1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 137
第128図　2号竪穴住居跡実測図（高田実測，河鍋製図）…… 138
第129図　2号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 138
第130図　3号竪穴住居跡実測図（高田実測，河鍋製図）…… 139
第131図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（1）（木下実測，製図）…… 139
第132図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（2）（木下実測，製図）…… 139
第133図　3・18号竪穴住居跡出土玉類実測図（井上実測，木下製図）…… 140
第134図　4号竪穴住居跡実測図（高田・石田広美実測，白水製図）…… 140
第135図　4号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）…… 141
第136図　5号竪穴住居跡全景（井上撮影）…… 141
第137図　5号竪穴住居跡内砥石出土状態（井上撮影）…… 141
第138図　5号竪穴住居跡実測図（井上・高田実測，白水製図）…… 142
第139図　5号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 143
第140図　7号竪穴住居跡実測図（石田実測，河鍋製図）…… 144
第141図　8号竪穴住居跡実測図（石田・桑田実測，河鍋製図）…… 145
第142図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（井上実測，石橋製図）…… 146
第143図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（井上実測，石橋製図）…… 147
第144図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（井上実測，石橋製図）…… 148
第145図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（井上実測，石橋製図）…… 150
第146図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（井上実測，石橋製図）…… 151

第147図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（井上実測，石橋製図）…… 152
第148図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（井上実測，石橋製図）…… 154
第149図　8号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 155
第150図　5・8・14・19号竪穴住居跡出土鉄器実測図（井上実測，石橋製図）…… 155
第151図　9号竪穴住居跡実測図（石田実測，白水製図）…… 156
第152図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 157
第153図　9号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 157
第154図　10号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）…… 158
第155図　11号竪穴住居跡実測図（小池実測，白水製図）…… 159
第156図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）…… 160
第157図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）…… 161
第158図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（石橋実測，製図）…… 162
第159図　11号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 164
第160図　12号竪穴住居跡実測図（佐々木・三津井実測，河鍋製図）……折込み
第161図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）…… 165
第162図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（石橋・小林義彦実測，石橋製図）…… 166
第163図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 168
第164図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 169
第165図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 170
第166図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 171
第167図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 172
第168図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 173
第169図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（9）（石橋・小林実測，石橋製図）…… 174
第170図　12号竪穴住居跡出土土器実測図(10)（石橋・小林実測，石橋製図）…… 175
第171図　12号竪穴住居跡出土土器実測図(11)（石橋・小林実測，石橋製図）…… 176
第172図　12号竪穴住居跡出土土器実測図(12)（石橋・小林実測，石橋製図）…… 177
第173図　12号竪穴住居跡出土石器実測図（1）（木下実測，製図）…… 179
第174図　12号竪穴住居跡出土石器実測図（2）（木下実測，製図）…… 180
第175図　12号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）…… 181
第176図　13号竪穴住居跡実測図（高田実測，白水製図）…… 182
第177図　13号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 183
第178図　14号竪穴住居跡実測図（中村友博実測，河鍋製図）…… 183
第179図　14・16号竪穴住居跡出土土器実測図（小林実測，石橋製図）…… 184

第180図　14号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 185
第181図　15号竪穴住居跡実測図（中村実測，河鍋製図）…… 186
第182図　15号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 186
第183図　16号竪穴住居跡全景（井上撮影）…… 187
第184図　16号竪穴住居跡実測図（中村・高田実測，白水製図）…… 188
第185図　18号竪穴住居跡実測図（宮崎・高田実測，河鍋製図）…… 189
第186図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（井上実測，石橋製図）…… 190
第187図　18号竪穴住居跡内遺物分布図（井上作成）……折込み
第188図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（井上実測，石橋製図）…… 192
第189図　16・18号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（木下実測，製図）…… 193
第190図　19号竪穴住居跡実測図（高田実測，河鍋製図）…… 194
第191図　19・20号竪穴住居跡出土土器実測図（小林実測，石橋製図）…… 195
第192図　20・22号竪穴住居跡実測図（丸山・高田実測，白水製図）……折込み
第193図　21号竪穴住居跡実測図（小林実測，白水製図）…… 197
第194図　20・21号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 197
第195図　22号竪穴住居跡出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 198
第196図　23号竪穴住居跡実測図（藤瀬実測，河鍋製図）…… 199
第197図　23号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 199
第198図　24号竪穴住居跡実測図（木下実測，白水製図）…… 200
第199図　24・25号竪穴住居跡出土土器実測図（小林実測，石橋製図）…… 201
第200図　24号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 202
第201図　25号竪穴住居跡実測図（高田実測，河鍋製図）…… 203
第202図　25号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 204
第203図　1・2号方形竪穴遺構実測図　（高田実測，白水製図）…… 205
第204図　1号方形竪穴遺構出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 206
第205図　1・2号方形竪穴遺構出土土器実測図（井上実測，石橋製図）　…… 207
第206図　1号方形竪穴遺構出土石器実測図（木下実測，製図）…… 208
第207図　2号方形竪穴遺構出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 209
第208図　3・4号方形竪穴遺構実測図　（三津井実測，白水製図）…… 210
第209図　4号方形竪穴遺構出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 211
第210図　長方形竪穴遺構実測図（小池実測，河鍋製図）…… 212
第211図　長方形竪穴・円形竪穴・長方形土壙出土土器実測図（小池実測，石橋製図）　213
第212図　長方形竪穴出土石器実測図（木下実測，製図）…… 214

第213図　円形竪穴遺構実測図（井上実測，河鍋製図）…… 215
第214図　円形竪穴出土土製品実測図（木下実測，製図）…… 215
第215図　1号長方形土壙実測図（宮崎実測，白水製図）…… 216
第216図　2・3・4号長方形土壙実測図（宮崎・高田実測，河鍋製図）……折込み
第217図　屋外炉跡実測図（高田実測，白水製図）…… 217
第218図　屋外炉跡出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 219
第219図　V字溝土層断面図（渡辺和子実測，河鍋製図）…… 220
第220図　V字溝出土土器実測図（1）（石橋実測，製図）…… 222
第221図　V字溝出土土器実測図（2）（石橋実測，製図）…… 223
第222図　V字溝出土石器実測図（木下実測，製図）…… 225
第223図　溝B出土土器実測図（井上実測，製図）…… 226
第224図　包含層出土土器実測図（1）（井上実測，石橋製図）…… 228
第225図　包含層出土土器実測図（2）（井上実測，石橋製図）…… 229
第226図　包含層出土土器実測図（3）（井上実測，石橋製図）…… 230
第227図　包含層出土土器実測図（4）（井上実測，石橋製図）…… 231
第228図　包含層出土土器実測図（5）（井上実測，石橋製図）…… 232
第229図　包含層出土土器実測図（6）（井上実測，石橋製図）…… 234
第230図　包含層出土土器実測図（7）（井上実測，石橋製図）…… 236
第231図　包含層出土土器実測図（8）（井上実測，石橋製図）…… 237
第232図　包含層出土石器実測図（1）（木下実測，製図）…… 239
第233図　包含層出土石器実測図（2）（木下実測，製図）…… 240
第234図　包含層出土石器実測図（3）（木下実測，製図）…… 241
第235図　包含層出土石器・土製品・骨製品実測図（木下実測，製図）…… 242
第236図　包含層出土鋤先実測図（井上実測，石橋製図）…… 243
第237図　6号竪穴住居跡実測図（井上・石田実測，白水製図）…… 246
第238図　6号竪穴住居跡内土器分布図（井上作成）……折込み
第239図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（井上実測，石橋製図）…… 247
第240図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（井上実測，石橋製図）…… 248
第241図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（井上実測，石橋製図）…… 250
第242図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（井上実測，石橋製図）……折込み
第243図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（井上実測，石橋製図）…… 252
第244図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（井上実測，石橋製図）…… 254
第245図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（井上実測，石橋製図）…… 255

第246図　6・17号竪穴住居跡出土玉類実測図（井上実測，木下製図）…… 256
第247図　17号竪穴住居跡実測図（高田実測，白水製図）……折込み
第248図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（井上実測，石橋製図）…… 258
第249図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（井上実測，石橋製図）…… 259
第250図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（井上実測，石橋製図）…… 260
第251図　17号竪穴住居跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 261
第252図　17号竪穴住居跡出土鉄器実測図（井上実測，石橋製図）…… 261
第253図　5号方形竪穴遺構実測図（高田実測，河鍋製図）…… 262
第254図　5号方形竪穴遺構・溝G出土土器実測図（井上実測，製図）…… 263
第255図　包含層出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 265
第256図　包含層出土須恵器実測図（井上実測，製図）…… 265
第257図　1号建物跡実測図（桑田実測，河鍋製図）…… 267
第258図　2・3・4号建物跡実測図（高田・桑田・石田実測，河鍋製図）…… 268
第259図　5・6・7・8号建物跡実測図　（高田・森田実測，河鍋製図）……折込み
第260図　9号建物跡実測図（小池・高田・中村実測，河鍋製図）…… 271
第261図　7号建物跡出土石器実測図（木下実測，製図）…… 272
第262図　10・11号建物跡実測図（小池・宮崎実測，河鍋製図）……折込み
第263図　柵列実測図（井上・高田・石田・三津井実測，白水製図）…… 273
第264図　1号不整形竪穴実測図（石田実測，白水製図）…… 274
第265図　2号不整形竪穴実測図（石田実測，白水製図）…… 275
第266図　2号不整形竪穴出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 276
第267図　製鉄炉跡実測図（高田実測，河鍋製図）…… 277
第268図　溝I出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 278
第269図　溝J出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 279
第270図　溝M出土土器実測図（井上実測，石橋製図）…… 280
第271図　包含層出土瓦拓影図（勝野手拓）…… 281
第272図　包含層出土土師器・土師質土器・瓦質土器・陶器実測図（井上実測，石橋製図）282
第273図　包含層出土磁器実測図（井上実測，製図）…… 284
第274図　プラント・オパール分析法（藤原宏志作成）…… 287
第275図　袋状竪穴土壌採取位置（1）（藤原作成）…… 287
第276図　袋状竪穴土壌採取位置（2）（藤原作成）…… 288
第277図　鉱滓PのX線回折（大澤正巳作成）……折込み
第278図　鉱滓RのX線回折（大澤作成）……折込み

第279図　鉱滓SのX線回折（大澤作成）……折込み
第280図　炉壁焼粘土赤色部（13）のX線回折（大澤作成）……折込み
第281図　炉壁粘土淡黄色部（14）のX線回折（大澤作成）……折込み
第282図　白色粘土＜比較材＞（15）のX線回折（大澤作成）……折込み
第283図　袋状竪穴内外の温湿度グラフ（井上作成）…… 316
第284図　土器の影響・交流関係図（井上作成）…… 342
第285図　辻田地区各遺構石器組成図（木下作成）…… 352
第286図　各遺跡石器組成図（木下作成）…… 354
第287図　諸遺跡の石器組成関係図（木下作成）…… 356

表　目　次

表　1　山陽新幹線関係遺跡一覧表（木下修作成）……折込み
表　2　春日・那珂川地区先土器時代遺跡地名表（木下作成）……18
表　3　袋状竪穴一覧表（井上作成）……折込み
表　4　12号住居跡層位別石器出土数（木下作成）…… 182
表　5　1号建物跡計測表（荒武麗子作成）…… 266
表　6　2号建物跡計測表（荒武作成）…… 267
表　7　3号建物跡計測表（荒武作成）…… 269
表　8　4号建物跡計測表（荒武作成）…… 269
表　9　5号建物跡計測表（荒武作成）…… 269
表　10　6号建物跡計測表（荒武作成）…… 269
表　11　7号建物跡計測表（荒武作成）…… 270
表　12　8号建物跡計測表（荒武作成）…… 270
表　13　9号建物跡計測表（荒武作成）…… 272
表　14　10号建物跡計測表（荒武作成）…… 272
表　15　11号建物跡計測表（荒武作成）…… 272
表　16　柵列計測表（荒武作成）…… 274
表　17　プラント・オパール分析結果（藤原宏志作成）…… 289
表　18　袋状竪穴出土植物種子（西田正規作成）…… 291
表　19　木炭（西田作成）…… 292

表 20　柏田遺跡の木炭…（西田作成）…… 292
表 21　供試試料の履歴及び調査項目（大澤正巳作成）…… 294
表 22　製鉄炉出土鉱滓の主要構成鉱物―粉末X線回折―（大澤作成）…… 297
表 23　門田遺跡出土鉱滓・鍛冶滓の化学組成（大澤作成）…… 298
表 24　分光分析結果（大澤作成）…… 299
表 25　砂鉄の分析結果（大澤作成）…… 300
表 26　木炭の組成（大澤作成）…… 301
表 27　各種炉材粘土の性状調査結果（大澤作成）…… 302
表 28　門田遺跡出土滓の製錬滓と鍛冶滓の区分（大澤作成）…… 306
表 29　袋状竪穴底面から検出された植物一覧表（井上裕弘作成）…… 314
表 30　16号袋状竪穴内外の温湿度測定結果（井上作成）…… 315
表 31　17号袋状竪穴内外の温湿度測定結果（井上作成）…… 315
表 32　25号袋状竪穴内外の温湿度測定結果（井上作成）…… 316
表 33　各地域の土器のタイプ一覧表（井上作成）…… 340
表 34　袋状竪穴出土石器・土製品一覧表（木下作成）…… 346
表 35　住居跡出土遺物一覧表（木下作成）…… 348
表 36　その他の遺構及び包含層出土石器・土製品・玉類・鉄器一覧表（木下作成） 349
表 37　打製石鏃分類表（木下作成）…… 350

付　図　目　次

付 図 1　門田遺跡遺構配置図（柳田康雄・井上裕弘・木下修・佐々木隆彦・小池史哲・肥山正秀・池辺元明・渡辺和子・桑田和義・高田一弘・市川富久・藤瀬禎博・石田広美・三津井知広・丸山康晴・川村博・井上和人・小林義孝・高田弘信実測，高田製図）
付 図 2　辻田地区遺構配置図（柳田・井上・木下・佐々木・小池・桑田・高田・藤瀬・石田・三津井・丸山・川村・高田実測，高田製図）
付 図 3　辻田地区旧地形図（井上・小池・高田実測，高田製図）
付 図 4　E5・6，F5・6区トレンチ土層断面図（高田実測，白水千賀子製図）
付 図 5　遺構配置と遺物の分布状況図（井上作成）
付 図 6　前期末の土器の地域色関係図（井上作成，手島道子製図）

門田遺跡・辻田地区の調査

Ⅰ　調査の経過

門田遺跡は，第19地点から第27地点におよぶ南北の２つに分れた舌状台地とその間の谷部の低地から構成された遺跡で，本報告書に掲載するのは第19～21地点として登録されていた北台地の墓地関係遺構を除いた生活関係の全遺構である。

発掘調査は，昭和47年度の予備調査を含め４次にわたり50年10月で完了した。その間の年度毎の経過はすでに報告済（註１）であり，省略する。ここでは今回報告する辻田地区の調査経過（墓地関係遺構の調査は除く）を日誌をくりながらたどってみたい。本地区の本調査は昭和48・49・50年度の３年次にわたって分割調査されたものである。辻田地区の中央平坦部にあたる東側建設線地区を昭和48年８月22日～12月26日，西裾にあたる西側10線地区を昭和49年３月15日～４月15日，南・西斜面にあたる建設線11～16線地区を昭和49年５月31日～９月30日，最後に残った遺跡の東北部にあたる東側側道建設地区を昭和50年５月22日～10月25日まで行った。また，先土器時代の調査を昭和48年12月17日～25日まで，佐世保市文化科学館・久村貞男，平戸市教育委員会・萩原博文両氏の協力を得て実施した。なお，48・50年に並行して調査された墓地関係遺構については別に報告する予定である。

昭和48年

８月22日　伐採・草刈り作業を開始する。

８月24日　午前中清掃を行い，午後航空写真撮影を行う。同時に表土剝ぎを開始する。

９月12日　門田地区の調査と並行のため表土剝ぎが遅れている。

９月20日　Ｂ８・Ｃ８区の表土剝ぎが終了し，遺構検出をはじめる。

９月28日　Ｄ6・7，Ｅ６・７区の表土剝ぎが今日でほぼ終了した。

10月１日　Ｄ6・7，Ｅ６・７区で住居跡などのプランが確認されはじめる。

10月５日　６・８号住居跡の掘り下げを行う。

10月10日　６号住居跡は火災にあったらしく多くの炭化材・完形の土器多数が出土する。清掃・写真撮影を行う。

10月11日　今日からＤ４・５区の表土剝ぎを始める。表土は極めて浅い。

10月15日　古墳の周溝・袋状竪穴等が検出される。

10月25日　Ｅ５・６区の表土剝ぎを行う。

11月１日　Ｄ５・６区で検出された住居跡・袋状竪穴の掘り下げをはじめる。

11月２日　Ｄ・Ｅ３区の表土剝ぎ。

11月５日　住居跡・袋状竪穴の発掘と並行して土層断面実測・写真撮影を進める。

11月21日　今日から谷地区の調査と並行して行うことになる。

12月６日　今日でほぼＢ８，Ｃ８，Ｄ３・４・５・６・７，Ｅ３・４・５・６・７区の発掘が完了する。

12月７日　航空写真撮影のための清掃を行う。

12月８日　航空写真撮影を行う。

12月９日　割付けを開始する。

12月11日　実測を開始する。谷地区の調査が忙しくなり，大半は谷地区の調査にはいる。

12月17日　実測がほぼ終了したので，先土器時代の調査が佐世保市文化科学館久村貞男，平戸市教育委員会萩原博文両氏によって開始される。

12月18日　平面実測が終る，午後エレベーションをとりはじめる。

12月20日　エレベーションが終る。

12月22日　旧地形測量を開始する。先土器時代の調査では，それまで予備調査で検出されていた細石刃・細石核・ナイフ等の遺物包含層を確認する目的で行われたのであるが，すでに破壊されているようでででてこない。

12月25日　先土器時代の調査が終了する。

12月26日　今日で辻田地区Ｂ８，Ｃ８，Ｄ３～７，Ｅ３～７区の調査が全て終了する。

昭和49年

３月15日　谷地区の調査と並行して，Ｆ３，Ｇ３～７区の調査を開始する。

３月20日　溝状遺構・掘立柱建物等の遺構が検出されはじめる。

３月25日　谷地区から続くＶ字溝を掘りはじめる。土器はさほど多くはないが，弥生時代前期末の土器群が一括して発見された。土層断面図をとる。

３月26日　弥生時代中期の屋外炉がＧ６区から発見された。珍しい例である。清掃し写真撮影を行う。

３月31日　今日でほぼ掘り上がる。

４月１日　発掘区全景撮影のため清掃を行う。

４月２日　写真撮影を行う。

４月３日　割付けを開始する。

４月５日　平面実測を開始する。

4月10日　平面実測が終了し，エレベーションに入る。

4月12日　エレベーションが終り，午後から旧地形の測量を始める。

4月15日　今日でF３，G３～７区の調査を全て完了する。谷地区の調査は続行中である。

5月31日　谷地区の調査がほぼ完了したので今日からE5・6，F５・６区の表土剝ぎを開始する。

6月４日　F６区で住居跡・溝状遺構等が検出されはじめる。

6月７日　11号住居跡の発掘を開始する。中期中頃の完形壺と鉄斧が出土した。

6月８日　F５区から３間×４間の掘立柱建物跡と，その内側から製鉄炉が発見された。

6月10日　12号住居跡のプランが確定し，掘り下げを開始する。

6月24日　発掘がほぼ今日で完了したので全景写真撮影のための清掃を行う。

6月25日　写真撮影終了，割付け開始する。

6月28日　平面実測を開始する。

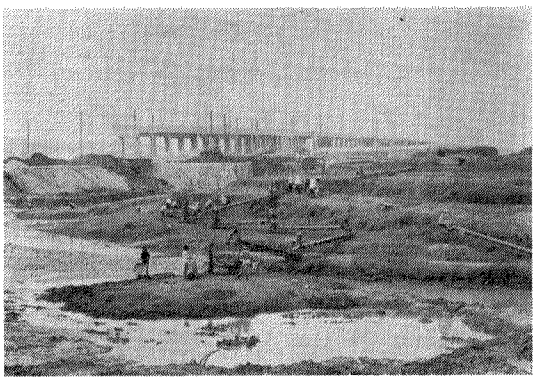
7月５日　平面実測が終了し，午後から旧地形の測量を始める。

7月６日　旧地形測量と並行し，エレベーションをとる。

7月10日　E5・6，F５・６区の調査は今日で終了する。

7月19日　今日からすでにブルドーザーによりあらましの表土剝ぎが終了していたD7・８，E７・８区の表土剝ぎと遺構検出の作業にかかる。

8月１日　F７・８区の表土剝ぎを行う。



第１図　発　掘　風　景　(1)

第２図　発　掘　風　景　(2)

第３図　発　掘　風　景　(3)

8月10日　長方形土壙・不整方形竪穴・ピット群・溝状遺構等が検出される。

8月20日　中世の溝状遺構が数条検出される。

9月5日　D8区から円形状の竪穴遺構が検出され，掘り下げをはじめる。

9月12日　今日でD7・8，E7・8，F7・8区の発掘作業を全て終了し，午後から清掃に入る。

9月17日　航空写真をとる。

9月18日　割付けを開始する。

9月20日　割付けが終了し，平面実測に入る。

9月26日　平面実測が終了する。

9月27日　旧地形の測量とエレベーションを並行して開始する。

9月30日　今日で完全に調査が完了する。

昭和50年

5月22日　発掘作業を開始する。排土置場との関係から北西斜面のC4，D2～3区のトレンチ調査から開始する。

5月24日　段々畑にされていることもあり，遺構の残りが極めて悪い。数条の溝状遺構とまとまりのない多数のピット群が検出されたのみである。今日でD2・3区が掘り上がる。

5月27日　D2・3区の割付けを始める。

5月28日　平面実測を開始する。それと並行して中段・上段地区の清掃・写真撮影を行う。

6月3日　今日からC7地区の表土剝ぎを開始する。

6月13日　B5・6，C6地区の表土剝ぎを行い，袋状竪穴・住居跡と思われる遺構が検出されはじめる。今日で，北西側斜面の実測，エレベーションの作業が終了する。

6月23日　C4，D6区の発掘を進める。近世墓・甕棺等が検出されはじめる。

7月3日　近世墓の発掘を開始する。

7月8日　13・14・15号住居跡を掘る。14号住居跡から完形の石包丁2個と，鉄鉇・鉄鎌等が発見される。

7月15日　16・17・18号住居跡を掘り下げはじめる。同時に袋状竪穴群も掘り下げを始める。土器多数が出土してきた。

7月23日　C5区から古墳石室の残がいが発見された。各住居跡の写真撮影を行う。

8月4日　22～32号袋状竪穴の発掘と並行して土層断面実測を進める。

8月12日　楕円形状の大形の22号住居跡を掘り下げる。住居内からは甕棺・土壙墓等の遺構が発見される。

8月20日　袋状竪穴の土壌を花粉分析・プラントオパール分析するため採集する。

8月21日　今日から袋状竪穴・近世墓の平面実測をはじめる。

9月3日　B4～7，C4～7区の割付け作業を行う。個別袋状竪穴の平面実測も進める。
9月6日　今日から実測と並行して甕棺の掘り下げを開始する。
9月16日　D5の割付け，実測を進める。
9月25日　D4・C4付近のエレベーションをとる。甕棺の発掘進む。
9月27日　ついに24号甕棺の棺外から鉄戈が発見される。調査員一同こうふん気味。
10月9日　このところ甕棺の実測におわれている。44～50号袋状竪穴の掘り下げを行う。
10月18日　袋状竪穴・甕棺等の個別実測がほぼ終了する。
10月20日　残る地区のエレベーション・旧地形測量を開始する。
10月23日　袋状竪穴内出土土壌内に含まれている炭化種子検出のため，土壌を事務所に運ぶ。実測すべて完了する。
10月25日　実測図点検・発掘器材の移動を行い今日で発掘作業の全てが終了する。

なお，辻田地区の発掘調査関係者は下記のとおりである。また，発掘調査並びに整理にあたっては，春日市・那珂川町在住各位の協力を得た。記して謝意を表したい。

日本国有鉄道下関工事局福岡工事事務所

昭和50年度

所　長	高野満洲男	所　長	草野　一人
次　長	清水　影明	総務課長	属　勉
設計協議第2係長	上野　光	設計協議主席	平野喜久也
用地課長	高原　博臣	用地課課長補佐	徳永　勉
用地課係長	大隈　實吉	線増第1課長	黒木　正典
線増第1課課長補佐	横山　正博	線増第1課係長	松本　文広
停車場課長	高原　計夫	停車場課課長補佐	岡部　尚道
停車場課第1係長	今川　信夫	南福岡工事区長	石倉　優
南福岡工事区助役	福永　博	南福岡工事区助役	西野　一則

福岡県教育委員会

総　括

教育長	森田　實	教育次長	西村　太郎
文化課長	古川　善久	文化課長	森　英俊
文化課長	藤井　功	文化課課長補佐	菅　隆
文化課課長補佐	今井　岩男	文化課課長補佐	平井　元治
文化課課長補佐	野上　保	文化課課長補佐	川崎　隆夫

庶　務

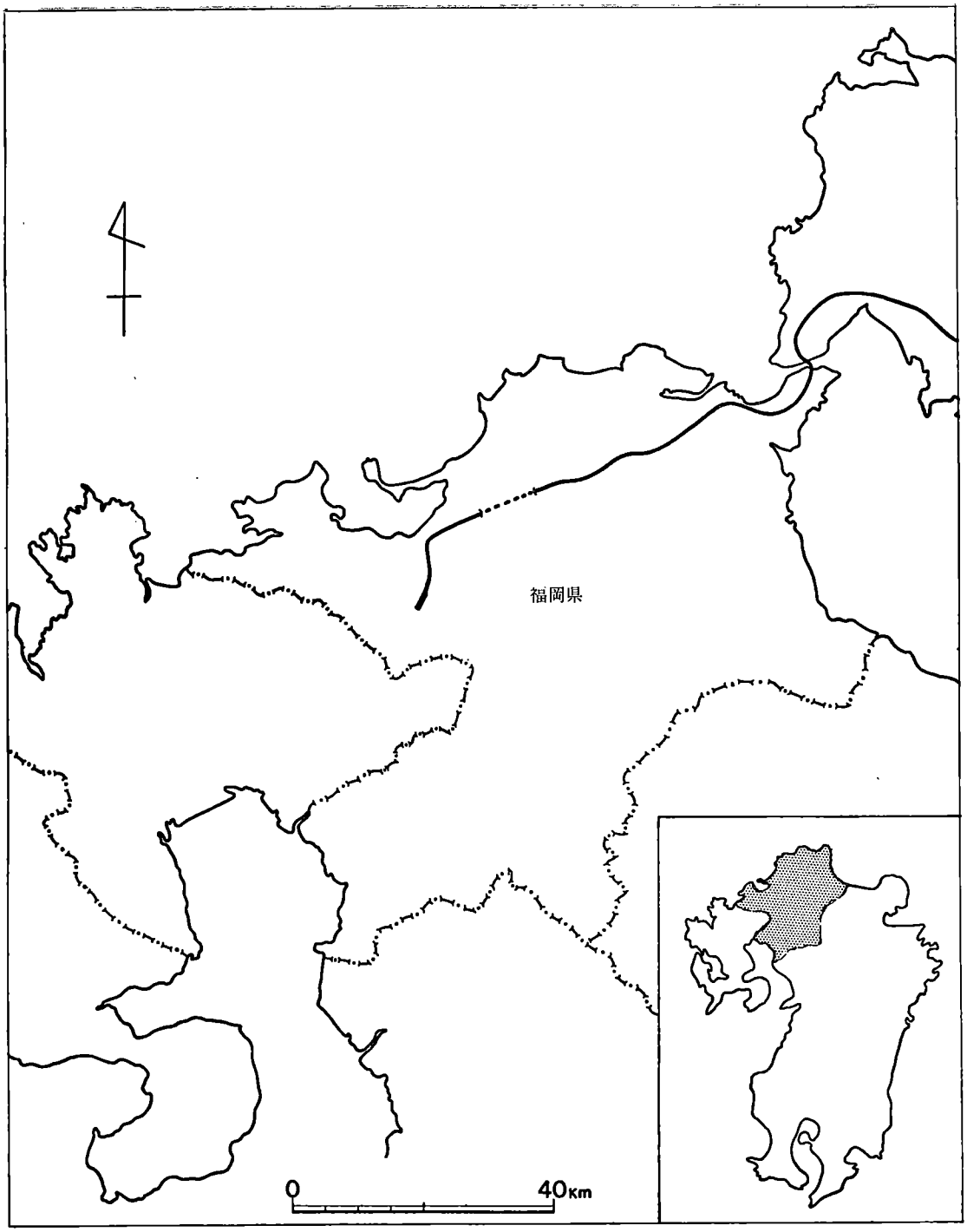
文化課庶務係長	姫野　博	文化課庶務係長	前田　栄一
文化課主事	小川浩一郎	文化課主事	植田　實
文化課主事	加藤　俊一	文化課主事	滝　龍二
文化課嘱託	吉村　源七		

発掘調査

宮崎大学助教授	藤原　宏志	広島大学助手	安田　喜憲
近畿大学助手	西田　正規	東京大学助手	松谷　暁子
新日本製鉄	大澤　正己	新日本製鉄	中山　光夫
佐世保市文化科学館	久村　貞男	平戸市教育委員会	萩原　博文
文化課係長	松岡　史	文化課技術主査	鬻久　嗣郎
文化課技術主査	栗原　和彦	文化課技師	柳田　康雄
文化課技師	井上　裕弘	文化課技師	木下　修
文化課技師	佐々木隆彦	文化課技師	小池　史哲
文化課嘱託	岩瀬　正信	文化課嘱託	宮崎　貴夫
調 査 員	桜井　康治		

調査補助員	肥山　正秀	池辺　元明	渡辺　和子	桑田　和義
高田　一弘	市川　富久	藤瀬　禎博	中村　友博	石田　広美
三津井知廣	丸山　康晴	森田　徹	織笠　昭	川道　寛
秀島　貞康	稲富　裕和	高橋龍三郎	滑志田　隆	川村　博
小出　輝雄	井上　和人	小林　義孝	長谷川　豊	高田　弘信
整理補助員	石橋　新次	小林　義彦	荒武　麗子	

註1　井上裕弘「Ⅱ－1調査の経過」『山陽新幹線埋蔵文化財調査報告』3　福岡県教育委員会　1977

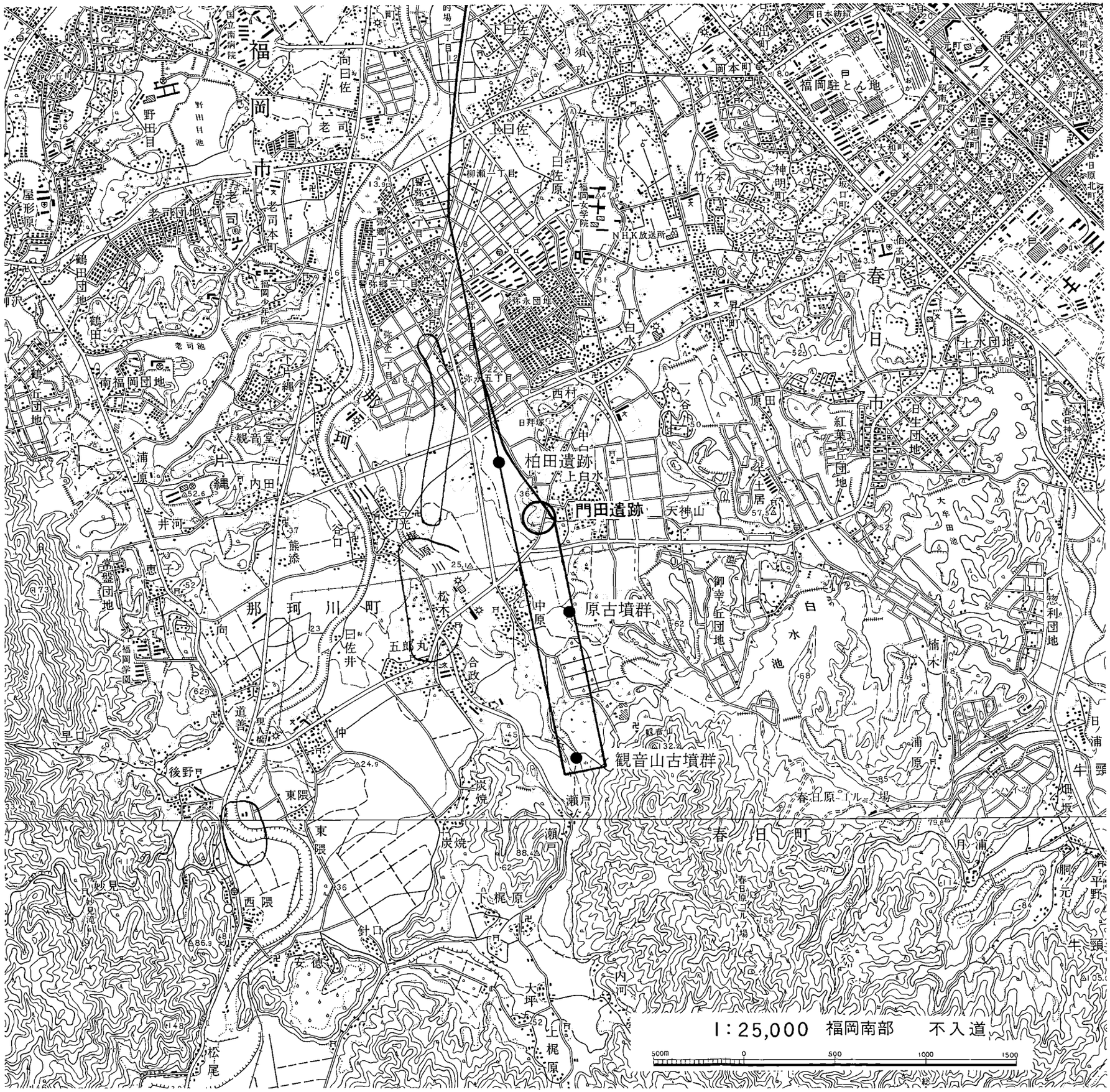


第 4 図　山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (1/1, 000, 000)

表 1　山陽新幹線関係遺跡一覧表

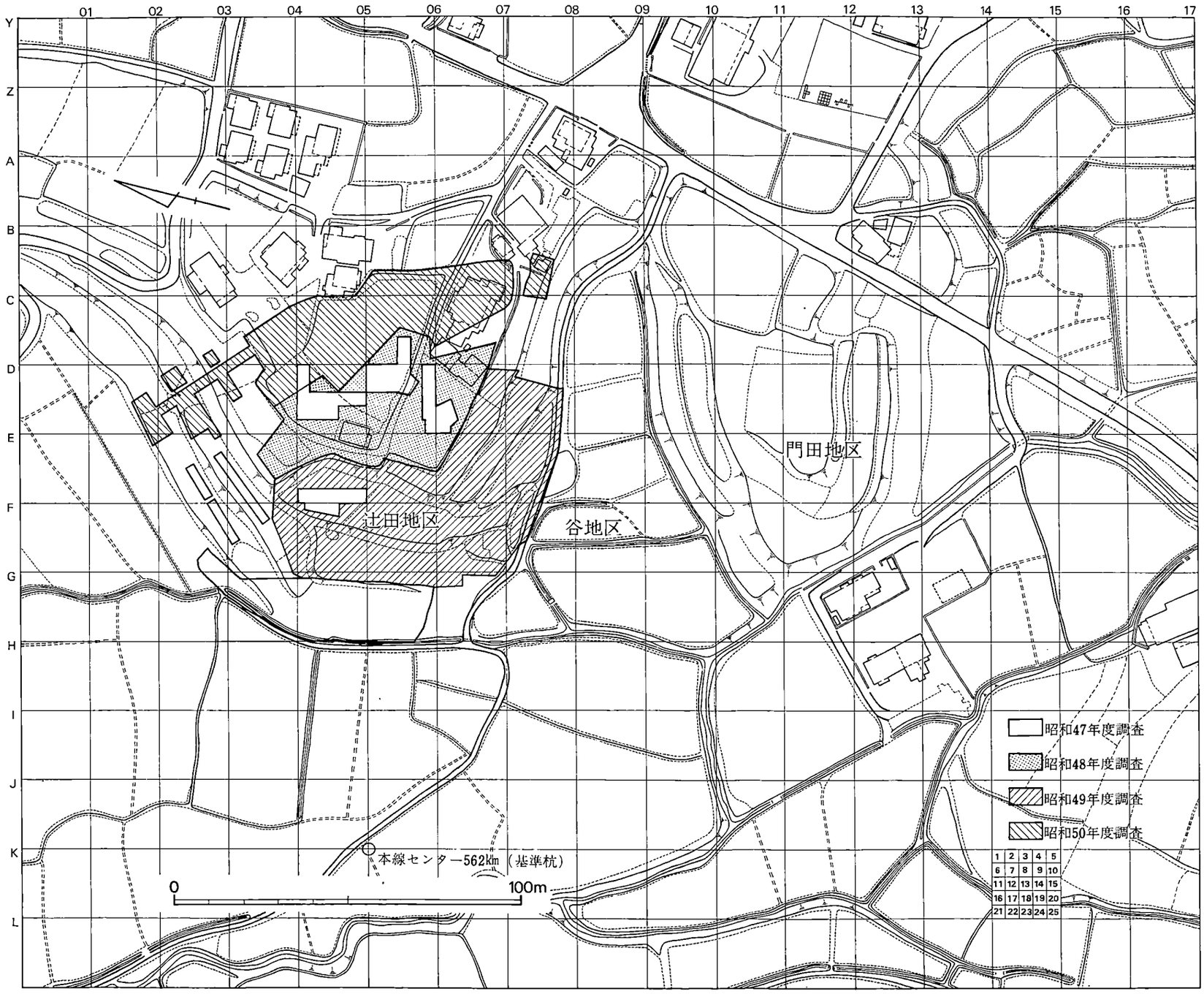
地点番号	遺跡名	所在地	内容	調査終了面積						備考	報告書
				46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度		
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡		1集
4	下松尾墓地	〃　〃　〃	近世墓地		—						〃
5	京尾遺跡	〃　〃　室木	中世配石遺構		—						〃
6	若宮条里	〃　若宮町	条里遺構		229						〃
6－0		〃　〃　金丸	近世墓地			—				調査前に工事のため改葬	〃
6－1	田尻遺跡	〃　〃　金丸・水原	古墳，歴史時代：住居跡		2,035		3,000				〃
6－2	別当塚	〃　〃　竹原	古墳		146					遺構，遺物なし	〃
6－3	八幡塚	〃　〃　〃	古墳		16			300			
7	杉園遺跡	〃　〃　稲光	土師：散布地							遺構なし	1集
8		粕屋郡久山町山田	条里遺構		100					調査の結果、条里ではなかった	〃
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡8軒，円形遺構，溝状遺構			790					4集
18－1							2,100	1,000		昭和49年度は，別府大学に一部調査委嘱	〃
18－2		〃　〃									
19～27及び周辺	門田遺跡	〃　〃	先土器～歴史時代：住居跡，貯蔵穴，甕棺墓，石棺墓，土壙墓，古墳5基		予備調査(4,500)	7,170	9,700	4,570		昭和48年度に門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱	1·3·6集
28－31	下原遺跡	〃　〃	古墳時代：住居跡	2,784							3集
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690						〃
32－1	〃	〃　〃　〃	古墳時代：甕棺墓				300				〃
32－2	久保遺跡	〃　〃　〃	縄文，歴史時代：溝状遺構						700		
33		春日市上白水	古墳時代：散布地			197					2集
33－1	原古墳群	〃　〃	円墳3基，周溝墓8基，土壙墓4基			1,725	800	1,510			〃
	原遺跡		縄文時代早期，弥生時代甕棺墓							一部保存	
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代：散布地		135					遺構・遺物なし	
34－1	鳥ノ巣遺跡	〃　〃　〃	先土器，縄文時代：散布地		267						
34－2						288				別府大学に調査委嘱	
35		〃　〃　〃	中世：散布地			200					
36		〃　〃　〃	近世：道標（かんのん道）			—					
37，39 50，55	井手ノ原遺跡	〃　〃　〃	中世：方形区画遺構，溝状遺構	1,814	1,515	1,500					2集
38，40～43 45～49 49-1-4，51	観音山古墳群中原支群	〃　〃　〃	古墳31基	707	6,400	220					5集
43－1	深原遺跡	〃　〃　〃	縄文時代：石組炉跡32基，円形竪穴遺構		1,840	2,540				昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱	
43－2						104					
44		〃　〃　〃	中世：散布地		271						
46－1		〃　〃　〃	縄文，古墳：散布地						1,021		
52		〃　〃　〃	中世：散布地		452						
53		〃　〃　〃	古墳時代：散布地		123					遺構なし	
54		〃　〃　〃	弥生，古墳時代：散布地		150						
54－1		〃　〃　〃	古墳時代：散布地			95					
合計				5,305	14,369	14,829	15,900	7,380	1,721		

註 1．地点番号1，2は北九州市教育委員会，9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2．路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3．面積欄に（－）で示したものは調査面積としてはあげないが当該年度に調査したことを示す。



第5図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図 (1/25,000)

第 6 図　山陽新幹線博多車輌基地付近地形図及び遺跡分布図　(1/5,000)



第 7 図　門 田 遺 跡 調 査 地 区 全 図 (1/1,500)

Ⅱ　先土器時代の調査

(1)　調　査　の　経　過

昭和47年に行われた予備調査で先土器時代の遺物が出土したことにより，昭和48年12月17日～12月25日の期間に弥生時代以後の遺構面調査が終了した後，その包含層や内容を確認するため実施した。

(2)　調　査　の　内　容

調査区はD 4・5区の辻田1号墳の墳丘下にグリットと南北に平行する幅2 m，長さ12mと直交する4 mのトレンチを設定した。これは比較的遺構などで地山の削平が軽い部分と思われたからであるが，包含層と考えられる弥生前期以後遺構面の黄褐色土中からは全く石器等の遺物は検出できなかった。若干掘り残しのピット中からは黒曜石片が出土したにすぎない。しかもそれは風化の度合から縄文期のものと見られる。

一部深掘りを行い鳥栖ローム相当面まで調査したが，それでも遺物は見い出せなかった。

(3)　所　　見

調査区の設定は遺物が出土した範囲の中心部に，しかも遺構が少ない面を選定したのであるが，一点も遺物は出土しなかった。このことは本来包含層を形成していたのであろうが，縄文・弥生・古墳・歴史時代にわたる濃密な複合遺跡であることより，遺構等により削平されてしまった可能性がある。

また地層断面を観察すれば，黄褐色土上面（遺構面）より深さ約50cmに及ぶ乾裂の跡が認められる。つまり，ある時期に包含層と思われる黄褐色土面が露出していたことを物語っているのであって，包含層は前記の後世による削平とあわせて，失なわれてしまったのであろう。

(4)　辻田地区出土の先土器文化石器

先土器文化確認の調査では全く成果をあげることができなかったが，弥生時代以後の調査で出土した石器をこの機会に紹介する。

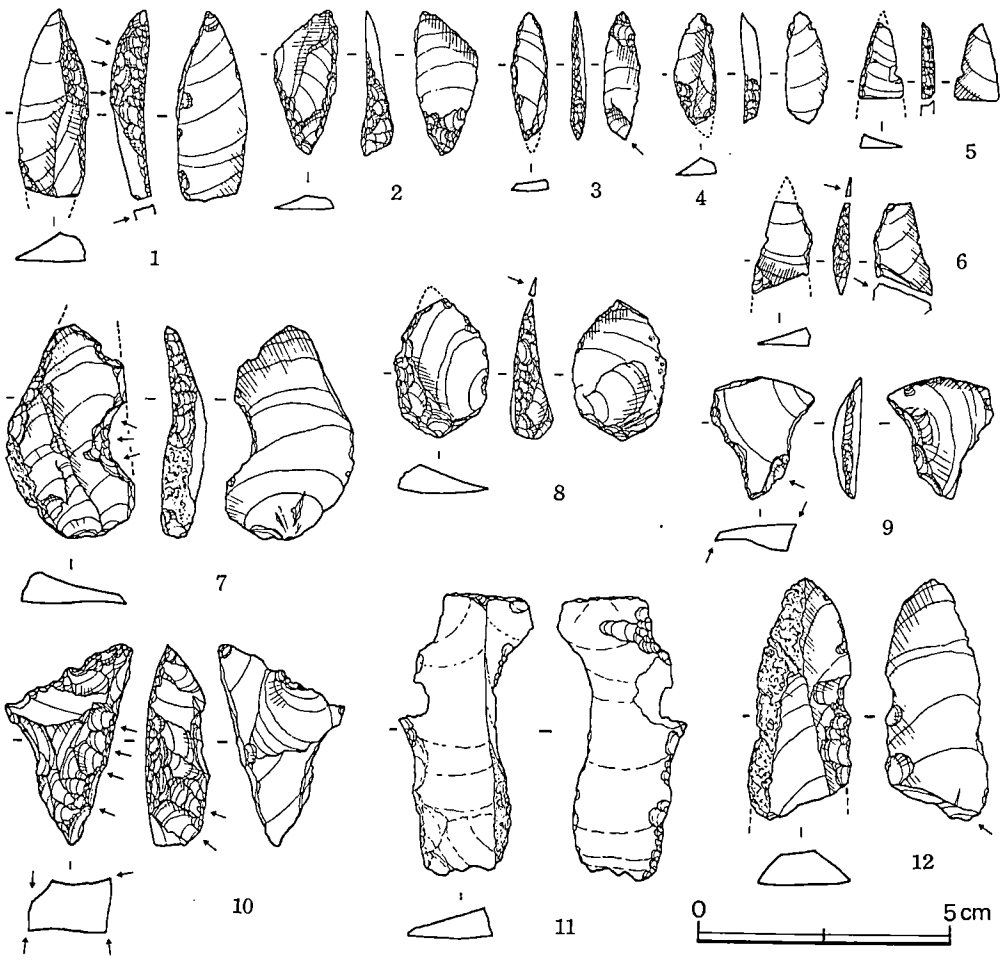
なお細石器のうち細石核は萩原が執筆し，細石刃とナイフ形石器・台形石器等は久村が担当

した。

ナイフ形石器（図版11，第8図1～8，10）

(1)　縦長剝片の先端部に基部を設けた資料である。側縁調整はナイフ先端部で一部表側から行なわれている。（黒曜石）

表側からの調整は筆者の知見する最も頻度の高い傾向は，調整を行う対象が比較的厚い場合である。つまり縦長剝片は縁辺が最も薄い部分であるから主要剝離面からの調整も容易であるが，ナイフの先端部を整形する場合，調整は最も剝片の肥厚した部分を横切って行なわれなければならない。その時，実験も根拠とするが，主要剝離面からでは調整剝離がステップ状になって，目的とする形態に近ずけるのが困難となる場合が多い。そこで，表側から補助的に調整が加えられるのではなかろうか。基部は表側から裏に向って折損している。



第 8 図　　先土器時代石器実測図 1 (2/3)

(2) 切り出し形小形ナイフである。縦長剝片バルブ側にナイフの基部があり，側縁調整は共に主要剝離面側から行なわれている。また基部にバルブ瘤を除去したと見られる調整がある。

基部調整は装着を意図したと見るむきもある。つまり基部はより細く，薄くあれば装着性は向上するのであろうが，この資料は調整が行なわれても，なお最も肥厚した部分にあたっている。

基部調整はまず主要剝離面をフラットに整形するという一面性を整理すべきである。（黒曜石）

(3) 縦長剝片先端部に刃部を設定し，しかも刃部が全体の極く一部を占めるにすぎない小形ナイフである。

刃部には主要剝離面側に大きな刃こぼれがあり，基部にも矢印方向の破損が残されている。使用痕とするには問題点もあるが，このような痕跡は何らかの“動き”のあらわれであり，使用も大きな要因となろう。

使用痕は刃こぼれ，折損および擦痕としてとらえられ，三者は相関関係にあるものと思われる。（黒曜石）

(4) 縦長剝片バルブ側に石器先端部がある小形ナイフである。石質は黒曜石であるが，他の資料は全てガラス質の高い黒色のものであるのに対し，これは灰色不透明を呈し，大分姫島産系に近いものと見る。（黒曜石）

(5) 縦長剝片を用い，バルブ側に石器先端部がある。ナイフ先端部で折損している。（黒曜石）

(6) 縦長剝片を用い，バルブ側に石器先端部が位置する。破損しているが小形ナイフであろう。折損の方向は先端と基部で90°ずれている。（黒曜石）

(7) 縦長剝片の一端のみに調整を行い，しかもバルブ側には原石面をそのまま残している。先端部は新らしい破損だが，刃部中央部は恐らく使用痕と見られる刃こぼれである。図示していないが，主要剝離面には若干の擦痕も認められる。

No. 8の資料と同じく，このタイプはナイフ形石器組成の一群を担うものである。（黒曜石）

(8) 寸づまりの縦長剝片であり，剝片の形をあまり変更していない。調整は剝片の一方のみに行い，打撃部および先端部をそのまま残している。このようなタイプは切截を意図したとの見方もあるが，それにしては小形すぎる感がある。（黒曜石）

(10) 大形剝片を用い，台形石器に近い切り出し形ナイフである。基部の加工は一部表側から行なわれている。No. 2の例と同じく，基部が尖るよう成形するための処置と思われる。

刃部の刃こぼれが著しく，表側には微細な刃こぼれが一様に残されているのに対し，主要剝離面側は一面の大きな刃こぼれだけである。組材が厚いので，それを減ずるため表側を横より調整加工している。この加工も必要に応じ施こされるもので，適当な組材であれば行なわれない。（黒曜石）

台形石器（図版11，第8図9）

寸づまりのチップ的な剥片を用いている。台形様石器とも呼ばれる。

側縁加工は正面左側は主要剥離面より，右は表側から行なわれており，このタイプの一般的加工方法である。また，正面右側から横に最終的な調整加工を行うのも特徴である。（黒曜石）

縦長剥片（図版11，第8図11・12）

(11)　全面に極めて強い風化とローリング痕が見られる。長期間地表に露出し，風雨にさらされていたのではあるまいか。刃部のほぼ全体に表裏とも刃こぼれがあるが，さきの理由によるものか，あるいは使用痕かは判別できない。（黒曜石）

(12)　片側に原石面を残した縦長剥片であり，刃部に大きな刃こぼれが見られ，また中途から折損している。（黒曜石）

細石刃（図版，第3図6～17）

全て破損品で完形品はない。特に中間部が多いようである。刃こぼれの認められるものは7・11・13・15である。

(12) は先端部で，剥離が大きく内彎したため舟底部分を大きく剝ぎ取ってしまった資料である。

(17) はブランクから剥離を開始した2番目のもので，両側面に両面加工の剥離面が見られる。セカンドスポールと呼ぶ。

(8) と (9) は細石核剥離面の端を剥離した資料で，片面にブランク形成剥離面が見られる。

（久村　貞男）

細石刃核（図版11，第9図1～13，第10図1～5）

辻田地区の細石刃核は線状の縁辺を持つもの（A類），持たないもの（B類）に分類できる。なお第9図-1・2は側面調整のあり方等から考えるとA類に含まれる可能性が強い。

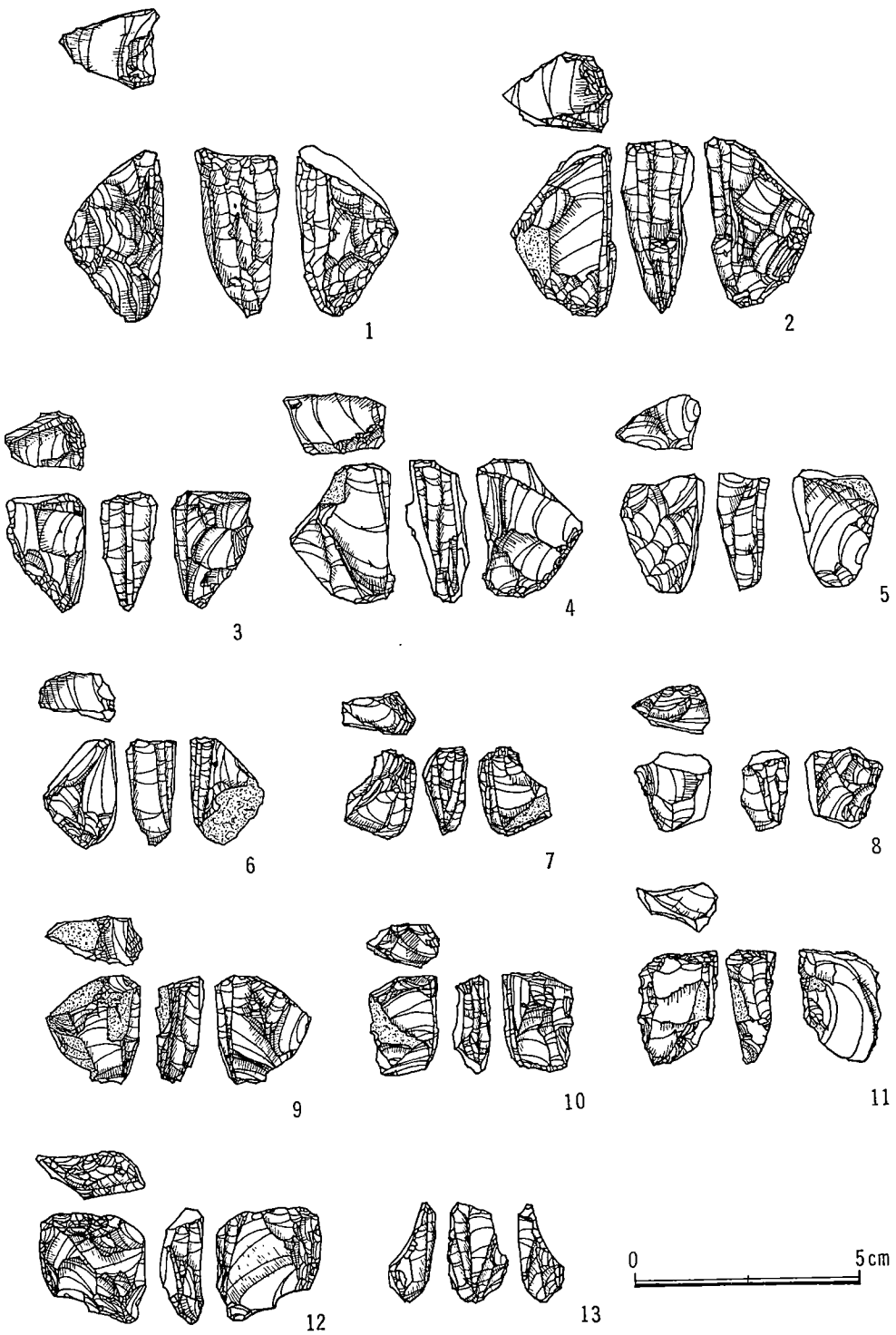
＜A類＞　いわゆる半舟底形細石核である。この中でも，側面および縁辺調整が入念で一定の形態を保つもの（第9図-1～5・8）と，粗雑なもの（第9図-6・7・9～12，第10図-3）に分けられる。前者はさらに，大形で，打面と細石刃剥離面が鋭角なものと，小形で打面と細石刃剥離面がほぼ直角なものとがある。第10図-1・2は小形の細石核の打面の両端から細石刃剥離を行ない，さらに側面にもその加工がおよんだものであろう。

第9図-13についても側面加工のあり方から，A類に含まれるものであろう。

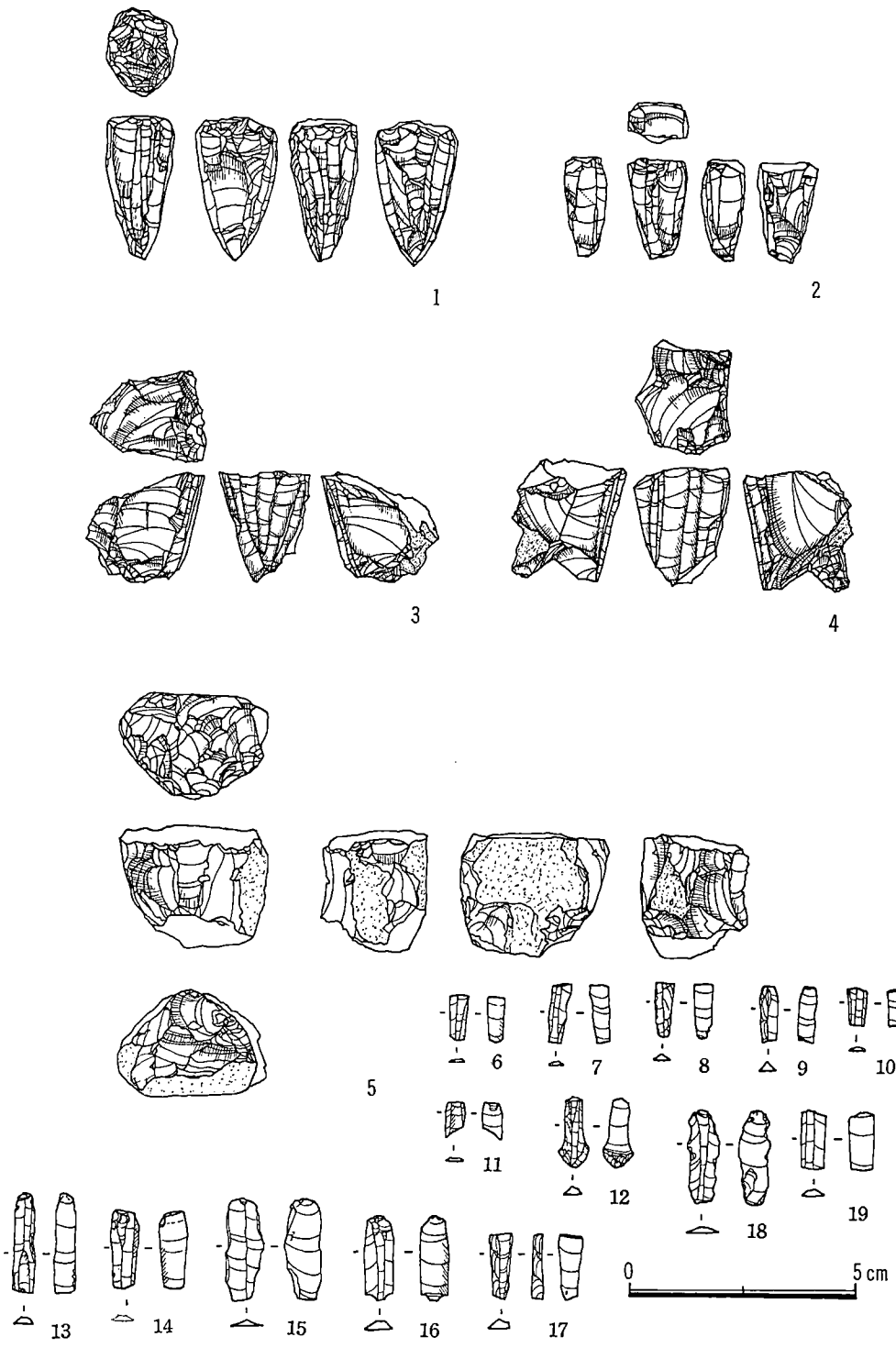
第9図-1　一種の両面加工品を移用して作成された細石刃核である。

両側面は加工がいきとどいており，縁辺には入念な加工が施されている。

甲板は一撃に作成されたものと思われ，甲板から側面への加工は認められない。また打撃面に微細な加工が認められる。甲板に比べ細石刃剥離が長いが，基本的に福井，泉福寺洞穴の舟底形石核と同様の製作技術によるものと思われる。



第 9 図　先土器時代石器石器実測図 2 (2/3)



第 10 図　先土器時代石器実測図 3 (2/3)

第９図-2　基本的には，上記と同じである。だが，側面の加工はやや粗雑であり，自然面を残し，甲板から側面への加工を行なっている。

第９図-3　上記２者とほぼ同様のものであるが，小形で打面と細石刃剝離面とのなす角度がほぼ直角である。また，細石刃剝離面の反対側にも，細石刃剝離を行なおあとした形跡がうかがわれる。

第９図-4　第９図-１・２と類似するが，片側面の加工が粗雑である。

第９図-5　第２図-３とほぼ同種のものであるが，やや薄く，甲板に側面からの加工が認められる。

第９図-8　第２図-３・５とほぼ同様のものであるが，甲板には側面からの加工が顕著に認められることに特徴がある。

第９図-6　両側面に対する加工は顕著でなく，第一次剝離面を多く残している。縁辺に対する加工は１側面にのみ行なわれている。甲板は一撃により作り出している。打面も微細な加工が施こされているようだ。非常に小形のものである。

第９図-7　前者とほぼ同様のものであるが，甲板に側面からの加工が施されている。

第９図-9　甲板部は自然面を利用しているが，打撃部については加撃を加え，自然面を取り除いている。両側面に荒い加工を施したのみであり，甲板からの加撃も認められる。縁辺加工は認められない。

第９図-10　側面調整はラフであるが縁辺からの加工により作出し，打面には，微細な加工が認められる。甲板と細石刃剝離はほぼ直角をなしている。

第９図-11　甲板は無造作に作り出し，側面加工は雑であり片面は何の加工もなく，他面は，甲板からの荒い剝離痕が認められるのみである。縁片加工は施してない。非常に薄く，自然面を残すところから黒曜石礫の最外部を利用したものと思われる。甲板と細石刃剝離面はほぼ直角をなしている。

第９図-12　側面は整えてなく，加工もラフであり，片面には，第一次剝離面を大きく残す。側面加工は縁辺からのものの他，甲板からの加工も認められる。縁辺加工も認められる。甲板は片側面からの入念の加工により作り出している。

第10図-3　側面調整はラフであり，縁辺からの加工を施こしている。縁辺加工も認められる。甲板は側面からの加撃により作り出しており，打撃面調整も行なわれている。この細石核は厚く，甲板と細石刃剝離は鋭角をなしている。

第10図-1　細石刃剝離面はほぼ全体にわたっており，打面はほぼ円形である。打面調整は，全面に入念に施こされている。典型的な円錐形細石核である。なお，細石刃剝離が存在しない部分に側面調整の行なわれた形跡がある。このことからこの細石核は用板と細石刃剝離面がほぼ直角をなしている舟底形石核（第９図-３・５・８）の細石刃剝離が進んだ段階のものではない

かと思われる。

第10図-2　これは前者と類似するが，打面が長方形をなしており，細石刃剝離も3面だけ行なっており，一面は側面調整の痕跡が認められる。また，打面の調整剝離は認められない。

第10図-5　細石刃剝離を行なう前の段階のものと思われる。側面は流紋岩の礫を若干自然面を取り除いただけである。打面は周囲から細かな加撃を加え，ほぼ平均に作り出している。

＜B類＞　半舟底形石核のカテゴリーに含まれないものである。

第10図-4　側面調整は荒く，他の細石核と異なり両側面が収束していない。礫を荒割したのみで細石刃作出を行なったものと思われる。他の細石核とは様相が異なるものである。打面には細かな調整剝離が認められる。

細石刃核製作技術について

九州の舟底形細石刃核の製作方法が湧別技法と根本的に異なる点は，その素材に求められる。すなわち，湧別技法では一定の形の大形剝片を素材として，両面加工品（ブランク）を作り，それに加工を加え細石核を作成するからほぼ全てが一定の形態をしている。それに比べると九州の舟底形細石核は形態にバラツキが存在する。これは，西九州の黒曜石原石を大量に得られないことに起因し，このため大形の定形的な剝片が得られず，原石の種々の部分を利用して，細石核の素材とするために起こる現象であると思われる。また，礫が小さいため完成品に自然面を残すものがあるわけである。

さて，舟底形細石核と“いわゆる”半舟底形細石核との相異点であるが，基本的には打面長と細石刃長の差に他ならず，半舟底形細石核が側面調整において粗雑なものが多いが，特別な差異は見当らない。

最も問題となる製作技術の点ではどうであろうか。舟底形石核を主体とするインダストリーでは，西海技法（麻生 1965），福井技法（林 1970）が，よく知られている。だが前述したように，礫のあらゆる部分を用い，素材を得る方法も異なるので，インダストリーの中にいろいろな形の細石核を包含している。よって細かな観点からみれば両面加工品（片面加工品）の製作，打面の作成，打面再成等の方法が何種類か存在するように思われる。このことは，半舟底形石核を主体とするインダストリーにおいても認められるようだ。むしろ，舟底形細石核を主体とするインダストリーが，同一の規格に規制しようとする傾向が強いのに対し，半舟底形細石核を主体とするインダストリーでその強制が弱く，出来上った製品にもバラツキがある。その製作技術は基本的に木下修（1976）が門田遺跡，谷地区等の資料をもとに復元された製作工程を示すが，その製作に関する種々の要因により，変化する可能性が強い。よって完成された細石核の形態に変化が認められ単純なインダストリーに多くの形態の石核を包含することになる。その中には，角錐形細石核も含まれ，これは，半舟底形細石核と時間的に異なる関係にあるのではなく，同一のインダストリーに共存するものであると思われる。半舟底形細石核を出

土する遺跡をみると，その主体となる石核形態などが遺跡ごとに若干異なる傾向がみられる。これは半舟底形石核の時間差，あるいは地域差を示すものだろう。

さて，いわゆる半舟底形細石核は，上場遺跡（池水 1967）では，爪形文土器に共伴するが，門田遺跡では土器は出土していない（木下 1976)。爪形文土器は西北九州では舟底形細石核に伴なうことが，福井洞穴・泉福寺洞穴等の所見により明らかである。また明確な舟底形細石核は，南九州ではほとんど出土しないという傾向を示す。舟底形細石核を主体とする石器群の分布範囲については，不明な点が多いが広範囲ではないようであり，福岡県まで分布していないように思われる。これは，土器が全日本的規模で伝播しているのに対し，舟底形細石核は狭い地域に限られてしまっているものと思われる。

西九州における半舟底形細石核を主体とする石器群の時間的位置づけについては，確定されたものとはいいがたく，今後の成果に期待されるところが多い。百花台遺跡や門田遺跡門田地区では土器の伴出はないが，かといって半舟底形細石核を主体とする石器群すべてが土器出現以前のものと云いきれないのである。このようなことを考慮に入れて九州における細石刃核の変遷を図式化してみよう。それぞれの地方的特色をもった，いわゆる半舟底形細石核は，土器出現以前にほぼ九州全域に存在していた。その後，西九州に土器の出現と相前後して細石核もより高等な技術によって作出された舟底形細石核が登場する。だが，舟底形細石核を主体とする石器群は，西北九州より広がらず，他地域では伝統的な細石核が存在していた。これらは，西北九州の舟底形細石核とは技術的には異なるものであるが，その影響は明らかに受けている。また，旧来の地方的細石核製作技術に根ざしているため地域的バラエティをもっているものと思われる。

門田地区の包含層出土資料には，土器の出土はないが，門田遺跡の細石核は多様のバラエティがあるが，その中にはかなり高度な技術も認められるので，土器との共存の可能性もないとは云えないであろう。この場合，谷地区の爪形文土器が問題となるが，両者の共存関係については，不明であるのでその可能性を示すにとどめておこう。（萩原　博文）

参考文献

麻生　優　1965　「細石器文化」日本の考古学1所収　河出書房新社
1973　「泉福寺洞穴の第4次調査」考古学ジャーナル88
池水寛治　1967　「鹿児島出水市上場遺跡」考古学集刊3—4
木下　修　1967　「門田遺跡」日本の旧石器文化3所収　雄山閣
林　謙作　1970　「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ(上)・(下)」考古学研究16—4，17—2

表 2　春日・那珂川地区先土器時代遺跡地名表

	遺跡名	所在地	立地	出土遺物	備考	文献(註)
1	曰佐原	福岡市南区・曰佐原	台地	ナイフ		1
2	天神池前	春日市上白水・天神木	丘陵	マイクロコア		2
3	柏田	〃 〃・柏田	微高地	〃 ・マイクロブレイド		3
4	門田	〃 〃・門田	台地	ナイフ・トラピーズ・トラピゾイト・マイクロコア・マイクロブレイド・グレーヴァ	包含層確認	4
5	辻田	〃 〃・辻田	水田	ナイフ		5
6	原	〃 〃・原	台地	トラピーズ・マイクロブレイド		6
7	白水池	〃 〃・	〃	ナイフ		1
8	赤井手	〃 小倉・赤井手	〃	ナイフ・マイクロブレイド		7
9	大谷	〃 〃・大谷	〃	マイクロブレイド・フレイク		7
10	一の谷	〃 下白水・一の谷	〃	ナイフ・マイクロブレイド		7
11	鳥ノ巣	那珂川町中原・鳥ノ巣	〃	ナイフ		
12	立石	〃 〃・立石	〃	ナイフ		8
13	深原	〃 〃・深原	〃	ナイフ・マイクロコア		9

註 1. 福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』 11, 1971

2. 鏑久嗣郎・柳田康雄他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』 1, 福岡県教育委員会 1976

3. 小池史哲編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』 4, 福岡県教育委員会 1977

4. 木下修「門田遺跡」『日本の旧石谷文化』 3, 雄山閣 1976

5. 1978年 福岡県教育委員会調査

6. 1976年 福岡県教育委員会調査

7. 1977年 春日市教育委員会調査

8. 1878年 採集

9. 1976年 福岡県教育委員会調査

Ⅲ　弥生時代の遺構と遺物

辻田地区で検出されたこの時代の遺構は，前期の袋状竪穴50基・竪穴住居跡３軒・円形竪穴遺構１基・Ｖ字溝１条，中期の竪穴住居跡７軒・方形竪穴遺構４基・長方形竪穴遺構１基・長方形土壙４基・屋外炉跡１基，後期の竪穴住居跡11軒・溝状遺構１条等がある。他に時期不明の竪穴住居跡２軒と溝状遺構５条がある。遺物としては，前期～後期の土器・石器多数と鉄器・青銅器・玉類・土製品がある。

(1)　袋　状　竪　穴

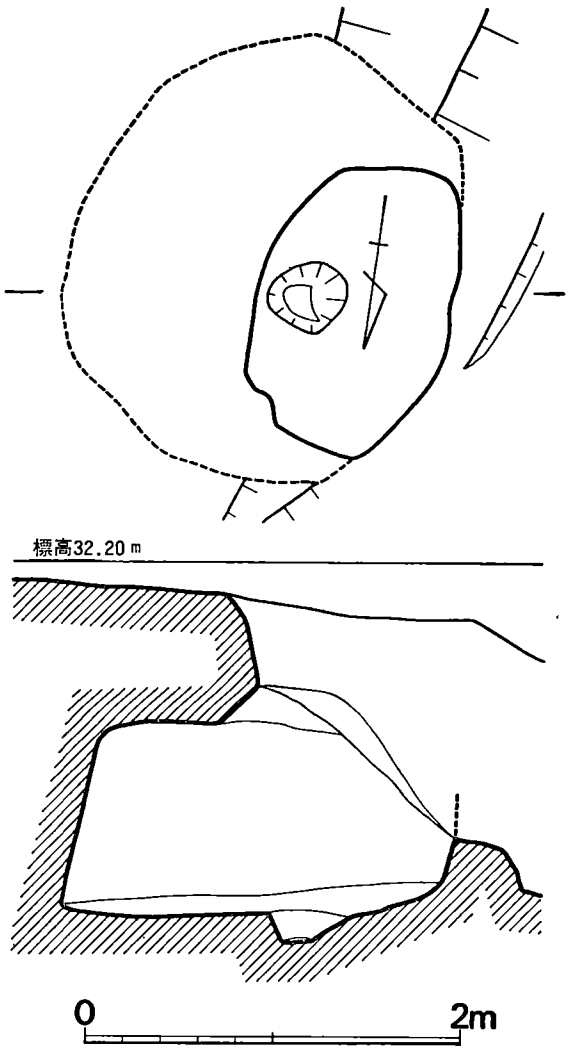
≪１号袋状竪穴(図版14，第11図)

Ｄ５区の崖ふちで検出されたもので西側上面は破壊されている。床面は楕円形を呈し，最大径は2.35*m*を測る。入口は西側に偏し，底面中央より西側によった所に径約40*cm*，深さ20*cm*のピットが穿たれている。壁面はやや内傾し，天井部への屈折は直角に近く，天井部は平坦である。

遺物は前期末の完形の壺１・鉢２個と，壺・無頸壺・甕・蓋等の破片多数と投弾１個が出土した。以下，出土壺・甕・鉢の分類は次の基準に従う。

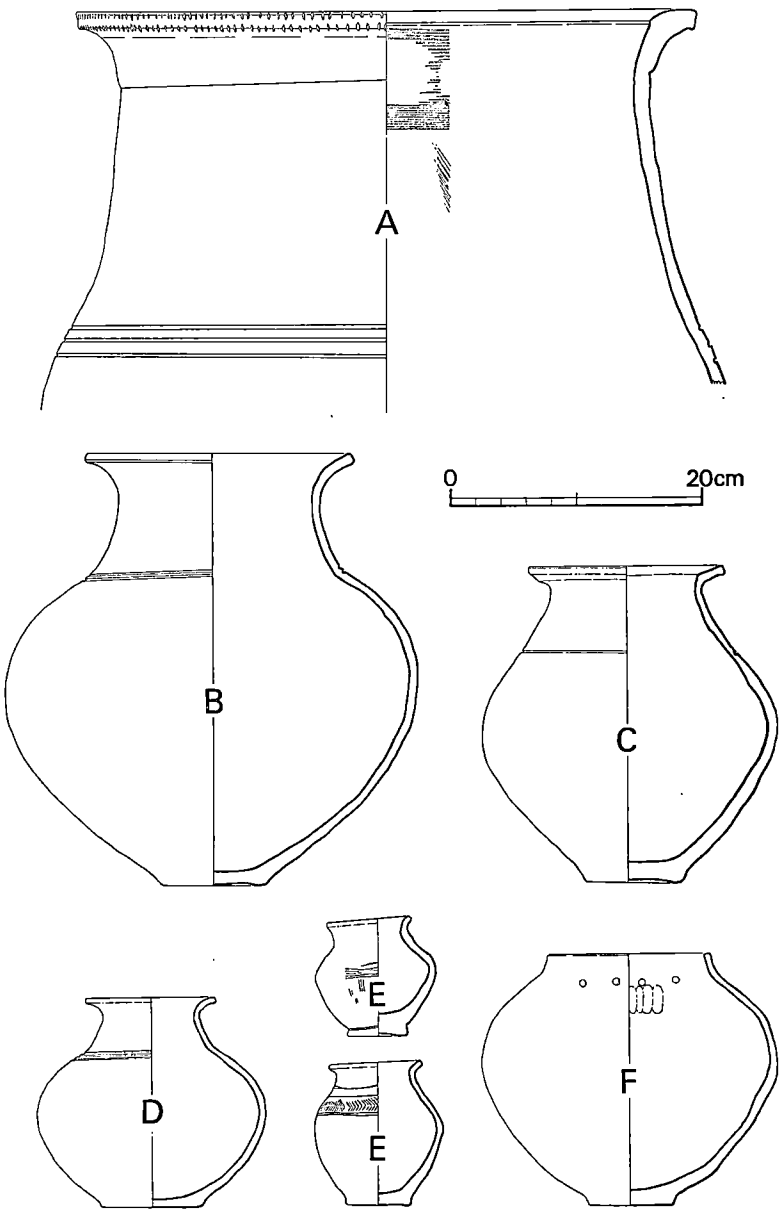
分類基準

壺形土器の分類（第12図）　壺には大きくＡ～Ｆの６つのタイプがあ



第11図　１号袋状竪穴実測図（1/40）

り，基本として大きさ・形状にもとづいて分類した，Aタイプは口径35～60cmのいわゆる大形壺で，甕棺等に良く利用される。Bタイプは口径18～27cm，器高35～40cmの中形壺で，量的にもかなりあるタイプである。口縁部の特色により，さらに細別できる。口縁端部内面を肥厚させたa類，肥厚させないで「く」字状に外反させるb類，いわゆる有段口縁のc類である。Cタイプは口径16cm前後，器高25cm前後の，いわゆる中小形とでもいえる壺で，B・Dタイプの中間的な壺である。さらに，有段口縁のa類と段を有しない「く」字状に外反するb類に細分できる。Dタイプは口径10～13cm，器高16～19cmの小形の壺である。Cタイプと同様，有段状口縁をもつa類と有しない「く」字状に外反するb類とがある。Eタイプは口径4.8～10.2cm，器高9～14.6cmの極小形の壺である。口縁端部の特色には若干の差異はあるが，大きく文様を有するa類と有しないb類に分けておきたい。

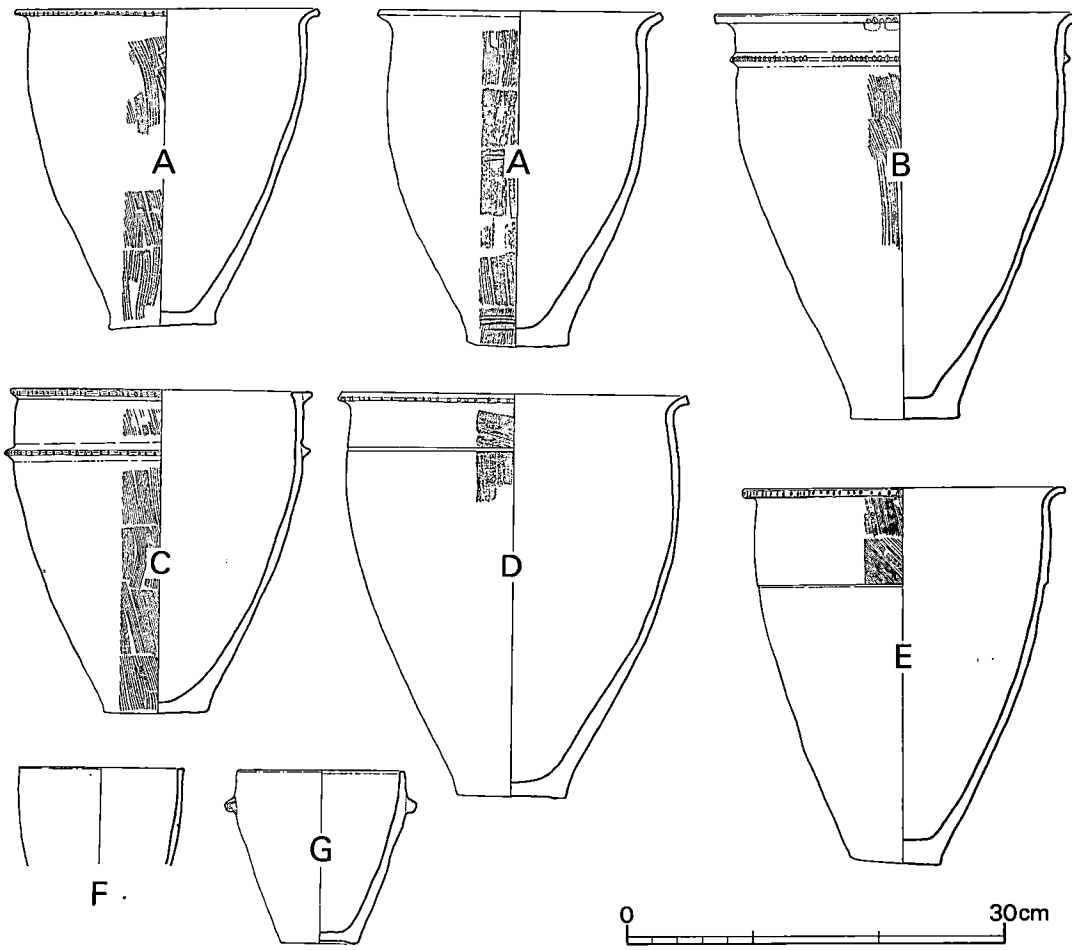


第 12 図　前期末壺形土器分類図 (1/6)

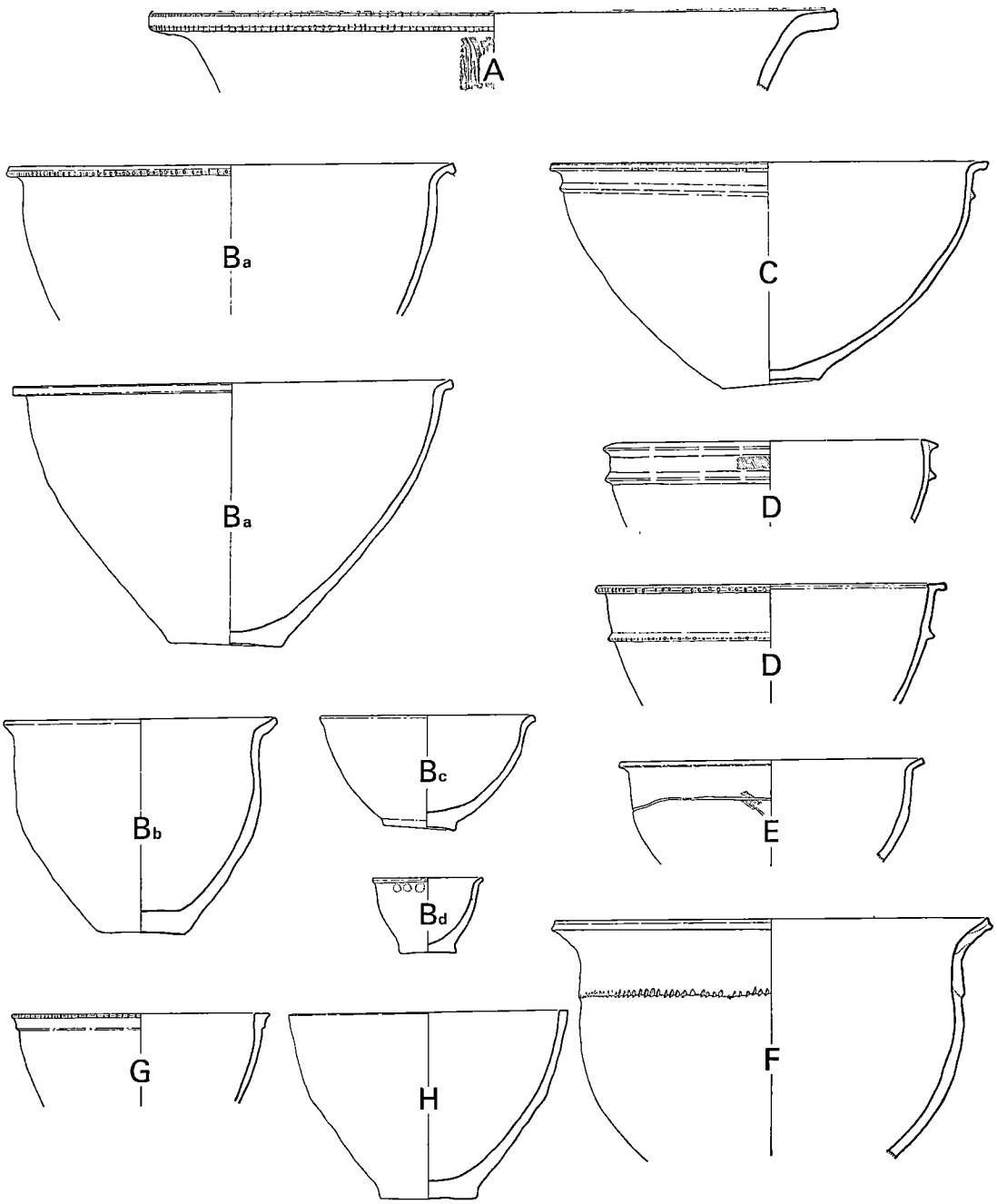
Fタイプはいわゆる無頸壺を一括した。

甕形土器の分類（第13図）　口縁部の特色を基本として分類すると大きくA～Gの7つのタイプに分けることができる。Aタイプはいわゆる如意形口縁ないしは「く」の字状に外反する甕である。さらに口縁端部に刻目を有するa類と有しないb類に分れる。大きさにも大形・小形がある。Bタイプは如意形口縁の口縁部と口縁下に三角凸帯を有す甕である。口縁端部と凸帯に刻目をもつa類，もたないb類がある。量的にはa類が圧倒的である。Cタイプには口縁端部外面と口縁下に三角凸帯を付した甕である。Dタイプは如意形の口縁部と口縁下に1条のヘラ描き沈線をもつ甕である。Eタイプには如意形の口縁部と口縁下を肥厚させ段を形成する甕である。Fタイプは直口する口縁部をもつ甕である。Gタイプは直口する口縁下に把手状のつまみを有す甕である。F・Gタイプとも量的に少なく大半が小形の甕である。

鉢形土器の分類（第14図）　口縁部の特色と大きさを基準に分類するとA～Hの8つのタイ



第 13 図　　前期末甕形土器分類図（1/6）



第 14 図　　前期末鉢形土器分類図 (1/6)

プに別れる。Aタイプは口径60cmと大きく，壺Aと共通する口縁端部外面上下に刻目を有する超大形の鉢である。例は少ない。Bタイプは，いわゆる「く」字状に外反する口縁部をもつ鉢である。大きさによりさらに細別できる。口径40cm前後，器高23cm前後のa類（大形品），口径24～30cm，器高18cm前後のb類（中形品），口径20cm前後，器高10～13cmのc類（小形品），口径5cm前後，器高7cm前後のd類（極小形品）である。Cタイプは「く」字状に外反する口縁部と口縁下に三角凸帯を有する鉢で，甕Bタイプと共通する特色をもつものである。さらに，口径40cm前後のa類・口径25cm前後のb類の大形小形がある。Dタイプは口縁端部と口縁下に三角凸帯を付す鉢である。甕Cタイプと共通する特色を有する。刻目を付するもの，付さないものがある。口径30cm前後のものが多い。また，口縁端部に三角凸帯を付すだけのものもこれに含める。Eタイプは「く」字状に外反する口縁部と口縁下に1条のヘラ描き沈線をもつ鉢である。甕Dと共通する特色をもつもので，類例の少ない鉢である。Fタイプは「く」字状に外反する口縁部と口縁下を肥厚させ段を形成する鉢で，甕Eと共通する特色をもっている。口縁端部・肥厚端部に刻目を付するものもある。口径40cm前後のa類（大形品）と口径30cm前後のb類（中形品）とに分れる。Gタイプは直口する口縁部を有すもので，端部上面を平坦にし肥厚させている鉢である。大形（a類）・中形（b類）の2種がある。Hは直口する単口縁の鉢である。若干内彎気味になるものもある。大半が中形品である。

出土遺物（図版39・52，第15～17図）

壺形土器（第15図1～11・20）

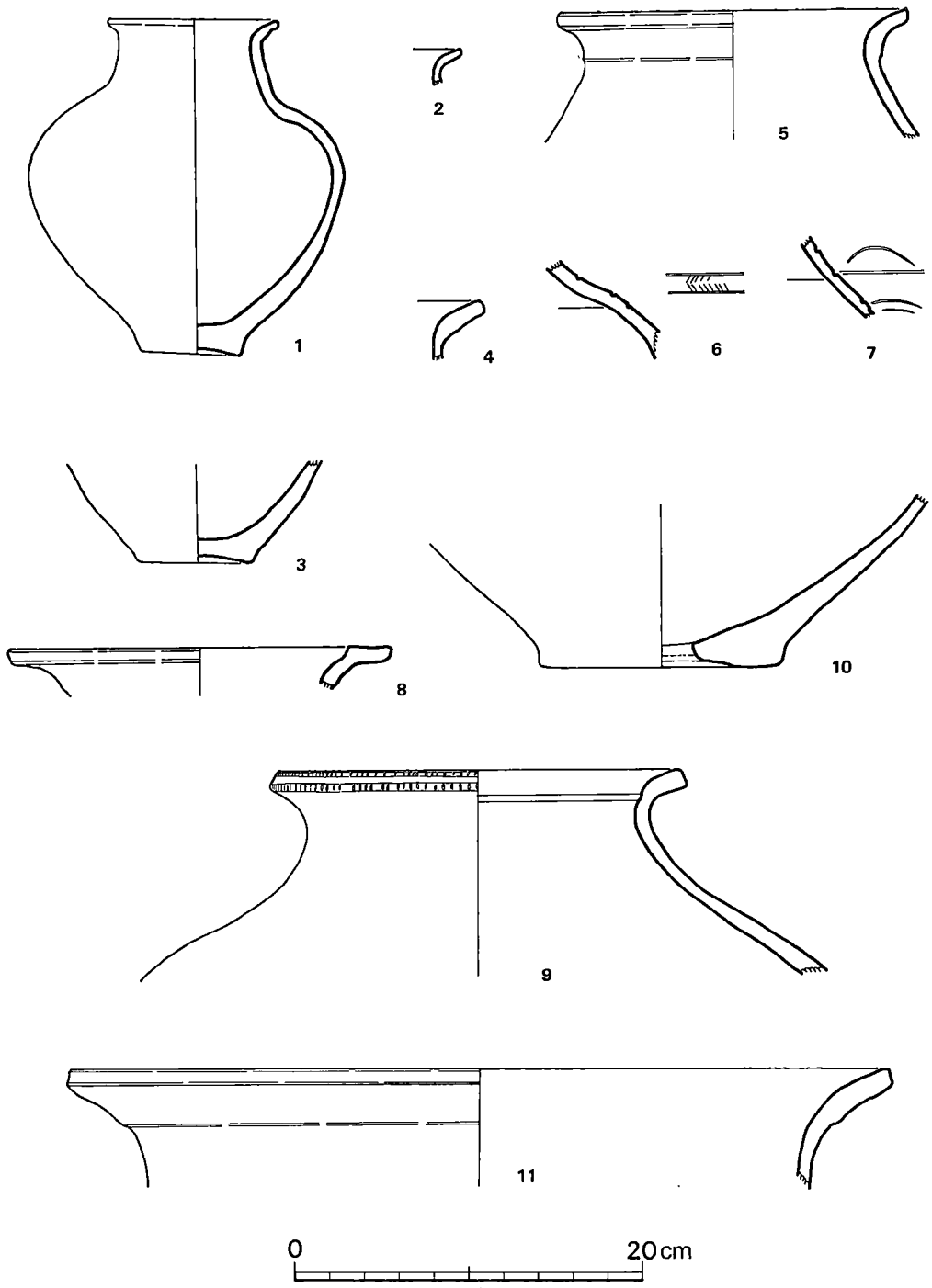
壺A（11）　復原口径47cmを測る大形壺の口縁部付近の破片資料である。口縁部外面は肥厚し，段をもつがさほど明瞭でない。内外はナデて仕上げた淡褐色の焼成良好な土器である。

壺B（4～10）　口縁端部内面を肥厚させた8・9（a類）と外面を肥厚させ有段状口縁をなす4・5（b類）がある。肩部に2条の平行ヘラ描き沈線とその間に羽状文を描いた6，1条のヘラ描き沈線の上下に半円弧文を描いた7がある。これらはb類に属するものである。10はa類の底部である。a類とした8は口縁部内面が平坦で，9は内傾し，端部外面上下に刻目を付す違いがある。9は壺Aに一般的なタイプで，8は中期に盛行する鋤状口縁に共通する特色をもつタイプである。

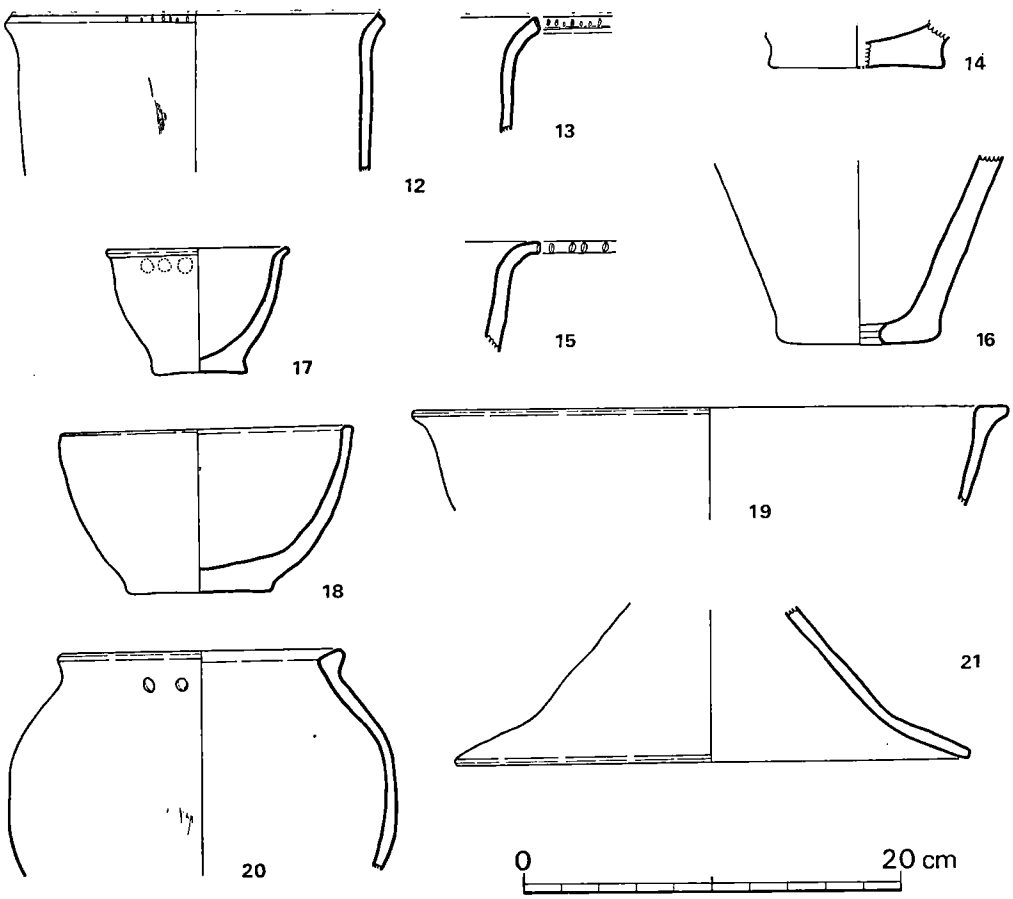
壺E（20）　いわゆる無頸壺の1/3の破片資料である。復原口径15cmを測る。胴部は球形を呈し，頸部のしまりはゆるやかで，口縁部は肥厚し短かい。頸部には一対の孔がある。対をなすものであろう。胴部外面は粗いヘラ磨き，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデ仕上げである。色調はくすんだ淡褐色を呈す。

甕形土器（第16図）

甕A（12～15）　12・13・15も口縁端部に刻目をもつa類である。12は復原口径19.9cmを測る胴部上半の破片資料である。胴部外面には縦位の刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げてい



第 15 図　1号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第 16 図　　1号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

る。内面は剝落のため不明。体部外面は煤の付着が著しい。色調は外面暗褐色，内面はくすんだ褐色を呈す。焼成普通。14はわずかに凹む底部の資料である。

甑形土器（第16図16）

胴部下半の資料で，底部の穿孔は焼成後である。胴部外面は縦位の刷毛のあとナデ，内面はナデて仕上げている。色調は赤味がかった褐色を呈す。

鉢形土器（第16図17～19）

鉢B（17）　わずかに「く」字状に外反するもので，口径9.8*cm*，器高6.6*cm*を測る極小形品である。a類に属す。内外をナデて仕上げ，頸部外面には指頭による圧痕を残している。色調は褐色を呈す。

鉢D（19）　復原口径31.40*cm*を測る胴部上半の破片資料である。内外はナデて仕上げ，外面くすんだ淡褐色，内面灰黒色を呈す。

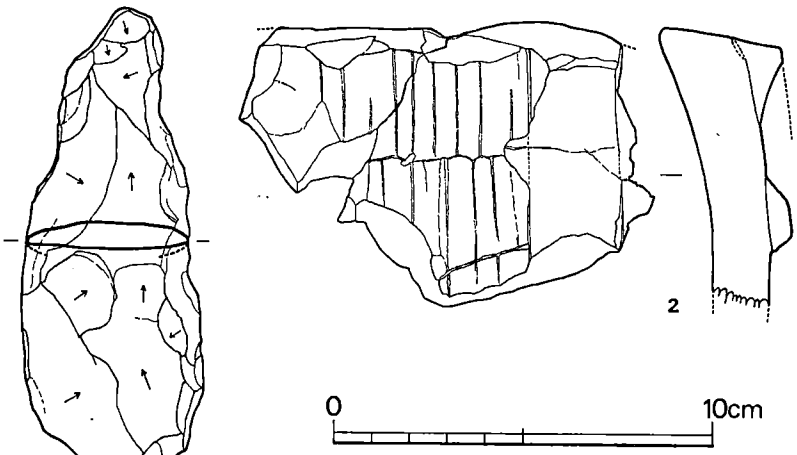
鉢H（18）　直口する単口縁の鉢で，口径15.5㎝，器高8.3㎝を測る小形品である。内外はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げ，端部はわずかに肥厚している。色調は暗灰褐色を呈す。

蓋形土器（第　図21）

つまみ部を欠く傘形の鉢である。口径27㎝で，内外をナデて仕上げた作りの良い土器である。色調は明褐色を呈し，焼成良好。　（井上）

石器（第17図）

石斧・石弾のほか，混入と思われる滑石製石鍋片が出土した。1は撥形を呈す石斧の表皮破片。長さ12.5㎝，幅4.7㎝を測る。周辺から中央部に向って荒い剝離を加えて整形している。刃部先端に若干の磨痕が観察されることから，刃部磨製石斧で12号住出土の石斧に似るものであろう。灰白色軟質の頁岩質泥岩。2は滑石製石鍋の破片で復原口径23.6㎝。通常とは異なり把手は口縁から胴部方向へ延びる。幅2.4㎝，器高は不明。胴部には3回にかけての削り稜が見られる。　（木下　修）

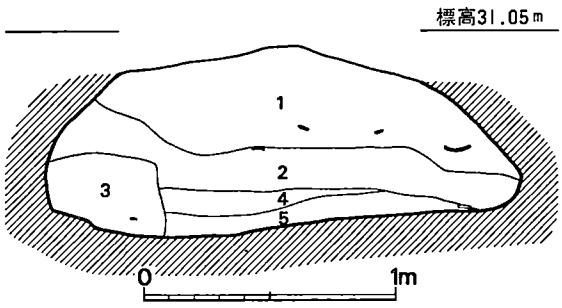


第 17 図　1号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

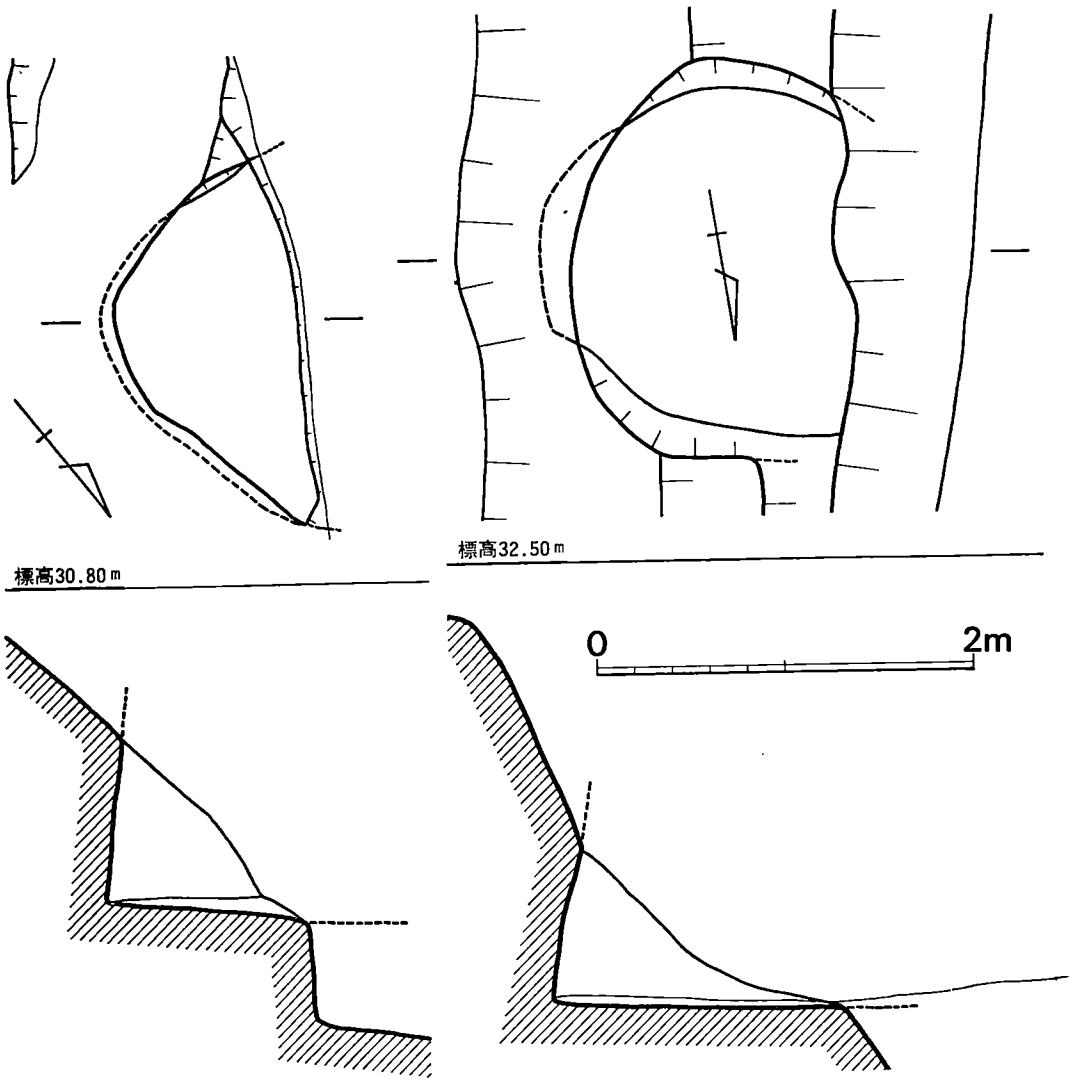
≪**2号袋状竪穴**　（図版13，第19図）　D4区崖ふちで検出されたもので，西側半分と上面の大半が欠失した竪穴である。床面は半壊しているので明確でないが，楕円形をなすものと思われる。壁面はわずかに内傾ぎみに立ち上がる。

土層名

1. 暗茶褐色土（黄褐色土粒子を含む）
2. 暗黒褐色土（黄褐色土粒子を含む）
3. 暗黄茶褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
4. 暗黒茶褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
5. 黄茶褐色土.



第 18 図　2号袋状竪穴土層断面図（1/30）



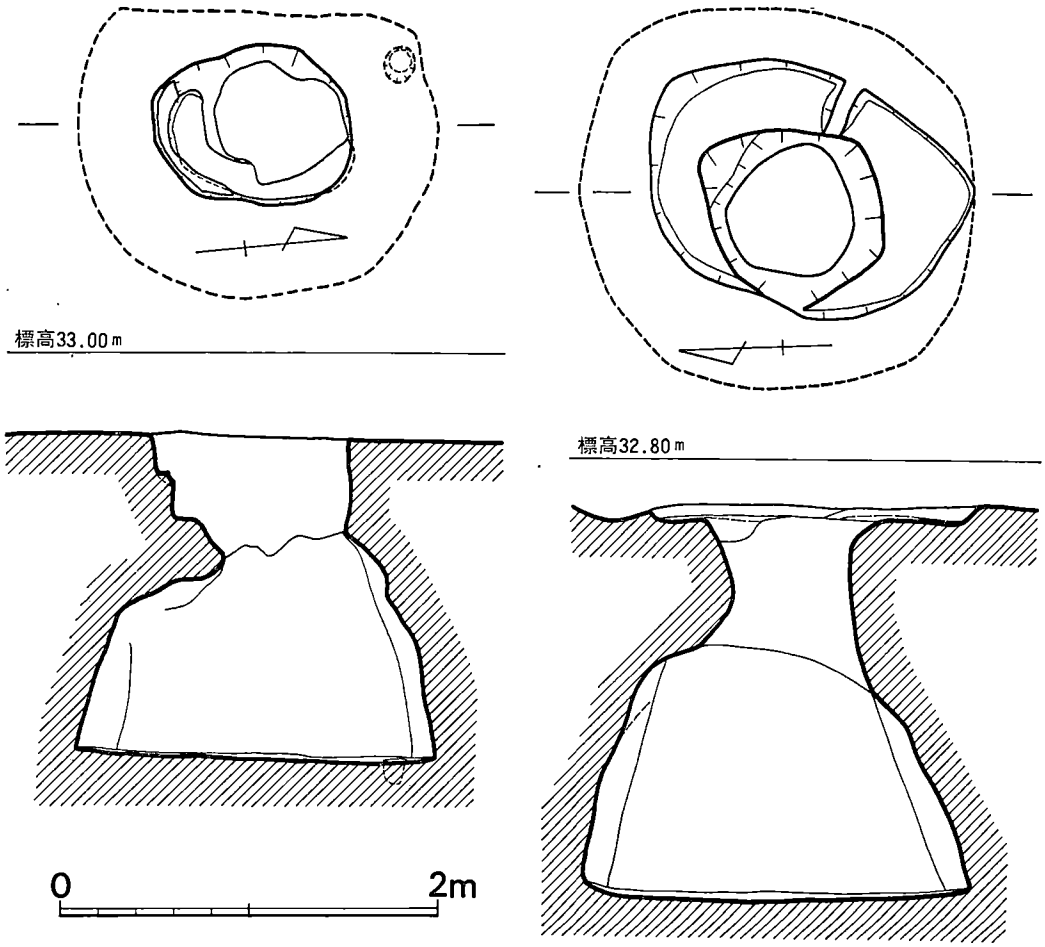
第 19 図　2・3号袋状竪穴実測図 (1/40)

遺物は前期末の土器細片若干が出土したのみである。

≪**3号袋状竪穴**（図版14，第19図）　E 5区崖ふち付近で検出されたもので，1・2号同様その大半が破壊された竪穴である。床面は楕円形を呈し，南北径1.25*m*を測る。床面は平坦で，壁面はわずかに内傾する。

遺物は前期末の壺・甕等の破片数点を出土したのみである。

≪**4号袋状竪穴**（図版15，第20図）　床面形は西側辺が直線的になる楕円形を呈し，入口は中央より若干西側に偏する。床面径1.88×1.50*m*，深さ1.68*m*を測る。壁面の内傾は強く，南壁側は天井部への屈折が強いのに対して北側はゆるやかである。西北隅床面に径15*cm*，深さ10



第 20 図　4．5号袋状竪穴実測図 (1/40)

cmのピットがある。

遺物は前期末の甕2，壺・甕・鉢・蓋等の破片と石核1点が出土した。

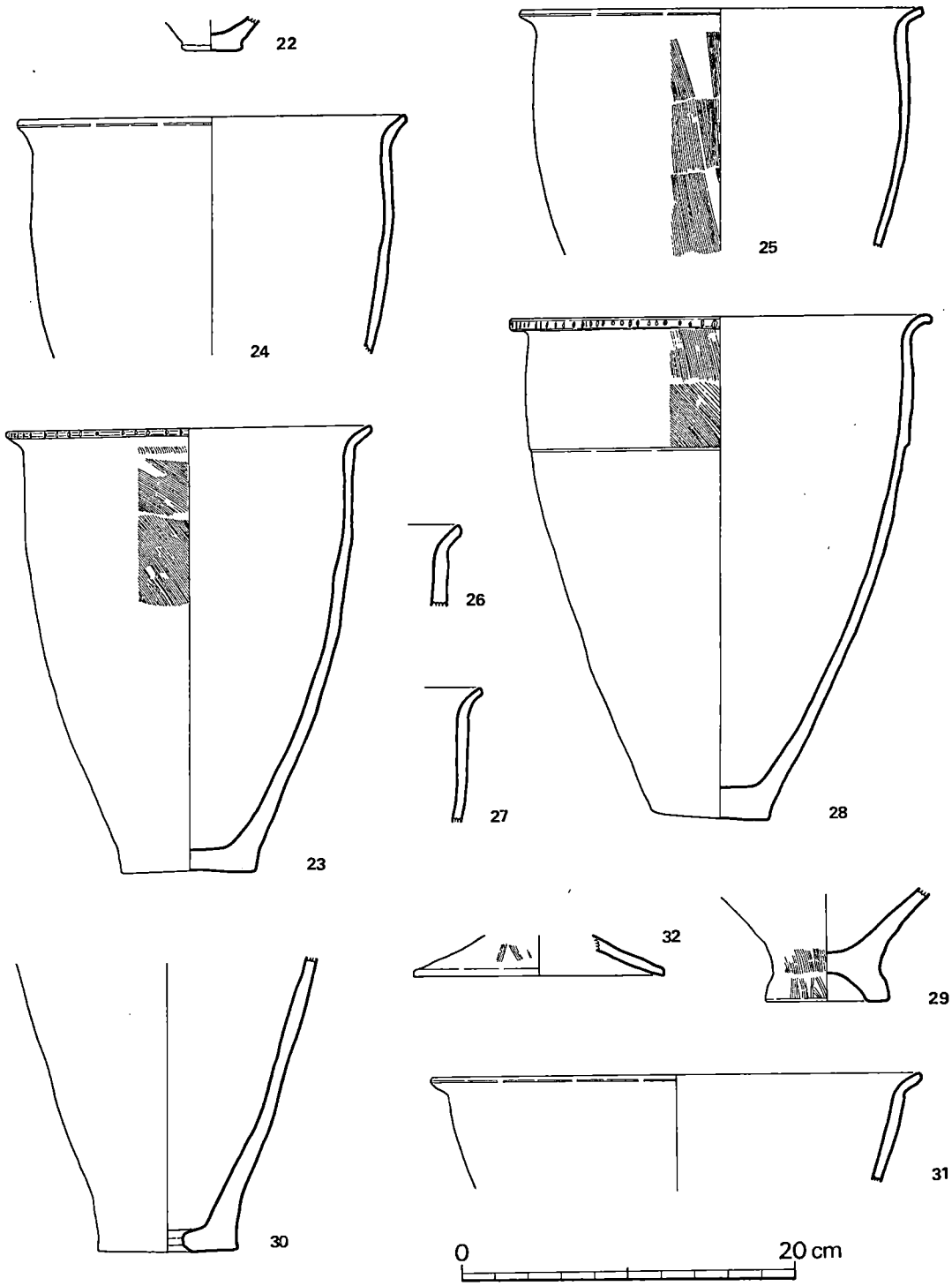
出土遺物（図版31・52，第21・22図）

壺形土器（第21図22）

極小形の壺Eの底部である。内外ともナデて仕上げているが雑で，成形時の凹凸を残している。外面暗褐色，内面褐色を呈す。

甕形土器（第21図24～29）

甕A（24～27）　口縁端部に刻目をもつ23（a類）と刻目をもたない24～27（b類）がある。23は口径21.7cm，器高25.5cmを測る。胴部上半は斜位の刷毛，下半は二次焼成を受け器面の剝落がはげしい。内面はナデて仕上げている。胴部上半には部分的に煤の付着がみられる。



第 21 図　4号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

色調は明褐色を呈す。24は復原口径23.2cm，25は24cmを測る。胴部上半の破片資料である。24は胴部外面を刷毛のあとナデ，25は刷毛のままで仕上げている。内面は器面風化のため不明。

甕E（28）　口径25.1cm，器高29cmを測る口縁下を肥厚させた甕である。口縁部の屈折は強く，端部に刻目を付している。肥厚部外面には斜位の刷毛，下半は刷毛のあとナデ，内面はナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈す。

底部（29）　脚台状をなす底部である。内面と内底部はナデ，脚部は縦位の刷毛，胴部下半は刷毛のあとナデて仕上げている。色調はくすんだ淡褐色を呈し，焼成良好である。

甑形土器（第21図30）

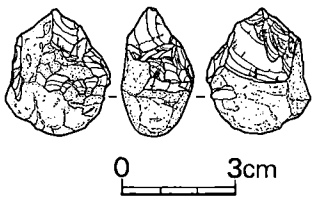
底部の立ち上りは直線的で，穿孔は焼成後である。色調はくすんだ褐色を呈し，内外はナデ仕上げである。

鉢形土器（第21図31）

胴上半部の破片資料で，復原口径29cmを測る。いわゆる鉢Bのb類に属す中形品である。内外ともヨコヘラ磨きした作りの良い土器である。色調は外面赤褐色，内面黒色を呈す。

蓋形土器（第21図32）

復原口径14.9cmを測る小形の蓋である。外面は刷毛のあと軽くナデて，内面はナデて仕上げている。色調は暗灰褐色を呈す。（井上）



第22図　4号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

石　器（第22図）　黒曜石製の石核1点のみが出土した。円礫の一端を剝出し，その面を打面として反対側を剝出する。下端部には原面を大きく残す。重さ16.2g。（木下）

≪**5号袋状竪穴**（図版16，第20図）　床面は円形を呈する。床面径2.05m×1.98m，深さ2.06mを測る残りの良い竪穴である。入口はほぼ中央部に位置し，入口部径約90cmと狭い。壁面は彎曲が強く，典型的なフラスコ状をなす竪穴である。この竪穴には，広い所で1.70m，狭い所で1.20m，深さ約10cm程の平坦な不整方形の掘り方がある。蓋受け等の上部施設と思われる。土層堆積は最下層に炭化物を含む暗黒褐色土が，最上層に暗褐色土があり，せいぜんとした水平堆積している。

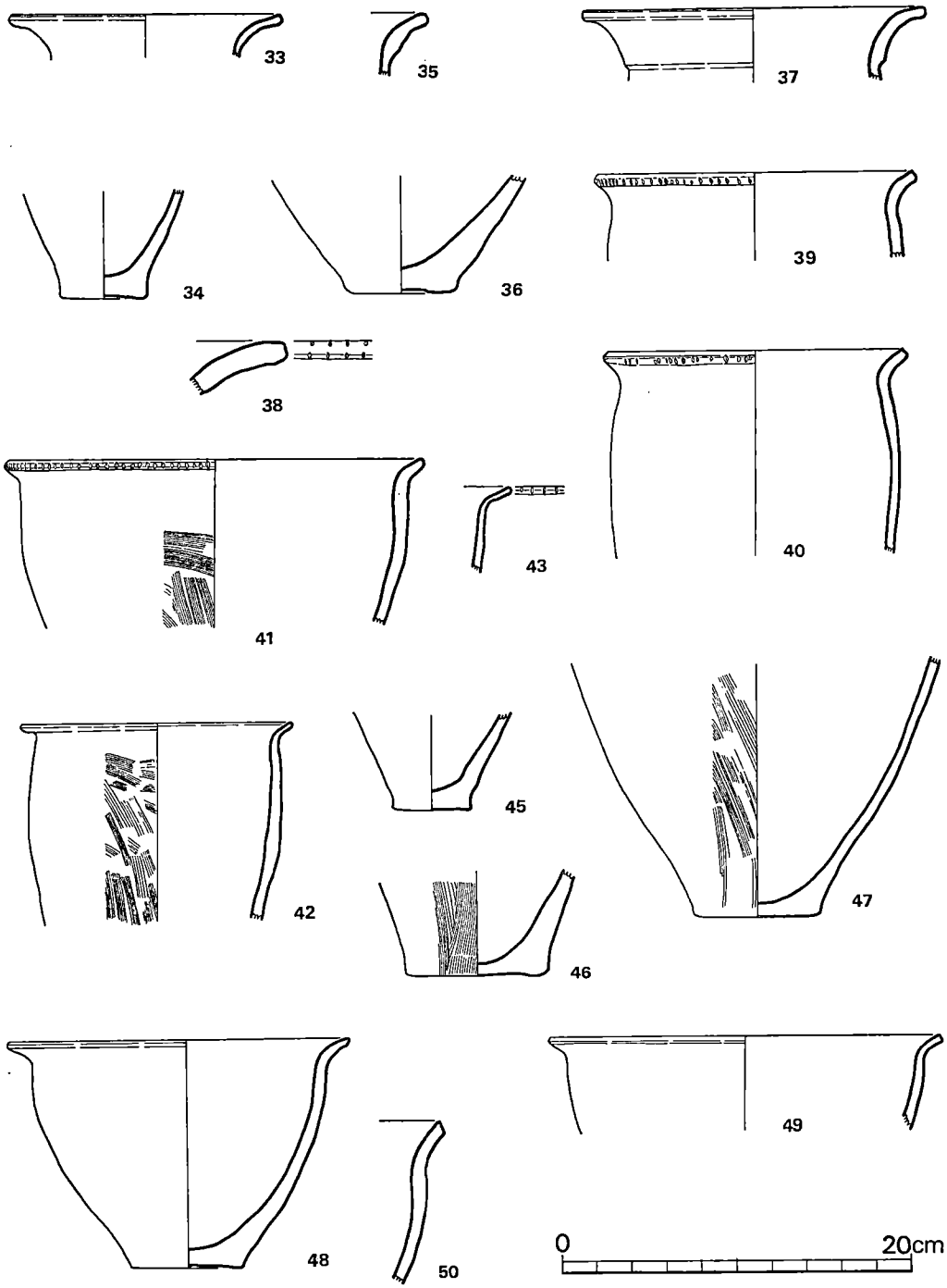
遺物は前期末の壺・甕・鉢等の破片多数が出土した。また，太形蛤刃石斧1，磨製石斧3，打製石鏃1，削器1，砥石2，抉状耳飾1も出土した。

出土遺物（図版40・52，第23～25図）

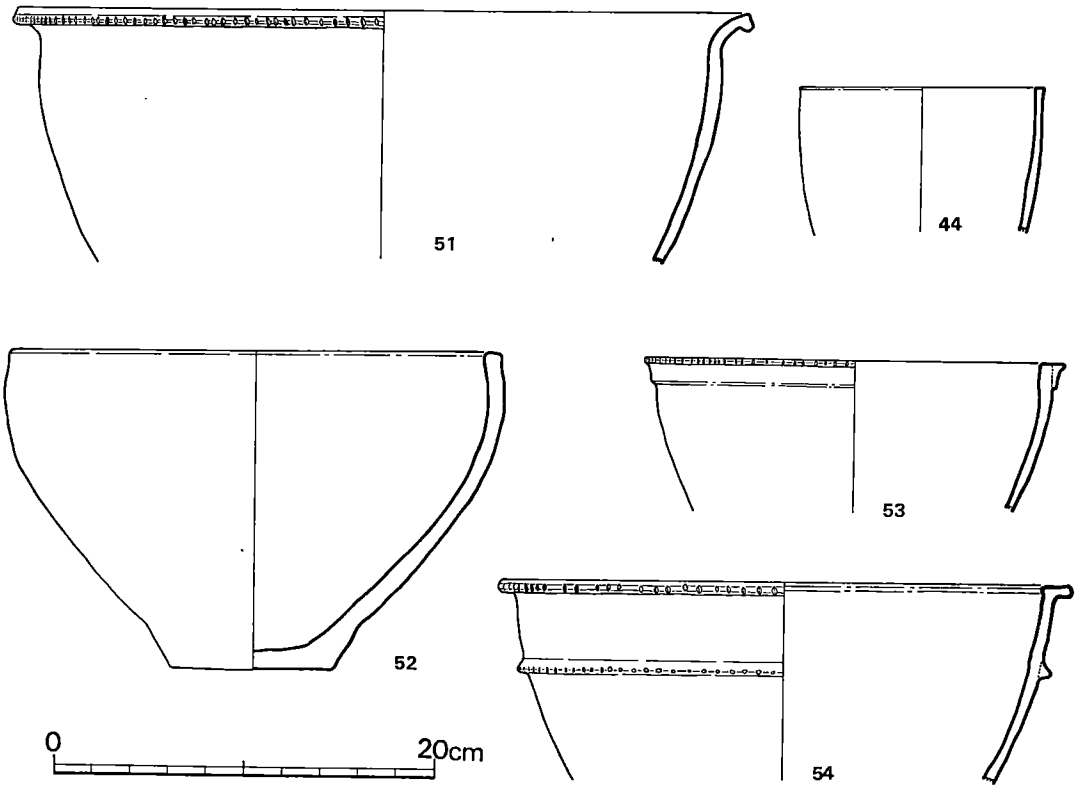
壺形土器（第23図33～38）

壺A（38）　口縁端部外面上下に刻目を付す大形壺の口縁部の破片資料である。色調は橙褐色を呈し，焼成良好。

壺B（35～37）　全て破片資料で，35・37が有段状口縁をなすC類である。36は凹み気味の



第 23 図　5号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第 24 図　5号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

底部である。37は復原口径19.7cmを測り，内外ヨコヘラ磨きで仕上げている。色調は淡褐色を呈す。

壺C (33)　口縁部の破片資料で，復原口径15.6cmを測る。色調は橙褐色を呈す。

壺E (34)　胴下半の資料で，底部はわずかに凹む。内外ともナデて仕上げた灰褐色を呈す土器である。

甕形土器 (第23図39～47)

甕A (39～43)　全て破片資料で，刻目をもつa類 (39～41・43) と刻目をもたないb類 (42) がある。復原口径39が18.5cm，40が17.4cm，41が24cm，42が15.5cmを測る。41・42が外面刷毛のままの他は，刷毛のあとナデて仕上げている。内面は全てナデ仕上げである。色調は暗褐色で一致する。42・43の口縁部は他と比べ薄い。

底部 (45～47) 風化のため不明の45の他は，外面刷毛，内面ナデで仕上げている。46はわずかに凹み気味の底部である。甕Aの底部であろう。

甕F (44)　直口する口縁部をもち，端部が平坦の甕の破片資料である。復原口径12.9cmを測り，外面刷毛，内面ナデで仕上げた暗褐色を呈す土器である。

鉢形土器（第23・24図48～54）

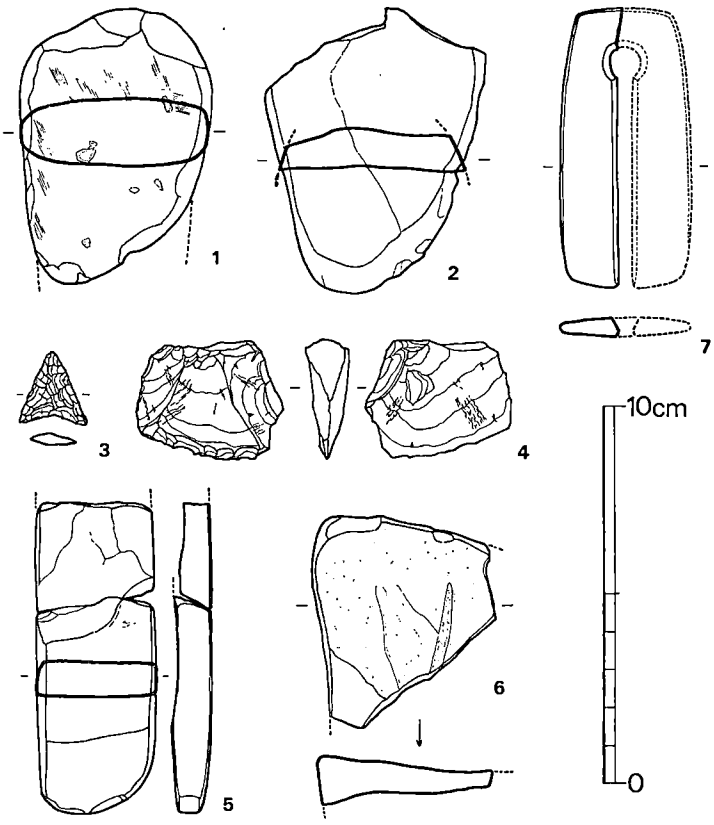
鉢B（48～51）　いわゆる大形品のａ類（50・51）と中形品のｂ類（48・49）がある。ａ類には口縁端部に刻目をもつ51と有しない50がある。51は復原口径39*cm*を測り，口縁部の屈折は強く，端部をヨコナデにより外下方につまみ出している。外面はヨコヘラ磨き，内面はナデで仕上げた作りの良い土器である。ｂ類の48は口径19.5*cm*，器高12.8*cm*。49は胴部上半の破片資料で，復原口径22.5*cm*を測る。内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は48が外面暗褐色，内面黒褐色，49は赤褐色を呈す。

鉢D（54）　胴部上半の破片資料で，復原口径34*cm*を測る。口縁端部外面と口縁下に凸帯を付した鉢で，その端部に刻目をほどこしている。内外ともナデて仕上げた作りの良い土器で，淡褐色を呈す。

鉢G（53）　口縁端部上面を平坦にし，外面を肥厚させた鉢である。上端には刻目を施している。復原口径22*cm*を測り，外面刷毛のあとナデ，内面ナデで仕上げている。色調は外面暗灰褐色，内面乳灰色を呈す。

鉢H（52）　わずかに内彎気味の単口縁の鉢で，口径25.8*cm*，器高16.5*cm*を測る。内外ともヨコヘラ磨きした赤褐色を呈す作りの良い土器である。焼成良好。

（井上）

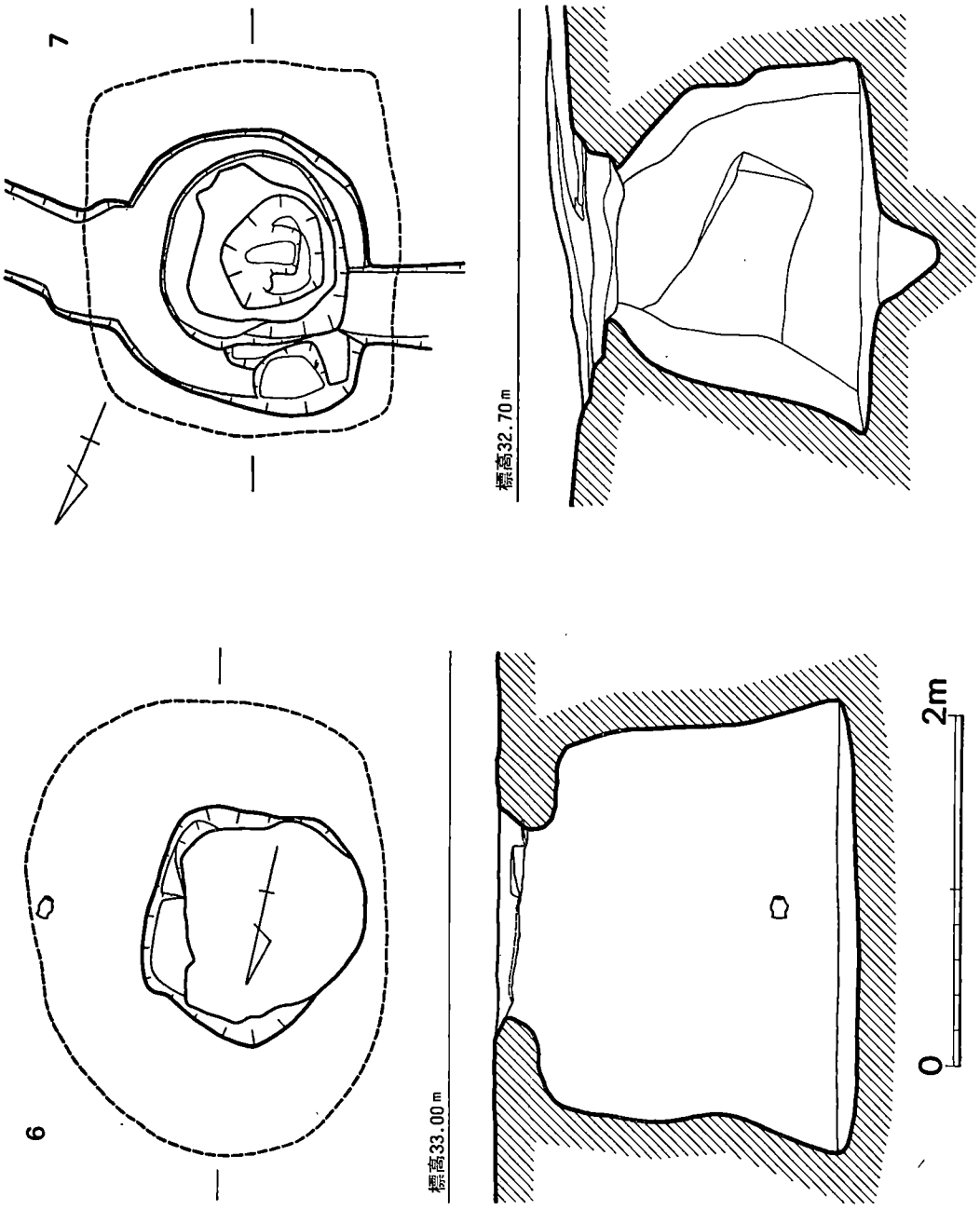


第 25 図　5号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

石　器（第25図）

石斧4・石鏃・削器・砥石・抉状耳飾が出土した。1は蛇紋岩製磨製石斧の頭部から胴部の破片。現存長7.2*cm*，幅5.0*cm*，厚さ1.8*cm*。両面とも縦方向の研磨著しい。2は硬砂岩製の磨製石斧片。他に太型蛤刃石斧の胴部小破片と磨製石斧片出土。3は打製の凹基無茎式石鏃で頁岩製。長さ24.6*mm*，厚さ3.1*mm*，重さ0.9*g*を測る。

4はサヌカイト製の削器。幅広の剝片を用い，打点と反対側に刃部作成。断面は楔形を呈す。
5は黒灰色を呈す砂岩を用いた砥石。断面は隅丸長方形を呈す。6は砂岩製の砥石破片。7は



第 26 図　6・7袋状竪穴実測図 (1/40)

蛇紋岩製の抉状耳飾で中央部で欠損している。竪穴内下層より出土した。縄文時代中期に通常出土するものと同じで，長さ7.3㎝，厚さ0.5㎝を測る。包含層出土の石鏃にも縄文時代特有のもの（第233図33・34）があり，この抉状耳飾も何らかの形で竪穴内に残ったのであろう。

（木下）

≪**6号袋状竪穴**（図版16，第26図）　床面は楕円形を呈し，底面径2.54m×1.98m，深さ2.05mを測る。入口は西側に偏し，一辺約1.25mの不整方形をなす。壁面は西面が垂直状をなす他は内傾し，天井部への屈折が強く短い。

遺物は床面より40㎝浮いた状態で完形小型壺1が西壁に接して出土した。他に，壺・甕・蓋等の破片多数と扁平片刃石斧1，磨製石斧1，打製石鏃1，石核1，砥石2，土製紡錘車2が出土した。また，炭化材多数が覆土中から検出された。

出土遺物（図版40・52，第27～29図）

壺形土器（第27図55～59）

壺B（57）　頸部の破片資料で，肩部に3条のヘラ描き沈線をめぐらしている。内外ともナデて仕上げた淡褐色を呈す土器で，胎土・焼成とも良い。

壺E（55）　口径7.2㎝，器高11㎝を測る極小形の壺である。胴部に比べ口径の大きい土器で，頸部に1条，肩部に1条・2条のヘラ描き沈線をめぐらし，さらに肩部の沈線間をヘラ描き羽状文でうめている。外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。色調は赤味かかった褐色を呈す。a類に属す。

底部（56～59）　外面ヘラ磨きの58，刷毛のあとヘラ磨きの56，刷毛のままの59がある。内面は全てナデで仕上げている。壺C・Dの底部であろう。

甕形土器（第27・28図60～69）

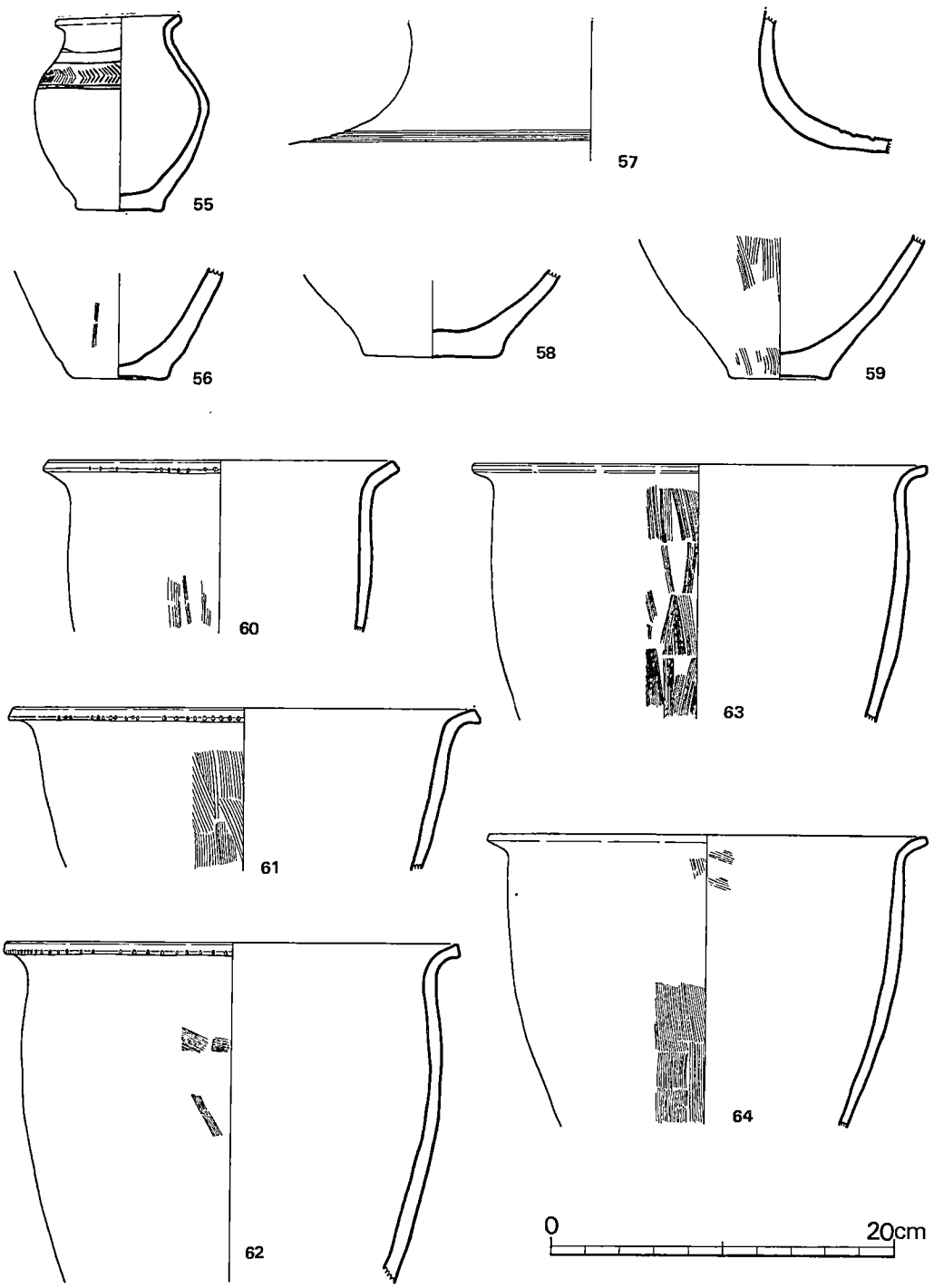
甕A（60～66）　全て破片資料で，刻目を有すa類（60～62）と有しないb類（63～66）がある。大きさにも大小があり，小さい66は復原口径19.2㎝，大きい61で27.5㎝を測る。65は口径23.5㎝，器高29.7㎝を測る。全て，外面刷毛，内面ナデて仕上げた甕で，色調は62が淡褐色，60・64・66が赤褐色ないし橙褐色を呈す他は暗褐色である。

甕C（67）　口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を付し，端部に刻目を施した甕である。口縁下の凸帯は低くだらけている。復原口径28.5㎝を測り，器面風化が著しく調整不明である。色調は外面淡褐色，内面淡橙褐色を呈す。

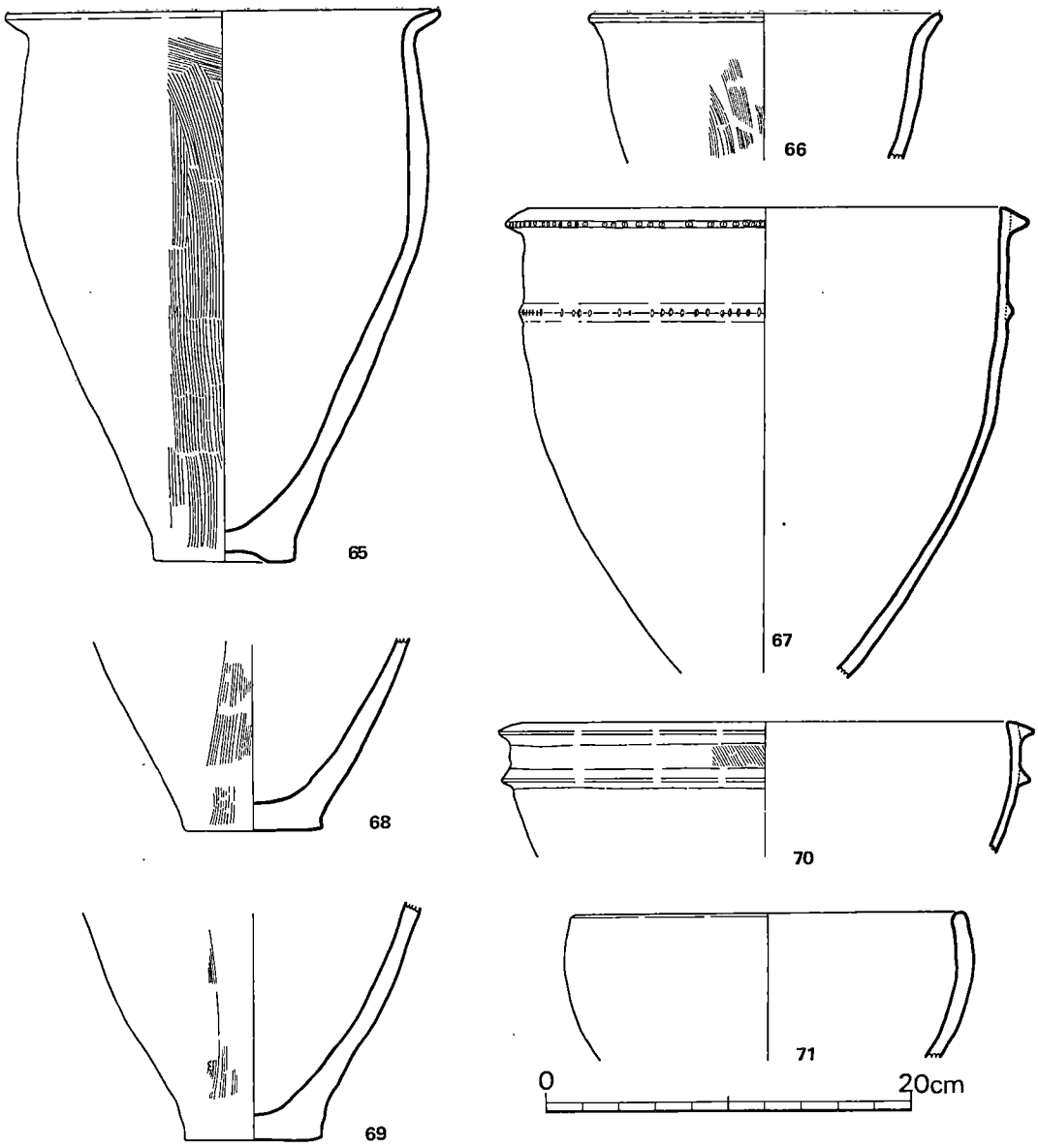
底部（68・69）　外面刷毛，内面ナデで仕上げている。色調は69が外面淡褐色，内面黒褐色，68は内外とも褐色を呈す。

鉢形土器（第28図70・71）

鉢D（70）　胴上半の破片資料で，復原口径29.1㎝を測る。口縁端部と口縁下に三角凸帯を付した鉢で，間隔が狭い。外面凸帯間は刷毛，下半はヨコヘラ磨き，内面ナデで仕上げた作り



第 27 図　6号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



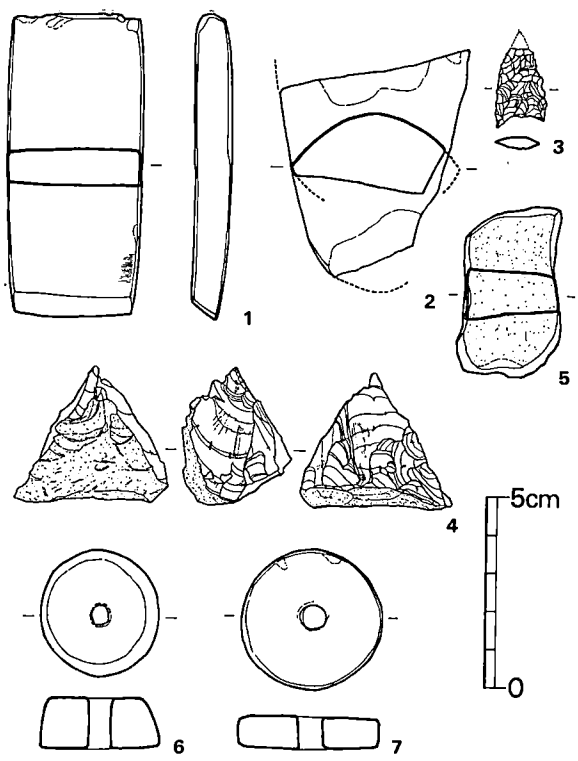
第 28 図　6号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

の良い土器である。

鉢H (71)　わずかに内彎気味の単口縁の鉢で，復原口径21.5cmを測る。内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い褐色を呈す土器である。　(井上)

石器・土製品（第29図）　石斧2・石鏃・石核・砥石と土製紡錘車2が出土した。1は扁平片刃石斧で完形品，全長79.3mm，最大幅35mm，厚さ 9.8mm，重さ 61.1g を測る。縦断面は若干

内に反り，表面の刃部近くがへこむ。刃部の幅8㎜，角度42°。頭部に着柄後と思われる剝落部が観察される。黄灰色頁岩製。2は乳棒状石斧の破片で硬砂岩製。3は黒曜石製の打製石鏃で，唯一の凹基有茎式。先端部を欠損する。厚さ2.9㎜，重さ0.7g を測る。4も黒曜石で，縦長の剝片を剝出した石核。5は荒い砂岩を用いた砥石片で研砥面は表裏二面。6・7は土製紡錘車の完形品で両者とも赤褐色を呈す。重さ15.7g，14.2g を測る。　　（木下）



第29図　6号袋状竪穴出土石器土製品実測図（1/2）

≪7号袋状竪穴（図版17，第26図）

床面は隅丸方形を呈し，底面径2.05m×1.76m，深さ1.77m を測る。入口は中央よりやや西側に寄り，径約80㎝の不整形をなす。壁面は西面が垂直的である他は彎曲が強い。床面には中央よりやや西側に偏して径約70㎝，深さ35㎝のピットが穿たれている。入口部には，楕円形状をなす二段の蓋受け状のテラスをもつ。また，上面は溝状遺構により切られている。

遺物は前期末の完形壺2・甕3・鉢1と壺甕鉢破片が多数出土した。他に敲石1，土製紡錘車1，土製円盤1がある。

出土遺物（図版41・52，第30～32図）

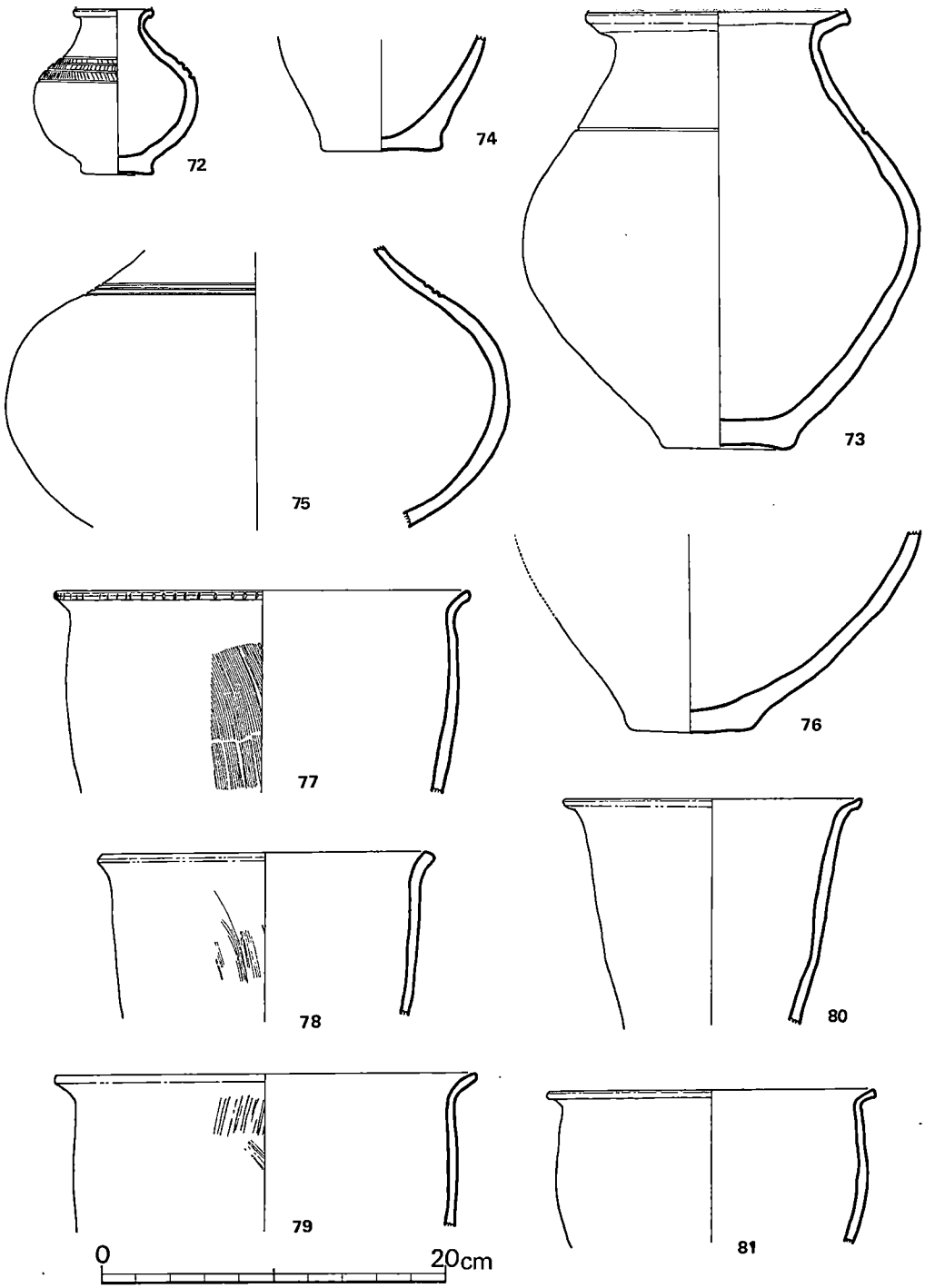
壺形土器（第30図72～76）

壺B（75・76）　胴部が強く張った大形の壺で，最大径29.5㎝を測る。肩部には3条のヘラ描き沈線がめぐる。外面ヘラ磨き，内面ナデで仕上げた明褐色を呈す作りの良い土器である。

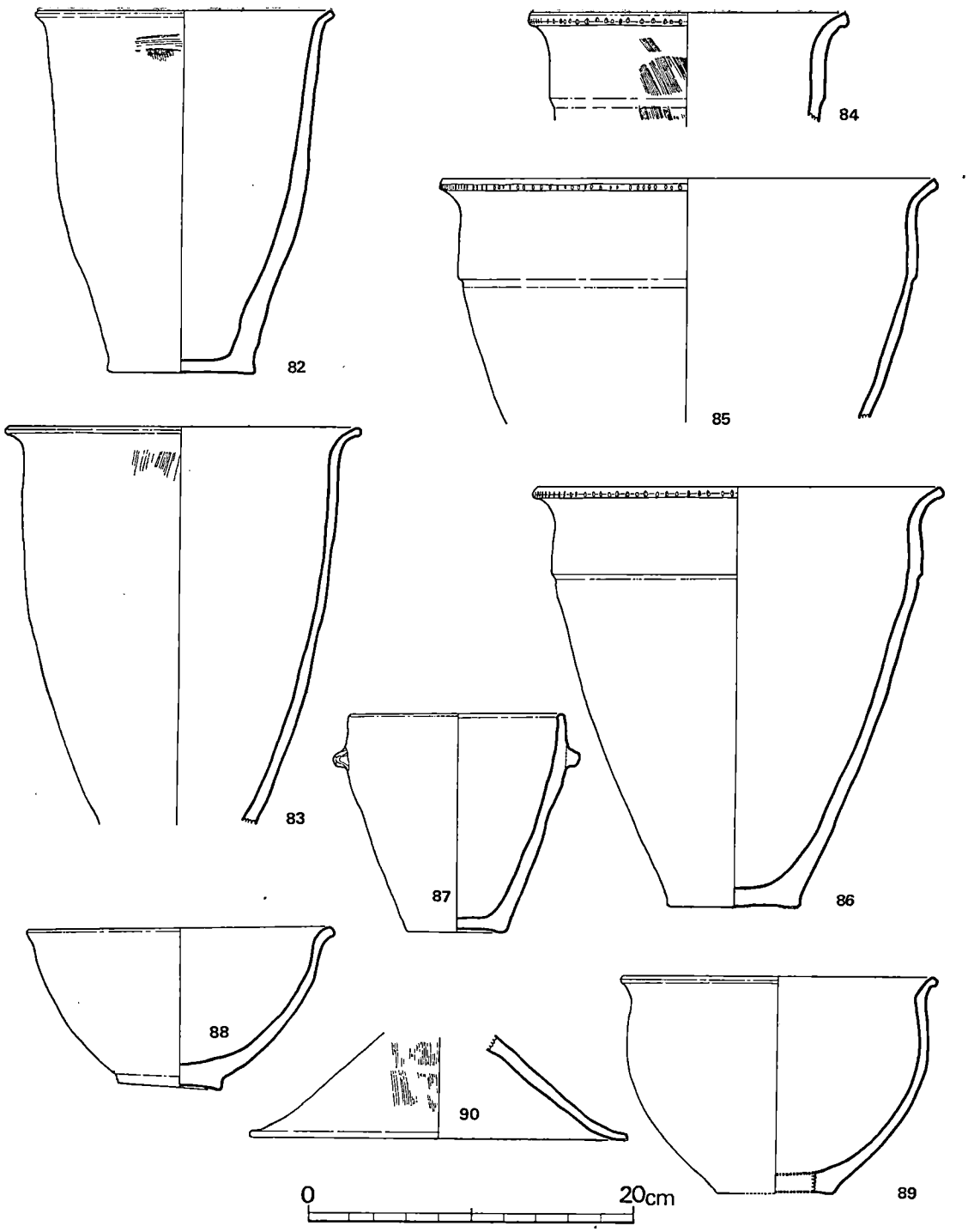
壺C（73）　中形の壺で，口径15.2㎝，器高25㎝を測る。口縁部は明瞭とはいえないが有段状をなし，肩部には1条のヘラ描き沈線がめぐる胴の張った壺である。色調は赤褐色を呈す。

壺E（72）　口径4.6㎝，器高9.5㎝を測る極小形品である。外方に張り出した底部に球形の胴部がつき，頸部のしまりが強い壺である。口縁部は折り返し，端部を丸くおさめている。肩部には4条のヘラ描き沈線をめぐらし，その間を羽状文で埋めている。色調は淡褐色を呈す。

底部（74）　底径7㎝を測る。内外とも粗いヘラ磨きで仕上げた赤褐色を呈す土器である。



第 30 図　7号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第 31 図　7号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

壺CかDの底部であろう。

甕形土器（第30・31図77～87）

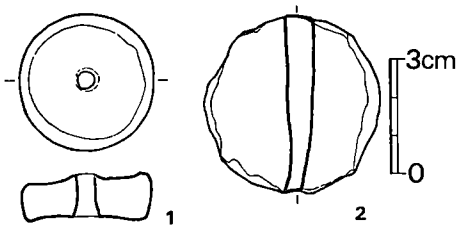
甕A（77～83）　刻目を有すａ類（77）と有しないｂ類（78～83）があり，ｂ類が大半である。82を除く全てが破片資料である。復原口径77が24㎝，78が19.5㎝，79が24.4㎝，80が17.2㎝，81が19㎝，83が18.2㎝を測り，大小ある。82は口径18.2㎝，器高21.6㎝を測る。77・81のように胴の張るものと，80・82のような口縁部から底部に直線的にしぼるタイプとがある。調整は外面刷毛ないしは刷毛のあとナデで仕上げ，内面は全てナデで仕上げている。胴下半はその大半が二次焼成により剝落していて，上半は煤の付着が著しい。色調は全て暗褐色を呈す。

甕E（84～86）　口縁下を肥厚させ，口縁端部に刻目をもつ甕である。84・85は胴部上半の破片資料で，復原口径84が19.6㎝と小さく，85は35㎝と大きい。86は口径25㎝，器高25.3㎝を測る完形品で，器面調整は風化のため不明である。色調は赤褐色を呈す。

甕F（87）　直口する口縁部と口縁下に把手状のつまみがつく甕である。復原口径13.2㎝，器高13.1㎝を測り，底部はわずかに凹む。外面は二次焼成を受けているため剝落がはげしく調整は不明である。内面はナデて仕上げている。外面上半には煤の付着が著しい。色調は暗褐色を呈す。

鉢形土器　（第31図88・89）

両者とも「く」字状に外反するBタイプの小形品でありｃ類に属す。88は口径18.7㎝，器高9.5㎝を測る。外面ヨコヘラ磨き，内面はナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は赤味かかった褐色を呈す。89は復原口径19.4㎝，器高12.8㎝を測り，88と比べ深目の鉢である。内外とも丁寧なナデで仕上げている。色調淡褐色を呈す。



第32図　7号袋状竪穴出土土製品（1/2）

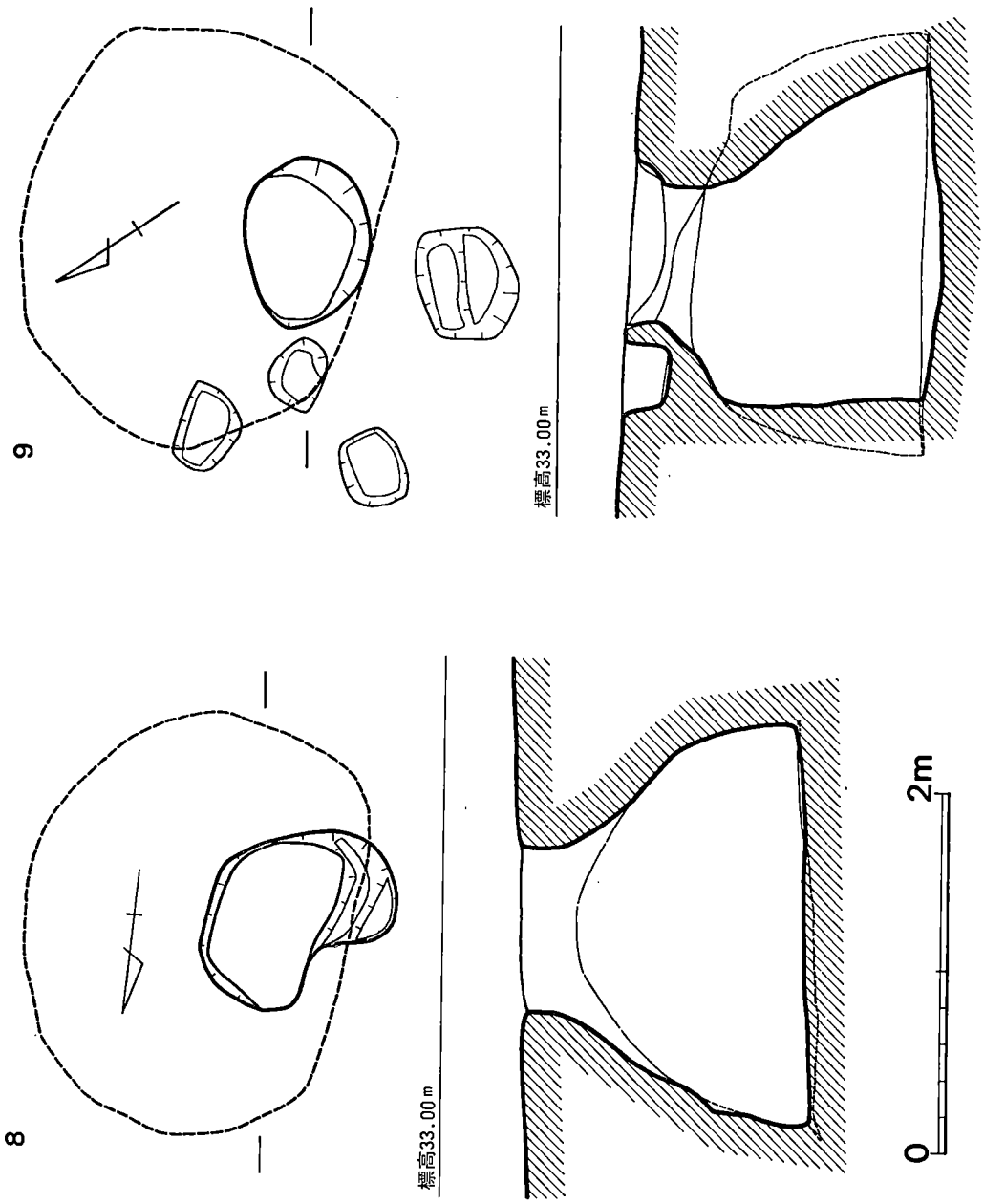
蓋形土器（第31図90）

つまみ部を欠く傘形を呈する蓋で，復原口径23㎝を測る。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は灰褐色を呈す。　（井上）

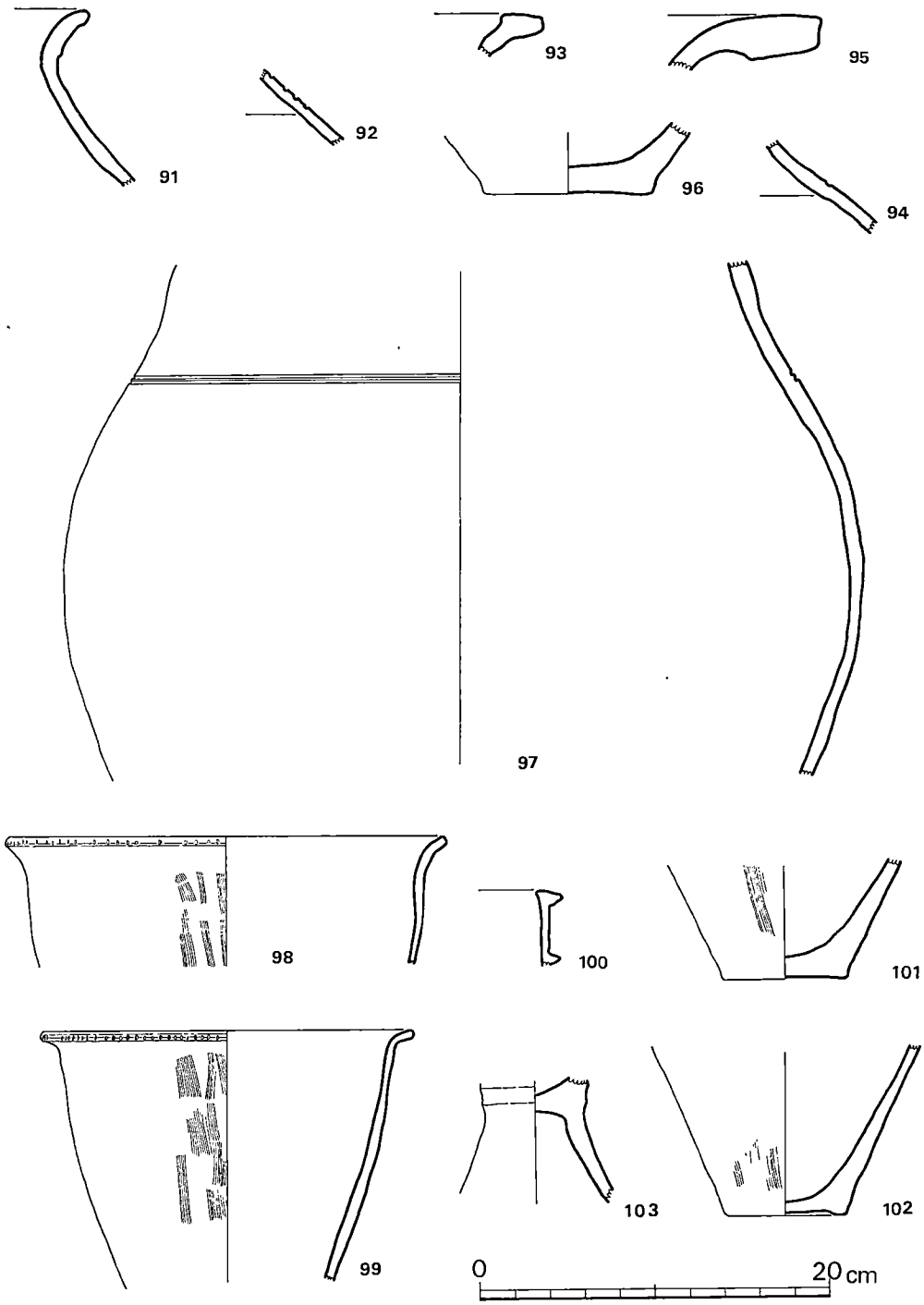
土製品（第32図）　土製紡錘車・土製円盤の他に敲石の小破片が出土した。1は土製紡錘車で完形品。径3.65㎝を測り，孔周辺より縁辺の方が厚みをもつ。淡黄褐色を呈し，焼成良し。重さ15.4ｇ。2は黄灰褐色を呈す甕形土器片を利用した土製円盤で径4.6㎝，厚さ0.5～0.8㎝，重さ18.5ｇ。　（木下）

≪**8号袋状竪穴**（第33図）　床面は西側が直線状をなす楕円形を呈する。床面径2.30ｍ×1.77ｍ，深さ1.55ｍを測るフラスコ状をなす竪穴である。入口は西側に片寄り不整方形をなし，狭い。壁面は西面が垂直的であるのに対し，内彎度が強い。土層堆積は全体に西側からの

傾斜をもっている。遺物は前期末の壺破片数点のみである。



第 33 図　8・9号袋状竪穴実測図 (1/40)



第 34 図　8・9 号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

出土遺物（第34図）

壺形土器（第34図91・92）

全て破片資料で，壺Bに属す。91の口縁部は有段状をなすａ類で，口縁部内外をヨコナデ，外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げた褐色を呈す精良な土器である。92は肩部の破片で，４条のヘラ描き平行沈線をめぐらしている。外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げた褐色を呈す土器で，焼成良好である。

≪**9号袋状竪穴**（図版18，第33図）　床面は胴張りの方形を呈する。床面径2.30*m*×1.92*m*，深さ1.92*m*を測る。入口は70*cm*×85*cm*と小さく極端に西側に片寄る。壁面は西面が垂直的である他は内傾度が強く，内面は箱形を呈す。

遺物は前期末の大形壺・甕・高杯等の破片資料と石庖丁１，磨石１が出土している。

出土遺物（図版52，第34・35図）

壺形土器（第34図93～97）

壺A（95～97）　全て破片資料である。95は口縁部の破片で，端部外面下に刻目を有す。96は底部の資料で，わずかに凹み気味の平底で内外をナデて仕上げている。外面褐色，内面暗褐色を呈す。97は頸部から胴部の資料で，胴部最大径45.5*cm*を測る。胴部は球形を呈し，頸部への移行はなめらかで，肩部には２条のヘラ描き沈線がめぐる。外面ヨコヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。色調は淡灰褐色を呈す。

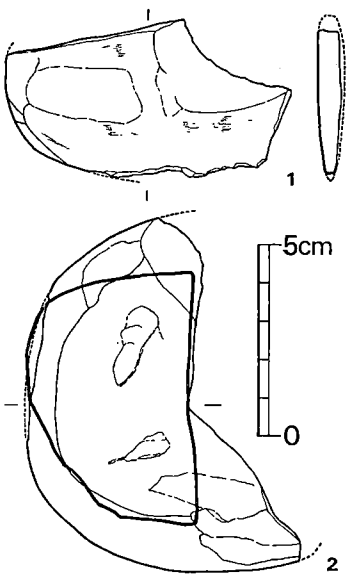
壺B（93・94）　口縁部と肩部の破片資料である。93は口縁部内面を肥厚させたａ類に属すもので，上面は平坦である。94は肩部に１条のヘラ描き沈線と四重の半円弧文がめぐる淡褐色を呈す作りの良い土器である。

甕形土器（第34図98～102）

甕A（98・99）　胴部上半の破片資料で，「く」字状に外反する口縁部と，その端部に刻目を有すａ類の甕である。口縁部の屈折が強い99に比べ98はゆるやかである。両者とも外面刷毛，内面ナデて仕上げた暗褐色を呈す土器である。

甕C（100）　口縁端部と口縁下に三角凸帯を付した甕で，内外ともナデて仕上げている。色調は赤褐色を呈す精良な土器である。

底部（101・102）　101・102とも凹み気味の平底であるが，102の凹みは顕著で，器肉も0.6*cm*と薄い。外面刷毛，内面ナデで仕上げている。色調は101が赤褐色，102は淡褐



第35図　９号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

色を呈す。

高杯形土器（第34図103）

ラッパ状に開く脚部の破片資料で，杯部に移行するくびれ部には凸帯がついたと思われる剝落がある。内外ともナデて仕上げた赤褐色を呈す土器である。（井上）

石　器（第35図）　1は暗茶褐色凝灰岩製の石庖丁片で表裏とも剝落している。体部に横方向の擦痕が走る。2は硬砂岩製の磨石破片。6.5*cm*と部厚く，体部は平坦になるようだ。（木下）

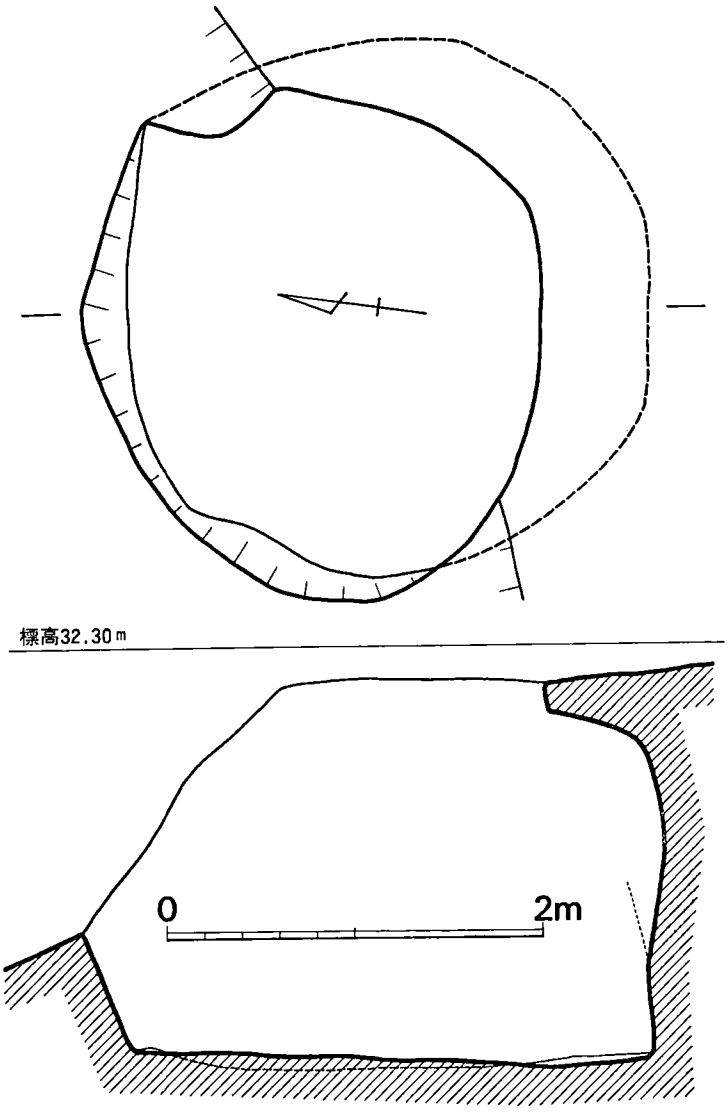
≪10号袋状竪穴（第36図）　D 4区崖面で検出されたもので，北側上半部は完全に欠失している。床面は円形を呈し，床面径2.78*m*×2.74*m*，深さ1.98*m*を測る。この地区で最も大きい竪穴である。壁の残る南側でみるかぎり，壁面は内傾度が強い。

遺物は前期末の完形小型壺1，他は甕の破片数点である。

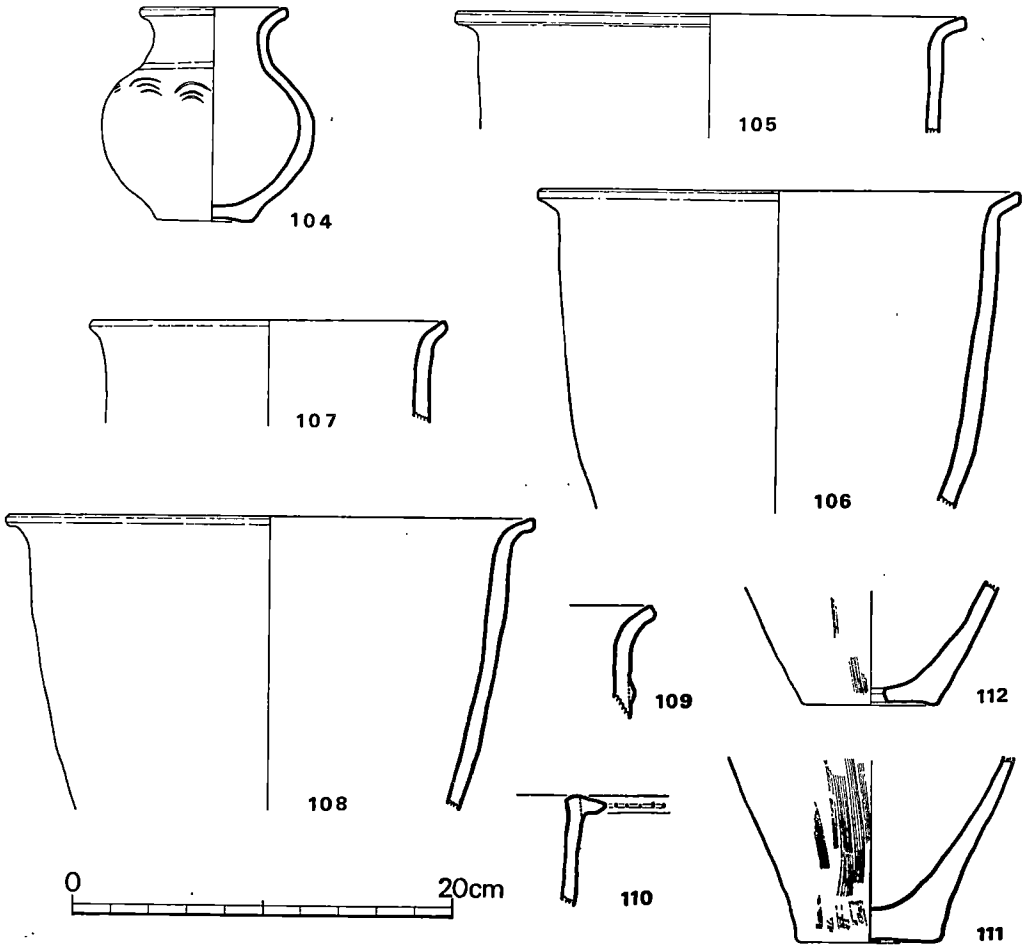
出土遺物（図版42，第37図）

壺形土器（第37図104）

極小形の壺Eに属す。口径7.8*cm*，器高11*cm*を測る完形品で，肩部には2条のヘラ描き平行沈線とその下に三重の半円弧文をめぐらしたa類の壺である。胴部は球形で，頸部は短かく，口縁部の外反は強く端部を丸くお



第 36 図　10号袋状竪穴実測図（1/40）



第 37 図　10·11号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

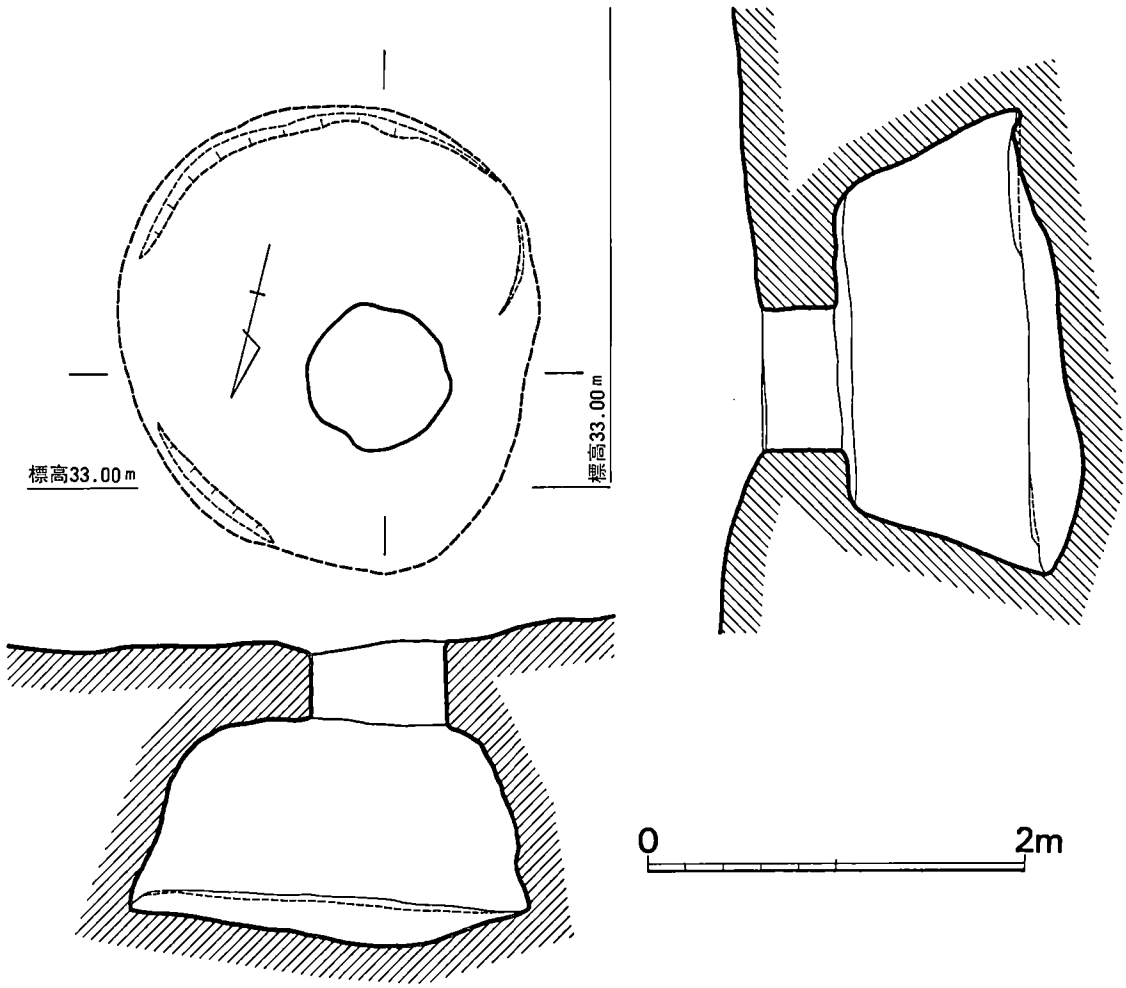
さめている。底部は凹み底の平底である。胴部はヨコヘラ，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデて仕上げた淡灰褐色を呈す土器である。

甕形土器（第37図105～109）

甕A（105～108）　全て口縁端部に刻目を有しないb類に属す胴部上半の破片資料である。大きさには大小あり，復原口径105が27㎝，106が25.5㎝，107が18.8㎝，108が27.8㎝を測る。口縁部の外反は107がゆるやかで短いのに対して，他は強く長い。全体に器面風化がみられ明瞭でないが，外面刷毛，内面ナデで仕上げている。色調は105がくすんだ褐色を呈す他は，全体に白ぼい淡褐色を呈す土器である。

甕B（109）　「く」字状に外反する口縁部とその下に三角凸帯を有す甕の破片資料である。器面の風化が著しいため，端部の刻目は不明である。色調は暗褐色を呈す。

≪11号袋状竪穴（第38図）　1号墳の周溝で入口部上面が若干削平されているが，ほぼ原形



第 38 図　11号袋状竪穴実測図 (1/40)

に近いものであろう。床面は円形を呈し，東側と西側の一部に幅約12cm，深さ約5cmの溝がめぐる。入口は小さく径約75cmの不整円形をなし，垂直に内部におりる。床面は中央に傾斜をもち，壁面の内傾度は強く，天井部への屈折も強い。断面逆台形状を呈する。

遺物は前期末の甕・甑破片数点と石庖丁1が出土したのみである。

出土遺物（図版53，第37・39図）

甕形土器（第37図110・111）

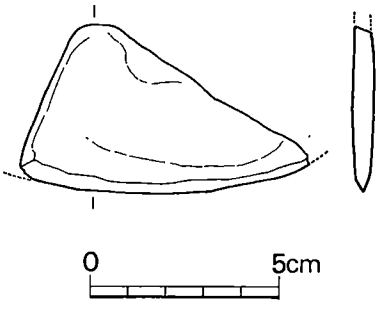
110は口縁端部に三角凸帯を付す甕Cに属す。内外をナデて仕上げた褐色を呈す作りの良い土器である。111は胴下半の資料で，外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈す。

甑形土器（第37図112）

底部付近の破片資料で，底部の穿孔は焼成後である。外面刷毛，内面ナデ，内底部には指頭

圧痕を残す。色調は淡褐色を呈す。　　(井上)

石　器（第39図）　砂岩質の石庖丁の刃部破片。刃部のカーブからすると大型の石庖丁になるだろう。薄手で，表裏とも磨かれていない。　　(木下)



第39図　11号袋状竪穴出土石器実測図 (1/2)

≪12号袋状竪穴（第40図）　入口部は1号墳の周溝で若干削平されている。床面は長方形を呈し，床面径1.78m×1.39m，深さ1.78mを測る。入口は55cm×40cmの長方形をなし，極めて小さい。壁面は北が垂直的に入口にのびるのに対して，内傾気味に立ち上り天井部へと強く屈折する。断面は箱形に近い台形状をなす。床面は平坦で，東壁中央部と，南西隅には径約25cm，深さ約20cmのピットが穿たれている。

遺物は前期末の完形甕3と壺・甕破片が若干出土した。他に，石核1，磨石1，土製紡錘車1，剝片2が検出された。

出土遺物（図版42・53，第41・42図）

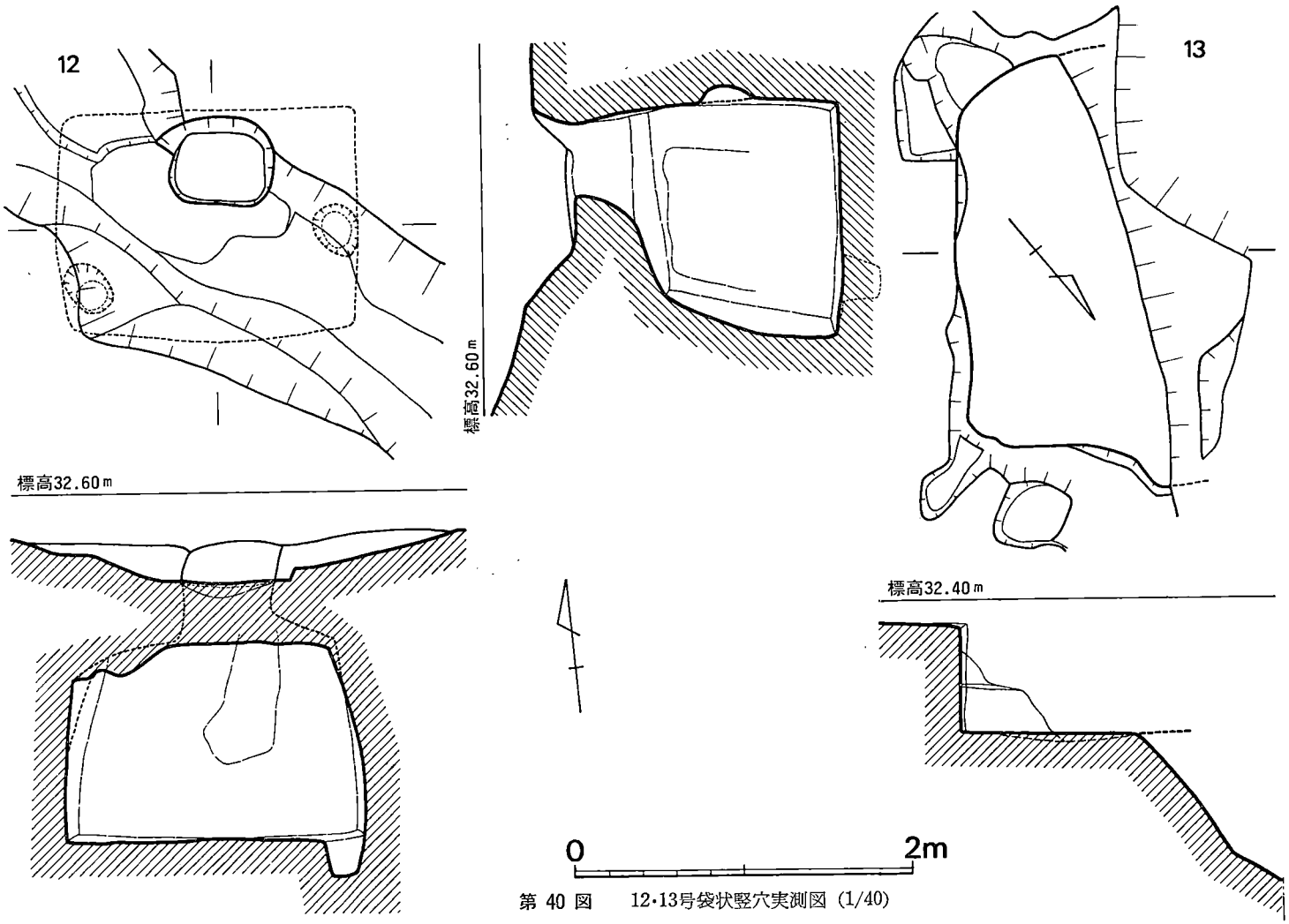
甕形土器（第41図113～117）

全て甕Aタイプで，口縁端部に刻目をもたないb類に属す。全体に口縁部の外反は強く，特に113，115の胴部の張りは強く球形を呈す。113は口径23.1cmを測る胴上半の資料で，内外とも風化が著しく調整は不明である。色調は淡黄褐色を呈す。

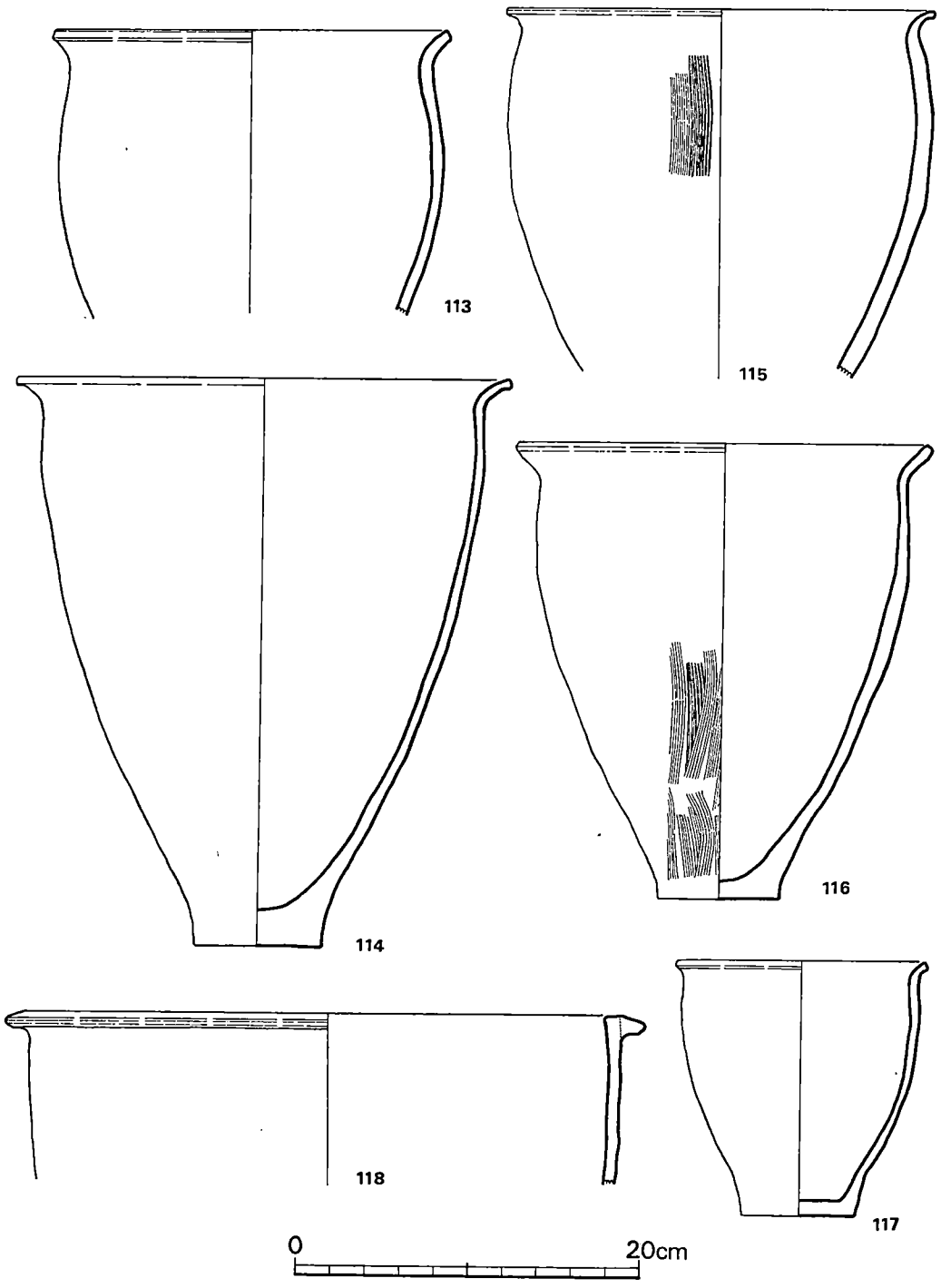
115は復原口径25cmを測る。口径部の外反が強く器肉が薄いのに対して，胴部は厚く球形を呈す甕である。器面は風化が進行していて明確でないが胴上半の一部に刷毛の痕跡を残している。114は口径28.6cm，器高32cmを測る甕である。体部の器肉を薄く仕上げているのに比べ底部の器肉は2cmと厚い。内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。116は口径23.8cm，器高25.9cmを測る。外面刷毛，内面ナデて仕上げた淡灰褐色を呈す土器である。117は口径14.5cm，器高14.5cmを測る小形の甕である。内外とも風化が著しく明確でないが外面の一部に刷毛の痕跡を残している。外面一部に煤の付着がみられる。色調は暗灰褐色を呈す。　　(井上)

石器・土製品（第42図）　1は縦形剝片で左辺に細かい調整痕がみられる。黒曜石製。2は黒曜石の角礫を利用した石核で3面から幅広の剝片を剝出している。打面調整は丁寧に行なわれている。重さ32g。3は黒雲母花崗岩製の磨石で完形品。径8cm前後と円に近く，厚さ3.4cm，重さ309g。4は土製紡錘車で径3.9cm，厚さ1.4cm，重さ24.2gの完形品。暗灰色を呈し硬質。他に石英片が出土している。　　(木下)

≪13号袋状竪穴（図版18，第41図）　D5区崖ふちで検出された竪穴で，上面と西側の大半を欠失している。残存する床面からして長方形を呈するものと思われる。床面は平坦で，壁面



第 40 図　12・13号袋状竪穴実測図 (1/40)



第 41 図　12･13号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

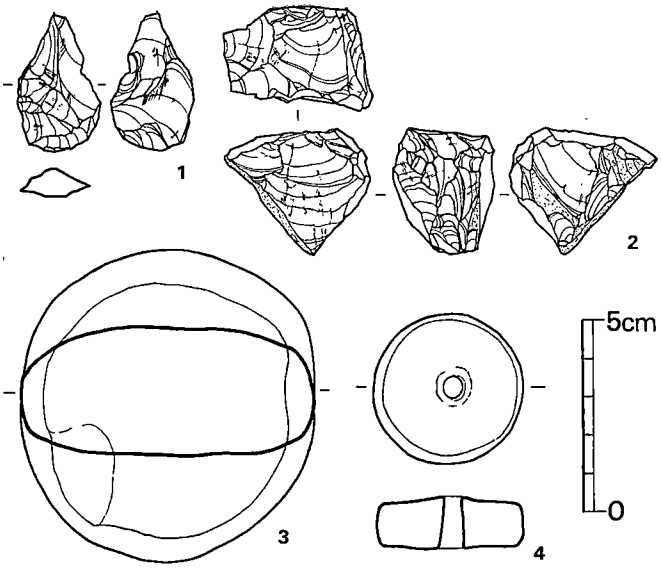
は垂直的である。

遺物は前期末の土器細片と太型蛤刃石斧1，磨製石鏃1が出土したのみである。

出土遺物（図版53，第41・43図）

甕形土器（第41図118）

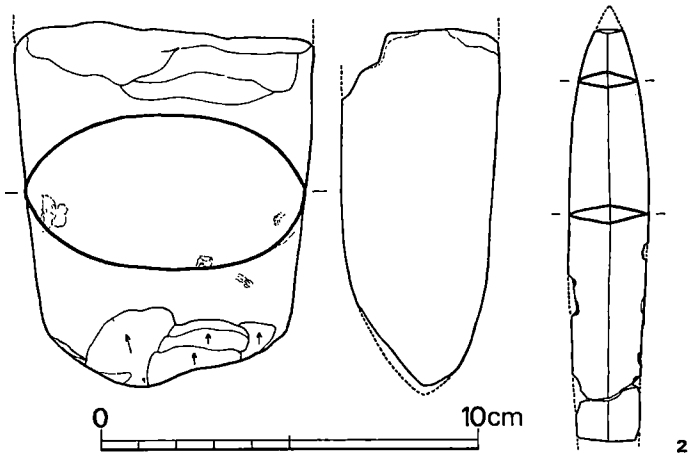
口縁端部に三角凸帯を付した甕Cの胴部上半の破片資料である。復原口径36.4*cm*を測る大形の甕である。内外ともナデて仕上げている。色調は外面淡褐色，内面灰黒色を呈す。　　（井上）



第 42 図　12号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

石器（第43図）　1は玄武岩製太形蛤刃石斧の刃部から胴部にかけての破片。刃部は使用による下方向からの剝落が著しい。重さ482*g*。2は磨製石鏃で先端と基部を欠損する。柳葉形を呈し，先端部から5*cm*程で最大幅をもち2.1*cm*を測る。体中央部には明瞭な縞が走り，断面は菱形，厚さ4.5*mm*。頁岩製。

（木下）



第 43 図　13号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

≪14号袋状竪穴（図版19，第44図）　床面は円形を呈する。床面径1.89*m*×2.08*m*，深さは上面が攪乱されているので明確でないが現存の深さ1.57*m*を測る。壁面は底面付近でわずかに内彎するのみで，直線的に入口部へとのびる。

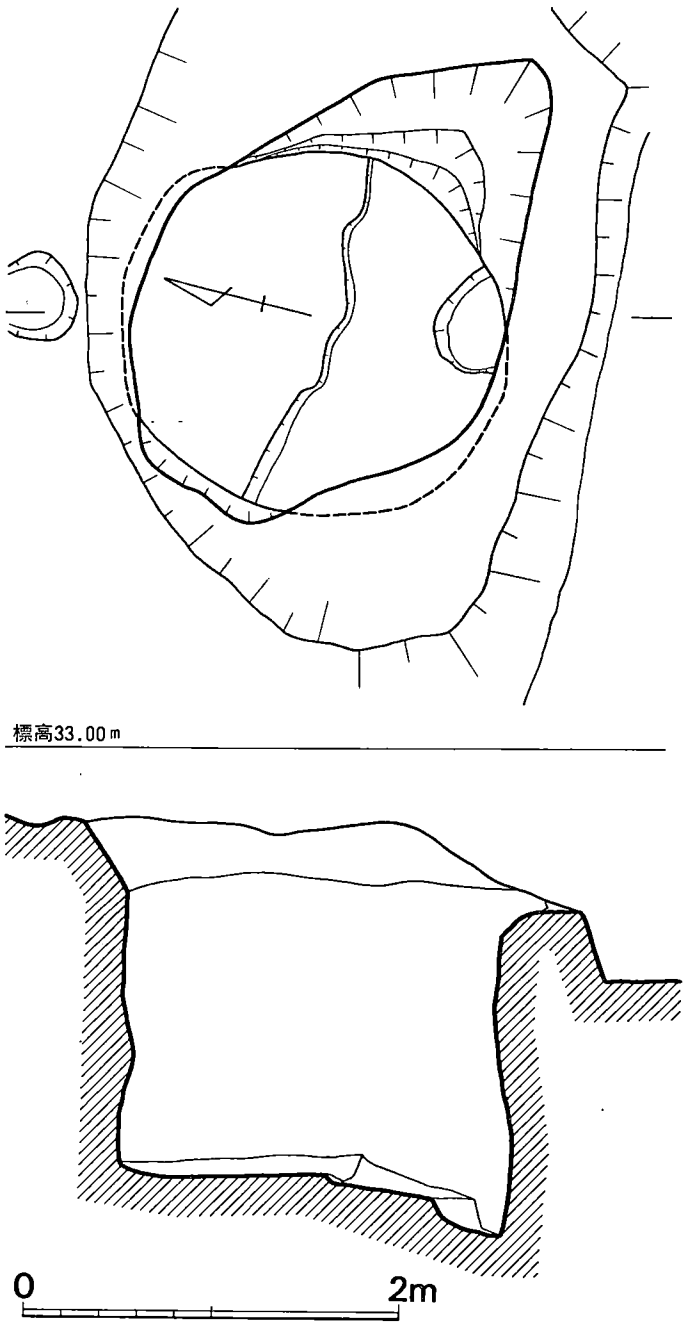
遺物は床面よりわずかに浮いた状態で，前期末の壺・甕・鉢が一括して多数出土した。他に，太型蛤刃石斧2，石核1，砥石1，石製円盤1が出土した。

出土遺物（図版42・43・53，第45～49図）

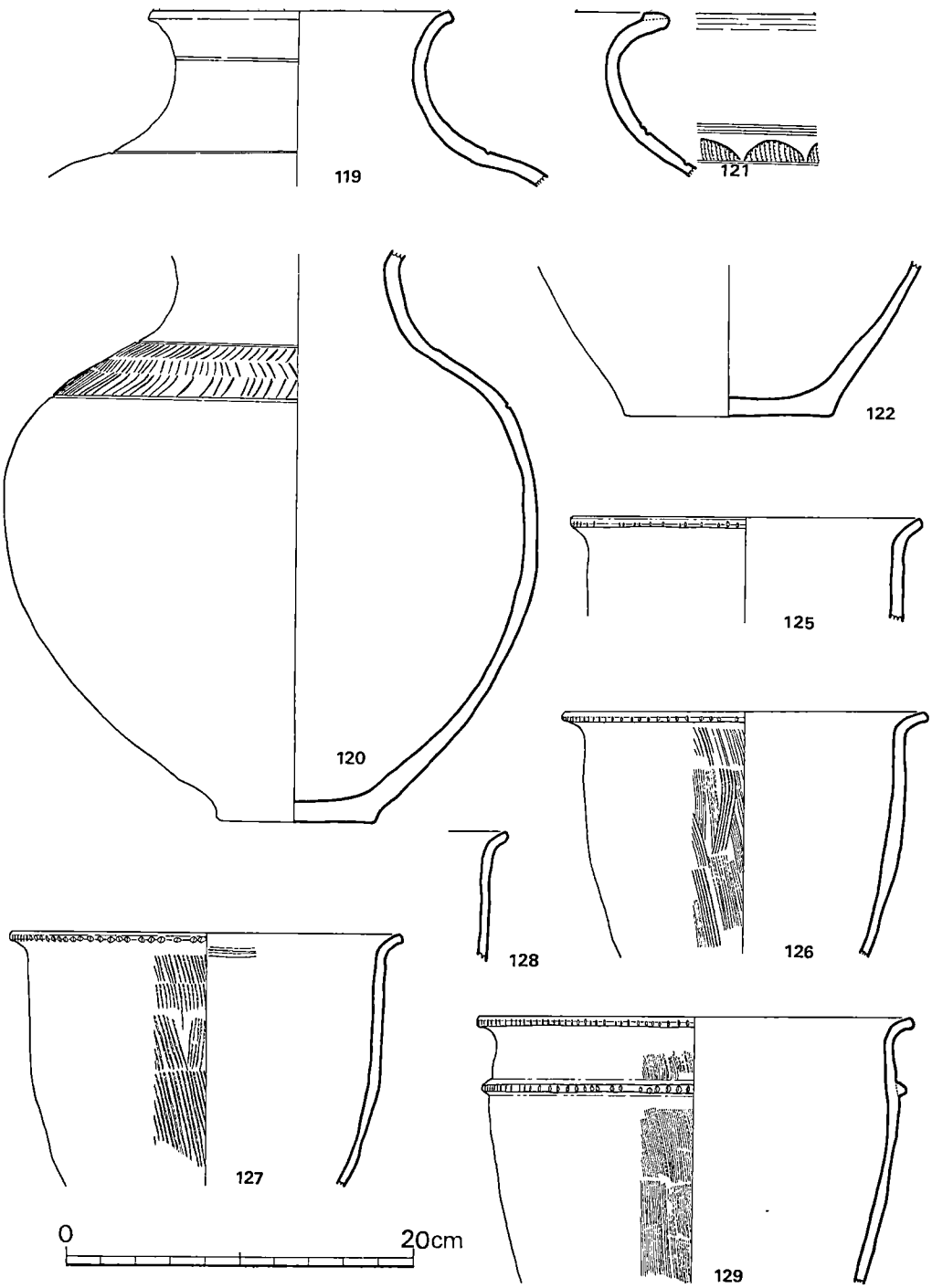
壺形土器（第45図119～124）

壺A（123・124） 123は胴部上半の資料で，口径49.2cmを測る。有段状をなす口縁部を有し，端部外面上下に刻目を付している。また，口縁部内面を肥厚させている。肩部には3条のヘラ描き平行沈線がめぐる。口縁部内外をヨコナデ，外面ヨコヘラ磨き，頸部内面は櫛状の刷毛のあと部分的にヘラ磨きしている。胴部内面はナデて仕上げている。色調は赤褐色を呈し，焼成は良い。124は口縁部付近の破片資料で，復原口径62cmを測る。口縁部内面を肥厚させた有段状をなす壺で，端部外面上下には刻目を付している。口縁部内外をヨコナデ，内外をナデで仕上げた淡褐色を呈す土器である。

壺B（119～122） 口縁端部内面を肥厚させたa類（121）と有段状口縁のc類（119）がある。119は復原口径17.6cmを測る肩部の張りが大きい壺である。肩部には1条のヘラ描き沈線がめぐ



第 44 図　14号袋状竪穴実測図（1/40）



第 45 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)

る。調整は器面が風化しているため不明。色調は淡褐色を呈す。120は底部と口縁部を欠く資料である。胴部は球形を呈し頸部への移行は強い。肩部には2条のヘラ描き沈線をめぐらし，その間をヘラ描き羽状文で埋めている。外面ヘラ磨き，内面ナデで仕上げた暗褐色を呈す土器である。121は口縁端部内面を肥厚させた壺の口頸部の破片資料である。肩部には2条のヘラ描き沈線，貝殻腹縁による半円弧文と有軸羽状文をめぐらしている。外面ヨコヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈す。122は胴下半の破片資料で，底径12cmを測る。器面風化のため調整不明，色調は赤褐色を呈す。

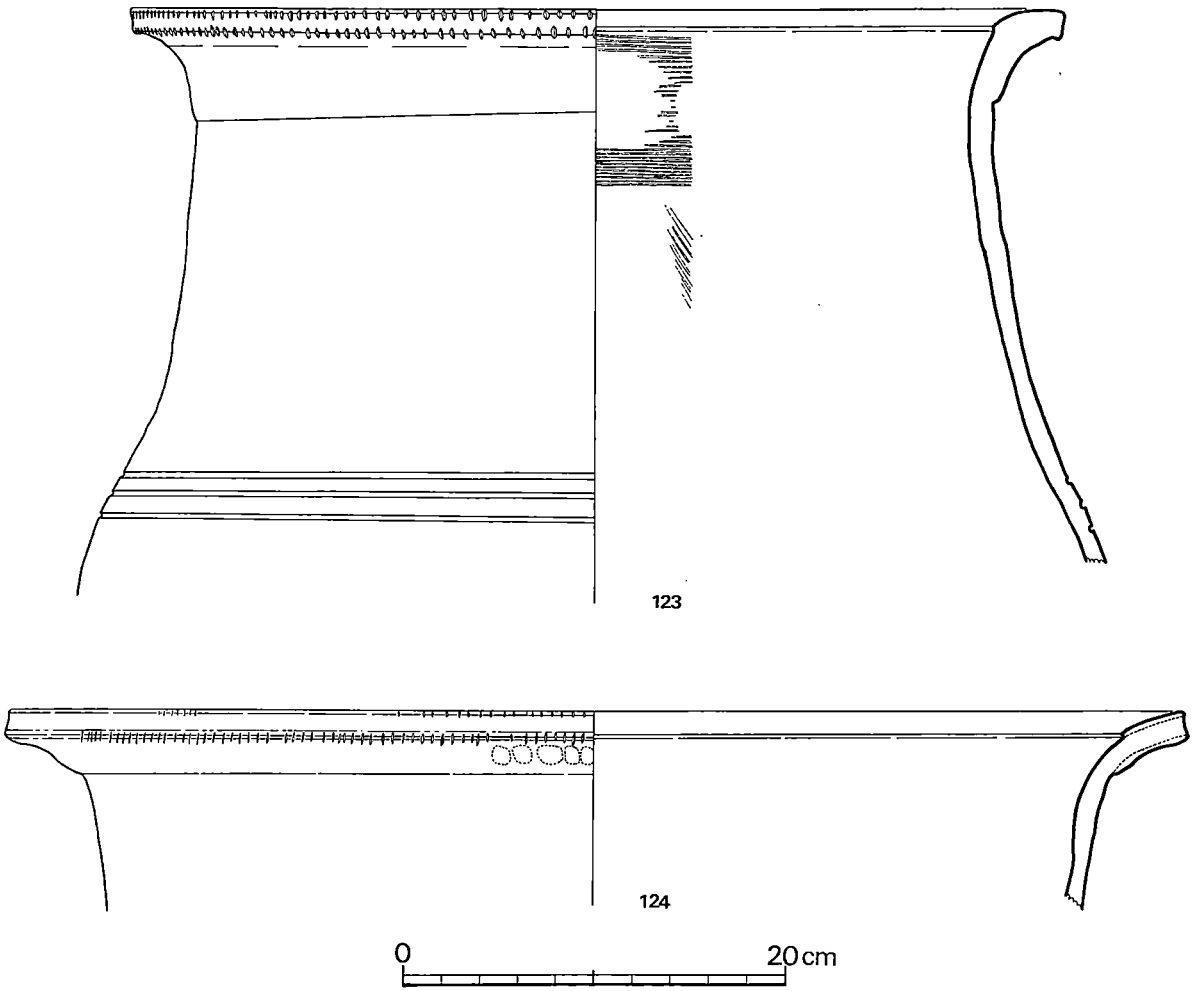
甕形土器（第45～48図125～137・140～143）

甕A（125～128）　128が不明の他は，口縁端部に刻目をもつa類に属す。125は復原口径20.2cmを測る。外面刷毛，口縁部内外はヨコナデしていて，内面は風化のため不明である。色調は淡褐色を呈す。126は復原口径21cmを測る甕で，口縁部内外はヨコナデ，外面刷毛，内面ナデて仕上げた暗褐色を呈す土器である。127は 復原口径22.4cmを測る。外面刷毛，口縁部外面ヨコナデ，口縁部内面は横位の刷毛，内面は風化のため不明である。胴部外面中位には煤の付着がみられる。色調は外面茶褐色，内面黄褐色を呈す。

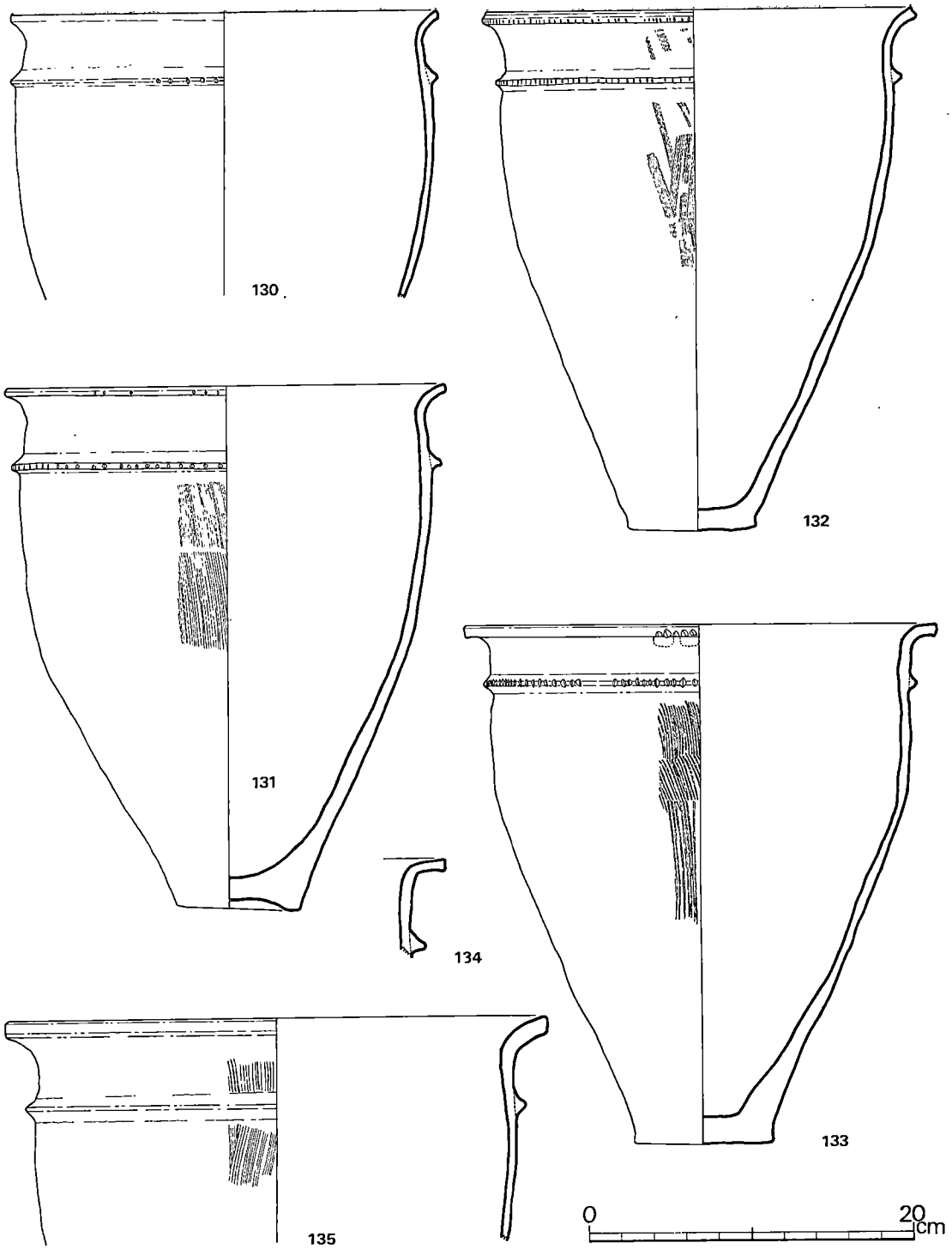
甕B（129～136）　「く」字状に強く外反する口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付す甕で，136のように2条の凸帯を付すものもある。また，口縁端部と凸帯に刻目をもつa類(129・130・131・132・133・136）と有しないb類（135）がある。129は口径25cmを測り，外面刷毛，口縁部内外をヨコナデ，内面をナデて仕上げている。色調は暗褐色を呈す。130は口径26cmを測る。内外とも風化が著しく不明である。色調は淡褐色を呈す。131は口径26.9cm，器高31.7cmを測る凹み底の甕である。外面上半刷毛，下半は二次焼成を受け器面が剝落している。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデらしい。胴部上半には煤の付着が著しい。色調は暗褐色を呈す。132は口径26.6cm，器高31.4cmを測る。外面刷毛，下半は二次焼成を受け 器面が剝落している。内面ナデ，口縁部内外はヨコナギで仕上げ，端部にはヨコナデによる凹みを形成する。色調は淡褐色を呈し，焼成は良好である。133は口径28.9cm，器高31.7cmを測り，調整は131と同様である。色調は外面上・中・下でそれぞれ異なり，上部が茶褐色，中部が黒褐色，下部が赤褐色を呈す。二次焼成時の火の受け方の違いであろう。内面は茶褐色を呈す。135は復原口径33.4cmを測り，端部には刻目をもたない淡褐色を呈す甕である。136は口径37.3cm，器高43.6cmを測る大形の甕である。外面刷毛，口縁部内外はヨコナデ，内面ナデで仕上げた赤褐色を呈す土器である。胴部外面には煤の付着が著しい。

底部（137・140～143）　底径約7.8cmのもの（137・140・141）と10.7cmのもの（143）とがある。外面刷毛のあとナデて仕上げた137・143と刷毛のままの140・141がある。内面は全てナデて仕上げている。他と比べ143の器壁は0.5cmと薄く仕上げられている。

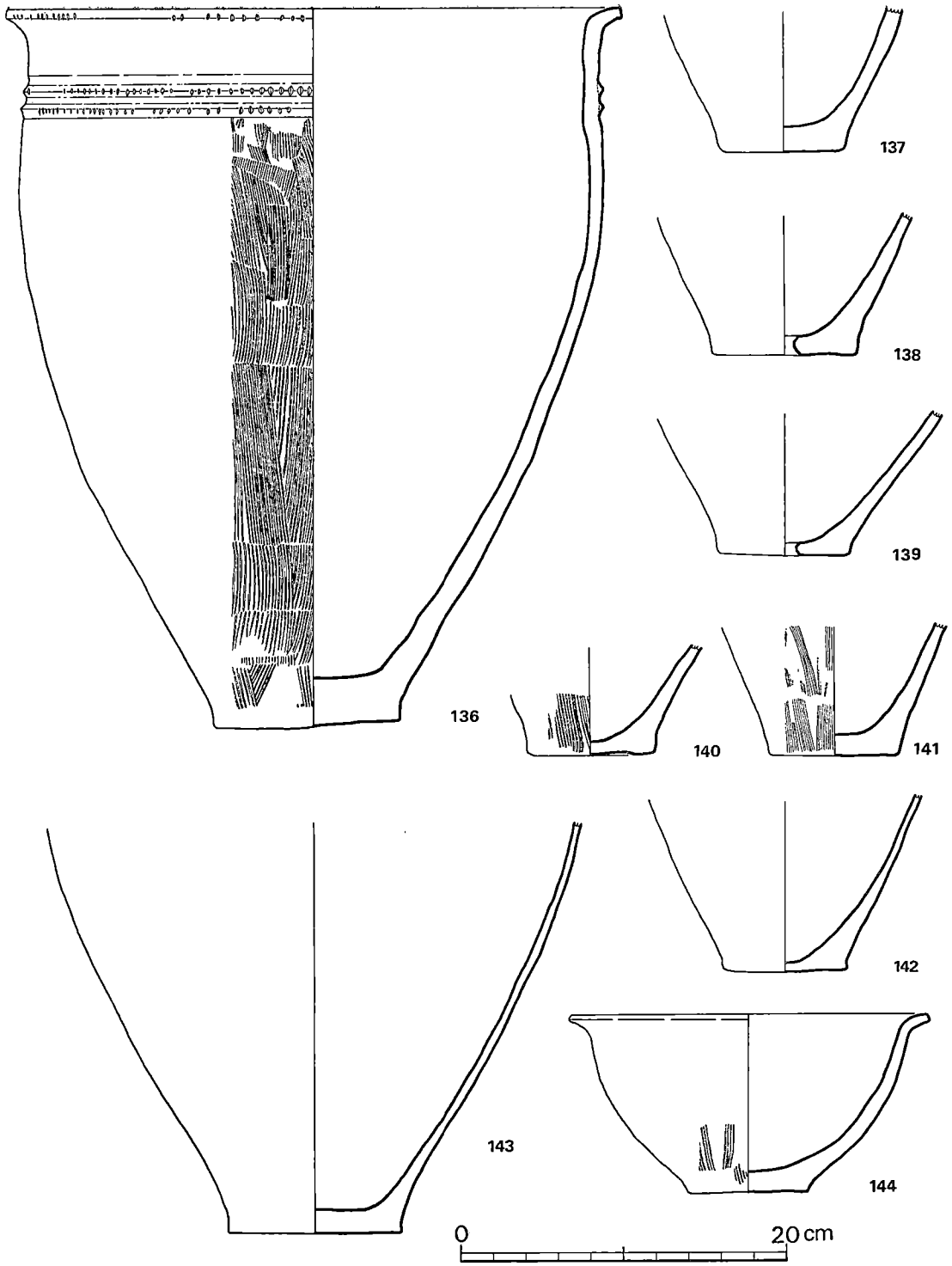
甑形土器（第48図138・139）



第 46 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)



第 47 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 3 (1/4)



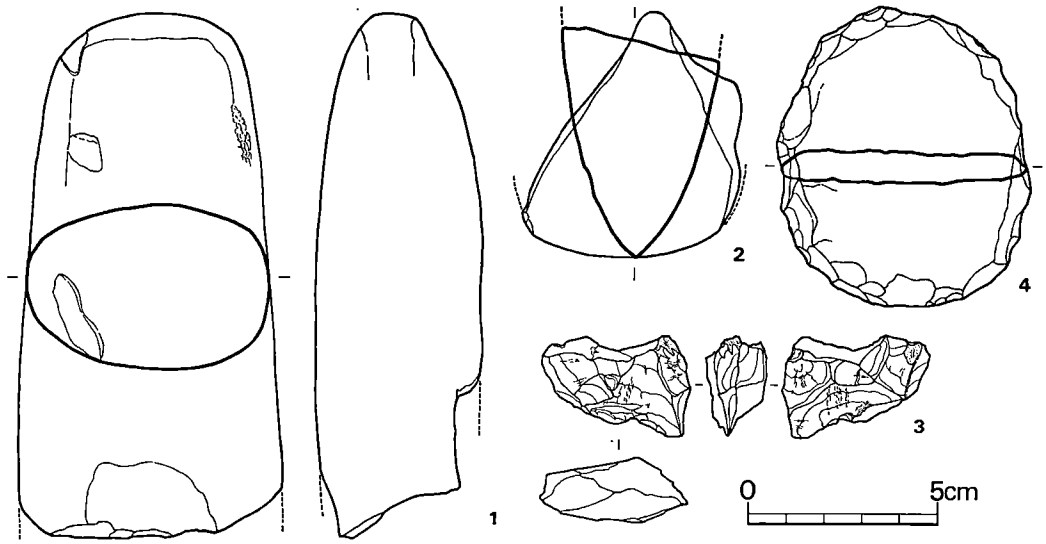
第 48 図　14号袋状竪穴出土土器実測図 4 (1/4)

底部付近の破片資料で，底部の穿孔は焼成後である。外面は風化が進み明確でないが，わずかに刷毛の痕跡を残す。内面はナデて仕上げている。色調は138が暗褐色，139が外面黄褐色内面暗褐色を呈す。

鉢形土器（第48図144）

口径22*cm*，器高10.7*cm*を測る「く」字状に外反する口縁部をもつ鉢で，Bタイプc類に属す。外面刷毛，口縁部内外をヨコナデ，内面ナデて仕上げた明褐色を呈す土器である。（井上）

石　器　（第49図）　1・2とも太型蛤刃石斧で1は頭部から胴部，2は刃部の破片。1は頭部近くに軽い稜が入る。両者とも今山産玄武岩。3は横に長いサヌカイト製の石核で表裏とも数回の剝離を行なっている。4は厚さ8.7*mm*前後と薄い円板状の礫に周辺から剝離を加えている。石製円盤で重さ69*g*。（木下）



第 49 図　14号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

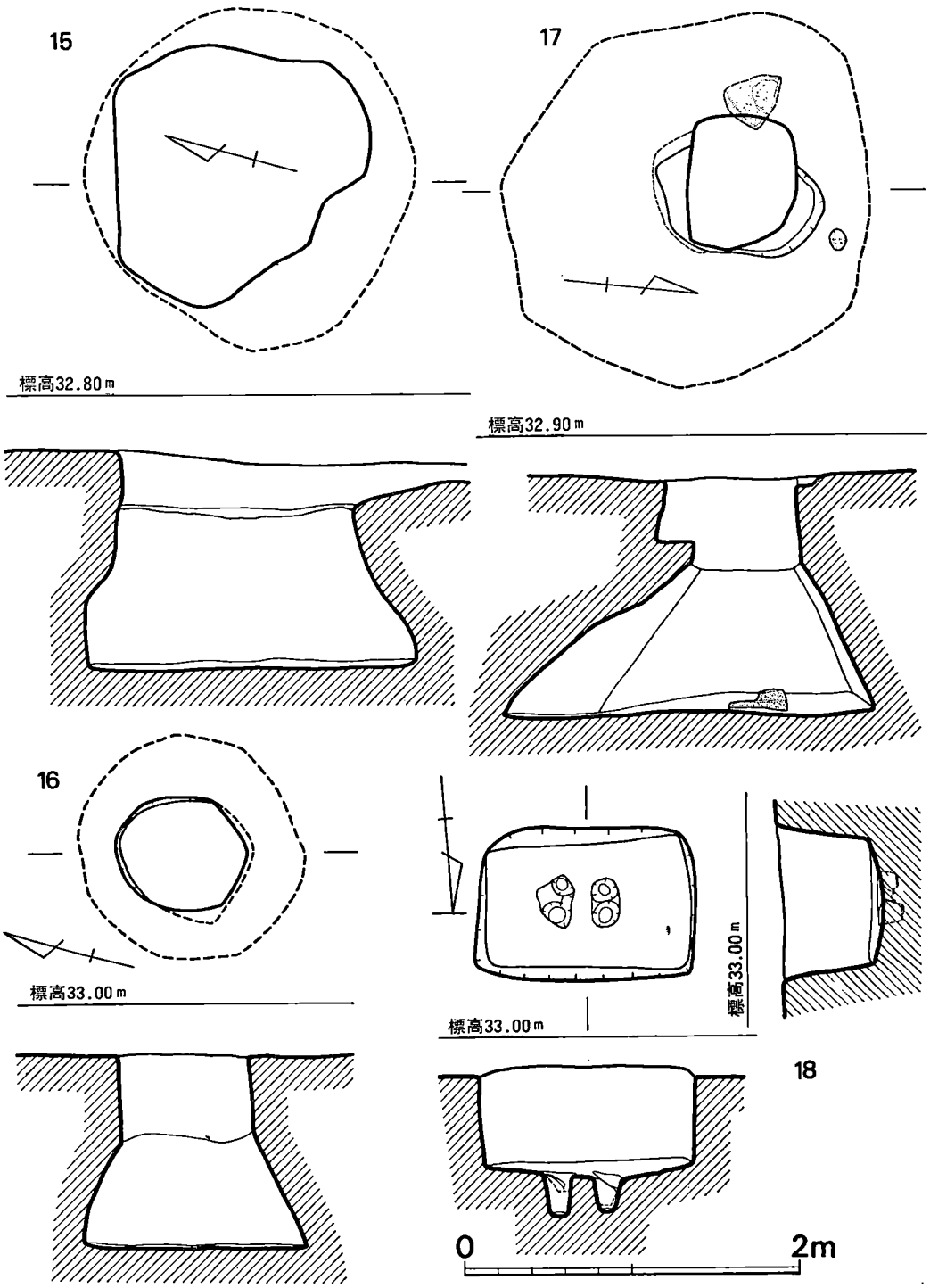
≪15号袋状竪穴（図版19，第50図）　1号墳周溝と4号住居跡に切られている竪穴である。床面は円形を呈し，床面径1.98*m*×1.96*m*，現存する深さ1.28*m*を測る。

遺物は前期末の壺・甕等の小破片数点，石庖丁2，砥石1のみである。

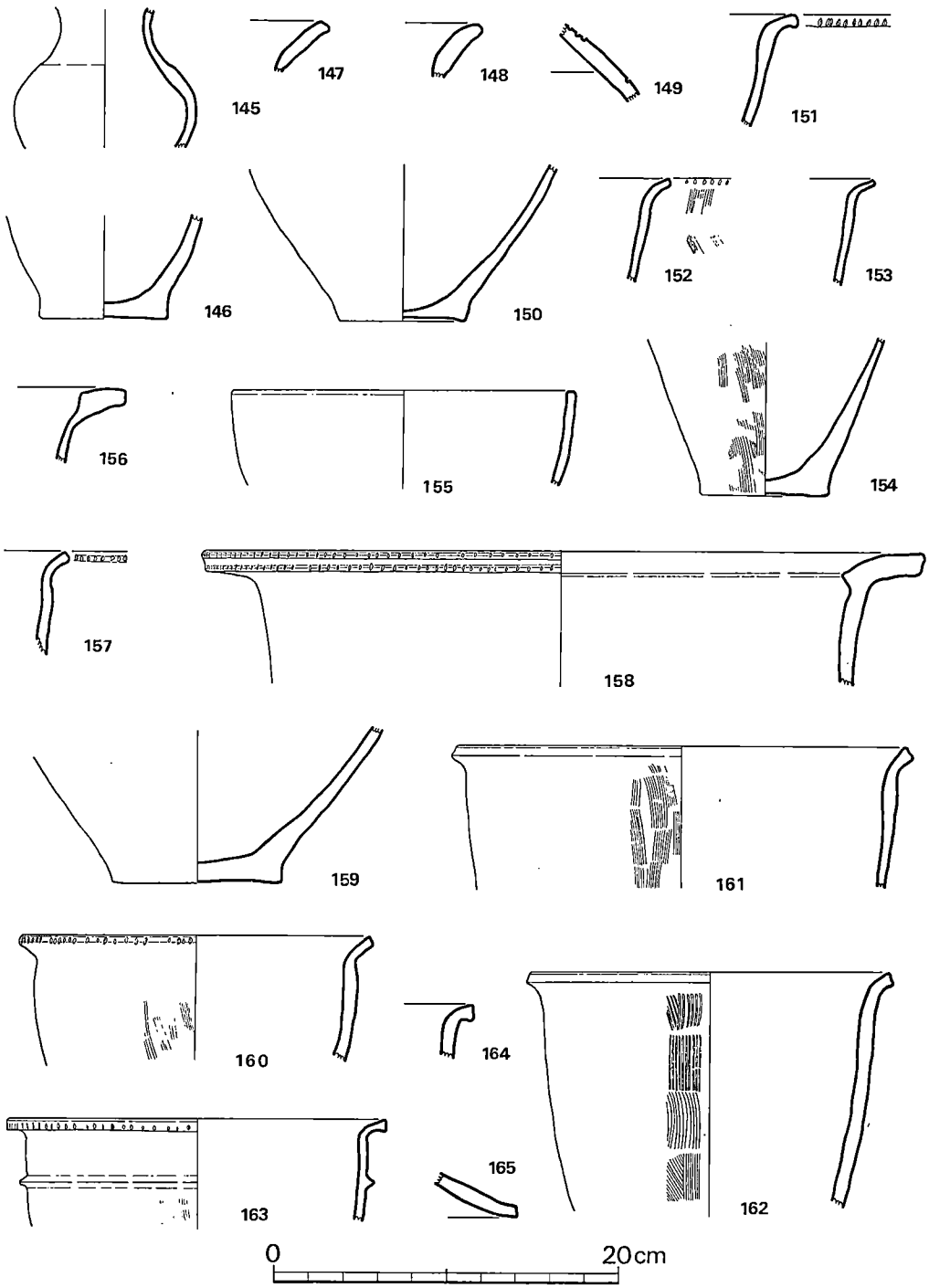
出土遺物（図版53，第51・52図）

壺形土器（第51図145～150）

壺B（147～149）　口縁部（147・148）と肩部（149）の破片資料で，147・148は有段状口縁を有すc類に属す。149は肩部に3条のヘラ描き平行沈線とその下に有軸のヘラ描き羽状文をめぐらしている。



第 50 図　15～18号袋状竪穴実測図 (1/40)



第 51 図　15・16・17号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

壺E（145・146）　145は口縁部と底部を欠き，146は胴上半を欠く破片資料である。145は肩部にヘラ描き沈線がめぐり，胴部は球形を呈す極小形の壺である。146は胴部に比して底部が大きく，7.3cmを測る。内外ともナデて仕上げている。色調は145が淡黒色，146が明赤褐色を呈す。

底部（150）　復原底径7.3cmを測る胴下半の破片資料である。内外ナデ仕上げで，外面橙褐色，内面淡茶褐色を呈す。壺CかDの底部であろう。

甕形土器（第51図151～154）

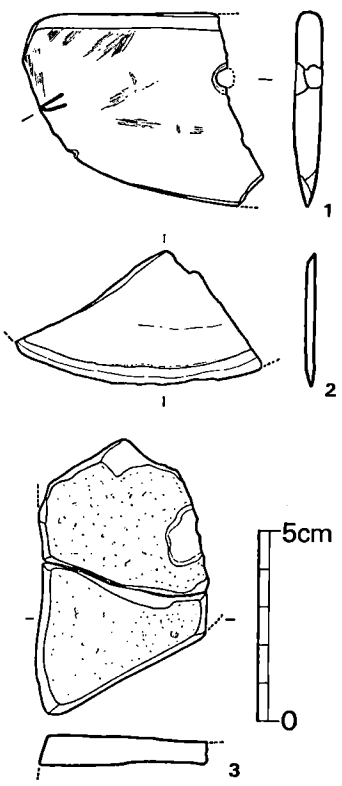
甕A（151～153）　口縁部付近の破片資料で，刻目を有すa類（151・152）と有しないb類（153）がある。152・153は特に器壁が薄く仕上げられていて，153の口縁端部はわずかにつまみ上げられている。

底部（154）　底径7.4cmを測る。底面中央部がわずかに凹む底部で，外面刷毛，内面ナデて仕上げられている。色調は明褐色を呈す。

鉢形土器（第51図155）

直口する単口縁の鉢で，復原口径19.8cmを測る。Hタイプに属す。内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調は外面明橙褐色，内面淡黒色を呈す。

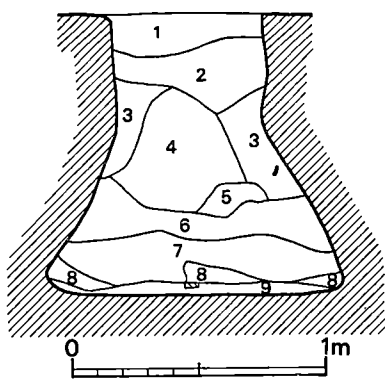
（井上）



第52図　15号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

石　器（第52図）　1・2は石庖丁の破片，1は硬砂岩製で厚さ7mm。左縁から4cmほど刃遣しを施こしていることが注意される。背縁をもち稜が入る。全体は丁寧な磨き。一方，2は3mm弱と薄手であるが，刃部周辺の磨きのみが丁寧である。砂岩製。両者とも外彎刃。3は砂岩製の砥石破片で2つに割れている。　（木下）

≪16号袋状竪穴（図版21，第51・53図）　台地の頂部にあたるD5区の東南部に位置し，上縁での平面形は楕円形を呈しており，長径0.77m，短径0.63mを測る。上縁から垂直に約0.5m下位あたりから，円錐形をなしながら深さ1.13mの床面に至り，所謂フラスコ状の典型を呈す。保存状態の良好な袋状竪穴であると言えよう。床面は直径1.32mの円形プランである。



第53図　16号袋状竪穴土層断面図（1/30）

土層名

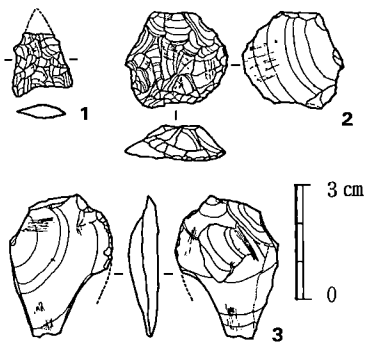
1. 暗茶褐色土層（石粒を含み硬質）
2. 明黄褐色土小ブロック混り暗茶褐色土層
3. 明黄褐色土大ブロック混り黒茶褐色土層
4. 明黄褐色土小ブロック混り暗茶褐色土層（2に比べ硬質）
5. 4よりも軟質で更に黒っぽい
6. 黒色土層（軟質）
7. 明黄褐色土層
8. 淡黄粘質土層（軟質）
9. 茶褐色粘質土層

出土遺物（第54図）

壺形土器片等が出土しているが，細片が多い。石鏃1，スクレイパー2も出土した。

（小池史哲）

石　器（第54図）　1は漆黒の黒曜石製の凹基無茎式石鏃で，先端部を欠損するが有肩鏃である。縦長剝片を利用し，打撃点は先端方向。2は幅広の剝片を利用し，表面は比較的小さな剝離を加えた後，下端に二次加工を加え刃部を形成する掻器，長さ2.5*cm*，幅2.6*cm*と方形に近く，厚さは0.9*cm*，重さ5.4*g*を測り黒曜石製。3は縦長剝片を用い，薄い縁辺に二次加工を加え刃部を形成する削器。黒曜石製で長さ3.7*cm*，重さ4.9*g*。他に黒曜石の原石が出土している。（木下）



第54図　16号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

≪**17号袋状竪穴**（図版21，第50図）　床面は円形を呈する。床面径2.18*m*×2.11*m*，深さ1.35*m*を測る典型的なフラスコ状を呈す竪穴である。壁面の内傾度は強く，南壁は特に強く長い。入口部は北側に偏し，段違いのテラスをもつ。土層堆積の状態は5層以下がほぼ水平に堆積しているのに対して2～4層には左右への傾斜がみられる。

遺物は前期末の壺・甕の破片多数と石庖丁1，打製石鏃3，スクレイパー1，土製紡錘車1，剝片1が出土している。他に，床面から白色粘土塊2個と，イネ・マメ・ドングリの炭化種子がかなり検出された。

出土遺物（図版53，第51・55図）

壺形土器（第51図158・159）

壺A（158）　復原口径41.6*cm*を測る口縁部付近の破片資料である。口縁端部内面を肥厚させた壺で，端部外面上下に刻目を付している。内外ともヨコナデて仕上げた淡褐色を呈す焼成良好の土器である。

底部（159）　底面がわずかに凹む平底で，底径9.7*cm*を測る。器面の風化が著しく調整不明である。色調は明褐色を呈す。壺Bの底部であろう。

甕形土器（第51図160～164）

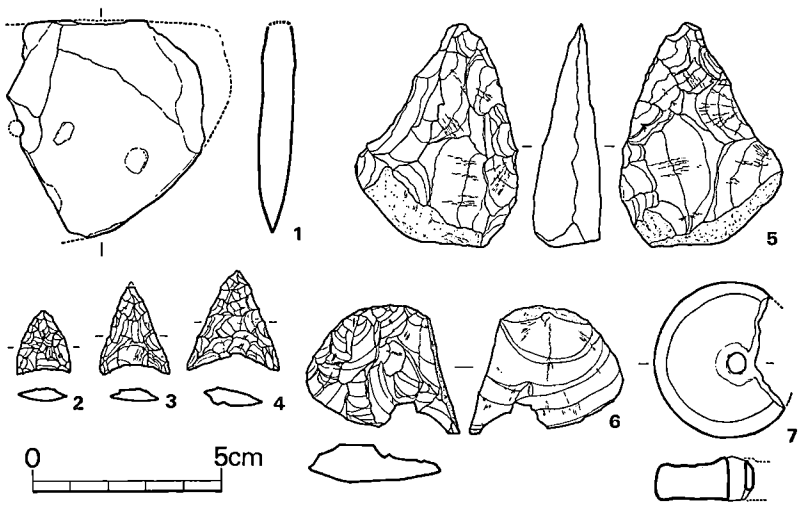
甕A（160～162・164）　口縁端部に刻目をもつa類（160）ともたないb類(161・162・164)がある。全て胴上半の破片資料である。復原口径160が20.4cm，161が26.8cm，162が21.2cmを測る。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は160が外面暗灰褐色，内面淡褐色，161・162が淡褐色を呈す。

甕B（163）　胴上半の破片資料で，復原口径21.8cmを測る。口縁部の外反は強く，口縁下の凸帯の刻目はまばらである。外面刷毛，口縁部内外をヨコナデ，内面はナデて仕上げている。色調は暗灰褐色を呈す。

蓋形土器（第51図165）

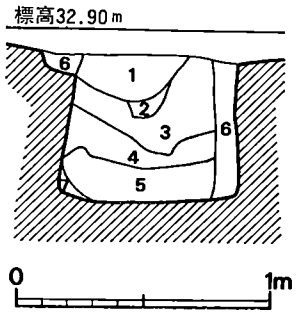
口縁部付近の破片で，傘形をなす蓋であろう。内外をナデて仕上げた淡褐色を呈す土器である。（井上）

石器・土製品（第55図）　1は凝灰岩製の外彎刃石庖丁の破片で，体中央部が肥厚し0.8mmを測る。背縁が部分的に残り，刃部は鈍い。幅5.7cm，重さ29.7g。2～4は石鏃でいずれも凹基無茎式に属す。2は長さ17.7mm，幅14.2mm，厚さ3.3mm，重さ0.55gで，4は長さ28.6mm，重さ1.6gを測る完形品。2が黒曜石で3・4はサヌカイト製。5は安山岩製の削器。横長の剝片を利用し，一側縁に交互剝離により刃部を形成する。下端に自然面を残す。長さ5.8cm，厚さ1.8cm，重さ38g。6は3.5cmほどの黒曜石角礫から剝出された剝片で，表面には細長い剝離痕が多くみられる。7は1/3を欠損する土製の紡錘車で，径4cm，厚さ1.1cm。孔周辺が肥厚する。茶褐色を呈し焼成は良好。（木下）



第55図　17号袋状竪穴出土石器・土製品実測図（1/2）

≪**18号方形竪穴**（図版22，第50・56図）　C６区の北部に位置する小形の竪穴で，上縁は長辺1.3*m*，短辺0.9*m*の長方形プランを呈す。上縁から床面にかけては垂直に近い傾斜に掘り込まれており，床面は長辺1.25*m*，短辺0.73*m*を測る。床面から深さ10～20*cm*に掘り込まれたピットが２対検出できた。竪穴内の堆積土は一様で，遺物は何ら出土していない。　（小池）



土層名

1. 漆黒色土層（硬質）
2. 明黄褐色土粒子混り漆黒色土層
3. 明黄褐色土粒子混り灰黒色土層
4. 明黄褐色土粒子混り灰茶褐色土層
5. 灰黒色土層
6. 明黄褐色土ブロック混り茶褐色粘質土層
7. 明黄褐色土層（硬質）

第56図　18号袋状竪穴土層断面図（1/30）

≪**19号袋状竪穴**（図版22・23，第57図）　C６区の中央部に位置し，上縁部の西側を中世の柱穴様ピットによって切られているが，比較的保存状況の良好な袋状竪穴である。上縁は長径1.35*m*，短径1.2*m*の不整円形を呈す。垂直あるいはややすぼまりながら約0.3*m*下がる。周壁は，約30°の円錐形をなして約１*m*下がり，更に下位は垂直で円筒状をなす。床面までの深さは2.1*m*を測り，床面は3.1～3.2*m*の直径を有する円形プランを呈する。

堆積土を観察すると，上縁からの深さ1.5*m*位で，明黄褐色土が全面に拡がっており，この土の中に遺物の出土がみられない状況があった。この土の下位には上位と同様黒色土が堆積しており，内壁の崩壊に伴う二次的な床面を形成したものと考えることが許されよう。（小池）

出土遺物（図版44・45，第58～60図）

壺形土器（第58図166～171）

壺A（166・169・170）　166は口縁部を肥厚させ内面に段を作る壺の破片資料で，口唇部上・下端に刻目を施こす。口縁部から頸部にかけて緩い段をなす。内外ともヨコナデ仕上げ。169・170はいずれも底部で径11～15*cm*を測る。器壁は厚く堅固で，特に170の底部は2.9*cm*と厚い。内面は細かい刷毛ナデ，外面は刷毛のあとナデ仕上げ。色調は全て淡褐色を呈す。

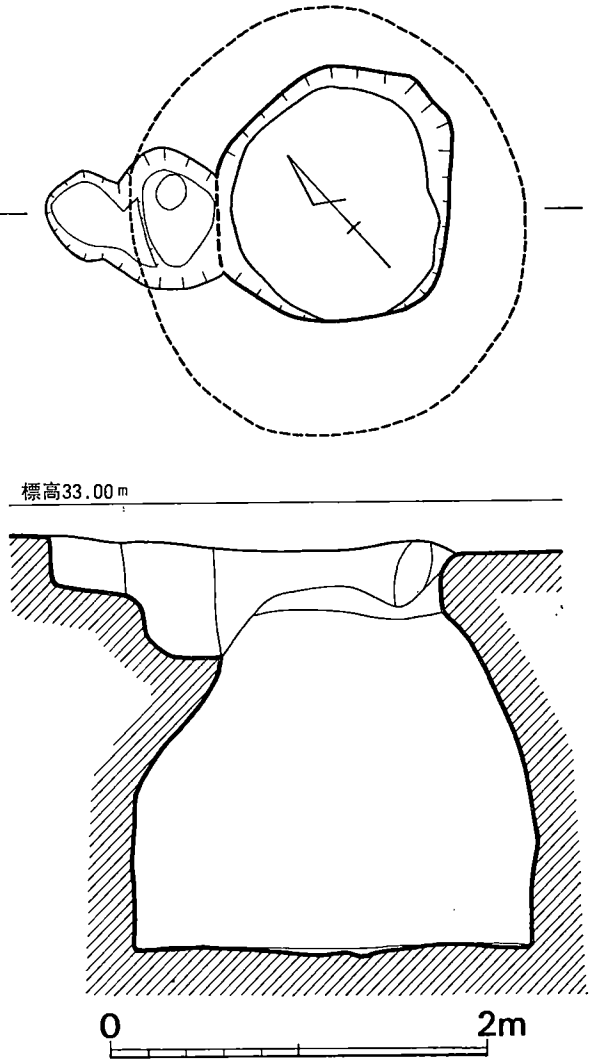
壺B（171）　下面がやや凹み気味の底部で胴上半を欠失する。内面ナデ，外面には粗い研磨を施こす。色調は淡黄褐色。

底部（167）　壺C・Dタイプに属する底部で，下面を凹ませている。内面ナデ，外面には研磨を施こす。色調は淡褐色。

甕形土器（第58図174～177，第59図178）

甕A（174～178）　口縁端部に刻目をもつａ類（174～176）と，もたないｂ類（177・178）

がある。174は口径23.7cmを測る甕で，刻目は口唇部下端に限られ，上端は横ナデによって角張る。内面ナデ，外面刷毛仕上げ。外面には煤が認められ，内面にも黒い附着物がある。175は口径23.6cmを測る。内面ナデ，外面縦位刷毛仕上げの甕である。口唇部上端はヨコナデされ角張り，刻目は下端に限られる。内面ナデ，外面刷毛仕上げ。胴上半に煤の付着がみられ，その部分を境に色調が異なる。175は内面ナデ，外面刷毛仕上げの甕で，口径23.8cmを測る。胴上半に煤の付着がみられる。177は胴部にかけてふくらみ他とはやや趣きを異にする甕である内面ナデ，外面刷毛仕上げ。色調は淡褐色。178は口径23.2cmを測る。内面ナデ，外面刷毛仕上げの甕である。内面には黒い付着物がみられる。外面は摩耗していて刷毛は消えかかっている。

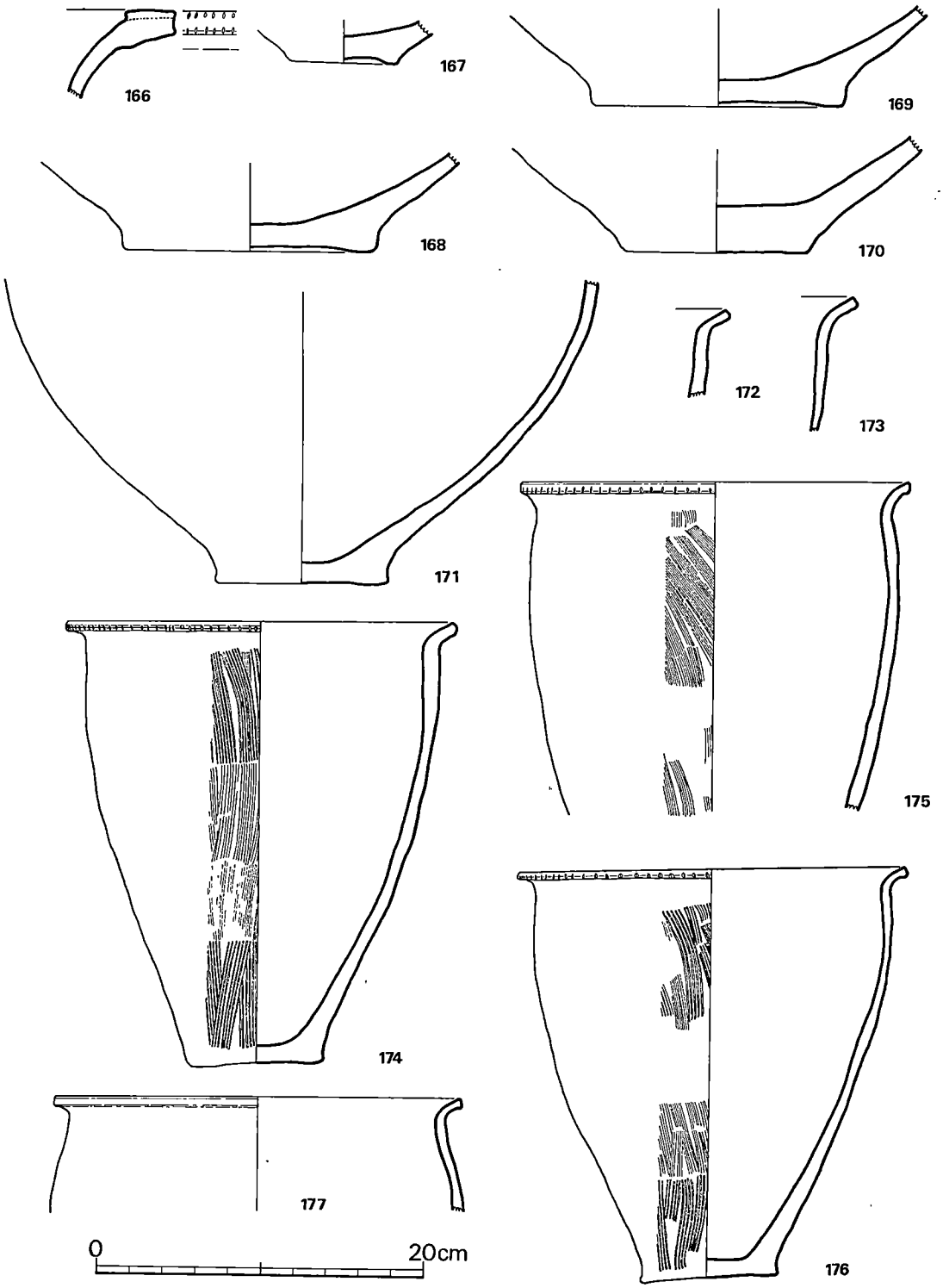


第57図　19号袋状竪穴実測図（1/40）

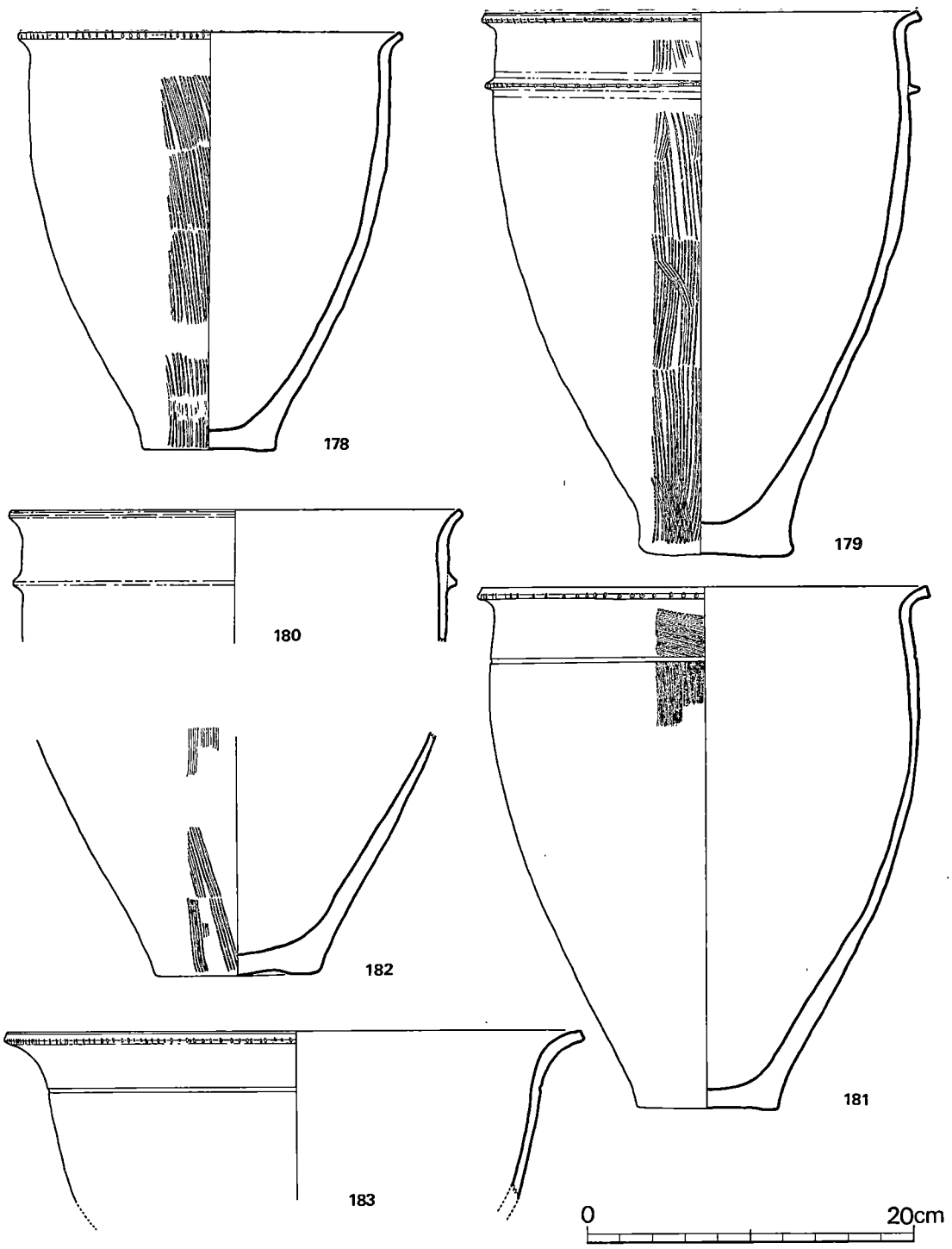
甕B（179・180）　口縁端部と口縁部下の凸帯に刻目を有するa類（179）と，有しないb類（180）がある。179は口径26.8cmを測り，口縁部は強く外反する。口唇部上端はヨコナデされ角張り，刻目は下端に限られる。内面ナデ，外面粗い刷毛仕上げ。色調は褐色。180は口縁部がゆるく上方に外反する甕で，内外とも剝落が激しく詳細は不明。色調は淡褐色。

甕D（181）　口径27.2cmを測る甕で，外面には非常に細かい刷毛ナデを施こす。口唇部上端はヨコナデされ角張り，刻目は下端に限られる。沈線は浅くシャープである。色調は淡灰褐色。

底部（182）　下面が一部凹む，外面刷毛仕上げの底部で，内面には黒い付着物がみられる。色調は明褐色。



第 58 図　19号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



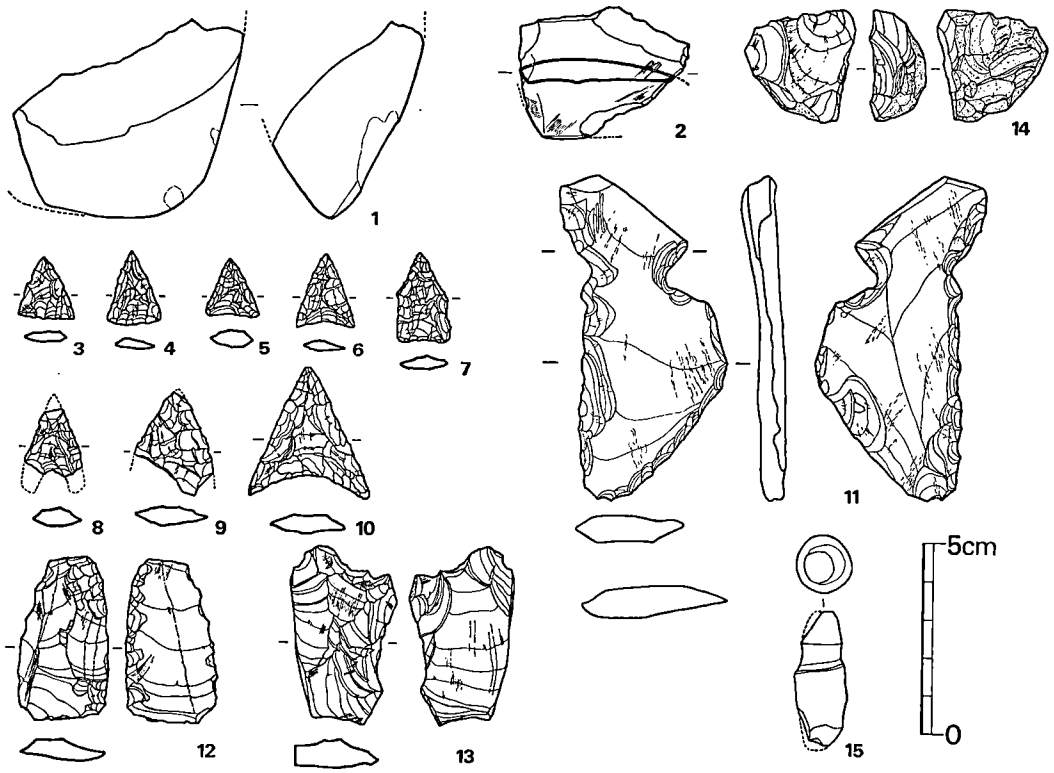
第 59 図　19号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

鉢形土器（第58図172・173，第59図183）

鉢B（172・173）　2点とも小破片資料で，外面は丁寧にナデられる。色調は淡褐色。

鉢E（183）　口径34.8*cm*を測る鉢で，内外面とも丁寧にナデ仕上げされる。口唇部上端はヨコナデされ角張り，刻目は下端に限られる。沈線は浅くシャープである。胎土・焼成とも良好。（石橋）

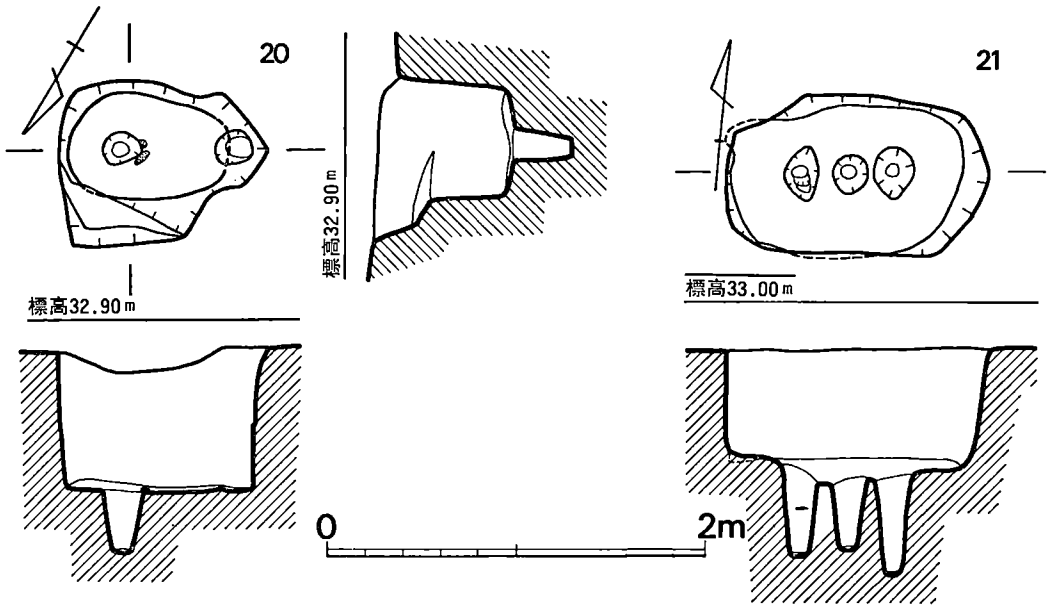
石　器（第60図）　1は蛤刃石斧の刃部破片で，玄武岩質の石材を用いる。2は粘板岩製の磨製石斧の表皮破片。斜方向の条線が走り，左辺に軽い稜が入いる。3～10はいずれも無茎の打製石鏃で3・5が平基式，4が凸基，6～10が凹基式である。石質は黒曜石が5～8で他はいずれもサヌカイト製。4は長さ19.4*mm*，幅14*mm*，厚さ2.9*mm*，重さ0.55*g*で10は当遺跡で最大の完形品で長さ32.8*mm*，幅31.7*mm*，厚さ4.8*mm*，重さ2.45*g*を測る。11はサヌカイト製の縦型石匙の完形品。縦長剝片を用い，両側縁に荒い二次加工を加える。長さ8.6*cm*，幅3.8*cm*，厚さ0.9*cm*，重さ28.4*g*を測る。12は長さ4.1*cm*の刃器の一側辺に細かい二次加工を加えて刃部とする削器。黒曜石製で，厚さ0.5*cm*，重さ6.5*g*。表面には上・下両方向からの剝離痕がみられ，両設打面を有する石核の存在を窺わせる。13は縦長の剝片。14は石核で寸づまり幅広の剝片を剝出し，反対側は自然面。重さ12.5*g*。12～14はいずれも黒曜石製。15は砂岩製の石製品で頭



第 60 図　19号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

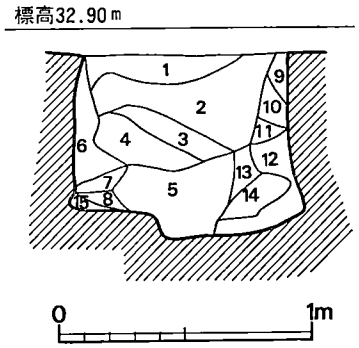
部は欠損するが丸みをもつものであろう。上から1㎝ほどのところで両側から括れる。石庖丁等の穿孔の仕上げ用に用いたものであろうか。長さは復原で3.6㎝，厚さ1.4㎝，括れ部1.0㎝。これらの他に石庖丁の未製品と思われる破片と，同じく背縁のみの破片と石核1，砥石1が出土した。（木下）

≪**20号方形竪穴**（図版24，第61図）　台地南東部C 6区に位置し，底面径111×87㎝，深さ74㎝を測る。プランは不整な長方形を呈している。断面形状は長方形で，北壁面に段をつくっている。竪穴内には柱穴らしきピットが1個認められた。深さは約33㎝である。他にもう1個ピットらしきものがあるが，これは非常に浅い。土層の堆積状態は南壁面に沿って縦の堆積が認められ，他は平行な堆積であった。出土遺物は全くない。（藤瀬）



第 61 図　20・21号袋状竪穴実測図（1/40）

≪**21号方形竪穴**（図版24，第61・62図）　台地南東部に位置し，底面径123×73㎝の隅丸長方形の小形方形竪穴である。深さは最も深い所で約67㎝を測る。断面形状は長方形を呈し，上に行く程少し開き気味である。竪穴内に柱穴らしきピット3個あり，その深さは37～51㎝である。土層の堆積状態



第 62 図　21号袋状竪穴土層断面図（1/30）

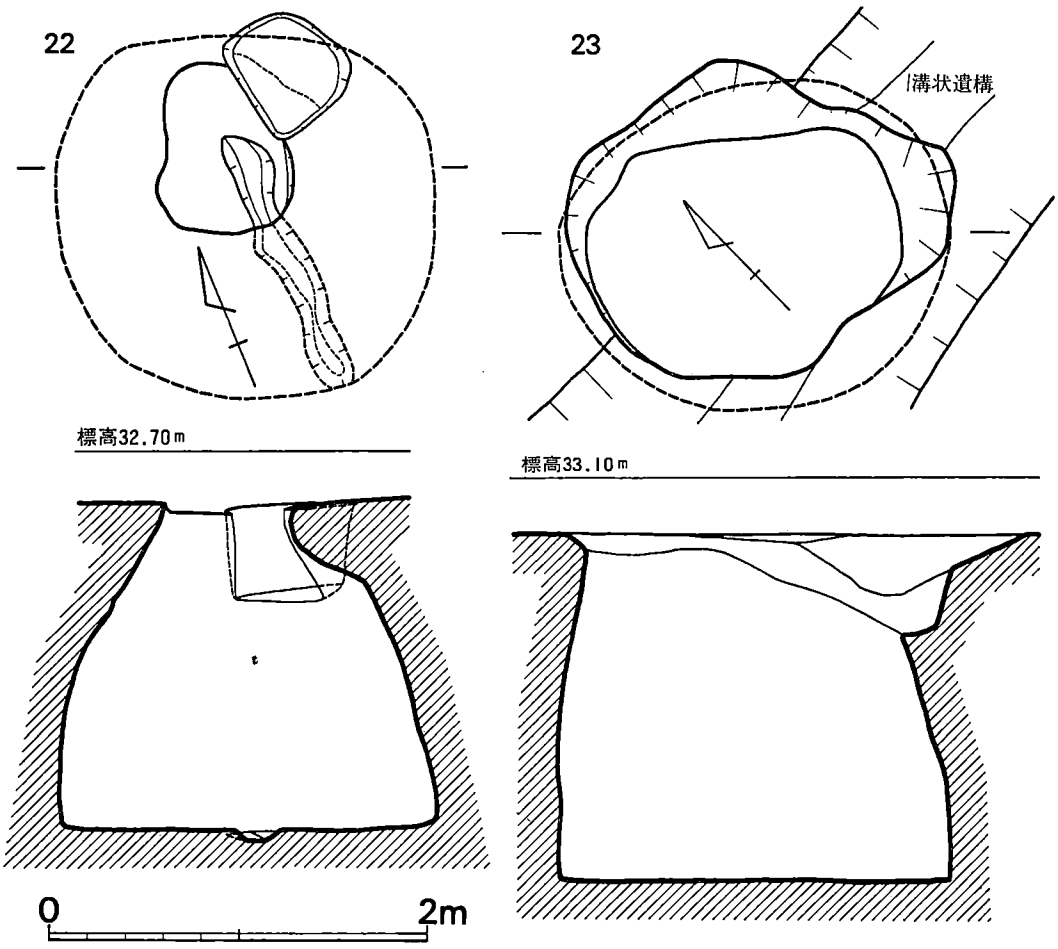
土層名

1. 黒色土層（硬質）。　2. 黄砂混り黒色土層。
3. 黒色土層（1と比べてやや砂っぽい）。
4. 漆黒色土層。　5. 黄砂混り漆黒色土層。

6. 卵黄褐色土ブロック混り黒色土層。　7. 黄砂混り黒色土層（軟かい）。
8. 明黄褐色土層。　9. 茶褐色粘質土層。
10. 卵黄褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。　11. 卵黄褐色土ブロック混り黒色土層。
12. 黄砂混り茶褐色土層。　13. 明黄褐色土ブロック混り漆黄色土層。
14. 明黄褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。　15. 明黄褐色土（硬質）。

（第62図）はやはり壁面に沿って縦の堆積が認められる。他は自然堆積の状態を示している。出土遺物は全くない。（藤瀬）

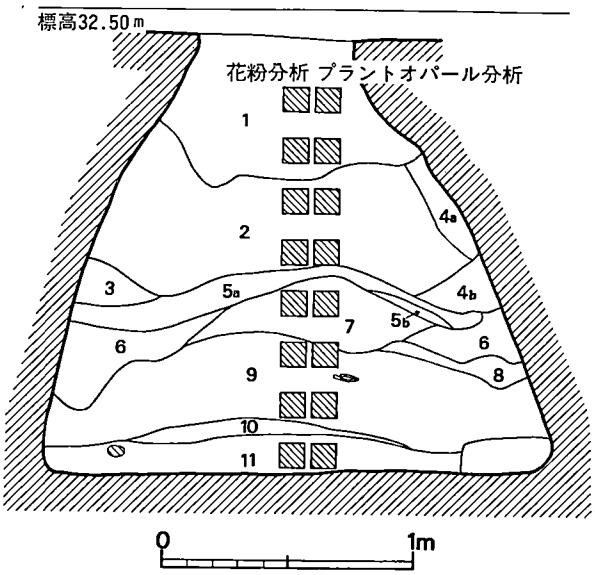
≪**22号袋状竪穴**（図版25，第63・64図）　195×190*cm* のほぼ円形を呈し，深さは171*cm*を測る。台地北側に位置している。この袋状竪穴は最も残存状態が良く，典型的なフラスコ状である。入口は直径約90*cm*の不整円形の現状だが，後世のピットに切られているので原状はもっと小さかったと思われる。ようやく人間1人がはいれる状態であっただろう。底部には蛇行する



第 63 図　22･23号袋状竪穴実測図（1/40）

幅約20cm・長さ約145cmの溝が認められた。竪穴内の排水に何らかの関係があったのかも知れない。

土層の堆積状態（第64図）は入口より土砂が流入している状態と判断される。各層に壁面の明黄褐色土が若干混在している。5・7層に壁面の崩壊した痕跡が認められるが，下層にはない。従ってこの袋状竪穴は崩壊による廃棄ではなく他の理由が考えられる。集落の放棄によるのではなかろうか。出土遺物は残存状態の割には少なく，壺形土器口縁部破片4点とその他1点それに甕形土器完形品1点と破片4点と浅鉢状を呈する土器1点である。石器は石斧・石鏃・磨石各1点が出土している。この事は先述した廃棄の理由を裏付ける。なお全堆積層に10cm間隔でそれぞれ8個所，プラント・オパール，花粉分析を実施した。その結果についてはⅥ—1で報告する。



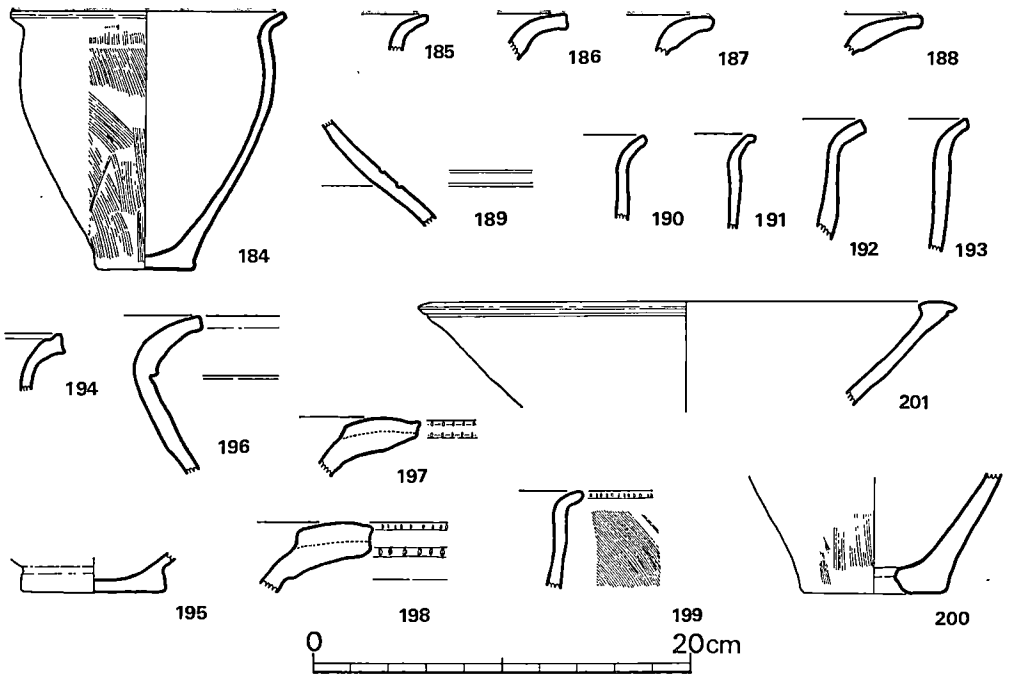
第64図　22号袋状竪穴土層断面図（1/30）

土層名
1. 黄砂混り暗茶褐色土層。
2. 明黄褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。
3. 明黄褐色土，漆黒色土ブロック混り暗茶褐色土層。
4a. 暗茶褐色土層。　4b. 暗黄褐色土層。
5a. 淡黄色土ブロック混り明黄褐色粘質土層。
5b. 黄褐色土層。　6. 褐色土ブロック混り漆黒色土層。
7. 漆黒色土層。
8. 漆黒色土ブロック混り明黄褐色粘質土層。
9. 黒色土層。　10. 茶褐色土層。
11. 明黄褐色土，褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。

出土遺物（図版54，第65・66図）

壺形土器（第65図185～189）

壺形土器は口縁部の細片が多く，口径は復原しえない。185は口縁端部を肥厚する事なく，わずかに外反している壺形土器の口縁部破片である。器面は刷毛及びヘラによりていねいにナデている。胎土には長石・石英粒を含み，くすんだ橙褐色の色調を呈する，焼成良好の土器である。186もやはり口縁部細片で，口唇端部に刻目を施し丹を塗布している土器である。刻目は上下より施しているが壺A類ではない。調整は剝落が激しく不明である。胎土は長石・石英粒を含み，黄褐色を呈する焼成普通の土器である。187は口縁部がわずかに膨らみ，沈線状のにぶい段を有する壺形土器の破片である。調整は器壁内外面共，横位のナデを施している。胎土は長石・石英粒を含み，色調はやや赤みがかった淡褐色を呈している。188も口縁部がわずかに膨らみ，段を形成する壺形土器である。器壁は剝落が激しく詳細は不明であるが，外面に横位のナデた痕跡がかすかに認めら



第 65 図　22・23号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

れる。胎土・色調・焼成は187とほぼ同様である。189は浅いヘラ描きの沈線をもった肩部破片である。沈線は2条である。外面はていねいにヘラでナデており，内面は刷毛で調整している。炭化した付着物が内外共に認められる。胎土は精良で，長石・石英粒をわずかに含んでいる。色調は付着物のため，くすんだ暗褐色を呈している。焼成は良好である。

甕形土器（第65図184・190～193）

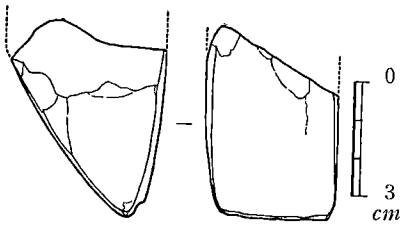
甕A（184・190～193）　出土した甕形土器は全て甕A類である。口縁端部に刻目をもつa類（190・191）ともたないb類（184・192・193）とに分かれる。184を除き，復原口径も出しえない口縁部細片である。184は口径14.4*cm*・器高13.4*cm*測る完形土器である。外面は刷毛・内面はナデて調整している。色調は外面暗褐色，内面黄褐色を呈し，焼成普通の土器である。他は調整を刷毛かヘラによるナデで施しているが，190は内面を指頭による調整でしている。胎土には全て長石・石英粒を含み，191を除き精良である。色調は190が赤みのある淡褐色，191が外面暗灰褐色・内面淡灰褐色，192が淡黄褐色，193が外面赤橙色・内面赤みがかった淡褐色を呈している。焼成は191を除き良好である。

鉢形土器（第65図201）

他の器種とも考えられるが，一応鉢形土器としておく。鉢形土器分類のいずれにも属さない異様な器形をしている。口縁部が大きく開き，内面に断面を角状のものを貼り付けている。外面

にはヘラ描きによる沈線がみられる。口径は約28cmを測る。外面の調整は剝落が著しく不明であるが，内面は横方向の刷毛ナデを施している。胎土は長石・石英を含み，色調は赤みがかった褐色，焼成は良好である。（藤瀬）

石　器（第66図）　石斧・打製石鏃・磨石が出土した。図示したのは灰白色を呈す柱状片刃石斧の刃部破片で，刃先端部には使用によると考えられる刃こぼれが観察される。刃部角度は45°内外で抉入石斧になる可能性もある。軟質で泥岩に近い頁岩であろう。（木下）



第66図　22号袋状竪穴出土石器実測図 (1/2)

≪23号袋状竪穴（図版25，第63・67図）　C 6区の中央部に位置し，中世溝状遺構に袋状竪穴の上部を切られている。このため上縁部の形状は不明である。残された周壁は西側から南側にかけて垂直に近く，東から北部にかけてはわずかに裾広がりの傾斜をもって深さ1.75mで床面に至る。

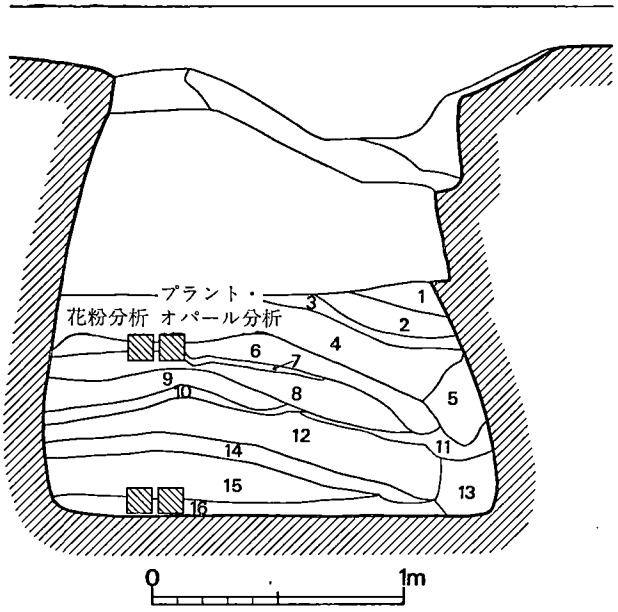
床面の平面形は長径2.0m，短径1.7mの楕円形を呈し，竪固である。堆積土には多くの黄褐色粘土塊が混在し，内壁の崩壊が度々あったものと想定される。

堆積土の中位と床面直上で，花粉分析，プラント・オパール分析の供試資料とする土壌サンプルを採取した。（小池）

出土遺物（図版54，第65・68図）

壺形土器（第65図194～198）

いずれも小破資料である。CからDタイプに属すると思われる口

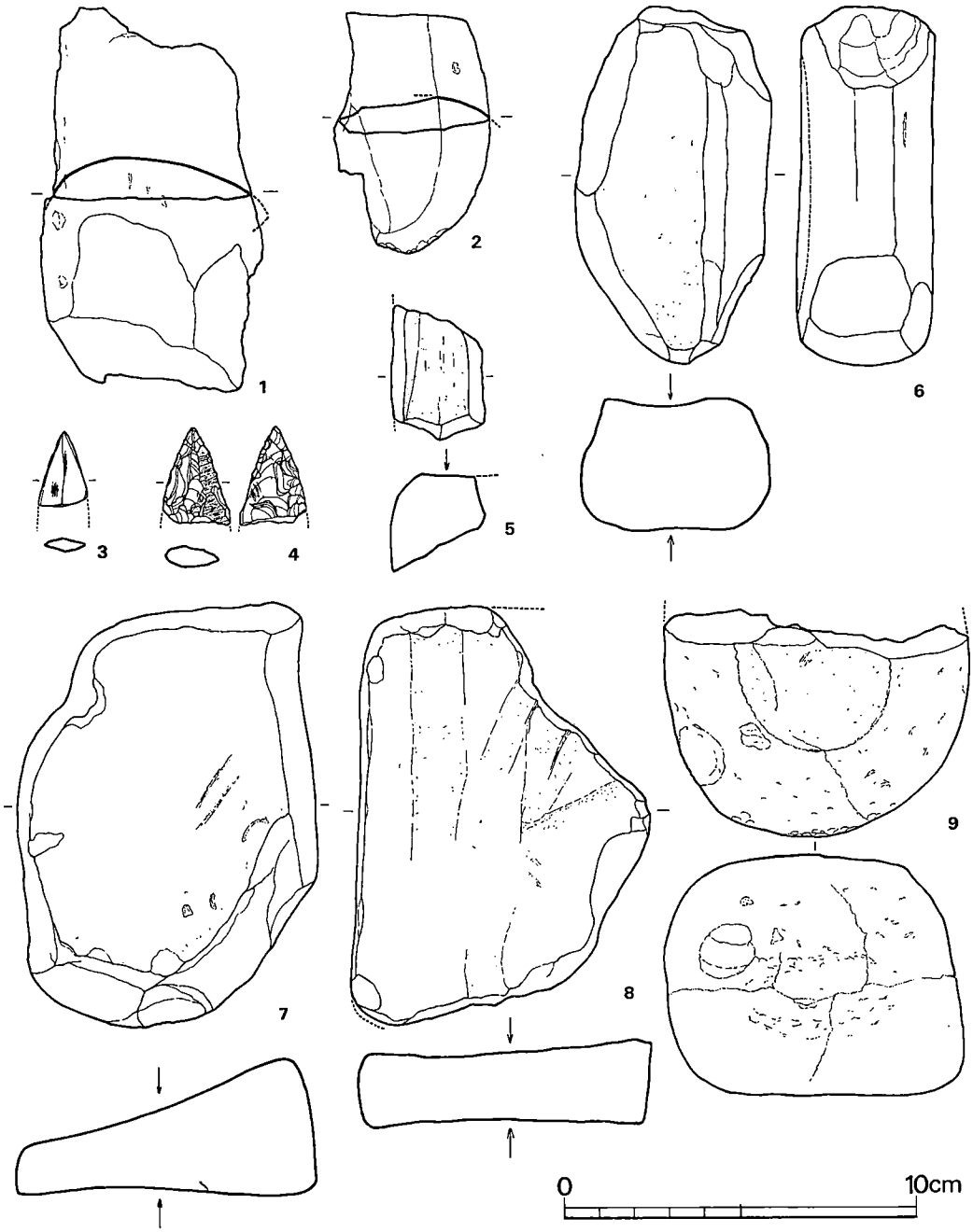


第67図　23号袋状竪穴土層断面図 (1/30)

土層名
1. 暗茶褐色土層（明黄褐色土ブロックと黒色焼灰を含む）。
2. 暗茶褐色土層（明黄褐色粘質土ブロックと焼灰を含む）。
3. 暗茶褐色土層（明黄褐色土ブロック黄砂，焼灰含む）。
4. 明黄褐色粘質上小ブロック混り灰黒褐色土層。
5. 明黄褐色土，黒色土，混白色土ブロック混り曲茶褐色土層。
6. 明黄褐色土，黒色土ブロック混り暗茶褐色土層。
7. 明黄褐色土，黒色土ブロック混り茶褐色土層。
8. 明黄褐色土，黒色土粒子混り暗茶褐色土層。
9. 乳白色土，明黄褐色土小ブロック混り暗茶褐色土層。
10. 暗茶褐色土層（乳白色土と明黄褐色土の粒子を多く含み9と比べてやや粘土質）。
11. 明黄褐色土，黒色土大ブロック混り暗茶褐色土層。
12. 暗茶褐色土層（乳白色土，明黄褐色土，黒色土の粒子を若干含む）。
13. 5とほぼ同様の暗茶褐色土層。
14. 黒色土，乳白色粘土ブロック混り暗茶褐色粘質上層。
15. 黄砂混り暗茶褐色粘質土層。
16. 明黄褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。

縁部（194）と底部（195），Aタイプに属する口縁部（196～198）とがある。

壺A（196～198）　196はBタイプをそのまま大きくしたような器形で，内面ナデ，外面の口



第 68 図　　23号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

縁部はヨコナデ，頸部には研磨を施こす。色調は赤褐色。197・198は2点とも口縁部を肥厚させ内面に段を作る壺で，口唇部上・下端に刻目を施こす。内外面ともナデ仕上げされる。194は口縁部上端がナデによって凹む他とは趣きを異にする器形で，類例は少ない。内外面とも丁寧なナデ仕上げ。195は下方にやや開き気味に突出する円盤張り付け状の底部で，胴部との境に沈線状の凹みを作る。調整は摩耗のため不明。胎土は良く精選されている。色調は淡褐色。

甕形土器（第65図199）

Aタイプに属する破片資料で，口縁端部に刻目を有するa類に当る。内面ナデ，外面細かい刷毛仕上げ。色調は淡褐色。

甑形土器（第65図200）

底部付近の破片資料で，底部の穿孔は焼成後である。内面ナデ，外面は縦位ハケ仕上げされる。（石橋）

石　器（第68図）　1は玄武岩製太型蛤刃石斧の表皮破片。2は磨製石斧の表皮破片で，下端には敲打痕が残る。3は頁岩を用いた磨製石鏃の先端部破片。中央部を走る鎬は直線的でない。切先はやや鈍い。4は打製石鏃で基部側を欠損する。縦長の剝片を利用し，表裏とも周辺側から荒い剝離調整を加える。一部自然面を残す。黒曜石製。5～8はいずれも砂岩製の砥石。5は仕上げ砥で研砥面1面を有す。6は隅丸の方形に近い断面をもつほぼ完形に近い砥石で，表裏2面の研砥面を有す。片面はかなり研ぎ減りしている。7は板状砥石で完形品。片側の砥石面は傾斜著しい。表面は脆い。長辺11.8cm，短辺8.5cm，重さ480gを測る。8も7より板状に近い砥石で表裏2面の幅広い研砥面を有す。厚さは2cm内外で両端ほど厚味を持つ。9は玄武岩製の敲石で周辺の敲打痕顕著。体部には磨痕が観察され，磨石としても使用されたのであろう。約1/3を欠損するが，厚さ6.8cmと球状に近く，重さ435gと重量もある。（木下）

≪24号袋状竪穴（図版26，第69図）　台地中央部東側に位置し，50号方形竪穴を切っていた。入口は畑作等により削平されていたが，底面径は216×155cmで楕円形のプランである。底面には不整な落ち込みがみられた。深さは211cmを測る。本来断面形状は袋状を呈していたと考えられるが，壁面上部の崩壊により長方形になってしまっている。

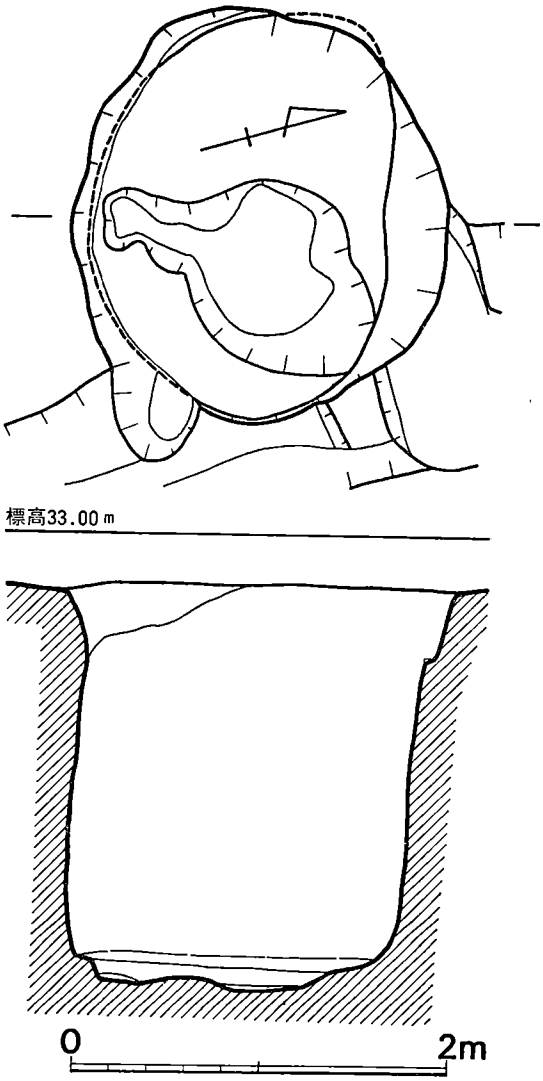
堆積土層は崩壊埋没による最終的廃棄の状態を示している。5層がそれにあたるが，殆んど大半壁面の崩壊により埋没してしまっている。しかし，堆積土中層の6～14層と下層18層には焼灰が混入しており，袋状竪穴の再利用の可能性も考えられる。焼土・灰土も混入しているので，竪穴内で何らかの目的で火を燃やしていると思われる。この事と破片土器量の多いことと関係があると考えられるが，意味について不明である。43号袋状竪穴も同じ状態である。なお堆積土層4層と20層については，各々花粉分析とプラント・オパールの供試資料を採取した。Ⅵ—1で報告する。（藤瀬）

出土遺物（図版45・54，第70・71・73図）

壺形土器（第70図202～204）

壺A（204）　口縁部上面を肥厚させ，内面に段を作る壺の破片資料で，口唇端部の刻目はない。内外面ともナデ仕上げ。

壺B（202・203）　202は口縁部上面を肥厚させ内面に段を作る壺の破片資料で，開き気味に直口する頸部を有する。摩耗していて不明瞭であるが，口唇部上・下端には刻目が認められる。色調は淡灰褐色。203は口唇部を肥厚させ内面に段を作る壺の破片資料で，口唇部上・下端の刻目はない。内外面とも丁寧なナデ仕上げ。色調は暗赤褐色。

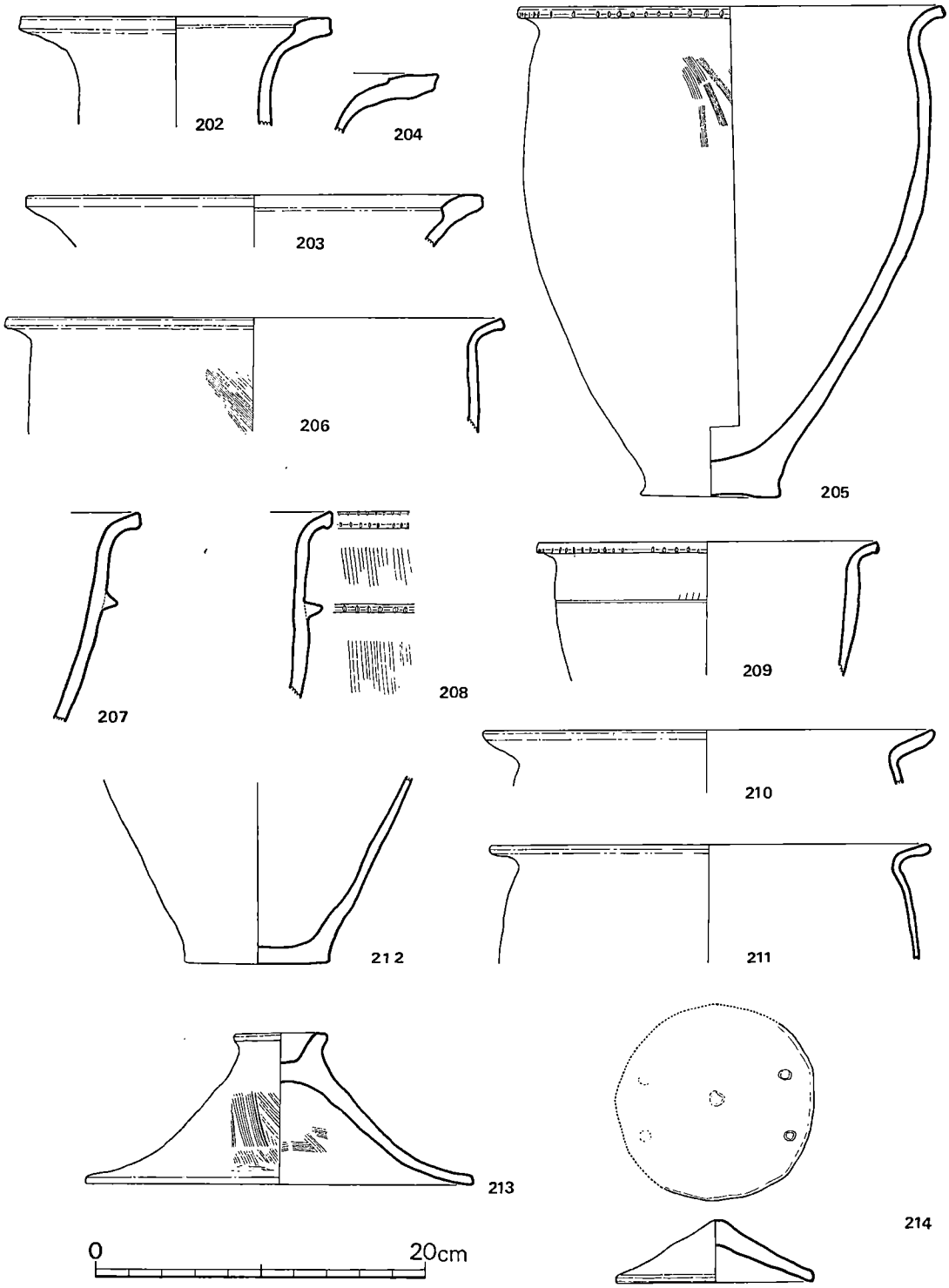


第69図　24号袋状竪穴実測図（1/40）

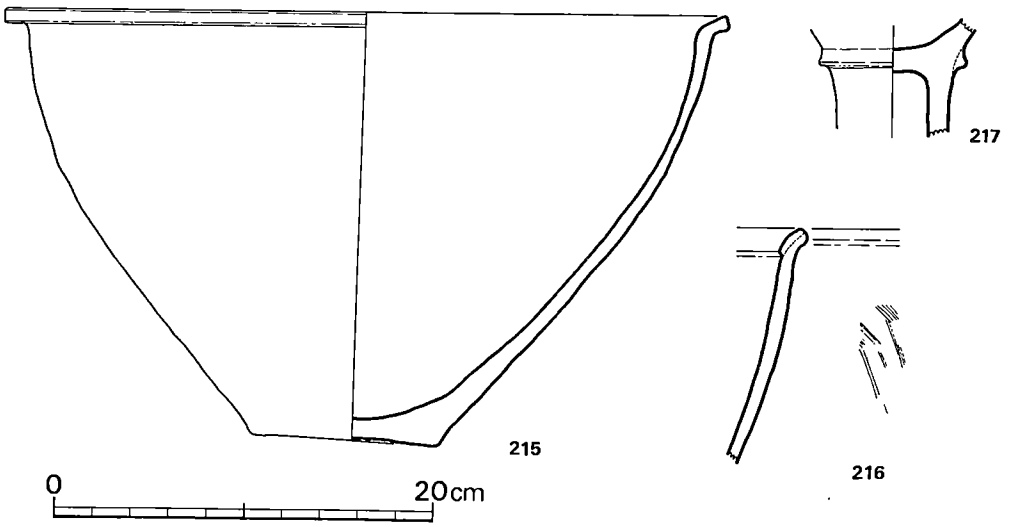
甕形土器（第70図205～212）

甕A（205・206・210・211）　口縁端部に刻目をもつa類（205）と，もたないb類（206・210・211）がある。205は口径25.8cmを測る甕で，全体に器壁が厚く成形は粗い。内面ナデ，外面刷毛仕上げで刷毛は不規則に施こされる。206は口径30.1cmを測る破片資料で，内面ナデ，外面斜位刷毛仕上げを施こす。210・211は口縁部の伸びがやや長く，端部が丸く収まる甕の破片で頸部は一度緊まり肩部から胴部にかけて膨らむ。Aタイプのなかではやや形状を異にする資料で類例も少ない。2点とも摩耗のため詳細は不明。

甕B（207・208）　口縁端部と口縁部下の凸帯に刻目を有するa類（207）と，有しないb類（208）がある。2点とも器壁は厚く堅固で，他の甕に比し大形になると思われる。207は口唇部上・下端に刻目を付す。内面ナデ，外面刷毛仕上げ。208は摩耗のため，外面の一部に刷毛を認めるにすぎない。



第 70 図　24号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第 71 図　24号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

甕D (209)　口径20.6cmを測るやや小形の甕で，内面ナデ，外面細かい刷毛仕上げを施こす。口唇部上端はヨコナデされ，刻目は下端に限られる。沈線は浅い。

底部 (212)　外面に一部刷毛の痕跡が認められるが摩耗のため詳細不明。

蓋形土器 (第70図213・214)

213は口径 23.6cm を測る傘形の蓋で，脚台状の基部からラッパ状に大きく広がる。内外面とも刷毛のあとナデ仕上げ。214 は復原口径12.1cmを測る陣傘状の蓋で，2個ずつ対の紐通し穴がみられる。内外面ともナデ仕上げ。色調は橙褐色。

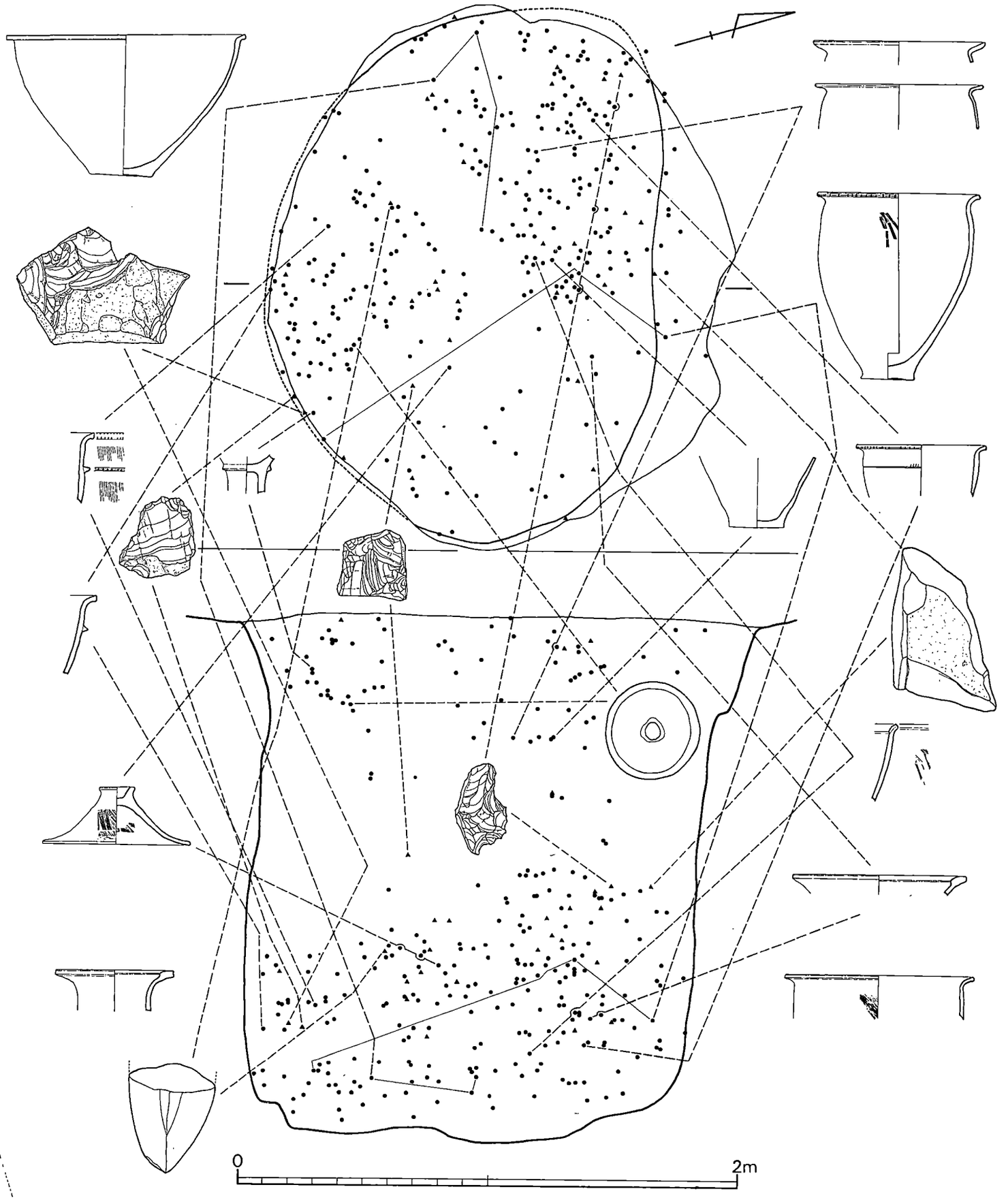
鉢形土器 (第71図215・216)

215 はBタイプに属する鉢で，口径 38.2cmを測りa類にあたる。口縁部の返りは短かく端部は角張る。内外ともナデ仕上げ。216 は口縁部内面を肥厚させる鉢の破片資料で，内面は丁寧なナデ，外面は刷毛のあとナデて仕上げる。大形の鉢になると思われる。

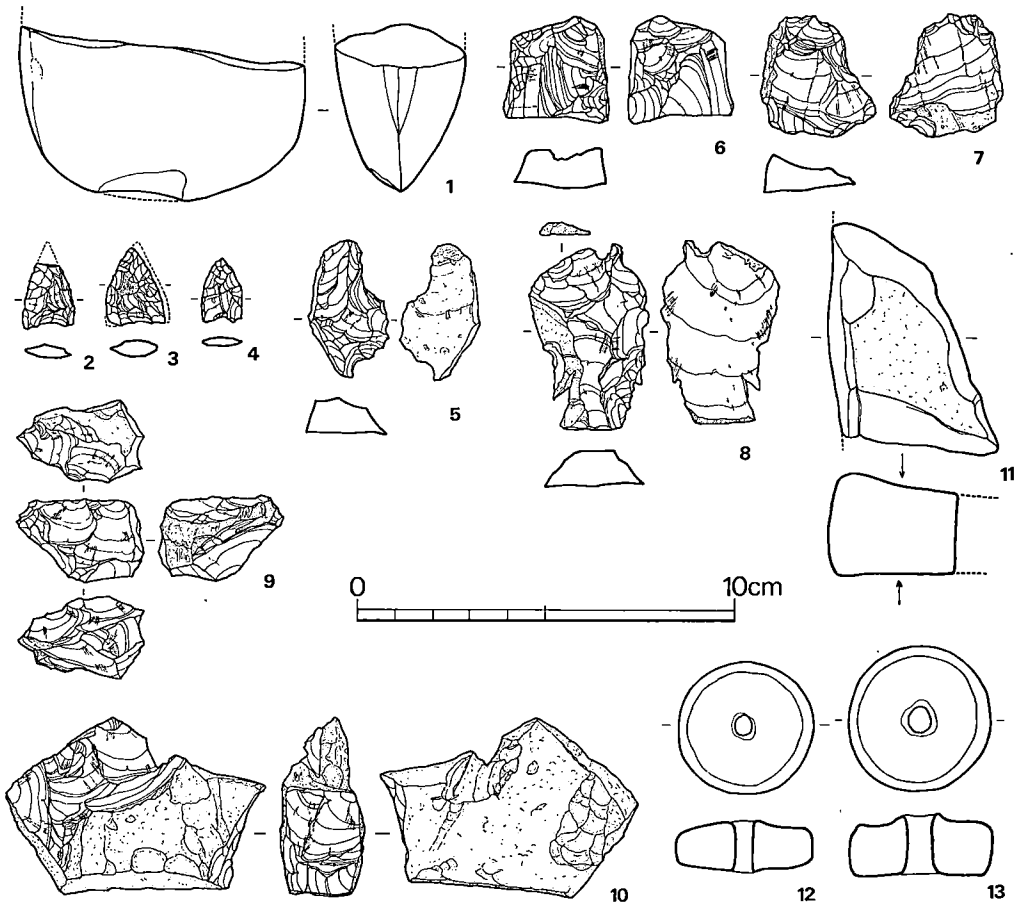
高杯形土器 (第71図217)

脚部の破片資料で，胴部との境に凸帯を貼りつける。脚部・杯部ともナデて仕上げられる。色調は褐色。　(石橋)

石器・土製品 (第73図)　1は玄武岩質の蛤刃石斧の刃部破片で刃部は鋭いが，一部欠損している。2～4はいずれも凹基無茎式の石鏃で2は先端部，3は側辺を欠損する。4は長さ17mm，幅11.2mm，厚さ2.5mm，重さ0.45gを測る。2がサヌカイト，3・4が黒曜石製。5～7は削器で，5は安山岩製でノッチドスクレイパーと呼べるもの。6は部厚な剝片の一辺に二次加工を加え，7は幅広な縦長剝片の縁辺の一部に加工を施して刃部とする。6・7は黒曜石製。



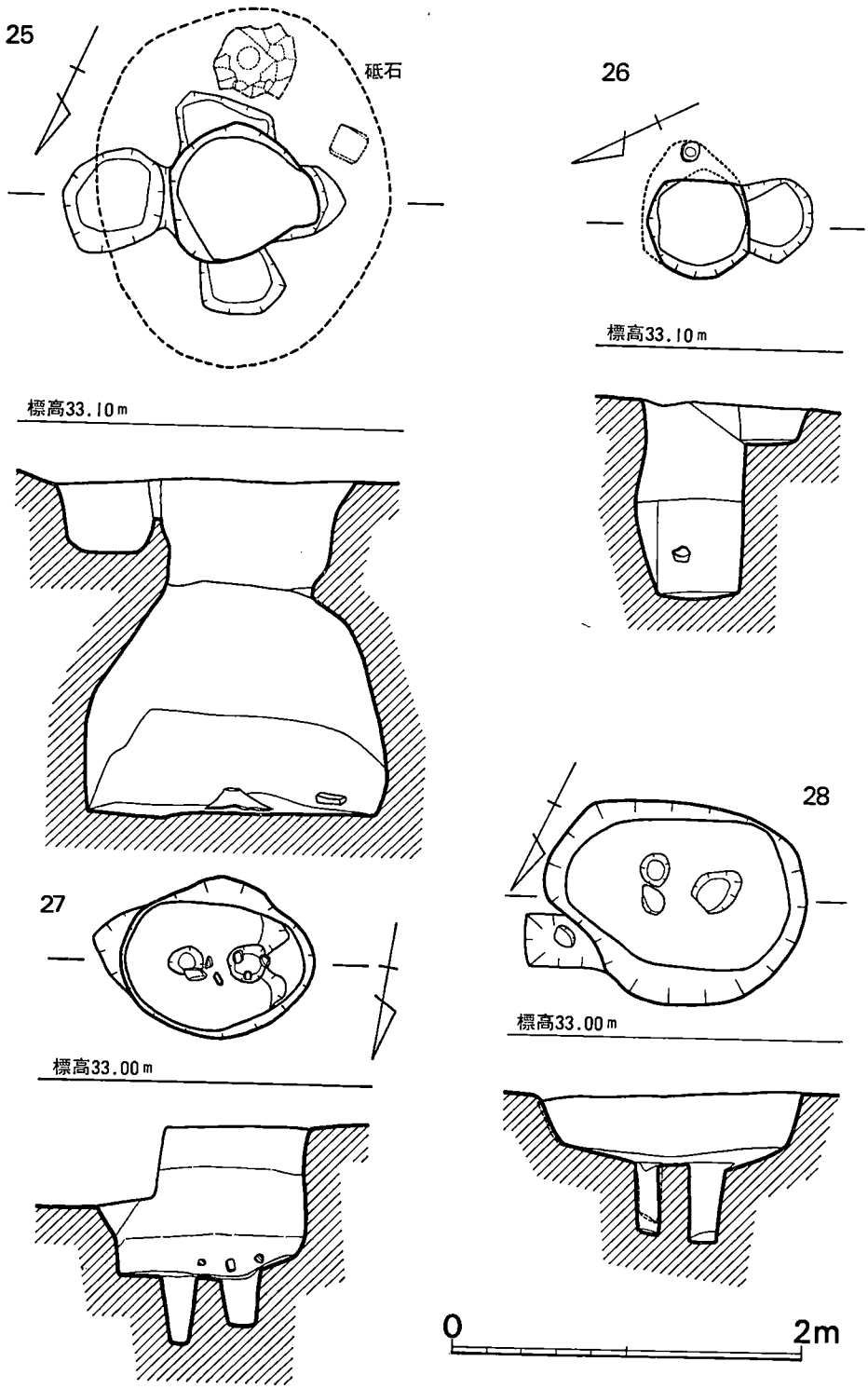
第72図　24号袋状竪穴内遺物分布図（遺構1/20,土器1/6,石器1/2）



第 73 図　24号袋状竪穴出土石器・土製品実測図 (1/2)

8は不純物の多い黒曜石製の縦長剝片で表面には上・下から剝離面が観察され19号袋状竪穴出土（第60図11）の刃器状剝片と類似する。断面は台形を呈す。打面は原面で，小さく半月状を呈す。9は角礫を利用した石核で多方向から剝離している。黒曜石製で重さ12.5g。10は部厚だが板状の黒曜石を用いた石核。11は研磨面2面をもつ砂岩製砥石片。12，13は土製紡錘車。12は径3.6cm，厚さ1.4cm。13は淡黄褐色を呈し，1.6cmと部厚い。孔径0.9cmと大きく，孔周辺が特に肥厚する。重さ26.9g。その他に敲石の小破片が出土している。　（木下）

≪**25号袋状竪穴**（図版27，第74・75図）　C6区の東南部に位置し，中世の8号掘立柱建物跡に伴う柱穴によって上縁部西側を切られている。上縁部は直径0.8mの円形を呈し，約0.3m下位で直径0.5～0.6mまですぼまる。これ以下の周壁は大きく拡がる。床面までの深さは1.9mを測り，床面は長径2.0m，短径1.7mの楕円形プランを呈すが，最大径は床面より約0.2m上位に相当し，短径が約0.1m分拡がる。



第 74 図　25～28号袋状竪穴実測図 (1/40)

東北方の床面に接して甕形土器が倒立した状態で出土し，また礎石が壁付近から出土している。

出土遺物（図版45・54，第76～78図）

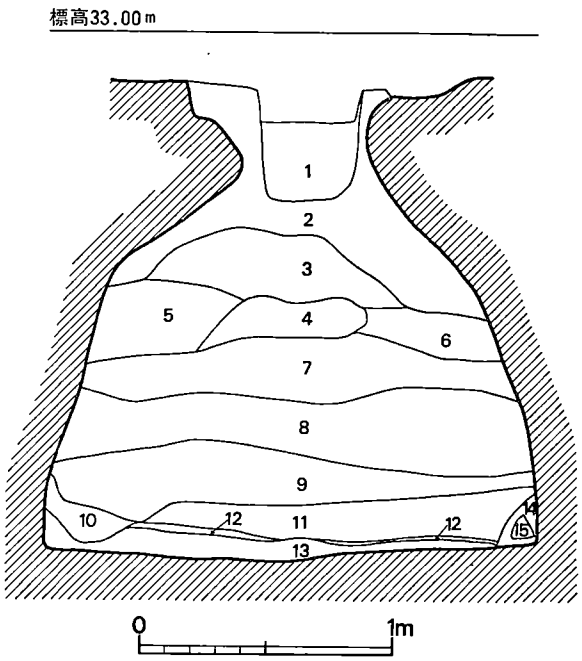
壺形土器（第76図218～220）

壺A（220） 明瞭な有段状をなす口縁部の破片で，復原口径31.8*cm*を測る。内外ともヨコナデで仕上げた褐色を呈す土器である。

壺B（218・219） 有段状口縁の壺で，218は口頸部破片，219は完形資料である。218は復原口径18.8*cm*を測り，口縁部内外はヨコナデ，頸部内外はナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈す。219は口径20*cm*，器高35.2*cm*を測る。肩部には浅い3条のヘラ描き沈線がめぐり，胴部は強く張り出す。最大径33.4*cm*を測る。外面はやや粗いヨコヘラ磨きで，内面はナデ調整を施す。色調は黄褐色。

甕形土器（第76図221～226）

甕A（221・222） 口縁端部に刻目を有すa類に属す。221は復原口径28*cm*を測る口縁部付近の破片で，内外ともナデて仕上げた茶褐色を呈す土器である。222は口径19*cm*，器高20*cm*を測る小形の甕で，底部はわずかに凹む。底部を除いて全体に煤の付着が認められる。調整は外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は黄褐色。



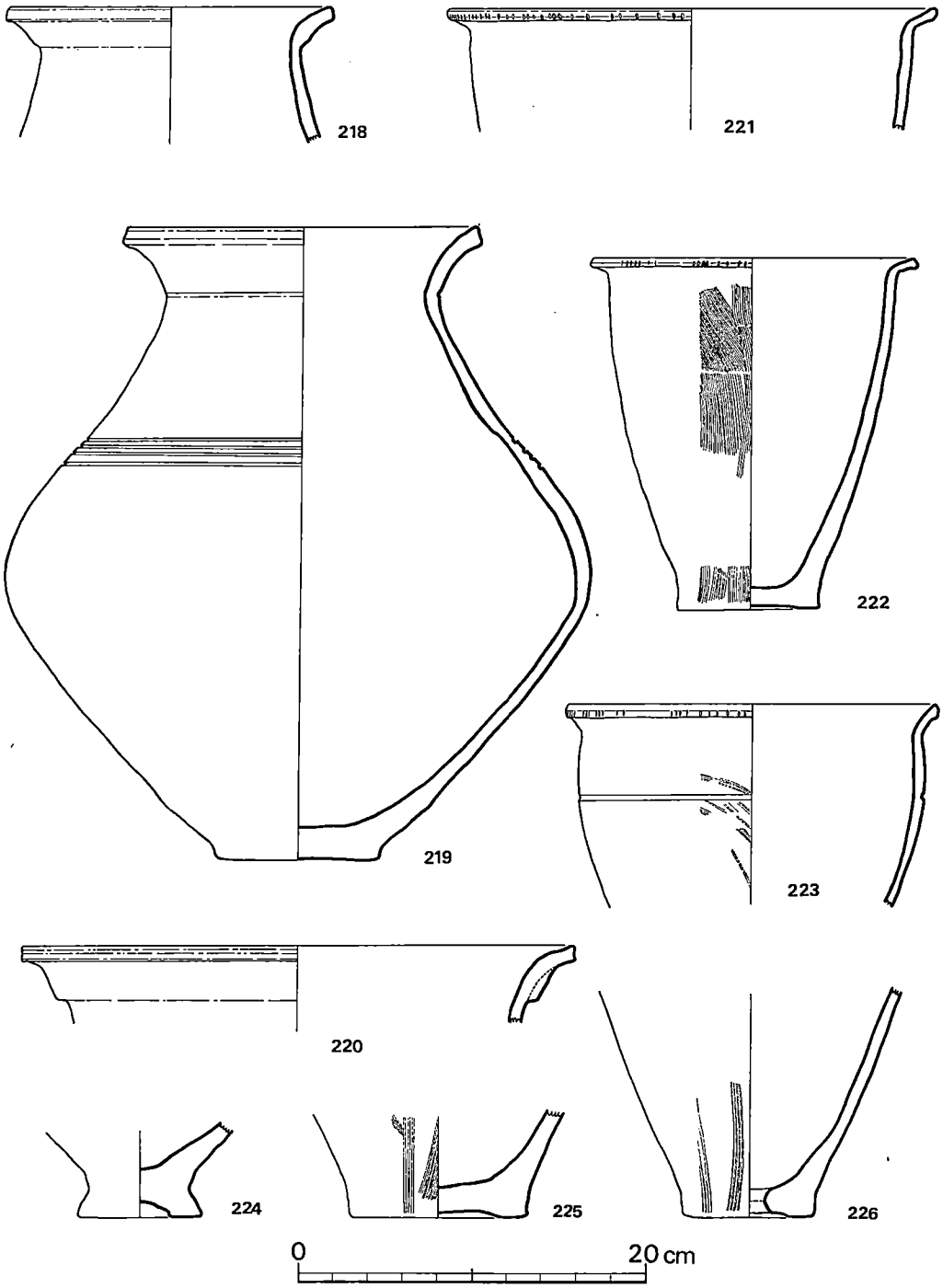
第 75 図　25号袋状竪穴土層断面図（1/30）

土層名

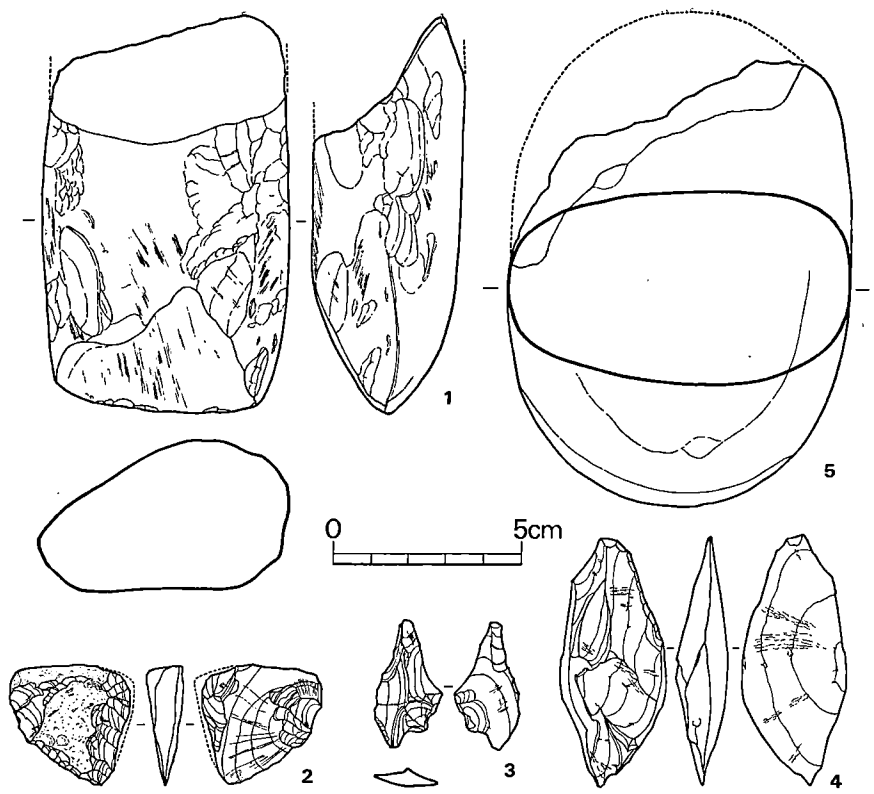
1. 暗茶褐色土層。
2. 明黄褐色土小ブロック混り暗茶褐色土層。
3. 明黄褐色土大ブロック混り暗茶褐色土層。
4. 明黄褐色土ブロック混り灰黄褐色土層。
5. 漆黒色土ブロック混り灰黒褐色土層。
6. 灰褐色土層。
7. 灰黄褐色土ブロック混り灰茶褐色土層。
8. 灰茶褐色土層（漆黒色土と赤味の強い明黄褐色土粒子を含む）。
9. 灰茶褐色粘質土層。
10. 赤味の強い明黄褐色土ブロック混り漆黒色土層。
11. 灰黄褐色土・赤味の強い明黄褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。
12. 赤味の強い明黄褐色土粒子混り黄色土層。
13. 黒色土・赤味の強い明黄褐色土ブロック混り暗茶褐色土層。
14. 赤みの強い明黄褐色土層。
15. 漆黒色ブロック土層。

甕D（223） 口縁部の屈曲が少なく，胴部がややふくらむ胴上半の破片で，口縁下に1条のヘラ描き沈線がめぐる。胴部外面は主に右下りの刷毛で調整され，煤が付着する。復原口径21.4*cm*。

底部（224～226） 224は上げ底の底面を有し，裾広がりで脚台様になる底部破片，225はわ



第 76 図　25号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)



第 77 図　25号袋状竪穴出土石器実測図 1 (1/2)

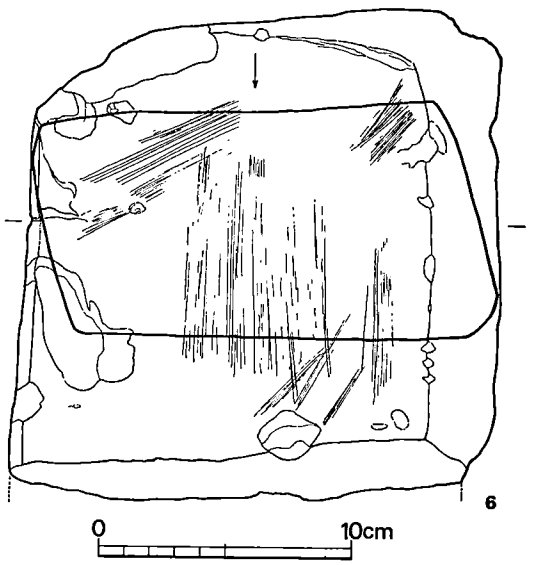
ずかに底面の凹む底部破片である。それぞれ底径 7 cm, 10cmを測る。

甑形土器（第76図226）

底径7.5cmを測り，孔径1，6 cmの打欠き穿孔を有する胴部下半破片である。底面は上げ底で，胴部外面は縦位の刷毛によって調整されている。

（小池）

石　器（第77・78図）　1は蛤刃石斧の刃部から胴部の破片。周縁は敲打調整痕が残り，体中央部から刃部にかけては良く研磨されている。断面は極端に左傾している。硬砂岩製。2・3は黒曜石製の削器。2は三角形に近い



第 78 図　25号袋状竪穴出土石器実測図 2 (1/3)

幅広の剝片の二辺に二次加工を加え，3は横長剝片の一部に刃部を形成する。4はサヌカイト製の横長剝片を利用した削器。長さ6.5cm，幅2.8cm，重さ25.5g。5は一部を欠損するが，長円形の磨石で花崗岩を用いる。6は頁岩質泥岩製の大形砥石で，厚さ9.5cm，幅19cm弱を測る。断面は平行四辺形を呈し，研磨面は上・下二面を有すが，下面はあまり使用されず，上面が浅く研ぎ減りしている。主に上下方向の条線が観察される。重さ5.5kg。他に不定形剝片を利用した黒曜石製石鏃が出土した。（木下）

≪**26号袋状竪穴**（第74図） 最も小さい竪穴である。床面は不整円形を呈し，床面径49cm×45cm，深さ1.10mを測る。最大径は床面より約50cmのところにあり，約75cmである。壁面は西面が強く彎曲する他は垂直的である。

遺物は床面より約20cm浮いた状態で前期末の甕破片数点とマメの炭化種子1個が出土したのみである。

出土遺物（第79図）

甕形土器（第79図227・228）

227は口縁下を肥厚させた甕Eに属す。復原口径27.6cmを測る。端部には刻目を有し，口縁部の外反はゆるやかで小さい。口縁部内外はヨコナデ，外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は暗褐色を呈す。228は底径8.1cmを測る底部付近の資料である。内外ともナデて仕上げた淡褐色を呈す土器である。（井上）

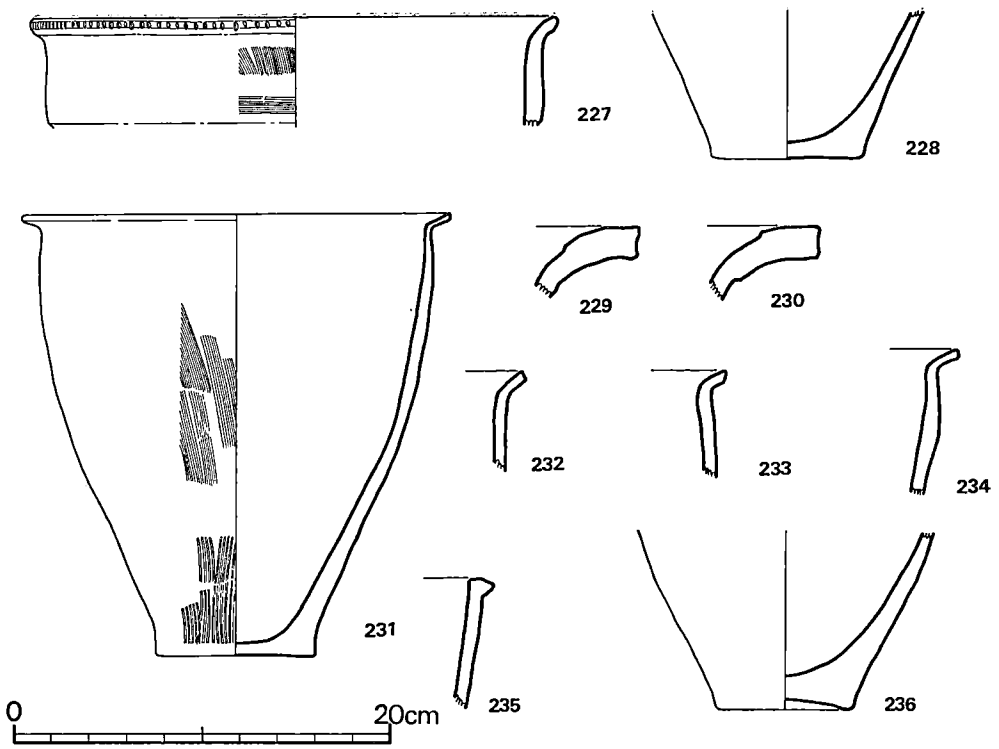
≪**27号方形竪穴**（図版28，第74図） C6区の東北部に位置し，17号住居跡によって上縁の東部を切られている。上縁の平面形は，残された部分の状況から長径1.2m程度，短径0.9mを測る楕円形を呈し，垂直に近い傾斜で深さ0.85mの床面に至る。床面の西部では約0.1m高い床がみとめられるが，床面の平面形は長径1.0m，短径0.7mを楕円形プランを呈している。

赤味の強い明褐色粘土の床面を掘り込んで，2ヵ所の柱穴様ピットが長軸方向に並び，深さは0.35mと0.25mを測る。ピットの周囲には石がまとまって検出でき，柱を支えるための施設と推定できる。

堆積土内から，土器片数点が出土している。（小池）

≪**28号方形竪穴**（図版28，第74図） C5区に位置するいわゆる小形方形竪穴である。底面径126×82cm・深さ40cmを測り，やや不整な隅丸長方形を呈している。竪穴内にはピットが3個あり，深さは32～45cm程である。土層の堆積状態は21号と同じく壁面に沿った堆積が認められた。出土遺物は全くない。（藤瀬）

≪**29号方形竪穴**（図版29，第80図） C5区東北部に位置する，楕円形プランの上縁部をもつ竪穴で，長径1.13m，短径0.94mを測る。床面までの深さは0.55mで，床面は長辺0.95m，短辺0.6mの不整長方形プランを呈す。2個の柱穴様ピットが長軸方向に並び，深さは0.3～0.35mを測る。ピットの上縁部に柱を支える施設とみられる石が検出されている。遺物は何ら



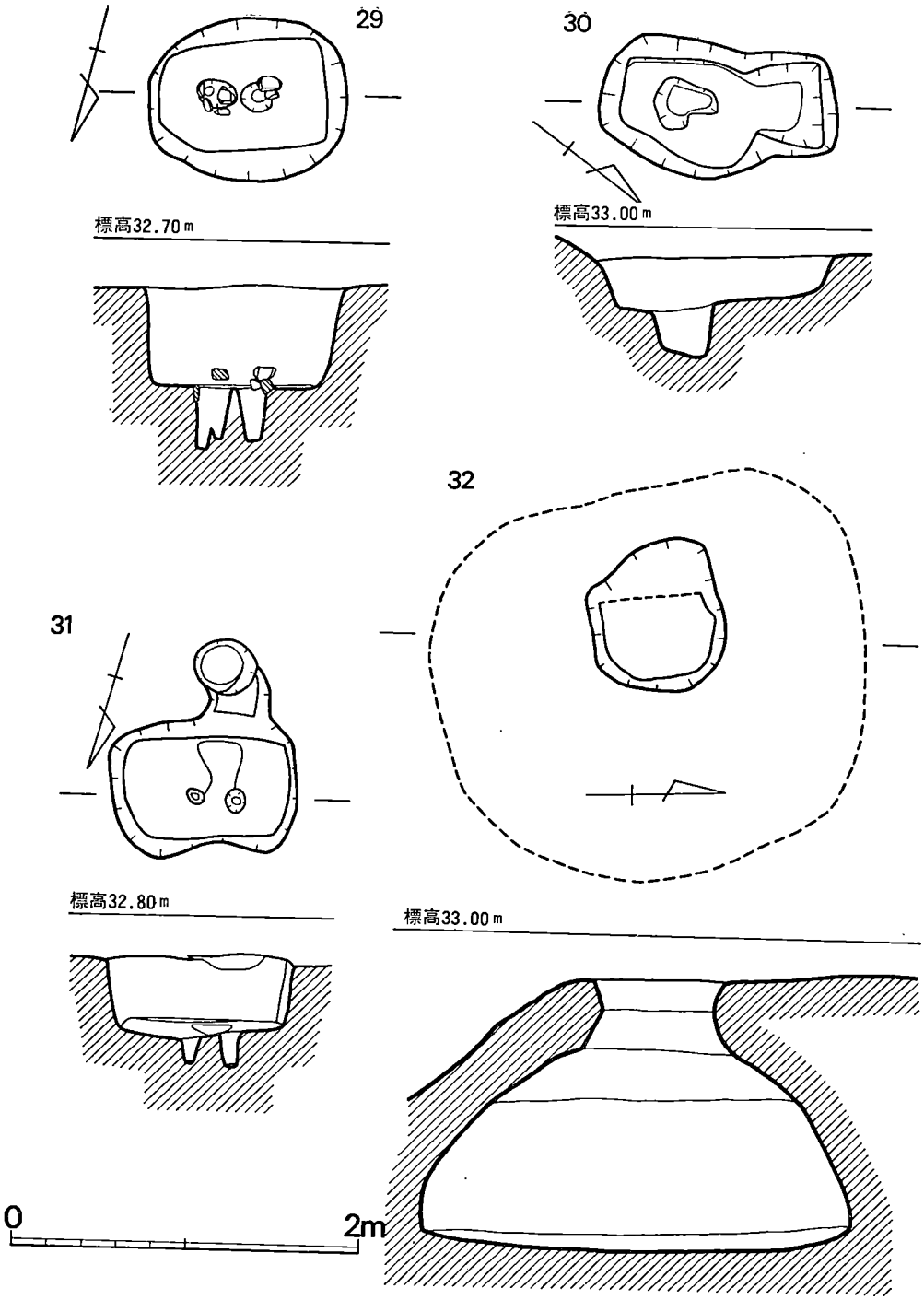
第 79 図　26・32号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

出土しなかった。

≪30号方形竪穴　(図版29，第80図)　C 5 区の東北部で，調査区域の端部に位置する。長軸1.35m，短軸の最大値 0.8mを測る瓢箪形気味の不整方形プランを呈し，深さは 0.25mである。床面は長軸1.03m，短軸0.58mを測る不整形で，北西方が高いゆるやかな傾斜を有している。東南寄りの床面に，不整円形の柱穴様ピットが約 0.3m の深さで掘り込まれている。竪穴からは何らの遺物も出土しなかった。

≪31号方形竪穴（図版30，第80図)　C 5 区の東北部に位置し，時期不明の柱穴様ピットと重複している。平面形は上縁・床面とも隅丸方形プランを呈し，前者は1.08m×0.76m，後者は0.95m×0.57mを測る。深さ0.37mで，東北部では0.45mと深い。長軸方向に 2 個の柱穴様ピットが，床面から掘り込まれており，深さは0.2m程度で直径0.1m内外の小規模なものである。南部の床面に新しい時期のピットの下端が切り込んでいる。竪穴内からの遺物の出土は皆無であった。　(小池)

≪32号袋状竪穴（図版30，第80図)　床面は西辺がやや直線的な円形を呈する竪穴で，床面径2.49m×2.20m，深さ1.53mを測る。入口は約75cm×85cmの不整方形をなし西側に偏している。壁面の内傾度は西壁側がゆるい他は極めて強く，典型的なフラスコ状をなす。土層の堆積



第 80 図　29～32号袋状竪穴実測図 (1/40)

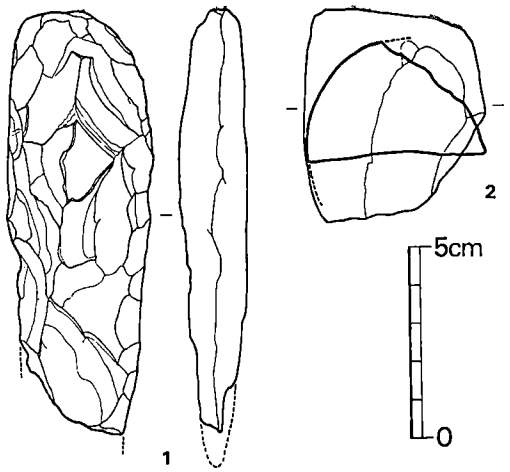
状態は中央部が高く，壁面にいくにしたがって傾斜する自然堆積の状況をよく示している。

遺物は前期末の壺・甕破片若干と磨製石斧1，石核1，磨石1が出土したのみである。

出土遺物（図版55，第79・81図）

壺形土器（第79図229・230・236）

壺A（229・230）　口縁端部内面を肥厚させた有段状口縁の大形壺である。230は端部外面上下に刻目を有す。色調は229が淡褐色，230が外面橙褐色，内面淡褐色を呈す。



第81図　32号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

底部（236）　凹み底の平底で，底径7.3cmを測る。外面ヘラ磨き，内面と底面はナデて仕上げている。色調は外面淡褐色，内面暗灰色を呈す。

甕形土器（第79図232～235）

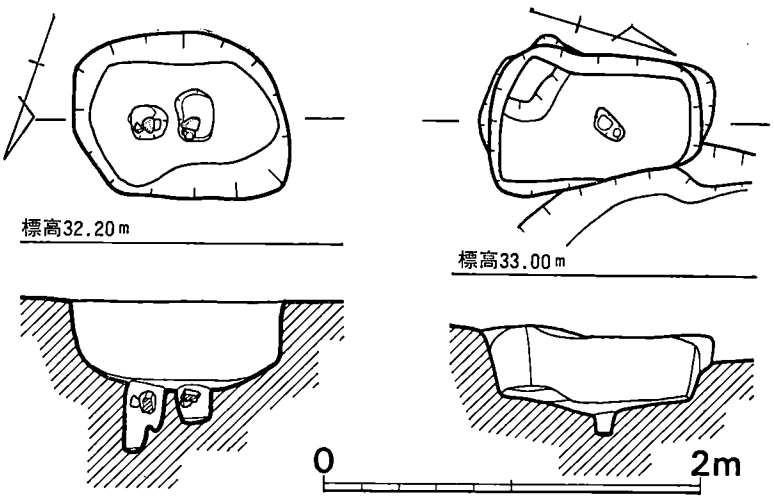
甕A（232～234）　口縁端部に刻目を有すa類（232・233）と有しないb類（234）がある。外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は234が暗灰褐色を呈す他は淡褐色を呈す。

甕C（235）　口縁端部に三角凸帯を付したもので，内外ともナデて仕上げている。端部の刻目は小さい。色調は外面赤褐色，内面暗褐色を呈す。（井上）

石　器（第81図）　1は淡黄灰色を呈す流紋岩製の石斧，短冊型を呈し刃部を欠損する。階段状剝離で整形し，側縁部は錯交剝離。12号住（第173図9）等の例からして刃部磨製石斧となるのであろう。幅3.8cm，厚さ1.8cm。2は花崗岩製磨石の小破片で，全面の磨痕顕著。（木下）

≪33号方形竪穴（第82図）　他の竪穴類と離れたB7区にあり，底面径99×56cm・深さ42cmを測る。プランは不整な長方形を呈している。ピットが2個あり，深さは20cm～36cmである。ピット内には根石と思われる小石が5個ほどみられた。この事からみると竪穴内のピットは柱穴としての機能をもっていると考えられる。土層の堆積状態は水平堆積である。やはり遺物は全く出土しなかった。（藤瀬）

≪34号方形竪穴（第82図）　C5区に位置し，北東側の一部を古墳時代後期の溝Gに切られて検出された竪穴である。底面径99×55cm，深さ39cmを測り，底面プランは南側短辺が少し広い隅丸長方形を呈す。底面は中央部に向って若干傾斜し，南西隅にはテラス状の高まりがみられる。底面中央部には小さなピット2個が穿たれている。北側のピットは浅いが，南側のピットがしっかりしていて，深さ13cmを測る。土層の堆積状態は他の方形竪穴と同様の水平堆積を



第 82 図　33・34号袋状竪穴実測図 (1/40)

示している。出土遺物は全くない。

≪**35号袋状竪穴**（図版31，第83図）　南側の一部を23号住居跡に切られている。床面は北辺が直線的になる楕円形を呈する。床面は径2.56*m*×1.68*m*，深さ1.82*m*を測る。最大径は床面より30*cm*上にあり2.23*m*を測る。深さ1.82*m*を測る。最大径は床面には東側半分に周溝がめぐり２個のピットに連なっている。壁面は北壁が垂直に立ち上がる他は彎曲が強い。

遺物は下層・中層・上層とに分かれ，特に中層に集中して検出された。東壁から南壁にかけて完形の甕・鉢・壷等７個体が並んだ状態で出土した。他に，壷・甕・鉢・蓋等多数と抉入石斧２，扁平片刃石斧１，打製石斧１，磨製石鏃１，打製石鏃１，刃器１，石核１，石製円盤１が出土した。本地区で最も多い竪穴である。　（井上）

出土遺物（図版46・47・55，第84～86・88図）

壺形土器（第84図237～245）

壷A（243・244）　243は口縁部を肥厚させた内面に段を作る壷で，頸部との境に凸帯を貼り付ける。口唇部上・下端に刻目を付す。器壁は厚く堅固である。内外とも刷毛ナデ仕上げ。色調は赤褐色。244は底部の破片資料で，器壁は厚く堅固に作られている。内面ナデ，外面は刷毛のあと粗い磨きを施こす。

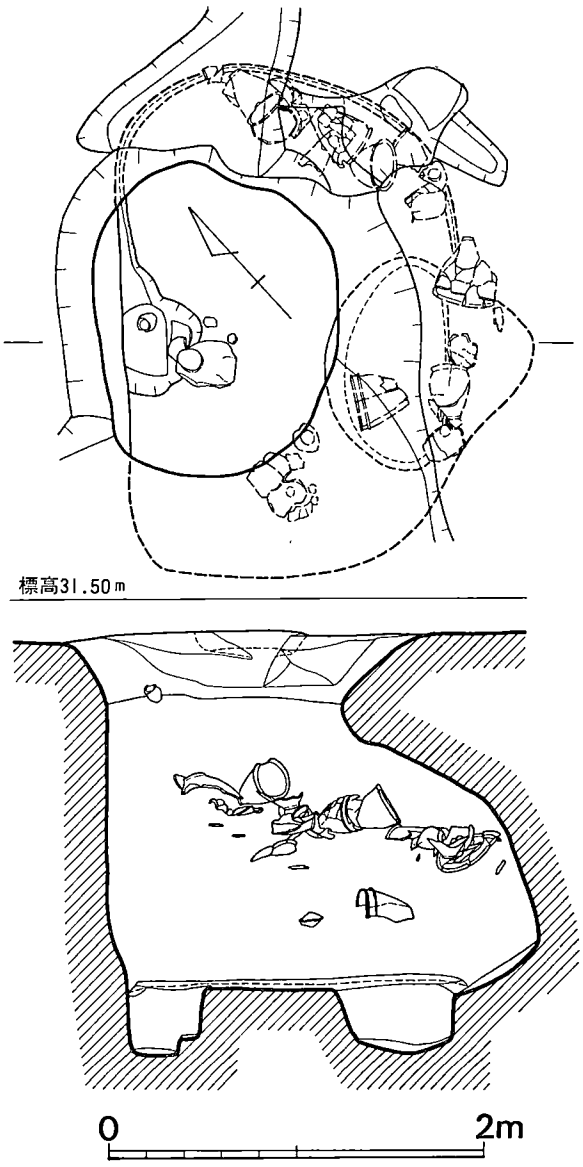
壷B（242）　口径18.4*cm*を測る壷で，肩部にヘラ描きの有軸羽状文を巡らす。口縁部内面に沈線状の緩い段を作り，頸部との境には三角凸帯を付す。内面ナデ，外面は磨かれる。色調は淡褐色。

壷E（237・238）　237は径6.4*cm*を測る極小形の壷で，口縁部の返りは短い。内外ともナデ

て調整される。色調は淡灰褐色。238は底部の破片資料で，作りは粗く手捏を思わせる。内外ともナデ調整。

壺F（245） 口径12.8cmを測る無頸壺で，口縁部と肩部の境に2個ずつ対の紐通し穴がみられる。内面ナデ，外面ヘラ研磨を施こす。胎土は精良，色調は淡褐色。

底部（239～241） 壺C・Dタイプに属する（239・240）と，壺B・Cタイプに属する（241）がある。全て内外ともナデられ，特に外面は丁寧に調整される。

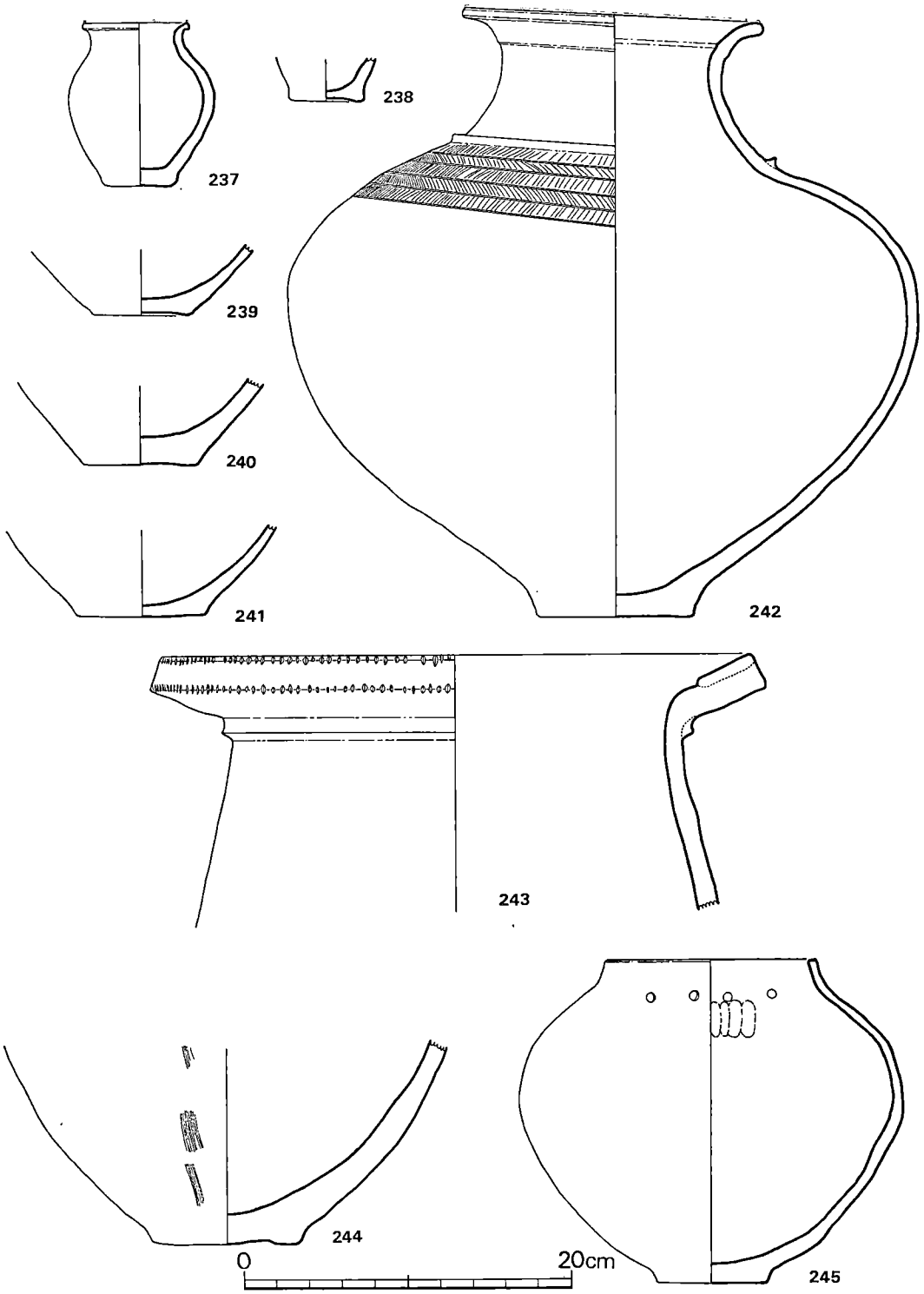


第83図 35号袋状竪穴実測図（1/40）

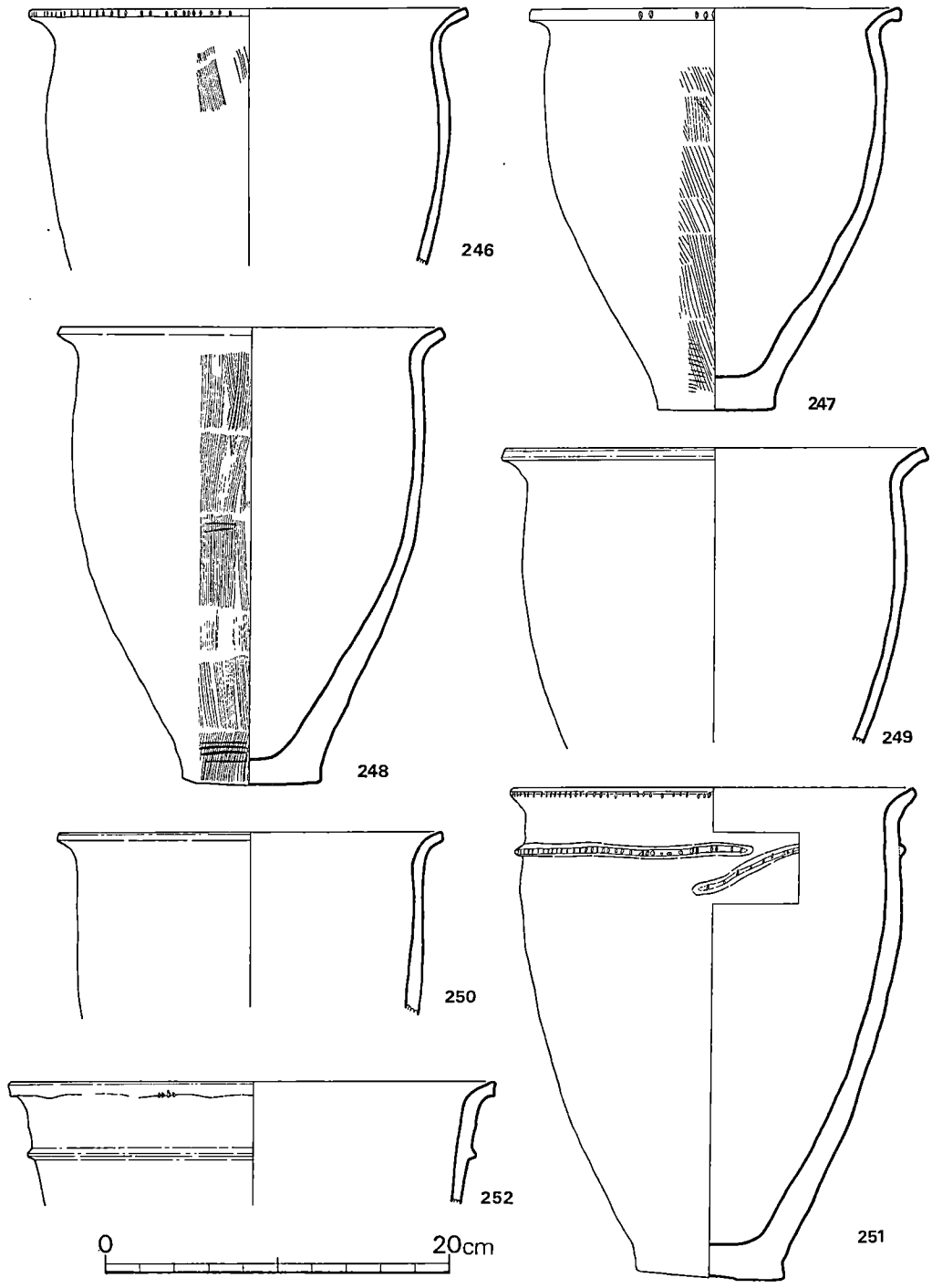
甕形土器（第85・86図246～256）

甕A（246～250） 口縁端部に刻目をもつa類（246・247）と，もたないb類（248～250）がある。246は口径25.3cmを測る甕で，口縁の返りは緩く肩部にかけて膨らむ。外面には部分的に煤が付着している。247は径21.6cmを測る比較的器壁の厚い甕で，内面は刷毛のあとナデ，外面には刷毛を施こす。色調は底部付近が赤褐色で胴部は灰褐色。248は口径22.4cmを測る比較的器壁の厚い甕で，内面ナデ，外面には刷毛を施こす。外面は煤の付着が著しく，内面にも黒い付着物がみられる。色調は底部付近が明褐色で胴部は淡黒褐色。249は口径24.6cmを測るやや胴部が膨らみ気味の甕である。内面ナデ，外面刷毛ナデ仕上げ。色調は暗灰褐色250は肩部から胴部への張りがない甕で，口縁部付近はヨコナデされる。色調は暗灰褐色。

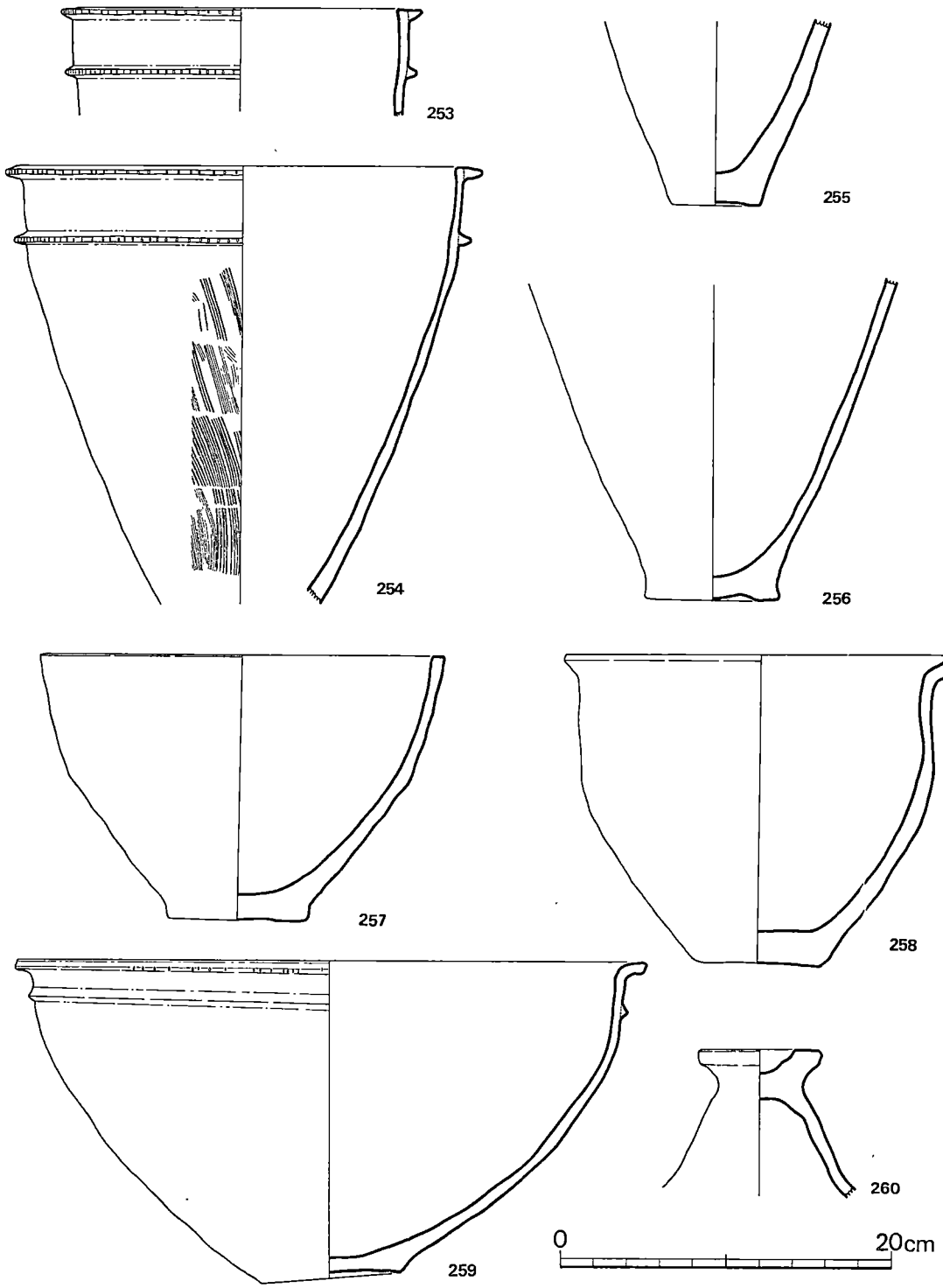
甕B（251・252） 口縁端部と口縁部下の凸帯に刻目を有するa類（251），口縁端部のみに刻目を付すもの（252）がある。251は口径23.5cmを測る非常に器壁の厚い甕で，凸帯は連



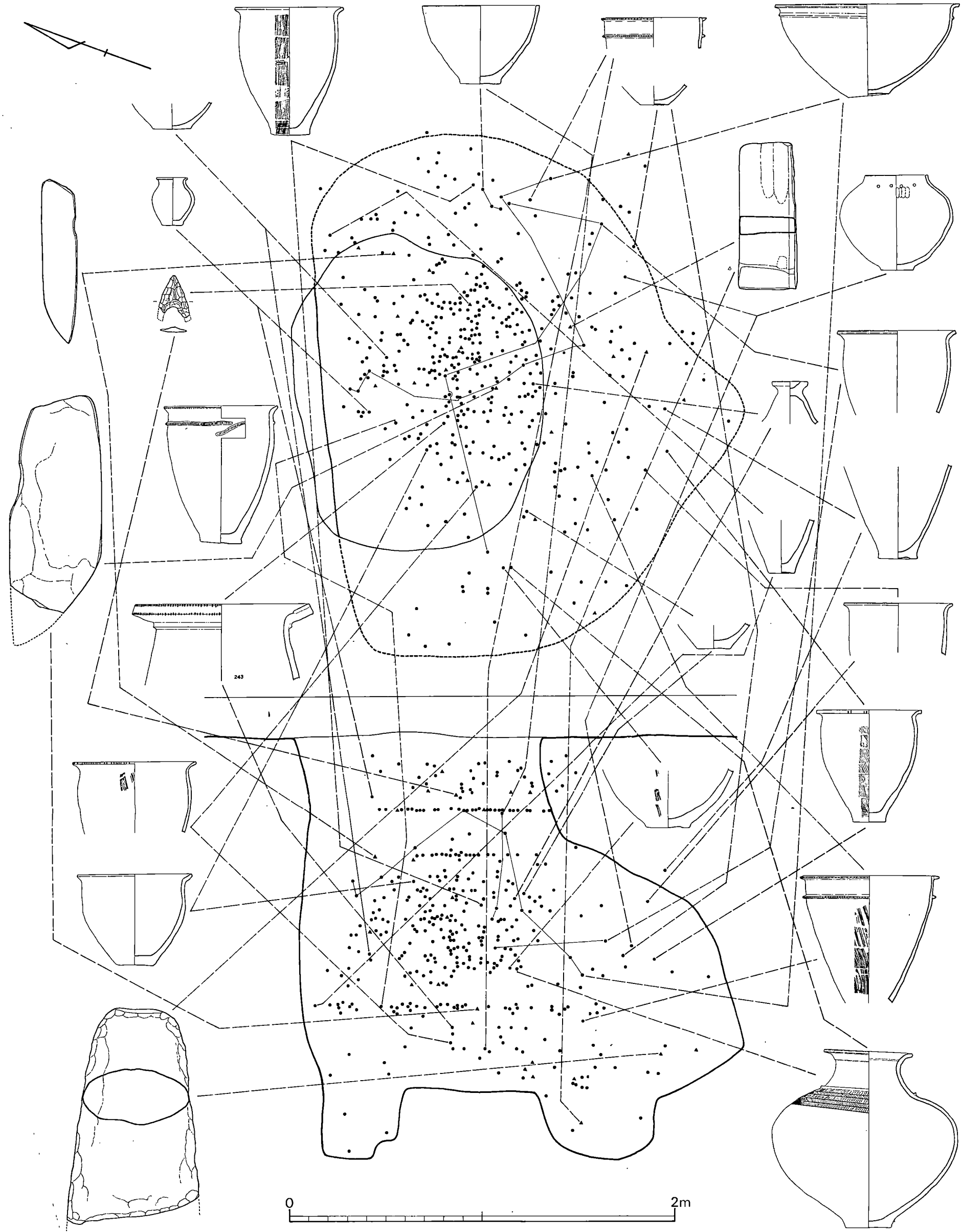
第 84 図　35号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第 85 図　35号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)



第 86 図　35号袋状竪穴出土土器実測図 3 (1/4)



第 87 図　35 号 袋 状 竪 穴 出 土 遺 物 分 布 図 （遺構1/20, 遺物土器: 1/6, 石器 : 1/2）

結されず交叉して終る。口縁部の返りは緩く，凸帯は太くにぶい。外面摩耗しているが一部に刷毛の痕跡を認める。色調は淡灰褐色。252は口径27.6cmを測る甕で，刻目は口縁端部に一部施こされるのみで凸帯にはない。口縁部の返りは短かい。外面は凸帯を境に上はナデられ，下は粗い刷毛が施こされる。

甕C（253・254）　253は口径21.6cmを測る甕で，口縁部上端はやや凹みぎみの平坦面を作る。内面ナデ，外面は凸帯より上をヨコナデ，下は刷毛を施こす。色調は淡灰褐色。254は口径28.6cmを測る甕で，胴部は膨らまずすぼまる。口縁端部と口縁下に横付けされる凸帯は長い。内面ナデ，外面は口縁下は口縁下の凸帯より上をヨコナデ，下は刷毛を施こす。

底部（255・256）　255は底部の破片資料で，器壁は厚く胴部にかけての膨らみを欠く。色調は明褐色。256は胴下半を有する底部の破片資料で，器壁は比較的薄い。内面に焦げたような黒い付着物がみられる。内面ナデ，外面は摩耗のため詳細不明。色調は明褐色。

鉢形土器（第86図257～259）

鉢B（258）　口径23.7cmを測る鉢でb類に属する。口径に比し腰が高く，口縁部は内反り気味に返る。外面には煤の付着が一部みられる。器壁は剝落が著しく詳細は不明であるが，一部に丁寧なナデを認めることができる。色調は明褐色。

鉢C（259）　口径38.1cmを測る鉢でa類に属する。口縁部の返りは急で，口唇部上端はヨコナデによって面取りされ，刻目は下端に限られる。内外面とも丁寧なナデ仕上げ。色調は淡褐色を呈す。

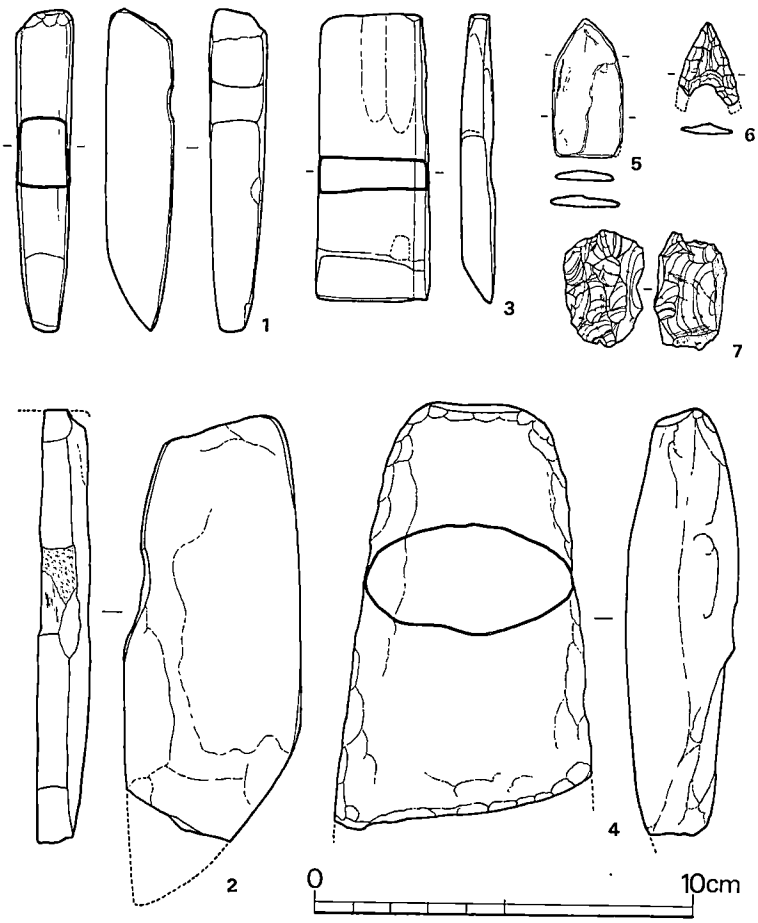
鉢H（257）　口径24.4cmを測る単口縁の鉢で，その形態は壺形土器の胴下半部によく似ている。内面ナデ，外面は剝落が著しく詳細不明。色調は淡灰褐色。

蓋形土器（第86図260）

傘形の蓋の破片資料で，内面ナデ，外面は刷毛のあとナデ仕上げ。色調は橙褐色で，焼成は良好である。　（石橋）

石　器（第88図）　1・2は抉入片刃石斧であるが形態が異なる。前者は小型の方柱状片刃に抉部を持つ完形品で長さ8.25cm，幅1.4cm，厚さ中央部で1.8cm，抉部の幅0.9cm，重さ39.2g。刃部の幅は先端で0.6cmしかない。抉入片刃石斧では最小の部類に属する。後者は柱状片刃石斧にやはり抉部をもつもので，摂理から板状に割れた表皮の破片で刃部は欠損する。他に同一と思われる破片が2点出土しているが接合しない。抉部は2.25cmで敲打調整と研磨部が共存する。使用前に破損し破棄された可能性が強い。両者とも頁岩製だが2は泥岩に近く脆い。3は扁平片刃石斧の完形品，淡青灰色硬質の頁岩製で，縦方向に摂理が走る。長さ7.45cm，幅は頭部で2.7cm，刃部で3.0cm。刃部近くで厚みを増し0.9cm，頭部で0.5cm。断面は長方形を呈し，刃部は幅1.1cmで片側に拡い。刃角は35°と鋭い。重さ37.3g。4は蛤刃になると思われる石斧の未製品で頭部から胴部破片。全面に敲打調整がみられる。5は砂岩製の平基無茎式磨

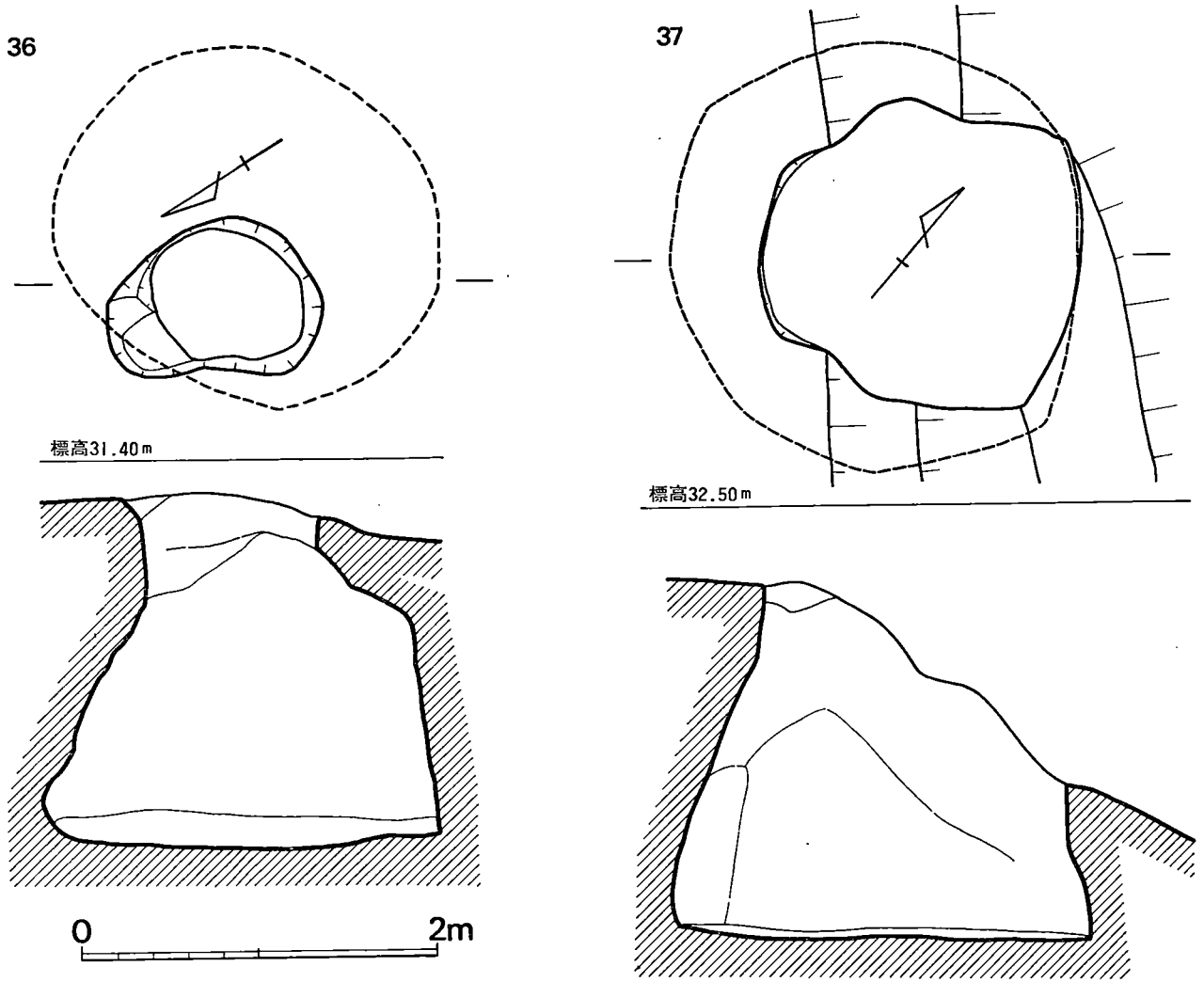
製石鏃の完形品。長さ3.6cm，最大幅1.9cmで厚さは2.8mmと薄手である。先端鈍く，背の稜が先端部に若干みられる。重さ2.65g。6はサヌカイト製の凹茎無茎式石鏃で両端を欠損する。風化著しく，剝離が不明な箇所がある。7は黒曜石の小さな角礫を利用した石核で幅広な剝片を剝出している。他に黒曜石製刃器，円形石器が出土している。　（木下）



第 88 図　35号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

≪**36号袋状竪穴**（図版32，第89図）　台地北西端に位置し，かなり残存状態の良い貯蔵穴である。底部は219×187cmを測り，楕円形プランを呈する。深さは196cmである。入口は片側がやや崩壊して広くなっているが，復原径は約85×70cmでようやく人間一人が出入り出来る程である。方向では南西部に片寄っている。断面形状は，片面が入口に近づく程狭くなり斜めに立ち上がっているが，もう1つの片面は底部から約120cmの所で大きく屈曲し家形になっている。又，他の断面でみると底部から入口にかけては迫り持ち式で家形に近い。これは形状の違う1面に出入口を設けた為であろう。土層の堆積状態は地山の大きなブロックが混じっており，崩壊して放棄された事を示している。3～6層にかけて切られているが，これは後世の所為であろう。出土遺物は甕形土器の破片が若干みられたが，実測出来るものはない。（藤瀬）

≪**37号袋状竪穴**（第89図）　D4区崖ふち付近から検出されたもので，西側上半部は完全に破壊されていた。床面はほぼ円形を呈し，床面径2.41m×2.24m，深さ2mを測る。壁面の内



第 89 図　36・37 号袋状竪穴実測図 (1/40)

傾度は現存する東壁からみてさほど強くない。

遺物は前期末の完形壺3，甕2，甑1と壺・甕破片多数，柱状片刃石斧未製品1，太型蛤刃石斧1，磨製石斧1，石核1，敲石1，土製紡錘車1が出土した。（井上）

出土遺物（図版48・55，第90～92図）

壺形土器（第90図261～271）

壺A（270・271）　270は口径38.8cmを測る大形壺の口縁部で，頸部との境はにぶい段をなす。内外とも丁寧にナデられる。色調は淡褐色。271はAタイプに属する底部で，底径12.3cmを測る。内外とも剝落が著しく詳細不明。色調は明褐色。

壺B（264・267～269）　口縁部内面を肥厚させるa類（267）と，いわゆる有段口縁のc類（264）がある。267は径23.4cmを測る内面肥厚の壺で，外面頸部との境は緩い段状をなす。口唇部の刻目はない。内面ナデ，外面は口縁部をヨコナデ，頸部には研磨を施こす。264はいわゆる有段口縁壺の破片資料で，口径20.2cmを測る。段は明瞭で，口縁は緩く外反し端部は丸く収まる。内外ともナデ仕上げ。268・269は肩部の破片資料で，平行沈線とヘラ描きの羽状文を組み合わせた文様をもつ。内面ナデ，外面には研磨を施こす。

壺D（262・263）　2点とも肥厚せず「く」字状に外反する口縁の壺で，b類に属する。262は口径12.4cmを測る。内面ナデ，外面には横位の研磨を施こす。色調は淡灰褐色。263は口径10.3cmを測る壺で，Bタイプ・b類の壺をそのまま小形にした器形を呈する。口縁部の返りに有段状の癖をわずかに残存させる。外面には横位の研磨を施こす。色調は淡褐色。

壺E（261）　口径10.1cmを測る花瓶状の壺で類例は少ない。腰高で張りの少ない胴部とラッパ状に広く頸部をなす。口縁部の屈折は短かく急で頸部との境は段に段を作る。内外ともナデ仕上げ。色調は淡灰褐色。

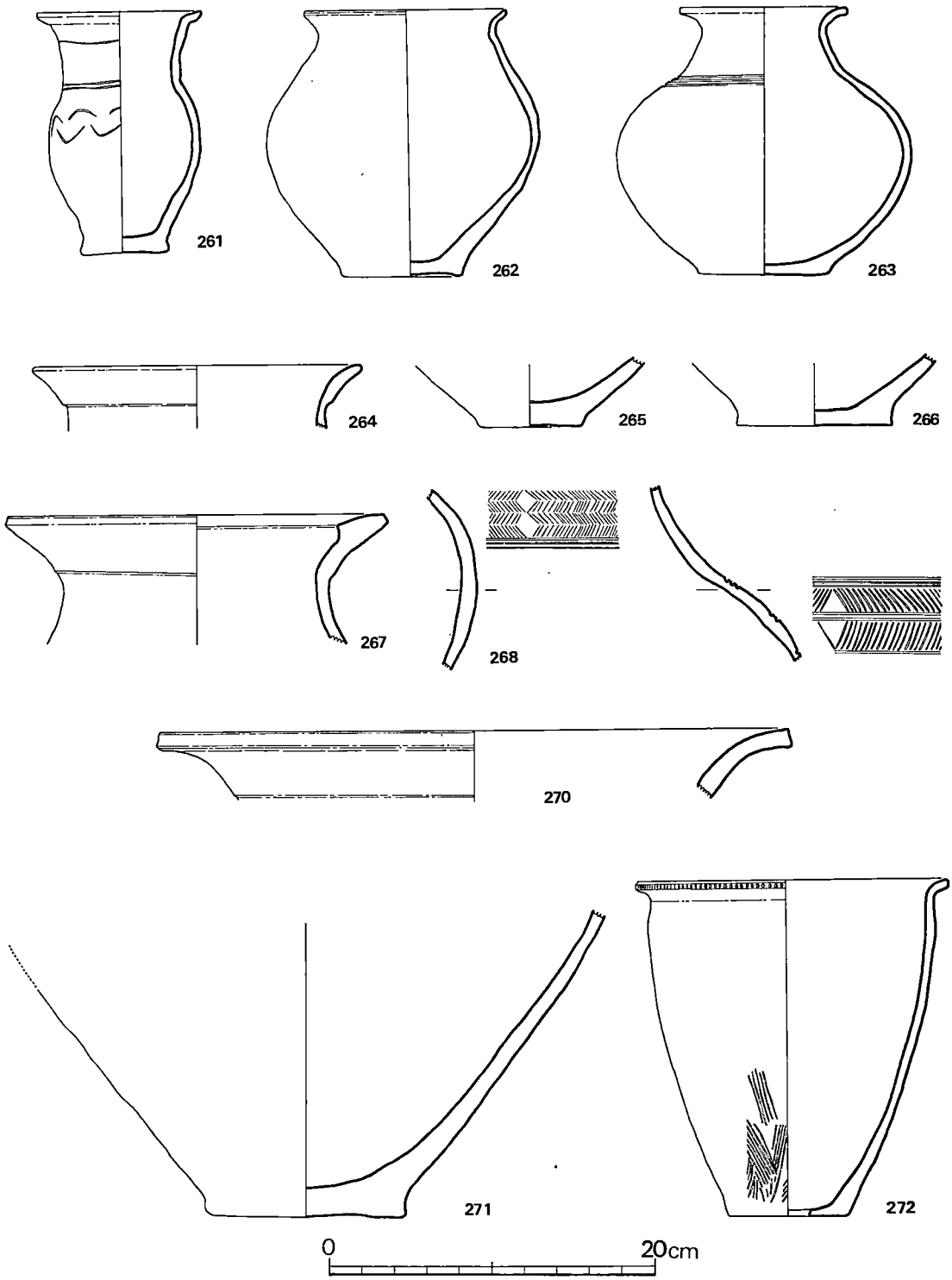
底部（265・266）　2点ともB・C・Dタイプに属する底部で，特に266はBタイプの可能性が高い。

甕形土器（第91図273・274・276・278）

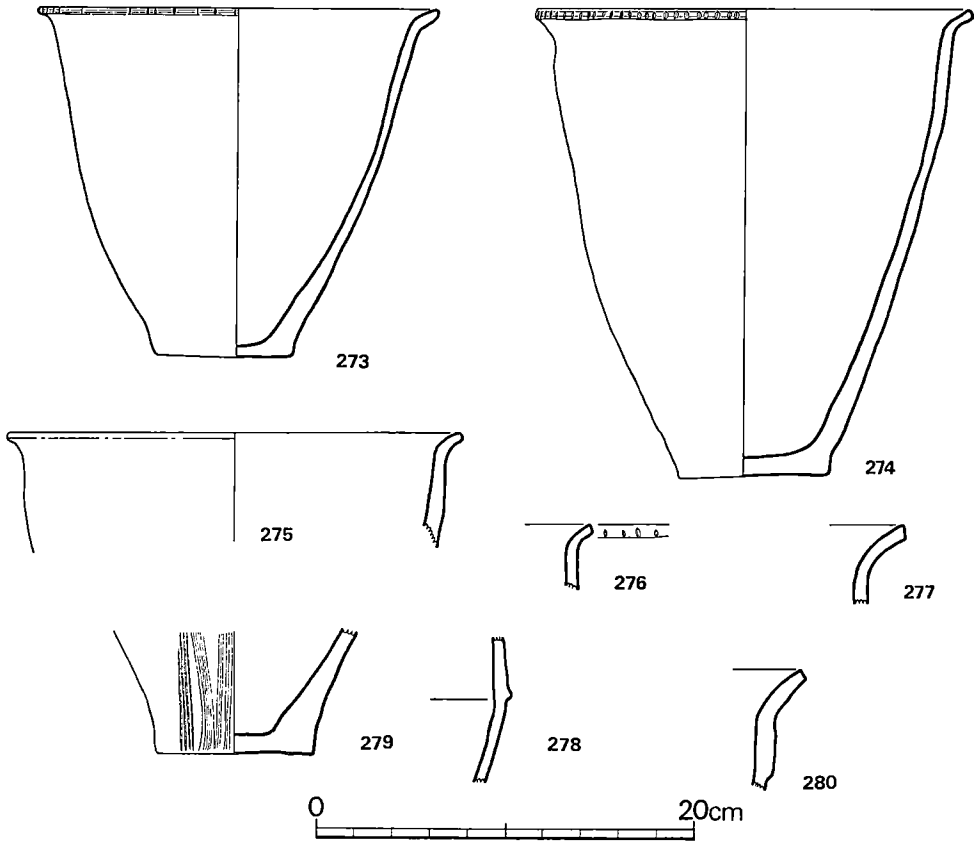
甕A（273・274・276）　3点とも口縁端部に刻目を有するa類である。273は口径21.0cmを測る胴が張らない，口径に比して器高の低い甕である。内面ナデ，外面刷毛ナデ仕上げで，表面には亀甲状のヒビ割れがみられる。色調は褐色。274は口径23.0cmを測る甕で，胴部の張りはなく底部に到る。器壁は全体にナデられる。表面には亀甲状のヒビ割れがみられる。内面に黒い付着物があり，外面には煤がみられる。色調は暗赤褐色。276は破片資料で，内面ナデ，外面刷毛仕上げされる。色調は暗褐色。

甕C（278）　胴部の破片資料で，緩く屈折する胴部に凸帯を貼り付ける。内面ナデ，外面刷毛ナデ仕上げ。外面には煤の付着がみられる。

底部（279）　破片資料で内面ナデ，外面刷毛が施こされる。色調は暗褐色。



第 90 図　37号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第 91 図　37号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

甑形土器（第90図272）

口唇部上端はヨコナデのため面取りされ，刻目は下端に限られる。底部の穿孔は焼成後である。内面ナデ，外面刷毛ナデ仕上げ。

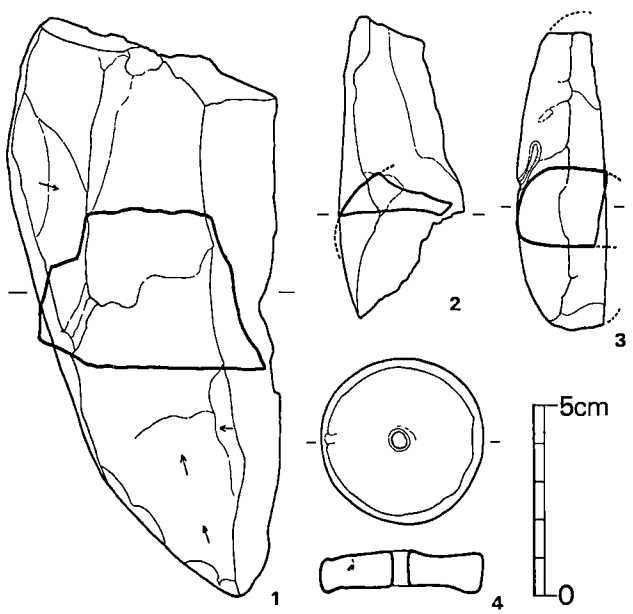
鉢形土器（第91図275・280）

鉢B（275）　口径24*cm*を測る鉢でb類に属する。内外とも丁寧なナデを施こす。

鉢F（280）　口縁部の破片資料で，内面は丁寧なナデ，外面には研磨を施こす。色調は赤褐色を呈す。（石橋）

石器・土製品（第92図）　1は泥岩で，台形に近い断面をもつ。全体は周辺から荒い剝離調整を加えているが，左辺に原面を残す。形状等からして柱状片刃石斧の未製品であろう。2は玄武岩製の太型蛤刃石斧の胴部小破片。3は棒状の石器で下端に敲打痕がみられるところから敲石として使用されたのであろう。4は土製完形の紡錘車で径4.25*cm*，厚さ1.0*cm*，重さ20.5*g*。他に磨製石斧の胴部小破片と黒曜石製の残核が出土した。（木下）

≪38号袋状竪穴（図版32，第93図）　台地北端斜面にみられた袋状竪穴である。底面径255×253cm・深さ165cmを測り，不整な円形を呈する。斜面での発見のため入口の状態は不明であるが，ほぼフラスコ状の断面をしていたと思われる。土層の堆積状態は不規則で大きなブロックを含んでいる。更に土砂が北から南に傾斜をもって堆積している。この事は北側の入口並びに壁面が崩壊した事を意味している。出土遺物は壺形土器の完形品1点と底部破片1点がみられた。



第92図　37号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

出土遺物（図版49，第94図）

壺形土器（第94図281・282）

壺D（281）　口縁部が短かくわずかに外反し，胴部から頸部にかけては明瞭な変換点を有さない壺形土器である。沈線も文様も施していない。調整技法は口縁部を横方向にナデており，底部は指で押さえた後横にナデを施している。その他胴部には細かい縦方向の刷毛で調整している。内面は上部に指でナデ上げたあとがみられる。胎土は良好で，長石・石英を含んでいる。やや赤みの強い褐色を呈し，焼成は普通である。

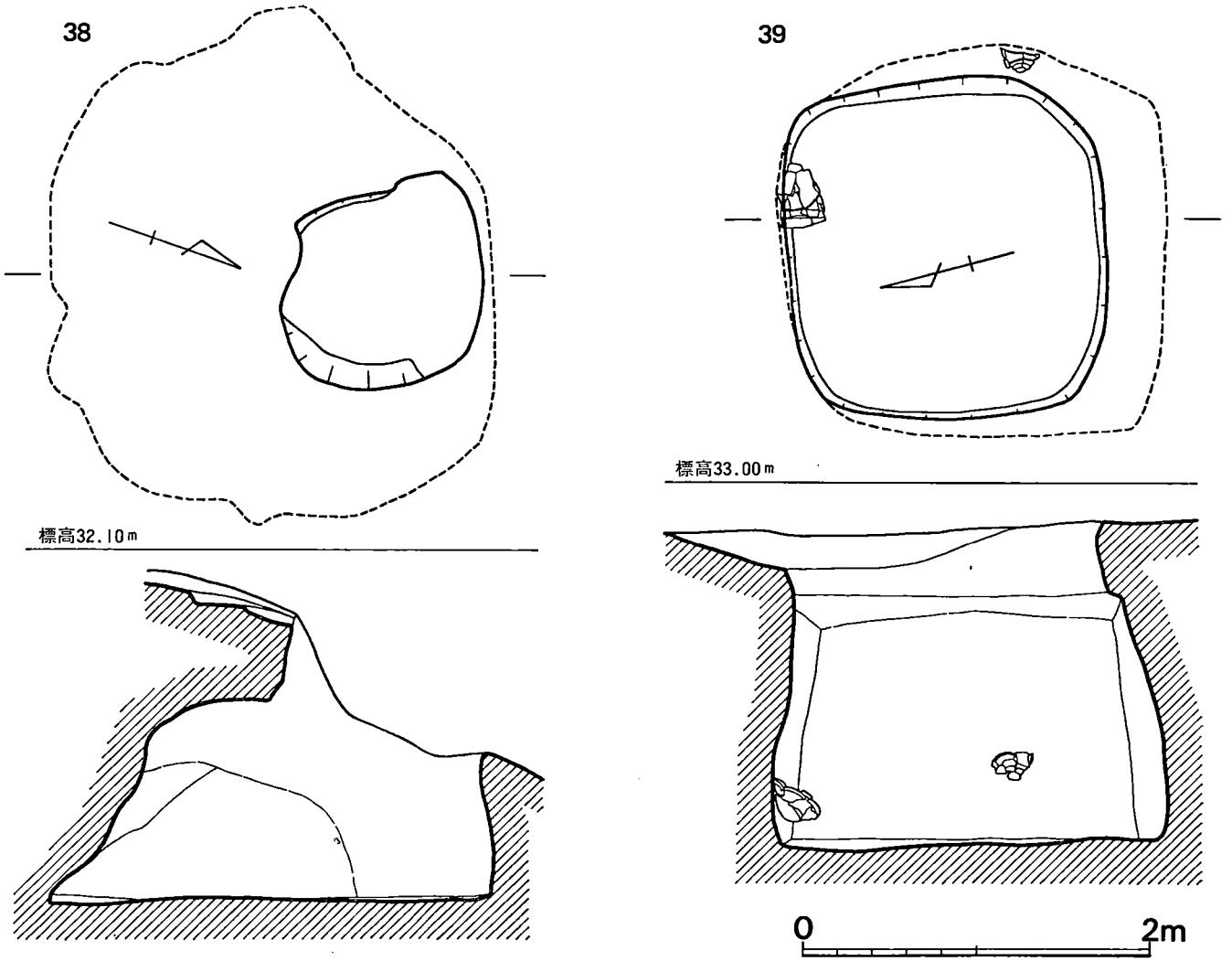
底部（282）　底部径約7.5cmを測る壺形土器の底部破片である。調整は器面が剝落しており不明である。胎土には長石・石英粒を含み，色調は赤褐色，焼成は普通の土器である。（藤瀬）

≪39号袋状竪穴（図版33，第93図）　台地中央部に位置し，弥生時代の土器溜めに切られている竪穴である。底面は192×173cm・深さは上部がカットされているが約180cmを測る。多角形或いは不整方形とも言うべきプランを呈している。断面形状は上部が削平されて不明確だが，寄せ棟的な構造をもっていたと推定される。出土遺物は壺2個体分・甕7個体分で，石器は石斧2・石鏃1・石核1が出ている。

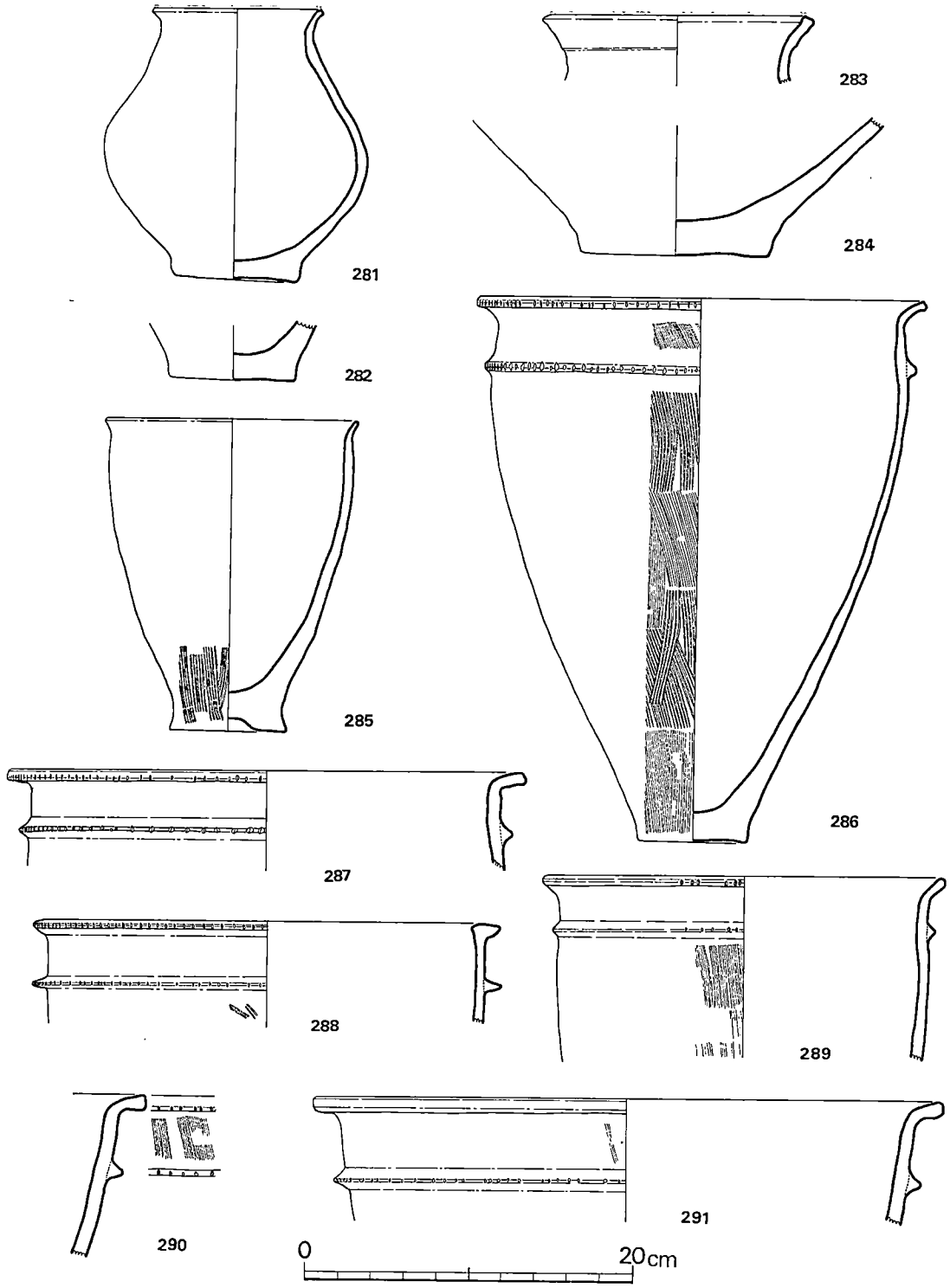
出土遺物（図版49・55，第94・95図）

壺形土器（第94図283・284）

壺C（283）　口縁下部にわずかに段を有しているのでDa類となる。復原口径16.4cmを測り，口縁はあまり外反しない壺形土器である。口縁内面は少し凹みがみられる。調整技法につ



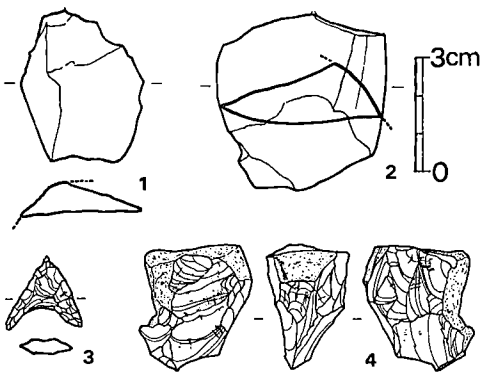
第 93 図　38・39号袋状竪穴実測図 (1/40)



第 94 図　38・39号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

いては内外面とも剝落が著るしく不明である。胎土には長石・石英粒含み，色調は淡褐色を呈している。焼成は普通。

底部（284） 大形壺の底部片であろう。径は約11.5cmを測る。若干あげ底になっている。器面は内外面共刷毛ナデで調整している。長石・石英粒を含み，色調はくすんだ暗褐色を呈している。焼成はあまり良くない。



第95図 39号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

甕形土器（第94図285～291）

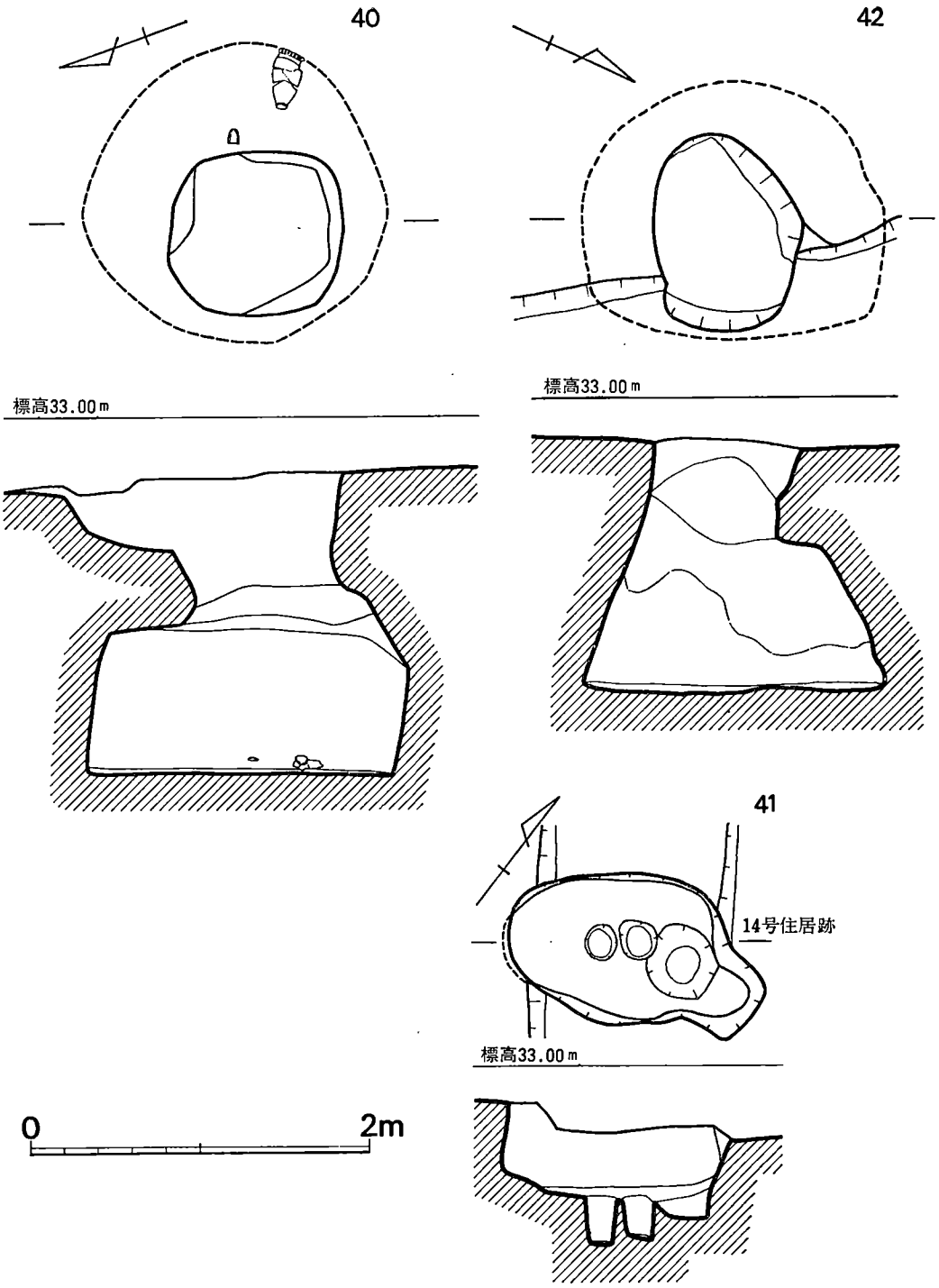
甕A（285） 口径15.4cm・器高18.6cmを測り，甕Ab類に属する。口縁部は短かく外反し，上部に行くほど細くなっている。胴部はあまり膨らまず，底部へと移行している。底部はあげ底となっている。調整は口縁部内外面共指による横ナデを施し，胴部は縦位の刷毛を施している。外面上部には煤が付着し，内面には炭化物らしきものが付着している。胎土には粗い長石・石英を含んでいる。

甕B（286・287・289～291） 口唇部に刻目を施す土器（286・287・289・290）と施さない土器（291）とがある。口径は286が27.4cm，287が31.7cm，289が24.4cmである。286は完形品である。器高32.4cmを測る。口唇部の刻目は小さく切ったような状態を示し，凸帯は切った後横に押さえたような刻目である。内外面共にていねいな刷毛調整を行っている。胎土には長石・石英を含み，色調は暗褐色を呈している。器壁外面には二次焼成時の煤が付着し，内面には炭化物らしきものが付着している。その他の土器は287が赤みがかった褐色，289が外面暗褐色・内面明褐色を呈している。焼成は全てあまり良くない。291は凸帯に刻目をもっているが，口唇部には施さずナデている。胎土その他については他とほぼ同様である。

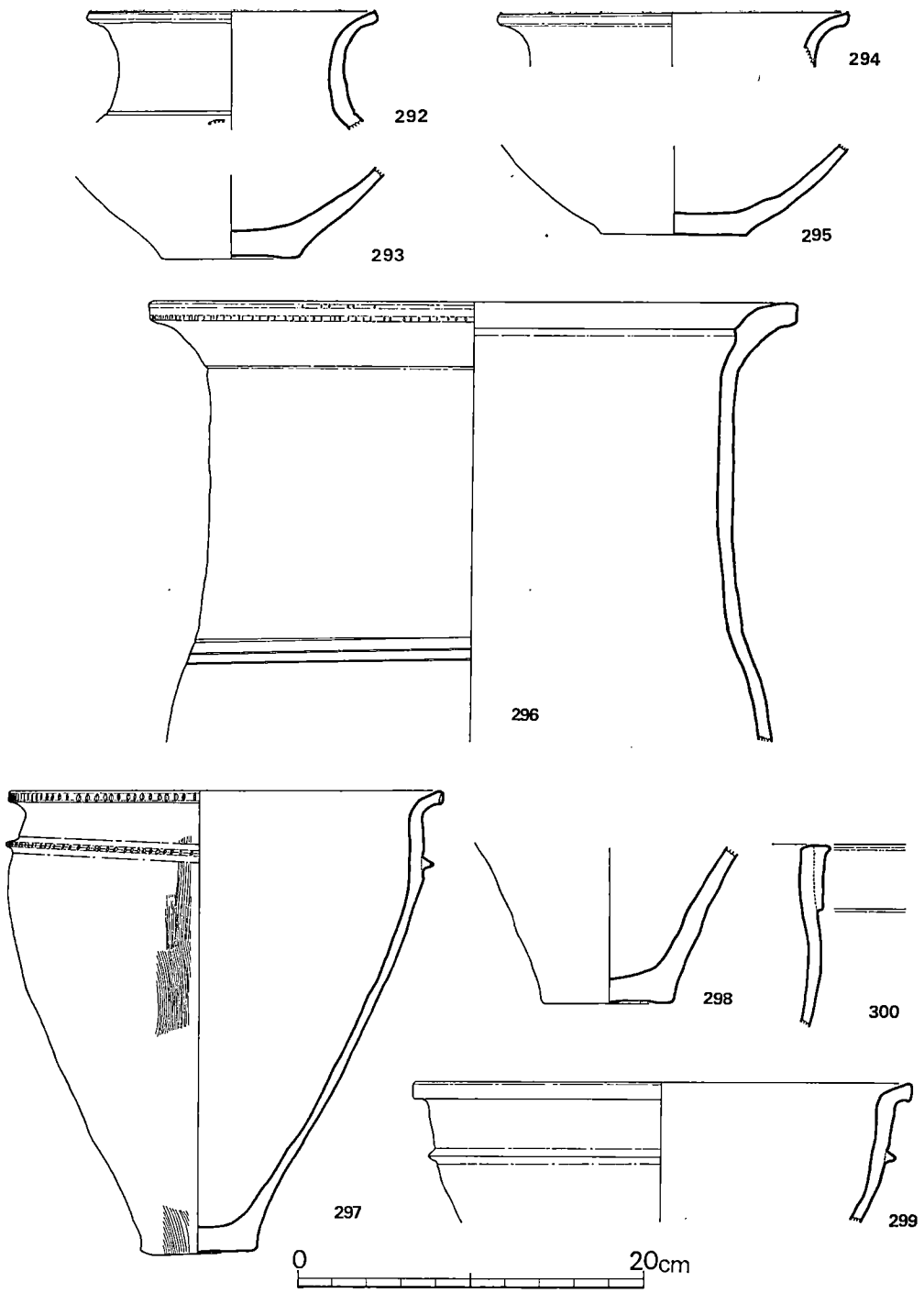
甕C（288） 刻目を施している。復原口径は28.3cmである。凸帯下に縦位の刷毛を施している部分以外は横位の刷毛ナデをしている。胎土には長石・石英の他金雲母を含んでいる。色調は淡褐色を呈し，焼成はやや良好である。（藤瀬）

石 器（第95図） 1・2は蛤刃石斧の小破片。両者とも玄武岩製。3はサヌカイト製打製石鏃で凹基無茎式。先端部を若干欠損する。4は黒曜石製の石核で，自然面を打面とし，幅広な剝片を剝出している。（木下）

≪40号袋状竪穴（図版33，第96図） 台地南側C6区に位置する。底面形状は178×172cmの円形を呈している。深さは173cmを測る。入口が14号住居跡により壊されているが，断面はフラスコ状であろう。出土遺物は多い。実測可能な前期末の壺破片5個体分と甕完形品1・破片2点更に鉢1個体が土器としては出土している。石器としては石斧1・石庖丁1・石鏃1とそ



第 96 図　40～42号袋状竪穴実測図 (1/40)



第 97 図　40号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

の他が出土している。（藤瀬）

出土遺物（図版49・55，第97・98図）

壺形土器（第97図292～296）

壺A（296）　復原口径37.4㎝を測る。頸部の立ち上がりは強く，口縁部との境に段をもち，胴部との境には3条の沈線を有する。器壁外面は研磨している。胎土には砂粒を含み，色調は橙褐色で，焼成良好な土器である。

壺B（294）　復原口径20.2㎝を測るBb類に属する壺形土器破片である。接合部より割れている。口唇部は横にナデている。胎土は砂粒を含み，色調は器面が摩耗しているため明確でないが橙褐色をしていると思われる。焼成はやや良好である。

壺C（292）　復原口径16.6㎝を測り，「く」字状に外反している壺である。口縁部は横にナデて仕上げている。肩部にはヘラ描き沈線を1条もち，その下は貝殻腹縁を利用した円弧文が施されている。胎土には砂粒・金雲母を含んでいる。色調は淡灰色を呈し，焼成はあまり良くない。

底部（293・295）　いずれも底部径は8㎝内外で，壺B類に該当する壺の底部であろう。293は少しあげ底で，295はそうではない。器面調整はどちらもヘラ磨きをしているが，293は若干焼けている。胎土は類似しており細かく砕いた石英・長石・金雲母を含んでいる。色調は293が火を受けている部分が赤褐色その他黄褐色，295が外面橙褐色・内面暗橙褐色を呈している。295は焼成かなり良好である。

甕形土器（第97図297・298）

甕B（297）　口縁部・凸帯共に刻目を施し，口径24.9㎝・器高26.2㎝を測る甕である。器外面は胴上部が上から下方向・胴下部が下から上への刷毛が施されている。口縁部と凸帯間はわずかに刷毛が残るがその後ナデている。内面にはナデを施している。二次焼成を受け明赤褐色に変化し煤が部分的に付着している。

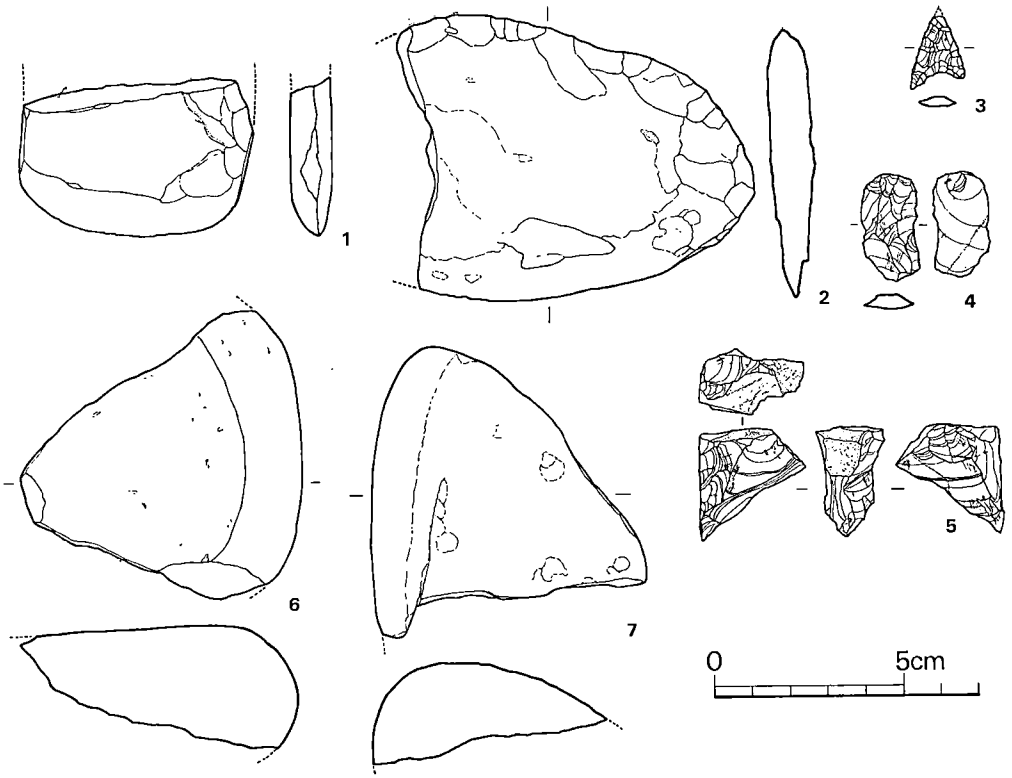
底部（298）　やや上げ底を呈する甕の底部片である。器面の剝落が激しい為調整は不明。砂粒を多量に，金雲母を少量含んでいる。焼成良好で，色調は外面暗褐色・内面橙褐色を呈する。

鉢形土器（第97図299・300）

鉢C（299）　復原口径28.5㎝を測るCa類の鉢である。口唇部・凸帯共に刻目を施している。外面は刷毛のあとナデて，内面は指ナデて調整している。胎土には砂粒含み，色調は外面暗茶褐色・内面橙褐色である。

鉢G（300）　煤の付着のみられる鉢形土器である。器面は剝落が著しく不明である。胎土には砂粒を含み，色調は淡褐色，焼成は普通である。（藤瀬）

石　器（第98図）　1は青灰色頁岩質の扁平片刃石斧の刃部破片。6号（第29図1）や35号（第88図3）袋状竪穴出土の扁平片刃石斧と異なり，刃部が外彎している。幅6㎝，厚さ1.1

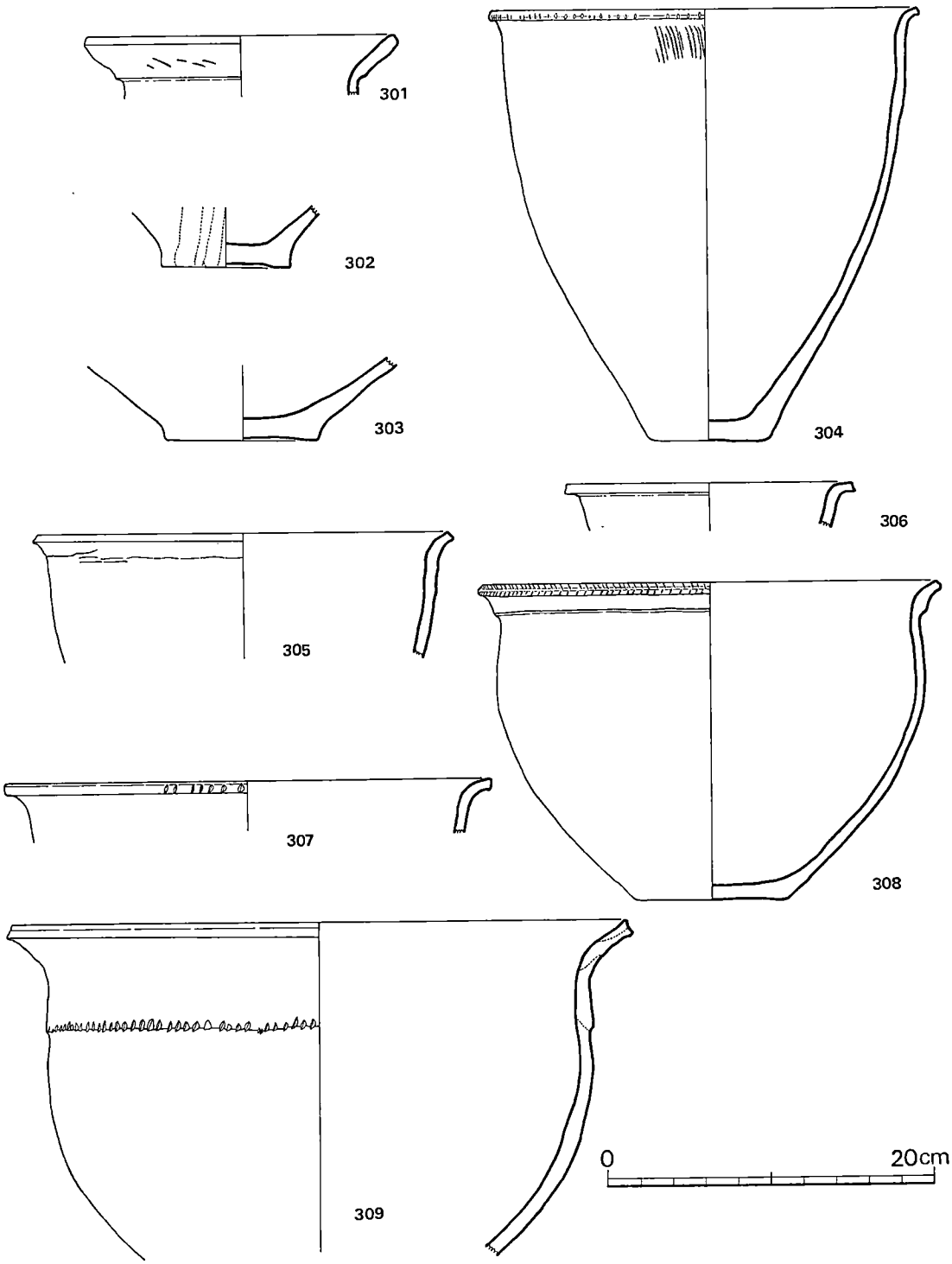


第 98 図　40号袋状竪穴出土石器実測図 (1/2)

cm。刃部は刃こぼれが著しく，右側縁は欠損後，再研磨している。2は大型石庖丁片でしっとりした感じの暗赤褐色頁岩を用いている。背縁は表裏からの交互剝離のままで鋭っており体部は剝片時の凹凸がそのまま残る。一方，刃部は非常に丁寧に研磨されており，部分的に刃こぼれが観察されるところから，使用された可能性が強い。紐孔はこの破片には無い。幅7.4*cm*で，1.1*cm*と部厚い。 3は黒曜石の横長剝片を用いた凹茎無茎式の打製石鏃で片脚式である。先端ならびに左脚端部を欠損する。4は刃器状剝片で，残された打面は長さ4.4*mm*，幅1*mm*と非常に小さい。5は楔形の石核。4・5とも黒曜石製。6・7は砂岩の長円形の磨石破片で，特に6の周辺は整形時の敲打痕が残り，体部は磨痕。他に黒曜石石核が出土。　　(木下)

≪41号方形竪穴（図版34，第96図）　C6区の東南部に位置し，弥生後期の14号住居跡と時期不明の柱穴様ピットによって切られている。このため上縁部の形状は明確ではないが，長径1.3*m*，短径0.9*m*程度の楕円形を呈すと考えられる。床面は不整長方形で，長軸0.9*m*，短軸0.7*m*を測る。深さの最大値は0.56*m*である。

2個の柱穴様ピットが長軸方向に並び，直径0.2*m*前後，深さ0.25*m*前後に床面を掘り込んでいる。遺物は何らみとめられなかった。



第 99 図　42号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

≪**42号袋状竪穴**（図版34，第96図）　C６区の東北隅に位置し，17号住居跡にその上縁東北部を切られている。上縁から垂直あるいは内傾して下る周壁は，中途から円錐状に広がる。所謂フラスコ状を呈す竪穴であるが，西側肩部の内壁が大きくえぐられており，崩落をうかがえる。深さは1.5*m*で，床面は南北に長径を有する不整気味の楕円形プランを呈す。長径1.8*m*，短径1.5*m*を測る。出土遺物は前期末に属する土器と石核・砥石・紡錘車が各１点出土している。（小池）

出土遺物（図版49・50・55，第99・100図）

壺形土器（第99図301～303）

壺Ｂ（301）　復原口径19.4*cm*を測る有段状口縁の壺である。内外ともヨコナデで仕上げ，色調は黄褐色を呈す。内面一部に焼成時の黒斑がある。

底部（302・303）　底径は302が８*cm*，303が9.4*cm*を測り，302の底面は凹み底である。内外ともナデ仕上げであるが，302の外面には指先によりナデ上げ痕を顕著に残している。色調は302が黄褐色，303は淡褐色を呈す。

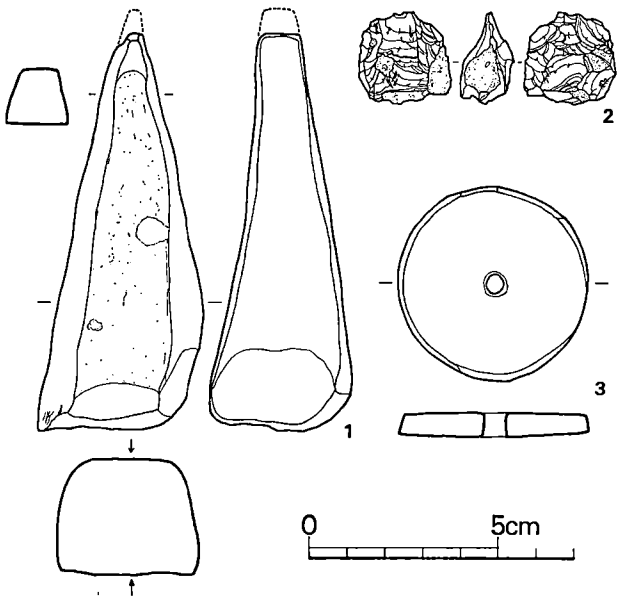
甕形土器（第99図304・305）

両者とも甕Ａタイプで，304は口唇部に刻目を付すａ類で，305は刻目を有しないｂ類に属す。304は口径26.2*cm*，器高25.6*cm*を測り，外面粗い刷毛のあとナデ，内面ナデて仕上げている。外面全体に点々と煤の付着がみられる。色調は淡褐色を呈す。

鉢形土器（第99図306～309）

鉢Ｂ（306・307）　復原口径は306が17.8*cm*，307が30*cm*を測り，307の口唇部には刻目が付されている。306が小形品のｃ類，307が中形品のｂ類に属す。両者ともナデて仕上げていて，口縁端部外面にはヨコナデによる面を作り出している。色調は淡褐色を呈す。

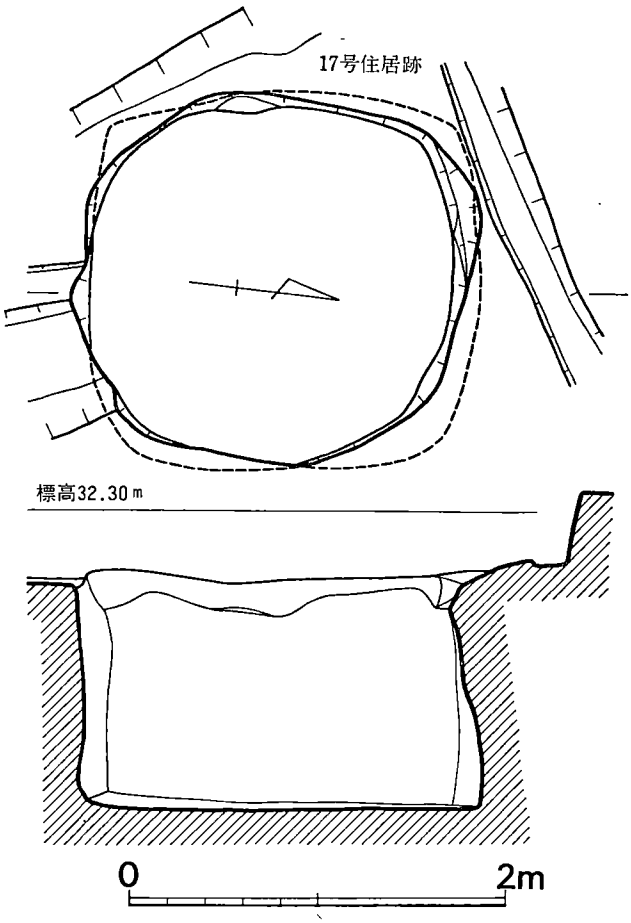
鉢Ｆ（308・309）　口縁部外面を肥厚させた鉢で，口唇部上下に刻目したもの（308）と肥厚部端部に刻目を施したもの（309）がある。308は口径28.3*cm*，器高19*cm*を測る中形品で，



第100図　42号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

309は復原口径38.4cmを測る大形品である。口縁部内外はヨコナデ，外面ヨコヘラ磨き，内面ナデて仕上げた作りの良い土器である。色調は308が明褐色，309が茶褐色を呈す。（井上）

石　器（第100図）　1は目の密な砂岩製の砥石で断面は隅の丸い台形を呈す。片方が極端に細くなるのが特色で，手持ち用砥石であろうか。重さ15.0g。2は小さな角礫を用いた石核で一面は多方向から寸づまりな剝片を剝出している。不純物の多い黒曜石製で重さ8.1g。3は青灰色凝灰岩製紡錘車の完形品。径4.9cm，孔径0.6cm，厚さ6.5mm，重さ24.5gを測る。体部及び周縁の磨きは丁寧で，所々に磨き稜が入る。（木下）



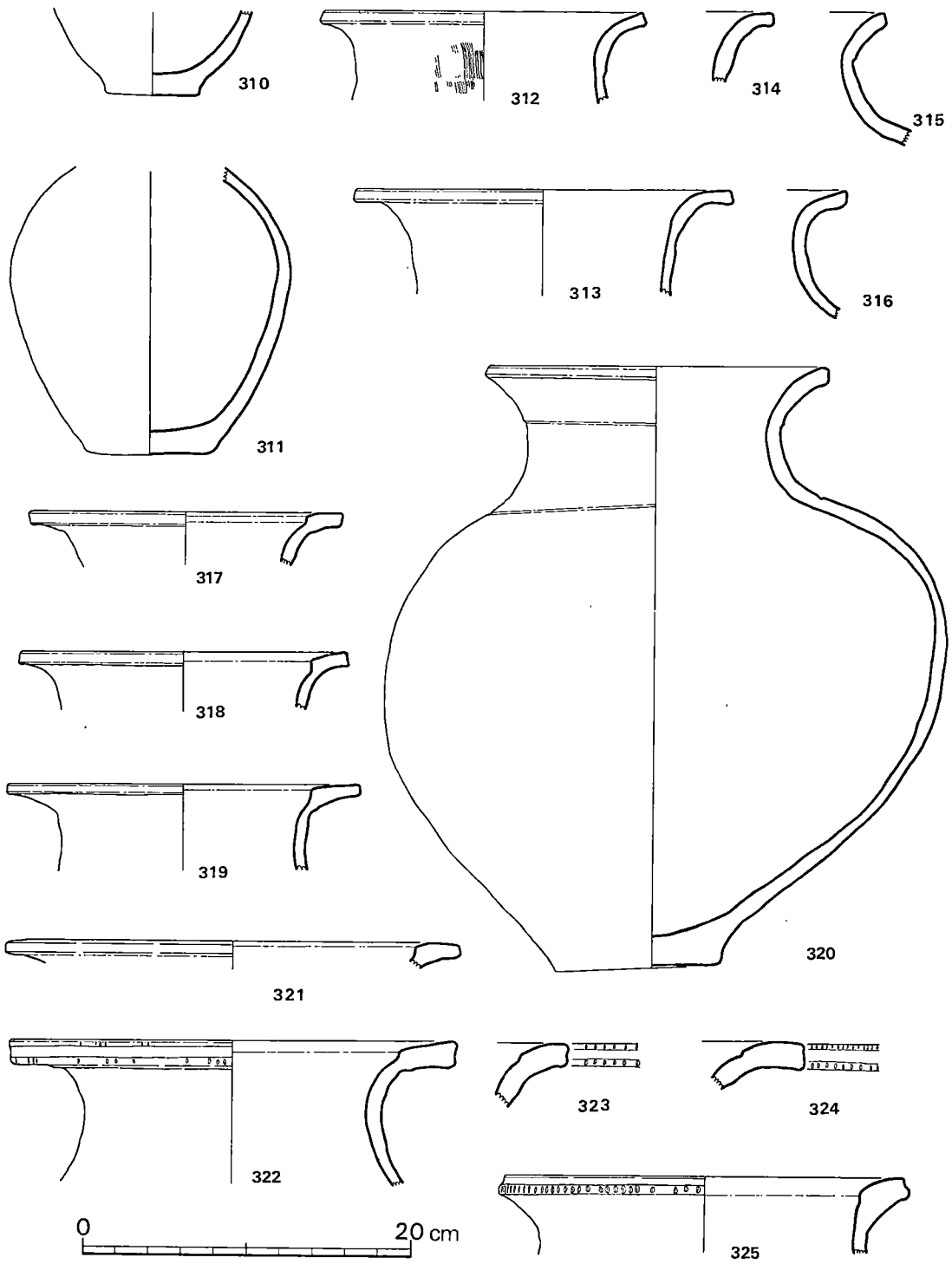
第101図　43号袋状竪穴実測図（1/40）

≪43号袋状竪穴　（図版35，第101図）　台地南東部に位置し，17号住居跡により上部を削平されてしまっている袋状竪穴である。17号住居跡は貼り床をしている。底面径は191×185cmで，深さ現存で164cmの隅丸方形を呈する袋状竪穴である。上部の大半が削られてしまっているので入口・断面形状については不明である。土層の堆積状態は放棄後何らかの目的で火を焚いた痕跡がみられる。それも一度だけではないようである。土器・石器の出土量は極めて多いが，大半が破片である。放棄後，塵芥捨場等に使用されたのかも知れない。出土遺物は実測可能な土器として壺5・甕2・鉢2個分がみられた。石器は非常に多く石斧5・石庖丁1・石鏃1・石槍1・掻削器3・刃器1・石核1・砥石3・剝片2個が出土した。その他土製紡錘車もみられた。

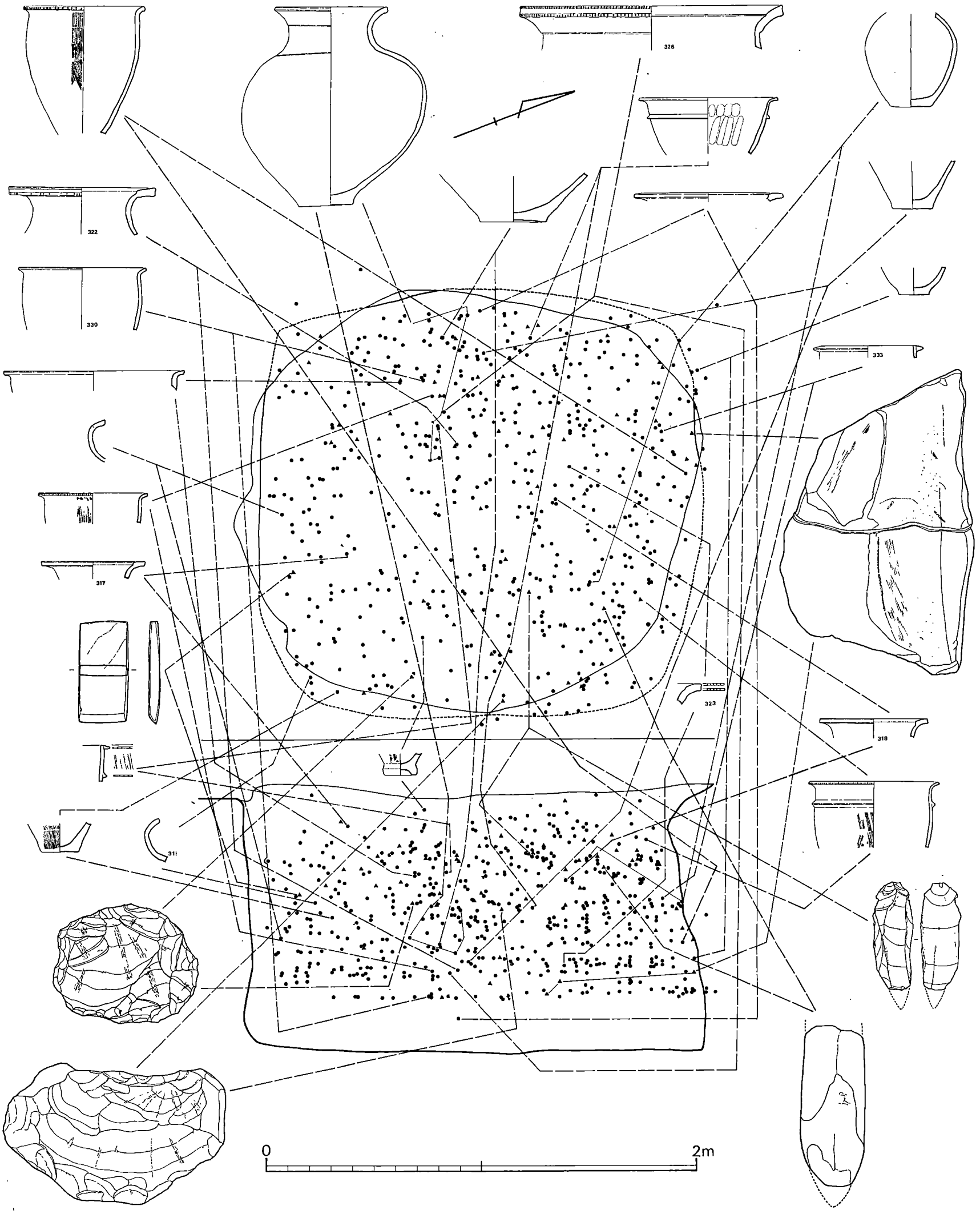
出土遺物（図版50・56，第102・104・105～107図）

壺形土器（第102図310～325，第104図326・327）

壺A（323・324・326・327）　326は復原口径490cmを測る大形壺の破片資料で，口縁部を肥



第102図　43号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第103図　43号袋状竪穴内遺物分布図（遺構1/20, 土器1/6, 石器1/2）

厚させ内面に段を作り，口唇部上・下端には刻目を施す。外面は頸部にかけて段をなす。内外ともナデ仕上げ。323・324とも口縁部の破片資料で，326に類似する。色調は淡褐色。327は底部で底径12.5cmを測る。内面ナデ外面研磨が施される。

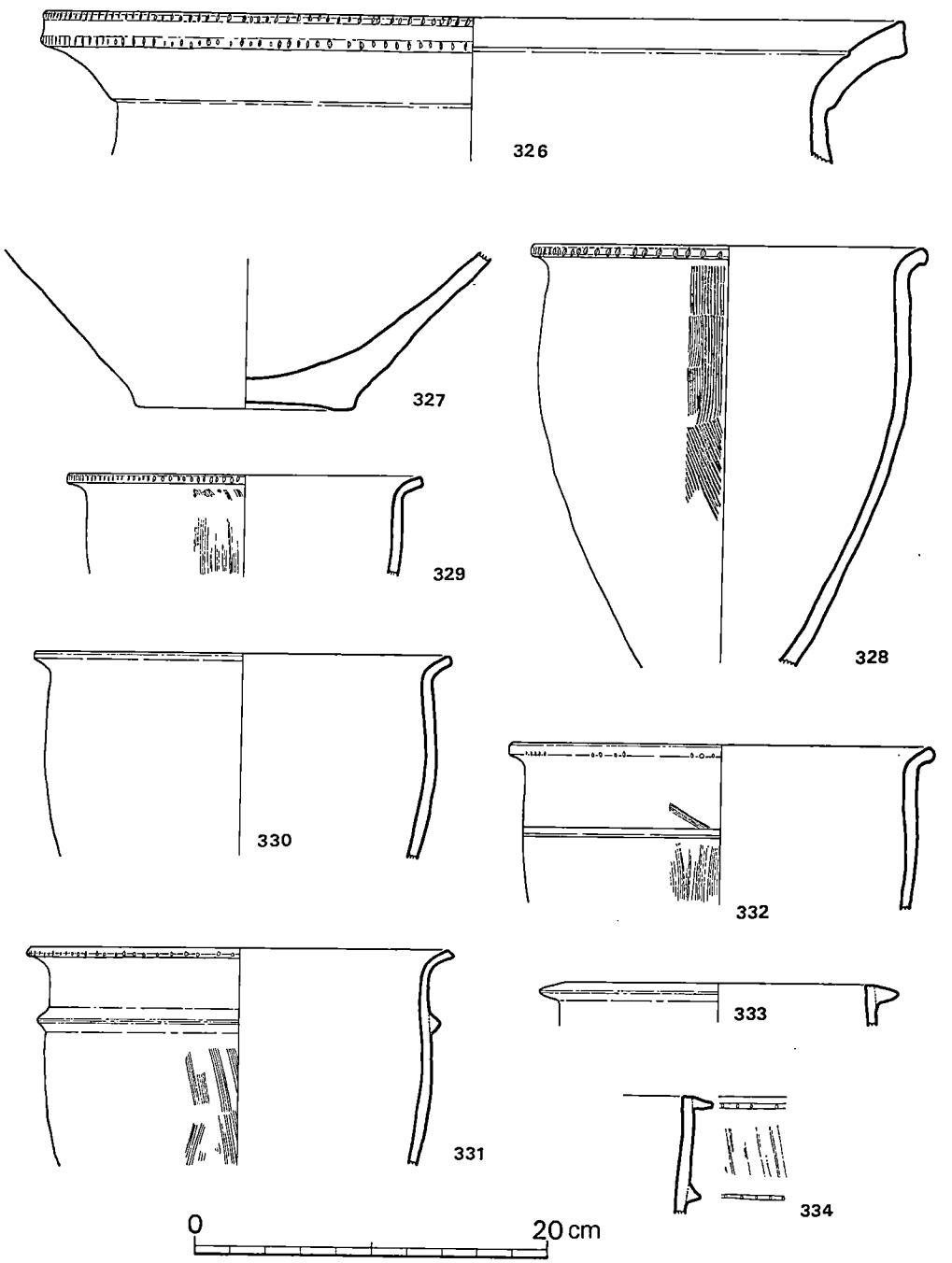
壺B（312～322・325）　口縁部内面を肥厚させるａ類（317～319・321・322・325）と，肥厚させず「く」字状に外反させるｂ類（312～314・316）と，いわゆる有段状をなす口縁のｃ類（315・320）がある。量的にはａ類が多い。一応ｃ類にした315・320の段は非常に緩く，すでに段というには形骸化したものである。又ｂ類にした312～314・316には段の名残りをわずかに認めることができる。312は口径19.8cm，内外ともナデ仕上げ。外面に一部刷毛を残す。色調は淡灰褐色。313は口径23.1cm。内外ともナデ仕上げ。色調は淡灰白色。314は口縁部にわずかに段の名残りを残す破片資料で，内外ともナデ仕上げ，色調は淡灰褐色。315はくずれた緩い段を作る口縁部の破片資料で，内面ナデ，外面研磨で仕上げられる。肩部に平行沈線と斜格子状文を組み合わせた文様を施す。316は口縁部上面がやや凹みぎみの破片資料で，内面ナデ，外面研磨で仕上げられる。色調は赤褐色。317は口径18.9cmを測る。口縁端部の刻目はなくヨコナデされる。内外とも丁寧なナデ仕上げ。色調は淡黄褐色。318は口径20.0cmを測る。内外とも摩耗のため詳細不明。色調は淡褐色。319は口径21.4cmを測る。口縁部上面は平坦で，傾斜は緩く水平に近い。内外とも丁寧なナデ仕上げ。320は口径21.0cmを測る完形壺で，口縁部と肩部に沈線状の段を作る。内面ナデ，外面研磨で仕上げられる。色調は赤褐色。321は口径27.6cmを測る。内外とも丁寧なナデ仕上げ。色調は淡褐色。322は口径27.2cmを測る。口縁部内面を肥厚させ段を作り口唇部上・下端には刻目を施す。内外とも摩耗のため詳細不明。色調は淡褐色。325は口径25.0cmを測る。口縁部内面を肥厚させ段を作る。口唇部上端はヨコナデされ凹み，刻目は下端に限られる。刻目は太めでにぶい。内外ともナデ仕上げ。色調は淡灰黒色。

壺C（311）　頸部以上を欠くやや腰高の壺で，底部にかけての緊まりはない。内面ナデ，外面粗い研磨が施される。色調は茶褐色。

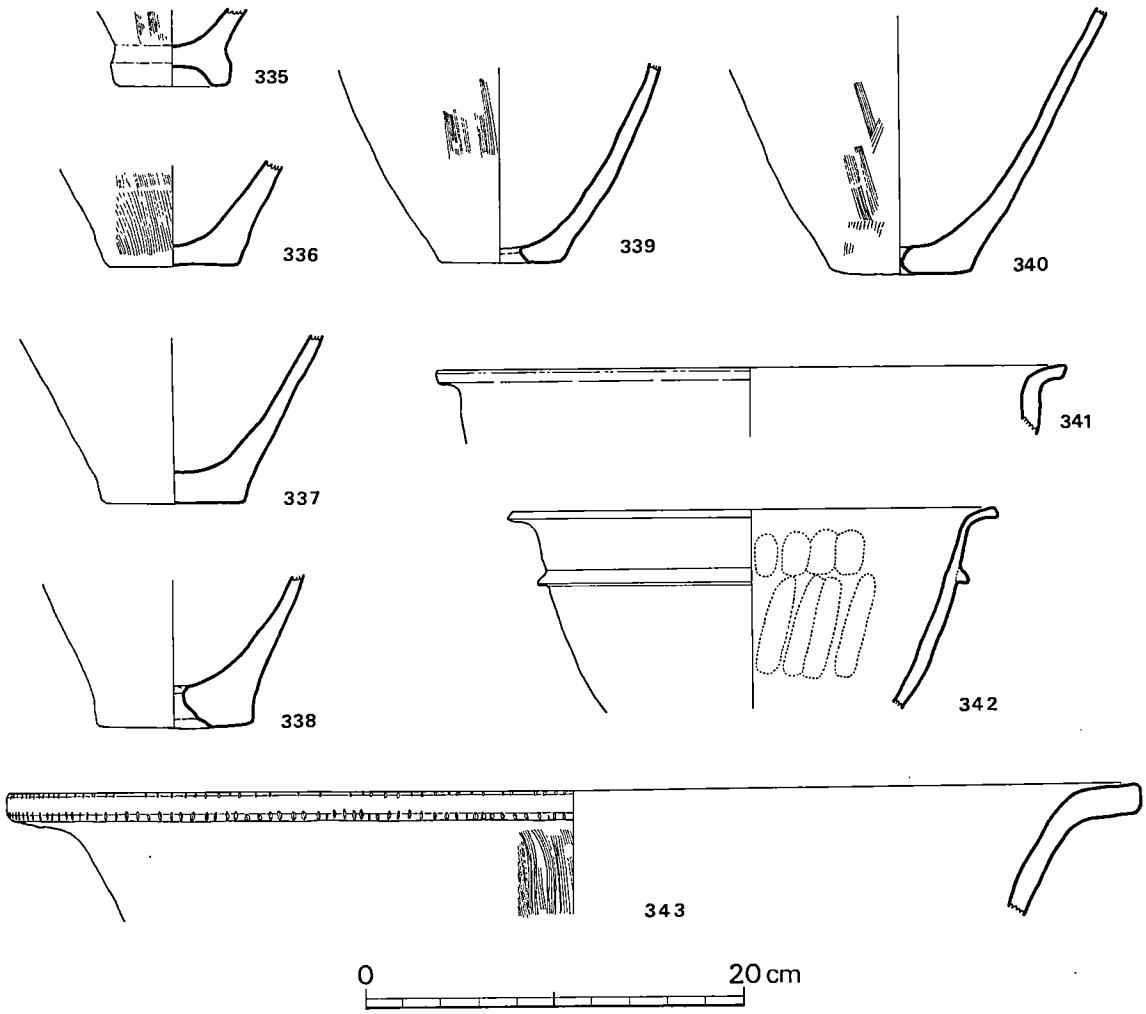
底部（310）　C・Dタイプに属する底部の破片資料で，内外とも丁寧なナデ仕上げ。色調は淡褐色。

甕形土器（第104図328～334）

甕A（328～330）　口縁端部に刻目をもつａ類（328・329）と，もたないｂ類（330）がある。328は口径22.4cmを測る。口縁部の反りは短く端部は丸く収まる。内面ナデ，外面刷毛仕上げ。外面には煤の付着がみられ，底部付近の器壁は火熱のため色調変化をきたし，赤褐色化している。329は口径20.0cmを測る甕で，内面ナデ，外面は細かい刷毛仕上げ。330は口径23.4cmを測る。口縁部は内面がわずかに凹み気味に外反する。口縁部付近はヨコナデされる。内面ナデ，外面刷毛のあとナデ仕上げ。色調は暗褐色。



第104図　43号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)



第105図　43号袋状竪穴出土土器実測図 3 (1/4)

甕B (331)　口縁端部と凸帯に刻目をもつa類に属する甕で，口径24.1cmを測る。口唇部上端はヨコナデされ角張り刻目は下端に限られる。内面摩耗して詳細不明，外面は凸帯以下を刷毛，以上をナデ仕上げ。煤の付着がみられる。色調は淡褐色。

甕C (333・334)　333は三角形の長めの凸帯を，口縁端部に横付けする甕で，口径20.2cmを測る。非常に小さい刻目が付される。摩耗のため詳細不明。色調は淡褐色。334は細くて長めの凸帯を口縁端部に横付けする甕で，口縁部上面に比較的幅広の平坦面を作る。内面ナデ，外面の凸帯間は刷毛のあとナデ仕上げ。

甕D (332)　口径24.0cmを測る。口縁部は短かく緩い返りで，端部は丸く収まる。内面ナデ，外面刷毛仕上げ。

底部（第105図335～337）　上げ底の底部（335）と，平底の底部（336・337）がある。335は内面ナデ，外面刷毛仕上げ。胴部との境は指押成形のため凹む。色調は橙褐色。336・337は内面ナデ，外面刷毛仕上げ。それぞれ底径6.8cm，7.6cmを測る。色調は2点とも淡褐色を呈する。

甑形土器（第105図338～340）

底部の穿孔は，いずれも焼成後である。338は色調淡褐色。煤の付着がみられる。詳細は剝落のため不明。339は内面ナデ，外面刷毛仕上げ。色調は暗褐色。340は内面ナデ，外面刷毛仕上げ。内面には黒い付着物がみられる。色調は淡褐色。

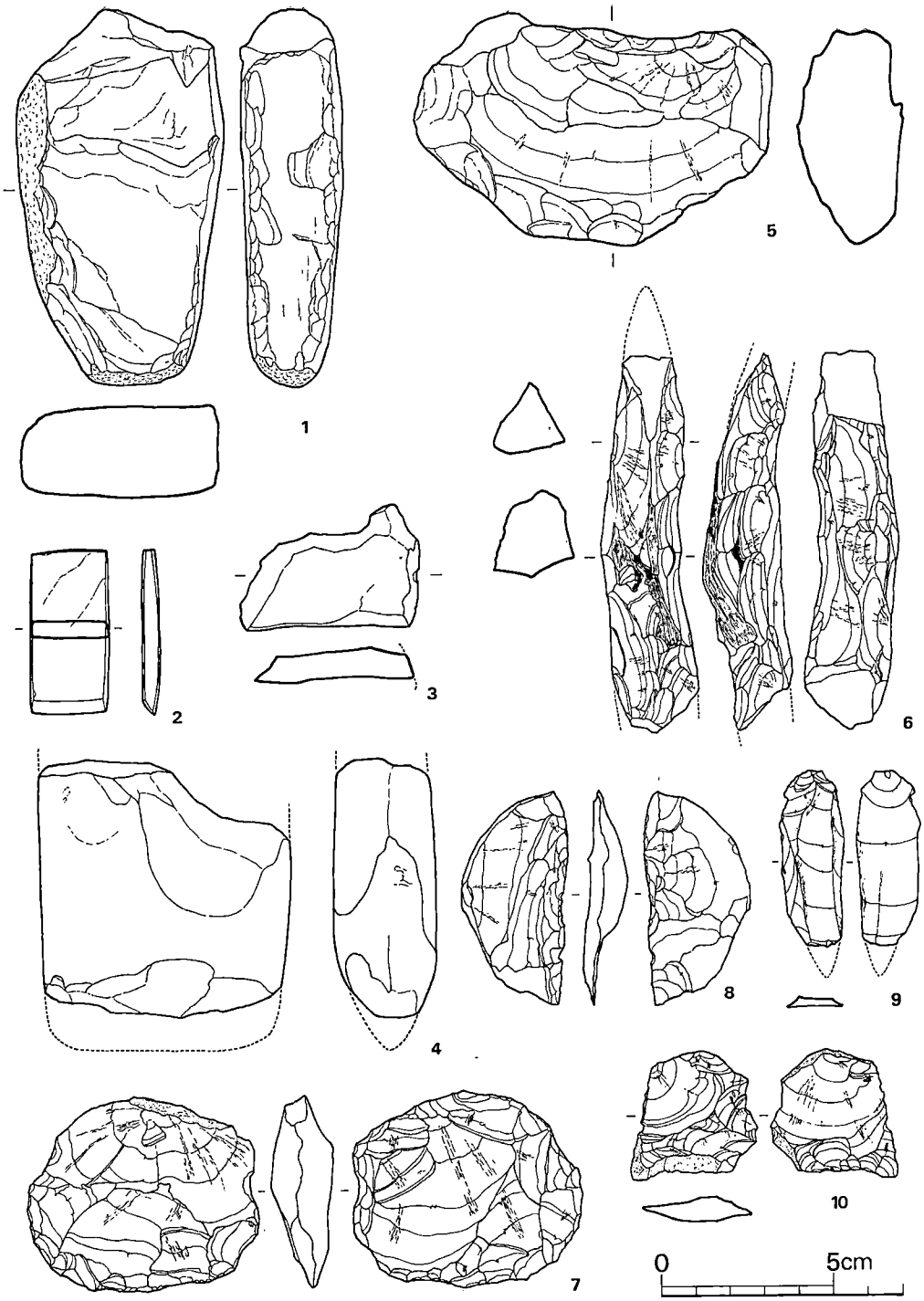
鉢形土器（第105図341～343）

鉢A（343）　口縁端部上下に刻目を付す大形の鉢で，口径59.5cmを測る。内面ナデ，外面刷毛のあとナデ仕上げ。外面には刷毛の跡を残す。色調は暗褐色。

鉢B（341）　口径33.2cmを測る。内外とも丁寧なナデ仕上げを施す。色調は淡赤褐色。

鉢C（342）　口径25.9cmを測る鉢でb類に属する。口縁部・凸帯とも刻目を付さずヨコナデされる。内面には指頭成形痕を残す。内外ともナデ仕上げ。色調は淡褐色。　（石橋）

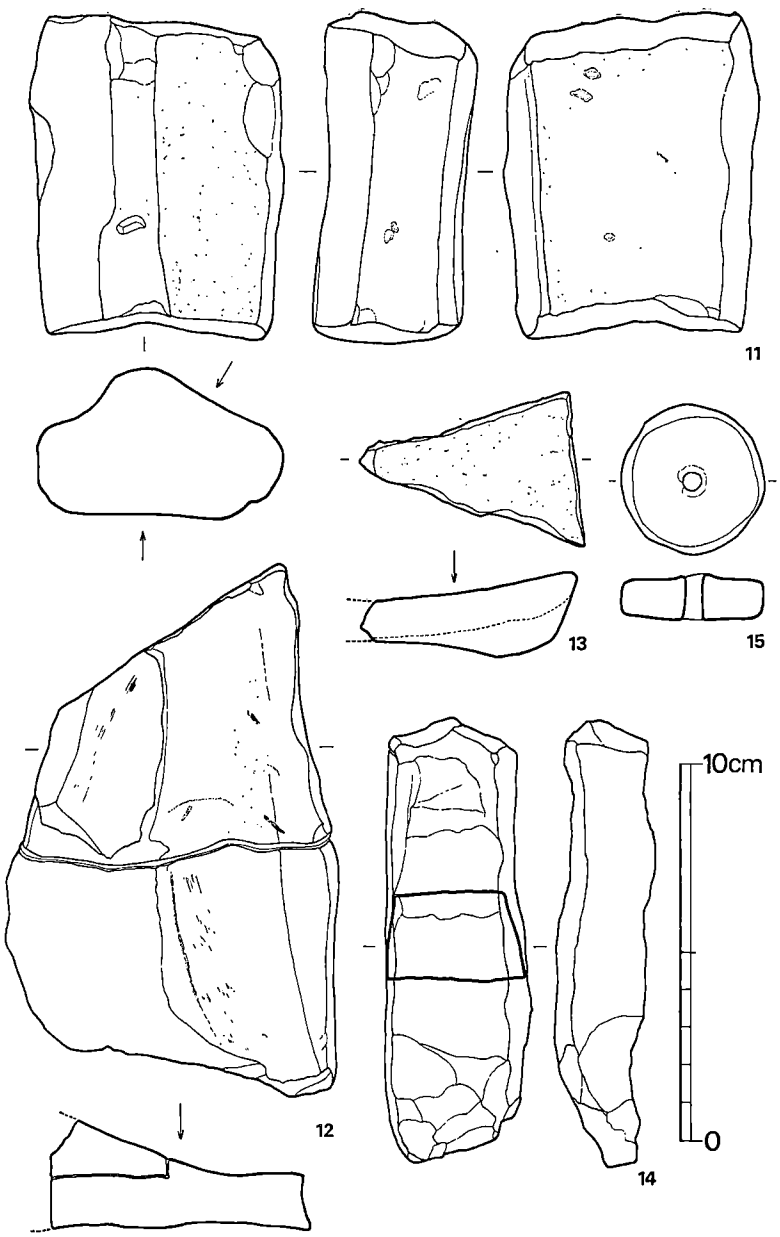
石　器（第106・107図）　1は泥岩質で，周辺に細かい敲打調整を加えている。長さ10.7cm，厚さ2.9cmで石質・形態からして柱状片刃石斧の研磨前未製品であろう。重さ282g。2は油質頁岩製扁平片刃石斧の完形品。長さ47mm，幅22.1mm，厚さ4.8mm，重さ10.5gを測る。当遺跡出土の扁平片刃石斧中で最も薄手で鋭い刃部をもつ。なお，最大厚は刃部から1.4cmほど上にあり，下ぶくれの感じを受ける。3は磨製石斧の破片。4は玄武岩質の蛤刃石斧の胴部破片。太型にしては胴部がやや扁平なきらいがある。5はやはり玄武岩質の石材で，半月形を呈す部厚い石器。大きな横長の剝片を下部は下方向から荒い剝片を加えている。外彎刃石庖丁の未製品であろう。6は安山岩製で上・下端を欠損する。断面は上部が三角形，中央部が台形に近い。左側では両側縁からの荒い剝離が加えられ，右側では4回の大きな剝離が観察される。背稜が走るが，その頂部周辺はいずれも“すれ”ている。両端が欠損しているので断定的ではないが断面・反りなどから三稜尖頭器の範疇に入るものであろうか。また，パティナが進んでおり先土器時代の所産で混入資料であろう。7はサヌカイト製の円形掻器。長円形の剝片を利用し，周辺から荒い剝離を加えた後，さらに二次加工を施し刃部を形成する。長さ6.7cm，幅5.4cm，厚さ1.8cm，重さ65.8gの完形品。8は三ケ月状の剝片の一部に刃部を作りだす。9は刃器で先端部を欠損する。両側縁に刃こぼれがあり，鋭利な刃物として使用されたことが判る。10は3.5cmほどの角礫から剝出した剝片で，削器等の素材となるものであろう。9・10とも黒曜石製。11～13は砥石で11は研砥面二面を有す砂岩製。12は破片資料であるが，3点が接合した。かなりの急傾斜をもつが，砥面は浅く溝状にへこむ。粘板岩製。Bは砂岩製。14は原材を断面台形状に剝いだ段落のもので，石斧の未製品か。ほかに，柱状片刃石斧の小破片・打製石斧？・黒曜石製打製石鏃・石核・剝片が出土した。



第106図　43号袋状竪穴出土石器実測図 1 (1/2)

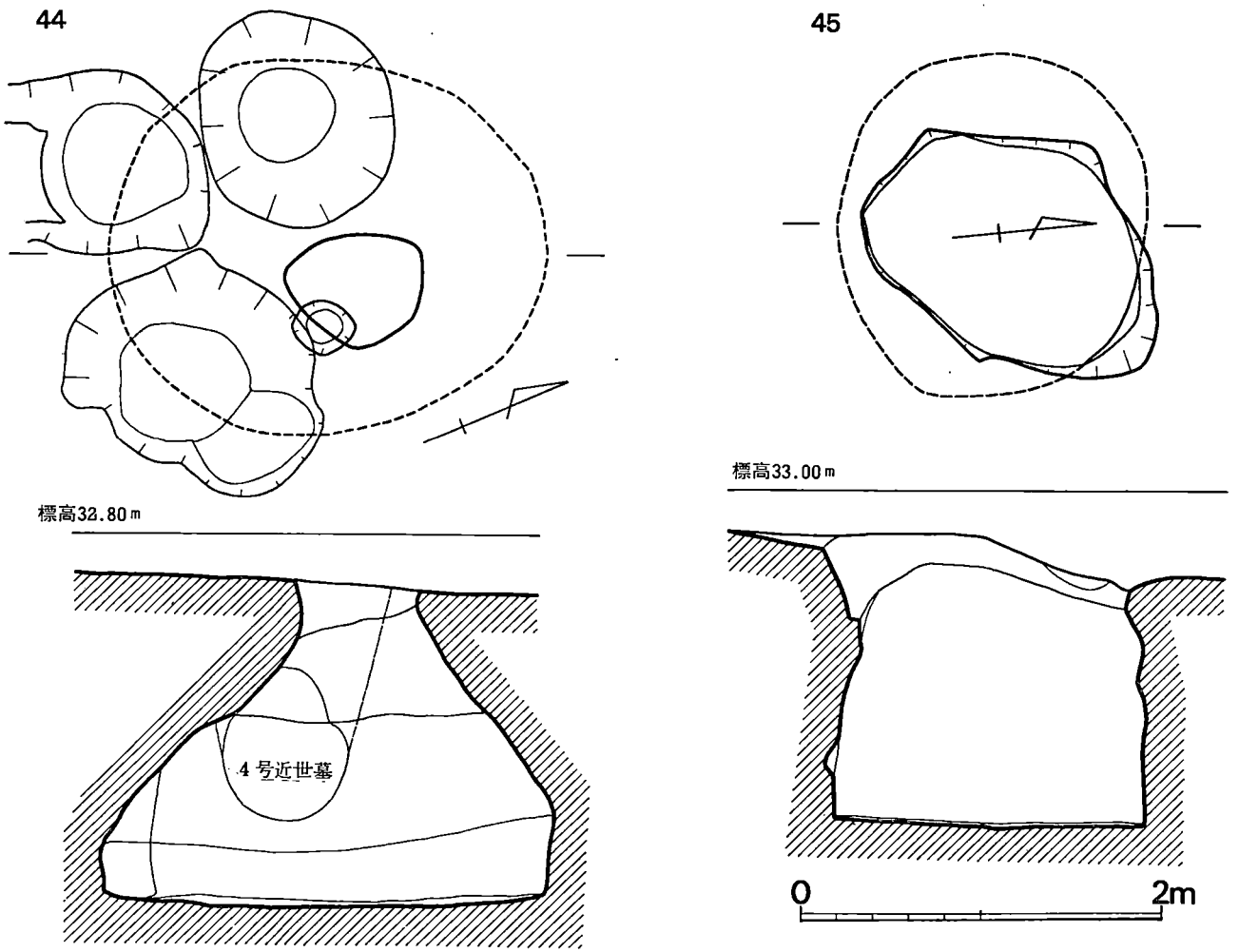
土製品(第107図15)　紡錘車1点のみの出土である。赤褐色を呈し，焼成良好。径3.85㎝，厚さ1.2㎝。(木下)

≪44号袋状竪穴(図版36，第108図)　4・15・28号近世墓に切られた状態で検出されたもので，その大半を欠失している。残存する床面から考え，ほぼ楕円形を呈していたものと思われる。床面径2.42m×2.06m，深さ1.80mを測る。入口は75㎝×60㎝の不整形を呈し，最大径は床面より北壁側で40㎝，南壁側で30㎝上にあり2.50mである。土層堆積は西側から東側への傾斜をもち，1層・4層の堆積が厚いのに対して5層以下の堆積は薄い。

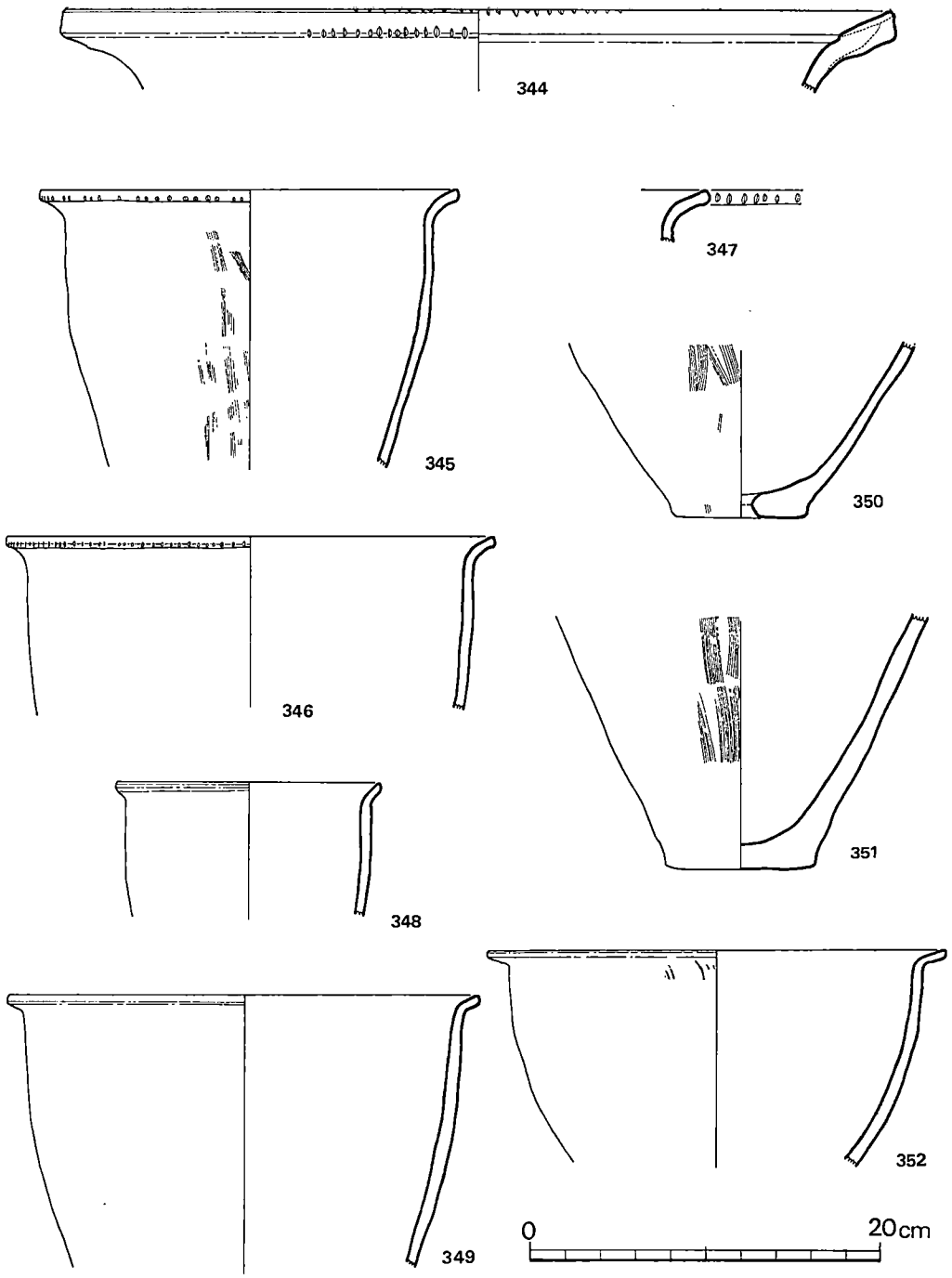


第107図　43号袋状竪穴出土石器実測図　2　(1/2)

遺物は前期末の壺・甕・鉢等の破片多数と柱状片刃石斧1，太型蛤刃石斧2，スクレイパー2，石核2，磨石1，敲石1，剝片2が出土した。



第108図　44・45号袋状竪穴実測図（1/40）



第109図　44号袋状竪穴出土土器測図（1/4）

出土遺物（図版50・57，第109・110図）

壺形土器（第109図344）

口縁部の破片資料で，復原口径47㎝を測る。口縁端部内面を肥厚させた大形壺で，端部外面上下に刻目を付している。壺Aに属す。色調は暗橙褐色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好な作りの良い土器である。

甕形土器（第109図345～349・351）

甕A（345～349）　口縁端部に刻目を有すａ類（345・347）と有しないｂ類（348・349）がある。345は復原口径23.8㎝を測り，外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は明褐色を呈す。346は復原口径27.7㎝を測る。外面刷毛のあとナデ，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡灰褐色を呈す。348は復原口径15㎝を測る小形の甕である。外面は風化のため不明，内面ナデで仕上げている。色調は暗褐色を呈す。349は復原口径26.7㎝を測り，口縁部屈折は強く短かい。外面調整は器面風化が著しく不明である。内面はナデて仕上げている。色調は外面暗褐色，内面明褐色を呈す。

底部（351）　胴下半の資料で，底径8.6㎝を測る平底である。外面刷毛，下半は二次焼成を受け器面が剝落している。内面はナデて仕上げている。色調は外面淡褐色，内面は上から三色にわかれ，淡褐色・灰黒色・橙褐色と異なる。

甑形土器（第109図350）

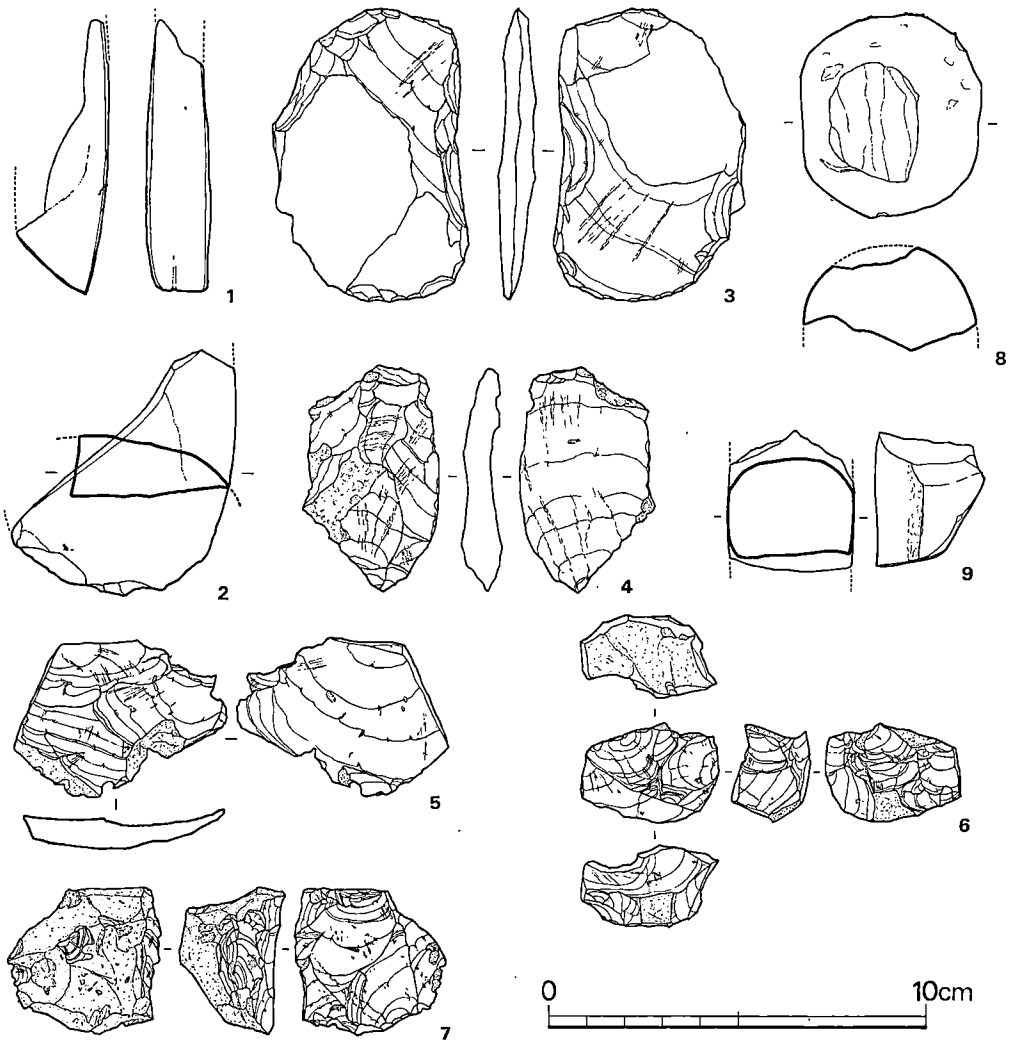
胴下半の資料で，底径7.7㎝を測る。底部の穿孔は焼成後である。外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は外面暗褐色，内面淡褐色を呈す。

鉢形土器（第109図352）

「く」字状に外反する口縁部をもつHタイプの鉢で，復原口径26.1㎝を測る。内外ともヨコヘラ磨き，口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡褐色を呈す土器である。　（井上）

石　器（第110図）　1は柱状片刃石斧の刃部破片。硬質の石材を用い，刃部鋭い。厚さは1.6㎝で35号袋状竪穴出土のもの（第88図1）に近いが幅は広くなる。2は玄武岩の太型蛤刃石斧の残片。3・4はサヌカイト製の削器で両者とも扁平な縦長剝片を利用している。3は長さ7.6㎝，幅4.8㎝，厚さ1.0㎝，重さ41ｇ。5は不純物を多く含む黒曜石の横長剝片で背面には3回の大きな剝離が観察される。6・7は石核で，7は上・下両端から，比較的幅広の剝片を剝出している。両者とも黒曜石製。8は流紋岩製の敲石破片で，敲打により頭部欠損している。9は丸棒状を呈す磨石と思われる石器。全体に磨痕がみられる。硬砂岩製。他に蛤刃石斧の小破片と剝片が出土した。　（木下）

≪45号袋状竪穴（図版36，第108図）　C5区の南端に位置し，中世溝状遺構・火葬墓及び18号住居跡が上位に占地していたため，その上端部を削平されており，上部の構造は不明である。しかし，残された西側周壁が裾広がりに傾斜することから，おそらくフラスコ状を呈して



第110図　44号袋状竪穴石器実測図 (1/2)

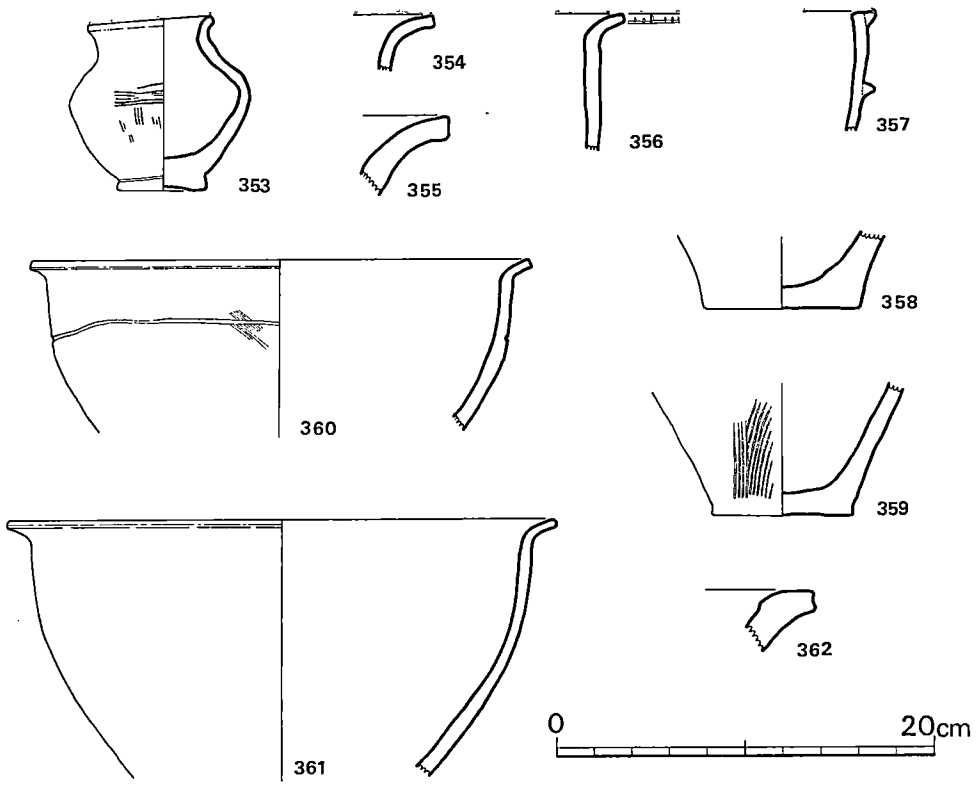
いたものと想定する。

床面の形状は，東西に長径を有する楕円形プランを呈しており，長径1.9*m*，短径1.7*m*を測る。残存する壁高は1.6*m*である。出土遺物は前期末に属する土器と石斧・石鏃・砥石等が出土している。　(小池)

出土遺物（図版50・57，第111・112図）

壺形土器（第111図353～355・362）

壺E（353）　口径6.6*cm*，器高9*cm*を測る。胴中位が強く張りだした単口縁の小型壺で，底部は外方にはり出した平底で，底面中央部がわずかに凹む。口縁部内外はヨコナデ，外面は



第111図　45号袋状竪穴出土土器実測図 (1/4)

粗い刷毛のあとナデ，内面ナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈す。

口縁部（354・355・362）　全て小破片の資料である。354・355は中形，362は大形壺の口縁部と思われる。362は口縁部内面を肥厚し，段を作る壺で，色調は淡褐色を呈し，焼成良好な土器である。

甕形土器（第111図356～359）

甕A（356）　口唇部に刻目を有す小破片で，口縁部内外をヨコナデ，体部内外をナデて仕上げている。

甕C（357）　口唇部外面と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕で，内外ともナデて仕上げた淡褐色を呈す土器である。

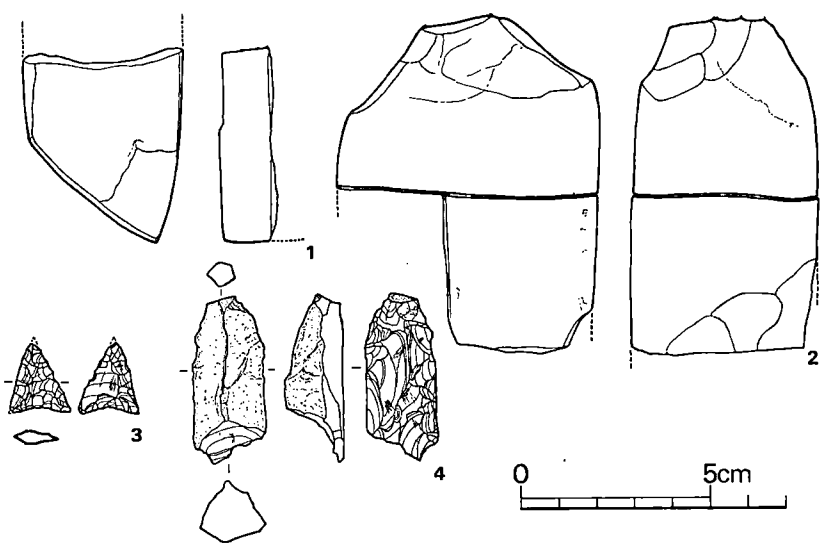
底部（358・359）　平底の底部で，358は外面刷毛のあとナデ，内面ナデ，359は外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は358の外面が淡灰褐色，内面淡褐色，359は内外とも淡褐色を呈す。

鉢形土器（第111図360・361）

鉢B（361）　口径29㎝を測る中形品である。口縁部内外をヨコナデ，体部内外はヨコヘラ

磨きで仕上げた作りの良い土器である。外面のヘラ磨きに比べ，内面は粗い。色調は赤褐色。

鉢E（360）「く」字状に強く外反する口縁部と口縁下に1条のヘラ描き沈線を付した鉢で口縁部内外ともヨコナデ，外面刷毛のあとヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。色調は暗褐色を呈す。（井上）



第112図　45号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

石　器（第112図）　1は灰褐色，軟質の泥岩製柱状片刃石斧片。2は今山産玄武岩製太型蛤刃石斧の頭部から胴部破片。接合資料で，頭部はB6—17区24号住居跡床面から出土し，胴部は当袋状竪穴内より出土した。両者は10*m*ほど離れている。石斧は他の太型蛤刃石斧と比して，断面が丸いのが特色で，体部には調整敲打痕が残る。重さ370*g*。3は上層から出土した黒曜石製の打製石鏃で，凹基無茎式に属す。縦長剝片の末端を先端部としている。主要剝離面が大きく残る。4は断面三角形の剝片で周辺から大きな剝離を加えている。黒曜石製。（木下）

≪46号袋状竪穴（図版37，第113図）　入口部が9号甕棺と複合した竪穴である。床面は長方形を呈し，床面径1.98*m*×1.70*m*，深さ2.05*m*を測る。壁面の内傾度は強く，典型的なフラスコ状をなす。遺物は北西隅の床面上から太型蛤刃石斧1，10*cm*浮いて完形壺1，95*cm*浮いて完形甕1が検出された。他に壺・甕・鉢・蓋等の破片多数と太型蛤刃石斧1，磨製石斧2，打製石鏃3，石核2，砥石1，剝片1が出土した。時期は前期末である。

出土遺物（図版51・57，第114～116図）

壺形土器（第114図363～370）

壺A（365・366・369・370）　365は原口径35.6*cm*を測る有段状口縁の壺である。内外はヨコナデで仕上げ，内面一部に刷毛を残している。色調は外面橙褐色，内面淡褐色を呈す。366は復原口径40.1*cm*を測る。口縁端部内面を肥厚した壺で，端部外面上端に刻目を付している。369は大形壺の口縁部の破片資料である。366と同様，口縁端部内面を肥厚させたもので，口縁端部外面上下と肥厚端部に刻目を付した壺である。色調は黄褐色を呈す。370は大形壺の底部

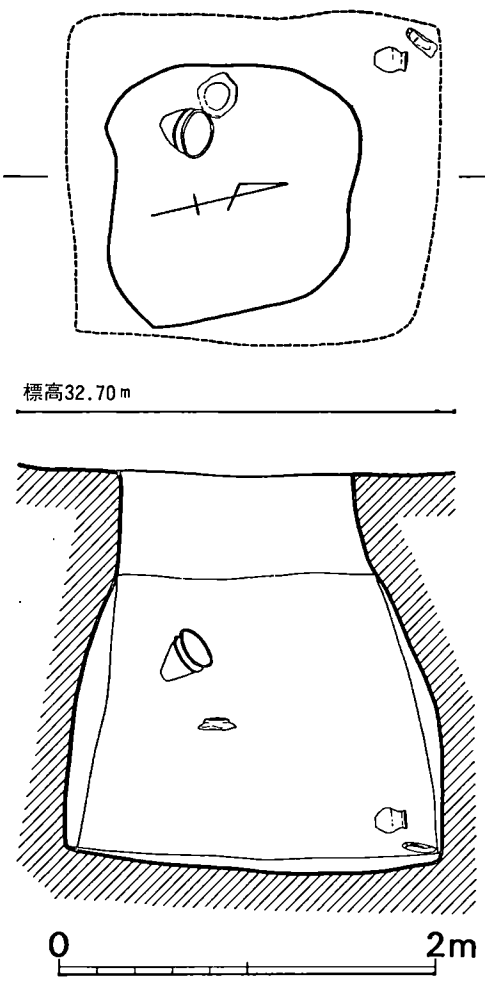
で，底径14.5cmを測る。内外ともナデて仕上げていて，底部の器肉は厚く 3.1cm を測る。色調は外面明褐色，内面暗褐色を呈す。

壺D（363・364）　364は口径10.3cm，器高16.8cmを測る中小形の壺である。口縁部は有段状をなし，肩部に1条のヘラ描き沈線がめぐる。底径6.4cmと大きく，安定感がある。外面ヘラ磨き，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は明褐色を呈す。363は口径10.2cmを測り，調整・色調は364と同じである。

底部（369・370）　底径 9.2cm を測る凹み気味の平底である。外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。色調は 369 が外面橙褐色，内面黒褐色，370は暗橙褐色を呈す。

甕形土器（第114・115図371～377）

甕A（371・372）　両者とも刻目を有しないb類に属す。復原口径371が21.2cm，372が25.8cmを測る。口縁部内外をヨコナデ，内外をナデて仕上げているが，372の口縁部内面一部に粗い刷毛の痕跡を残している。色調371が黄褐色，372が外面灰褐色，内面黄褐色を呈す。



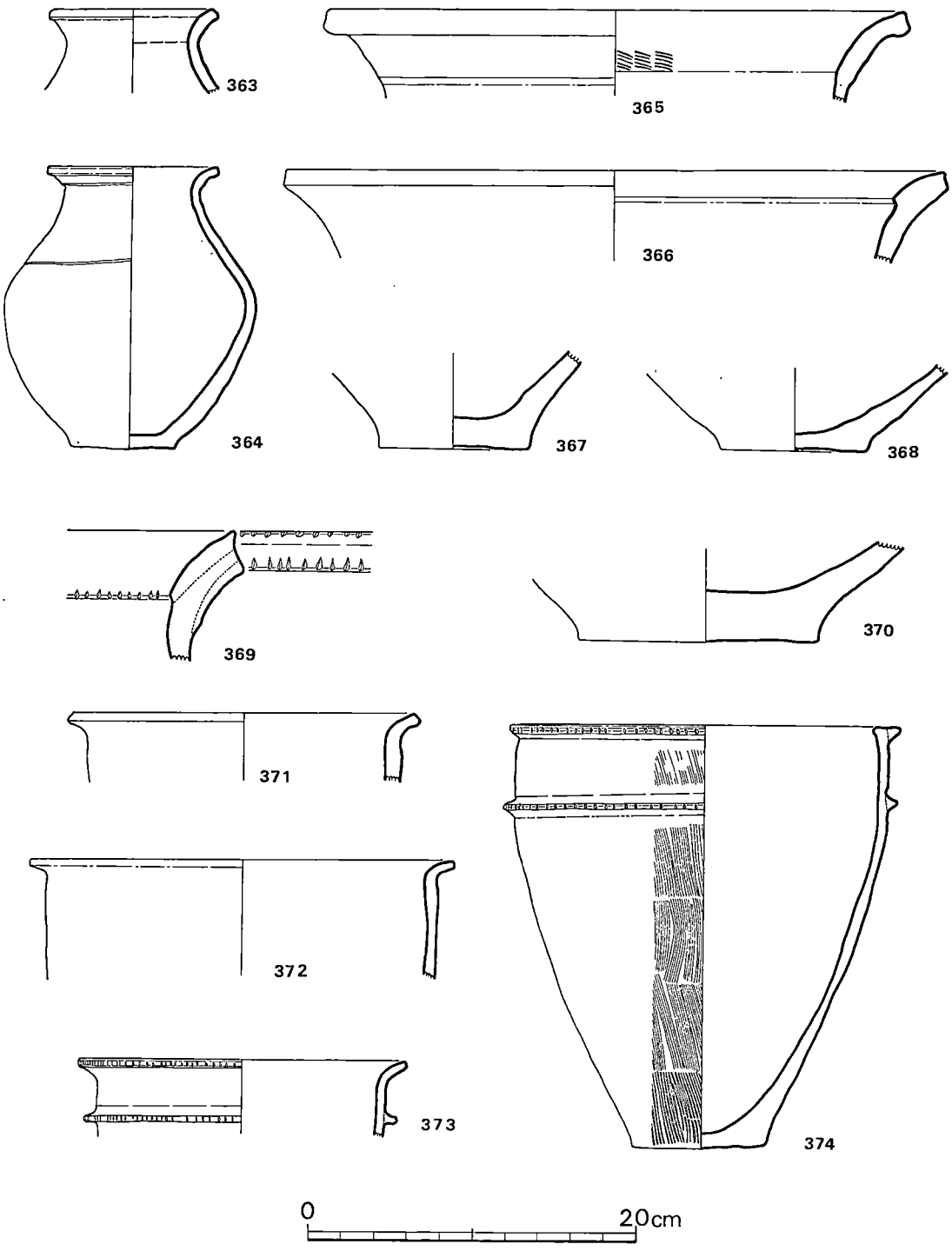
第113図　46号袋状竪穴実測図（1/40）

甕B（373）　復原口径 19.8cm を測り，口縁下の凸帯は細く長い。内外ともナデて仕上げている。外面には部分的に煤の付着がみられる。色調は外面暗褐色，内面暗灰褐色を呈す。

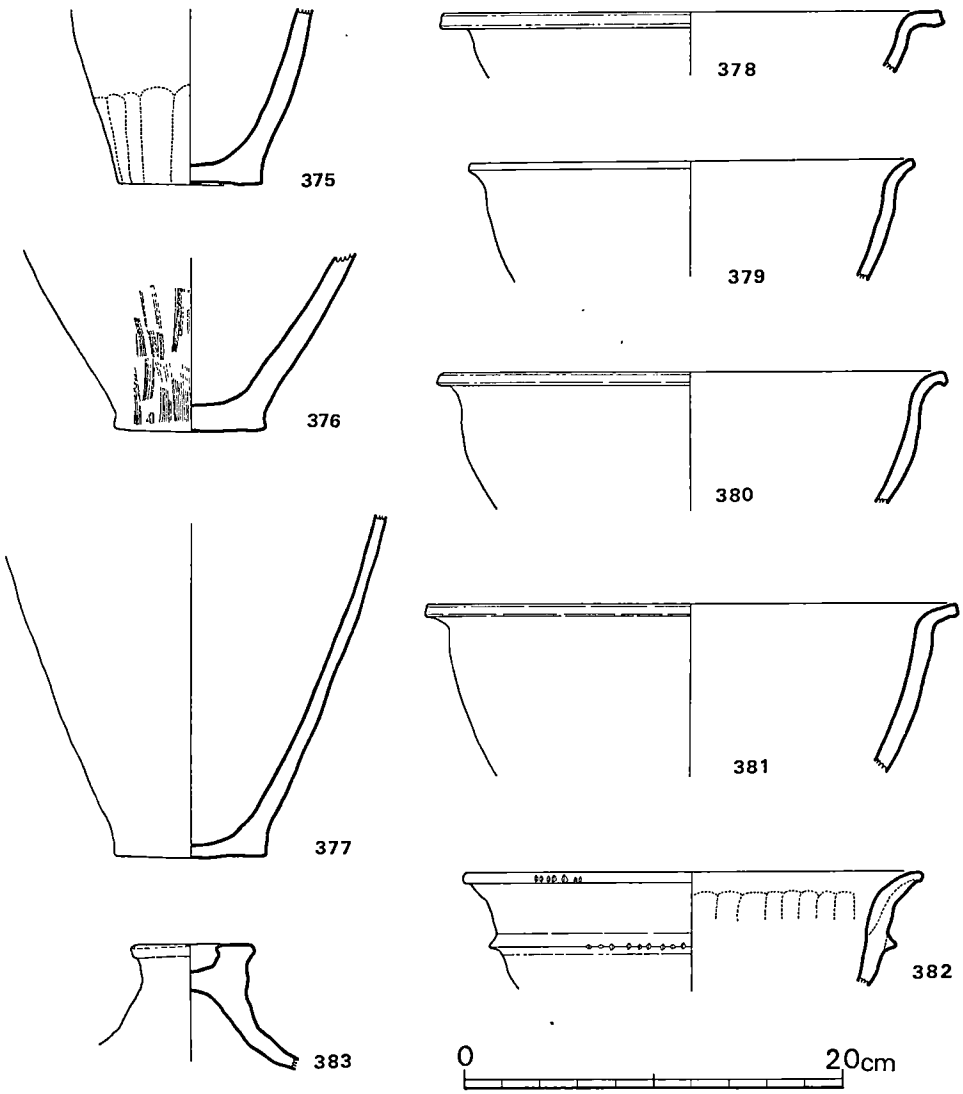
甕C（374）　口縁端部と口縁下に三角凸帯を付した甕で，口径23.4cm，器高25.5cmを測る。外面刷毛，内面ナデて仕上げた暗灰褐色を呈す土器である。

底部（375～377）　胴下半の資料で，底径375が7.6cm，376・377が 8 cmを測る。375は外面刷毛のあと，下半を縦位のヘラナデを行い，内面はナデて仕上げている。376は外面刷毛，内面ナデ調整，377は外面刷毛のあとナデ，内面ナデて仕上げている。色調は375が外面淡茶褐色，内面暗灰褐色，376が淡褐色，377が赤褐色を呈す。377の外面には煤の付着がみられる。

鉢形土器（第115図378～382）



第114図　46号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第115図　46号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

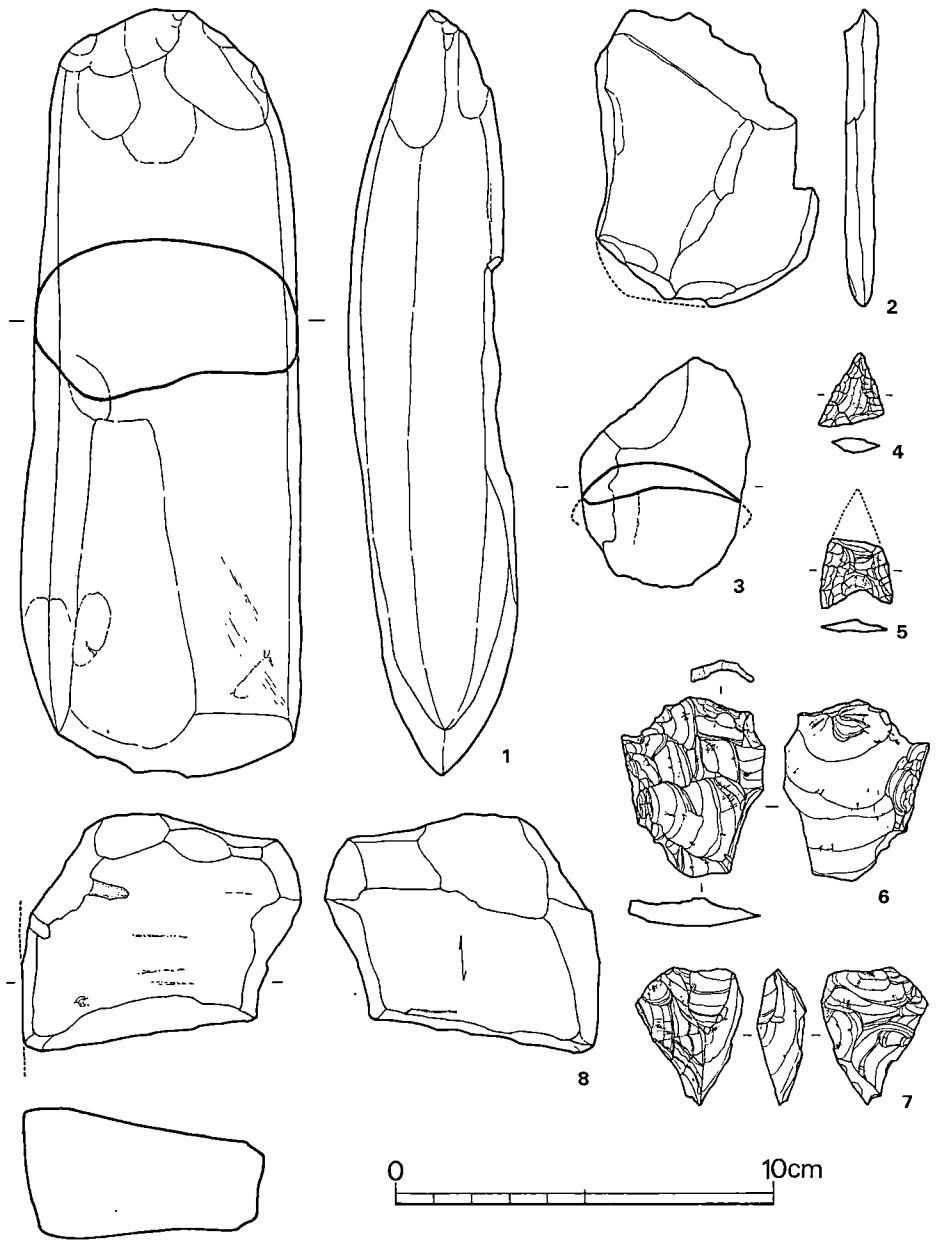
鉢B (378～381)　全て胴部上半の破片資料で「く」字状の外反が強いもの (378・380・381) と弱いもの (379) がある。復原口径378が26.3cm，379が23.3cm，380が26.7cm，381が28.1cmを測る中形品であり，b類に属す。内外ともヨコヘラ磨きした作りの良い土器である。

鉢C (382)　「く」字状に外反する口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付した鉢で，復原口径24cmを測る。口縁端部と凸帯端部には刻目を施している。内外ともナデて仕上げた外面淡灰褐色，内面暗灰褐色を呈す土器である。

蓋形土器（第115図383）

傘形を呈す蓋のつまみ部の資料である。つまみ部上面は凹み，口縁部への開きは大きくラッパ状を呈す。器面風化のため明確でないが粗い刷毛の痕跡を残している。内面は粗い刷毛のあとナデて仕上げている。色調は外面黄褐色，内面橙褐色を呈す。　　（井上）

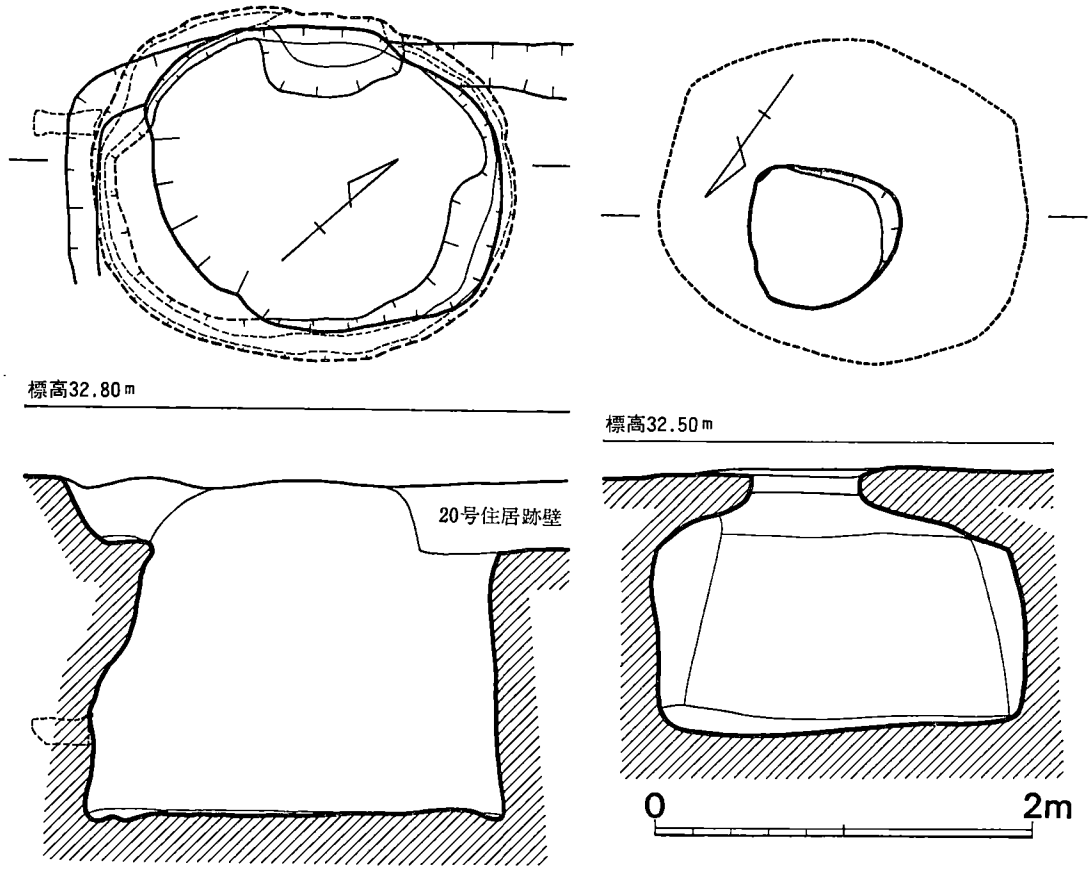
石　器（第116図）　石斧は4点出土し，3点を図示した。1は今山産玄武岩製？の太型蛤



第116図　46号袋状竪穴出土石器実測図（1/2）

刃石斧の完形品。長さ20.1cm，幅7.3cm，厚さ4.2cm，重さ971g。太型蛤刃石斧は他に胴部の小破片が1点出土している。2は緑泥片岩製の刃部磨製石斧で，刃部の一部及び，頭部を欠損する。3は磨製石斧の表皮破片で硬砂岩製。4・5はサヌカイト製の打製石鏃で，4は完形の平基無茎式で長さ1.9cm，厚さ0.35cm，重さ0.85g。5は先端を欠損する。6は剝片で打面は原面の小さい平坦打面で，ゆるく「く」字状を呈す。7は残核。6・7とも黒曜石製。8は砂岩製の砥石破片で，表裏二面の研痕面を有す。かなり使用されたもので，中央部がU字状になる。他に黒曜石製の石鏃，石核が出土している。（木下）

≪**47号袋状竪穴**（図版37，第117図） 台地北側に位置し，底面径220×181cmを測る。やや不整な楕円形を呈している。深さは約175cmである。底面には周溝が巡っており，ピットに流れ込んでいるかのようである。壁面には直径約10cm・奥行約30cmの横穴が穿たれていた。用途については不明である。この貯蔵穴は20号住居跡が上にあり，入口は崩壊してしまっていた。20号住居跡はやはり貼り床をして住居としていた。出土遺物は実測可能な土器として壺8・甕8・鉢3個体分が含まれていた。石器では石斧2・石庖丁1・石鏃3その他が出土した。



第117図　47.48号袋状竪穴実測図（1/40）

出土遺物（図版51・57，第118～120図）

壺形土器（第118図384～391）

壺B（384）　復原口径21*cm*を測り，口縁部がやや肥厚して段を有している土器である。調整は横方向にていねいにナデて仕上げている。胎土には細かな砂粒を含み，色調は黒褐色を呈している。焼成はあまり良くない。

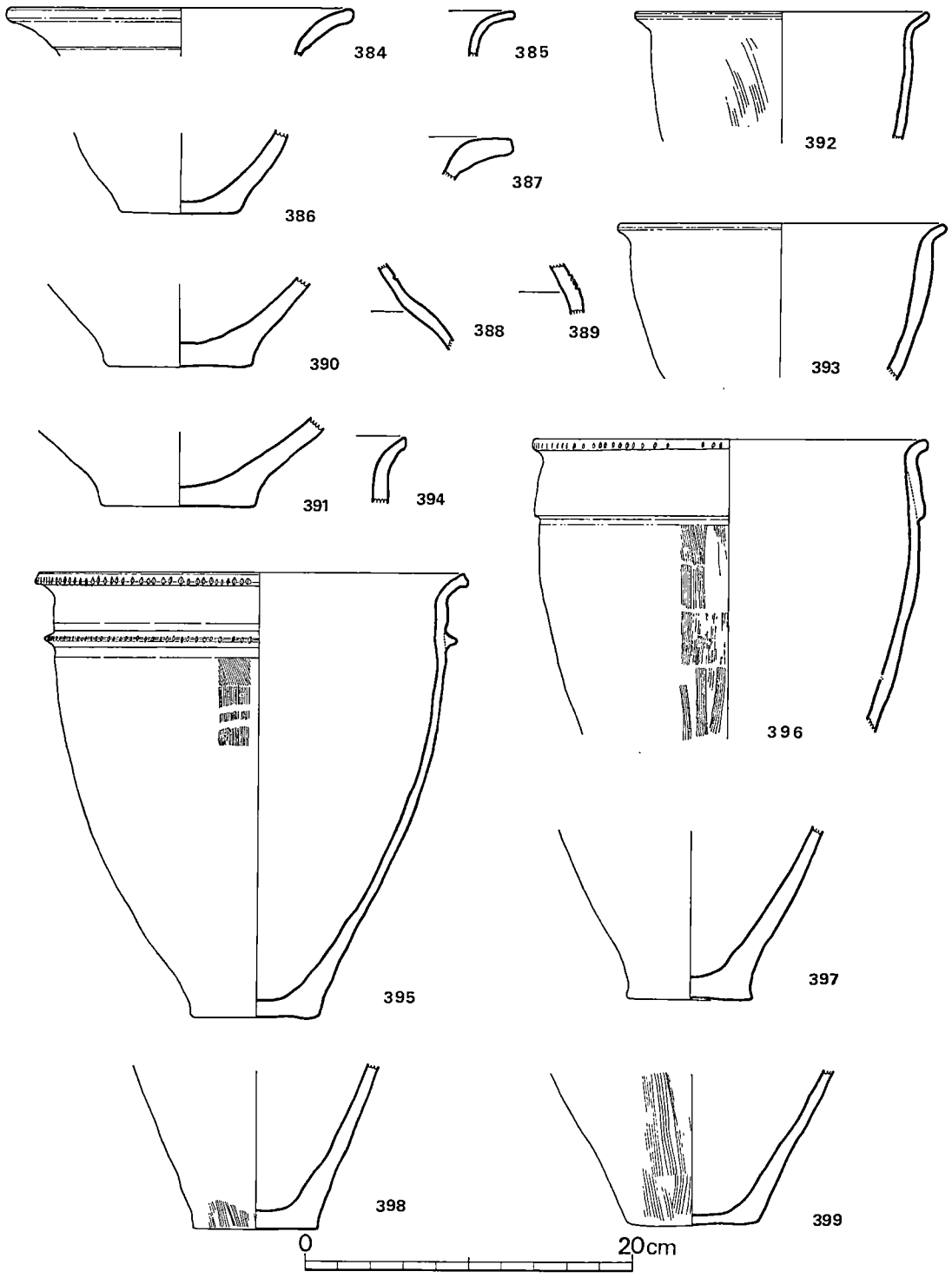
口縁部（385・387）　口径を復原しえない口縁破片である。385は口縁部先端が肥厚し，丸みを帯びている。内外面共横方向のナデを施している。砂粒含み，淡褐色を呈し，焼成普通の土器である。387は丹を塗布した肥厚口縁の壺破片である。B類になるかとも思うが，判断は出来ない。口縁部と頸部との境には沈線状の凹みがみられる。調整技法としては内外面共横位のナデで仕上げている。胎土には微砂粒と角閃石を含む。色調は丹の部分は赤橙色で，他は淡褐色を呈している。焼成は良好である。

胴部（388・389）　胴部と言うより肩部破片とも言うべき部分である。388は丹塗り土器である。肩部から頸部にかけての内面には絞られたような痕跡が認められる。高杯脚部にみられる手法である。胎土は非常に精選されており，物質名不明の赤色の粒子を含んでいる。色調は橙褐色を呈している。焼成も非常に良好である。389は4条の重弧文を施文した胴部破片である。器壁外面は研磨し，内面は細かい刷毛を施している。胎土にはやはり赤色粒を含んでいる。砂粒も含んでいる。外面は丹塗りだと思われる橙褐色を呈している。内面は淡褐色である。焼成良好である。

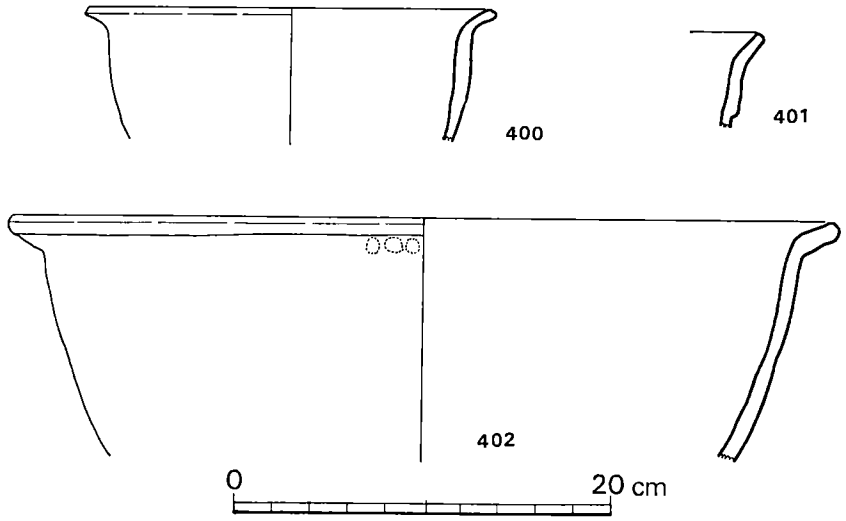
底部（386・390・391）　386は小形壺の破片だと思われる。底部径約7*cm*を測る。器面は非常に細かな刷毛で調整している。砂粒含み，黒灰色を呈している。焼成はあまり良くない。390は底部径約9*cm*を測る。平底で，器壁には横方向の細かい刷毛が施されている。丹塗りは土器の可能性も考えられる。胎土には砂粒が含まれている。色調は赤褐色を呈している。焼成は良好である。391は底部径約9.4*cm*を測る底部破片である。大形壺の底部であろう。調整は内外面共に細かい刷毛では仕上げている。胎土にはやはり砂粒を含み，色調は外面淡褐色・内面橙褐色を呈している。焼成良好である。

甕形土器（第118図392～395）

甕A（392～394）　394はわずかに外反する口縁部に刻目のつく土器である。口径は復原しえない。口縁部内外面には横方向のナデを施している。外面には斜方向のやや粗い刷毛もみられる。色調は外面暗赤褐色・内面暗褐色を呈している。砂粒を含み，焼成普通である。392・393は刻目のないAb類である。復原口径は392が17.9*cm*，393が約21.5*cm*である。392は撥ね上げ口縁に近い形状である。口縁部は横位の刷毛，内面はナデ，外面は斜位刷毛の調整をしている。砂粒含み，焼成あまり良くない。色調は暗褐色を呈している。393は内外面共研磨しているので，鉢の可能性もある。口縁部は横方向ナデを施している。胎土は細かい砂粒を含み，色



第118図　47号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第119図　47号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

調淡褐色の土器である。

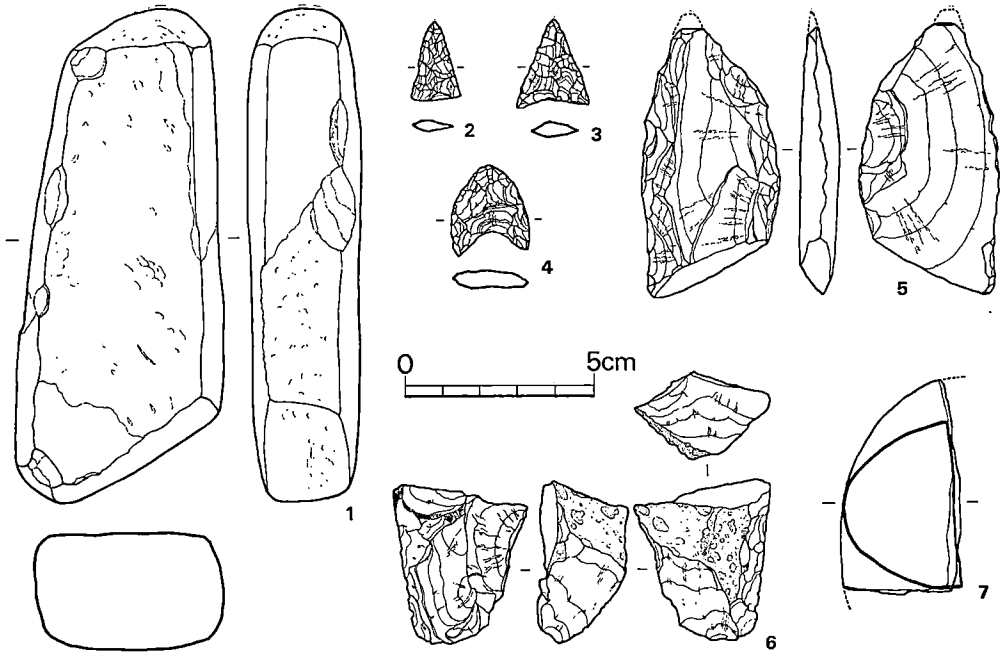
甕B (395)　口径26.3cm・器高26.5cmを測る完形品である。口唇部・凸帯共に刻目を施している。胴上部には上から下への刷毛，胴下部には下から上への刷毛がみられる。そして部分的にはナデ消している。内面はナデて研磨しているかのようである。第二次焼成を受け，底部付近は赤変し，凸帯下には煤が付着している。色調は内面には炭化物のせいか暗茶褐色化している。口縁部は淡褐色である。外面は茶褐色を呈している。胎土にはやや粗い石英・細かい長石を多量に含んでいる。粘土帯の接合痕が5ヵ所にみられる。

甕E (396)　復原口径約24cmを測り，口唇部に刻目を施している。胴部本体を薄く引き延ばし，その上に肥厚部分と口縁部を接合している。内面は細かい縦位の刷毛・外面は粗い縦位の刷毛を施している。口縁部は横方向にナデている。胎土には砂粒とわずかに金雲母を含んでいる。色調は外面に煤がみられ暗褐色，内面は淡褐色を呈している。焼成はやや良好である。

底部 (397～399)　398は平底・397・399は若干あげ底である。底部径は397・398が7.6cm，399が約8cmである。397は底部端がやや尖り気味で，399は丸みを帯びている。全て刷毛を施しているが，397はナデ消している。土器内面には炭化物らしきものが，いずれにも付着している。砂粒を含み，焼成は普通である。

鉢形土器 (第119図400～402)

鉢B (400・402)　402は刻目を有さず，復原口径約40cmを測る大形鉢である。Bb類に属する。400は復原口径約20cmの小形鉢である。刻目は施さず，Bc類に属する。器面調整は400が口縁部横ナデ，内面ヘラ研磨している。402は口縁部横ナデを施し，その下には指で押さえ



第120図　47号袋状竪穴土出石器実測図 (1/2)

た痕跡がみられる。胴部内外面とも 刷毛状道具でていねいに 研磨している。いずれも砂粒を含み，焼成やや良好である。色調は 402 が淡褐色，400 が外面灰黒色・内面淡褐色を呈している。

鉢F (401)　口径復原は出来なかった。調整についても磨滅していて不明である。胎土は比較的精良で，微砂粒を含む。色調は淡黄褐色を呈し，焼成良好である。　(藤瀬)

石　器（第120図）　1は全体を細かい敲打痕で 整形した後，下端及び左側縁部に研磨を施した段階の石器で断面は隅丸長方形で刃部は形成されていない。形態からすると柱状片刃石斧の未製品であろうが，石質が砂岩系であるのが気にかかる。長さ 12.8*cm*，厚さ 3.05*cm*，重さ 300*g*。 2～4は打製石鏃で2は基部を欠損する。 4は側辺が外彎するもので最大幅を胴部に持つ。長さ2.3*cm*，幅2.1*cm*，厚さ0.43*cm*，重さ 1.85*g*。 2・3は黒曜石，　4はハリ質安山岩。 5はサヌカイト製の横長剝片の両縁に荒い二次加工を加えた両刃削器。 6もやはりサヌカイト製角礫を利用した石核で重さ29.1*g*。 7は桃褐色を呈す花崗岩を用いた磨石で 1/5 破片。厚さ 4.3*cm*。他に太型蛤刃石斧の小破片，石庖丁片が出土した。　(木下)

≪48号袋状竪穴（図版38，第117図）　台地北東部に 位置しており，入口は少し畑作等により削られているが，比較的残存状態の良い袋状竪穴である。底面径は195×168*cm*を測り，深さは137*cm*を測る。底面プランは不整な楕円形を呈している。入口は約80*cm*のほぼ円形である。断面形状は典型的なフラスコ状である。出土遺物は 残存状態の 良好な土器が多かった。壺5

（うち完形１）・甕14（うち完形１）・鉢１個体分が出土した。石器は石斧２・石核２・投弾２が出土した。

出土遺物（図版51・57，第121～123図）

壺形土器（第121図403～407）

壺Ｂ（406）　口縁部わずかに肥厚しているが，「く」字状に外反するＢｂ類に属する。口径20.9㎝・器高33.5㎝を測る完形品である。最大径は胴部中位にあり，32.2㎝を測る。肩部に２条のヘラ描き沈線を施し，底部はややあげ底である。胴部と頸部境界には明瞭な接合痕がみられる。接合個所は12個所みられる。口縁部には横ナデとナデ磨き，器壁外面は横ヘラ磨き後ナデ磨き，内面は指でナデ上げた後ナデ調整を施している。胎土にはやや粗い石英と細かい長石更に若干の金雲母含んでいる。精製していて良好である。色調は黄褐色を呈する。焼成は良好であるが，最大径の部分に第一次焼成時の黒斑がみられる。

壺Ｃ（403）　復原口径15.8㎝を測る。口縁部はやや肥厚し，大きく外反している。Ｃｂ類に属する。口唇部は横にナデている。その他は剝落が著しい為不明である。胎土には砂粒含み，色調は淡褐色を呈している。焼成良好の土器である。

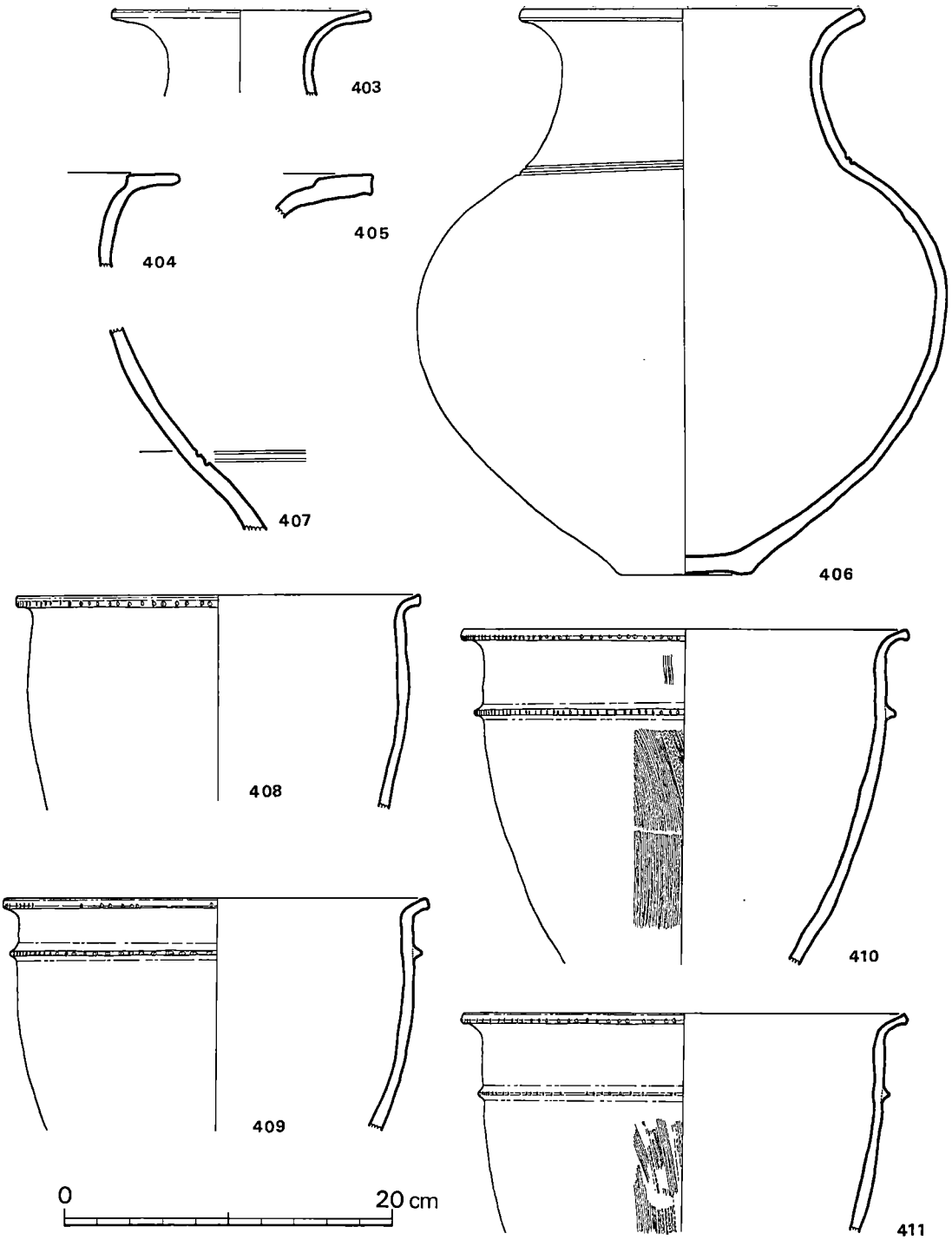
口縁部（404・405）　口径は復原しえない口縁部片２個体分である。404は口縁部内面に平坦化する程貼り付け肥厚させている。頸部の立ち上がりは強い。口縁部平坦面は横方向の細かい刷毛を施している。口唇部と有段面は横方向のナデを施している。胎土には微砂粒含み，焼成良好である。色調は部分的に赤と黄色みがかった淡褐色を呈している。405は器肉が厚く，内面に有段肥厚がある。壺Ａ類かとも思われるが，口唇部に刻目はない。調整は横方向にナデて仕上げている。砂粒含み，淡赤褐色・焼成普通の土器である。

胴部（407）　頸部から胴部にかけての土器片である。肩部に２条の沈線をもつ。外面ヘラ研磨・内面指ナデ調整を施している。胎土には砂粒及び角閃石・金雲母を含む。色調は淡褐色，焼成は良好である。

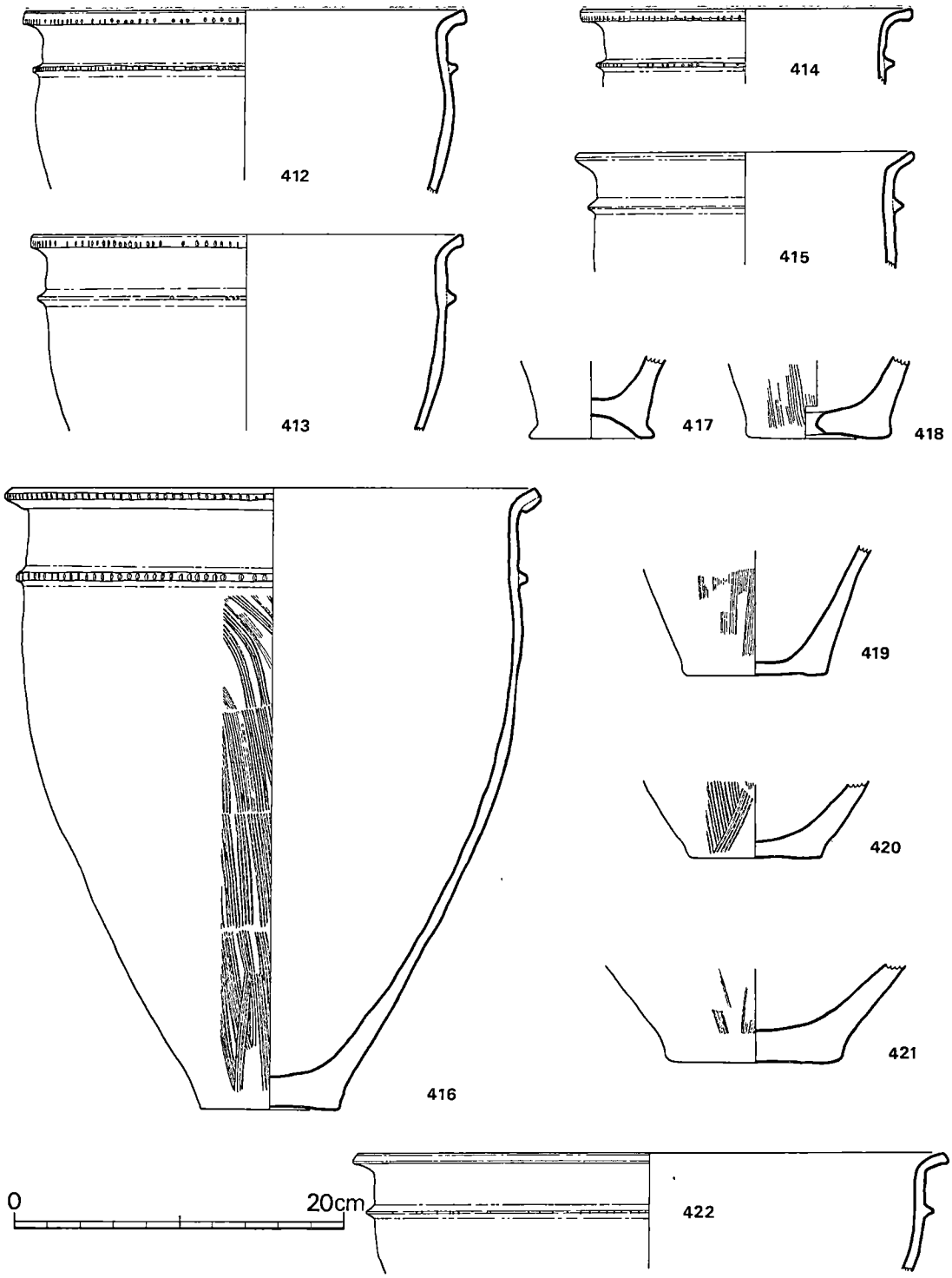
甕形土器（第121・122図408～421）

甕Ａ（408）　口唇部に刻目を施すＡａ類である。口径24.5㎝を測る。口唇部はやや肥厚している。刻目は太めで浅い。整形並びに調整技法は，口縁部が横ナデ，外面には縦方向の刷毛が認められたが，詳細は剝落の為不明である。内面も不明だが，炭化物らしきものが付着している。砂粒含み，暗褐色を呈している。

甕Ｂ（409～416）　415以外は全てＢａ類に属する。415はわずかに外反し，復原口径20.4㎝を測る。口縁下の三角凸帯はやや大きめである。口縁部と凸帯は横ナデし，その下は縦位刷毛をナデ消している。砂粒多量・金雲母少量含む。色調は外面暗灰褐色・内面淡褐色を呈している。409～414・416は口縁部・凸帯共に刻目をもつ。口径は416が32.4㎝・414が20.2㎝であるが，それ以外は全て26㎝前後である。416は完形品で器高47.3㎝を測る。口縁部外面は貼り



第121図　48号袋状竪穴出土土器実測図 1 (1/4)



第122図　48号袋状竪穴出土土器実測図 2 (1/4)

付け肥厚し，他にはみられない形状を呈している。口縁部と凸帯は横ナデしている。414は口縁部やや肥厚し，横方向にナデている。他は剝落で不明。409～413も口縁部は横ナデ，器外面は縦方向の刷毛を施している。409・413は剝落で詳明は不明である。器内面はナデ調整を施している。胎土には全て砂粒を含んでいる。但し，410は金雲母もわずかに含む。色調は暗褐色か或いは黄褐色を呈している。焼成も全ての土器があまり良くない。

底部（417～421）　全てに外面刷毛が認められるので甕形土器の底部であろう。底部径は421が10.2cm，他は全て8cm前後である。417はあげ底，418は下から焼成後に穿孔している。外面は縦位或いは斜位ハケが施され，内面は指で押さえ付けた痕跡認められる。ナデて調整している土器もみられる。418・419の内面には炭化物が付着している。胎土には砂粒を含み，焼成はあまり良くない。色調は419が赤褐色，他は淡褐色を呈している。

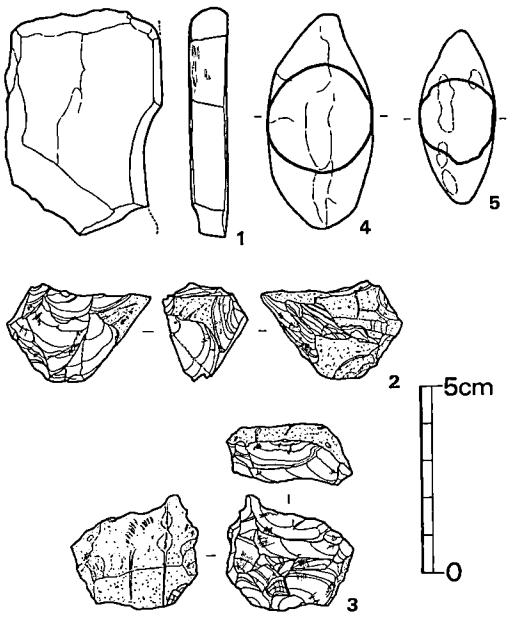
鉢形土器（第122図422）

C類に属す。復原口径35.8cmを測り，大形の部分にはいる。凸帯にのみ浅くて小さな刻目がみられる。口縁部は内外面共横ナデを施している。内面は摩耗しているが，外面はナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒含み，色調は淡褐色を呈している。焼成は普通である。

（藤瀬）

石器・土製品（第123図）　1は抉入石斧の頭部から胴部破片で粘板岩系の石材を用いている。2・3は黒曜石製の石核で3は中央部に稜を持ち，上・下両端から剝出している。4・5は土製の投弾で完形品。4は晴灰色を呈し長さ5.5cm，厚さ2.8cm，重さ31.8gとこの種のものにしては大型。

（木下）



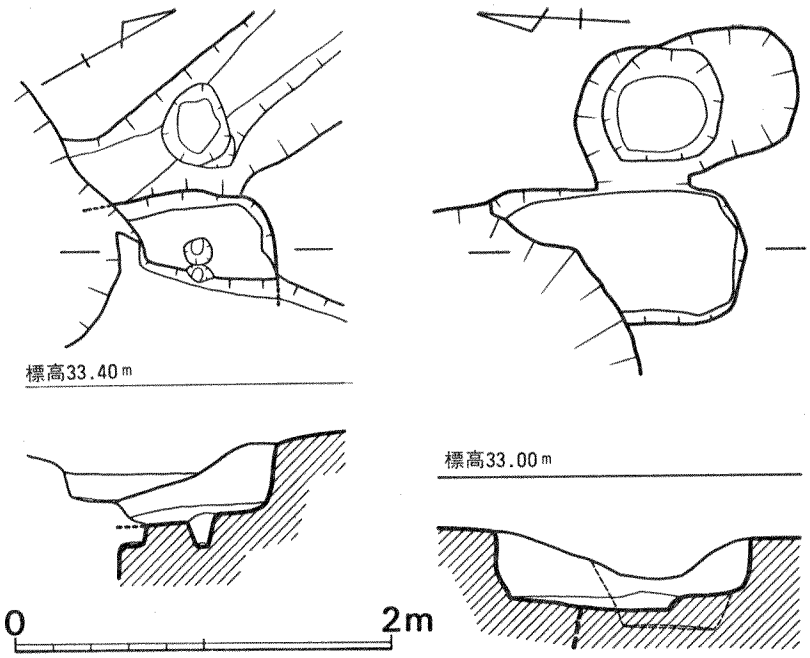
第123図　48号袋状竪穴出土石器・土製品実測図 (1/2)

≪49号方形竪穴（第124図）　C5区の南端部，45号袋状竪穴の東北方に接する位置にあり，45号袋状竪穴と共に18号住居跡によって切られており，北西部のコーナーが残る程度の竪穴で，全体の形状は明確ではない。西壁を長さ0.7m，北壁を0.4m残し，深さ0.4mで床面に達する。床面には，直径0.15m，深さ0.15m程度の，2個の柱穴様ピットが東西方向に並んで検出された。遺物は何らみあたらなかった。

これらの形状は前述した方形竪穴遺構と特徴を同じくすることから，同様な遺構と考えられ

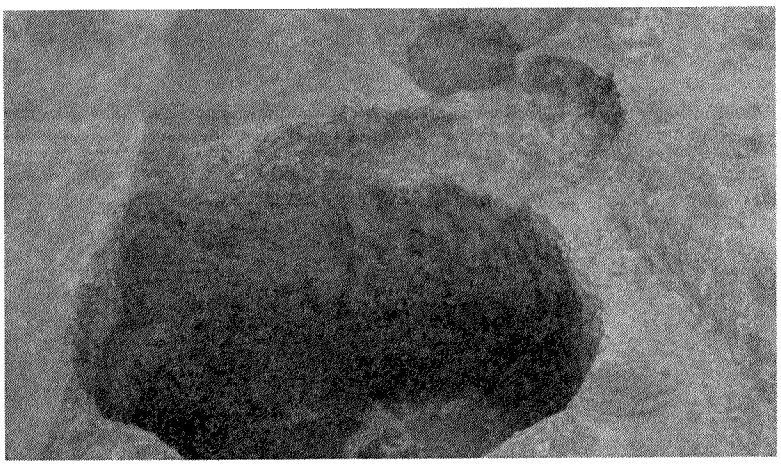
る。

≪50号方形竪穴（第124・125図）　C５区の中央部に位置するが，中世溝状遺構・21号住居跡が上部に占地し，26号甕棺墓・24号袋状竪穴が接して位置するため，残存状況は良好と言えない。残された周壁の最高値は0.35*m*を測り，床面の東部がやや高い。床面は長辺1.2*m*程度・短辺0.6*m*で東西が長軸方向である。柱穴様ピットは存在しない。遺物の出土もみとめられなかった。



第124図　49.50号袋状竪穴実測図（1/40）

前述した方形竪穴とは，ピットを伴わないことから性格の異なる遺構とも考えられるが，同様の堆積土が充塡していたことから便宜上同一に取り扱った。　（小池）



第125図　50号袋状竪穴全景

表 3　袋状竪穴一覧表

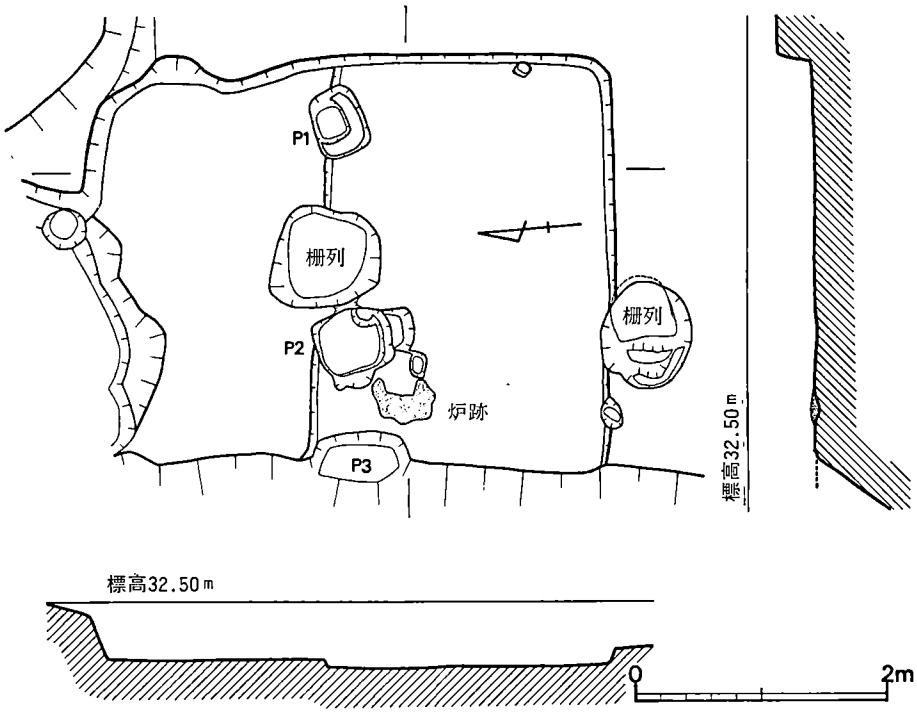
（単位cm，土器の点数は実測にたえた数を示す）

No.	地区	底面形態	底面径	深さ	出土品	備考
1	D 5	楕円形	228 × 206	168	壺12，甕4，甑1，鉢3，蓋1，石斧1，投弾1	ピット1
2	D 4	〃	191 × 108	88	細片若干	崖で半壊
3	E 5	〃	166 × 125	78	壺・甕破片若干	〃
4	D 5	〃	188 × 150	168	壺1，甕6，甑1，鉢1，蓋1，石核1	ピット1
5	D 5	円形	205 × 198	206	壺6，甕9，鉢7，石斧4，石鏃1，スクレイパー1，砥石1，耳飾1	
6	D 5	楕円形	254 × 198	205	壺5，甕10，鉢2，石斧2，石鏃1，石核1，砥石2，紡錘車1，土製円盤1	
7	D 5	隅丸方形	205 × 176	177	壺6，甕11，鉢2，蓋1，紡錘車1，土製円盤1	
8	D 5	楕円形	230 × 177	155	壺2	
9	D 6	方形	230 × 192	192	壺5，甕5，高杯1，石庖丁1，磨石1	
10	D 4	円形	278 × 274	198	壺1，甕5	
11	D 5	〃	241 × 220	158	甕2，甑1，石庖丁1	溝あり
12	D 5	長方形	178 × 139	178	甕5，石核1，磨石1，紡錘車1，剝片2	ピット2
13	D 5	〃（？）	231 × 104	63	甕1，石斧1，磨製石鏃1	崖で半壊
14	D 6	円形	208 × 189	157	壺6，甕21，甑1，鉢1，石斧1，石核1，砥石1，石製円盤1	
15	D 5	〃	198 × 196	128	壺7，甕5，鉢1，石庖丁2，砥石1	
16	D 5	〃	132 × 131	113	壺細片若干，石鏃1，スクレイパー2	
17	D 5	〃	218 × 211	135	壺2，甕5，蓋1，石庖丁1，石鏃3，スクレイパー1，紡錘車1，剝片1，イネ・マメ・ドングリの炭化種子	
18	C 6	長方形	125 × 73	63		方形竪穴　ピット4
19	C 6	円形	222 × 209	217	壺6，甕9，鉢3，石斧2，石庖丁2，石鏃8，スクレイパー2，石核1，砥石1	
20	C 6	不整長方形	111 × 87	74		方形竪穴　ピット1
21	C 6	隅丸長方形	123 × 73	67		方形竪穴　ピット3
22	C 4	円形	195 × 190	171	壺5，甕4，鉢1，石斧1，石鏃1，磨石1，	
23	C 6	楕円形	200 × 170	179	壺5，甕1，石斧2，石鏃2，砥石4，敲石2，	溝あり
24	C 5	〃	216 × 155	211	壺3，甕8，鉢2，蓋2，高杯1，石斧1，石鏃3，スクレイパー3，石核2，砥石1，敲石1，紡錘車2	
25	C 6	〃	198 × 166	185	壺3，甕6，甑1，	
26	C 6	不整円形	49 × 45	110	甕2，マメの炭化種子	
27	C 6	楕円形	102 × 71	83	土器破片若干	方形竪穴　ピット2
28	C 5	不整隅丸長方形	126 × 82	40		〃　ピット3
29	C 5	不整長方形	96 × 60	55		〃　ピット2
30	C 5	〃	103 × 58	25		〃　ピット1
31	C 5	隅丸長方形	95 × 57	37		〃　ピット2
32	C 6	円形	249 × 220	153	壺3，甕4，石斧1，石核1，磨石1，	
33	B 7	不整長方形	99 × 56	42		方形竪穴　ピット2
34	C 5	〃	99 × 55	39		〃　ピット1
35	D 4	楕円形	256 × 168	182	壺12，甕11，鉢3，蓋1，石斧4，石鏃2，刃器1，石核1，石製円盤1	周溝あり　ピット2
36	D 4	〃	219 × 187	196	甕破片若干	
37	D 4	円形	241 × 224	200	壺13，甕5，甑1，鉢2，石斧3（未1），石核1，敲石1，紡錘車1	
38	D 4	不整円形	255 × 253	165	壺2	
39	C 5	不整方形	192 × 173	180	壺2，甕7，石斧2，石鏃1，石核1	
40	B 6	円形	178 × 172	173	壺5，甕3，鉢1，石斧1，石庖丁1，石鏃1，刃器1，石核2，磨石2	
41	C 6	不整長方形	90 × 70	56		方形竪穴　ピット2
42	C 6	楕円形	178 × 149	144	甕破片若干，石核1，砥石1，紡錘車1，	
43	C 6	隅丸方形	191 × 185	164	壺5，甕2，鉢2，石斧5，石庖丁1，石鏃1，石槍1，スクレイパー3，石核1，刃器1，砥石3，剝片2	
44	C 5	楕円形	242 × 206	180	壺1，甕7，甑1，鉢1，石斧3，スクイレパー2，石核2，磨石1，敲石1，剝片2	
45	C 5	〃	188 × 169	159	壺破片若干，石斧2，石鏃1，石核1	
46	D 4	長方形	198 × 170	205	壺10，甕11，鉢5，蓋1，石斧1，石鏃3，石核2，砥石1	
47	D 4	楕円形	220 × 181	175	壺8，甕8，鉢3，石斧2，石庖丁1，石鏃3，石核1，スクレイパー1，磨石1	周溝あり
48	C 4	不整楕円形	195 × 168	137	壺5，甕14，鉢1，石斧2，石核2，投弾2	
49	C 5	不整長方形	62 × 32	39		方形竪穴　ピット2
50	C 5	隅丸長方形	121 × 62	35		〃

(2) 竪穴住居跡

≪**1号住居跡**（図版59，第126図） 北側を1号墳周溝，中央部は中世の棚列と重復し，西側は開墾時の崖により破壊されている。南北4.20*m*，現存値で東西3.20*m*を測る隅丸方形の竪穴住居跡で，北側に幅1.75*m*のベット状のテラスを有す。壁高は北壁で35*cm*，南壁で10*cm*，東壁25*cm*と浅く，上面がかなり削平されていることが判る。柱穴と思われるピットはＰ１～Ｐ３の３個のみである。炉跡は西側中央部にある。床面はよくひきしめられている。

遺物は中期前葉の甕・高杯の小破片のみである。

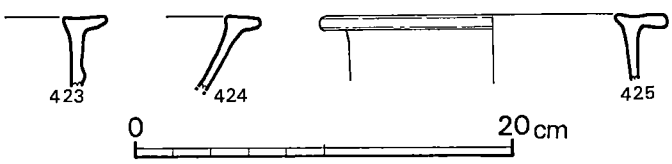


第126図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第127図）

甕形土器（423） 口縁部付近の破片資料である。原初的「T」字状口縁の甕で，口縁下に1条の三角凸帯がついている。内外ともヨコナデで仕上げた黄褐色を呈す土器である。

高杯形土器（424） 口縁部付近の破片で，口縁端部上面を肥厚させた上面平坦の口縁部をもつ高杯である。調整は器面風化のため不明。色調は



第127図　1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

黄褐色を呈す。

≪**2号住居跡**（図版59，第128図） 北側を25号土壙墓に，南側を溝状遺構Aと4号掘立柱建物によって切られて検出された。東西1.85*m*×2.90*m*の小形の長方形竪穴住居跡で，壁高は上面がかなり削平されているため，わずかに北壁で20*cm*，南壁で5*cm*と浅い。炉跡は中央よりやや西側に偏してある。柱穴と思われるピットはない。床面は良くたたきしめられている。

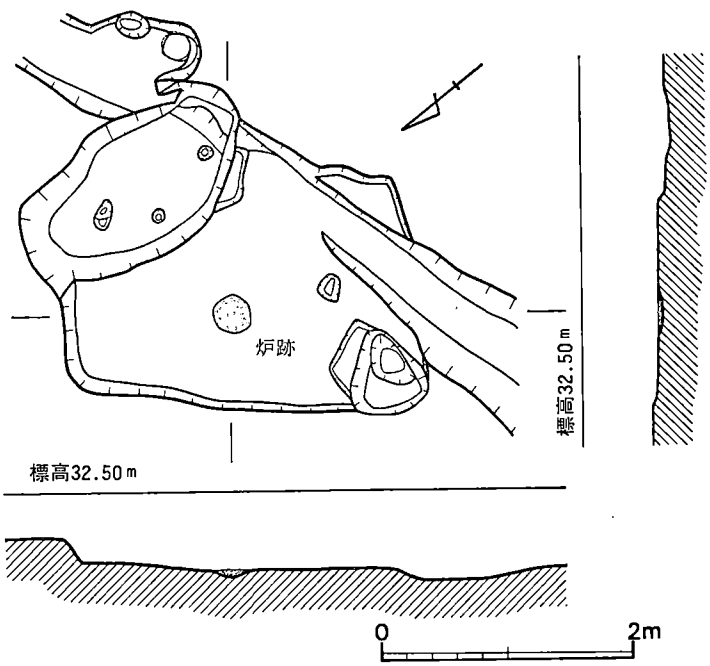
遺物は中期前葉を思わせる土器小片数点と，扁平片刃石斧1，石槍1のみである。

出土遺物（第127・129図）

甕形土器(第127図425)

口縁部付近の破片資料で，復原口径18.2*cm*を測る。口縁部上面は平担で，中央部がわずかに凹む「L」字状をなす。内外ともヨコナデで位上げている。色調は外面淡褐色，内面橙褐色を呈す。

（井上）

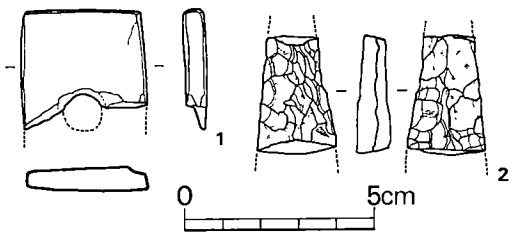


第128図 2号竪穴住居跡実測図（1/60）

石　器（第128図）

1は幅3.28*cm*，厚さ0.65*cm*の扁平・長方形を呈す。断面は左縁は0.3*cm*と右縁に比べて薄い。頭部から2.3*cm*下の中央に丸い孔の痕跡がみられる。復原すると0.9*cm*ほどの径になろう。この孔から刃部にかけて欠損しているが，全体は丁寧な研磨仕上げである。形態からして有孔の扁平片刃石斧になるのであろう黄灰色頁岩製。2はサヌカイト製の石槍で，先端部及び基部を欠損する。比較的厚みのある剝片を用いている。

（木下）



第129図 2号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

≪**3号住居跡**（図版60，第130図） 上面がかなり削平されていることと，南側を1号墳石室により破壊されているため，規模等については不明である。北壁から東壁にかけてわずかに残

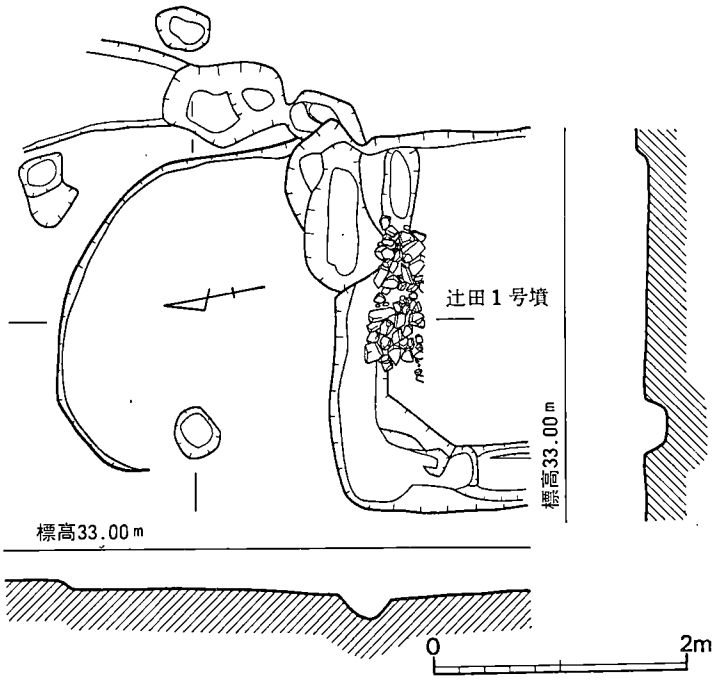
る形状から楕円形プランの竪穴住居跡と思われる。床面は良くたたきしめられているが，柱穴・炉跡等の施設はみられない。

遺物は中期前葉を思わせる土器小片若干と扁平片刃石斧1，太型蛤刃石斧1，石庖丁1，管玉1が出土した。（井上）

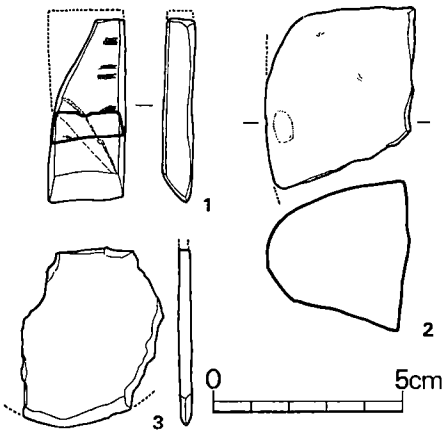
出土遺物(第131・132図)

石　器（第131・132図）

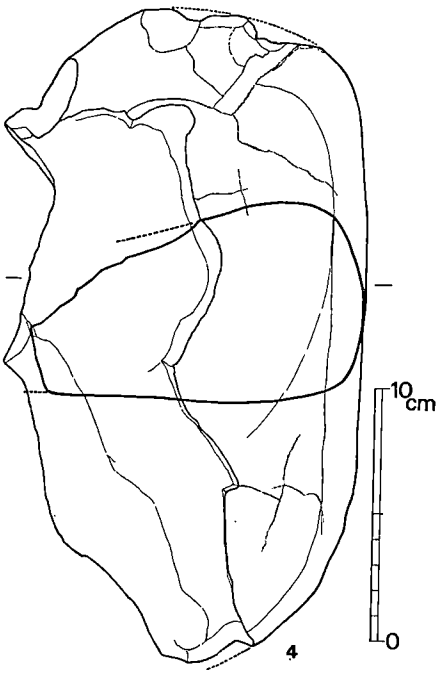
1は床面に密着して出土した黄灰色頁岩製の小型扁平片刃石斧で頭部を欠損し，現存では長さ47.5㎜であるが若干長い程度であろう。幅は刃部近くで19.6㎜，厚さ8.1㎜を測る。頭部から胴中央部にかけて，斜めに欠損しているが，欠損後再研磨し，再利用している。刃部は鋭く47°前後で斜刃。2は太型蛤刃石斧の胴部破片で玄武岩質。



第130図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）



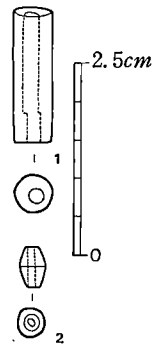
第131図　3号竪穴住居跡出土石器実測図 1 (1/2)



第132図　3号竪穴住居跡出土石器実測図 2 (1/3)

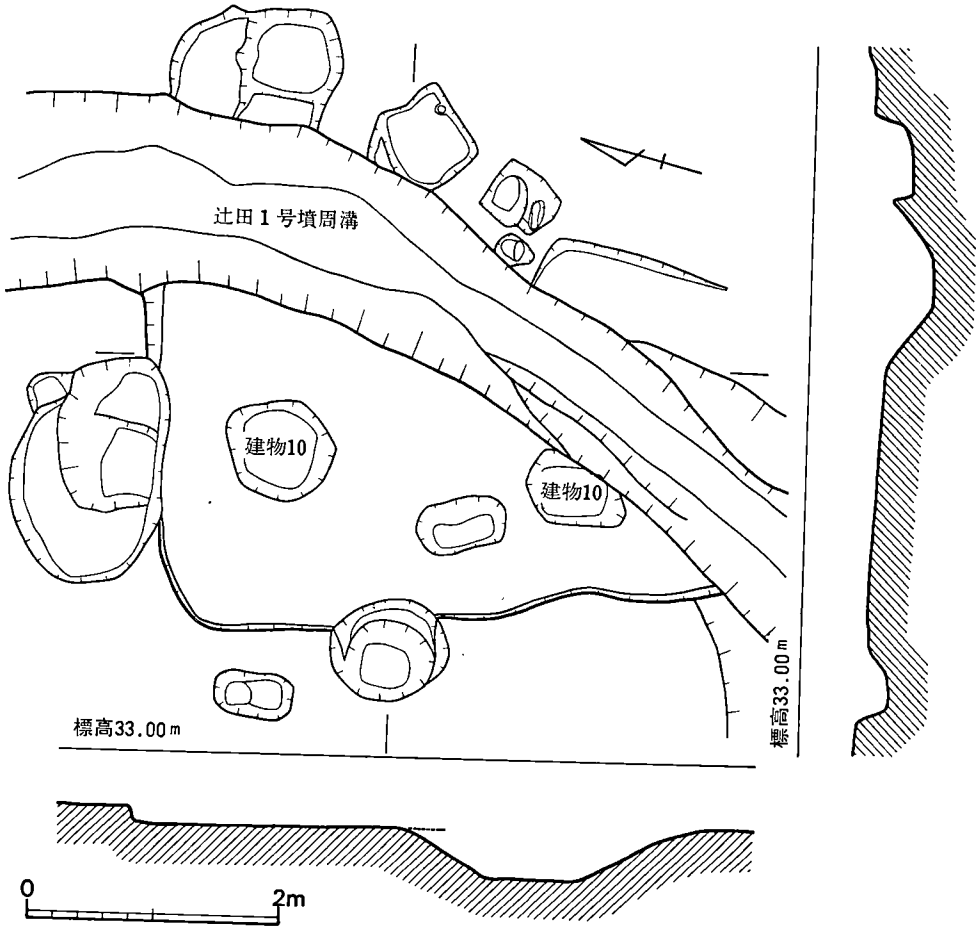
3は粘板岩製の石庖丁片。刃部近くで2.8㎜と非常に薄手で，形態は三角形に近いものであろう。4は床面出土の石皿と考えられる石器で硬砂岩製。厚さ7.9㎝，現在長25.6㎝と大形で中央部は浅くへこむ。重さ3.2kg。

玉　類(第133図1)　淡灰青色碧玉製管玉の完形品で長さ1.74㎝，径0.53㎝，孔径0.2㎝を測る。穿孔は上・下両方からで，図上では上部から2/3に達する。床面出土で，辻田1号墳出土のものはすべて濃緑色を呈し長さ，径とも一回り大きい碧玉の管玉であるところから当住居跡に伴出するものであろう。重さ0.85g。　(木下)



第133図　3・18号竪穴住居跡出土玉類実測図 (1/1)

≪4号住居跡（図版60，第134図）　1号墳周溝と10号掘立柱建物と重復して検出されたため，また上面がかなり削平されているため，わずかに西側に方形プランの形状と床面を残すのみであった。従って，規模は不明で

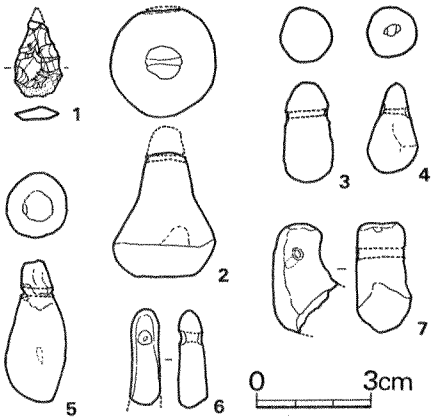


第134図　4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ある。床面はさほどたたきしめられていず，柱穴・炉跡等もみられない。遺物は中期前葉を思わせる土器小片数点と打製石鏃1，土製品6が出土したのみである。（井上）

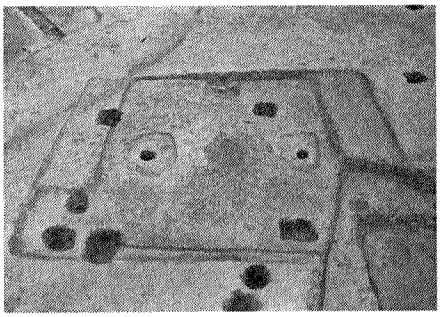
出土遺物（図版101，第135図）

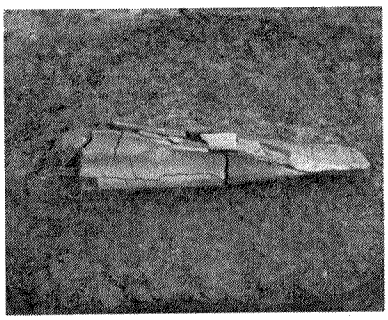
石器・土製品（第135図） 石器は石鏃の1点のみで，1は打製の凸基無茎式石鏃で先端を欠損。縦長剝片を利用し，基部は自然面を残す。部分的に磨かれている。2～7は土製品で上部に一孔を有す。2は孔から上を欠損し，テトラポット型を呈す。最大幅2.7cm灰褐色で脆弱。3は繭型を呈す完形品で頭部を細くしない点他と相異している。長さ2.6cm，厚1.4cm，重さ4.3g。4は頭を細くしたもので重さ，2.4g。5は4.7cmと長いもので重さ3.5g。6は棒状で下部を欠損する。淡黄褐色を呈し，脆弱。3は繭型を呈す完形品で頭部を細くしない点が他と相異している。長さ2.6cm，厚さ1.4cm，重さ4.3g。4は頭を細くしたもので重さ2.4g。5は4.7cmと長いもので重さ3.5g。6は棒状で下部を欠損する。淡黄褐色を呈し，脆弱。7は「く」字形に彎曲し，この形のものとしては唯一の出土品である。これらの土製品は4号住居跡に集中して出土している点が注意される。何らかの錘としての用途が考えられよう。（木下）



第135図　4号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）

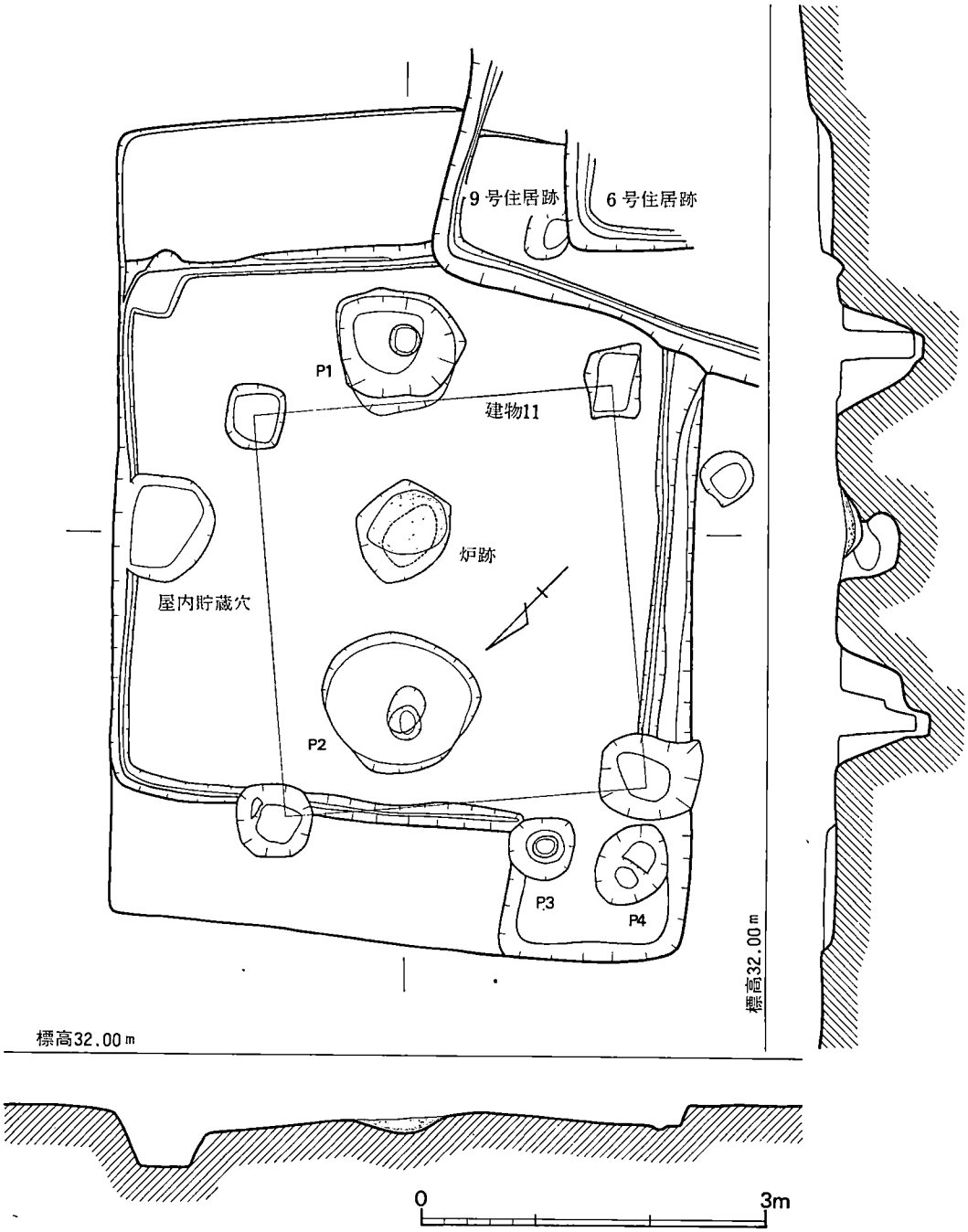
≪**5号住居跡**（図版62，第136～138図） 南東隅を9号住居跡に，中央部を11号掘立柱建物に切られて発見されたものである。東西7.25m×南北5.05mの長方形竪穴住居跡で，壁高は上面がかなり削平されているため，わずかに2～20cmと浅い。東西に幅約1mの貼り床のベット状遺構を有し，南西隅はベットを欠き入口を思わせる。周溝はベット状遺構の内側をめぐり，南西隅で切れている。北壁中央部にはいわゆる屋内貯蔵穴があり，柱穴は中央にあるP1・P2の2個で，中央に炉跡がある。柱穴の掘り方はP1・P2とも大きく，深いしっかりしたもので，柱の太さは直径25cm前後と思われる。またベット状遺構を欠く南西隅にはP3・P4の2個のピットが両側にあり入口部の施設に使用されたものであろう。


第136図　5号竪穴住居跡


第137図　5号竪穴住居跡内砥石出土状態

遺物は鉄鏃1，石庖丁1，砥石1と若干の土器細片のみで時期はかならずしも明確ではないが，8号・9号住居跡や他の例から考えて後期終末をさほどさかのぼるものではないだろう。

（井上）

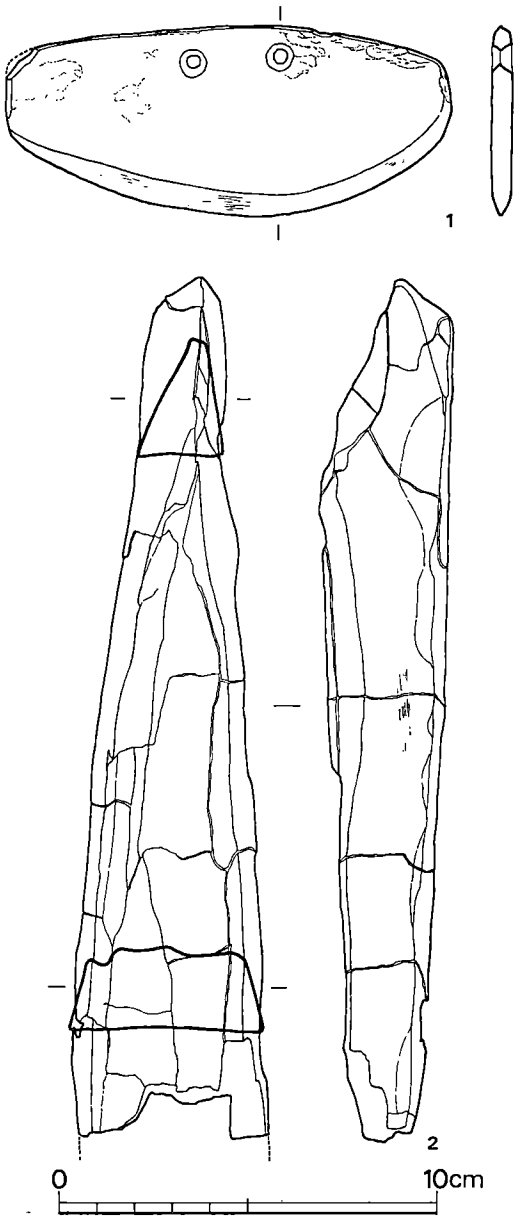


第138図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版101・96，第139図）

石　器（第139図）　1は背縁の一部を欠損するがほぼ完形の石庖丁で覆土内より出土した。長さ11.7㎝，幅4.9㎝，厚さ0.55㎝で重さは48.1gを測り，紐孔間は孔の中心間で2.3㎝。孔のすぐ上の背縁は一度欠けた後磨き直している。背縁はほとんど持たないといってよい。2は砥石で四つの研砥面を有し，全体は舟型を呈す。一面に2本の溝状砥面をもつ長さ22.7㎝，幅4.9㎝，厚さは先端部で3㎝，中央部で2.7㎝を測る。　（木下）

鉄　鏃（第150図1）　無茎で浅くわたりのつく長三角形の扁平な鏃で，逆刺部の両端を欠いている。復元全長2.9㎝，中央部幅1.4㎝，逆刺部の復元幅1.6㎝，身の厚さは0.15を測る。

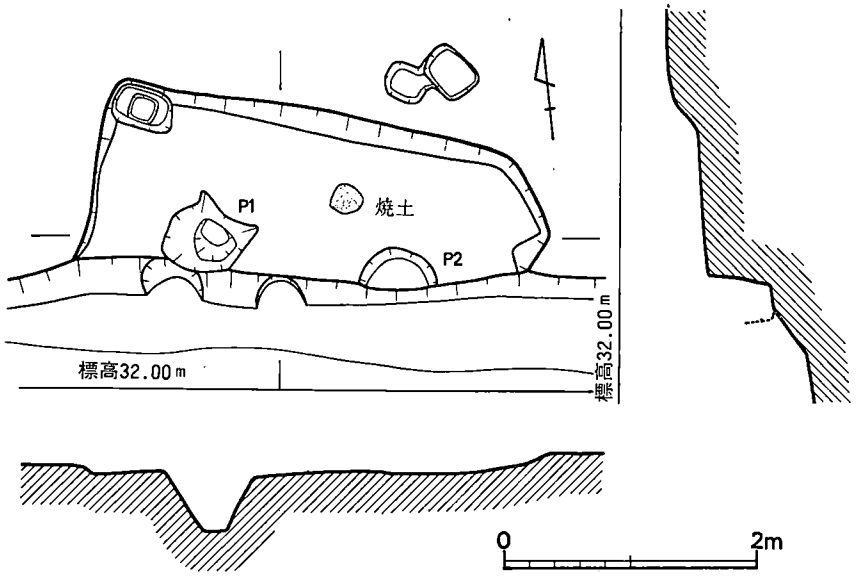


第139図　5号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

≪**7号住居跡**（図版62，第140図）　南側の大半を開墾時の開削で破壊され，北壁と東西壁の一部を残すのみで規模は不明である。しかし，残るプランは東西壁から一辺約3.5mの方形を呈することが推定される。床面はあまりたたきしめられていず，柱穴を思わせるピットはＰ１・Ｐ２の２個あるが，深さに差異が大きく疑問が残る。炉跡は北壁中央に偏してある。出土遺物は何等なく時期は不明である。

≪**8号住居跡**（図版63，第141図）　東西約6.10m×南北約8mを測る長方形竪穴住居跡である。北壁側と南壁側の一部に造り出しのベット状遺構を有し，周構は5号住居跡とは異なり，壁直下にあり，全周しない。住居内には多数のピットがあるが柱穴と思われるものは不明で，炉跡もみあたらない。また，北西部では新しい時期の溝状遺構と複合している。

遺物は壺・甕・高杯・器台等の破片多数が，床面よりわずかに浮いた状態で出土した。他に

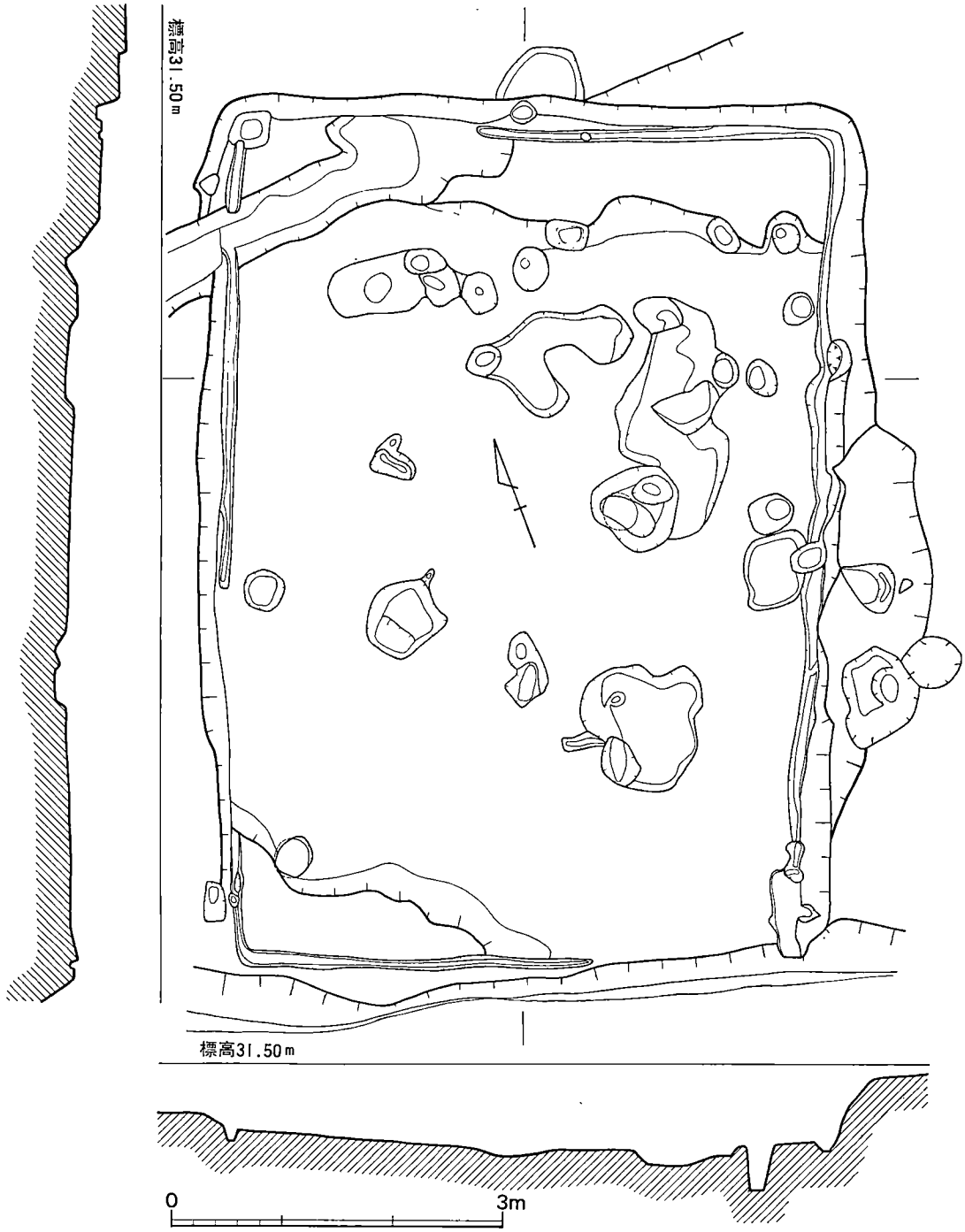


第140図　7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

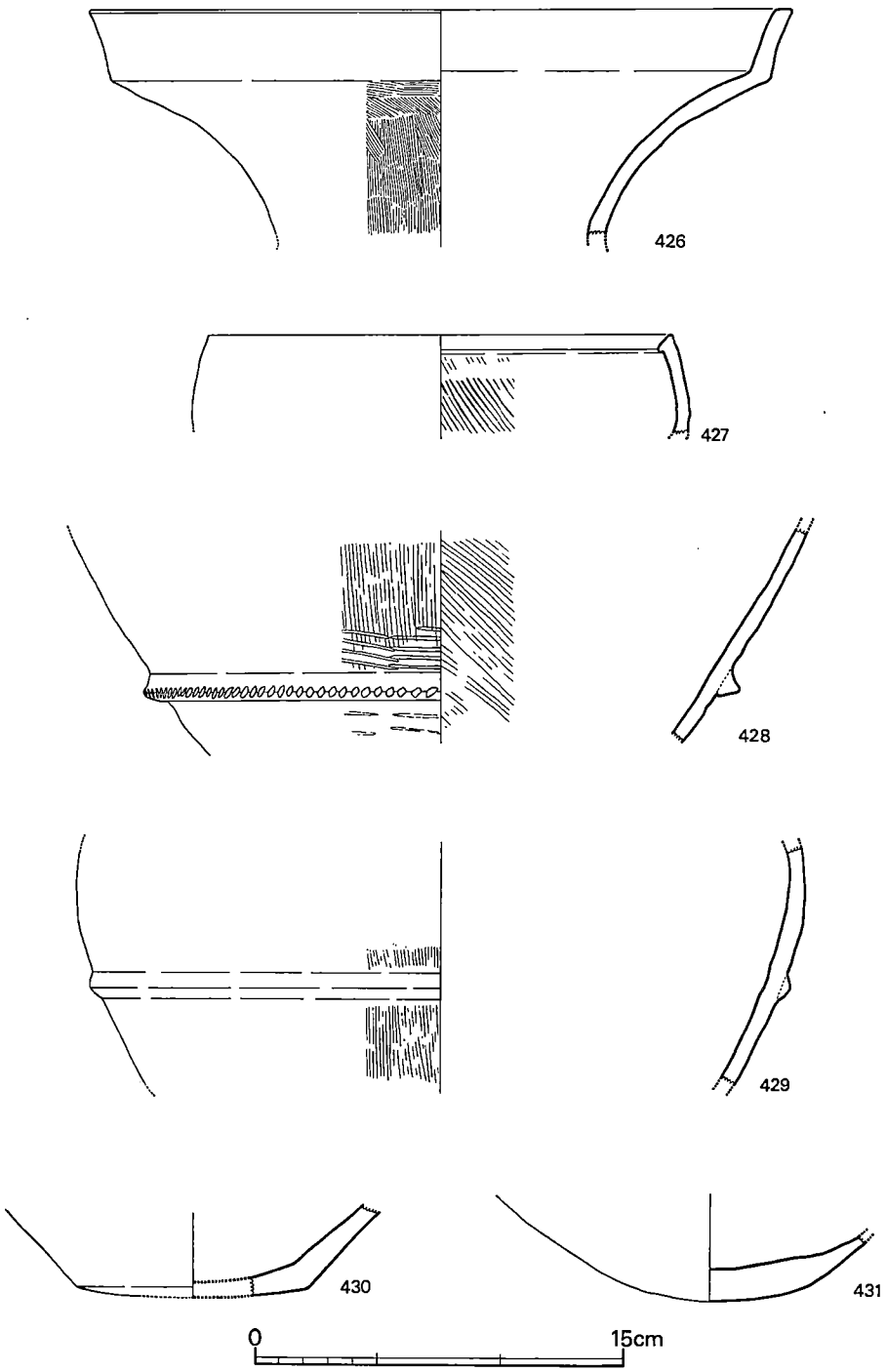
太型蛤刃石斧1，石庖丁1，削器1，錘1，鉄滓2が検出された。時期は後期終末である。

出土遺物（図版91・92・96・101，第142～150図）

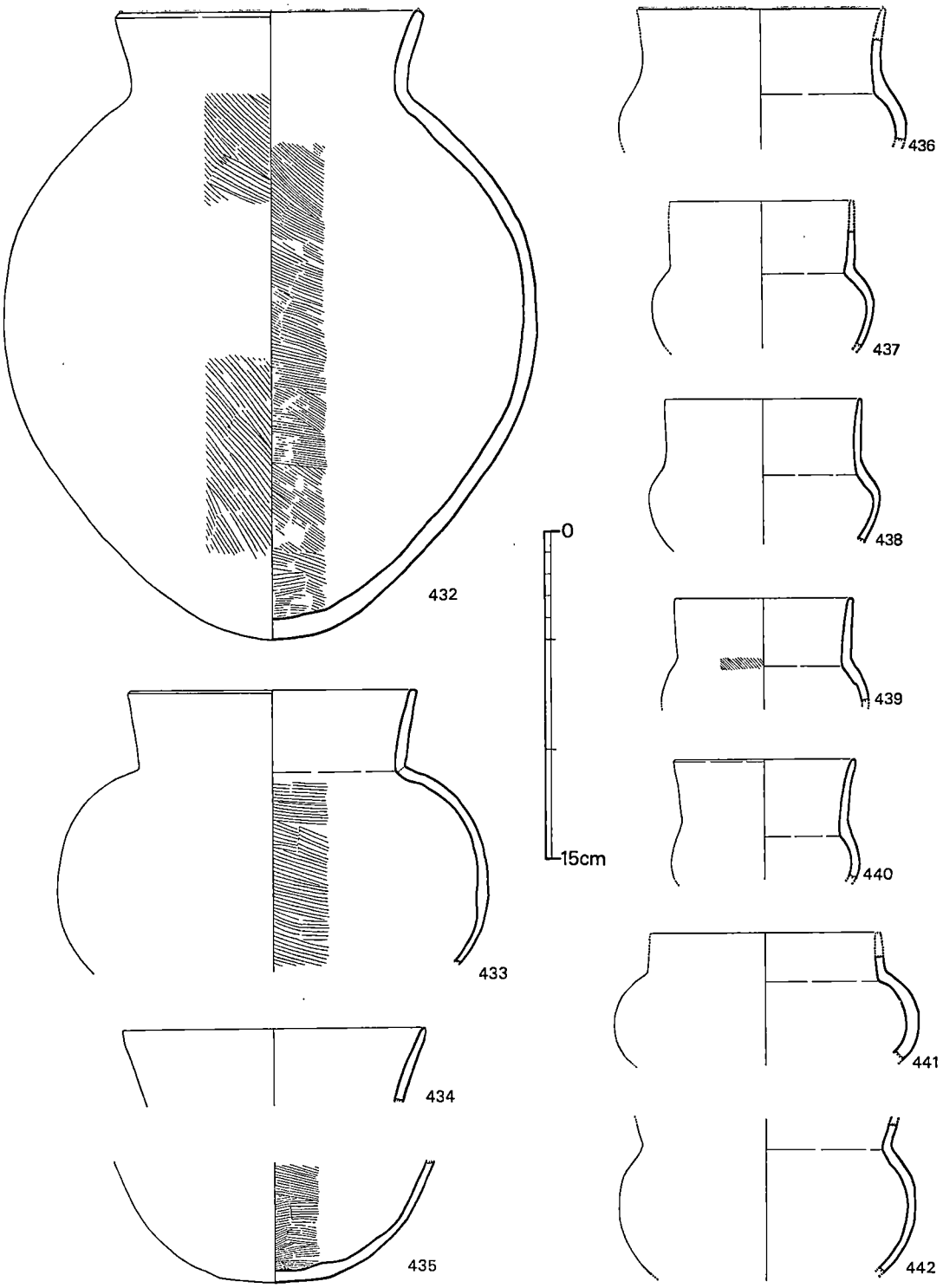
壺形土器（第142・143図426～435）　426は復原口径28.3cmを測る複合口縁の壺で，頸部への移行はなめらかである。口縁部内外はヨコナデ，頸部外面は刷毛，内面はナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。427は口縁部の破片資料で，復原口径18.2cmを測る内彎気味の複合状口縁の壺である。内面刷毛，口縁端部内面から外面はヨコナデで仕上げた暗黄褐色を呈す土器で，焼成は良い。428・429とも胴部下半の破片資料である。胴部外面下位に1条の三角凸帯を付した壺で，428は端部に刻目を施し，外面は粗いタタキ目のあと縦位の刷毛，内面斜位の刷毛で仕上げている。色調は黄褐色を呈す。429は外面刷毛，内面は器面風化のため不明である。色調は淡黄褐色を呈す。430・431とも底部の破片資料である。430は丸底気味の平底，431は丸底で，内外ともナデて仕上げている。色調は430が暗茶褐色，431が淡茶褐色を呈す。432は単口縁の壺で，口径14cm，器高28.2cmを測る。丸底の底部に倒卵形の胴部がつき，口縁部は短かく直立気味に外反する。胴部外内面は刷毛，底部外面はヘラ削り，口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡褐色を呈す土器である。433は直口する短頸の壺で，胴部は球形を呈する。復原口径13.1cmを測る。胴部内面刷毛，外面ナデ，口縁部内外をヨコナデして仕上げた作りのよい土器である。色調は淡茶褐色を呈す。434も433とほぼ同様の器形を呈する壺と思われるが，口縁部はわずかに外反する。復原口径13.8cmを測る。色調は淡褐色を呈す。435は丸底の底部の破片資料で，内面刷毛，外面刷毛のあとナデて仕上げた褐色を呈す作りの良い土器である。433と同様の壺の底部であろう。



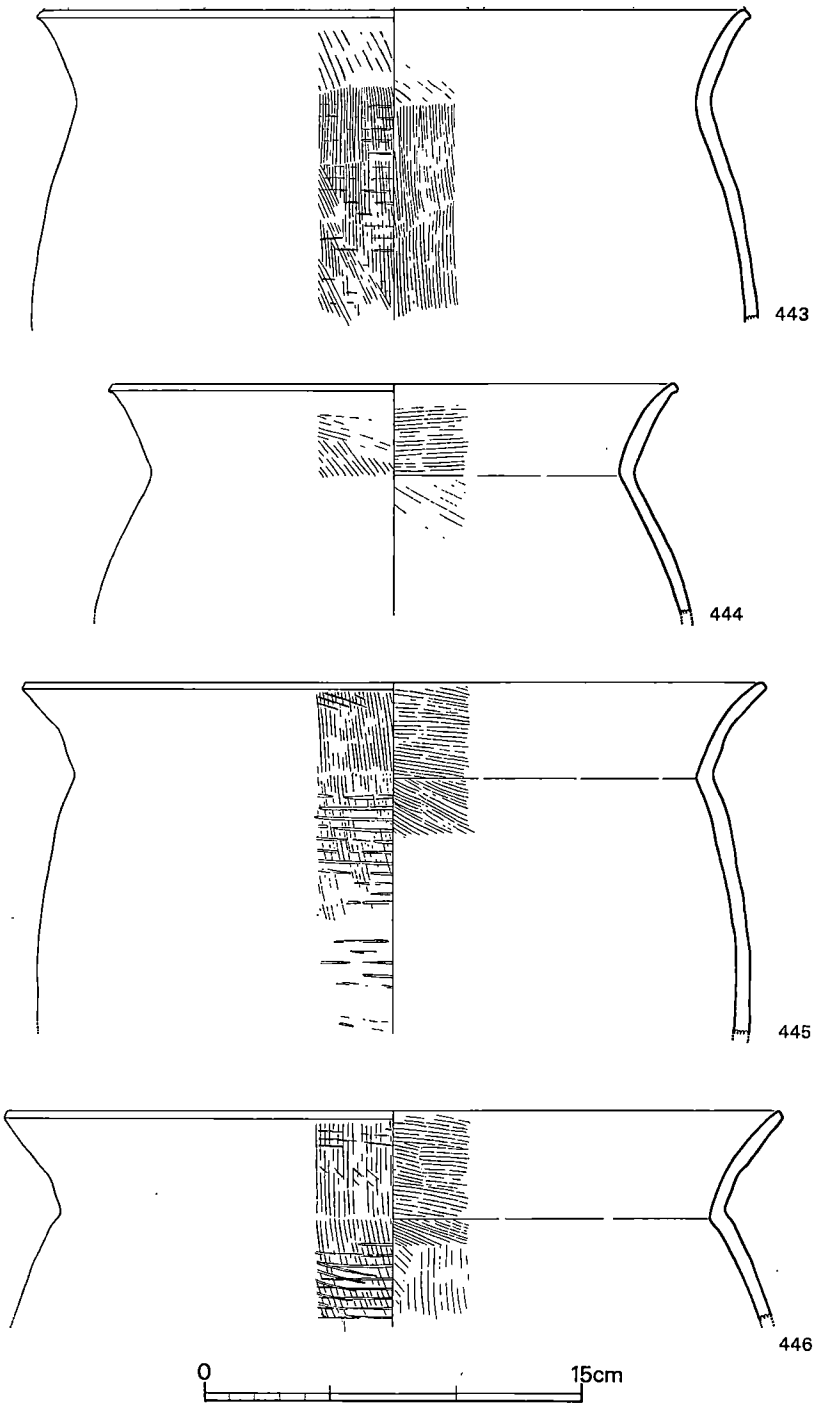
第141図　8号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第142図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)



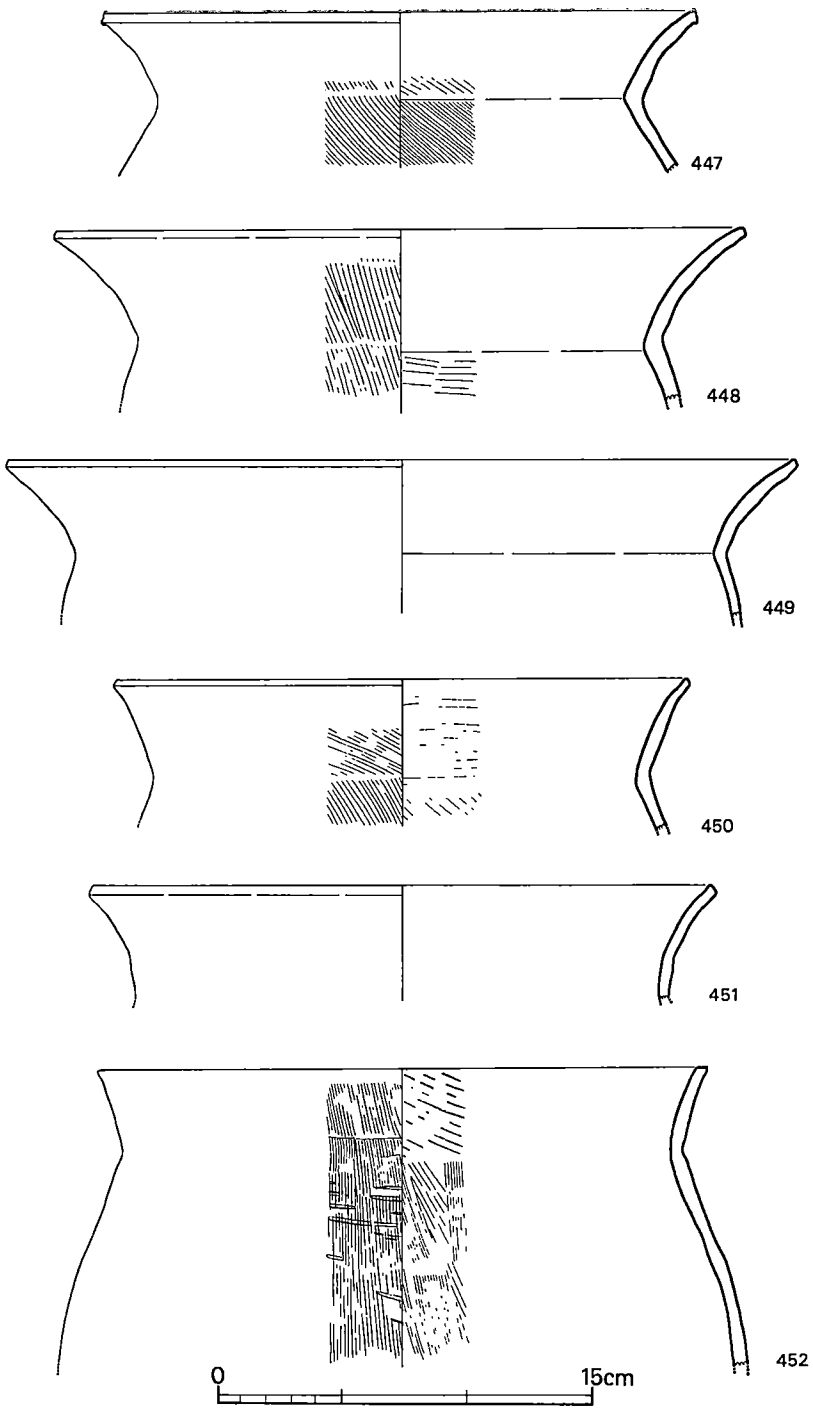
第143図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)



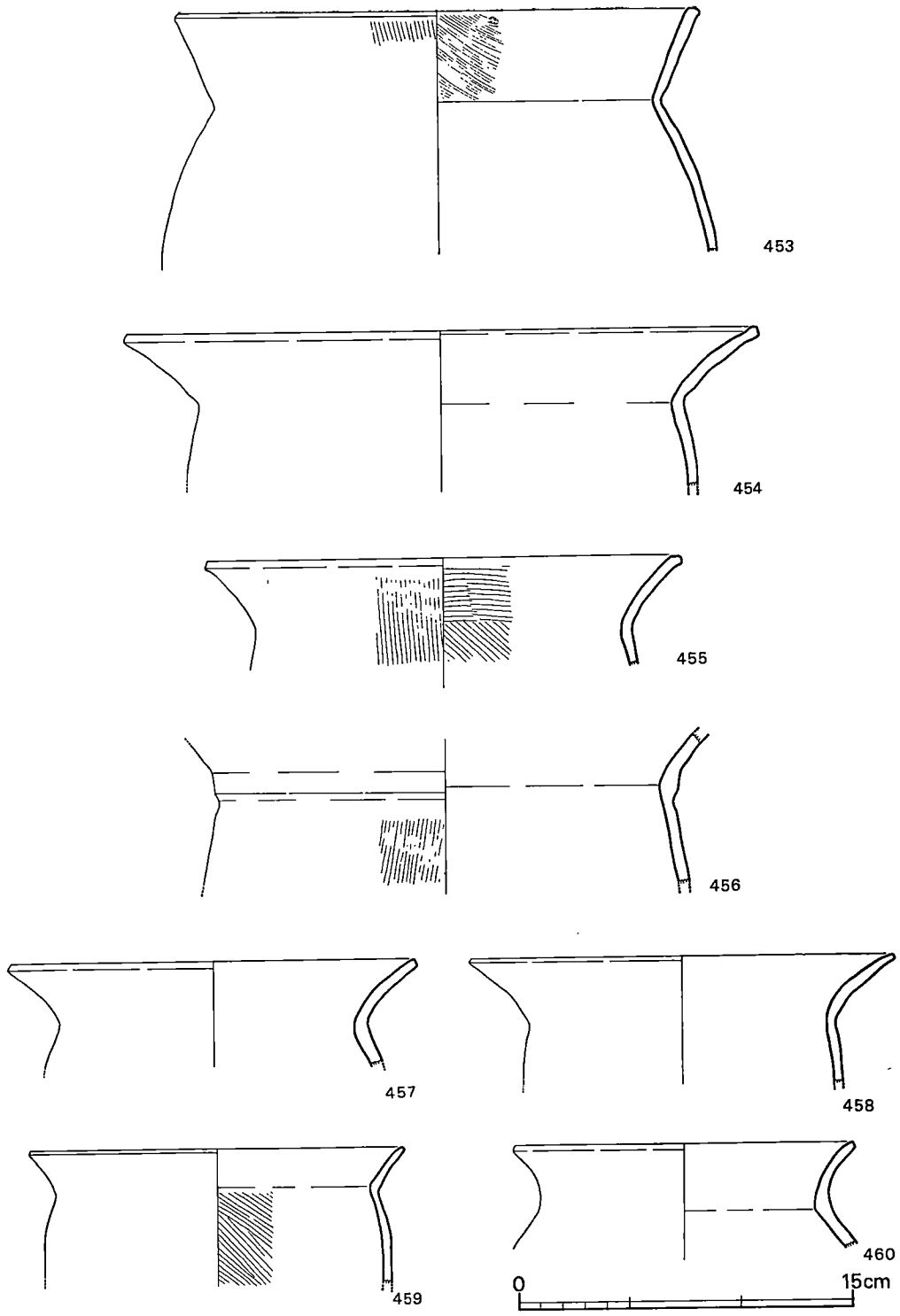
第144図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)

小型壺土器（第143図436～442） 胴部は扁平な球形を呈し，口縁径と胴部径に大きな差をみない小型壺である。この壺には口縁部が直立するもの（436～441）と「く」字状に反するもの（442）の2種類がある。大きさにも2種類あって口径8～9cmのもの（437～440）と10cmを越すもの（436・441・442）がある。調整は胴部内外をナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げているのが一般である。色調は436・442が黄褐色，440が暗茶褐色を呈す他は，全て茶褐色を呈す。

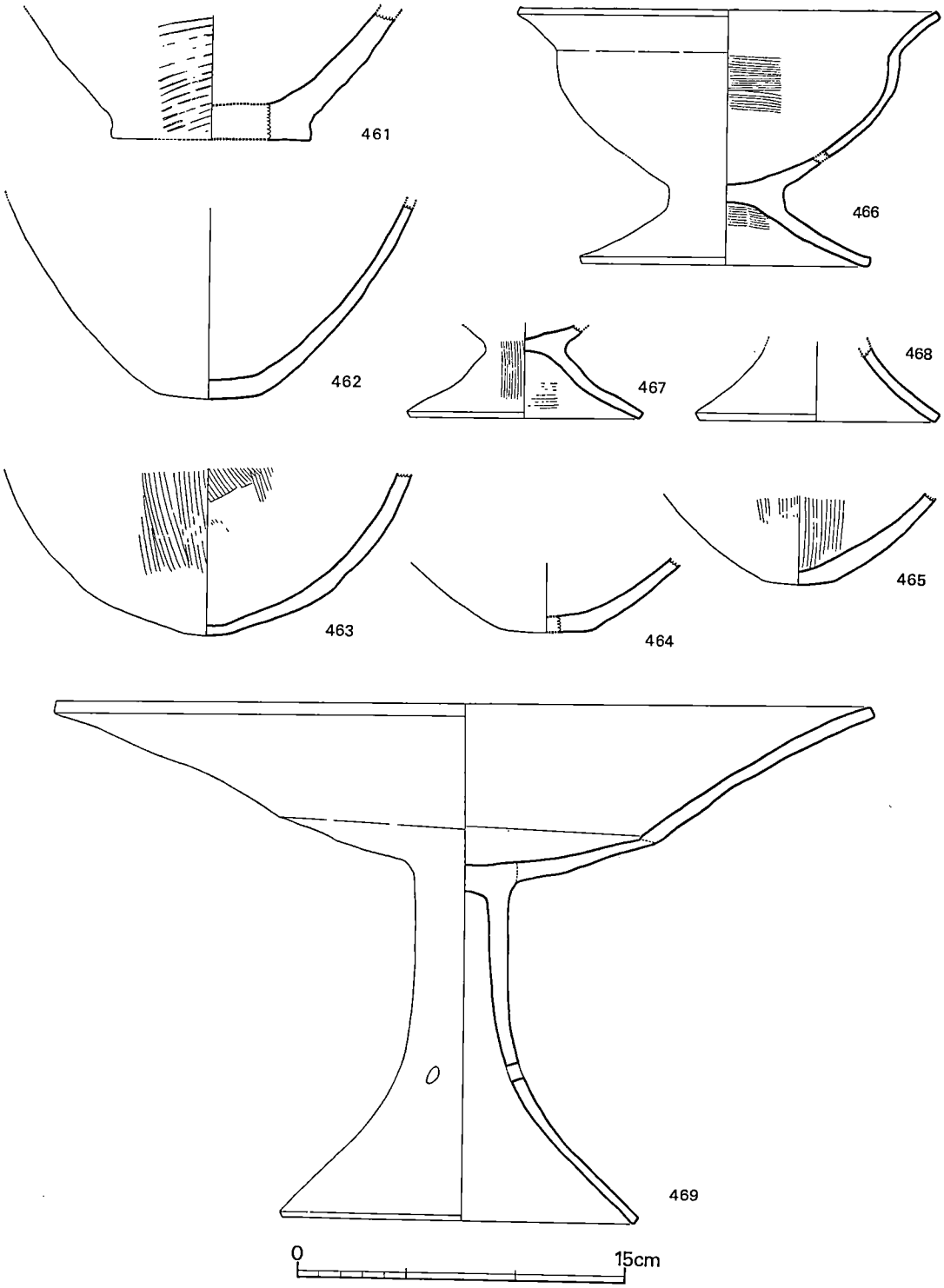
甕形土器（第144～147図443～465）「く」字状に外反する長胴を呈すると思われる一群の土器である。大きさには大中小があり，底部には平底，丸底気味の小さい平底，丸底等がある。調整は外面粗いタタキ目のあと刷毛のものと刷毛のみのものがあり，内面は刷毛あるいはナデで仕上げている。443は口径28cmを測り，胴部外面は横位の粗いタタキ目のあと刷毛，内面は刷毛，口縁部内外は粗い刷毛のあと軽くヨコナデして仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し，焼成は良い。444は口径22.4cmを測る中形品で，胴部外面ナデ，内面粗い刷毛，口縁部内外は刷毛で端部をさらにヨコナデして仕上げている。色調は茶褐色を呈す。445～448は「く」字状に外反する口縁部をもつ甕ではあるが，口縁部中位に屈折点をもち，さらに外反を強くするタイプである。445は口径29.2cmを測り，外面粗い横位のタタキ目のあと刷毛，内面刷毛で仕上げた暗茶褐色を呈す土器である。焼成は良い。446は口径30.8cmを測る。調整は445と同様で，色調は淡茶褐色を呈す。447は口径23.6cmを測り，内外とも刷毛，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。端部外面にはヨコナデによる凹線を形成する。色調は淡茶褐色を呈す。448は口径27.3cmを測り，口縁部の外反は他と比べ長く強い。外面刷毛，胴部内面刷毛，口縁部内外をヨコナデ仕上げの灰茶褐色を呈す土器である。449～451は口縁端部を上方につまみ上げ気味に仕上げたタイプである。449は口径31.2cmを測り，調整は器面風化ため不明。色調は黄褐色を呈す。450は口径22.8cmを測り，外面刷毛，内面粗い刷毛，口縁端部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。451は立ち気味に外反する口縁部をもつ甕で，口径24.8cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明。色調は淡茶褐色を呈す。452・453は口縁端部が平坦のものである。452は口径24.1cmを測り，口縁部の外反は他と比べゆるやかで短かい。外面粗いタタキ目のあと刷毛，内面刷毛で仕上げた茶褐色を呈す焼成の良い土器である。453は口径23.4cmを測る。調整は外面が器面剝落のため不明であるが，部分的に刷毛の痕跡を残している。内面は刷毛で仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。454・455は口縁端部を肥厚させた甕である。454は口径28.4cmを測る。調整は器面風化のため不明である。色調は茶褐色を呈す。455は口径21.3cmを測る中形の甕で，内外を刷毛，口縁端部をヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。456は頸部に凸帯を付した甕で胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶灰色を呈す。457～460は口径15.3～19cmを測る小形の甕で，口縁部の長い457・458と短かい459・460がある。457は口径18.3cm，458は17cmを測る。調整は器面の風化が



第145図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/3)



第146図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 5 (1/3)



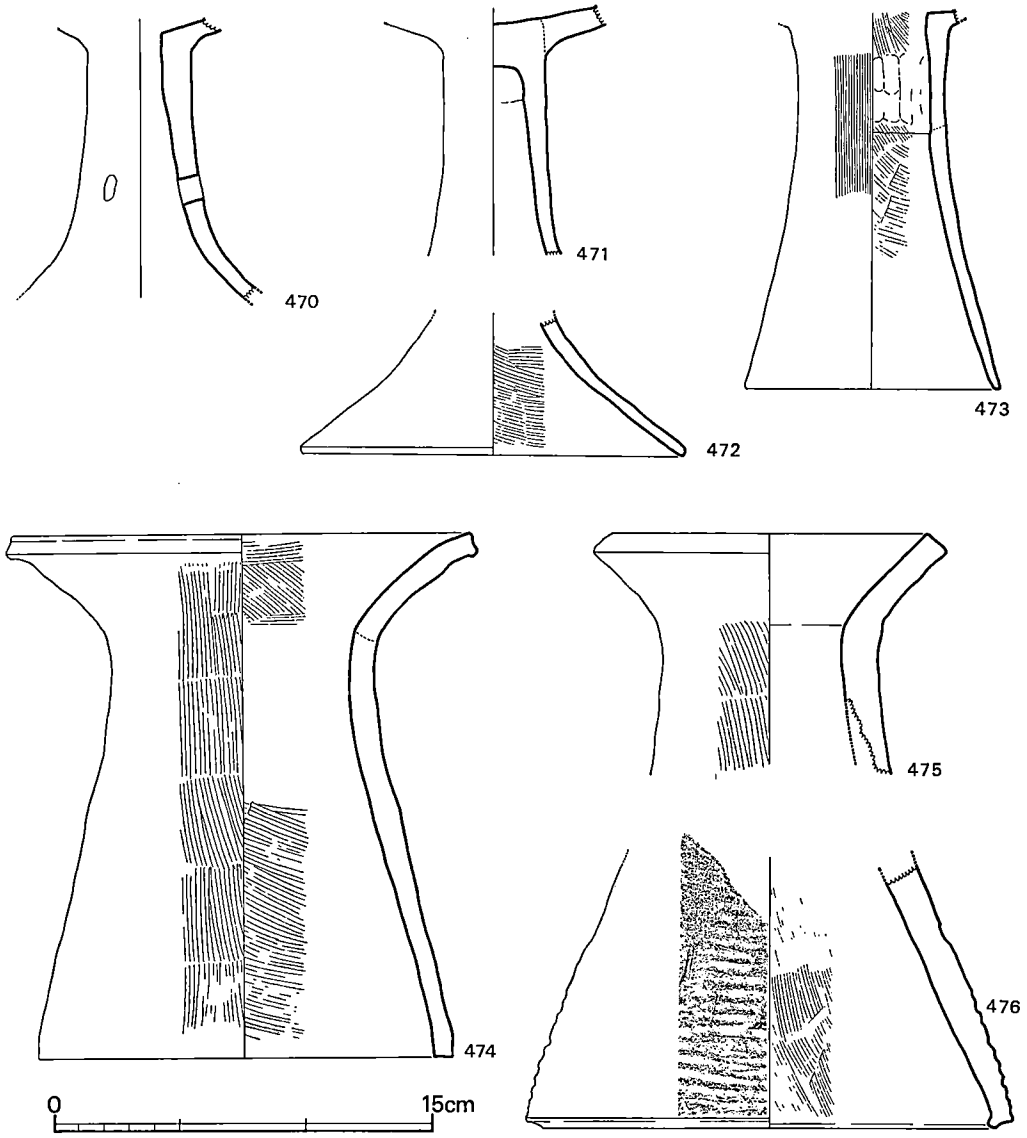
第147図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 6 (1/3)

著しく不明。色調は457が淡茶褐色，458が暗褐色を呈す。459は口径16.8cmを測り，調整は胴部内面刷毛の他は，器面の風化が著しいため不明である。色調淡茶褐を呈す。460は口径15.3cmを測り，調整は器面風化のため不明である。色調は淡茶褐色を呈す。461～465は底部の資料である。平底（461）・丸底気味の小さい平底（462・464・465）・丸底（463）がある。461は復原底径9cmの器肉の厚い平底で，外面は粗いタタキ目のあと軽くナデて内面をナデて仕上げに土器である。色調は茶褐色を呈す。462・464は底径4.4cm，465は3.4cmと小さく，胴部との境界は不明瞭な丸底気味の底部である。調整は462が器面の風化が著しく不明であるが，464は内外ともナデ，465は外面刷毛のあと底部付近をナデて仕上げている。内面は刷毛のままである。色調は462が赤褐色，464が外面茶褐色，内面黒色，465は暗茶褐色を呈す。463は外面刷毛のあと底部付近のみをヘラ削りで，内面は刷毛のあと内底部をナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。

脚付鉢形土器（第147図466～468）466は「く」字状に外反する浅い杯部に低いラッパ状の脚台がつく鉢で，口径19.1cm，器高11.5cmを測る。杯部内面上半を刷毛，下半をナデ，口縁部内外はヨコナデ，脚部は内面刷毛のあと，内外をヨコナデして仕上げている。杯部外面は器面の風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈す。467・468とも脚部の資料で，467が脚台径10.7cm，468が11cmを測り，466と比べひとまわり小さい鉢である。調整は468が器面風化のため不明であるが，467は466と同じである。色調は467が黄褐色，468が暗茶褐色を呈す。

高杯形土器（第147・148図469～473）　469は口径37cm，器高23.5cmを測る大形の高杯である。杯部は長く大きく外反するもので，杯底部の屈折は不明瞭である。脚部はスマートな柱状部から大きく拡がり中位に2個の円孔が穿たれている。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は外面黄褐色，内面褐色を呈す。470～473は高杯の脚部資料である。470～472は469と同様の杯部がつくものと思われるもので，柱状部が長く大きく拡がる裾部につづくタイプの脚部である。470の柱状部中位には3個の円孔が穿たれている。470の柱状部外面は縦位のヘラ磨き，内面上半は回転ヘラ削り，下半はナデ，杯部内面は刷毛で仕上げている。色調は褐色を呈す。472は脚台部の資料で，外面ナデ，内面刷毛，裾端部内外はヨコナデ仕上げである。色調は淡黄褐色を呈す。471は器面の風化が著しく調整不明である。脚台径15.2cmを測る。473は脚台径と柱状部径の差が小さいズン胴の脚部の資料である。内外面とも刷毛を行ない下半はさらにナデて仕上げている。胎土は精良で，焼成もよい。杯部の形状は不明である。

器台形土器（第148図474～476）上・下端に開くタイプの器台である。474は口径18.5cm，底径16.3cm，器高20.5cmを測り，口径が底径より大きい。内外面刷毛のあと内面頸部付近をナデて，上・下端部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈す。475は脚部下半を欠く資料で，口径13.9cmを測る。外面刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡黄褐色を呈す土器である。476は脚台部の資料で，底径19.3cmを測る。外面粗いタタキ目，内面刷毛で仕上げて



第148図　8号竪穴住居跡出土土器実測図 7 (1/3)

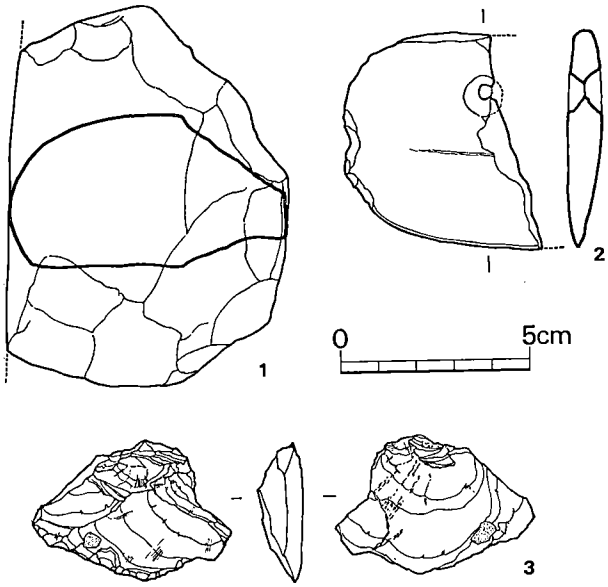
いる。色調は黄褐色を呈す。　(井上)

石　器（第149図）　1は玄武岩製太型蛤刃石斧の胴部破片。2は一孔が残る石庖丁の破片で側縁が丸みを持つ。背縁も円く，胴部は中央部近くで0.9cmと肥厚する。刃部は鈍い。3は床面から出土したサヌカイト製削器。横長剝片を用いその幅広な縁辺に二次加工を加え刃部形成。重さ15.3g。　(木下)

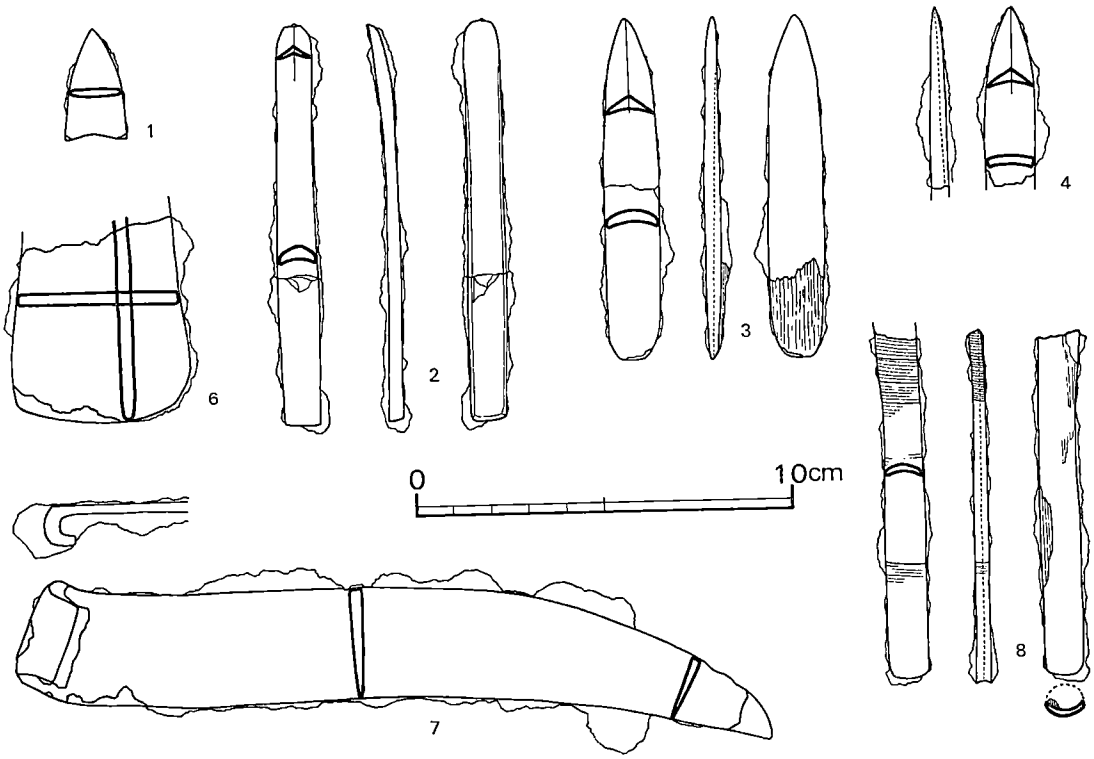
鉄　鉋（第150図2）　全長10.4cm，刃部長1.45cm，柄部中央幅1cm，基部幅0.95cmを測る完

形品。断面は三日月形を呈し，厚さ3㎜である。刃部先端は丸く，刃部中央には鏑がみられ，中央が尖った三日月状をなす。側面をみると柄部は直線的で刃部付近から緩やかに外反する特色をもっている。刃部は研いで刃をつけているが，柄部の断面は研ぎ出さず面をもっている。　　(井上)

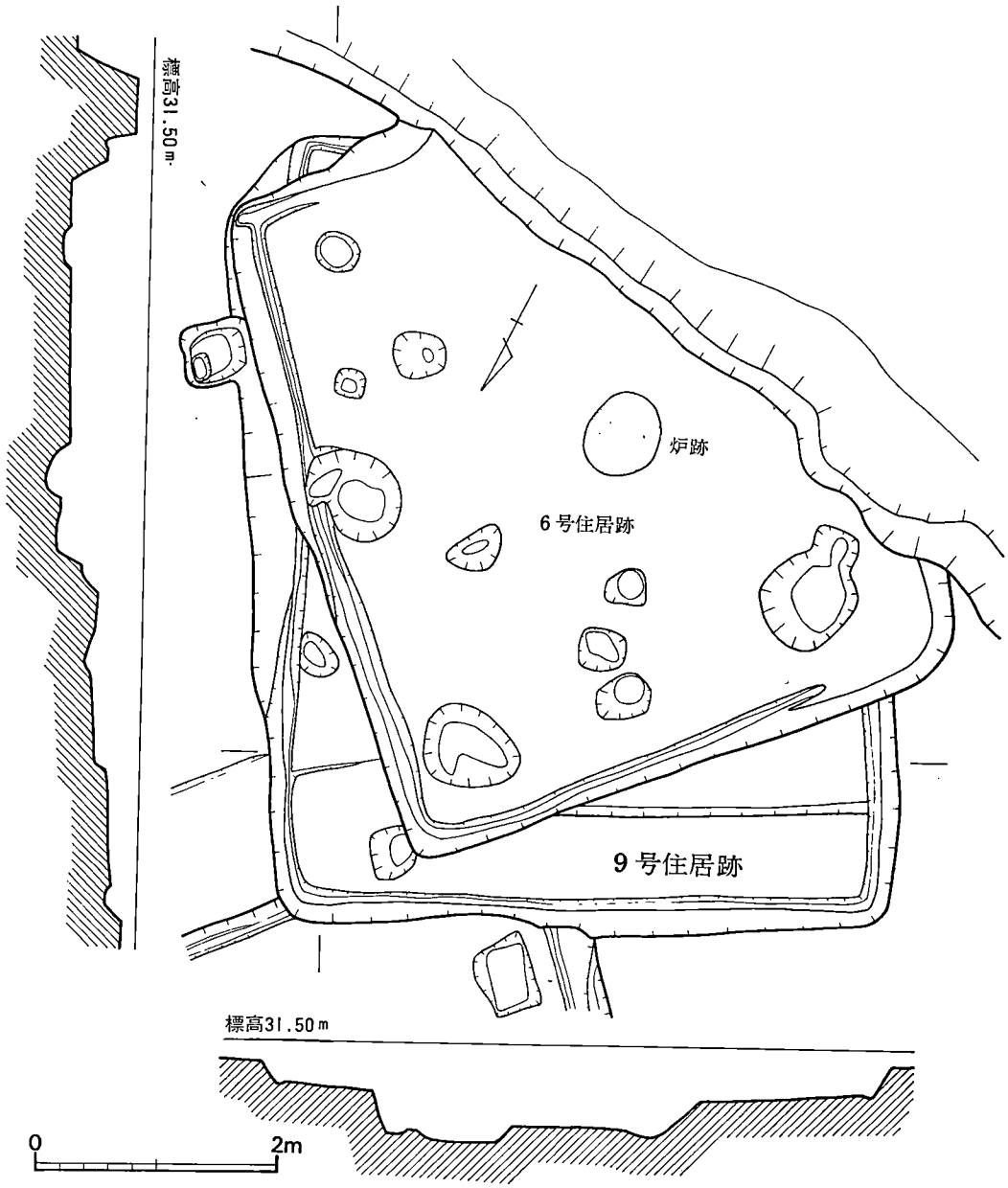
≪**9号住居跡**　(図版63，第151図)　5号住居跡を切って，6号住居跡にその大半を切られた状態で発見されたもので，北壁側と南西隅の一部を残すのみの住居跡である。残存する側壁から東西約



第149図　8号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2)



第150図　5・8・14・19号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)



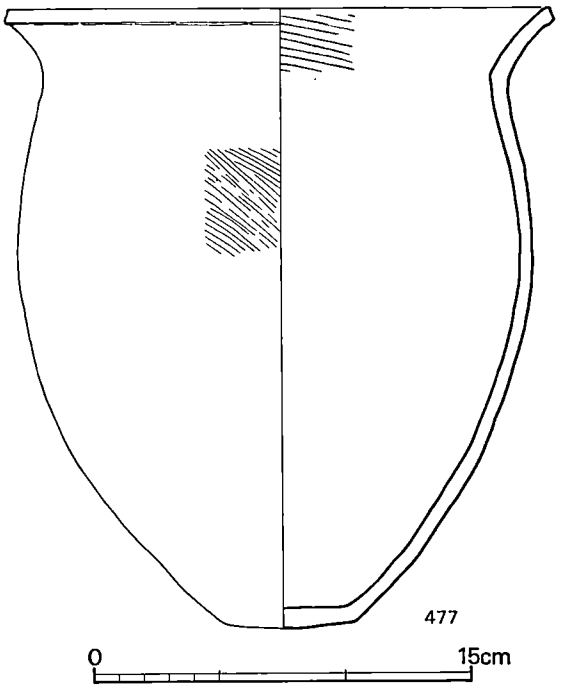
第151図　9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

5.25m×南北約6.50mを測る長方形竪穴住居跡であることが判る。北壁側に幅0.8mの貼り床のベット状遺構を有し，壁溝は残存する全域にめぐっている。壁高は残りの良い東壁で50cm，西壁で30cm，北壁30cm，南壁で15cmを測る。柱穴・炉跡等は不明である。

遺物は南東隅床面で発見された完形甕1と多数の小破片と砥石1，土製品2である。時期は後期終末である。

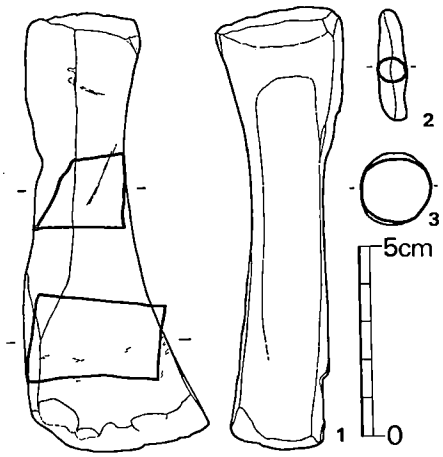
出土遺物（図版92・101，第152・153図）

甕形土器（第152図477）「く」字状に外反する口縁部に倒卵形の胴部がつく長甕で，底部は丸底気味の小さい平底である。胴部と底部の境界は明確でないが底径5.4cmを測る。口径21.6cm器高24.2cmを測る。胴部外面上半を刷毛，下半はナデ，内面はナデ，口縁部内面は粗い刷毛，端部内面から頸部外面にかけてはヨコナデ仕上げである。胴部上半に煤の付着がみられる。胴部下半は二次焼成を受け器面の剝離が著しい。色調は淡茶褐色を呈す。（井上）



第152図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

石器・土製品（第153図）　1は泥岩製砥石で断面は台形，全体は撥形を呈す。長さ11.4cm，最も狭い中央部で幅1.9cmを測る。重さ143g。2は長さ2.8cmで断面の丸い土製品。赤褐色を呈し脆い。3は径1.9cmとほぼ円球を呈す土製品。重さ6g。（木下）



第153図　9号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

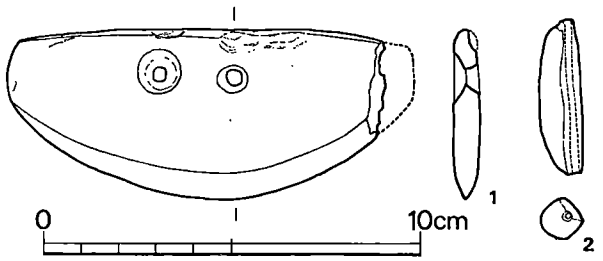
≪**10号住居跡**（図版64）　C8区で検出されたもので，中世の溝状遺構や開墾時の削平のため，わずかに床面・炉跡・屋内貯蔵穴とおもわれる方形ピットが残存しただけである。

遺物は屋内貯蔵穴と思われるピット中から出土した石庖丁1と土錘1のみである。時期は明

確でないが石庖丁のタイプからして後期であろう。　（井上）

出土遺物（図版101，第154図）

石器・土製品（第154図）　1は蛇紋岩製石庖丁で片側縁を欠損する。復原長10.5㎝内外で14号住居床面出土のものと比べると小さい。紐孔間2.0㎝で左紐孔が大きく穿っている。幅は2.42㎝。住居跡の南東方形ピット内出土。2は土錘で，中央部が膨らむ棒状のもの。淡灰色を呈し軟質。谷地区に類品が出土している。　（木下）



第154図　10号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）

≪**11号住居跡**（図版65～67，第155図）　F6区において検出した住居跡で，台地西斜面を占地する。削平を受けており，南西部は欠失する。規模は東西4.2m，南北4.8mの現存値を測る隅丸方形プランの竪穴住居跡である。周溝を有し，北側では周壁に沿ってめぐるが南側では南北3.8m付近で一周する。壁高は北壁で40㎝，東壁で60㎝前後を測るが，南壁・西壁は残らない。中央部に直径1mのピットがみられたほか浅いピットが散在し柱穴等は顕著ではない。床面は堅緻であるが炉跡は明瞭でなく，中央部ピット内に焼土がみとめられた程度に留まる。

遺物は中央部ピットになだれ込む状況で出土したものと，南東部に集中した他，北西隅周溝内に壺形土器が完形で転倒した状態で出土した。なお，住居跡内南東隅部床面上で，袋状をなす鉄斧が1点出土したが，遺物整理時に紛失した。

出土遺物（図版93・101，第156～159図）

壺形土器（第156図478～483）

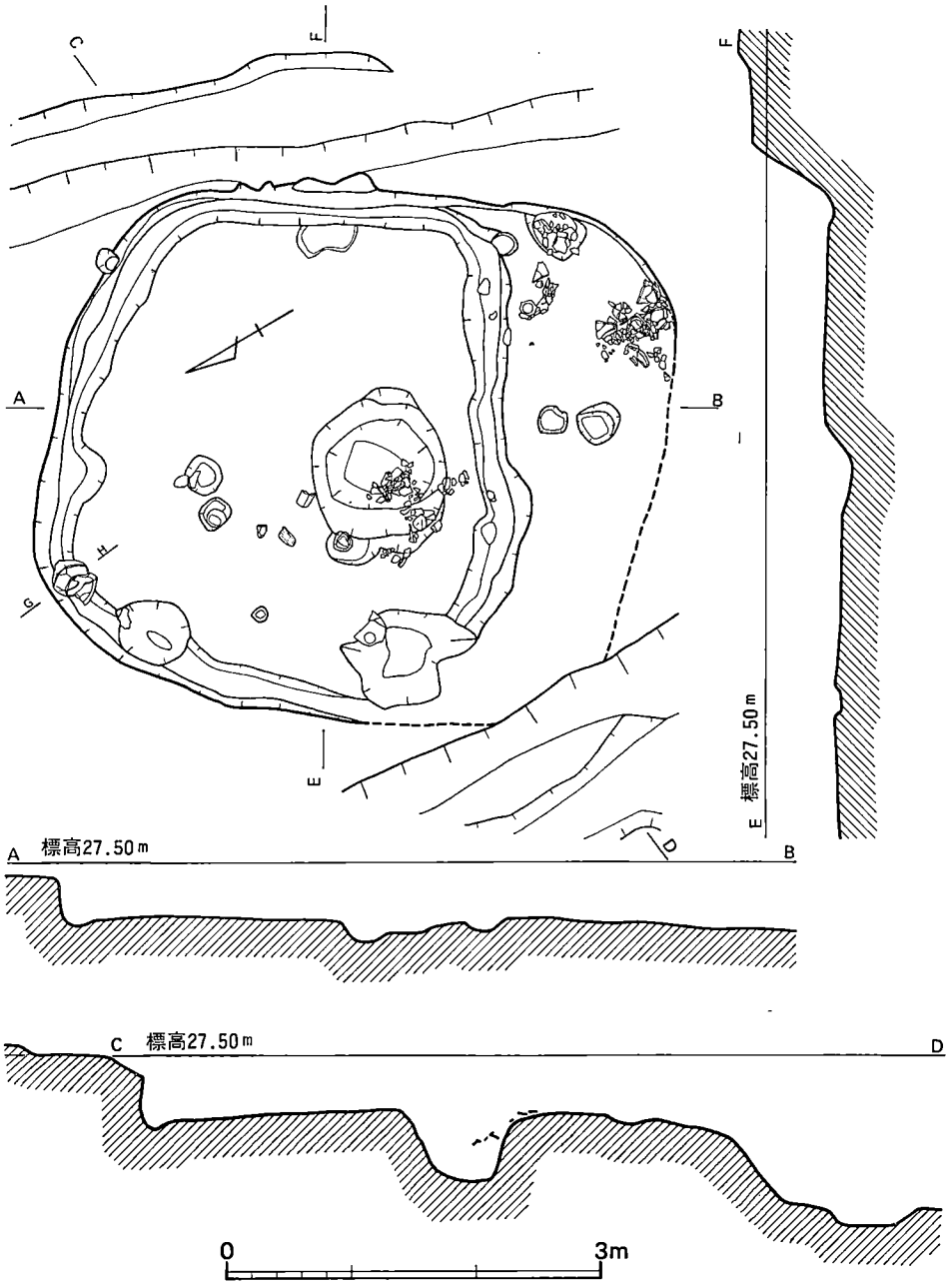
壺1類（478～482）　口縁端部から頸部にかけて，なだらかな曲線を描いてすぼまり，胴部へ大きくふくらむ。胴部の最大径部に三角突帯を1条貼り付けて飾る端整な器形を呈す(480)。底部は平底でやや凹み気味である。胎土に石英，長石粒を含み，明褐色を呈す。

壺2類（483）「く」字形の口縁部を有するが甕形土器の口縁手法に似る。口縁直下から大きくふくらむ胴部に移行し，肩部に1条と胴部の最大径部に三角突帯を貼りめぐらす。胴下半を欠失するため全体の器形は明確ではない。器面は全体に横方向に丁寧にナデられている。胎土に石英・長石粒と，わずかに雲母を含み，色調は暗褐色を呈す。

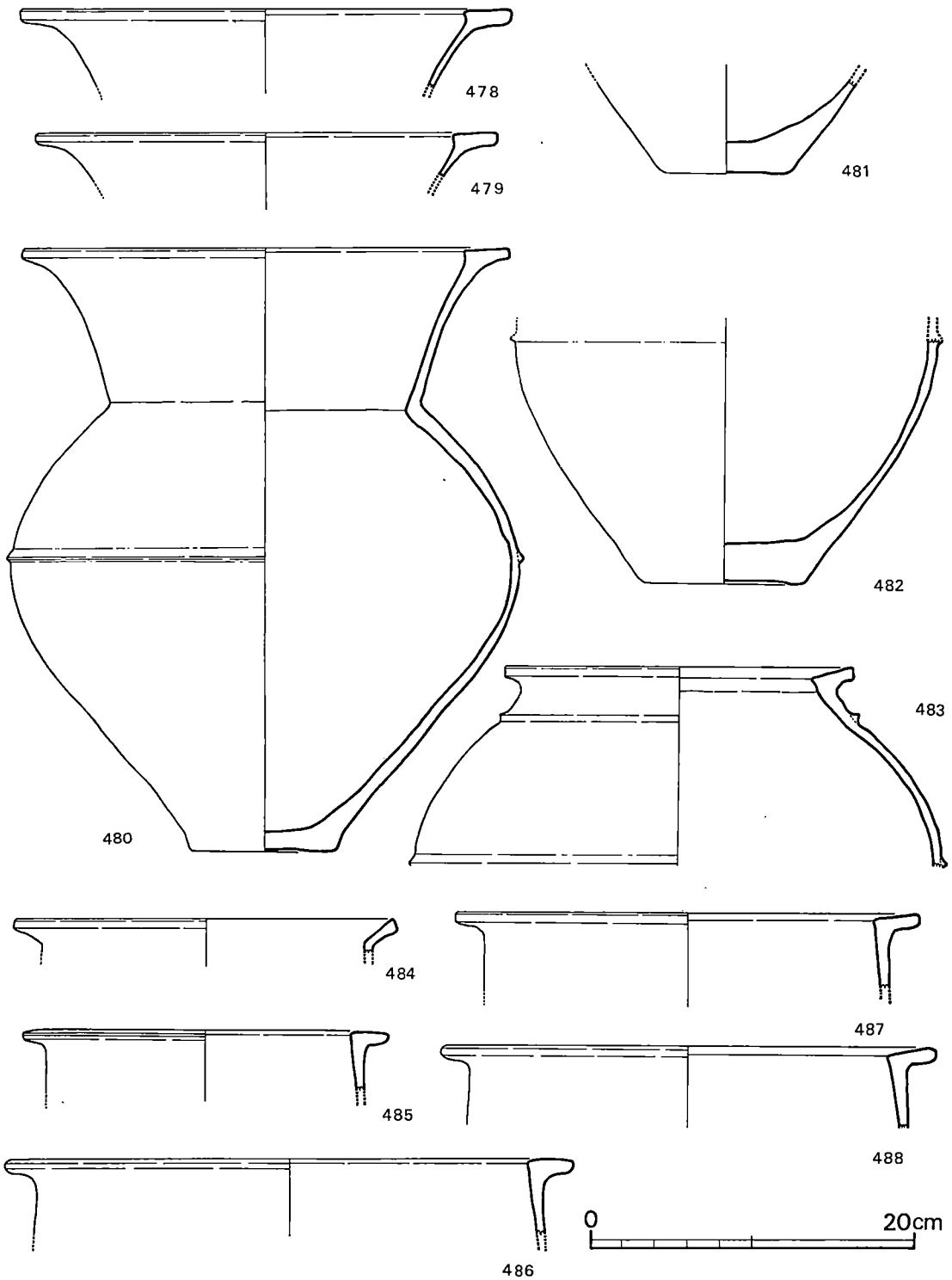
甕形土器（第156～158図484～512）

口縁部の形状より大きく2つに分けられる。すなわち，はね上り口縁を有するもの（1類），逆L字形口縁を有するもの(2類)，に区別できる。また胴上部に突帯を有する例があり，有さない例と区別するため突帯を有する例を3類とする。

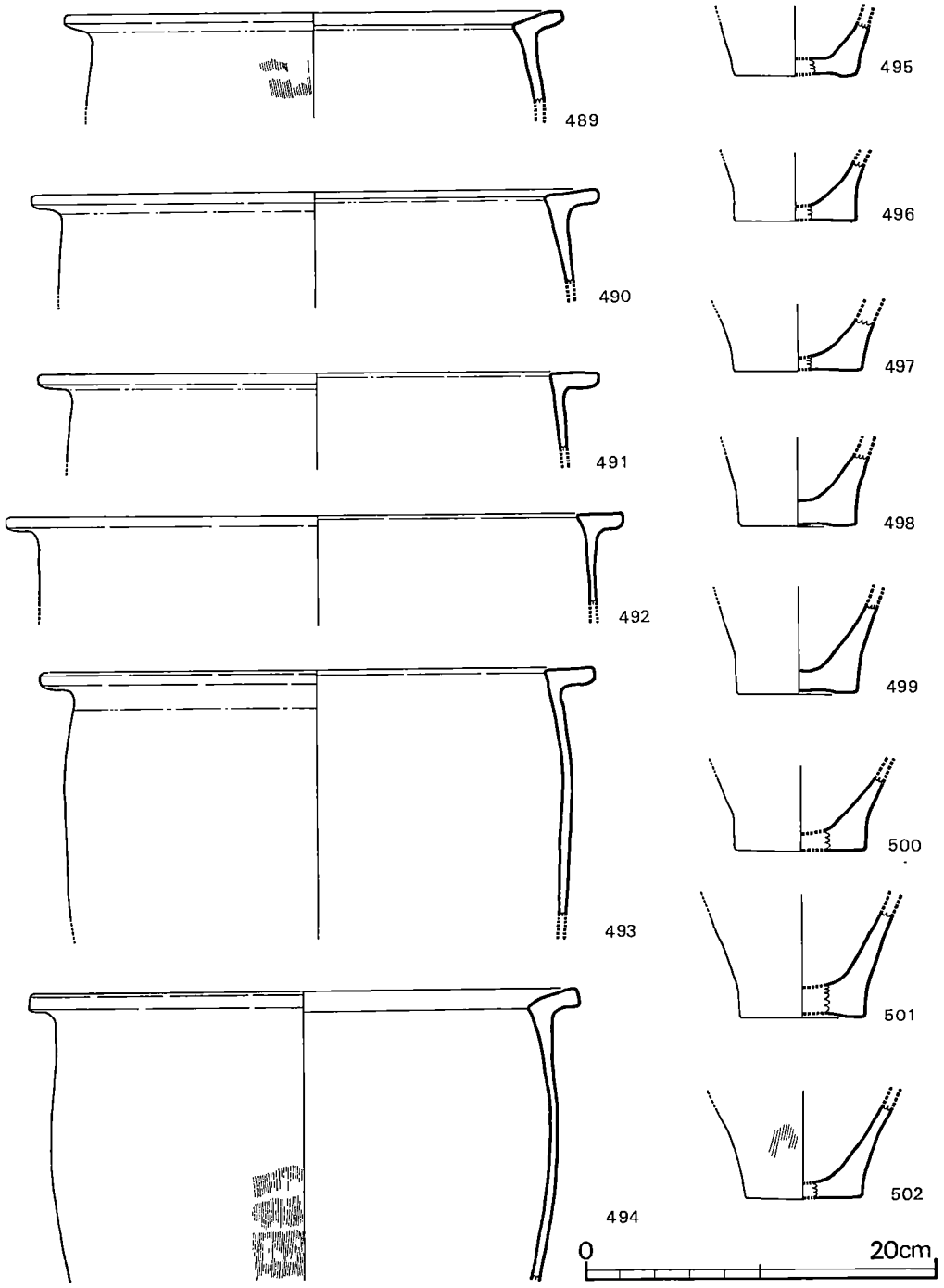
甕1類（484）　口縁部破片で全体の形状は不明であるが，はね上り口縁を有し，口唇端部



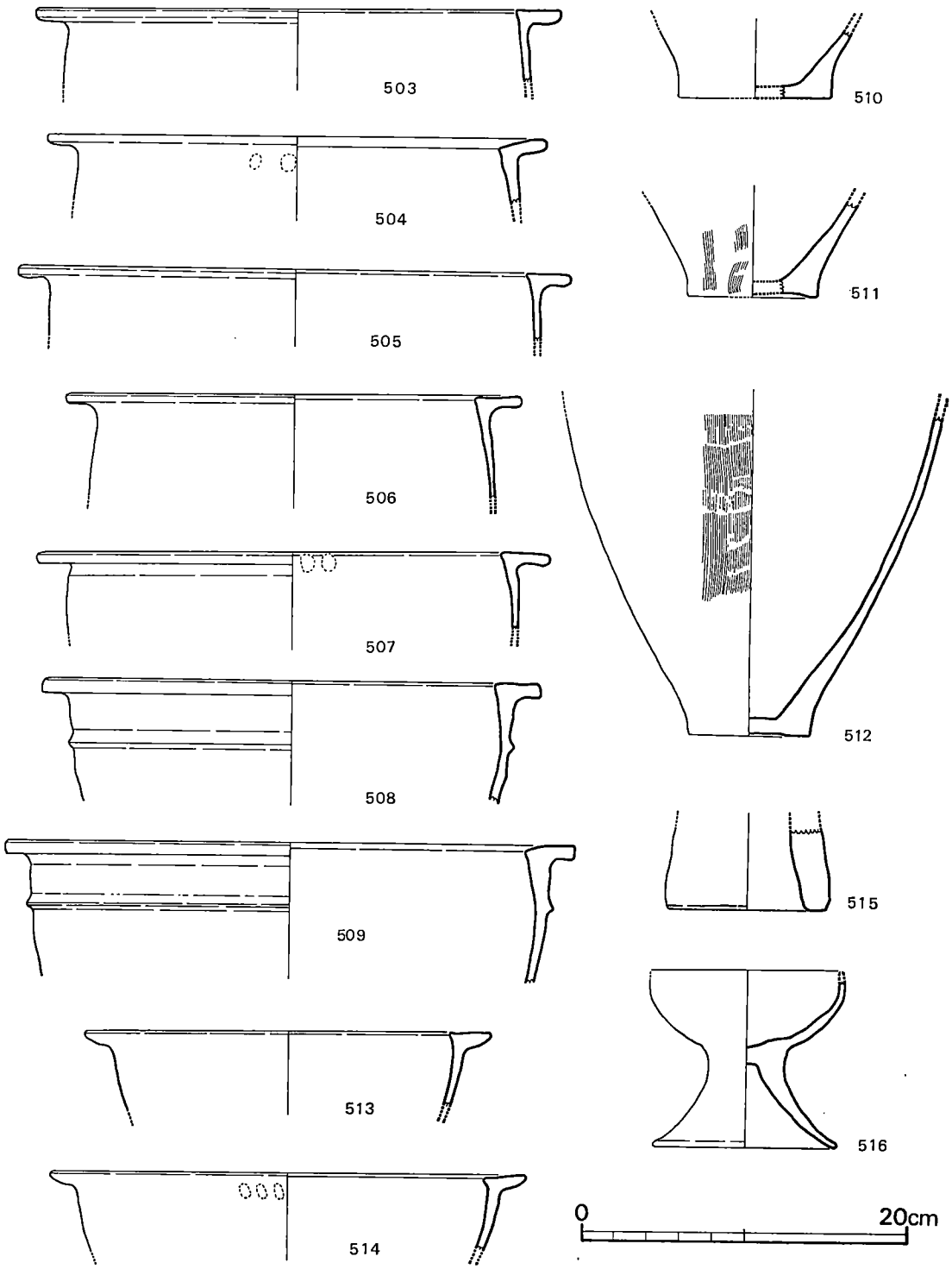
第155図　11号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第156図　11号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)



第157図　11号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



第158図　11号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/4)

は肥厚する。口縁内面の屈曲はなだらかで稜線は有さない。

甕2類（485～494・503～506）　逆L字形口縁を有するが，その形状は同一ではなく，幾つかに区分しておく必要があろう。a，逆L字形であるが，外面の屈曲のなだらかな例で口唇端部は丸味をもつ（485・486）。b，外面の屈曲は明瞭であるが，内面の屈曲が直角に近い例で，口縁上面が内傾するもの（487～489・494・504）。このうち494は口唇端部が肥厚し角ばる例を除けば口唇端部は丸味を帯びる。c，外面の屈曲が明瞭で，内面の屈曲も明瞭で所謂「逆L字形」になる口唇上面水平な例（490～493）口唇内面のヨコナデが強くなり，突出した稜を有することもある。

甕3類（507～509）　胴上部に突帯を有する例で，このうち，507は口縁外面直下の屈曲部を強くヨコナデするため胴上部に明瞭な稜が出来る例である。これに対し，508・509は貼り付けによる三角状の突帯がみられる例であり，両者は同様に扱うべきではないかもしれないが，前述の分類には属さない資料でもある。第2類Cと第3類の後者との中間位とみるべきであろう。

底部（495～502・510～512）　破片資料が多く，底部のみをもって区分することは避けるべきであろう。ただ底部形状には，平底とわずかな上げ底があり，また内面も丸味を有するものと有さないものがある。

鉢形土器（第158図513・514）　いずれも口縁部の破片である。口縁部の形状は逆L字形を呈しており，口唇部のヨコナデがやや強くつまみ出した様な状態になっており，断面形では内彎する。

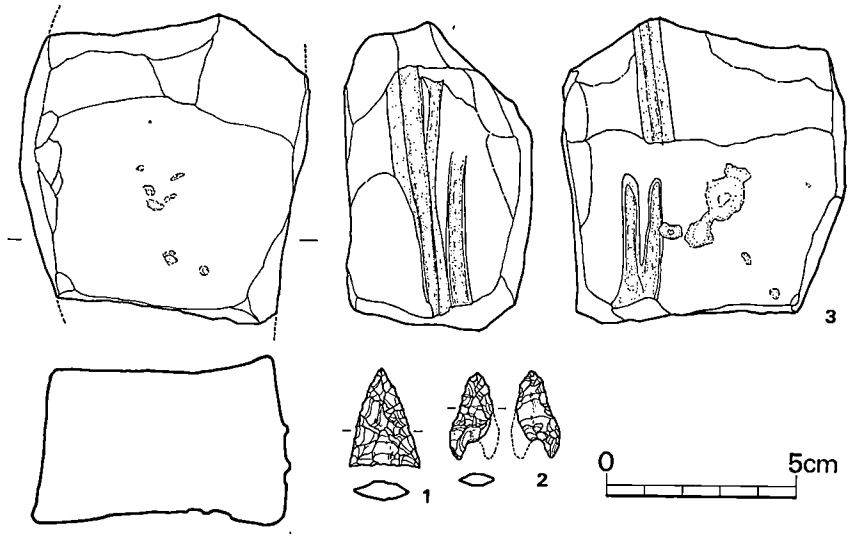
支　脚（第158図515）　裾部の破片であるため全体の形状は明確ではない。

台付椀（第158図516）　口唇部をわずかに欠くがほぼ完形の資料で，器高10cm＋α，椀部の径12cm程度を測る。椀部の内面に凹凸があるが丸味をもちやや内彎する。脚部はなだらかに大きく広がり安定した形態を有する。

これらの土器の形状から，弥生時代中期前葉から中葉の時期が与えられる。　（小池）

石　器（第159図）　1・2は黒曜石製打製石鏃で，1は平基無茎式の完形品。長さ2.5cm，幅1.85cm，厚さ0.45cm，重さ1.8gと比較的重量をもつ。2は縦長剝片の末端を石鏃の先として用いたもので，片脚を欠損する。3は床面直上より出した砂岩製有溝砥石片。全面を研砥面として用い，一面のみは溝をもたない。溝幅は0.8mm～0.4mmである。　（木下）

≪**12号住居跡**（図版68・69，第160図）　E－5区に位置する住居跡である。平面形態は不整円形を呈する。住居の規模は，長軸で9.0m短軸で6.3mを測る。壁の立ち上りもゆるやかである。周溝はなく，炉跡の痕跡も見当らない。壁の南隅には，流れ込みの状態で焼土を検出した。柱穴は西壁側に集中して検出され，北壁沿いにも等間隔に見られるが，主軸は明らかでない。住居跡中央部には4m×4mの不整形の段落ちがあり，東西に幅10cm内外の溝状遺構が走



第159図　11号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

る。

遺物は多量に出土しており土器について観れば1～2層にかけては弥生時代中期前葉～後葉の土器が出土しており，3層は遺物は少ない。4～5層にかけては，弥生時代前期末の土器の出土が見られる。その他の遺物には，鉄片1，土製紡錘車7，土製円盤6，土製品1石器類も多く抉入石斧1，柱状石斧1，蛤刃石斧2，磨製石斧2，刃部磨製石斧3，打製石斧1，打製石鏃12，スクレーパー2，ドリル1，石核1，砥石4，敲石1等が出土している。

土器の出土状態から当住居跡の時期は，弥生時代前期末に比定できる。

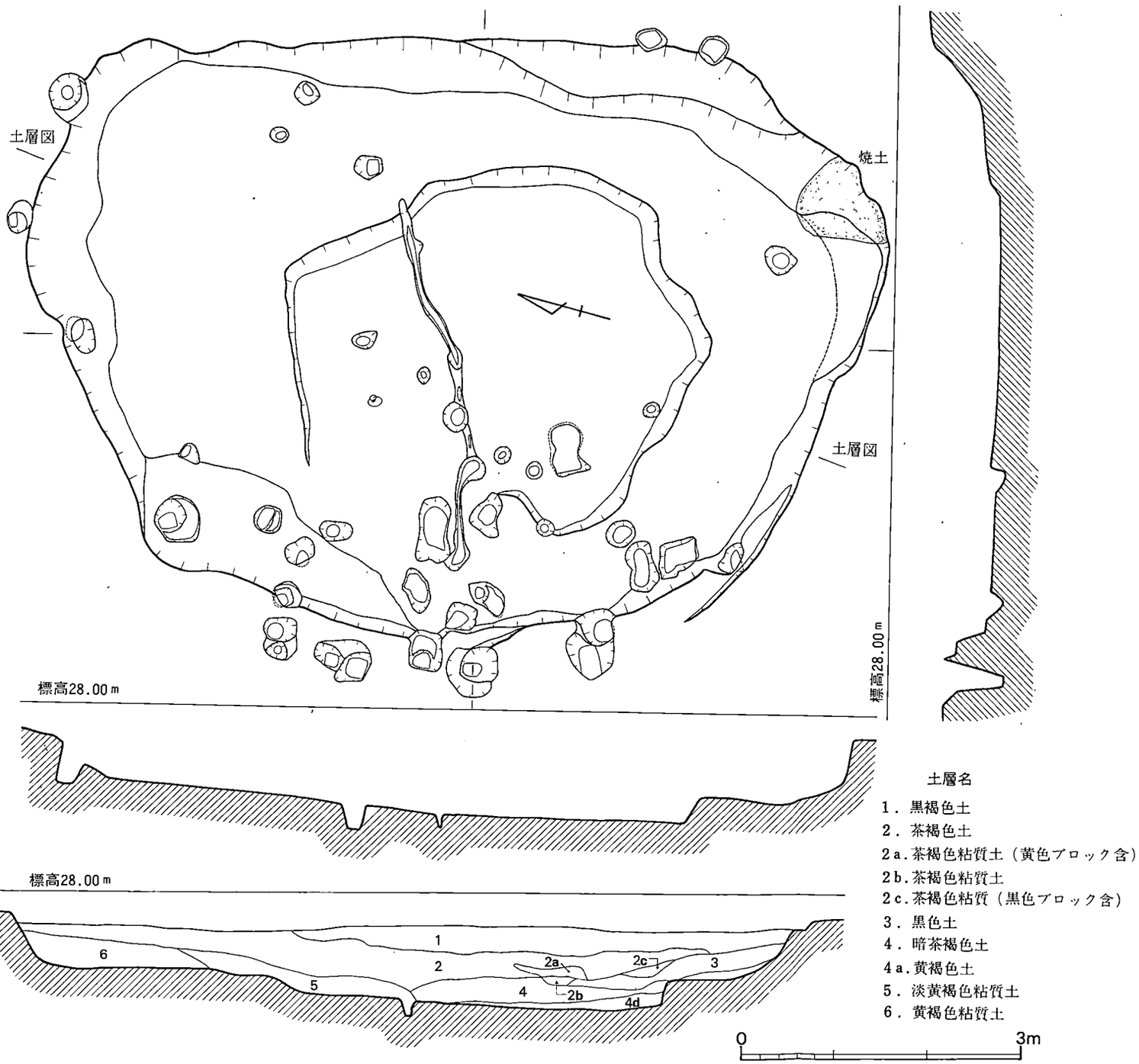
出土遺物（図版93・94・102，第161～175図）

層位は1層～3層まで上層とし，4層～6層を下層とした。517～565の土器は4～6層（下層）から出土した土器で，566～687は1～3層（上層）から出土した土器である。以下順を追って述べる。

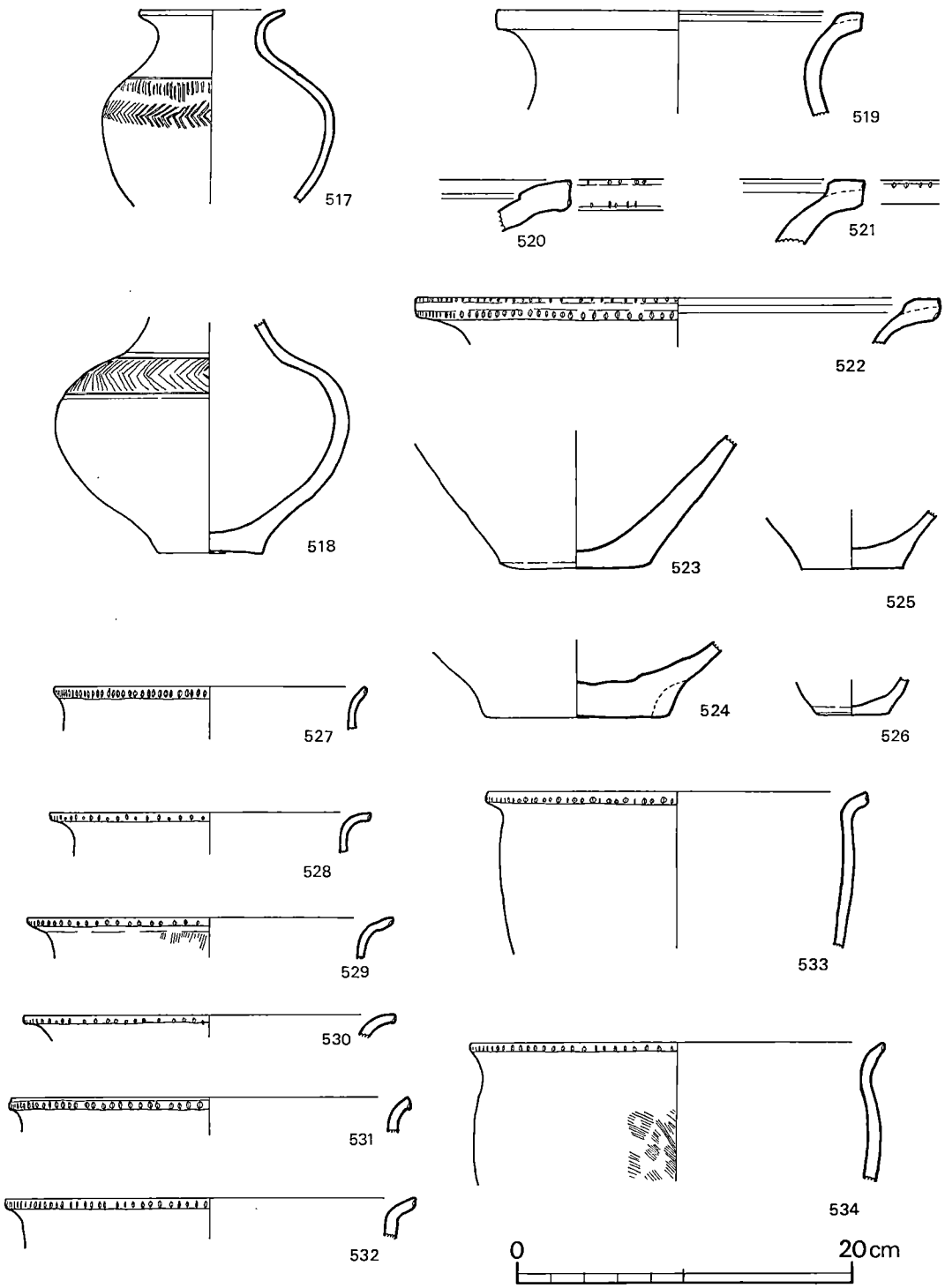
下層出土土器群（第166～163図517～565）

壺形土器（第161図517～526）

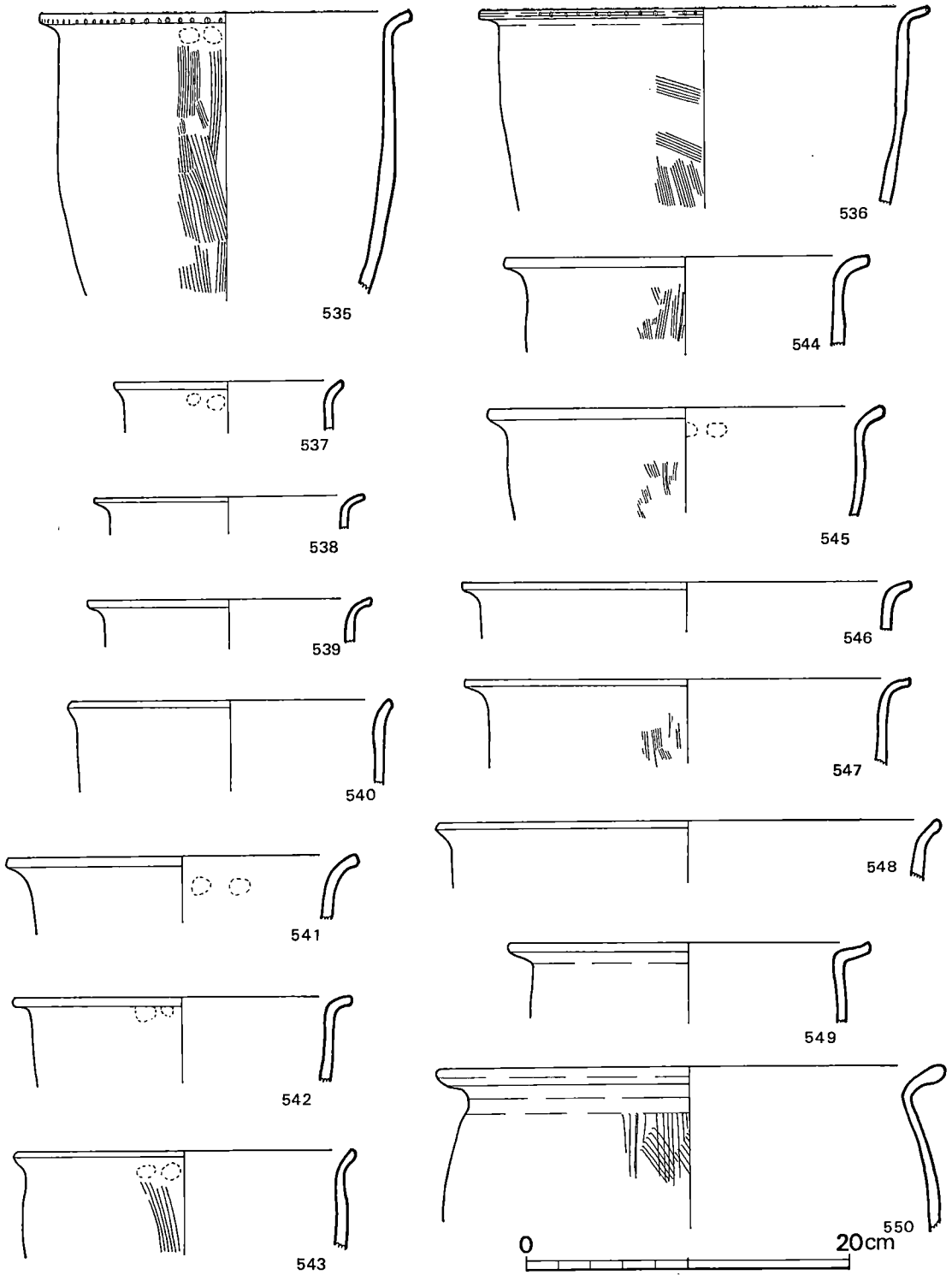
517は，小形の壺形土器で復元口径は8.8cmを測る。口縁部は外反し，胴部は張る。底部は欠損している。肩部には一条の沈線を有し，直下には貝殻腹縁による羽状文を施している。石英・長石を含み，色調は明るい赤褐色を呈し，焼成も良好である。518は頸部上半部を欠損している。頸部は細身で胴部は張る。肩部には上下二段に貝殻による二条の沈線と羽状文を施している。底部は浅い上げ底を呈する。調整は，517と同じ内壁ナデ，外壁箆磨研である。519～522は，同形式の壺形土器で，口縁部のみである。外反する口縁部には粘土帯を貼り付けている。口唇部に刻み目を有さないものは528のみである。調整は全てナデである。523～526は壺



第160図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）



第161図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)



第162図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)

形土器の底部である。全て平底を呈する。526は小形で内面には丹塗りの痕跡が認められる。

台付無頸壺（第163図565）

台付無頸壺の台部である。器面が風化しているが，内外面ともナデである。

甕形土器（第161～163図527～563）

527～536は口唇部に刻み目を有す甕形土器である。いわゆる如意形口縁であるが，528・530は他よりも口縁部が外反する。530・531は，口唇部を肥厚させている。調整はハケとナデによる。535は，胴下半部を欠損している。口唇部は肥厚させ刻み目を入れる。口縁直下には指頭圧痕がみられ，胴部は細かいハケで仕上げ，煤が付着している。536は口径30.6*m*を測る。口唇部には刻み目がみられ，外面はハケ，内面ナデ仕上である。胴部以下を欠損する。胎土・焼成とも不良。537～550は如意形口縁を有すが，刻み目はみられない。538は作りが粗である。540・543・549は，口縁部が若干外反する。調整は548までは全て同じで外面ハケ，内面ナデ仕上げである。549は，大きく外反する口縁部を有し，頸部は若干内傾する。550は他の甕形土器とは形態が異る。口径は31.2*cm*を測る。口縁部は「く」字状に近い傾斜を呈し，胴部は張りがある。調整は，胴部のみ荒いハケで他はナデ仕上げである。他の下層土器と同一視するには疑問があり上層の682・683と類似しており，若干新しいことも考えられる。

551～555は如意形口縁を呈し，口縁直下には断面三角凸帯を貼付けている。551・552・554はほぼ同じ口径で24～24.6*cm*を測る。口唇部凸帯には刻み目を施している。外面はハケ，内面はナデ仕上げである。色調は明るい褐色を呈する。553は若干外反する口縁部を有すが，口唇部に刻み目はみられない。口縁直下には刻み目を有す三角凸帯を貼付けている。口径は29.0*cm*を測る。555は外反する口縁部に内傾する頸部を有す。口唇部，凸帯には刻み目を施し，胴部は丸味を持つ。556・557は，直立する口縁部に凸帯を貼付け，逆「L」字状の口縁を有す。557は，口縁直下に断面三角凸帯を有し，口唇部と共に刻み目を施している。558～563は甕形土器の底部で，上げ底を呈するもの559・560・561・562平底を呈するもの558がある。調整は外壁がハケ，内壁がナデである。563は甑で焼成前に穿孔している。

蓋形土器（第163図564）

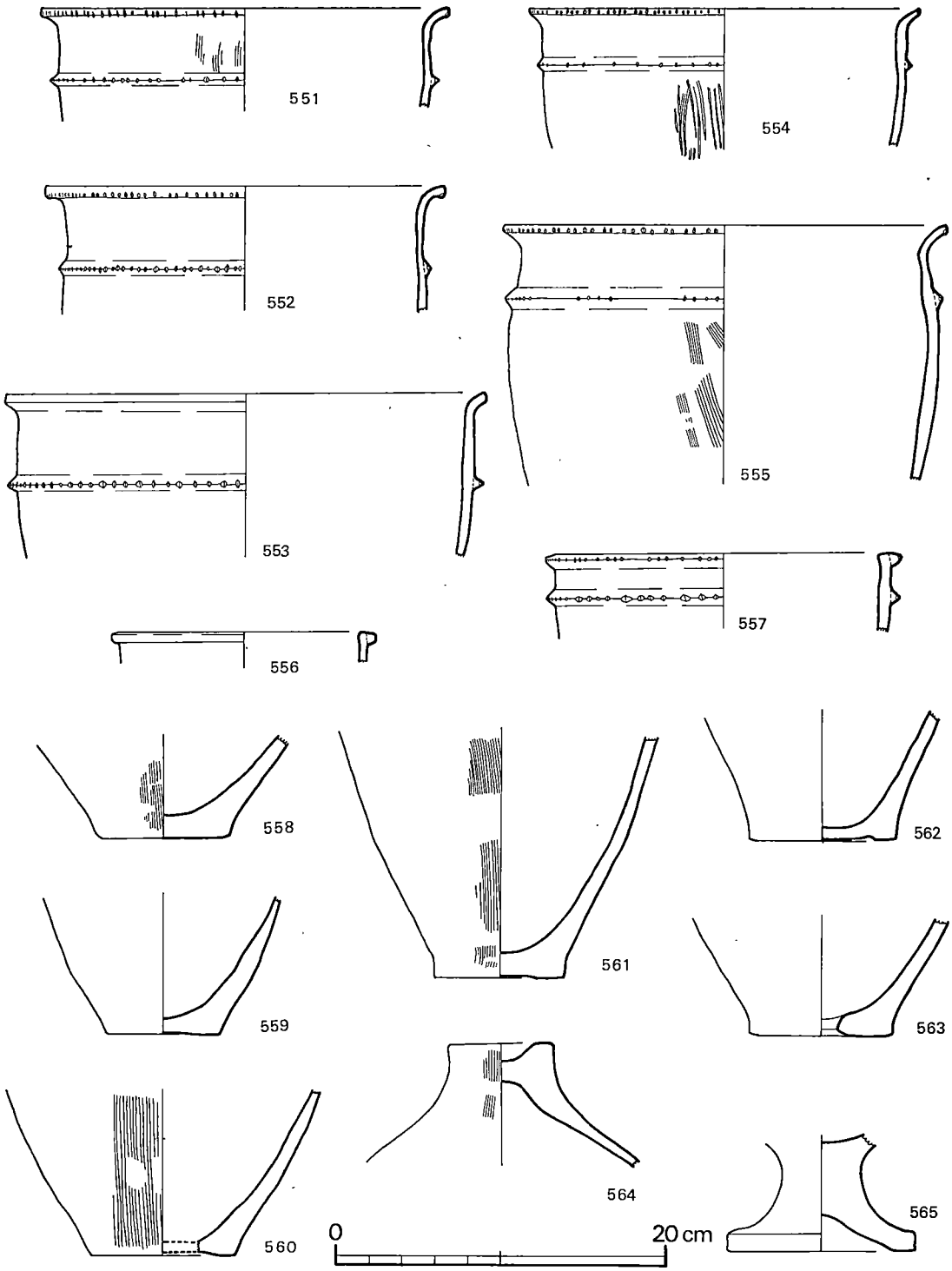
下部を欠損している。摘部は凹んでおり，指頭圧痕がみられる。調整は，ハケとナデである。

上層出土土器群（第163～172図566～687）

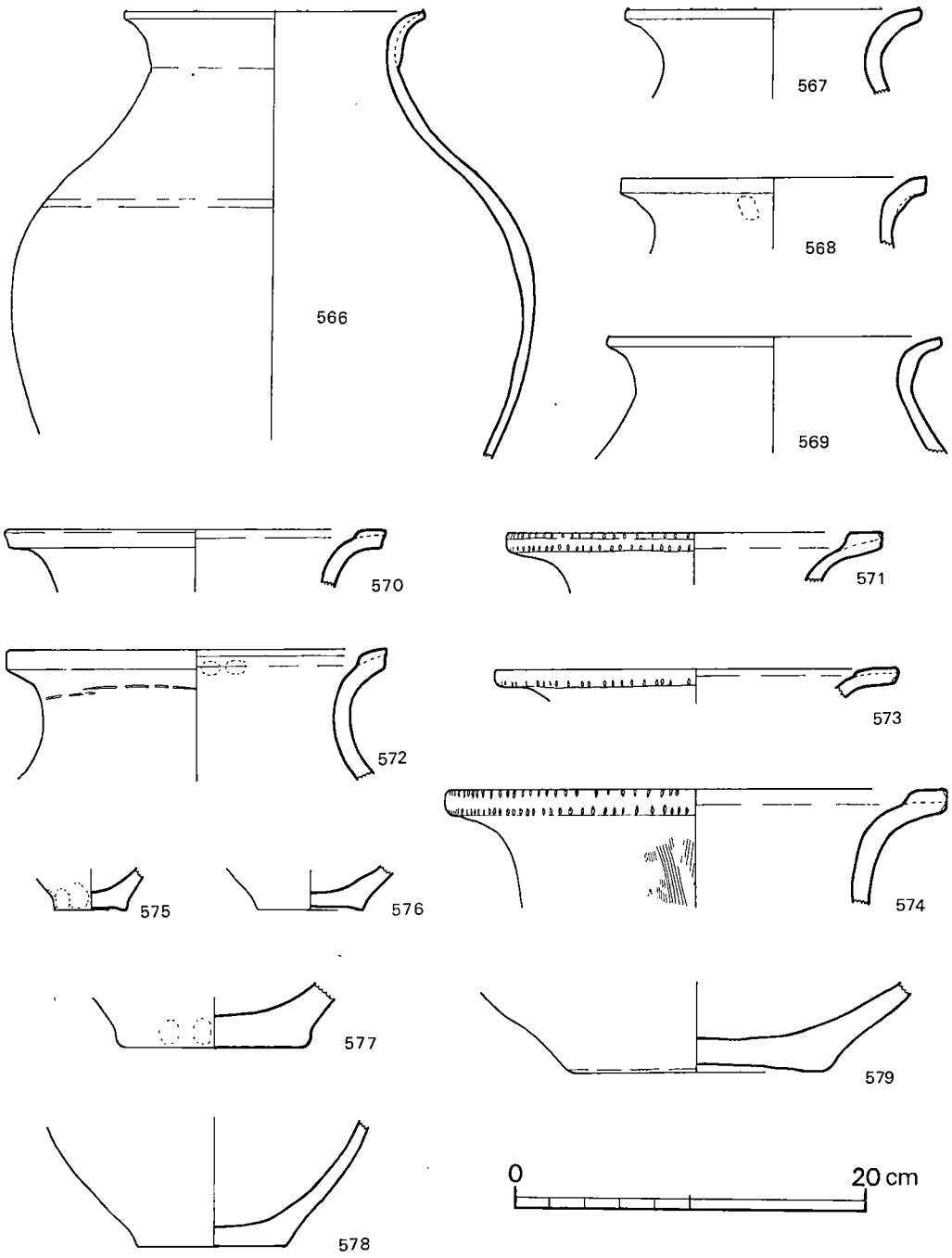
壺形土器（第164・166図566～569・616・617）

口縁部が外反するもの（566～569）は口縁部外面を粘土で補強し肥厚させている。566は外反する口縁部からなめらかに胴部に移行する。肩部には二条の沈線を巡らす。底部は欠損している。

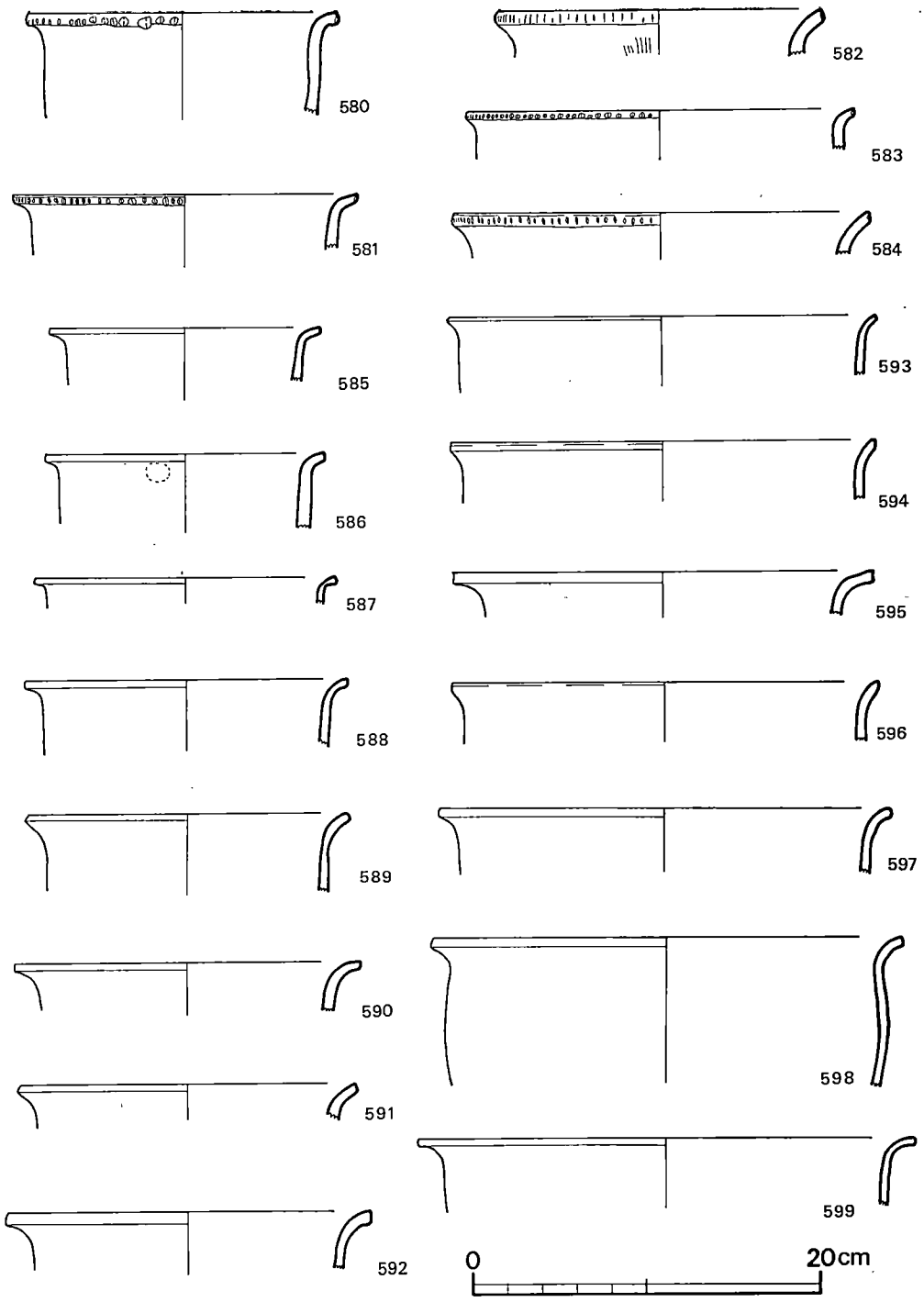
外反する口縁部上面に粘土帯を貼付けた壺形土器（570～574）には，口唇部に刻み目施文の



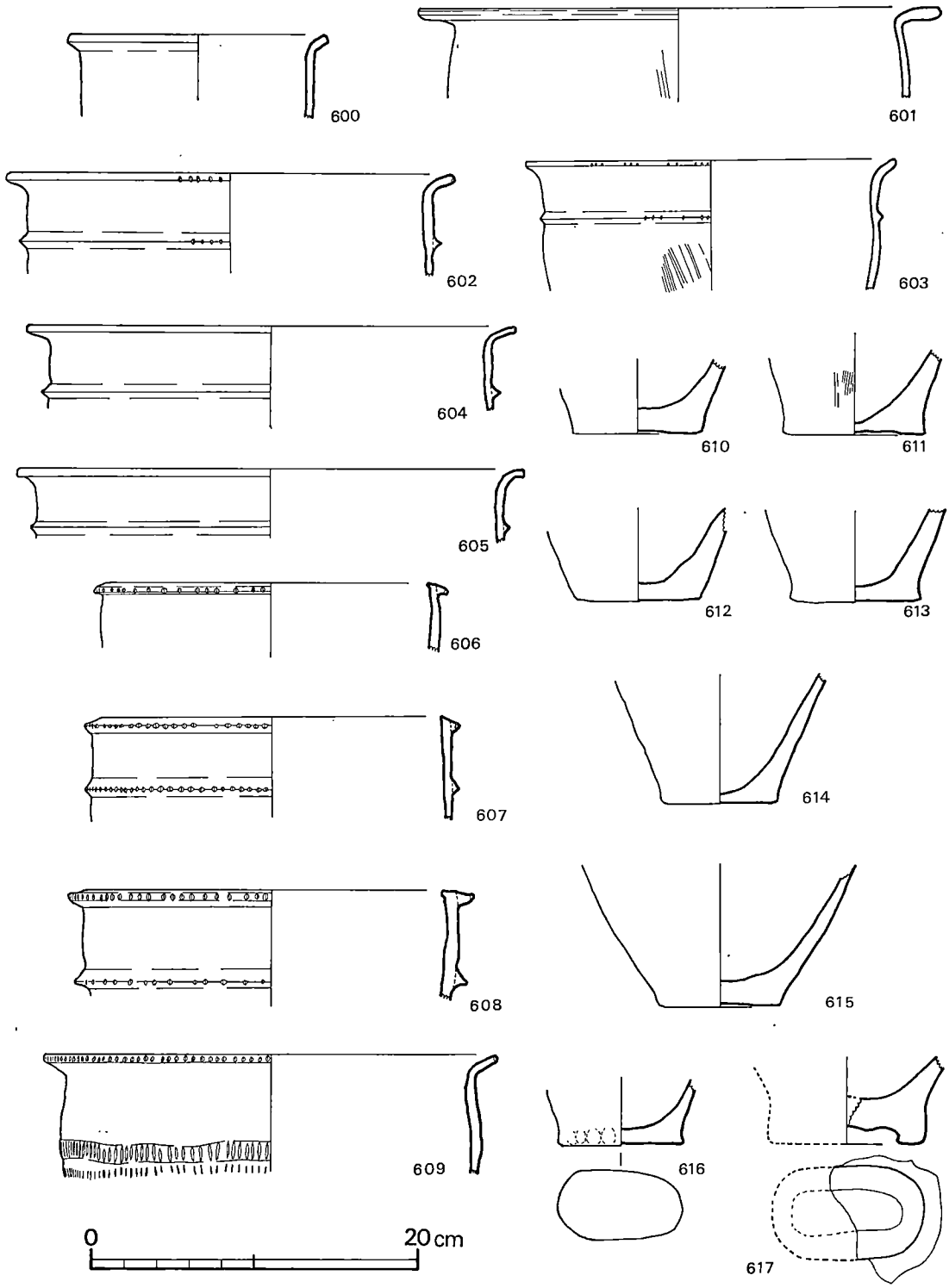
第163図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/4)



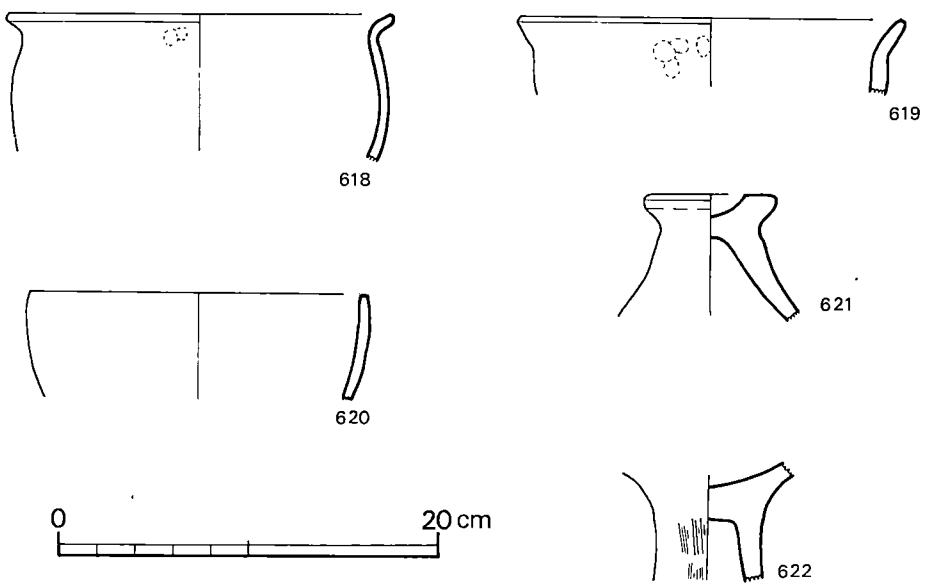
第164図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/4)



第 165 図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 5 (1/4)



第166図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 6 (1/4)



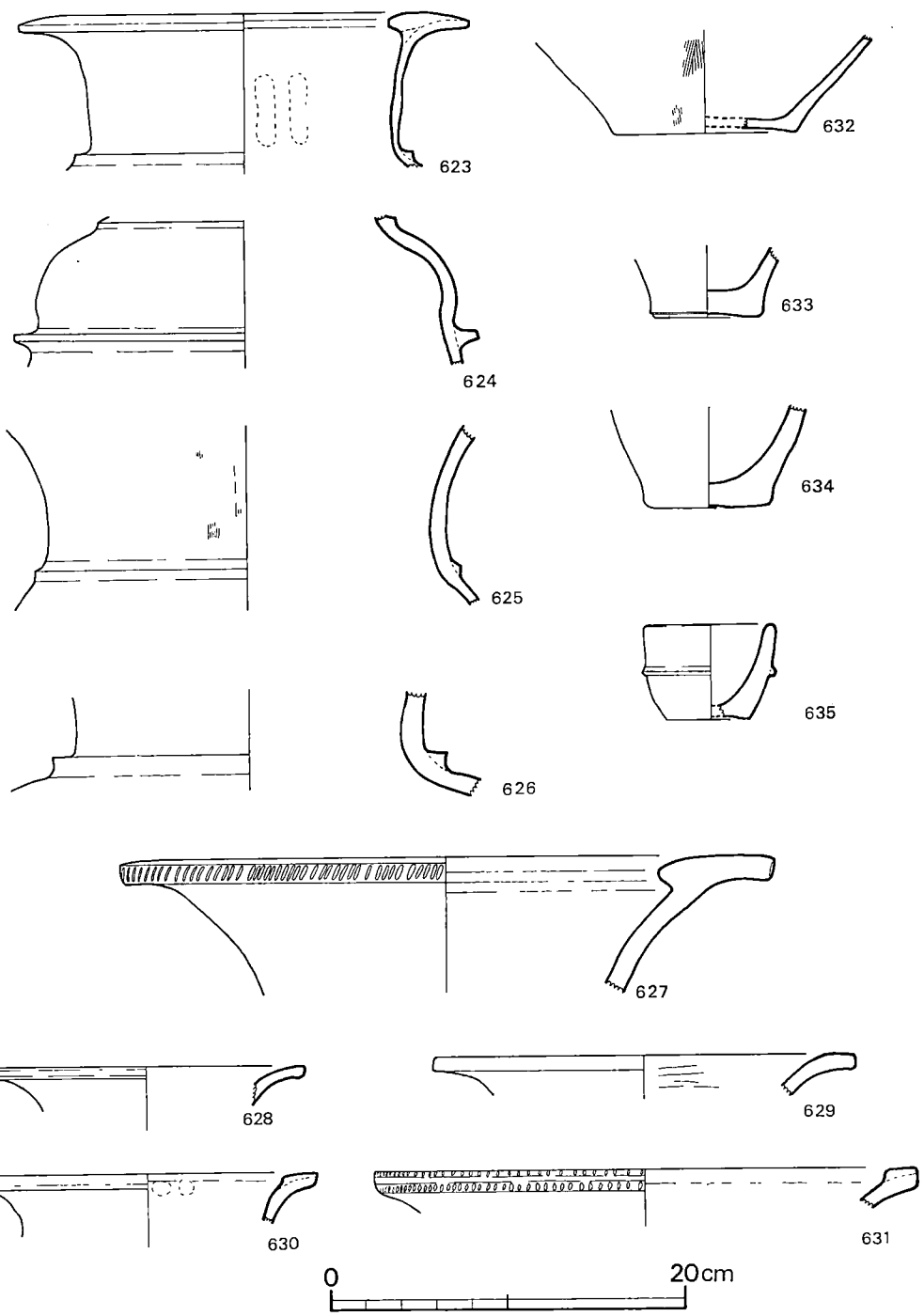
第167図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 7 (1/4)

ない（570・572）と施した例（571・573・574）とがある。572は口縁直下に沈線がみられる。573は，口唇部の下端にのみ刻み目施文がある。これらは，胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良好である。575～578は，壺の底部である。575・576は小形壺形土器である。平底のものは577・578と上げ底のもの575・576・579とがある。

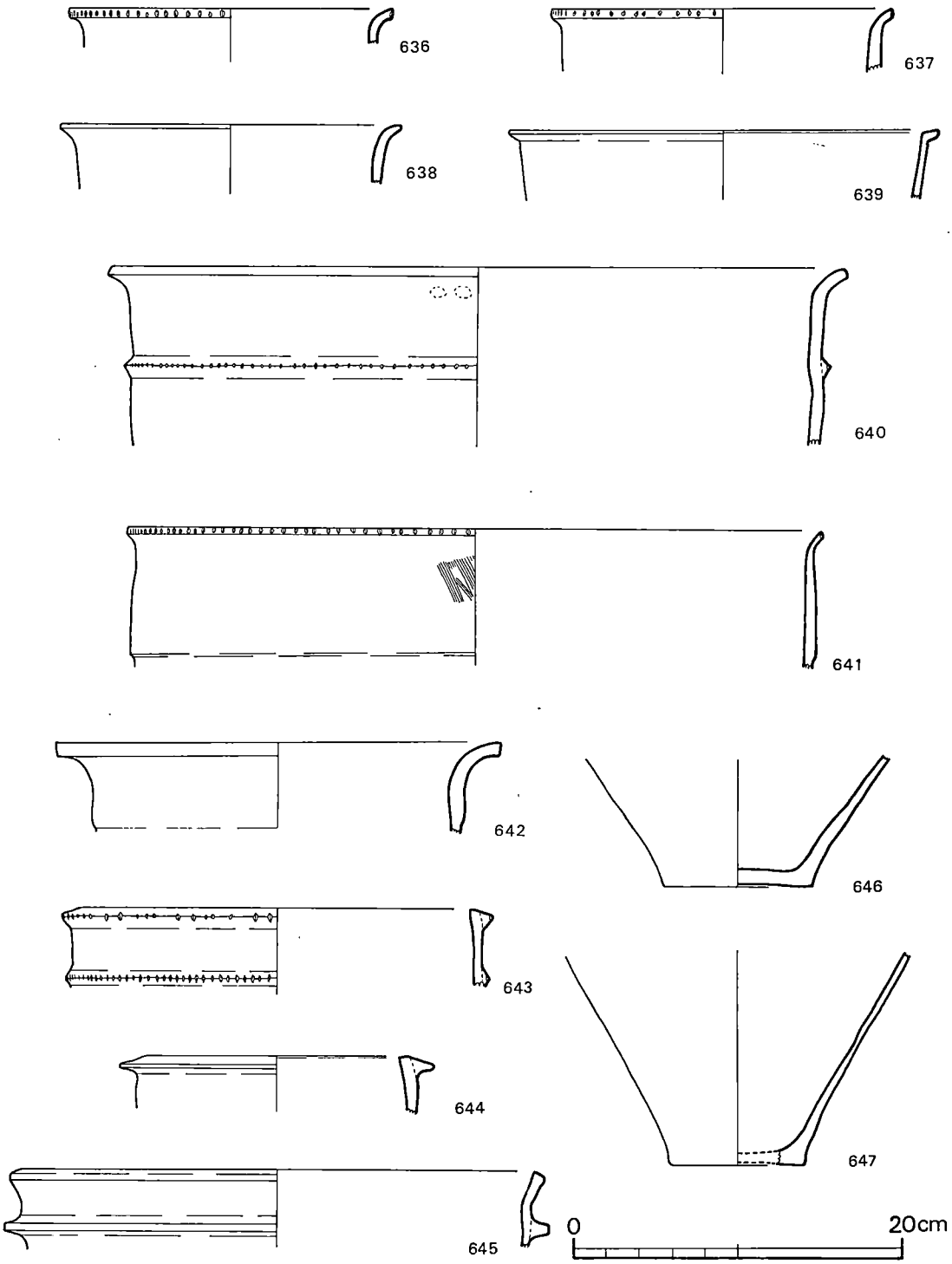
（616・617）　616・617は壺形土器の底部である。616は底面形が楕円形を呈し，壁面には指頭圧痕がみられる。617は，一種の上げ底であるが，台付壺のような形態を呈す。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は，長石・石英・雲母等を含む。色調は淡い褐色を呈する。

（623～634）　鋤先口縁を呈する壺形土器は623・627がある。口縁部は欠損しているが624・625もこの類に属する。これらは肩部に断面三角凸帯を貼付けている。624は所謂瓢箪形の壺形土器で，623とともに丹塗りの痕跡が認められ，精製された土器である。627は口唇部に刻み目施文があり，ナデ仕上げを施している。大きく外反する口縁部（628～631）の中には，粘土帯を貼けた例630・631があり，631は上・下端とも刻み目施文がある。632～634は壺形土器の底部で全て上げ底を呈する。633は小形壺で，端部に沈線を施す。

（657～667）　外反する口縁部に粘土帯を付す壺657～660と，中期的様相を示す661～663とがある。前者は口唇部に刻み目を有するもの657・658・659と有さない660とがあり，後者は外側に突出し平坦部が水平をなすもの661・662と鋤先口縁をなす663とがあり，頸部に三角突帯を貼付けている。664～667は壺形土器の底部で664は器形のわりには底径が小さい感がある。665



第168図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 8 (1/4)



第169図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 9 (1/4)

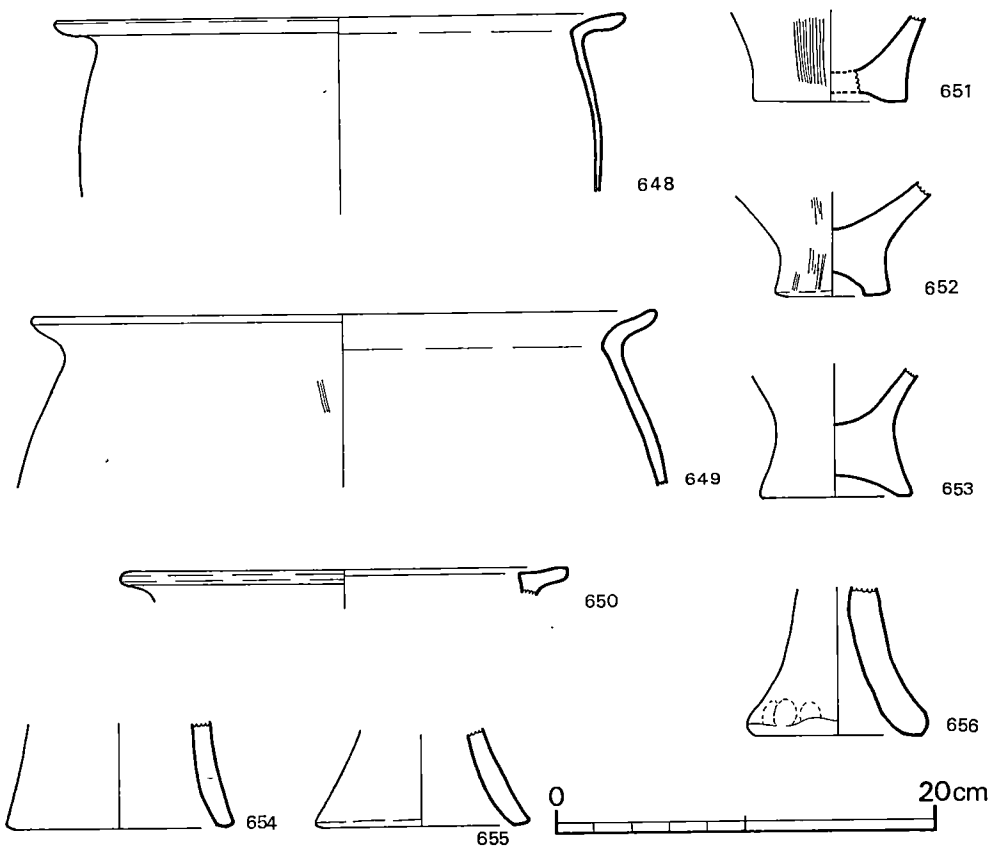
は胴部上半が欠損しており，器壁が厚い。下部には指頭圧痕が認められ，全てが平底を呈する。

甕形土器（第165図580～599）

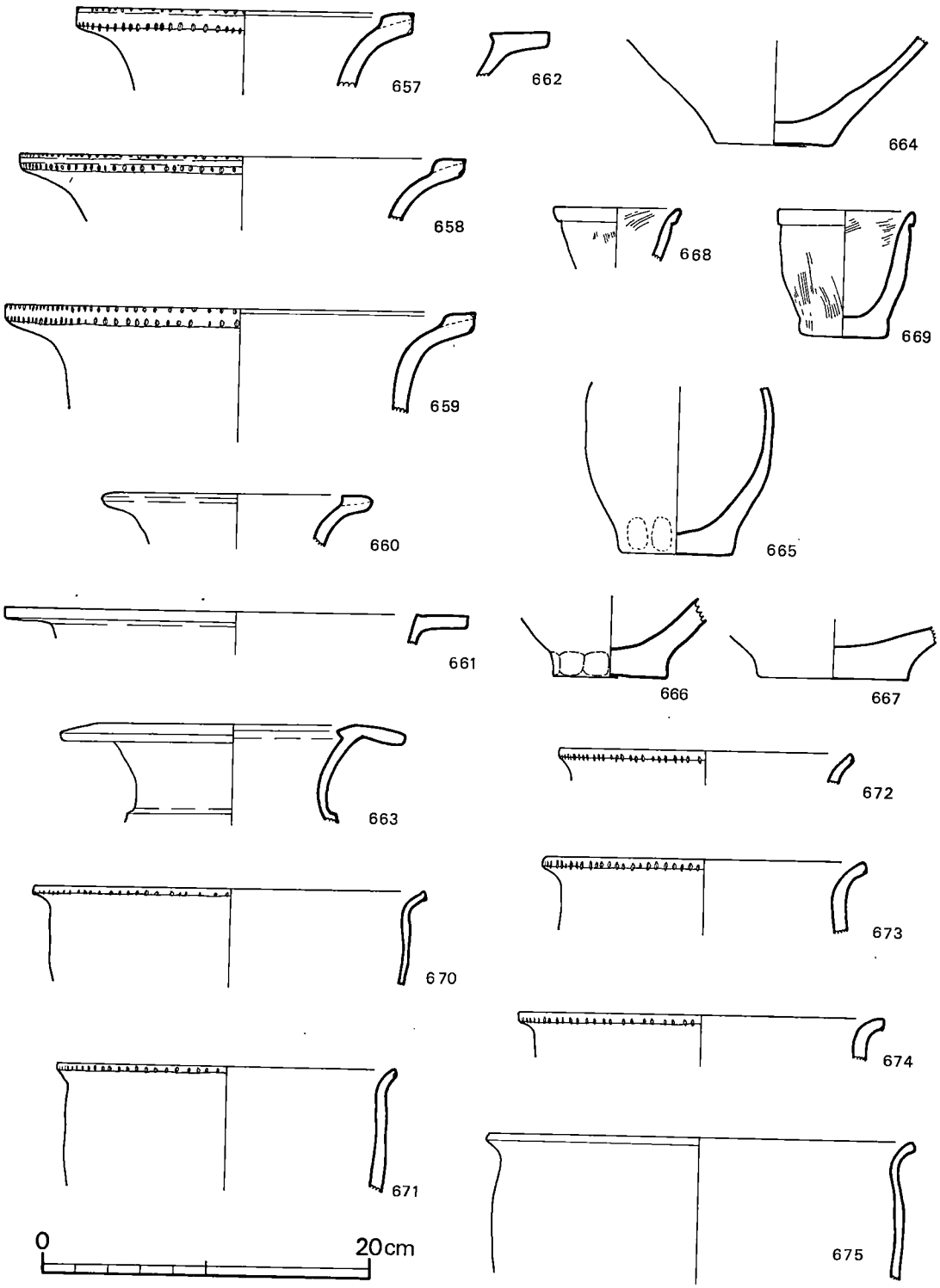
全てが如意形口縁を有する甕形土器である。口唇部に刻み目を有するもの580～584がある。586は器壁が厚く作られており，口縁直下に指頭圧痕がみられる。胎土は長石を含み，焼成は良好。色調は暗褐色を呈する。598は外反する口縁部に丸味のある胴部を有す。胴中央部以下を欠損している。器壁は剝落が著しく，調整は不明，胎土は石英を多く含み，焼成もあまい。色調は暗灰色を呈する。

(600～615)　如意形口縁部に断面三角凸帯を付した例（602・603・604・605）その中でも刻み目を施した例（602・603）とない例（604・605）と600のように凸帯を施していない例，609のように口唇部と肩部とに刻み目を施文した例とがある。

601は如意形口縁が発達した逆「L」字状を呈する。609は，口唇部に刻み目施文，肩部は肥厚させ篦による刻み目を二段にわたって施文している。さらに606～608のように直立する口縁



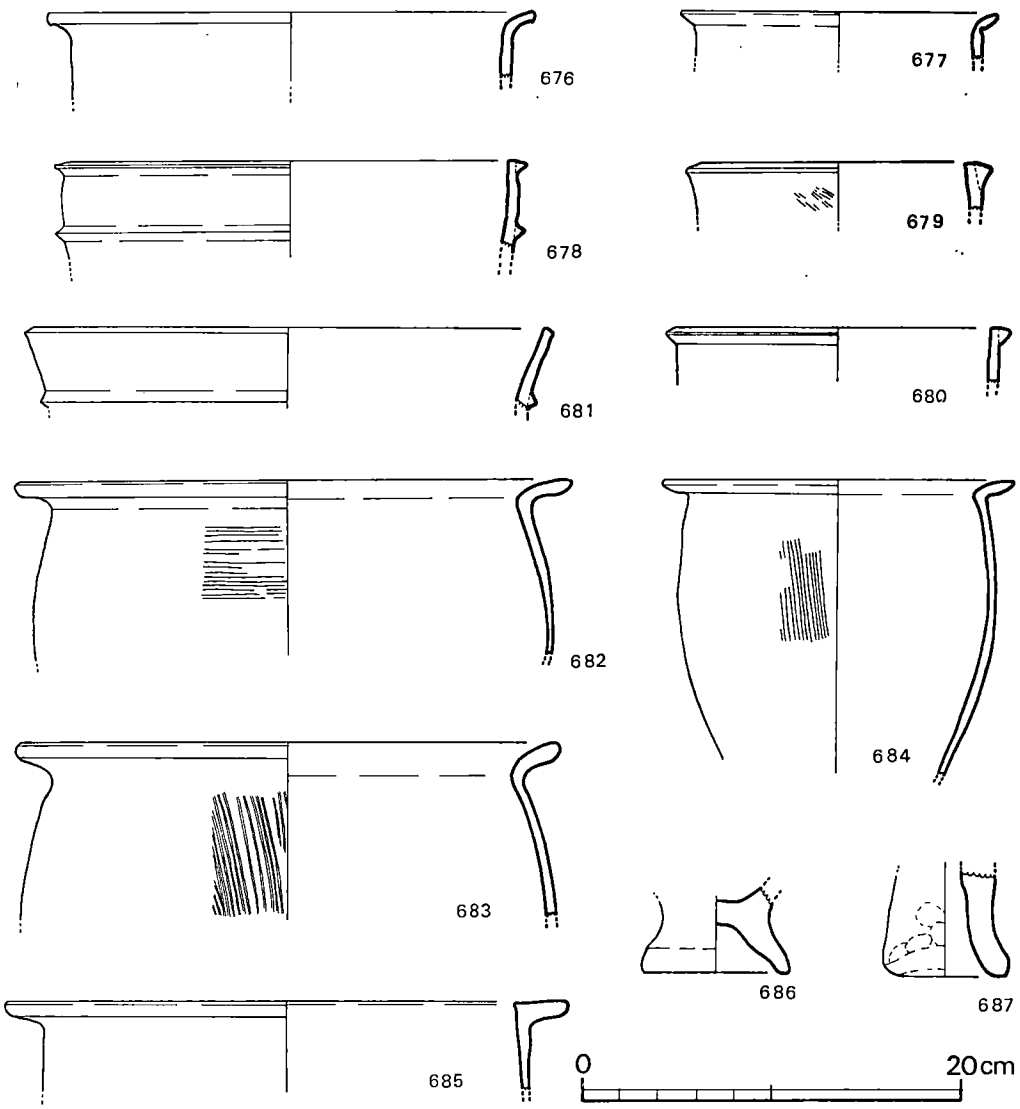
第170図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 10 (1/4)



第171図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 11 (1/4)

部に凸帯を付し，所謂逆「L」字状口縁をなす。口縁直下には三角凸帯を貼付け，口唇部もともに刻み目を施している。これらは長石粒を含み明褐色を呈する。610～615は甕形土器の底部である。上げ底を呈するもの610・611・615，平底を呈するもの612・613・614とがある。

(636～647)　如意形口縁を有するものは636・637・638・640・641がある。この内，口唇部に刻み目施文を有するもの636・637・641がある。639は外傾する口縁に粘土帯を付し，口縁を形成している。640は口縁直下に断面三角凸帯を貼付け，刻み目施文がある。641は頸部を肥厚しており器面にハケが認められる。642の口縁部は大きく外反させ肥厚させる。643・644は，逆



第172図　12号竪穴住居跡出土土器実測図　12 (1/4)

「L」字状の口縁を呈し，643は口縁直下に三角凸帯を付し，刻み目を施している。645は僅かに外反する口縁部下に「コ」字状の凸帯を付しているが，この器形はあまり見られない。

(648～653)　内傾する口縁部を有すもの648・649と逆「L」字状を呈する650とがある。648・649は胴部が張り，器面にハケ目が認められる。651～653は甕形土器の底部で，上げ底を呈する。652・653は細身の上げ底である。

(670～675) 全て如意形口縁で口唇部に刻み目を有すもの670～674と有さない675がある。670は口唇部を若干肥厚させている。器面はハケとナデで仕上げ，胎土は長石・石英等を含む。器壁が剝落しているものもある。

(676～686)　如意形口縁を呈するもの676・677と直立する口縁部に粘土帯を付した678・679・680と内傾した口縁を有す682・683・684と逆「L」字状を有す685がある。681は他と形態が異なり珍しい器形を呈する。口径は677～680・684は小さい。682・683は560と類似し，胴部は張る。器面は荒いハケとナデで仕上げている。698は深い上げ底を呈する。

鉢形土器（第167・168図618～620・635）

如意形口縁を有すもの618・619と直立する口縁を有す620とがある。618の胴部は丸味を持つ。619は器壁が厚い。620は器壁の内外面とも研磨しており，精製された胎土で，色調は赤褐色を呈する。635は小形の鉢形土器で底部を一部欠損している。器壁は厚く，中央部に下り気味の「コ」字状の凸帯を貼付ける。底部は浅い上げ底を呈する。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良好。色調は淡い黄褐色を呈する。

(668～669)　無文土器の系統である。ほぼ同器形を呈するが668は若干胴部が細身である。口縁部は薄く作り端部を折り曲げて肥厚させている。器壁内外面ともハケで仕上げている。良く精製された胎土で色調は淡い赤褐色を呈す。

蓋形土器（第167図621）

下部を欠損している。上部の凹みは摺鉢形を呈し，作りが粗である。内外面ともナデ仕上げ胎土・焼成とも不良。

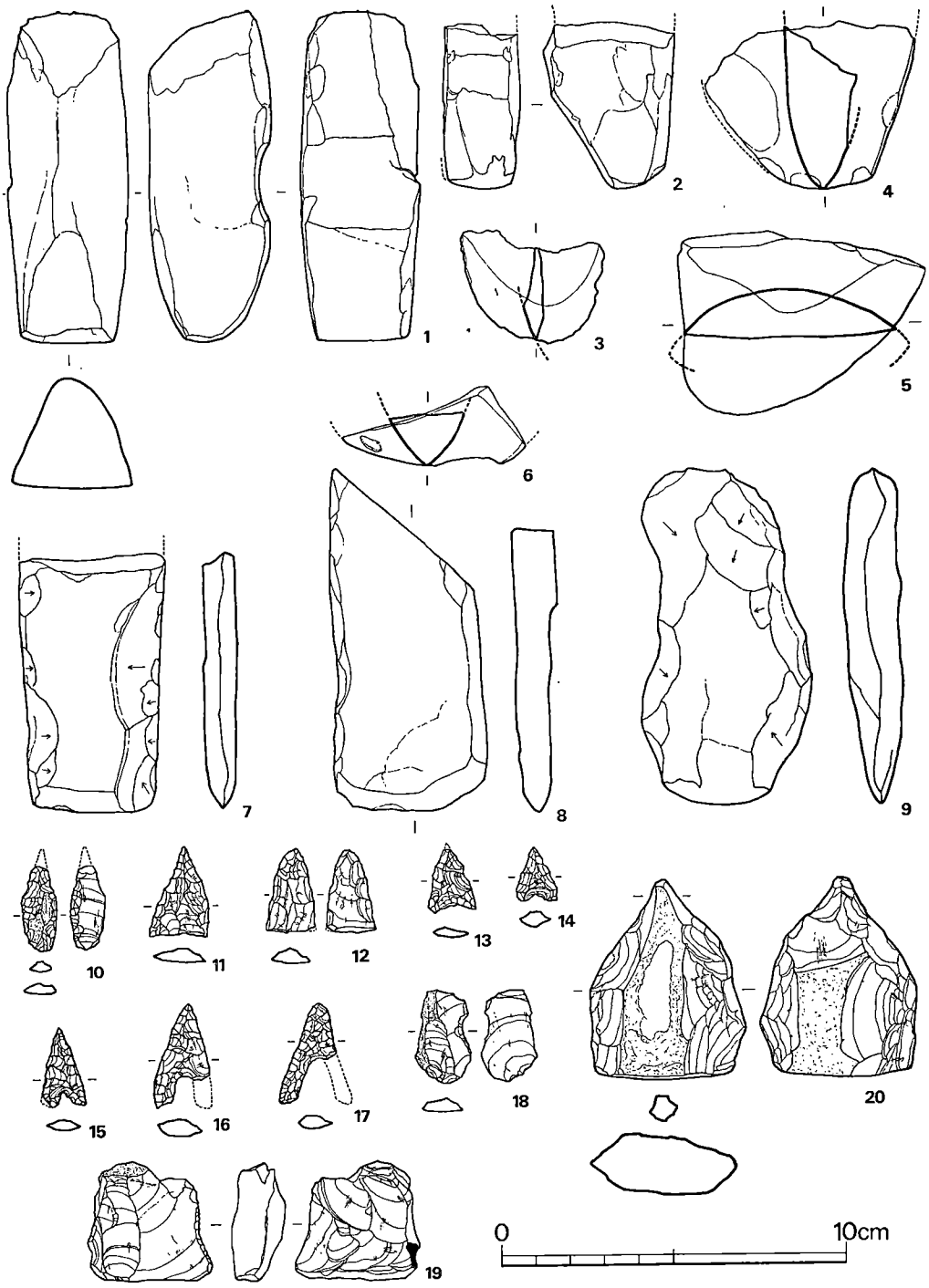
高杯形土器（第167図622）

坏部と脚下部を欠損している。器壁内外面ともナデとハケで仕上げ，脚部内面には絞り痕が認められる。胎土は石英粒を含み，焼成は普通で橙褐色を呈する。

器台形土器（第170・172図654～656・687）

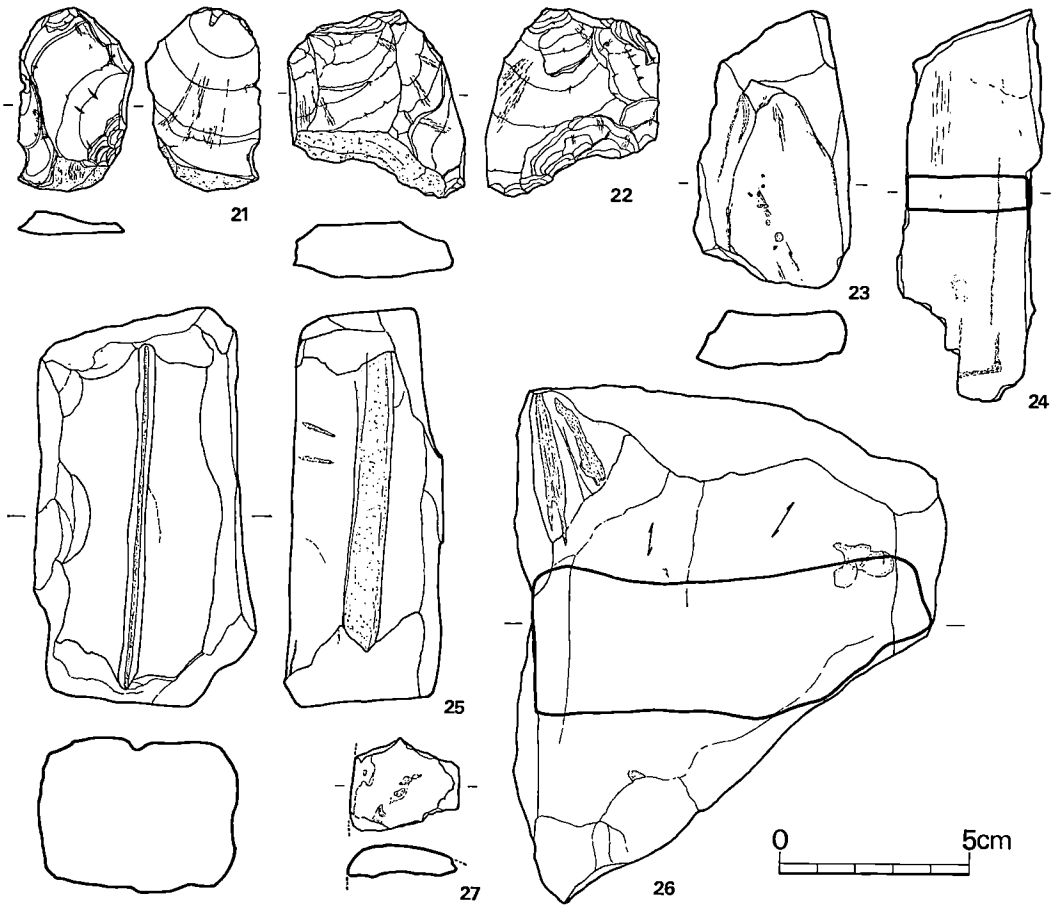
器台形土器の下部のみで，端部に稜をもたない654と有す655・656とがある。656は，細身で，器壁は厚く内面には絞りの後縦ナデが認められる。687は作りが粗で，指頭圧痕が認められる。全面に風化が著しく，外面下部には二次的な焼成を受ける。　　（佐々木隆彦）

石　器（第173・174図）　石斧10・石鏃13・砥石4の他，削器・石錐・石錐等35点が出土した。1は抉入片刃石斧で長さ9.45㎝，幅3.4㎝，抉部幅2.58㎝，重さ180ｇを測る。刃部は無

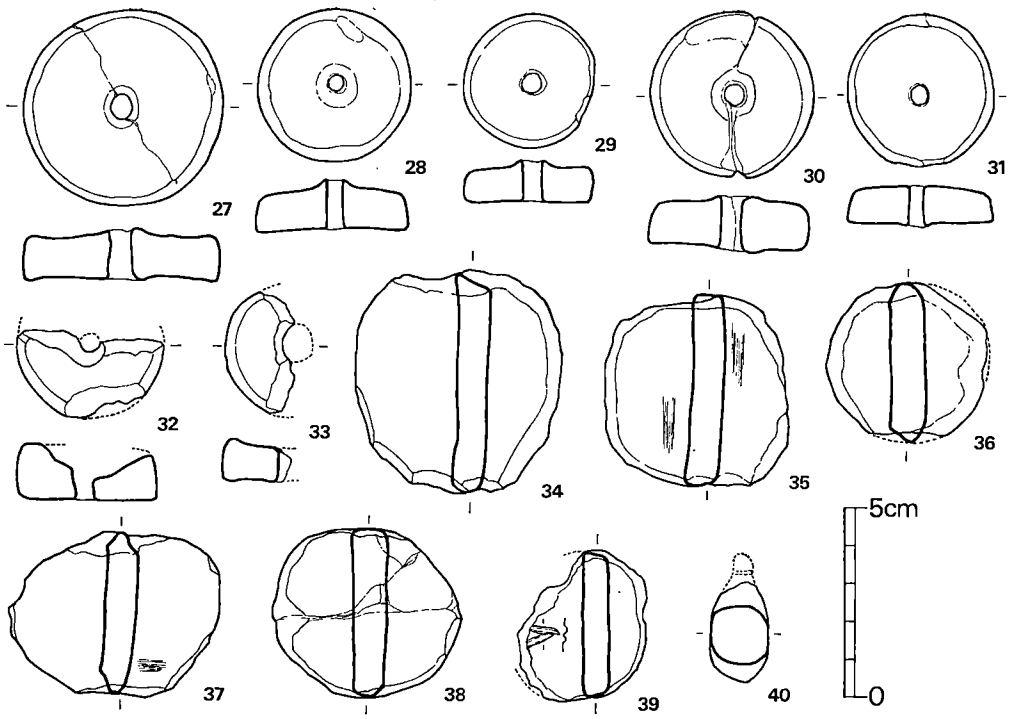


第173図　12号竪穴住居跡出土石器実測図 1 (1/2)

く，研ぎ稜がみられるところから，先端が欠損し，再整している途中のものと思われる。西側覆土2層出土。2は黄灰色頁岩製の柱状片刃石斧片。刃部は欠損後磨いている。東側覆土1層出土。3は磨製石斧の刃部破片。研磨は丁寧。4は硬砂岩製のやはり磨製石斧刃部破片だが刃部は鈍い。東側覆土1層出土。5は太型蛤刃石斧の胴部表皮破片で玄武岩製。6は同じく刃部破片。7は砂岩質な扁平両刃磨製石斧片で8と同様な短冊形を呈す。側縁は周辺からの調整剝離で，中央部から刃部は研磨。黄灰色で風化している。8は緑泥片岩製で刃部磨製石斧。厚さ1.25cm重さ63.2g，頭部は斜めに切断後研磨している。東側4層出土。9は東側覆土1層出土の分胴形に近い扁平な刃部磨製石斧。玄武岩質で周縁は剝離。10～17は打製石鏃で10は細かい縦長剝片の末端部を先端とするものだが，欠損している。断面剝離の状態からするとドリル的な機能を有するものかもしれない。11は平基で他は凹基無茎式。10・13～16が黒曜石，11・12がサヌカイト製，12は縦長剝片の鋭利な一縁辺に抉状の刃部を形成する削器。19は1.5cmと部



第174図　12号竪穴住居跡出土石器実測図 2 (1/2)



第175図　12号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）

厚く方形な剝片の一辺に二次加工を加えている。20は板状の泥岩を利用し，先端を鋭がらすように片面に細かい調整を加える。先端は丸く，使用によりすれている。体部は周辺より荒い剝離を加えた後，細かい調整をする。ドリルの一種であろうが，石庖丁等有孔部の研磨にも関係がありそうだ。21・22は黒曜石，サヌカイト製の縦長，幅広の剝片。23～26は砥石。23は浅いU字状の研砥面一面を有す。淡青灰色軟質の粘板岩系の石質。覆土3層出土。24は0.95cmと薄い板状砥石で重さ51g。25は断面隅丸方形の有溝砥石。二辺に研砥溝が走り，一つは幅4.3mm，深さ2.5mmと深く，長さは9cm。他は幅0.9mmと幅広く深さは1.5mmで両者とも長軸方向に走る。砂岩製で覆土2層出土。26は大型で比較的薄手。研砥面は不定方向にへこむ。左辺上部に火を受けた痕跡がみられ，又，炭化物も付着している。厚さ3.85cmで荒い砂岩製。27は翡翠製で胴部を研磨した不明石器。東側覆土1層出土。

土製品（第175図）　14点出土した。27～33は紡錘車。27は径5.25cmと最も大きいもので黄褐色を呈し焼成良好。31は覆土4層出土のもので径4.0cm，厚さ1.1cm，重さ16.8gを測る。孔周辺が肥厚しないもの。34～39は土器片を利用した土製円盤。34は他と比べ大きく，長径5.7cm，短径5.5cm，厚さ0.9cm，重さ35.9gを測る。西側覆土3層出土。35は甕の破片で，器面にはタテ方向のハケ目が観察される。39は暗茶褐色を呈す破片資料で，左辺に二重の沈線がみら

れる。壺形土器の肩部重弧文を描いた破片であろう。厚さ0.7cmで3層出土。40は4号住居跡に多く出土した土製品と同じものであろう。

12号住居跡出土の層位別遺物数は次表の通り。　　（木下）

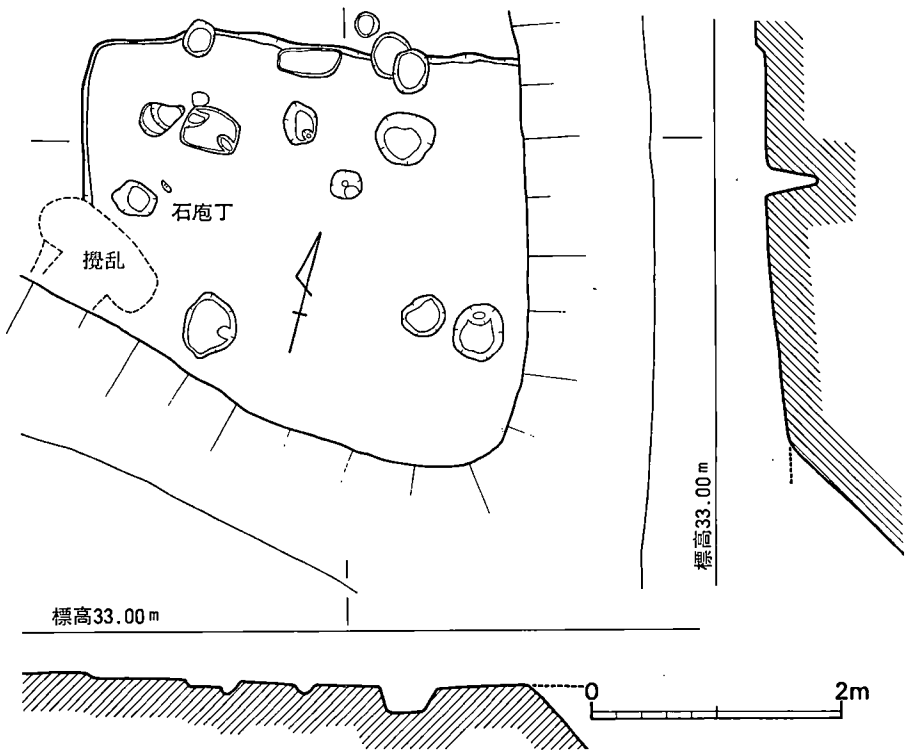
表　4　　12号住居跡層位別石器出土数

（単位cm）

層位	石　斧	石　鏃	削　器	石　錐	石　核	剝　片	砥　石	敲　石	不明石器	土　製紡錘車	土製円盤	その他	合　計
1層	2~5·9(1)	10~14(4)	18・19	20					27(1)	(1)		40	22
2層	1・6・7	17				21	24・25			28・29			9
3層		15・16					23・26			30・33	34・35・·37~39		11
4層	8				(1)	22		(1)		31・32	36		7
合計	10	12	2	1	1	2	4	1	2	7	6	1	49

※数字は図版番号と一致し，（ ）内の数字は図示しなかった遺物の出土数を表わす。

≪13号住居跡（図版71，第176図）　東側と南側と開墾時の破壊で大半欠失していると同時に，上面がかなり削平されているため壁高はわずか6cmを残すのみである。もちろん，規模は不明であるが，残存する北壁と西壁の一部からして方形プランを呈する竪穴住居跡と思われる。床面は，さほどたたきしめられていず，炉跡はみられない。住居内にはピットは多数ある



第176図　　13号竪穴住居跡実測図（1/60）

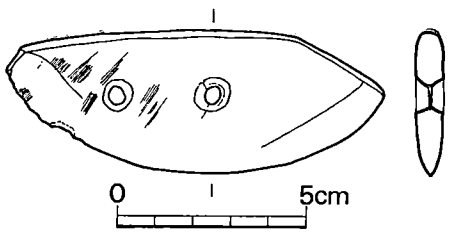
が柱穴と思われるものは不明である。

遺物は石庖丁１点のみで時期は不明である。

（井上）

出土遺物（図版101，177図）

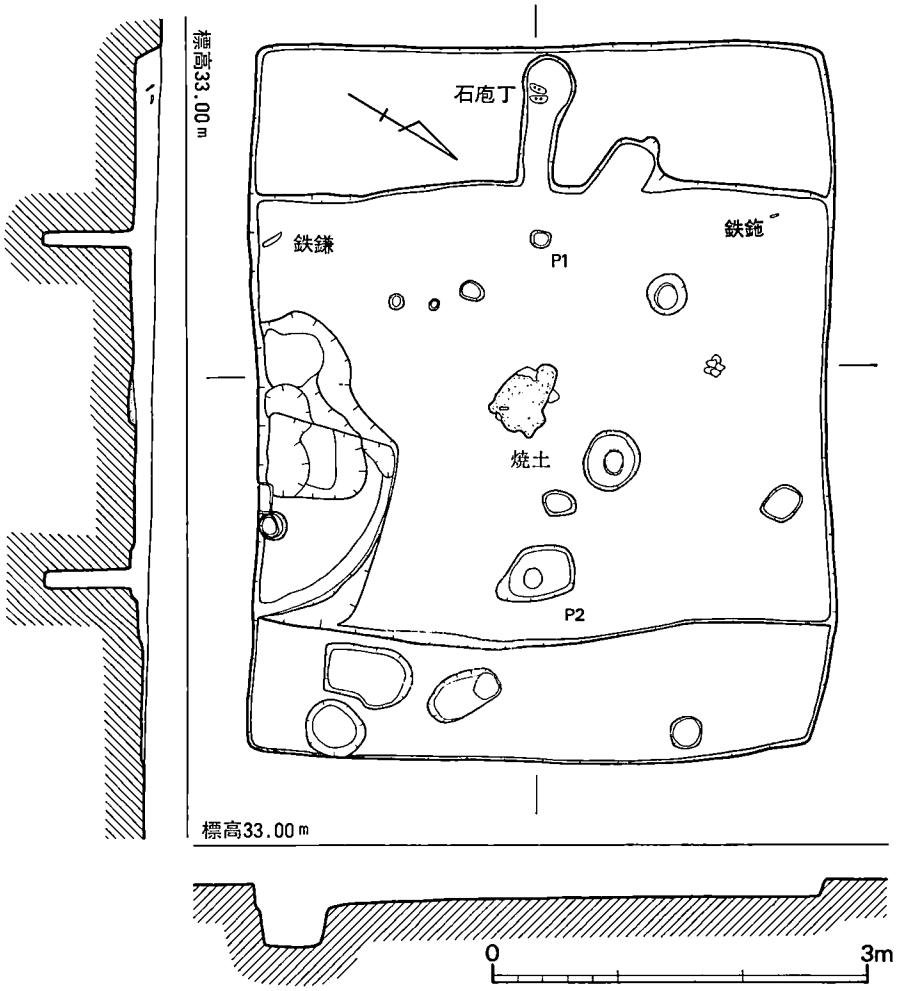
石　器（第177図）　床面より若干浮いて出土した完形の石庖丁で唯一の石器である。長さ10.0㎝，幅3.72㎝，厚さ0.75㎝，重さ33.5ｇを測る。右辺は通常と異なり右傾する。紐孔は全体より左寄りにあけられる。輝緑凝灰岩製で優品。



第177図　13号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2)

（木下）

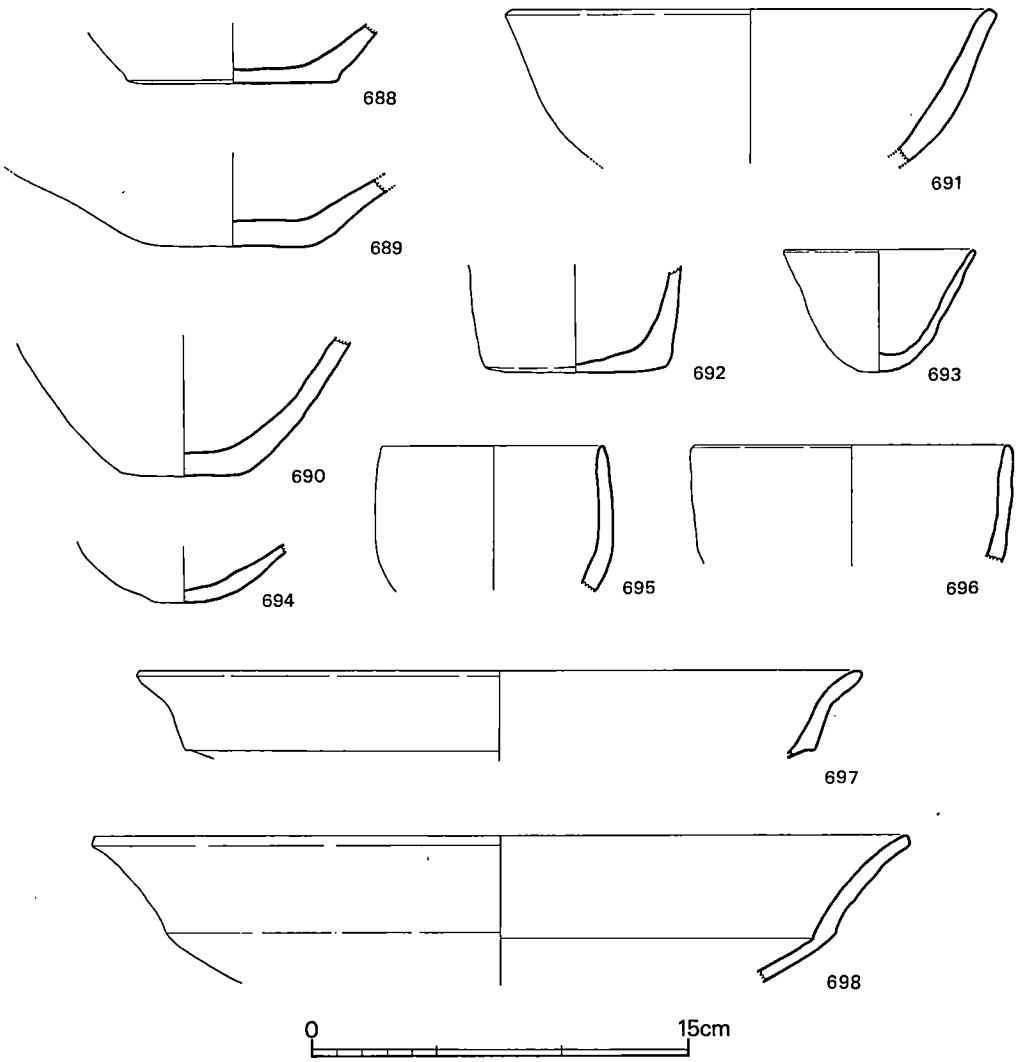
≪**14号住居跡**（図版72・73，第178図）　東西5.70ｍ×南北4.55ｍを測る長方形竪穴住居跡



第178図　14号竪穴住居跡実測図 (1/60)

である。壁高は残りの良い北壁で15cmと浅く，上面はかなり削平されているものと思われる。東西両側に幅約１mの造り出しのベット状遺構を有し，西側ベット状遺構中央部には幅約30cm，深さ約８cmのベットを欠く部分がある。柱穴は中央にあるＰ１・Ｐ２の２個で，Ｐ１は径13cm，深さ70cm，Ｐ２は径15cm，深さ70cmを測るしっかりしたピットである。炉跡はＰ１・Ｐ２のほぼ中央にある。また，南壁側には不整形の屋内貯蔵穴がある。

遺物としては西側のベットの欠失した部分から若干浮いた状態で石庖丁２個が，南西側のベット直下から鉄鎌１，北西側ベット直下から鉄鉇２が床面に接して出土した。他に後期終末と思われる土器小片が若干と鉄片１，石庖丁１が覆土中から出土した。



第179図　14･16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

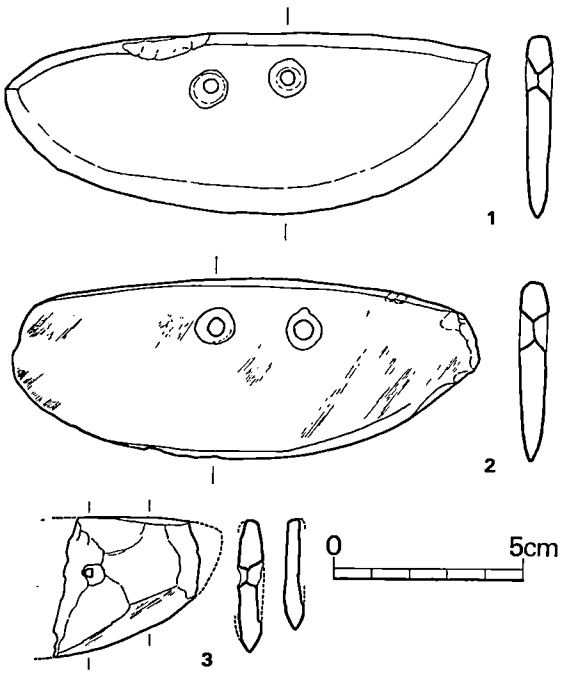
出土遺物（第150・179・180図）

壺形土器（第179図688・689）　底部の資料で，平底であるが，689は胴部と底部の境界があまい。底径は688が8.4cm，689が6.6cmを測る。調整は器面風化のため不明。色調は688が外面淡褐色，内面暗褐色，691が外面褐色，内面黄褐色を呈す。

甕形土器（第179図690）　丸底気味の小さい平底の資料で，底径5cmを測る。内外ともナデて仕上げた明赤褐色を呈す土器である。

鉢形土器（第179図691）　底部を欠く破片資料である。復原口径19.3cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は外面褐色，内面黄褐色を呈す。

椀形土器（第179図692・693）　平底と丸底のものがあり，手捏的な小形の椀である。内外ともナデて仕上げている。色調は明橙色を呈す。　（井上）



第180図　14号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

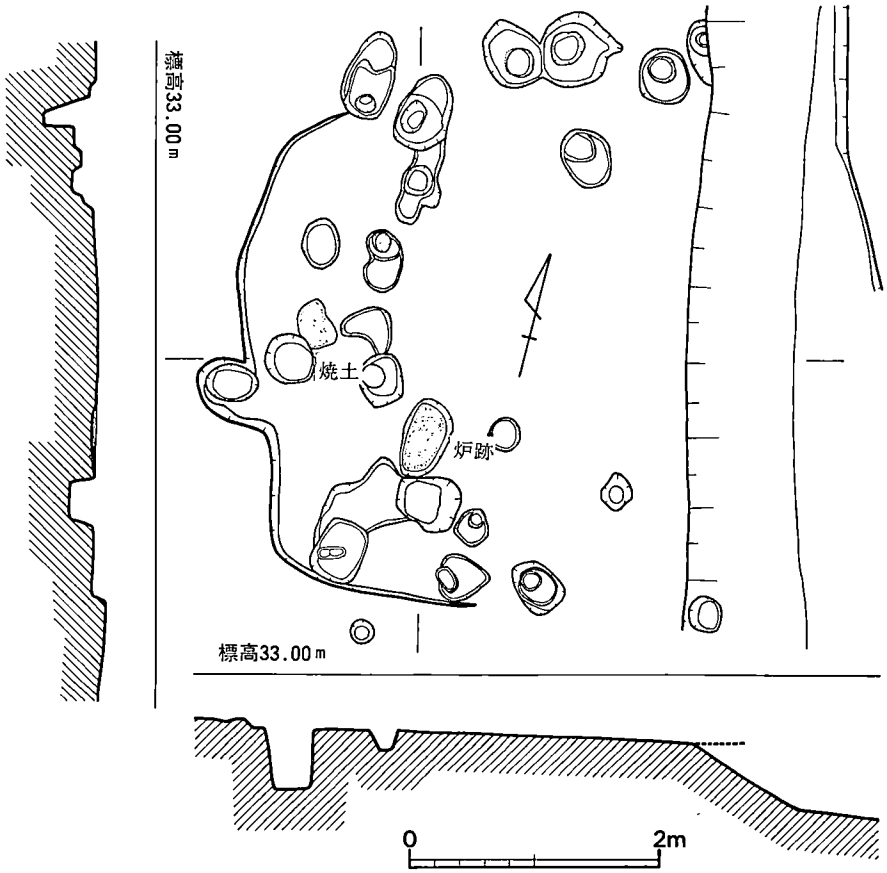
石　器（第180図）　いずれも石庖丁で，1・2は住居跡西側のベットを切る溝上部より，刃部を東に向け接して出土した。1は西側出土のもので，灰白色砂岩製。半月形外彎刃の完形品で長さ12.8cm，幅4.7cm，厚さ0.72cm，重さ54.5gを測る。背縁を有し，ほぼ中央部に紐孔が穿かれる。背縁と刃部の接点が尖がる。刃部は鋭く，刃こぼれがみられる。2も砂岩製で，1と異なり背縁と刃部との接点が丸みをもつ。全体に擦痕が観察される。重さ48gとやや軽い。3はやはり砂岩系で，1・2と比べ小振りの破片。背縁は若干斜めになる。　（木下）

鉄　鉇（第150図3・4）　3は柄部先端の一部の大半を欠く資料である。3は全長8.9cm，刃部長2.45cm，刃部基部での幅1.35cm，断面は刃部が三日月形を呈し，厚さ3.5mmを測る。刃部中央には鏑があり，中央が尖る三日月状を呈す。裏面には木柄の木質が残っていて，柄基部より2.9cmまで確認される。桜皮等の巻ひもは残存していない。4は残存長4.65cm，刃部長2cm，刃部基部で幅1.3cm断面は三日月形を呈し，厚さ2.5mmを測る。3と同様刃部中央に鏑がある。

鉄　鎌（第150図7）　刃部先端を欠く資料である。残存長19.3cm，刃部現在長17.2cm，刃部中央幅2.9cm，背3mmを測る。茎部には着柄の折り返しがある。

不明鉄製品（第150図6）　破片であるが撥形の板状をなす扁平な鉄製品である。厚さは3㎜である。

≪15号住居跡（図版74，第181図）　B６区で検出されたものである。東側は開墾時の破壊で大半を完全に欠失し，上面もかなり削平されているため，南壁の一部と西壁をわずかに残しているだけで，壁高も約7㎝と浅い。規模は明確でないが残存する西壁では3.8m を測り，プラ



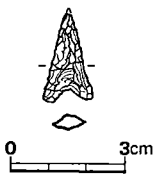
第181図　15号竪穴住居跡実測図（1/60）

ンは隅丸方形竪穴を呈するものと思われる。ピットは多数あるが柱穴と思われるものは不明である。炉跡は南西側に偏してある。床面は良くたたきしめられている。

遺物は壺の底部1と打製石鏃1のみである。　（井上）

出土遺物（図版101，第182図）

石　器（第182図）　住居跡内ピット出土のサヌカイト製石

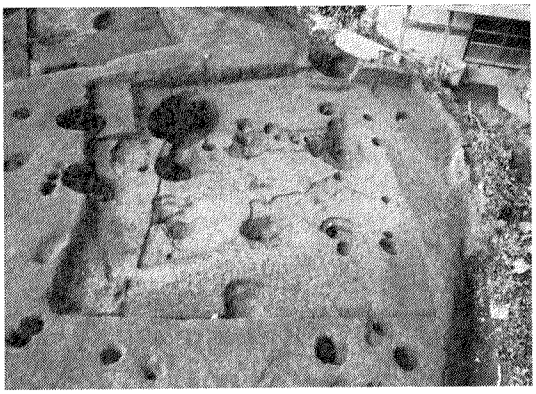


第182図　15号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

鏃。凹基無茎式で有歯状の側縁をもつ。先端を若干欠損する。長さ2.29cm，幅1.39cm，厚さ0.39cm，重さ0.7gを測る。（木下）

≪**16号住居跡**（図版74，第183・184図）

北側の大半を17号住居跡に切られて発見されたもので，わずかに1/4程度を残すのみである。残存する南壁と東・西両壁の一部から南北7.20mを測る方形竪穴住居跡であることが判る。東壁側には幅約70cmのベット状遺構を有す。壁高は南壁で約36cm，東壁で約6cm，西壁で約37cmと浅く，上面はかなり削平されている。住居内には各所に焼土・炭化物が散在し，床面全体が火を受けていた。火災を受けたものであろう。柱穴・炉跡・周溝等はなく，柱穴・炉跡は17号住居跡で壊されたものと思われる。



第183図　16号竪穴住居跡全景

遺物としては小型壺・椀・高杯等の小破片若干のみで，時期は後期終末といえよう。

出土遺物（第179図）

小型壺形土器（第179図694）　丸底の底部で，内外ともナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈す。

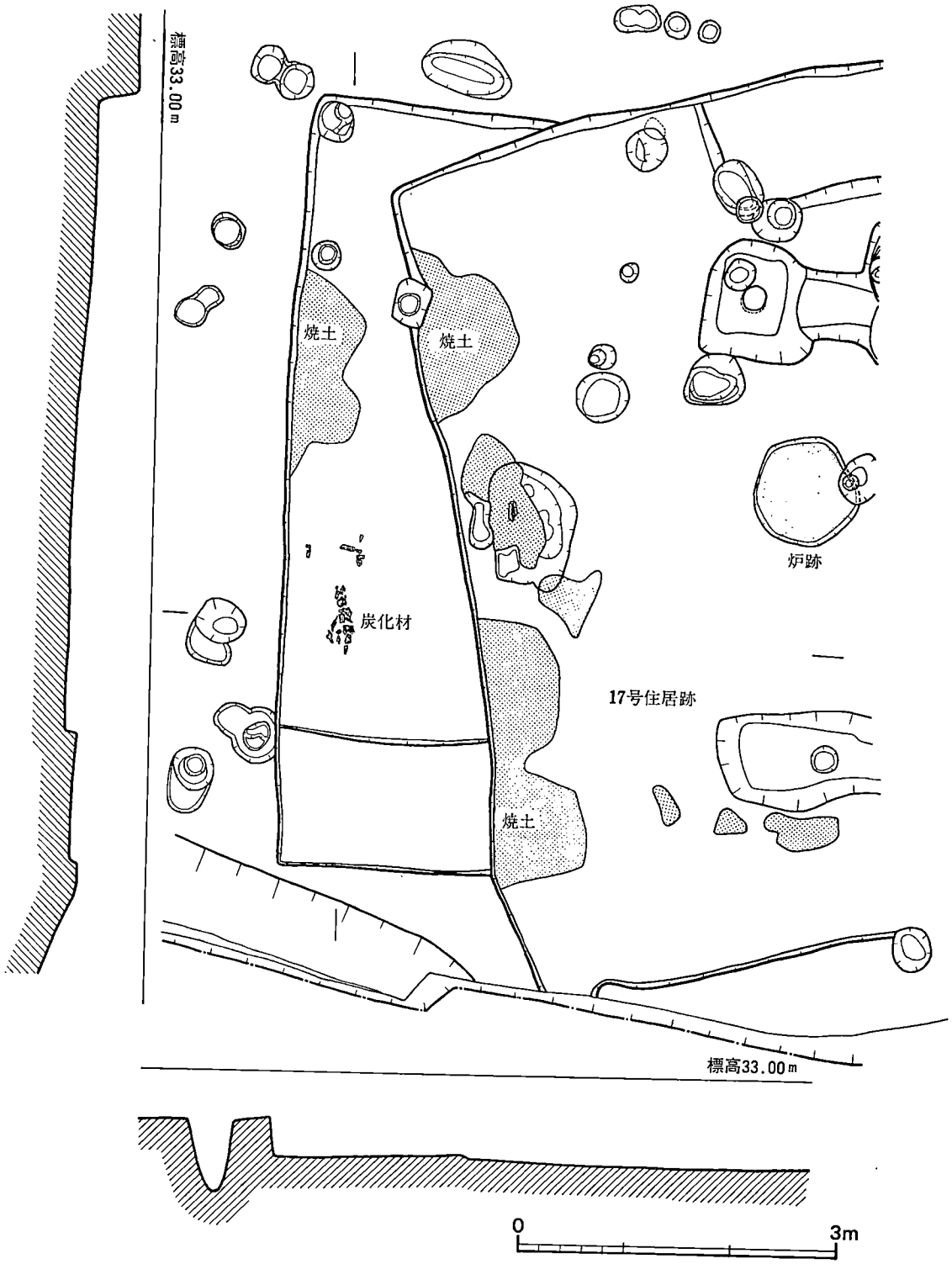
椀形土器（第179図695・696）　直口する椀である。695が口径8.9cm，696が21.6cmを測り，内外をナデて仕上げている。色調は695がくすんだ暗橙褐色，696が暗褐色を呈す。

高杯形土器（第179図697・698）　杯部上半の破片資料である。697は復原口径28.6cmを測り，杯部口縁の外反は大きいが，短かい杯部である。杯底部の屈折は明瞭である。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は明橙褐色を呈す。698は復原口径32.3cmを測る。杯部口縁の外反は697と比べ大きく，長いもので，杯底部の屈折も明瞭である。内外ともナデ仕上げであるが，杯底部外面は刷毛のあとナデて仕上げている。色調は淡橙褐色を呈す。胎土・焼成とも良好である。（井上）

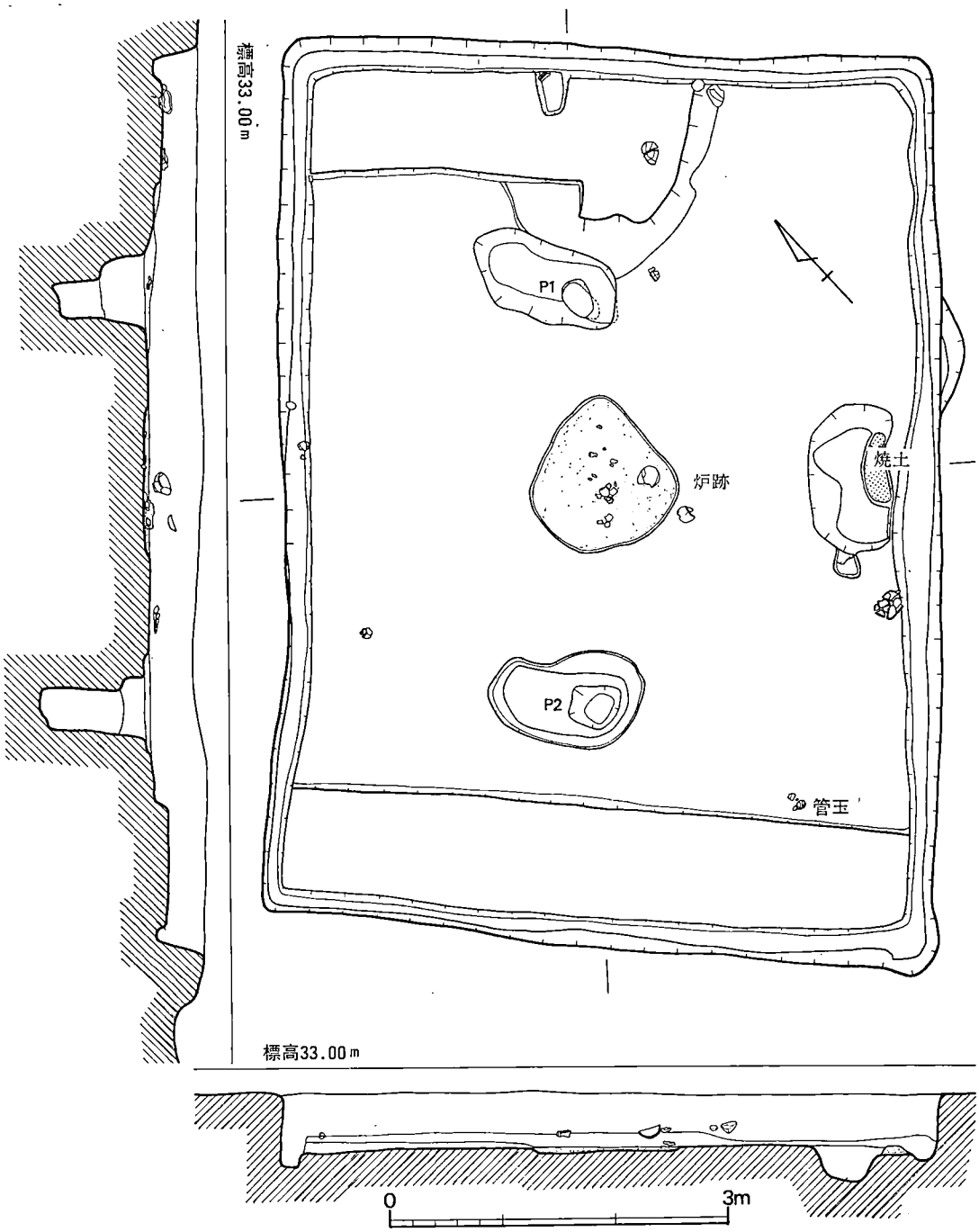
石　器（第189図1）　茶褐色の軽石製品。中央部つまみ状にもりあがる。1.4g。（木下）

≪**18号住居跡**（図版75，第185図）　一部，45号・49号袋状竪穴・4号墳石室・溝状遺構・火葬墓などと複合しているが，もっとも残りの良い住居跡である。東西7.90m×南北5.90m，壁高0.40～0.45mを測る大形の長方形竪穴住居跡である。幅約95cmのいわゆるベット状遺構を両短辺側に有し，東壁側のベットは南側約1.5mが施されていない。周溝は壁直下を全周する。柱穴は2段のしっかりしたピット2個で，住居中央部に炉跡，南壁中央部に屋内貯蔵穴を施設している。床面は良くたたきしめられている。

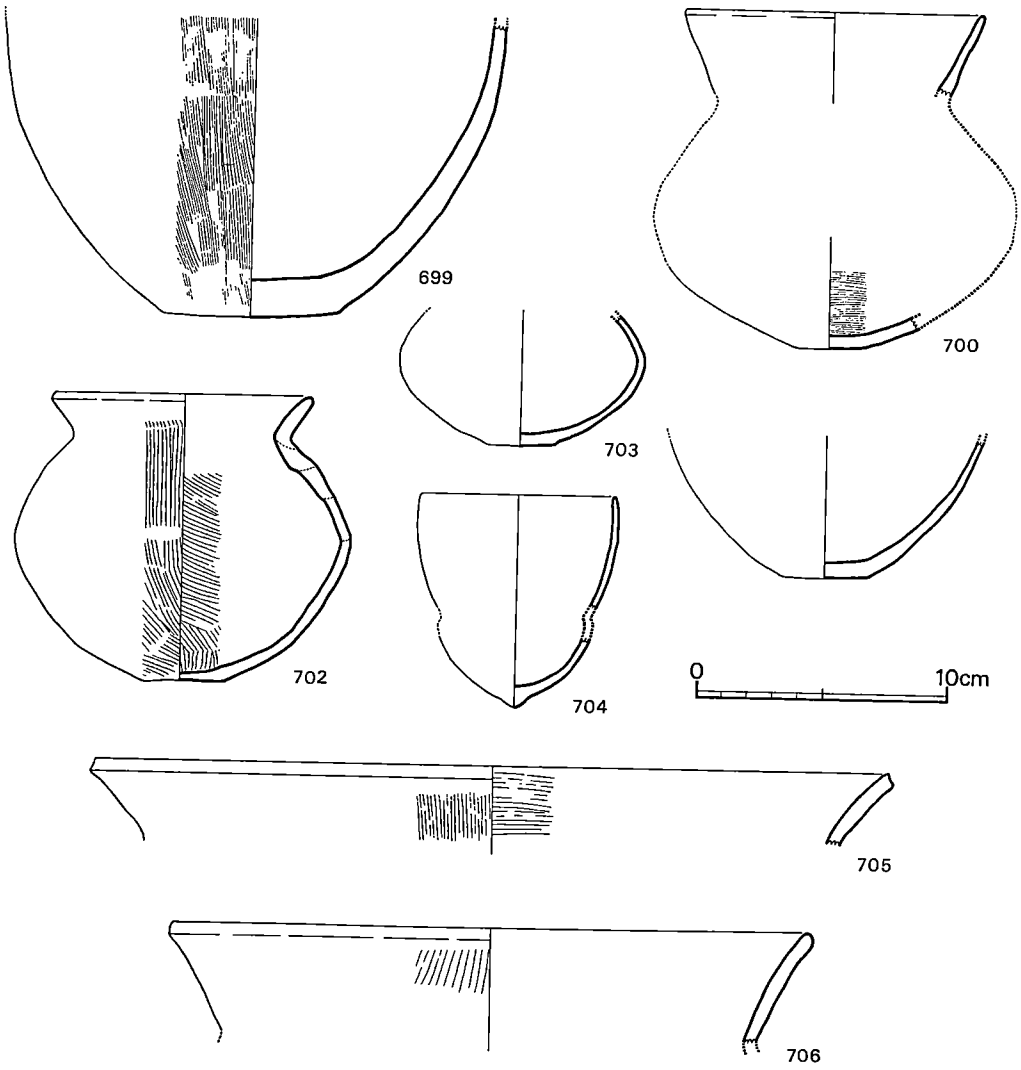
遺物としては壺・甕・鉢・椀・杯・高杯・器台等多数と打製石鏃2，石核1，砥石1，磨石



第184図　16号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第185図　18号竪穴住居跡実測図（1/60）



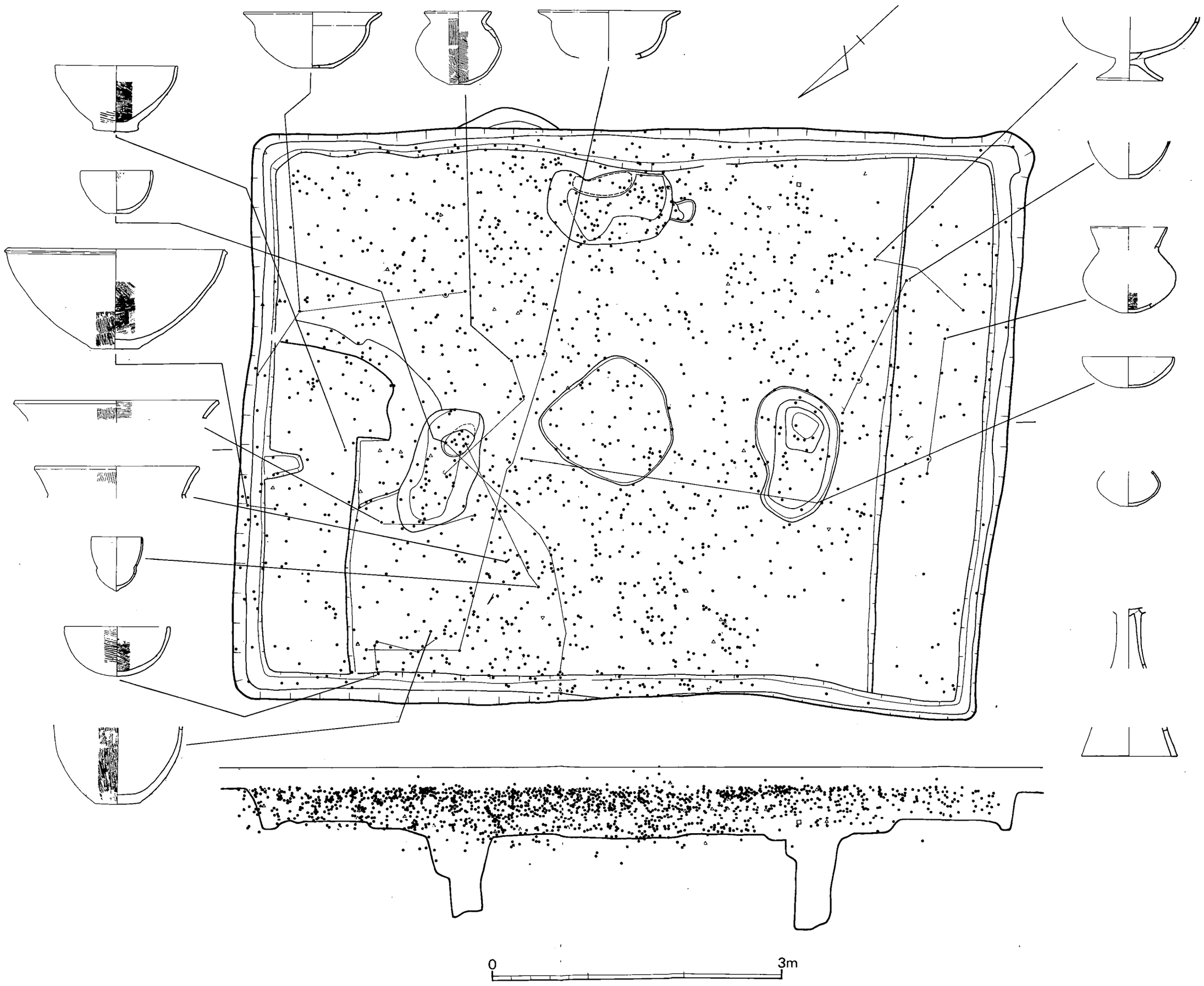
第186図　18号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)

1，敲石1，土製品1，ナツメ玉1が出土した。時期は後期終末に属する。

出土遺物（図版95・96・103，第186・188・189図）

壺形土器（699）　胴下半の資料で，底部は丸味をもった平底である。底径7㎝を測る。胴部外面刷毛，内面ナデている。底部付近はさらにナデて仕上げている。色調は褐色を呈す。

小型壺形土器（700～704）　700は胴部上半を欠く資料である。「く」字状に外反する口縁部に扁平な球形を呈す胴部がつく壺である。口径11.8㎝，復原器高13.3㎝を測り，底部は丸味をもった平底で，径2.7㎝と小さい。口縁部内外はヨコナデ，胴部外面ヘラ磨き，内面刷毛で仕上げた作りの良い土器である。胎土・焼成とも良好で，色調は黄褐色を呈す。701は胴下半の



第187図　18号竪穴住居跡内遺物分布図　（遺構1/40，遺物1/6）

資料で，700とほぼ同様の壺と思われる。底部は丸味をもった平底で，径3.5cmを測る。内外ともナデて仕上げた褐色を呈す土器である。702は「く」字状に外反する口縁部に，ソロバン玉状の胴部がつく壺である。口径10.3cm，器高11.1cmを測り，最大径は胴中位にあり13.2cmを測る。底部は凹み気味の平底である。胴部内外を粗い刷毛，底部外面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈す。703は口縁部を欠く資料で，扁平な球形を呈す胴部に小さい平底がつく小形壺である。底径2.6cmを測る。内外ともナデ仕上げである。色調は黄褐色で，胎土は精良である。704は頸部を欠く資料である。内彎する長い口縁部に半球形の胴部がつき，底部は乳房状につき出ている特異な小型壺である。口径7.8cm，復原器高8.3cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明。色調は黄褐色を呈し，胎土は精良である。

甕形土器（705・706）　口縁部付近の破片資料である。「く」の字状に外反する口縁部に長胴な胴部がつく甕であろう。705は復原口径31.7cmを測り，内外を刷毛で仕上げ，端部内外をさらにヨコナデしている。色調は黄褐色を呈す。706は復原口径25.4cmを測る。外面刷毛のあと内外をヨコナデして仕上げている。色調は黄褐色を呈す。

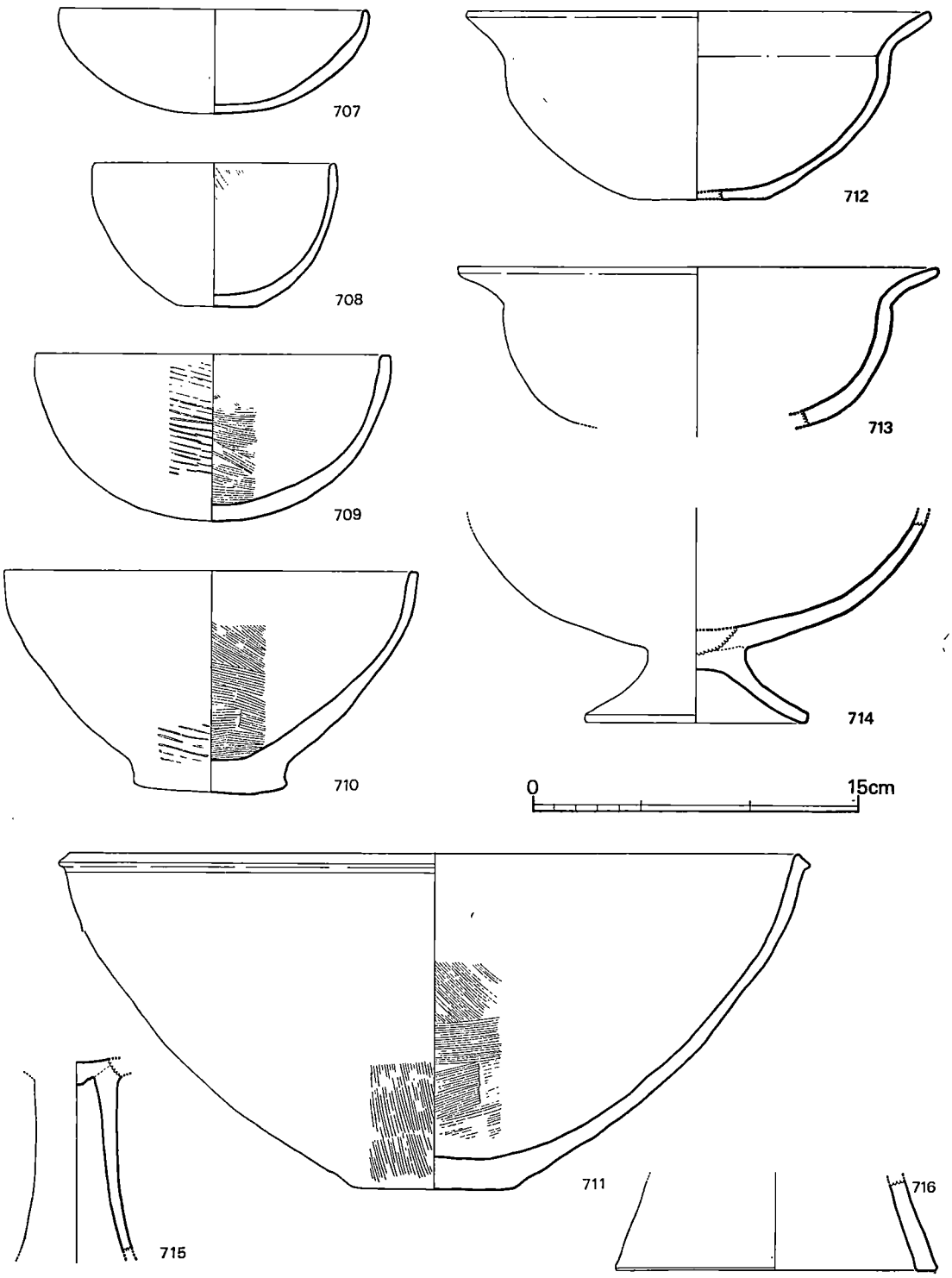
杯形土器（707）　底部を欠く破片資料で，復原口径14cm，器高4.8cmを測る。口縁部が内彎気味に立ち上ったもので，内外ともナデて仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。

椀形土器（708）　口径11.2cm，器高6.6cmを測る平底のものである。調整は口縁部内面の一部に刷毛の痕跡を残す他は，器面の風化が著しく不明である。色調は黄白色を呈す。

鉢形土器（709～712）　大きさ・口縁部の特徴から3種類ある。直口する口縁部をもつもの（709・710），「く」の字状に外反する口縁部をもつもの，口径34.6cmと大形のもの(711）である。709は復原口径16.3cm，器高7.5cmを測る丸底の鉢である。外面粗いタタキ目，内面刷毛，口縁部内外はヨコナデ，底部付近はさらにナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈す。710は口径18.9cm，器高10cmを測る平底のもので，外面粗いタタキ目のあとナデ，内面刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。711は口径34.6cm，器高15.5cmを測る平底の大形の鉢である。内外とも胴上半をナデ，下半を刷毛で仕上げ，口縁端部内外はヨコナデで仕上げている。底部はヘラ削りのままである。712は「く」の字状に外反する口縁部をもつ鉢で，脚付鉢の杯部と同じタイプのもので平底である。口径21.3cm，器高8.5cmを測る。色調は黄褐色を呈す。

脚付鉢形土器（713・714）　「く」字状に外反する鉢に低い脚部がつくものである。713は脚台部を欠く資料で，口径22cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明。色調は黄褐色を呈す。714は口縁部を欠くものである。脚台径10.2cm，脚台高3.3cmを測る。内外ともナデ仕上げで，色調は茶褐色を呈す。

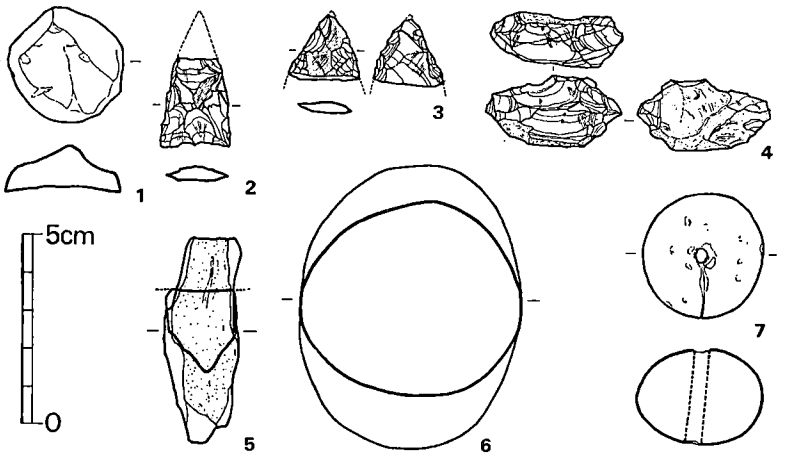
高杯形土器（715）　スマートな柱状部の資料で，内外ともナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈す。



第188図　18号竪穴住居跡出土土器実測図　2 (1/3)

器台形土器（716）　脚台部付近の破片資料で，復原脚台径14.7*cm*を測る。調整は器面が風化しているため不明である。色調は黄褐色を呈す。　（井上）

石器・土製品（第189図）　2は先端部を欠損するが大型の石鏃で荒い剝離を施している。一方3は茎部側を欠き，背面に自然面，主要剝離面を残す。2がサヌカイト，3が黒曜石。4は黒曜石製石核で，原面を打面とし，幅広の剝片を剝出している。打面調整は行なわれていない。5は緻密な砂岩を用いた砥石の小破片。6は長径7.5*cm*，短径5.7*cm*，厚さ5.1*cm*と卵形を呈す磨石で玄武岩製。全体の磨痕は顕著。重さ310*g*。これらの石鏃・石核は出土状態から49で貯蔵穴のものである可能性が強い。7は卵形に近い土製品の中央部短軸方向に一孔をあけたもの。長径3.2*cm*，短径2.4*cm*，重さ21.6*g*。淡褐色を呈し焼成良好。有孔土製品。その他に敲石，剝片が出土している。



第189図　16・18号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）

玉　類（第133図）　水晶製の玉で長さ5.2*mm*，幅3.4*mm*，孔径0.6*mm*。整形時の稜が長軸方向に数条走る。　（木下）

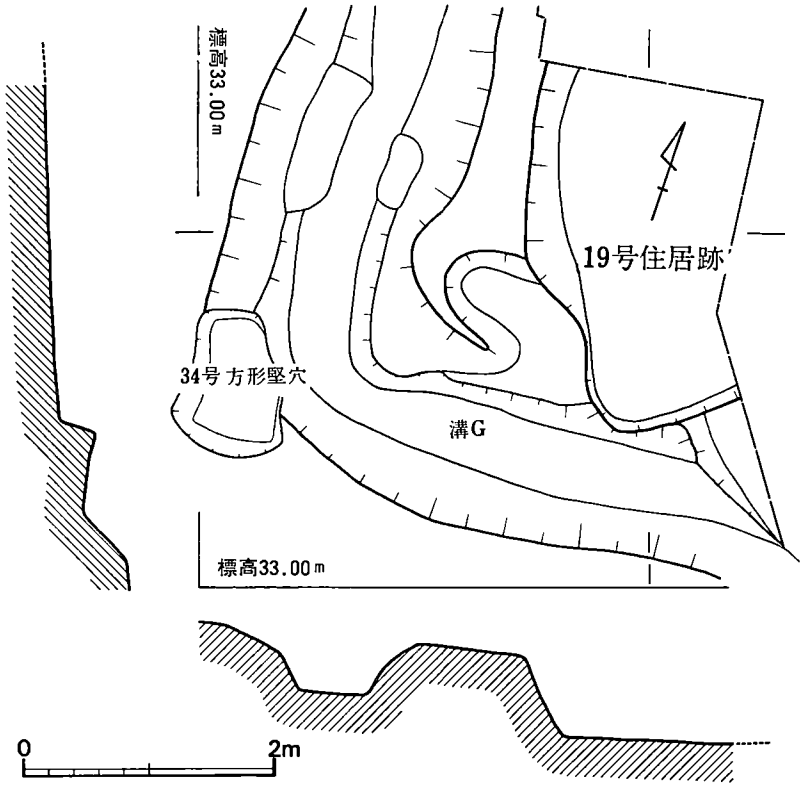
≪19号住居跡（図版76，第190図）　B5区で検出されたもので，その大半は未発掘で，わずか南西隅を調査したのみである。南西隅の形状から方形プランの竪穴住居跡であることが判る。壁高は西壁側で約70*cm*，南壁側で約23*cm*を測る。

遺物は後期終末の破片土器のみで，壺・高杯・器台等で，他に床面から鉄鉇1，覆土中から太型蛤刃石斧1，砥石1が出土している。

出土遺物（図版96，第150・191図）

壺形土器（第191図717）　内傾する複合口縁の壺の口縁部付近の破片資料である。復原口径20.6*cm*を測る。口縁部中位に小さい，焼成前の円孔が1ケ所ある。内外ともヨコナデ仕上げで，淡褐色を呈す。

高杯形土器（第191図718～720）　718・719は口縁部付近の720は脚台部破片資料である。718は復原口径33.4*cm*を測る大形の高杯で，口縁部の外反は大きい。杯底部の屈折は明瞭である。調整は器面の風化が著しく不明。色調は淡橙褐色を呈す。719は復原口径32*cm*を測り，口



第190図　19号竪穴住居跡実測図 (1/60)

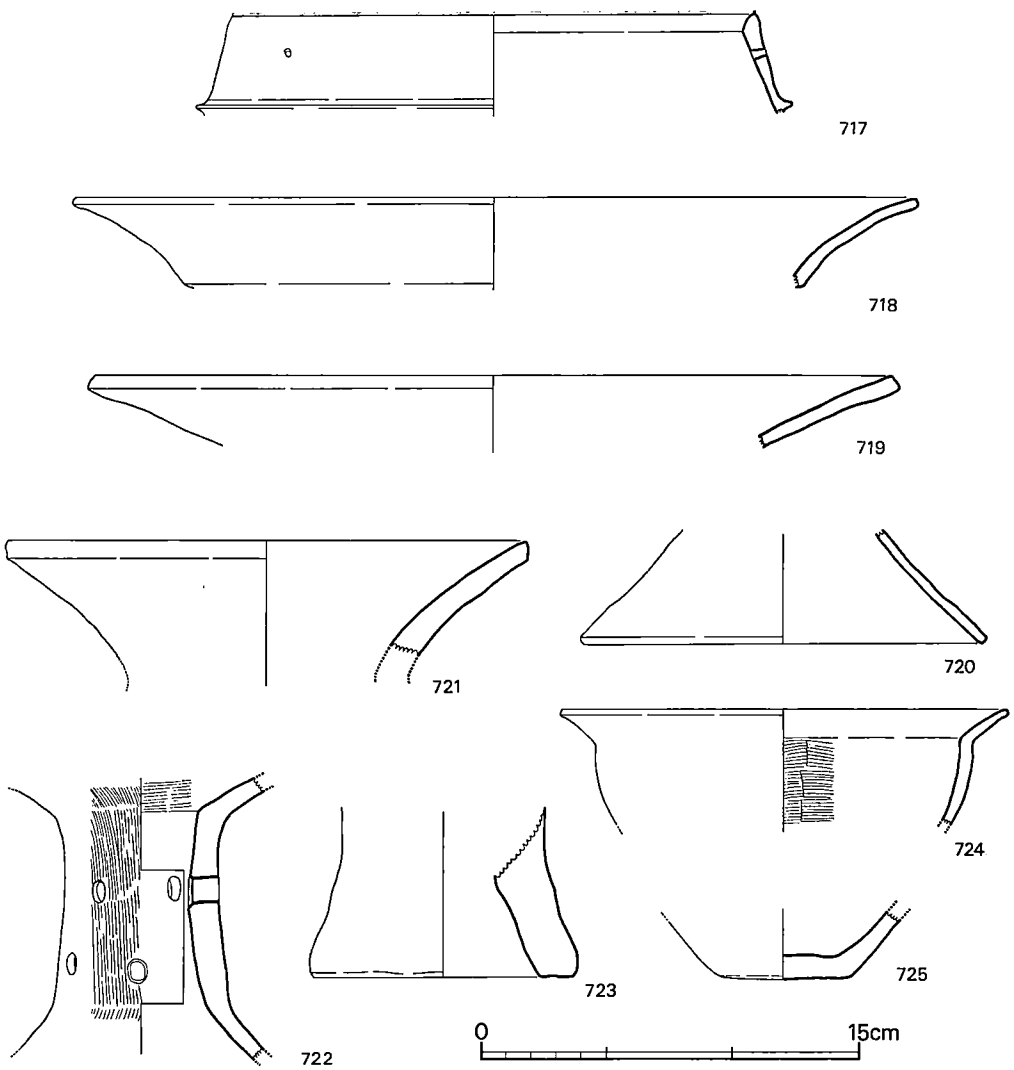
縁部の外反は718と比べ，さらに強い。内外ともヨコナデで仕上げている。色調は橙褐色を呈し，胎土・焼成とも良好である。720は復原底径16cmを測るラッパ状の脚台部である。調整は器面風化のため不明。色調は橙褐色を呈す。

器台形土器（第191図721・722）　721は上・下に開く器台の口縁部の破片資料である。復原口径20.8cmを測る。内外とも風化が著しく明確でないが，内面一部に刷毛の痕跡を残している。色調は暗橙褐色を呈す。722は上・下端を欠く柱状部の資料で，上下に開く器台である。柱状部には6個の円孔が二段に穿たれている。穿孔は焼成前である。柱状部外面刷毛，内面ナデ，上端口縁部内面刷毛，下端内外はナデで仕上げている。色調は褐色を呈す。

支脚形土器（第191図723）　脚台部の資料で，台部径10.6cmを測る。器肉は厚く，内外には多くの指頭圧痕を残す。色調は淡褐色である。

鉄　鉇（第150図5）　刃部を欠く資料である。現存長9cm，中央部幅1.05cm，断面は三日月形を呈し，厚さ2mmを測る。柄部裏の凹面には木柄の木質痕が残り，凸面には桜皮様の巻物が残存している。

≪20号住居跡（図版76・77，第192図）　47号袋状竪穴・22号住居跡・2号土壙と重複して



第191図　19・20号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

発見された。東西約4 *m*×南北約4 *m*のほぼ正方形を呈する竪穴住居跡である。炉跡はほぼ中央部にある。柱穴と思われるピットはＰ１・Ｐ２の２個あるが，あまりにも炉跡に近接するので疑問は残る。周溝はほぼ全周するが，一部南壁中央部を欠失する。周溝内には小さなピットが並び，特に，北壁側は顕著である。また，南側床面には浅い不整形の凹みがある。床面は堅固である。

遺物としては壺・鉢・支脚等の破片資料数点のみである。時期は後期終末である。

出土遺物（図版103，第191・194図）

鉢器土器（第191図724）　「く」字状に外反する口縁部をもつ鉢である。しかし，底部を欠

くため不明であるが，脚付鉢かもしれない。外面ナデ，内面刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。

底　部（725）　丸味をもった平底の資料である。内外ともナデて仕上げた黄褐色を呈す土器である。壺の底部であろう。（井上）

石　器（第194図）　1は長方形板状砥石で8.2cmと幅広の研砥面は使用耗りが著しく厚さは縁部で2.0cm，中央部で1.4cm。研砥面上には右上から左下にかけての条線がみられる。粘板岩製の優品。2は泥岩製で全面丁寧に磨かれている。異形の磨石か。両者とも住居跡南西側ピット内より出土した。他に砥石の小破片が出土。（木下）

≪21号住居跡（図版77，第193図）　24号・50号袋状竪穴を切って，26号甕棺・17号土壙墓・溝状遺構に切られて発見された。東西約3.80m×南北約3.20mを測り，西辺にくらべ東辺が若干短かい長方形竪穴住居跡である。壁高は2～7.5cmと浅く，上面がかなり削平されている。柱穴・炉跡等は不明である。

遺物は若干の土器片と扁平片刃石斧1のみで，時期は明確でないが，遺構の切り合い関係から考えて中期初頭から前半頃と思われる。（井上）

出土遺物（図版101，第194図）

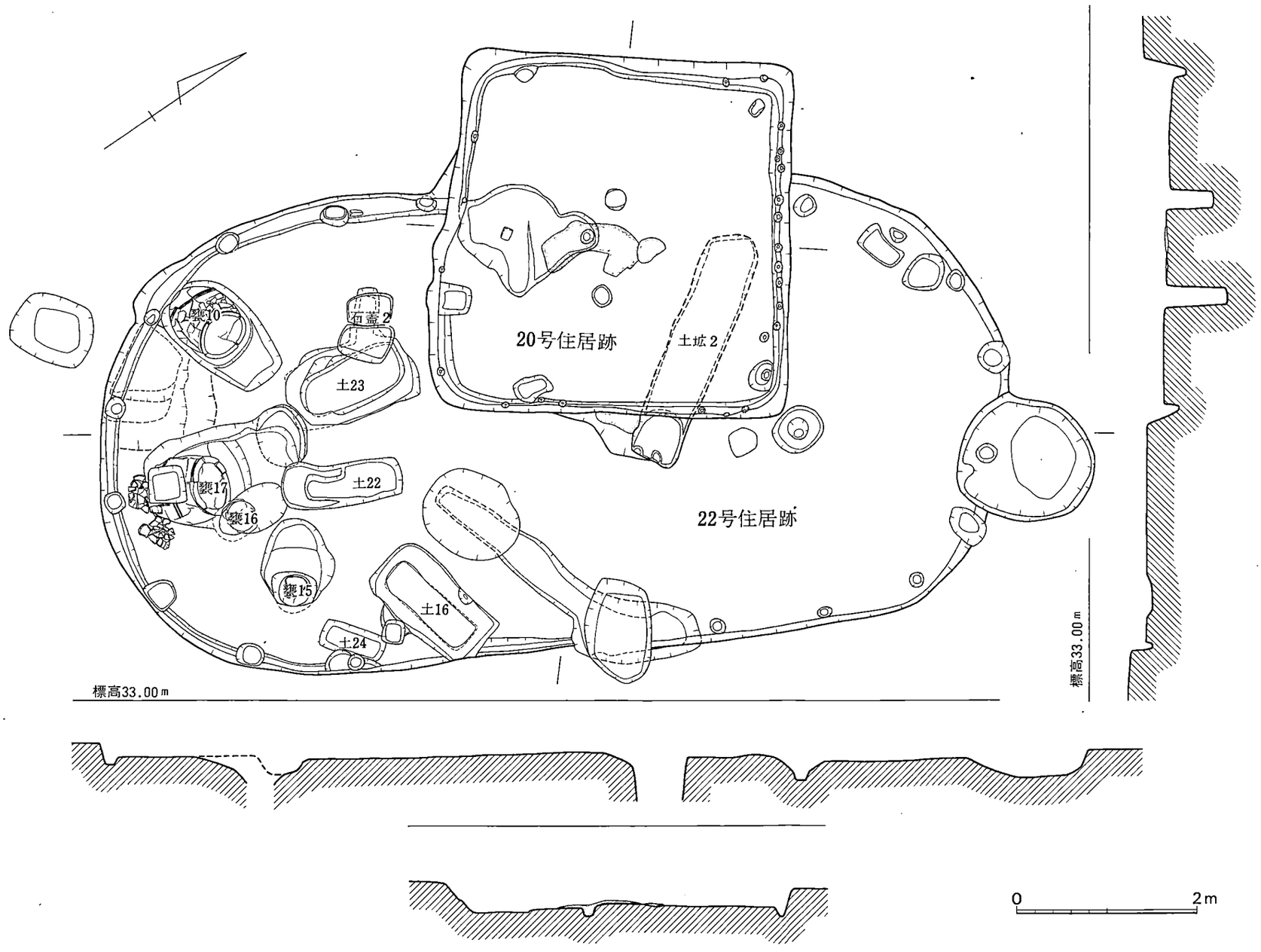
石　器（第194図）　長さに対して厚みのある扁平片刃石斧の完形品で長さ5.15cm，幅21.5cm，厚さ9.5cm，重さ23.5gを測る。刃部は鈍く，頭部には着柄時による剝落がみられる。泥岩に近い頁岩製。覆土内上層より出土。（木下）

≪22号住居跡（図版78・79，第192図）　20号住居跡・2号土壙・10号・15号・16号・17号甕棺墓・16号・22号・23号土壙墓，2号石蓋土壙墓，に切られた状態で検出された。東西5.30m×南北10.15mの長楕円形竪穴住居跡である。壁高は北壁で約8cm，南壁で約18cm，東壁で約13cm，西壁で約9cmを測る。上面はかなり削平されているものと思われる。周溝は南半分にめぐるが，北半にはみられない。周溝内には1～1.20m間で小ピットが穿たれている。壁材にかかわる施設であろう。柱穴と思われるピットはP1・P2の2個あるが，住居の規模に比して浅く疑問も残る。炉跡はほぼ中央部とP2に近接した所の2ケ所ある。床面は極めて堅固である。

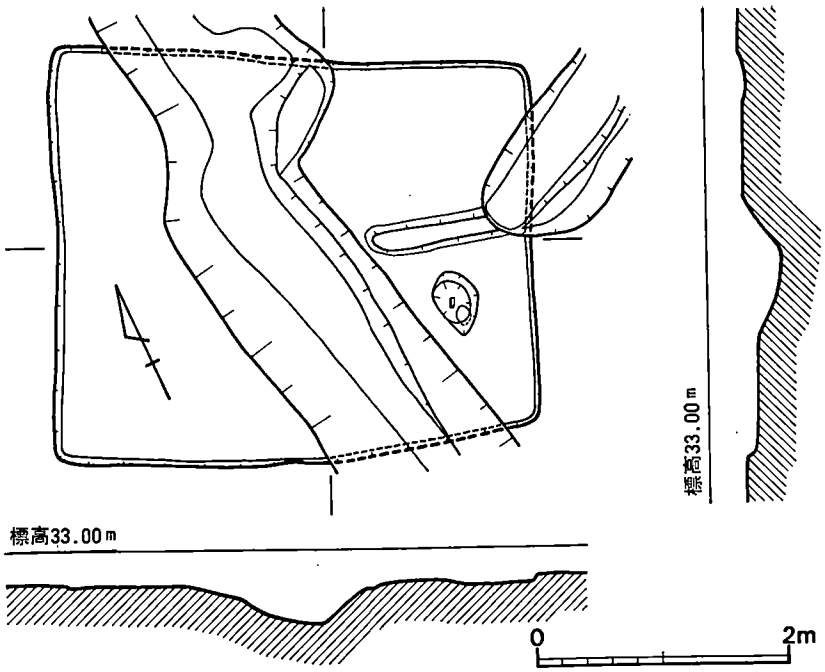
遺物は南壁側中央部床面から出土した甕と数片の土器のみで貧弱である。時期は中期前半である。

出土遺物（図版97，第195図）

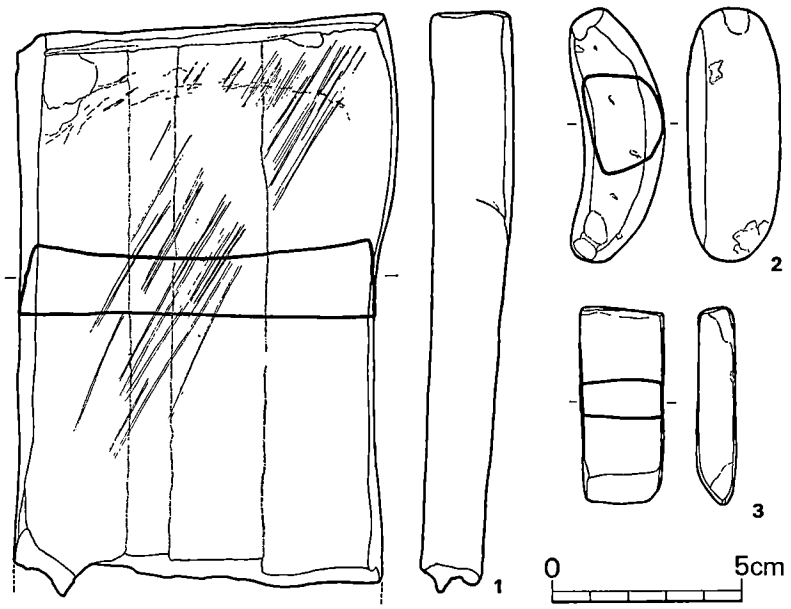
壺形土器（第195図726・727）　726は口縁部付近の破片資料である。口縁端部内面を肥厚させた壺で，上面は平坦である。内外ともヨコナデで仕上げた茶褐色を呈す土器である。復原口径25cmを測る。729は底部の破片資料である。底面が凹む平底で，中央部の器肉は薄い。内外ともナデて仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。復原底径8.9cmを測る。



第192図　20・22号竪穴住居跡実測図 (1/60)

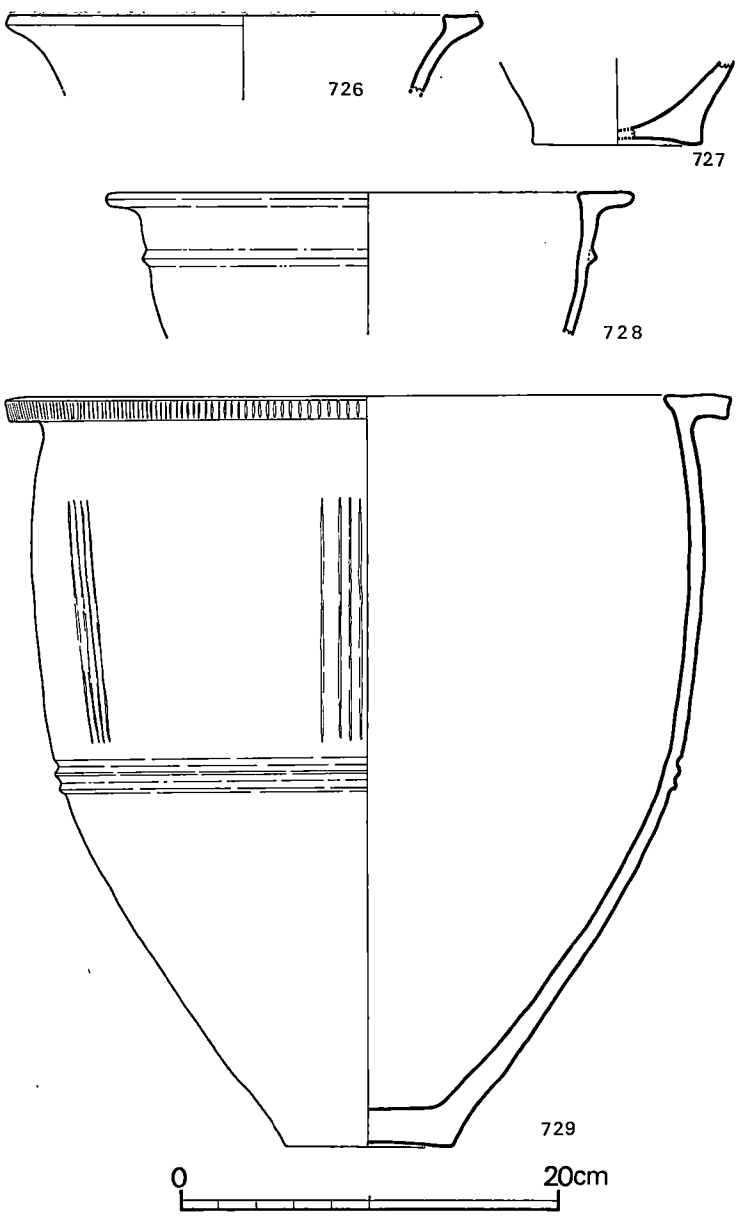


第193図　21号竪穴住居跡実測図（1/60）



第194図　20・21号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

甕形土器(第195図728・729)　728は口縁部付近の破片資料で，復原口径27.6cmを測る。内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁の甕で，口縁下に1条の三角凸帯を付している。内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面淡赤褐色，内面淡褐色を呈す。焼成良好。729は口径38cm，器高38.4cmを測る大形の甕である。内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁の甕で，上面は平坦で，端部がわずかにたれる。端部外面にはヘラによる刻目が施されている。胴部中位には細い2条の三角凸帯が付され，口縁部と凸帯の間には縦位のヘラ描き沈線が描かれている。底部は凹み気味の平底である。調整は器面の風化が著しく不明。色調は黄褐色を呈す。



第195図　22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

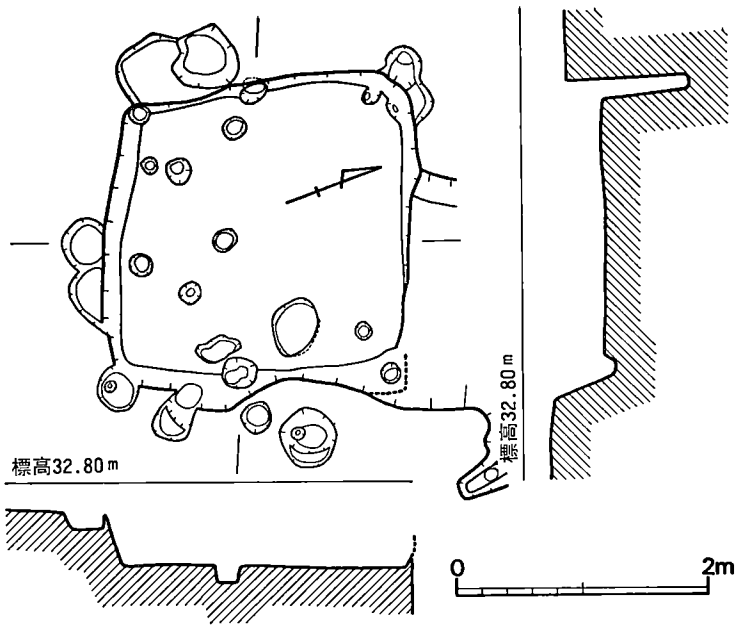
≪23号住居跡（図版79，第196図）　35号袋状竪穴を切った状態で検出された。住居内には多数のピットがあるが，柱穴と思われるピットは不明である。周溝・炉跡もなく，床面もさほどたたきしめられていない。

遺物は後期終末を思わせる土器小片若干と石核1，砥石1が出土したのみである。　（井上）

出土遺物（図版101，第197図）

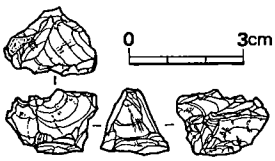
石　器（第197図）

石核の他に泥岩製の砥石原材と思われるものが出土している。石核は黒曜石製で，ほとんど原面を残さないまでに剝出された小形の残核。　（木下）



第196図　23号竪穴住居跡実測図（1/60）

≪**24号住居跡**（図版80，第198図）　17号住居跡の床面下から検出された東西5.80*m*×南北3.85*m*を測る長方形竪穴住居跡である。壁高は北壁で約3.5*cm*，南壁で約10.3*cm*，東壁で約5.8*cm*，西壁で約4*cm*と浅い。住居内には多数のピットがみられるが柱穴と思われるピットは不明である。炉跡・周溝等はない。床面はさほどたたきしめられていない。



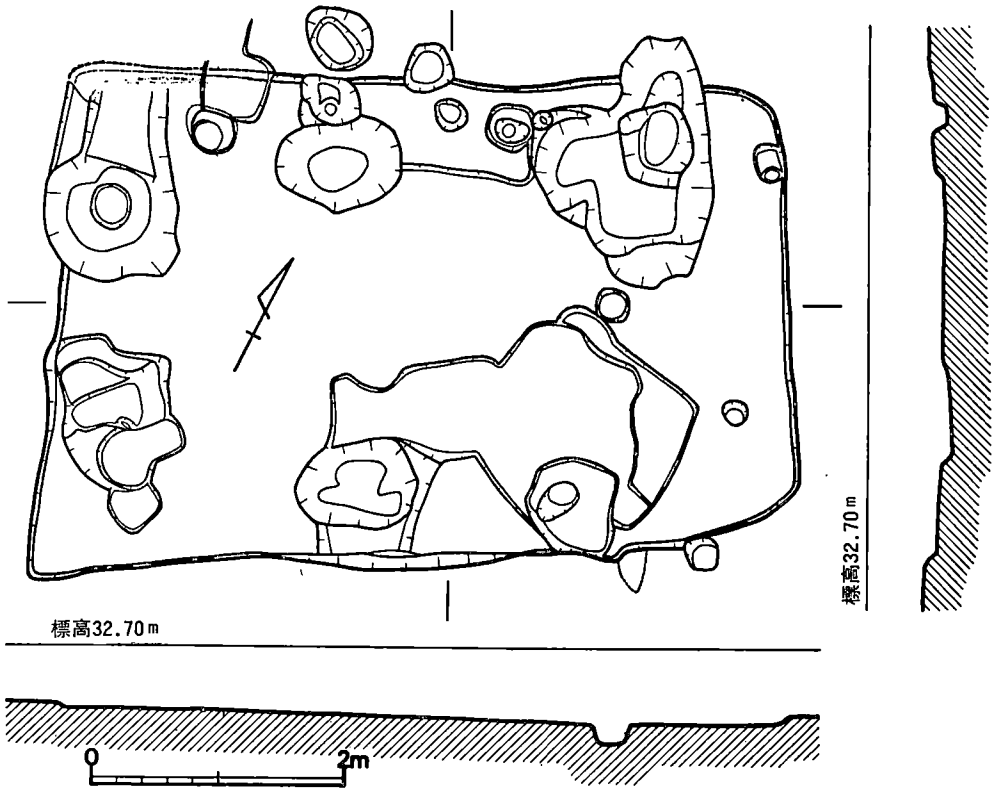
第197図　23号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

遺物は土器片若干と磨製石斧1，打製石鏃6，スクレイパー4，凹石1が出土した。時期は前期末である。

出土遺物（図版103，第199・200図）

甕形土器（第199図730～733）　730～732は「く」字状に外反する甕で，口縁端部外面に刻目を付す730と，有しない731・732がある。732は復原口径20.3*cm*を測る胴上半の破片資料である。調整は器面の風化が著しく不明。色調は淡褐色を呈す。733は底部の破片資料で，復原底径7*cm*を測る。内外ともナデて仕上げた外面赤褐色，内面淡褐色を呈す土器である。（井上）

石　器（第200図）　1は蛇紋岩製の両刃磨製石斧の完形品で前時代的な形態をもつ。全面非常に丁寧な研磨で仕上げられ，刃部は鋭い，また，頭部も鋭く尖るのが特色である。長さ11.0*cm*，幅2.59*cm*，厚さ1.52*cm*，重さ74.2*g*。刃部には刃こぼれが観察される。2～4は打製石鏃。3は細身で，4は脚部の長い大形品。長さ3.24*cm*，幅1.98*cm*，厚さ0.4*cm*，重さ1.6*g*。



第198図　24号竪穴住居跡実測図（1/60）

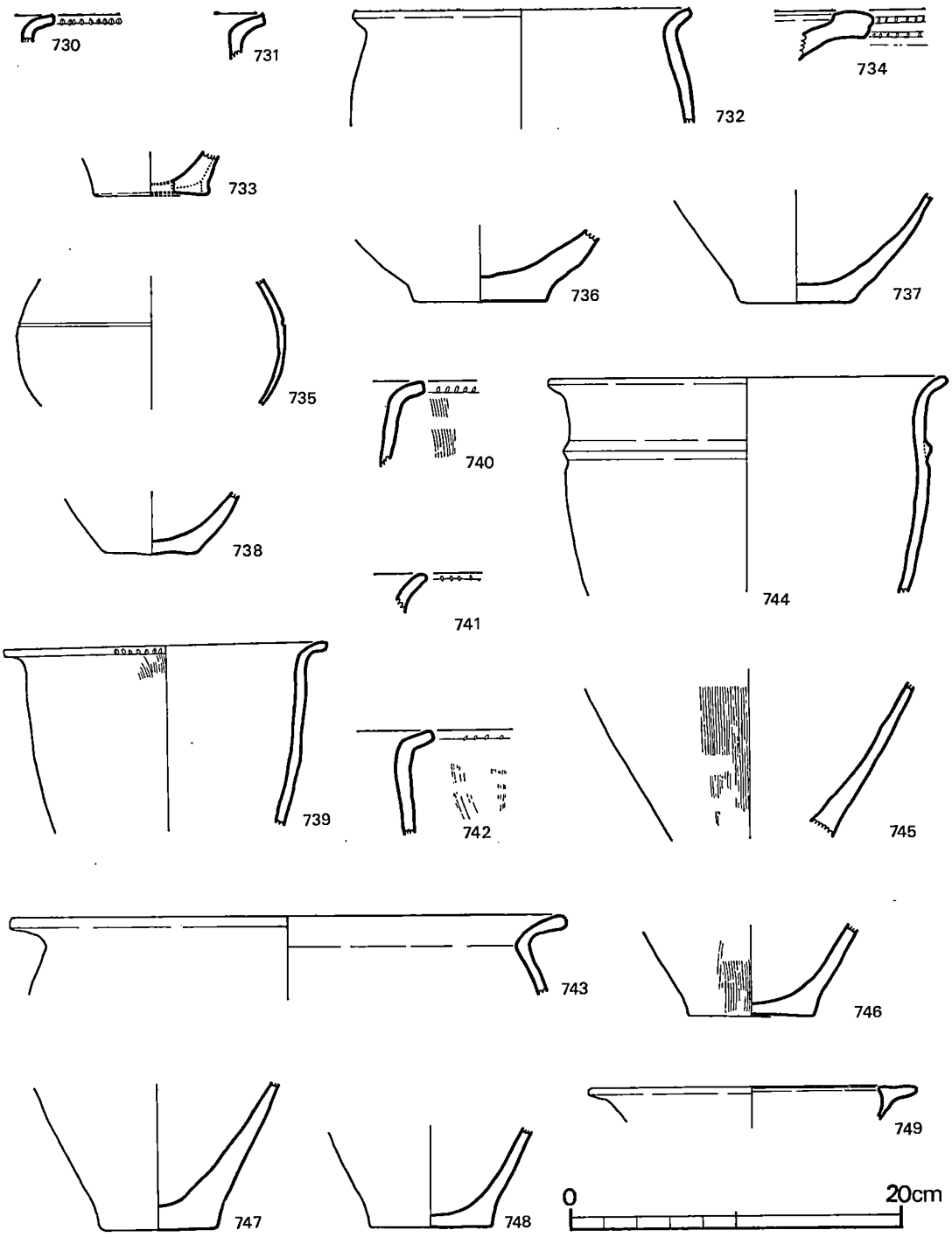
いずれもサヌカイト製。5はサヌカイト製の縦長剝片を利用し，6は幅広の剝片の二辺に刃部をもつ削器。長さ4.9cm，幅4.5cm，厚さ1.5cm，重さ35.9g。7は片面に原面を残す縦長剝片の右縁に刃遣し状に近い加工を加えたもので削器。8はいわゆるつまみ形石器で，鋭利な片縁に抉状の二次加工を加えている。両者とも黒曜石製。9は花崗岩製くぼみ石の完形品。長円に近い礫の中央に2cm前後の凹みをもつ。この凹みは磨られたと言うより，敲かれて生じたものの可能性が強い。一縁辺は磨かれ平滑である。重さ602g。その他に石鏃3と45号袋状竪穴出土の太型蛤刃石斧（第112図2）と接合した胴部破片が出土している。（木下）

≪**25号住居跡**（図版80，第201図）　B8区から発見されたもので，南半は開墾時の削平により欠失している。東西約7.60m，南北はかならずしも明確でないが，良く残る西壁から判断して5.30mをさほど，のびないものと思われる。周溝・炉跡もみられず，柱穴と思われるピットもない。床面はさほどたたきしめられていない。

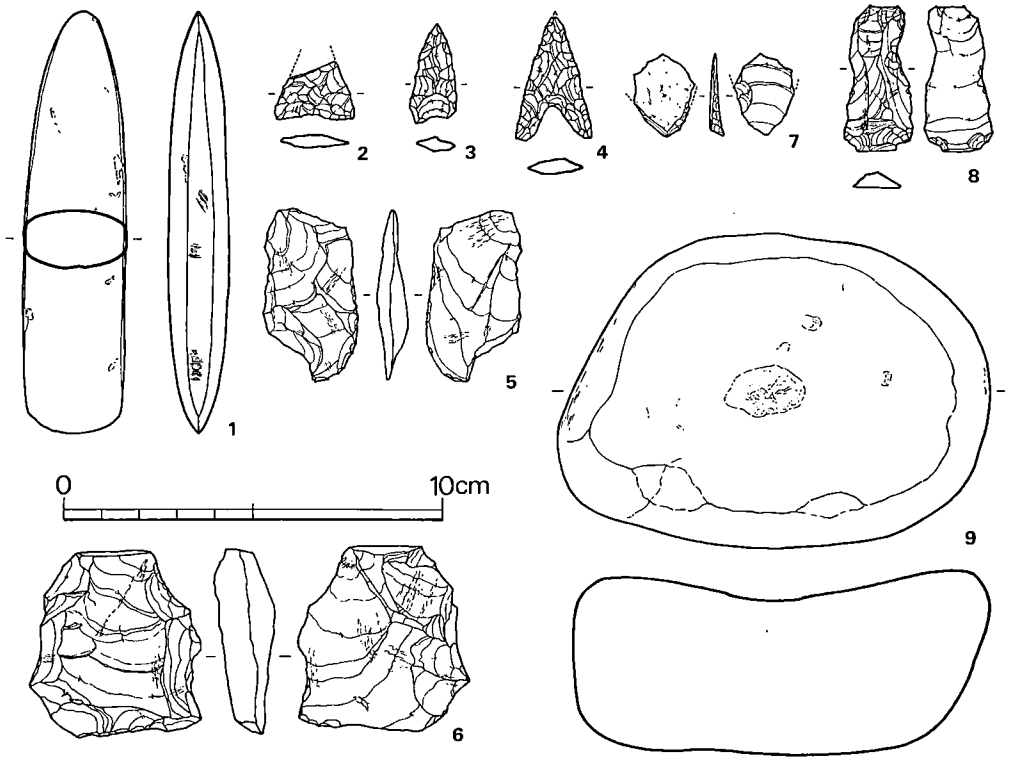
遺物は壺・甕破片多数と太型蛤刃石斧1，砥石1が出土した。時期は前期末である。

出土遺物（第199・202図）

壺形土器（第199図734～738）　734は大形壺の口縁部の破片である。口縁端部内面を肥厚さ



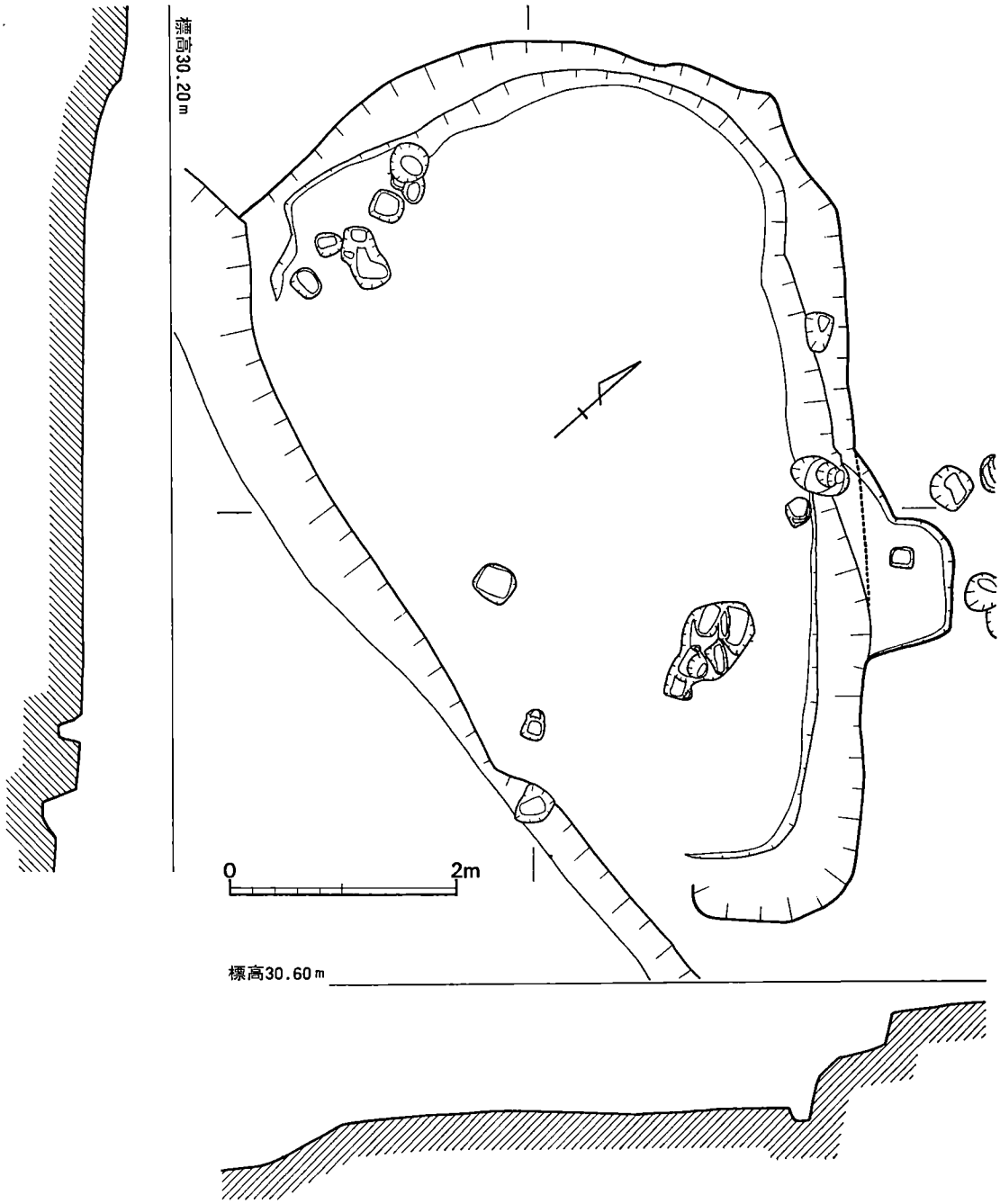
第199図　24・25号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第200図　24号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2)

せ，端部外面下端に刻目を付している。色調は淡褐色を呈す。735は小形壺の胴部の資料である。器面は風化が著しく明らかでないが，肩部にヘラ描きの羽状文と1条の沈線がめぐっているようだ。色調は淡橙褐色を呈す。736～738は底部付近の資料で，底径は736が8㎝，737が6.8㎝，738が5.5㎝を測る。中形・小形壺の底部であろう。内外ともナデ仕上げである。色調は736が淡赤褐色，737が淡褐色，738が外面淡黒色，内面淡褐色を呈す。

甕形土器（第199図739～748）　口縁部に「く」字状に外反するもの（739～743）と「く」字状の口縁部と口縁下に1条の凸帯を付したもの（744）がある。「く」字状に外反するものの中でも刻目をもつ（739～742）と有しない743とがある。739は胴上半の資料で，口径19.5㎝を測る。口縁部の屈折は強く長い。内外とも器面の風化が著しく明らかでないが，外面一部に刷毛の痕跡を残している。色調は外面暗褐色，内面淡橙褐色を呈す。743は口縁部付近の破片資料で，復原口径33.3㎝を測る。いわゆる「く」字状口縁で，739とは若干異なり，胴部はふくらみをもつタイプの甕である。内外ともヨコナデで仕上げた淡褐色を呈す土器である。744は「く」の字状の口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕の胴上半の資料である。口径23.8㎝を測る。内外とも器面の風化がはげしく，口縁部・凸帯端部の刻目の有無は不明である。も

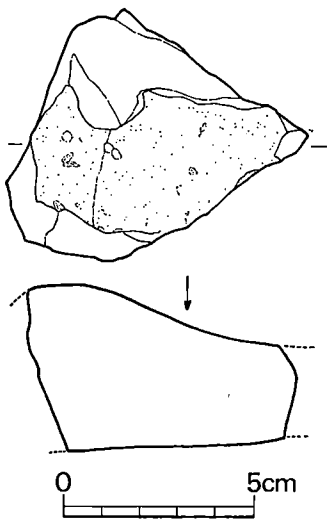


第201図　25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ちろん調整も判らない。色調は外面灰褐色，内面淡褐色を呈す。745は胴下半の資料である。外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈し，焼成は良好である。746～748は底部付近の資料で，底径は746が7.5cm，747が7cm，748が7.4cmを測る。底面が凹み気味の平底である。調整は746が外面刷毛，内面ナデで仕上げている他は器面の風化が著しく不明である。色調は746・747が赤褐色，748が橙褐色を呈す。

高杯形土器（第199図749）　口縁部付近の破片資料で，復原口径19.7cmを測る。口縁部上面は平坦で，中央がわずかに凹み，ヨコナデにより内外につまみだされた口縁部を有している。胎土は精良で，色調は淡褐色を呈す。　（井上）

石　器（第202図）　砂岩系の砥石破片で，かなり使用されている。ピット3より出土した。　（木下）



第202図　25号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

(3) 方形竪穴遺構

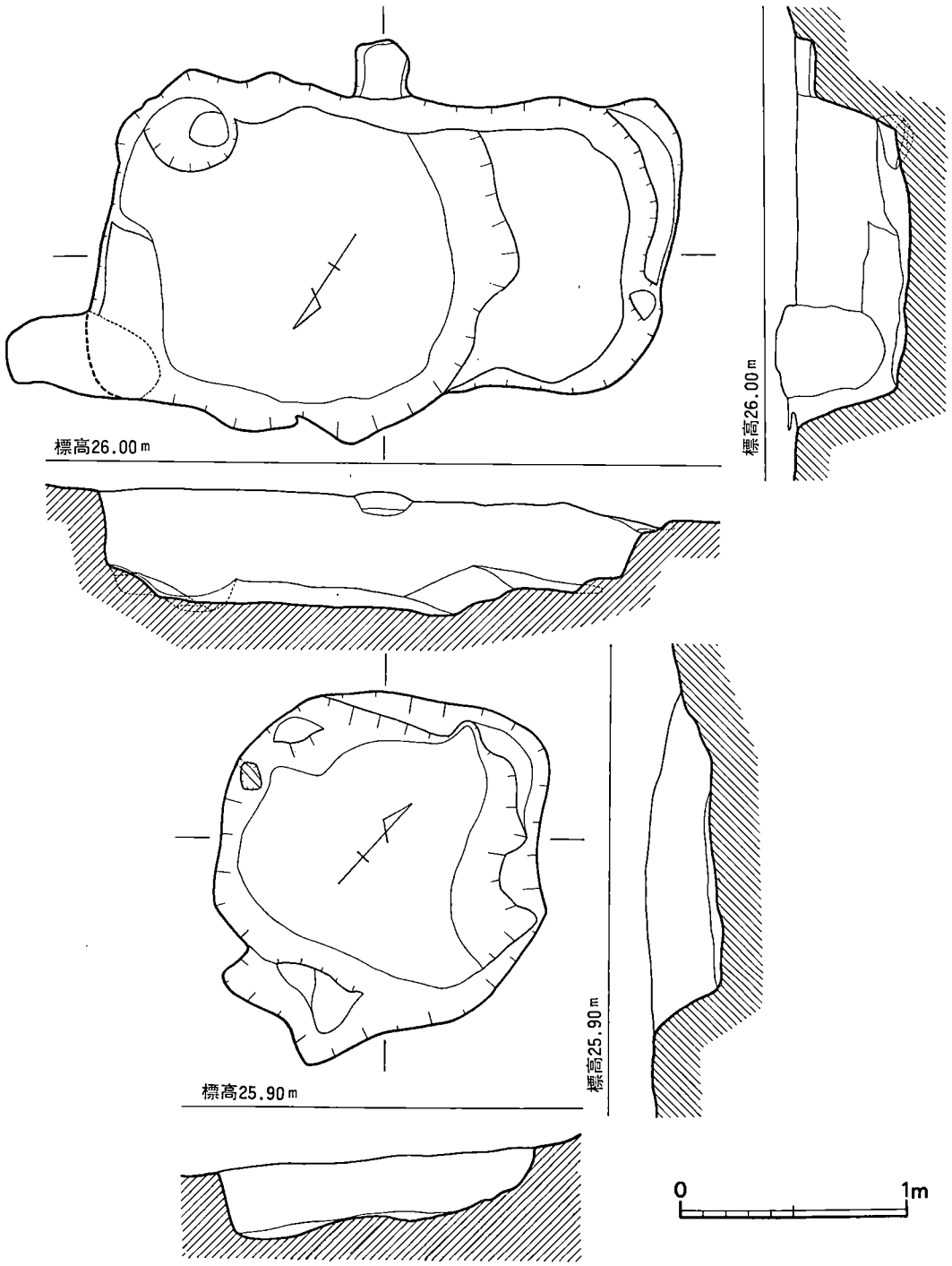
≪1号方形竪穴（図版81，第263図）　G7区で検出されたもので，北東隅を8号甕棺で切られている。東西約2.25m×南北約1.60m（最大径）を測る長方形竪穴で，西側にテラスを形成する。深さは西側で約35cm，東側で約50cmを測る。

遺物はその大半が床面よりわずかに浮いて出土した。完形の壺1・甕2と壺・甕・器台等の破片多数，打製石鏃1が検出された。時期は中期前葉である。

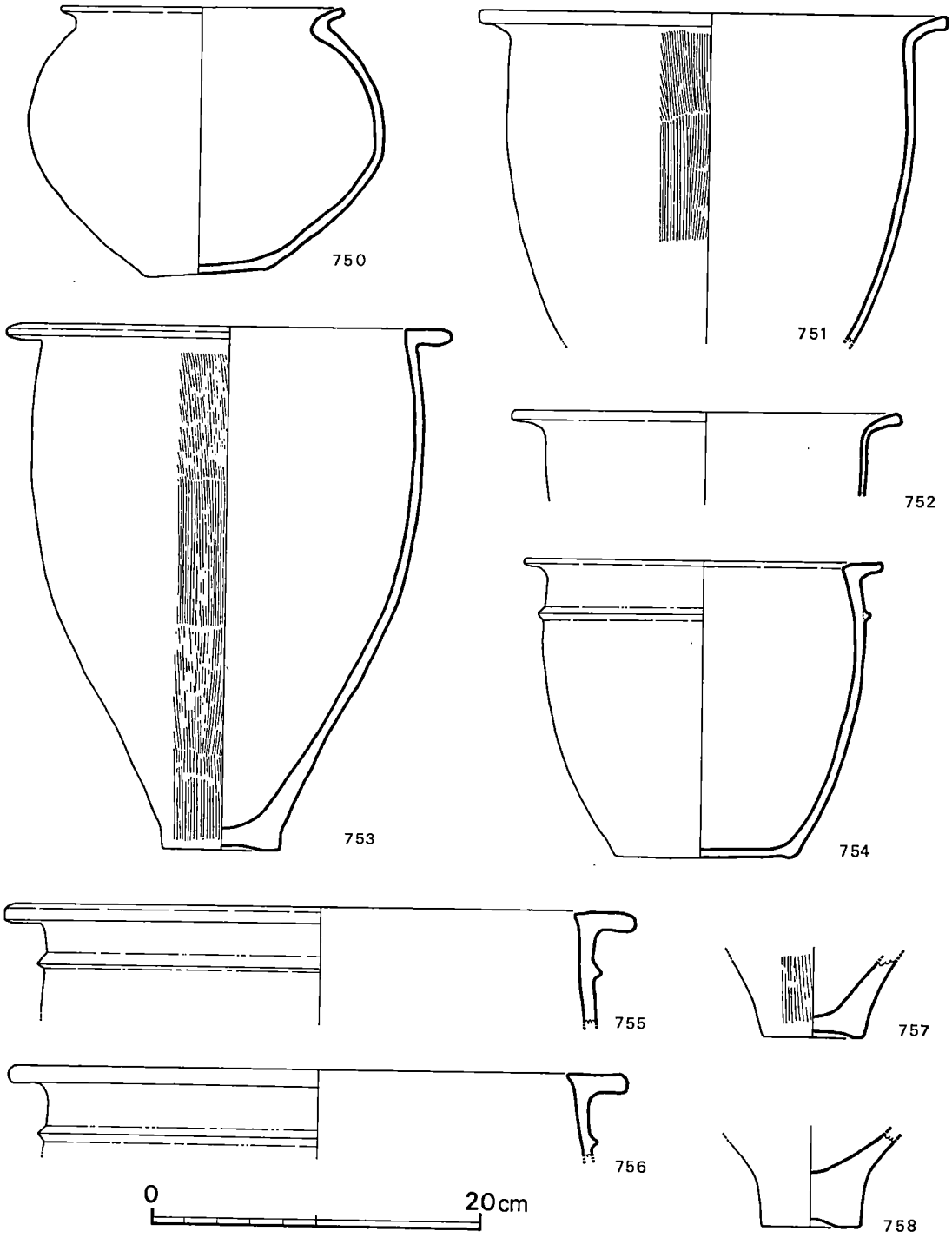
出土遺物（図版97・98，第204～206図）

壺形土器（第204図750）　広口の短頸壺である。「く」字状に強く外反する短かい口縁部に扁平な球形を呈す胴部がつくもので，底部は平底である。口径17cm，器高15.7cmを測り，胴部内外ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は明灰色を呈し，焼成良好である。

甕形土器（第204・205図751～760）　751・752がいわゆる如意形状口縁の甕である。751は胴下半を欠く資料で，口径28.2cmを測る。胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色。752は口縁部付近の資料で，口径23.5cmを測る。体部の器壁は3mmと薄いのに対して，口縁端部は厚く肥厚している。器面と内外とも風化が著しく調整は不明である。色調は黄褐色を呈す。753・754はいわゆる逆L字状口縁の甕である。753は口径26.7cm，器高30.8cmを測る。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げたスマートな甕である。底部は中央が凹む平底である。色調は暗茶褐色を呈す。754は口縁部上面がわず

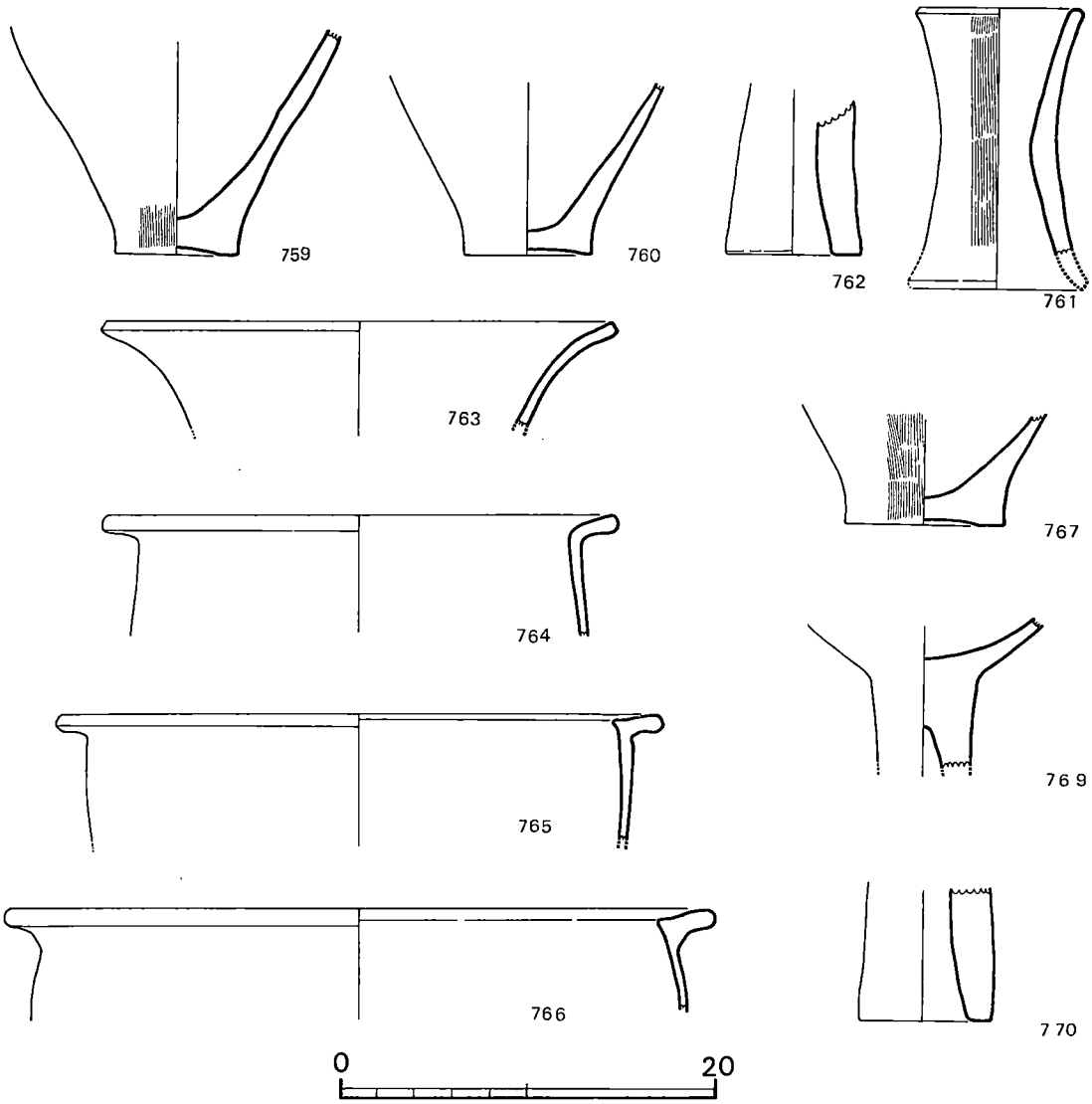


第203図　1・2号方形竪穴遺構実測図（1/30）



第204図　1号方形竪穴遺構出土土器実測図 (1/4)

かに内傾する。逆L字状口縁下に1条の三角凸帯を付している。底部は口径に比べ大きい平底で，器高も低く，胴もあまり張らないずんぐりした口径21.8cm，器高17.9cm，底径11cmを測る。外面は器面の風化がはげしく不明であるが，口縁部内外はヨコナデ，内面で仕上げている。色調は灰褐色を呈す。この種の甕は近年注意されてきたもので，小郡市花聳遺跡など各地で発見されている(註1)。755・756は内面にわずかにつき出した逆L字状口縁と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕である。755・756とも口縁部付近の破片資料で，復原口径755が37.9cm，



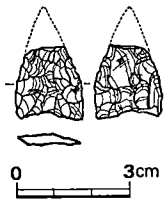
第205図　1・2号方形竪穴遺構出土土器実測図 (1/4)

756が37.2㎝を測る。体部内外ともナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は755が褐色，756が外面暗黄褐色，内面茶褐色を呈す。757～760は底部の資料で，底面が凹む平底である。胴部への移行が緩やかなもの（757・759・760）と立ち気味に移行し，底面の器肉が厚いもの（758）がある。調整は757・759が外面刷毛，内面ナデ，758が内外ともナデ仕上げである。760は器面風化のため不明。色調は757が暗黄褐色，758が外面黄褐色，内面茶褐色，759・760は黄褐色である。

器台形土器（第205図761）　上下に開く筒状の器台で，脚台端部を欠いている。内面中位に屈折面をもち上下に開いている。外面刷毛，内面ナデて仕上げた茶褐色を呈す土器である。

支脚形土器（第205図762）　上端を欠く脚台部の資料で，筒状をなすずんぐりした器肉の厚い手捏的な土器である。内外ともナデて仕上げ，指頭圧痕を顕著に残している。色調は淡黄褐色，脚台径7.2㎝。　（井上）

石　器（第206図）　先端部を欠損する黒曜石製の石鏃。凹基無茎式で不定形な剝片を利用している。　（木下）



第206図　1号方形竪穴遺構出土石器実測図（1/2）

≪2号方形竪穴（図版82，第203図）　1号方形竪穴の東側に近接して検出された竪穴である。東西約1.40m×南北約1.50m，深さ20～30㎝を測る丸味をもった方形竪穴遺構である。床面は北から南に若干傾斜をもつ。

遺物はほぼ1個体分の甕棺と甕・器台・高杯等の破片多数が一括した状態で出土した。時期は中期前葉である。

出土遺物（図版98，第205～207図）

壺形土器（第205図763）　ラッパ状に大きく外反した単口縁の壺の口縁部付近の破片資料である。復原口径27.2㎝を測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は暗茶褐色。

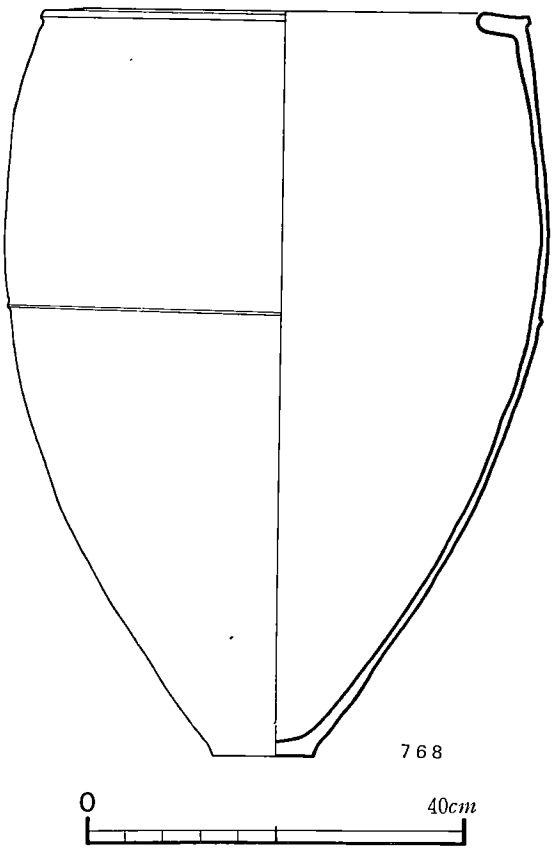
甕形土器（第205図764～767，207図768）　いわゆる如意形口縁の甕（764）と内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁の甕（765・766）がある。764～766は口縁部付近，767は底部の資料である。764は口径27.2㎝を測る。口縁部内外をヨコナデ，体部内外をナデて仕上げている。強く外反した口縁部は端部で肥厚する特色をもっている。色調は外面黄褐色，内面褐色を呈す。765は口径32㎝を測る。口縁部上面は平坦でわずかに内傾し，内面のヨコナデによるつまみ出しは小さく細い。また，外面端部の肥厚も強い。体部内外ナデ，口縁部内外ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色。766は口径37.4㎝を測る。口縁部上面は平坦で，765と比べより内傾する。調整は器面の風化がはげしく不明。色調は暗黄褐色。767は底径8.4㎝を測る底面中央が凹む平底である。外面刷毛，内面ナデて仕上げた暗黄褐色を呈す土器である。768はいわゆる甕棺であり，口径52㎝，器高77.8㎝を測る。口縁部はT字形で，内側への張り出しが強く外側は極めて弱い。胴部の凸帯は1条で，極めて細く低い。内外ともナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈す。

高杯形土器（第205図769）　杯部下半から脚部上半にかけての資料である。脚部は中空の柱状をなすもので，杯部の開きは大きいものである。調整は器面の風化が著しく不明。色調は黄褐色を呈す。

支脚形土器（第205図770）　上半を欠く筒状のもので，器内は厚いずんぐりした手捏的な土器である。内外ともナデて仕上げ，指頭圧痕を各所に残している。色調は黄褐色。脚台径7 *cm*。

≪3号方形竪穴（第208図）　E 7区の崖ふちで検出されたため，南壁上面の一部を欠失している。最大径をとると東西約2.80*m*×南北約1.35*m*，最も深い所で1 *m*を測る不整長方形竪穴である。竪穴内には，南側を除く中段に幅約15～50*cm*のテラスを有す。

遺物は弥生式土器細片が若干のため時期不明である。



第207図　2号方形竪穴遺構出土土器実測図（1/8）

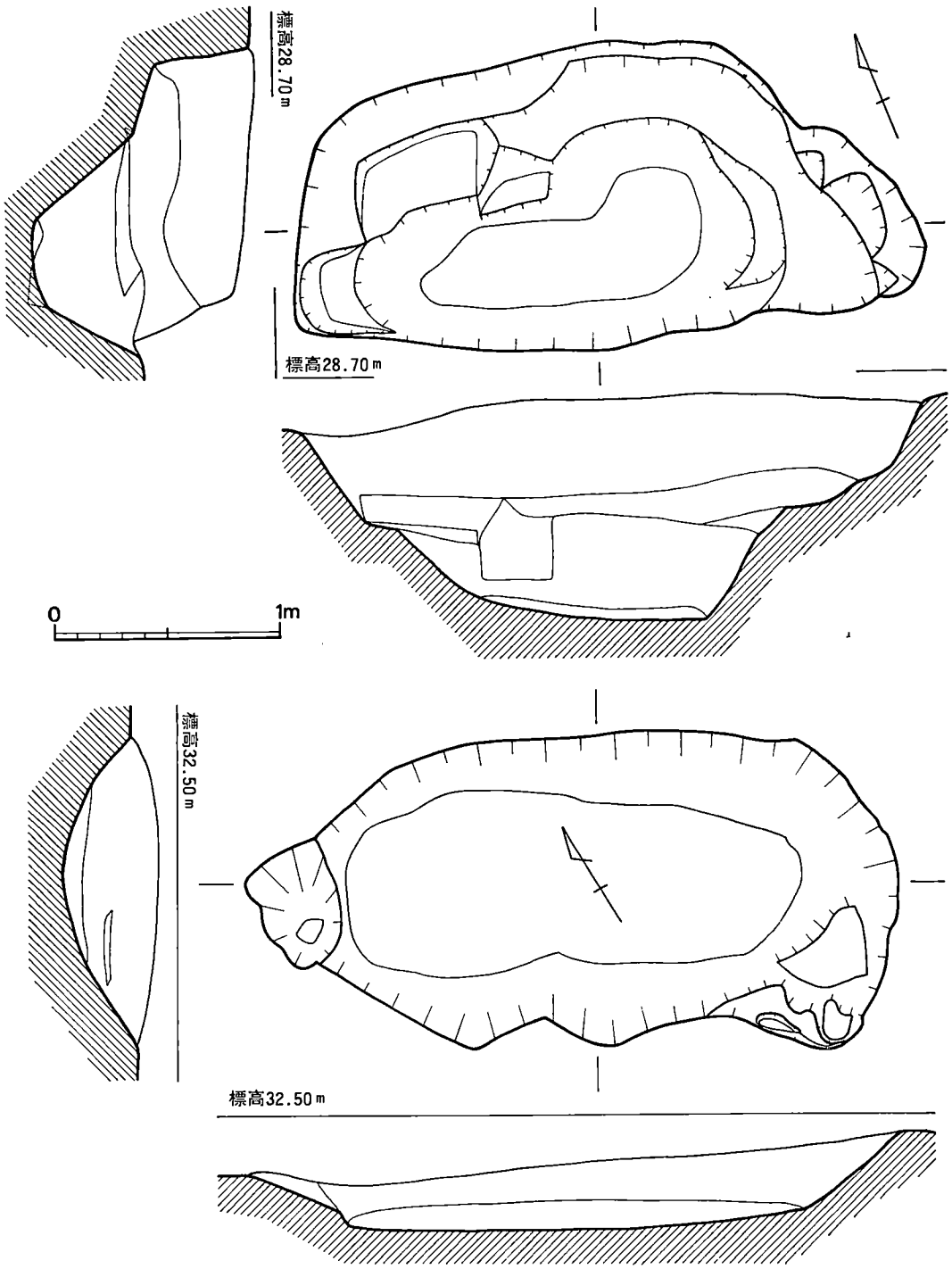
≪4号方形竪穴（第208図）　D 4区で検出された，東西約2.65*m*×南北約1.40*m*，深さ約30*cm*を測る長楕円形状を呈す方形竪穴である。南西隅には一部テラスを有し，西壁には新しいピットがある。断面は東西が緩かなU字状を呈し南北は逆台形状を呈す。

遺物は中期前葉の壺・甕・器台等の破片多数が出土した。

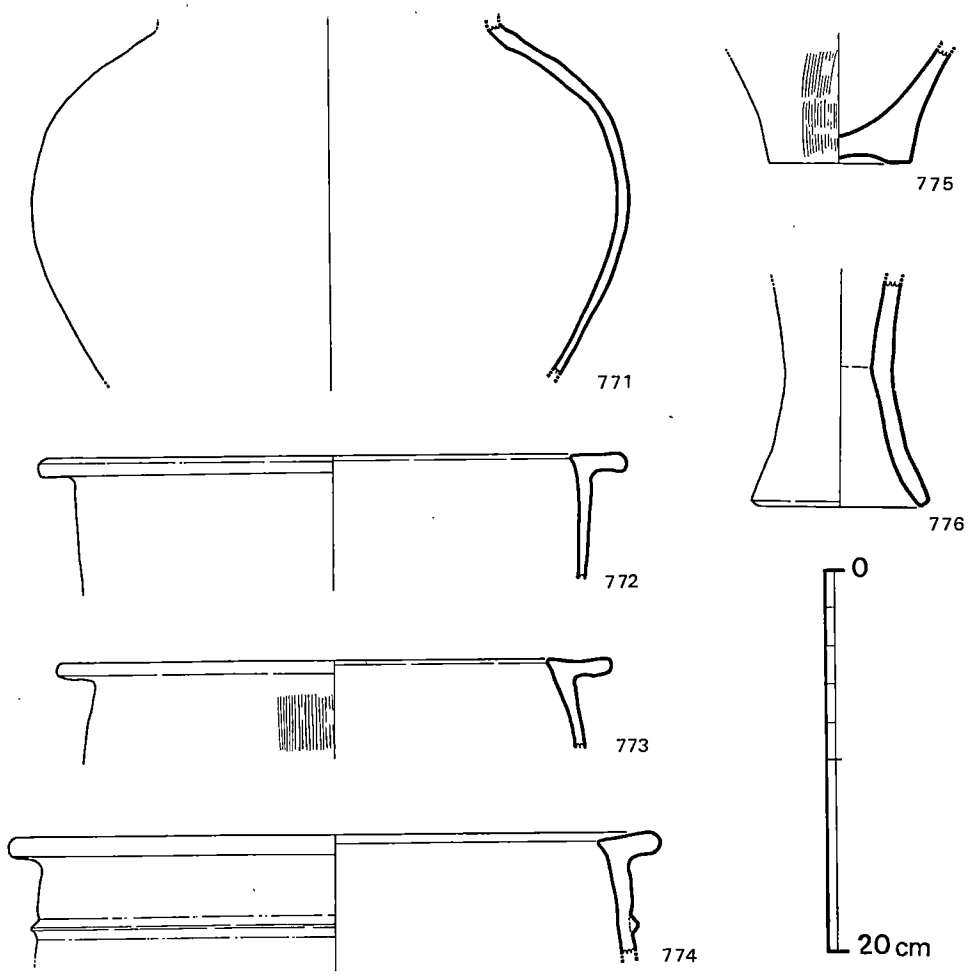
出土遺物（図版98，第209図）

壺形土器（209図771）　肩の張った球形をなす胴部の資料で，胴部最大径31.2*cm*を測る。内外ともナデて仕上げた黄褐色を呈す壺である。

甕形土器（第209図772～775）　772～774は口縁部付近，775は底部の資料である。772～774とも内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁の甕で，774は口縁下に1条の三角凸帯を付している。口縁部上面が水平なもの(772)，中央がわずかに凹むもの(773)，上面がわずかに内傾するもの（774）などがある。口径は772が30.8*cm*，773が29.1*cm*，774が34.2*cm*を測る。調整は体部内外をナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は22が外面黄褐色，内面褐色，772・774が黄褐色を呈す。775は底径7.4*cm*を測る底面中央が凹む平底である。外面刷毛，内面



第208図　3・4号方形竪穴遺構実測図 (1/30)



第209図　4号方形竪穴遺構出土土器実測図（1/4）

ナデて仕上げた褐色を呈す土器で，焼成は良い。

器台形土器（第209図776）　上下に開く筒状の器台で，上端を欠失している。脚台径9.3*cm*を測る。内外ともナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈す。（井上）

(4)　長方形竪穴遺構（図版83，第210図）

E 7区の北部，8号住居跡の南側に位置し，台地南西斜面の上位に占地する。

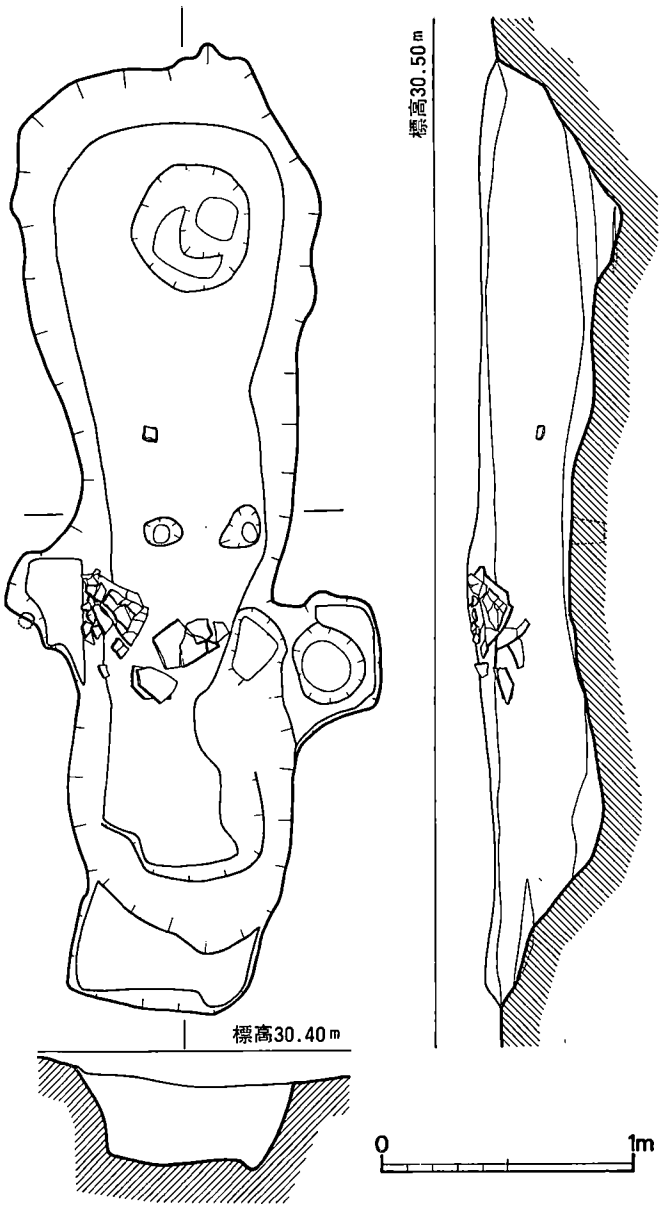
長さ3.75*m*，幅0.9～1.3*m*の瓢形に近い長方形プランを呈し，中央部左右に小さな張り出し部を有し，西側短辺にはテラスを形成する。壁高は，主軸両端で約0.4 *m*を測るが，中央部はやや浅く，床面の断面形もやや瓢形気味であると言える。東部では，床面を更に0.1*m* 程掘り

込んだ柱穴様のピットが設けられている。

堆積土は自然な堆積状況を示し，上部を削平されていることも示す。上部は黒色土層で下部は暗黄褐色粘質土であるが，下部には遺物は土器細片が若干出土した程度で，時期を明確にしうる資料は黒色土層内に含まれている。出土遺物のうち甕形土器は北側張り出し部から転倒した状況で，石庖丁は黒色土の下面からの出土である。

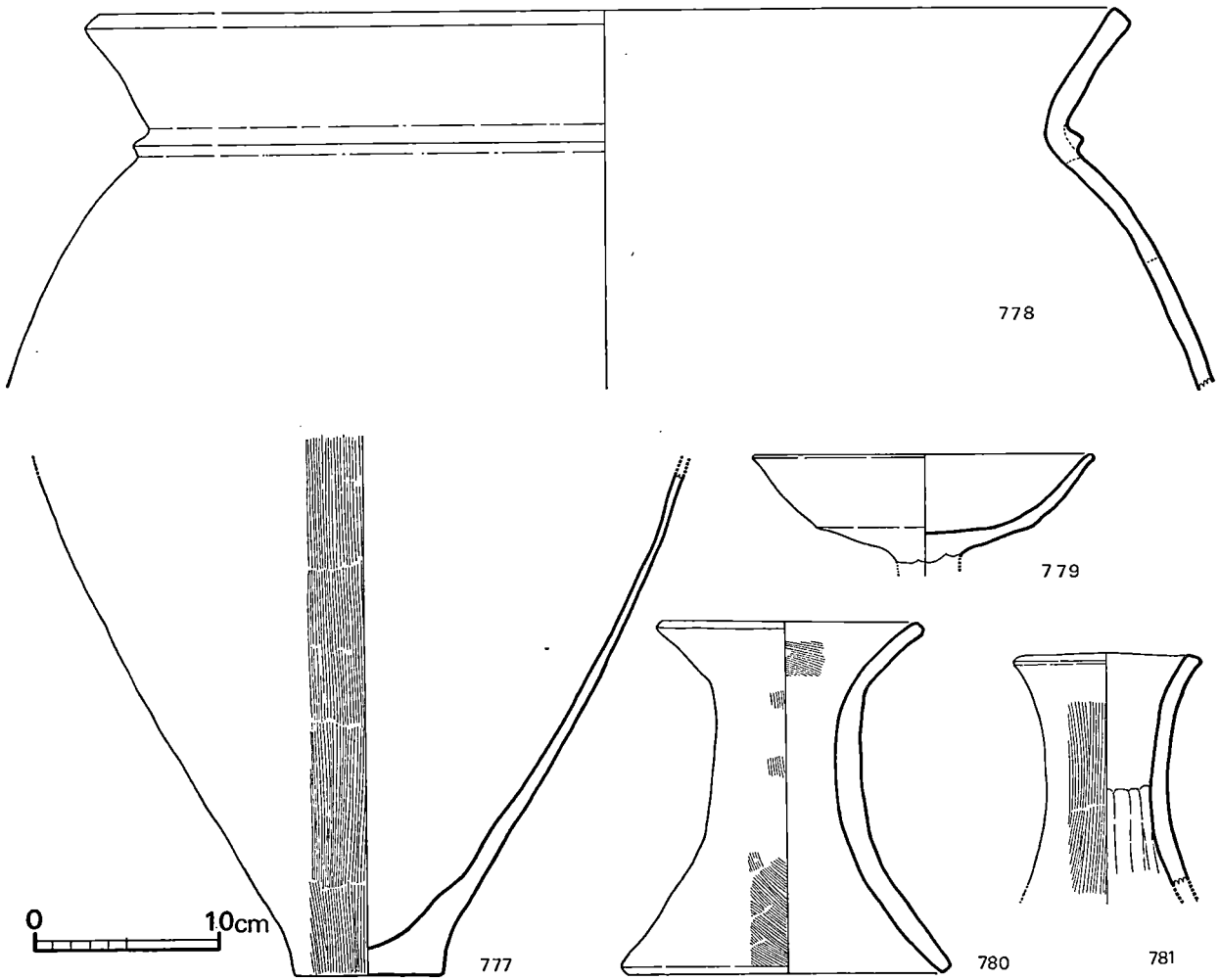
出土遺物（図版98，第211図）

大形甕形土器（第211図777）　口縁部を欠失する甕形土器で，器壁は薄い。その形状から中期初頭頃に属する資料である。この土器は遺構の上層に転倒した状況で出土しており，底部を上にして出土していることから転倒時に口縁部が遺構外に飛び出たか，転倒時に既に口縁部を欠失していたと考えられる。いずれにしても遺構の下半部が埋没した時点での倒立であり，遺構の構築時期は中期初頭をさかのぼることも考えられるが，遺構に伴わないことも考えなければならない。すなわち，放棄後の投入ともみることができるのである。



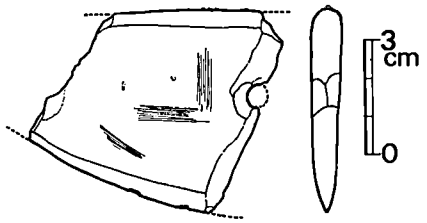
第210図　長方形竪穴遺構実測図（1/60）

（小池）



第211図　長方形竪穴・円形竪穴・長方形土壙出土土器実測図（1/4）

石　器（第212図）　小豆色の輝緑凝灰岩製の石庖丁で背縁は狭く，若干内彎している。背縁近くで最も厚く7.2㎜。刃部はやや鈍い。　（木下）



第212図　長方形竪穴出土石器実測図（1/2）

(5)　円形竪穴遺構（図版38，第213図）

D 8区の南西隅・E 8区の南東隅にあたる台地南斜面裾部に位置する。

工事進行による 埋立て工程のため，谷地区との調査時期が異なり，未掘部分となった区域と，谷地区の削平部に，遺構の南半部がかってしまったため全貌を明らかにしえなかった遺構である。

調査区域での平面形は東西8.5m，南北の現存値2.5mを測る弧状を呈しており，南側大半部を欠いた不整円形プランを呈すると想定される。

壁高は1.3m を測り，緩傾斜ですり鉢状の壁を形成して，一辺1 m程度の床面に至る。この周壁の傾斜面にピットが並んだ配列に掘り込まれているのが検出できた。

堆積土は，弥生時代後期の遺物を含む暗黒褐色土が上層をなし，黒色粘質土・暗黄褐色粘質土が下層にみられる。下部は極めて粘性が強く弥生時代前期末の土器細片が包含されていた。

出土遺物（図版103，第211・214図）

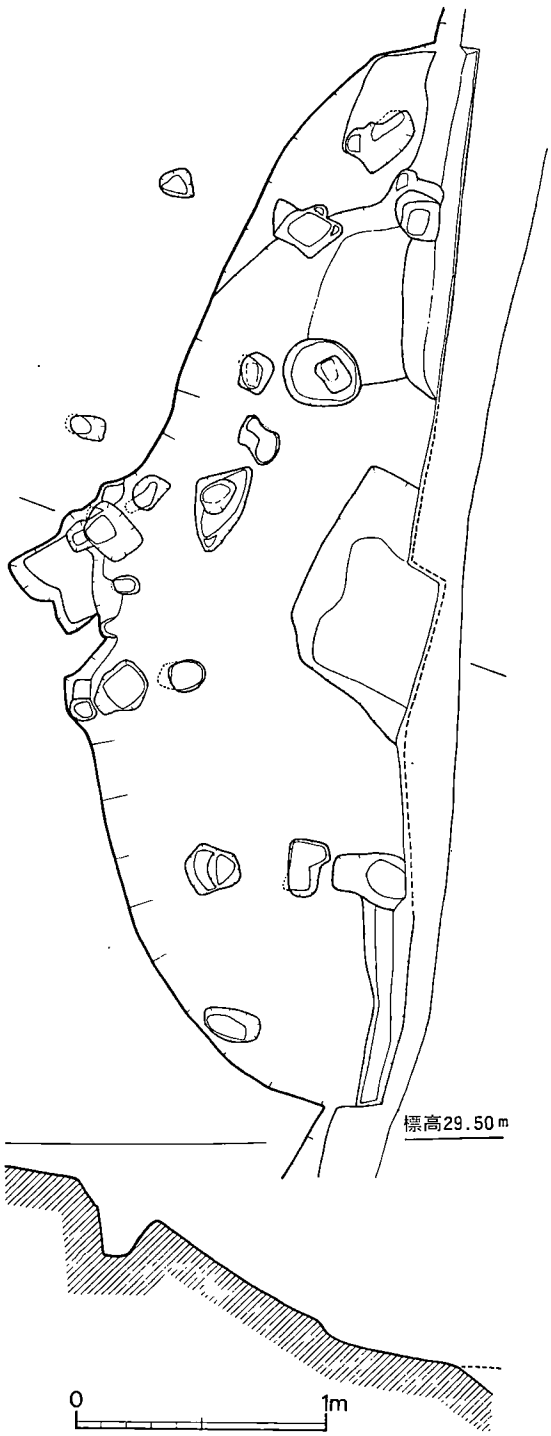
パンコンテナに1箱以上の土器片が出土したが，小破片が多く図示できうる資料は少ない。このため，ここでは大きな破片のみを図示することにした。

甕形土器（第211図778）　大形の甕の口縁部破片で約1/2残存する。「く」字状に屈曲する頸部に三角突帯を貼付けている。焼成は良好であるが，胎土に細砂粒を多く含み，器面の剝落もはげしいため調整方法等は不明である。

高杯形土器（第211図779）　杯部のみ残り，脚部の形状は明らかではない。杯部の描く曲線はややなだらかで口唇端部はやや外反する。外面には粗い研磨の痕跡が残り，内面はヘラ磨きかとみられる。

器台形土器（第211図780）　完形に近い資料で，器高19㎝を測る。上端部径14㎝程度，裾部径17.5㎝程度の安定した形状を呈し，器壁も厚い。外面及び内面上部はハケ調整を施している。

これらの土器は上層からの出土であり，土器の形状から弥生時代後期中葉～後半に属するも

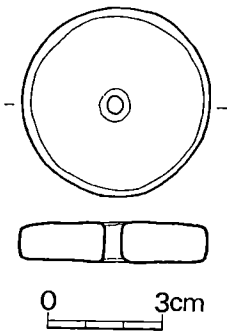


第213図　円形竪穴遺構実測図 (1/30)

のが多く，後期前半の遺物も含む，また上層には中期後半頃の甕形土器片も含まれていた。尚下層には遺物の出土は少ないが，前期末頃の土器片もみられた。

(小池)

土製品(第214図)　孔周辺ならびに縁の盛りあがらない紡錘車で完形品。淡灰白色を呈し，焼成不良。径5cm，厚さ1.1cm，重さ30.9g。最下底より出土した。



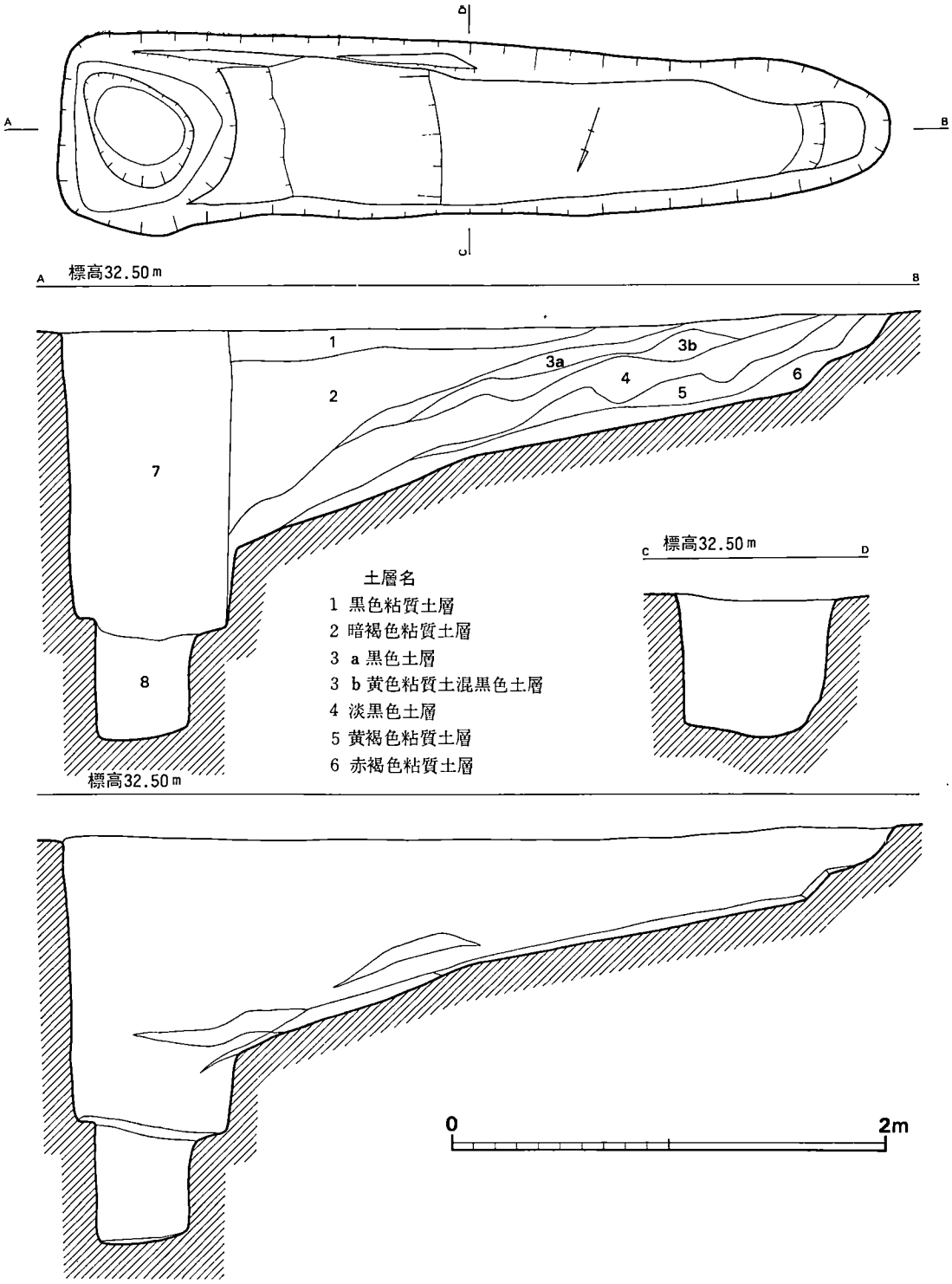
第214図　円形竪穴出土土製品実測図 (1/2)

(木下)

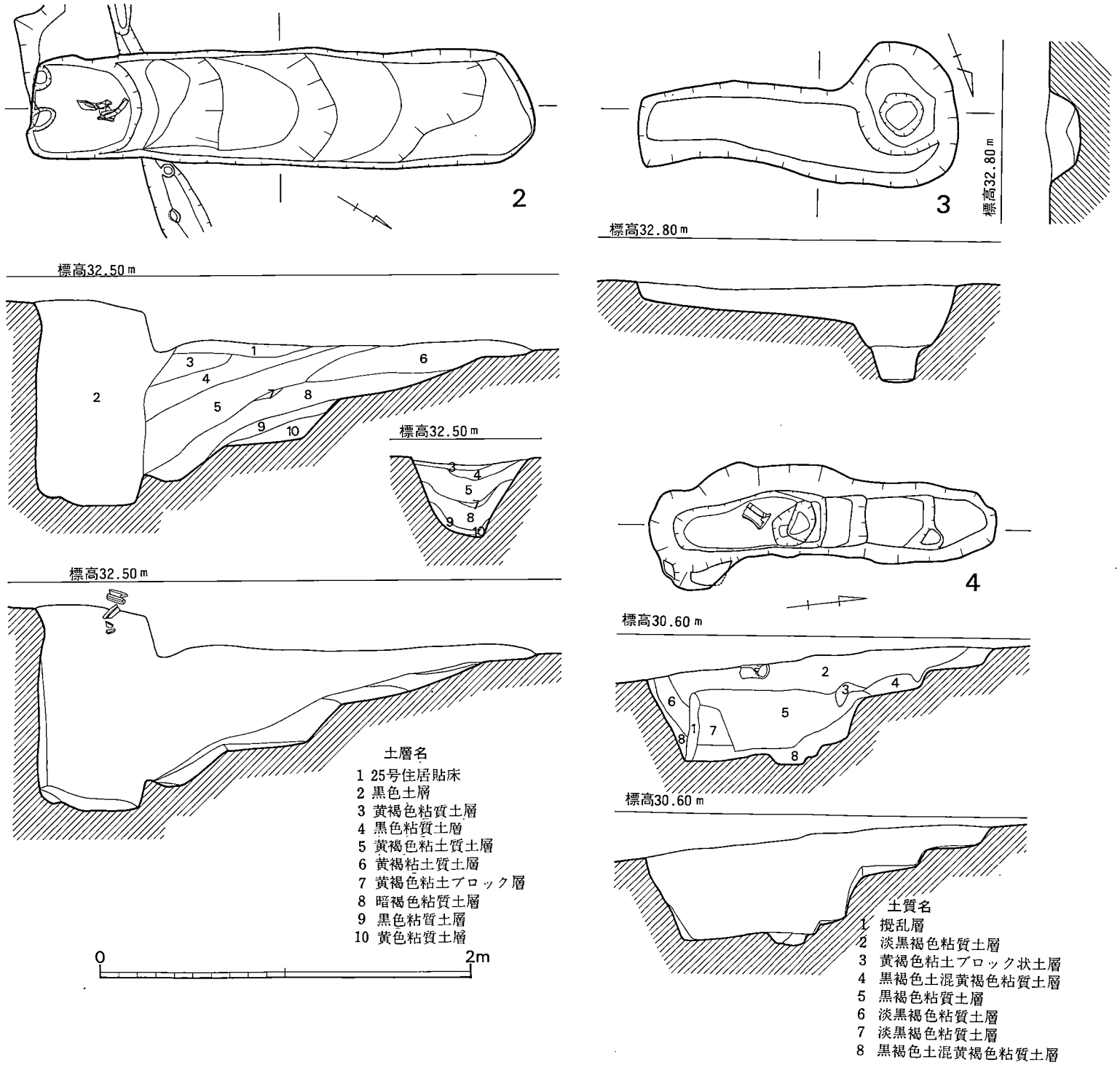
(6) 長方形土壙

≪1号長方形土壙（図版84，第215図）

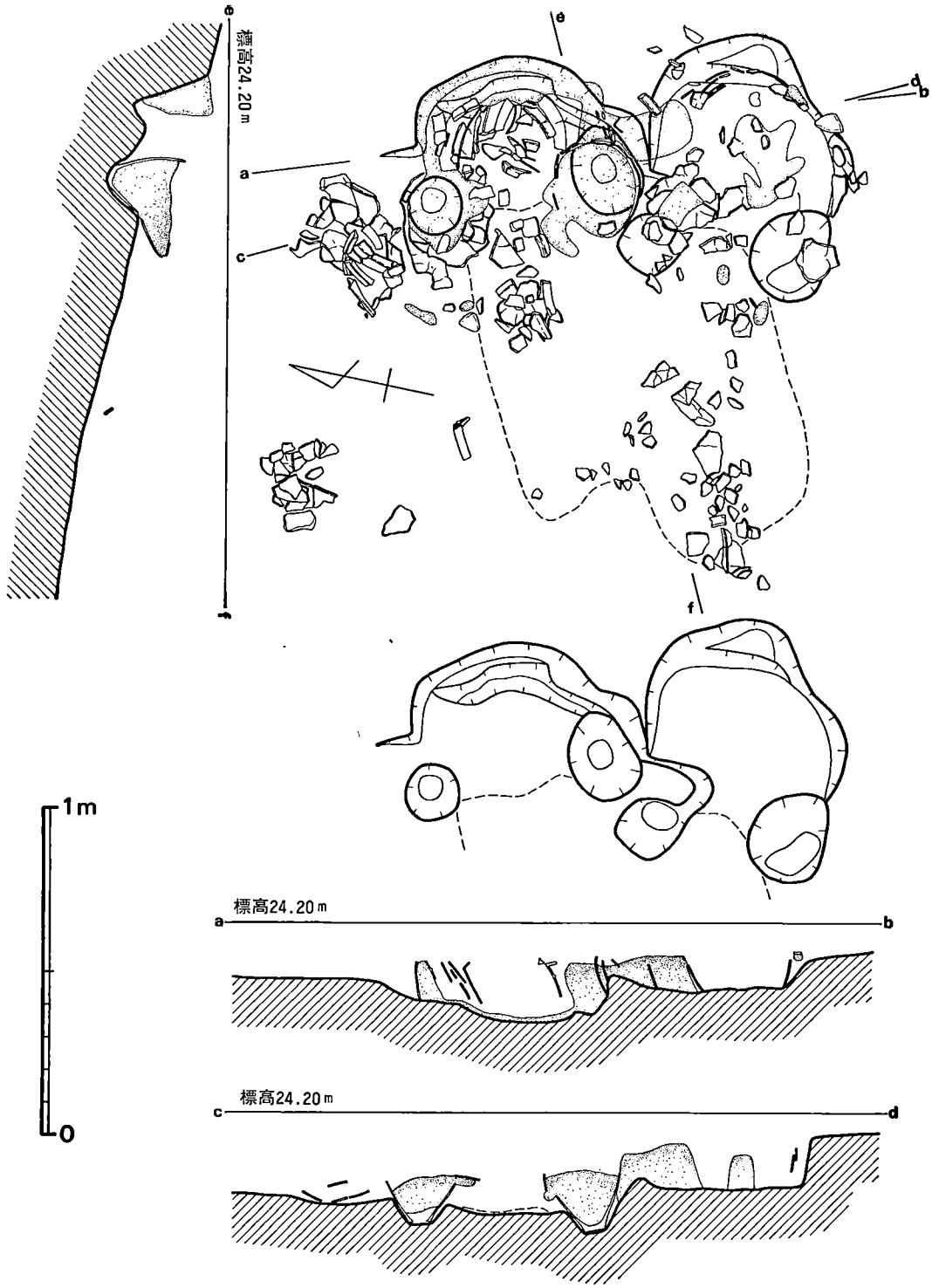
C4区で検出されたもので，東西3.82m×南北80cm（中央部），最も深い東端部で約1.90m，中央部で5.80mを測る。床面は西端部がもっとも浅く，東側にゆるやかに傾斜し，東端部で垂直に落ちる。東端部は二段掘りされている。土層の堆積をみると東端部の落ち込み部までは西側からの傾斜をもった自然の堆積状態をしているが，落ち込み部の堆積は2層の水平堆積で土がやわらかく極めて異なる。落ち込み部の掘り方は素掘りである。土層の堆積状態は2号とほぼ同じで，落ち込み部の土層はやわらかい黒色



第215図　1号長方形土壙実測図 (1/30)



第216図　2・3・4 号 長 方 形 土 壙 実 測 図 (1/30)



第217図　屋外炉跡実測図 (1/20)

土が堆積していた。2号と同様に木枠等施設があったものと思われる。その用途については現在類例もなく明らかにしえない。

遺物としては最上部で中期の壺の破片が出土しているが，共伴するものか不明である。しかし，22号住居跡が中期前葉であること，20号住居跡が後期終末であることを考えれば，中期前葉から後期終末の間に作られた遺構であることは確かであるからして東端部の落ち込み部には木枠等の施設が付設されていた可能性がある。遺物は弥生式土器細片が若干出土したのみで詳細な時期不明。

≪**2号長方形土壙**（図版85，第216図）　C5・D4・D5区にまたがって検出されたもので，22号住居跡を切って，20号住居跡に切られた遺構である。東西約6.20m×南北約2.70m，最も深い南端の落ち込み部で約1.12m，中央部で約0.53mを測る。床面は1号と異なり階段状をなして南端の落ち込み部にいたる。

≪**3号長方形土壙**（第216図）　D6区で検出されたもので，東西1.75m×南北約0.45m，中央部の深さ15cm，西端の落ち込み部での深さ約40cmを測る。落ち込み部は二段掘りで1・2号と共通するが，ひとまわり小形の土壙である。

遺物は土器細片少量のため不明である。　（井上）

≪**4号長方形土壙**（図版85，第216図）　D7区の南端部にあたる。台地南斜面の中位を占地する土壙で，斜面に対して主軸が直交する長楕円形に近いプランを有する。

長さ1.9m，幅0.5mを測り，深さは中央部で55cm，南端部で45cm，北端部で10cmを測ったが，上部を削平されている。北端から階段状に下がり，中央部から南部は平坦な床面を有する。

堆積土は，上位に淡い黒褐色の粘質土・下位は黒褐色粘質土がみとめられたが，南部の堆積土は，斜面の下位に相当する南端部から落ち込んだ状況を呈しており，不自然な堆積状況である。人為的な堆積とも考えられる。この堆積のあとの北部の堆積は自然な堆積状況である。この遺構の下位は土器片すら含まない無遺物層で最上位の堆積土にのみ遺物の出土がみられた。

出土遺物（第211図）　甕形土器片1点と，器台1点が出土している。甕形土器は，「逆L字」形の口縁を呈し，口縁下に三角突帯が貼付されている。器台（781）は裾部を欠失するが完形に近い資料で，なだらかな曲縁を有し，胴部には縦方向の刷毛調整が施されている。甕形土器の形状では，弥生時代中期後半に属する。　（小池）

(7) 屋　外　炉　跡（図版86，第217図）

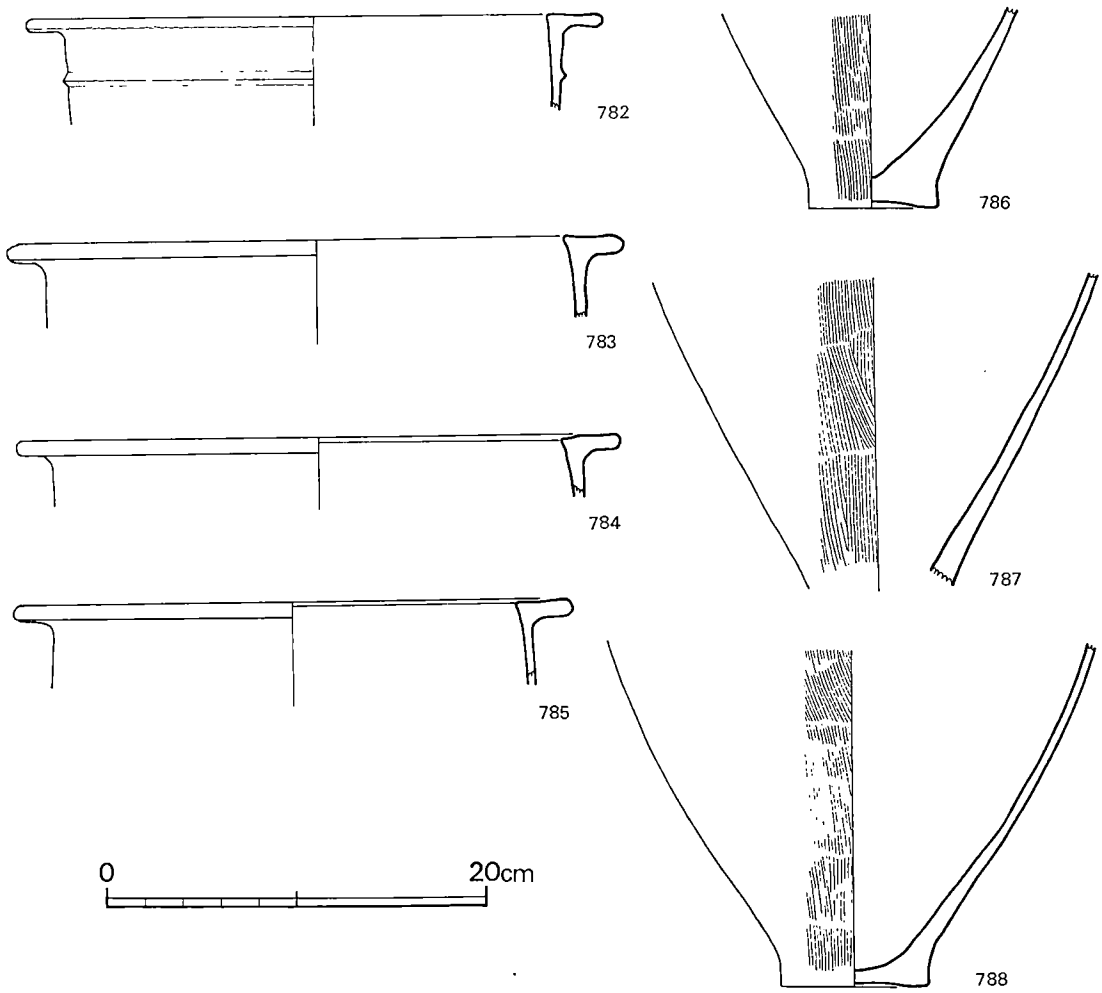
G6区から検出された。前期末のV字溝がほぼ埋没した最上層の黒色土層内に作られた炉跡で，2基が並列して発見された。炉跡は半円弧状の掘り方をもち，その両端に浅いピットを設け，そこに甕をすえている。中央部は若干凹み1号炉跡の中には胴下半を欠く甕が垂直に置か

れていた。両端にすえられた甕がカマドの袖の役割を果し，その間が焚口と思われる。1号炉跡内から発見された胴下半を欠く甕は支脚の役目を果したのかもしれない。炉内には多量の焼土・炭化物がつまり，炉底・側壁とも強い火を受けて堅固になっていた。特に1号炉跡内は顕著であった。焚口の西側はかきだされた焼土・灰・炭化物等がかなり散在していた。

遺物は中期前葉の甕のみで多数出土した。

出土遺物（図版98，第218図）

甕形土器（第218図 782～788）　782～785は内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁の甕で，782は同様の口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕である。口縁部上面は平坦で，中央部がわずかに凹む特色をもっている。口縁部内外ヨコナデ，胴部内外ナデ（785は外面刷毛）て仕上げている。口径は782が30.3cm，783が32.5cm，784が31.7cm，785が29.4cmを測る。

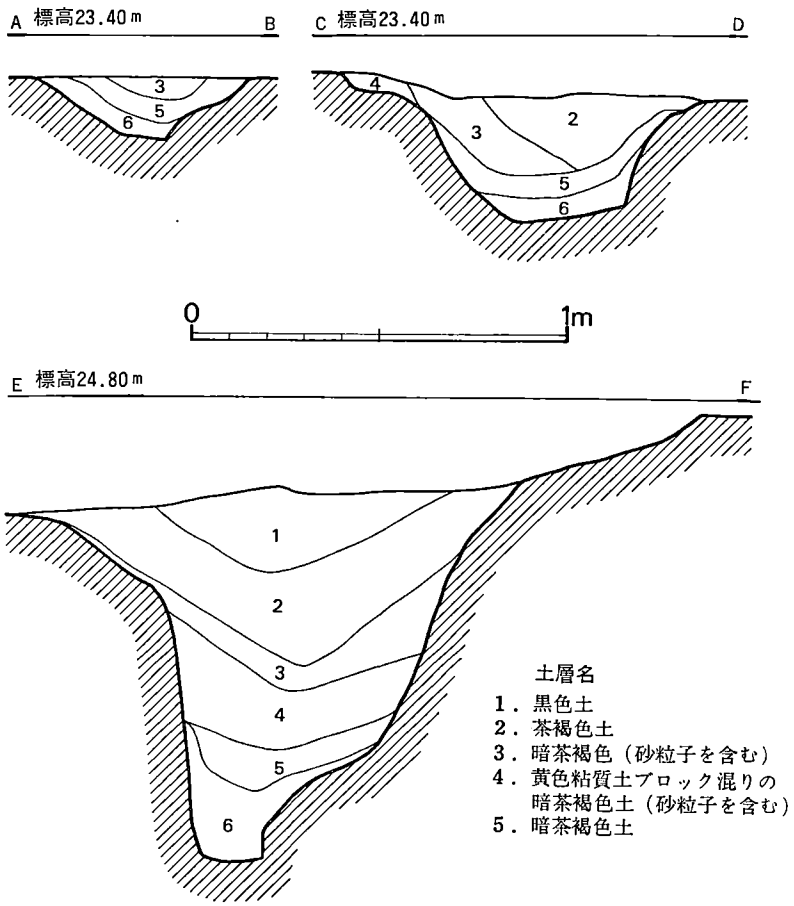


第218図　屋外炉跡出土土器実測図（1/4）

色調は782が褐色，783が暗黄褐色，784・785が黄褐色を呈す。786～788は胴下半の資料で，外面刷毛，内面ナデて仕上げている。底部は凹み気味の平底である。色調は786が淡黄褐色，787・788は黄褐色を呈す。外面は二次焼成を強く受けている。

(8) V 字 溝（図版87～89，第219図，付図2）

G 4～8区にわたって検出された溝状遺構である。この溝は谷地区で検出された溝状遺構につらなるもので，G10区で東方に屈折し，谷頭でさらに北側に登る傾向をもち，辻田地区を囲む環濠状をなしている。最も広いG 7区で，幅約2.50 *m*，深さ約2.10*m*，最も狭いG 4区で幅約70*cm*，深さ30*cm*を測る断面ほぼV字形をなす溝状遺構で，G 5区付近で緩やかに地形に沿って屈折し，谷地区に注いでいる。溝底のレベルをみるとG 4区で標高22.10*m*，G 7区で21.33*m*を測り，ゆるやかではあるが傾斜している。土層の堆積は各所で若干異なる最も残りの良いG 7区では第1層に黒色土，最下層の5層に暗茶褐色土がレンズ状に堆積している。遺物はさほど多くはないがG 6区の溝底より若干浮いた状態で前期末の土器が一括して出土した。中期前葉の遺物が第1層の黒色土ではじめて含まれることから，中期前葉の時期にはすでに埋没しV字溝は機能を失ったことが判る。このことは上面に構築された屋



第219図　V字溝土層断面図（1/20）

外炉跡からも判る。他に，扁平片刃石斧1，石庖丁1，打製石鏃1，スクレイパー1，土製紡錘車1，土製円盤1，土製品2が出土した。

出土遺物（図版99・103，第220～222図）

溝底出土遺物（第220図1・2）

壺形土器（789・790）　789は口頸部を欠く極小形の壺である。底径4㎝，胴部最大径9.8㎝を測る。外面粗いヨコヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈す。790は底部の資料で，底径7.7㎝を測る平底である。内外ともナデて仕上げた淡褐色を呈す土器である。中形の壺の底部であろう。

暗茶褐色土層出土遺物（第220図791～795）

壺形土器（791～793）　791は口頸部の破片資料で，口縁部はにぶいが有段状をなすタイプの大形の壺である。内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡褐色を呈す。792・793は底部の資料である。792は底径9.2㎝を測る大形壺の底部である。調整は器面の風化が著しく不明。色調は灰褐色を呈す。793は底径16㎝，内外ともナデて仕上げた淡褐色を呈す土器である。

甕形土器（794・795）　794は口縁部破片，795は底部の資料である。794は「く」字状に外反するタイプで，端部に刻目を有しない甕である。795は底径7㎝を測る中央部がわずかに凹んだ平底で，外面刷毛のあとナデ，内面ナデて仕上げている。色調は赤味がかった褐色を呈す。

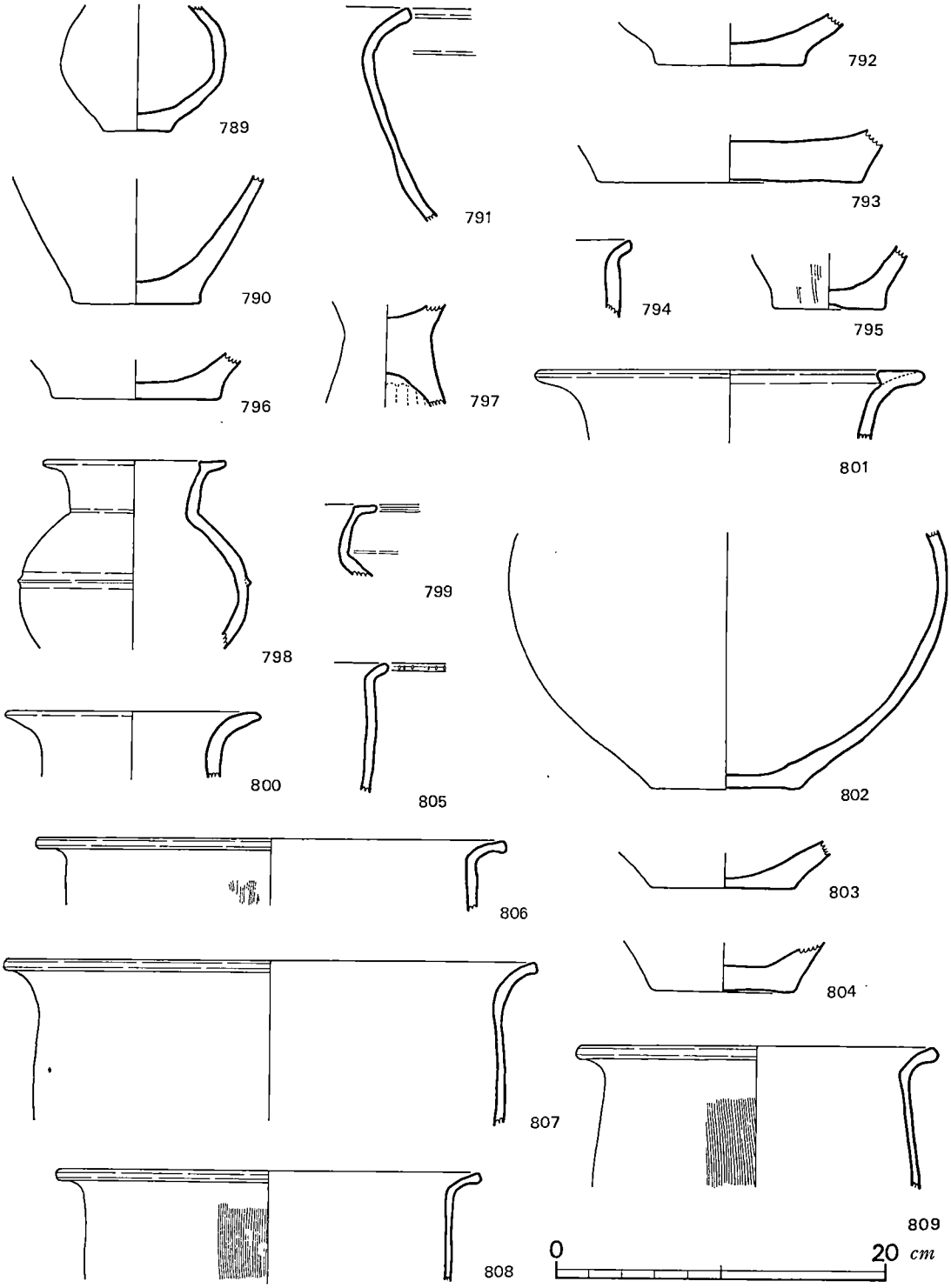
茶褐色土層出土遺物（第220図796・797）

壺形土器（796）　底部の資料で，底径10.1㎝を測る平底である。大形壺の底部であろう。内外ともナデて仕上げた褐色を呈す土器である。

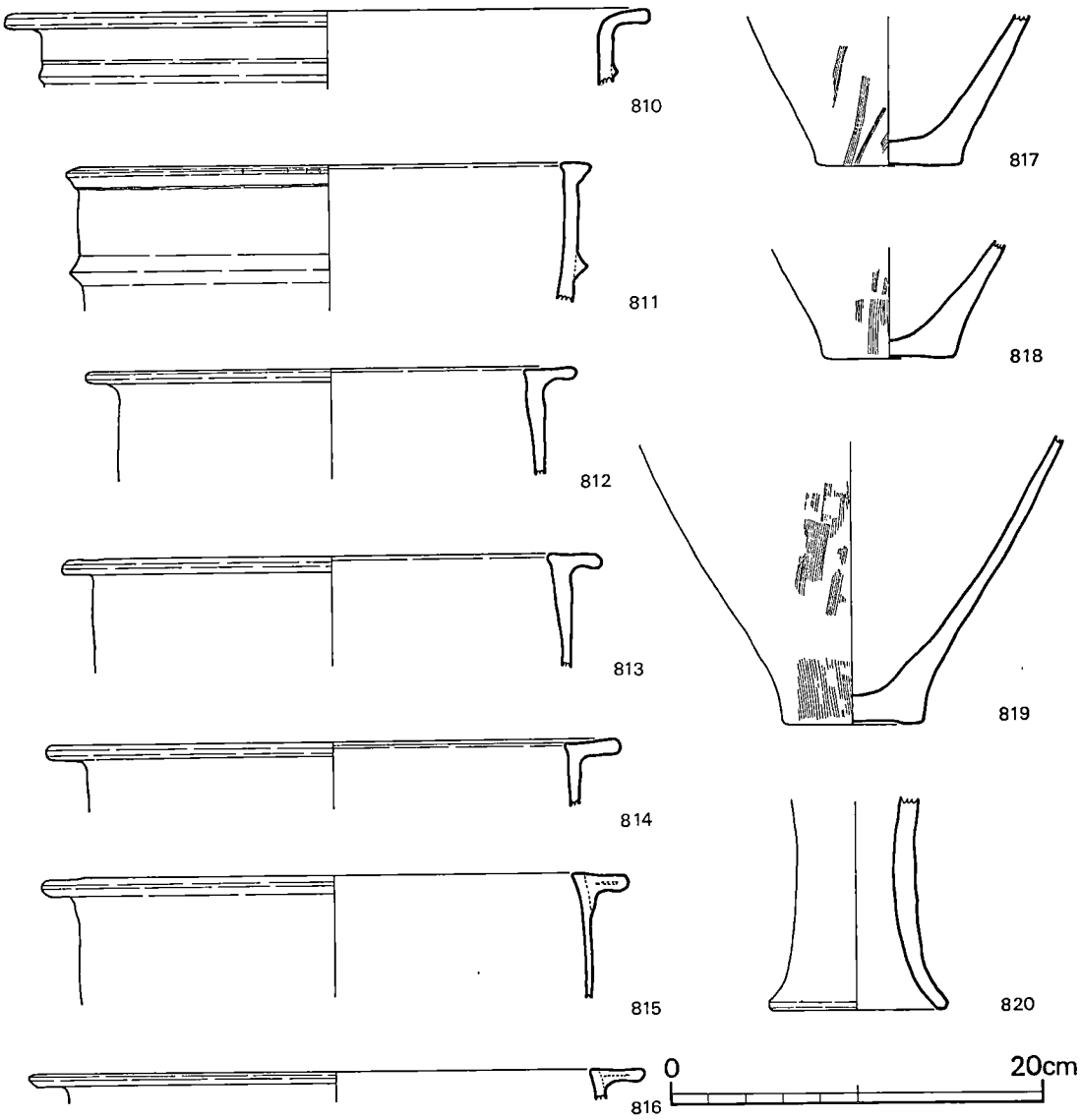
高杯形土器（797）　柱状部の資料である。内外とも器面の風化がはげしく調整不明である。色調は赤褐色を呈す。

黒色土層出土遺物（第220・221図798～820）

壺形土器（798～804）　798は口縁端部内面を肥厚させた上面平坦の口縁部に立ち気味の頸部がつき，球形の胴部につづく壺である。胴中位には1条の三角凸帯が付されている。底部は欠損のため不明。口径10㎝を測る小形の壺である。内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡褐色を呈す。胎土は精良で，焼成良好である。799も798と同じタイプに小破片で，口縁端部内面の肥厚は薄い。800は直立気味の頸部に大きく外反する単口縁の口縁部がつくもので，端部は細く尖り気味で終る。調整は器面の風化が著しく不明。色調は淡褐色を呈す。口径15.3㎝を測る。801は口頸部の資料である。口縁端部内面を肥厚させた口縁部で頸部は立ちぎみに外反する。口径23.4㎝を測る大形の壺である。調整は器面風化のため不明。色調は灰色を呈す。802は胴下半の資料で，球形の胴部に，わずかに凹む平底がつく壺である。胴部最大径26.4㎝，底径9㎝を測る。調整は不明。色調は淡黄褐色を呈す。803・804は底部



第220図　V字溝出土土器実測図　1 (1/4)



第221図　V字溝出土土器実測図 2 (1/4)

で，底径803が8.8cm，804が8.7cmとほぼ同じである。大形か中形の壺の底部であろう。

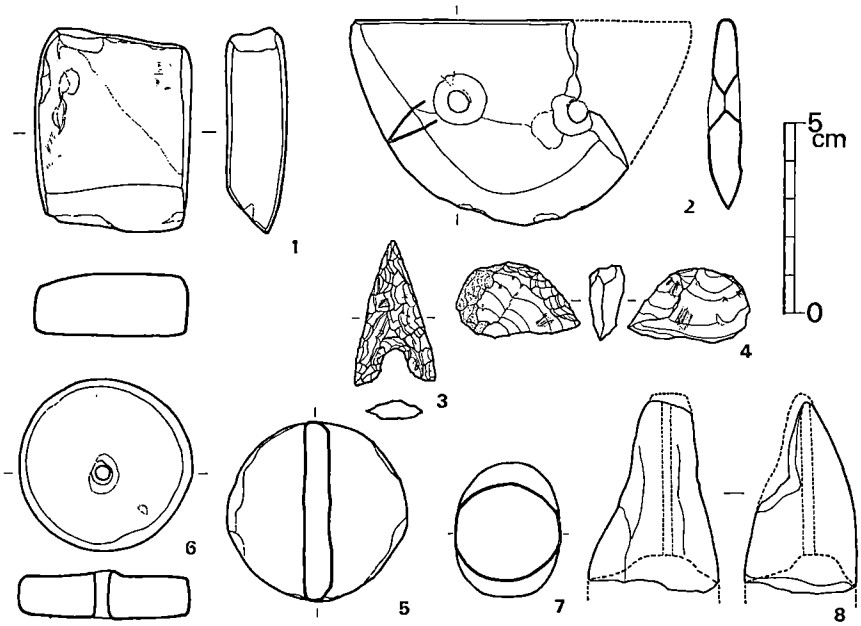
甕形土器（805～819）　如意形ないしは「く」字状の口縁部をもつもの（805～809），如意形口縁下に1条の三角凸帯を付したもの（810），口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を付したもの（811），内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁のもの（812～816）がある。如意形ないしは「く」字状口縁をもつ甕の中でも，805は口縁端部に刻目を有し，他にはみられない。大きさにも大小あり，口径806は28.2cm，807は32cm，808は25.6cm，809は21.9cmを測る。調整

は器面風化の著しい807を除き，外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は805～807が淡褐色，808・809が茶褐色を呈す。810は如意形というより逆L字状の口縁部を思わせるもので，口径34.4cmを測る大形の甕である。内外ともヨコナデで仕上げた淡褐色を呈す焼成良好な土器である。811は口縁端部と口縁下に1条の凸帯を付した甕で，口径28cmを測る。口縁端部の凸帯にはわずかに刻目が認められる。内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面淡褐色，内面黒灰色を呈す。812～816は内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁の甕で，上面は平坦で，中央部がヨコナデによりわずかに凹む特色をもっている。口径は812が26.2cm，813が28.8cm，814が30.7cm，815が31.3cm，816が32.8cmを測る。調整は全体に器面の風化が著しいため明確でないが，残りの良い812は外面刷毛のあとナデ，内面ナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は812が暗褐色，813が淡黄褐色，814が淡褐色，815が黄褐色，816が橙褐色を呈す。817～819は底部付近の資料である。底径817が7.8cm，818が7.2cm，819が7.5cmを測り，底面はわずかに凹み気味の平底である，819の底部からの立ち上りは立ち気味で長い特色をもつ。外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は817が淡褐色，818が淡黄褐色，819が暗褐色を呈す。

器台形土器（820）　口縁部を欠く柱状をなす器台で，下端の開きは緩やかで短い。脚台径9.5cmを測る。調整は不明。色調は淡褐色を呈す。（井上）

石　器（第222図1～4）　1は黄褐色頁岩質泥岩製の扁平片刃石斧。長さ5.3cm，幅4.15cm，厚さ1.6cm，重さ64.3gを測る。幅広，厚手で刃部はあまり鋭くない。3層出土。2は小型の三角形石庖丁で片側を欠損する。背縁は直線をなし，体中央部の紐孔は大きい。刃部に近いほど丁寧な研磨を施し刃部は鋭く尖るが，刃部の刃こぼれは著しい。紐孔下で最大厚をなし0.9cm，幅5.3cm。2層出土。3はG6—24区，4層出土のサヌカイト製凹基無茎式石鏃。長さ3.78cm，幅2.13cm，厚さ0.44cm重さ2.1g。4は横長剝片の一縁に二次加工を加えた削器で黒曜石製。パティナ古くV字溝に伴出しない可能性がある。

土製品（第222図5～8）　5はG4-20区出土の土製円盤で赤褐色を呈し，焼成普通。4.7cm，厚さ0.75cm。6は紡錘車の完形品。径4.6cm，厚さ1.25cm，重さ28gを測る。淡茶褐色を呈し焼成・胎土とも良好。7は円球状の土製品で5層より出土。長径3.43cm，短径2.65cm，重さ24.6gを測る。赤褐色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。8は釣鐘状で中央に一孔を貫通させている。器面は風化し荒れている。土錘であろう。（木下）



第222図　　V字溝出土石器実測図 (1/2)

(9) 溝 状 遺 構

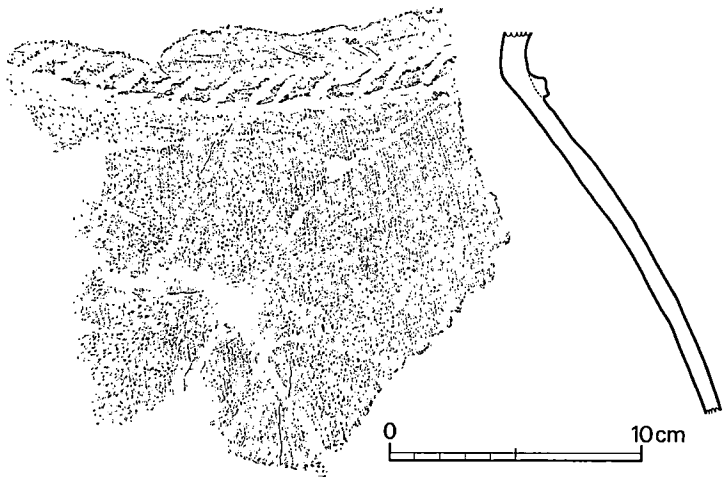
≪溝　A（図版90，付図2）　D5～E5区にわたり東西に走る溝で，7号袋状竪穴・2号住居跡を切って，古墳時代後期の25号土壙墓に切られて発見された。溝は東から西に傾斜し，西側は開墾時の開削で欠失している。最も広い西端で幅約1.20m，深さ50cmを測る。断面逆台形状を呈す。溝底は床面のごとくたたきしめられていて道路を思わせるが性格は不明で，ここでは溝状遺構としてあつかった。

遺物は何等なく不明であるが，遺構の切り合い関係からして2号住居跡の中期前葉より新しく，古墳時代後期の25号土壙墓より古い時期のものであることが判る。

≪溝　B（図版90，付図2）　F5区で検出された溝で，南から北西にゆるやかに彎曲しながら走る。北西部で7号掘立柱建物と重複し，建物に切られている。溝幅は最も広い彎曲部で45cm，深さ約20cmを測る断面U字を呈す浅い溝である。溝内には黒褐色土・黒色土が堆積している。遺物は後期終末の土器数点が出土した。

出土遺物（第223図821）

大形甕の胴上半の破片資料である。頸部には断面台形の凸帯が付され，その端部には櫛状工具による刻目が施されている。内外とも刷毛仕上げで，色調は茶褐色を呈す。焼成は良い。



第223図　溝B出土土器実測図（1/3）

≪溝　C（付図2）　F6～G6にわたる東西に走る溝で，溝Dと直交し，V字溝に流れこむような状態で検出された。また，この溝は5号掘立柱建物跡に切られている。溝底は東から西に傾斜し，最も広い西端で幅約85cm，深さ約20cmを測る。断面U字状を呈す。遺物は若干の弥生式土器細片のため時期は不明である。

≪溝　D（付図2）　G5～6区にわたる南北に走る浅い溝で，G6区で溝Eと複合する。切り合い関係は不明である。溝底は南から北にゆるい傾斜をもっている。最も広い北端で幅約0.20mを測り，断面緩やかなU字形を呈す。遺物は弥生式土器小片が数点のみである。時期は不明である。

≪溝　E（付図2）　G6-6からG5-20にわたる東西に走る溝で，東端は溝Dと複合している。溝Eとの切り合い関係は不明である。溝底は東から西に傾斜し，溝Cと並行している。断面U字形をなす浅い溝で，最も広い東端で幅約0.70m，深さ約0.13cmを測る。遺物は弥生式土器細片が少量のため時期不明。

≪溝　F（付図2）　F5区で検出された南北に走る細くて浅い溝で，溝Bの北側にある。幅約0.3m，深さ約0.10mを測る断面逆台形状を呈す溝である。溝底は南から北にわずかに傾斜する。遺物は後期終末の小片数点が出土したのみである。

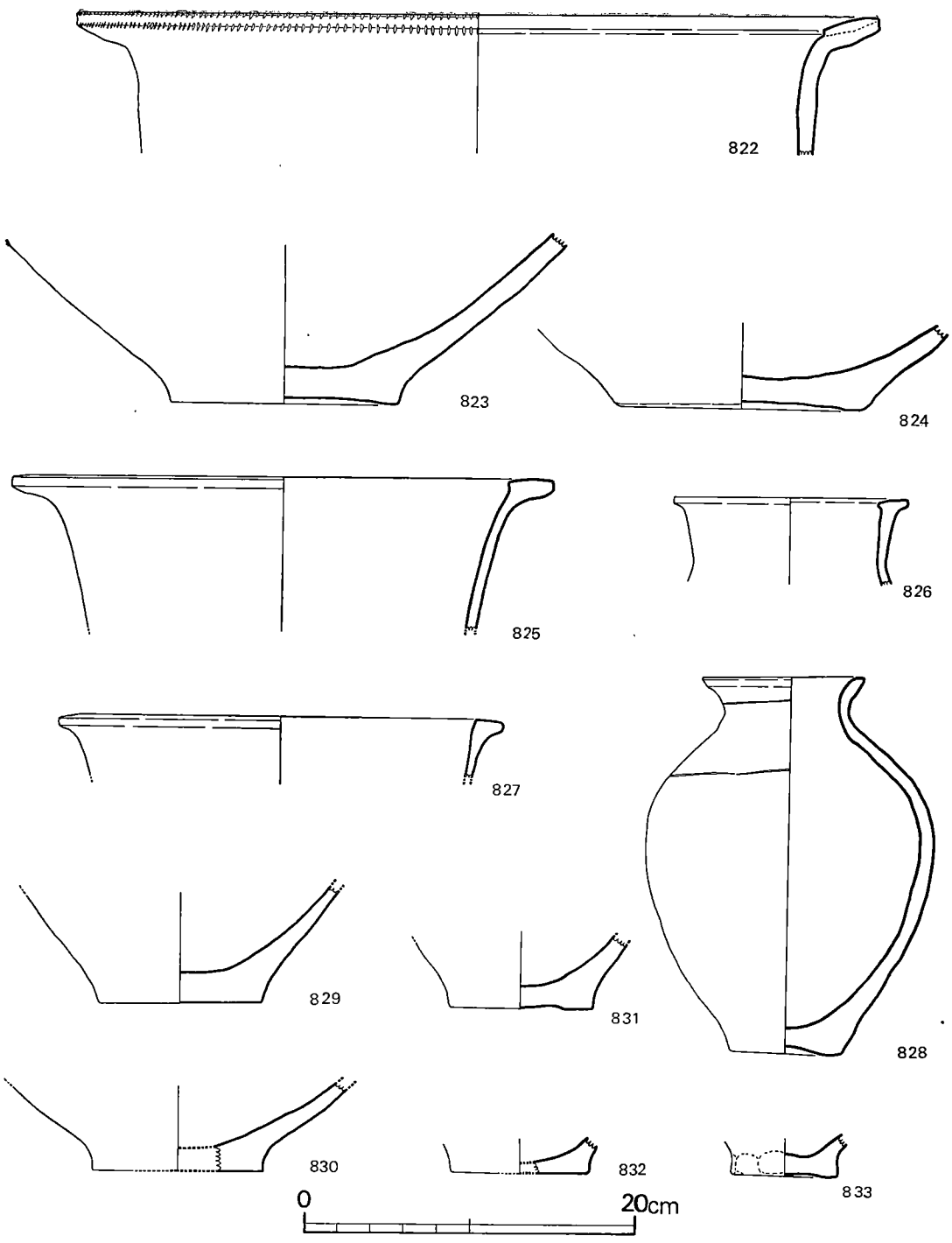
(10)　包含層出土の土器・石器・青銅製品

≪前期・中期の土器（図版99，第224～228図）

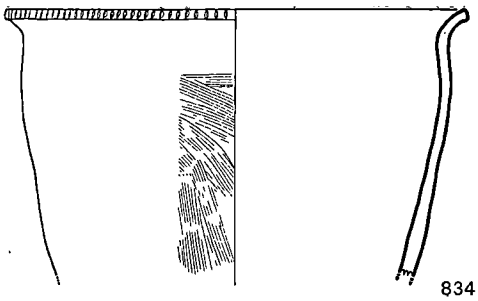
壺形土器（第224図822～833）　822は口頸部の破片資料で，復原口径50cmを測る。口縁部は

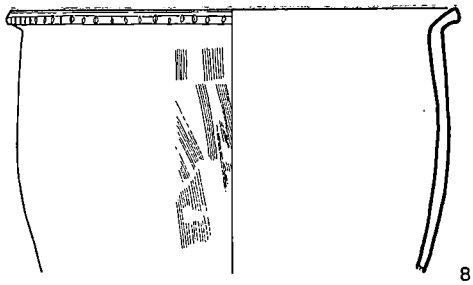
内面を肥厚させたもので段を作り，頸部は直立気味である。口縁端部外面上下に刻目を施している。口縁部内外をヨコナデ，頸部内外はナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈す。823・824は底面が凹む平底の資料で，底径823が13.6cm，824が15.1cmを測る。822のような超大形の壺の底部である。調整は器面の風化がはげしく不明。色調は823が淡黄褐色，824が淡赤褐色を呈す。825は頸部が立ち気味に外反し，口縁部内面を肥厚させ段を作る口縁部につづく。口縁部内外はヨコナデ，頸部内外はナデのあとヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調は淡黄褐色を呈す。復原口径32.1cmを測る。827は復原口径26.4cmを測る壺である。口縁部は内面を肥厚させたものであるが825のような段は作らず，上面は平坦でわずかに外傾する。外方の張り出しは弱い。口縁部内外をヨコナデ，頸部内面ナデ，外面ヘラ磨きで仕上げている。色調は外面茶褐色，内面暗茶褐色を呈す。焼成良好である。827は復原口径14cmを測る小形の壺である。立ち気味に外反する短かい頸部に，内面肥厚させた口縁部がつくもので，上面はわずかに内傾し，つまみ出し状の段を作る。調整は不明。色調は褐色を呈す。828は口径9.6cm，器高22.2cmを測る長胴の小形壺である。口縁部と肩部に1条の浅い沈線がめぐっている。口径に比べ，器高が高く，底部が大きい土器である。胴部は倒卵形を呈し，底部は凹み底である。外面ヘラ磨き，内面ナデで仕上げている。色調は褐色を呈す。8～12は底部の資料で，底径829が9.6cm，830が10.2cm，832が8.4cm，833が8.3cmを測る。内外ともナデ仕上げであるが，830は外面ヘラ磨きしている。また，833の外面には指頭圧痕を残している。色調は833が赤褐色の他は黄褐色を呈す。

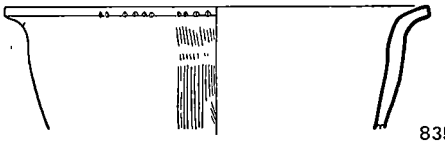
甕形土器（第225～227図834～857）　834～839はいわゆる如意形をなす口縁部をもつ甕で，口縁端部に刻目を有すもの（834・839・837）と有しないもの（836・838・839）がある。胴部の形状にも口縁部から直線的にすぼまる835・838や，胴の張る837・839などがある。器高の風化が著しく調整が不明の836・838・839を除き，他は外面刷毛，内面ナデて仕上げている。口径は834が24.3cm，835が22.2cm，837が23.8cm，838が24.7cm，839が13.2cmを測る。836は口径19.1cm，器高20.2cmを測る。色調は834が黄褐色，837が外面暗灰褐色，内面淡褐色，835が外面暗褐色，内面淡橙褐色，836・839が褐色，838が暗褐色を呈す。焼成は834を除き，あまり良くない。834の外面上半には煤の付着がみられる。840～842はいわゆる如意形状の口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付し，端部に刻目を施している甕である。口径は840が26.6cm，841が33.4cm，842が26cmを測る。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。841・842は口縁端部外面をヨコナデにより外下方につまみ出している。色調は840が外面暗茶褐色，内面が橙褐色，841黄褐色，842が外面暗褐色，内面淡褐色を呈す。840の外面に点々と煤の付着がみられる。843は口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を付し，端部に刻目を施した甕である。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し，焼成も良い。844は如意形をなす口縁部をもち，口縁下を肥厚させ，ゆるやかではあるが段を作るタイ

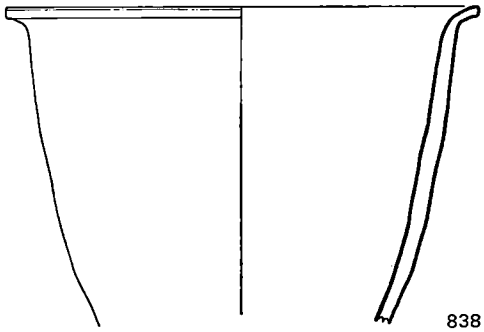


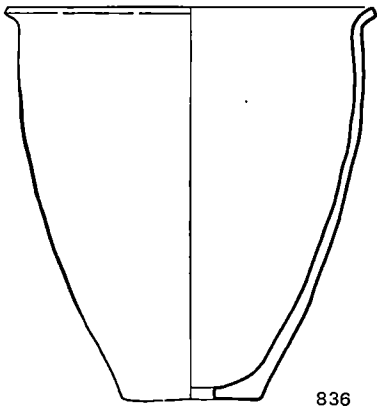
第224図　包含層出土土器実測図　1 (1/4)

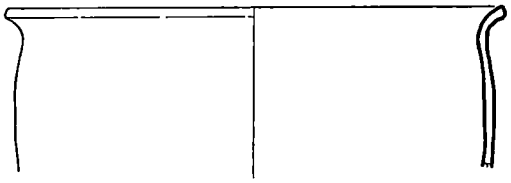


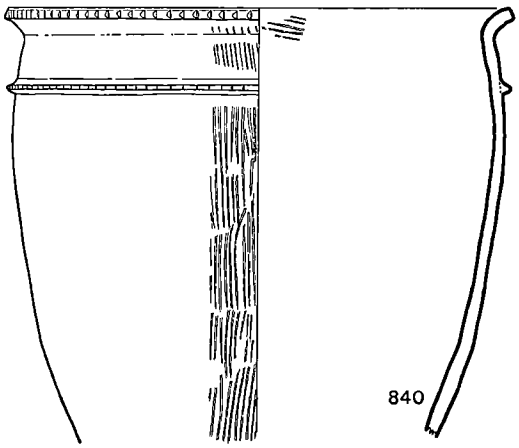


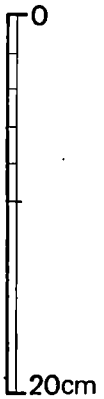




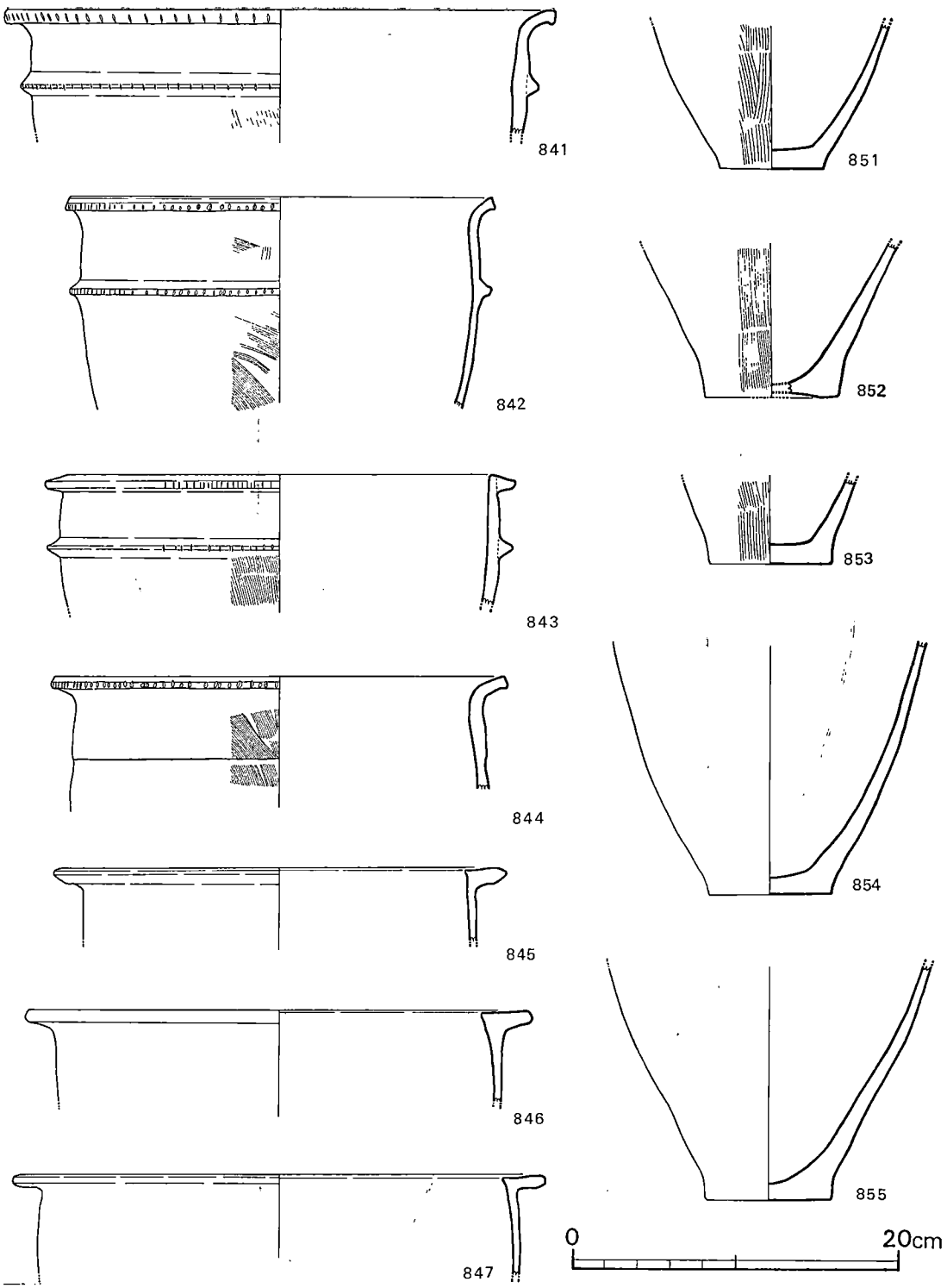




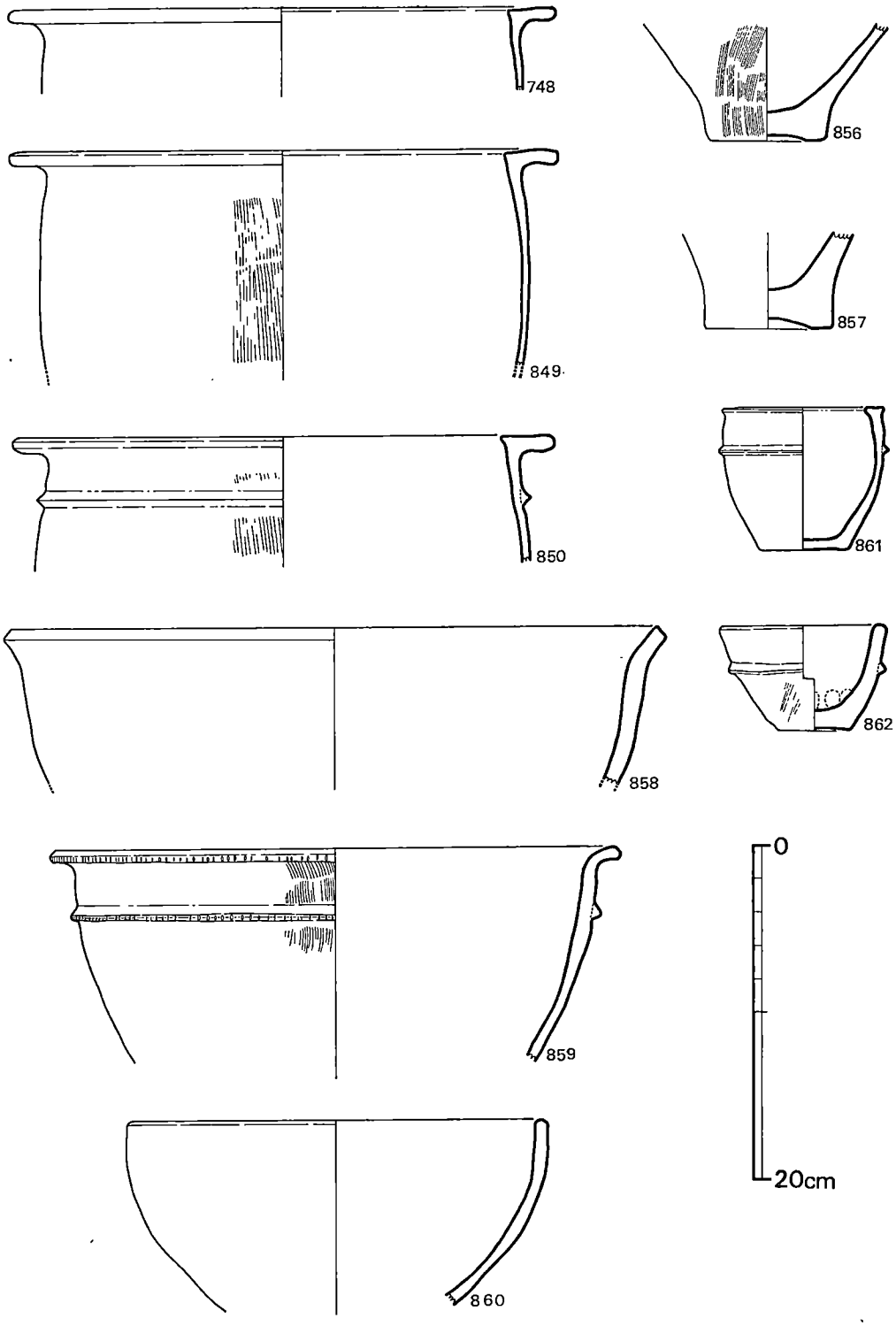




第225図　包含層出土土器実測図 2 (1/4)

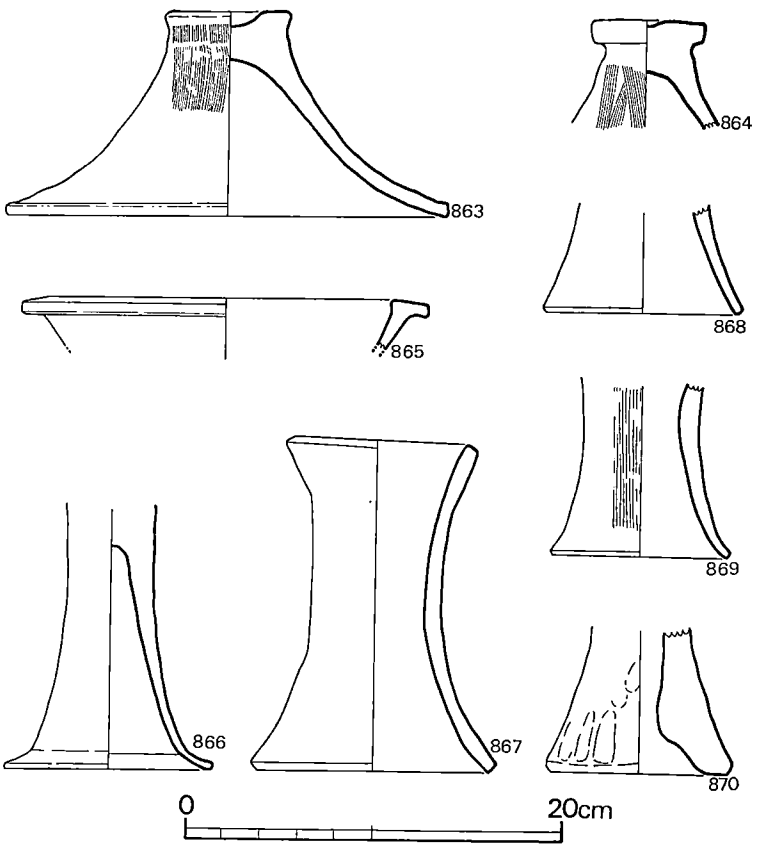


第226図　包含層出土土器実測図 3 (1/4)



第227図　包含層出土土器実測図 4 (1/4)

プの甕である。外面細い刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた黄褐色を呈す土器である。845～849は内面にわずかにつまみ出した逆L字状をなす口縁部をもつ甕である。上面は平坦で，中央部が両側からのヨコナデによりわずかに凹む特色をもっている。口径は845が27.4cm，846が30.7cm，847・848が32.3cm，849が32.5cmを測る。調整は全体に器面の風化が著しく明らかでないが，残りの良い849は外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は845・846が黄茶褐色，847・849が黄褐色，848が淡褐色を呈す。850は内面にわずかにつまみ出した逆L字状口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕である。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げた茶褐色を呈す土器である。851～857は胴下半～底部の資料である。底部には底面が平坦なもの（851・853～855），凹むもの（852・856・857）がある。凹むタイプの底部は立ち上りが立ち気味で長いのが特色で，857は特に顕著である。器面風化のはげしい854・855を除き，他は外面刷毛，内面ナデ，底面ナデて仕上げている。また，内底部には指頭圧痕を残すものが多い。色調は33が茶褐色の他は黄褐色である。



第228図　包含層出土土器実測図 5 (1/4)

鉢形土器（第227図858～862）　858は如意形状をなす口縁部をもつ鉢で，口径39cmを測る大形品である。内外とも丁寧にヨコヘラ磨きした作りの良い土器である。色調は黄褐色を呈す。859は如意形状口縁と口縁下に1条の三角凸帯を付した鉢で，口径34cmを測る。口縁端部と凸帯端部に刻目を施している。外面刷毛，下半はさらにナデ，内面はナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈す。860は単口縁の鉢で，口径25cmを測る中形品である。外面ヨコヘラ磨き，内面

ナデ，口唇部内外はヨコナデで仕上げた褐色を呈す作りの良い土器である。861は口径9.5cm，器高8.2cmを測る。口縁部上面は平坦で，内外につまみ出し，口縁下に1条の三角凸帯を付している。調整は内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げているが，胴部下半には刷毛の痕跡を残している。色調は黄褐色を呈す。862は口径9.8cm，器高6.1cmを測る。胴中位に1条の三角凸帯を付した単口縁の鉢である。内外とも粗い刷毛，内面下半はさらにナデて仕上げている。色調は外面灰黒色，内面灰褐色を呈す。

蓋形土器（第228図863・864）　傘形をなす蓋である。863は底径23.1cm，器高10.3cmを測り，つまみ部外面中央は凹んでいる。外面刷毛のあと下半はヨコナデしている。内面はナデ仕上げである。色調は茶褐色を呈す。864はつまみ部の張り出しが強いもので，外面刷毛，内面ナデで仕上げている。

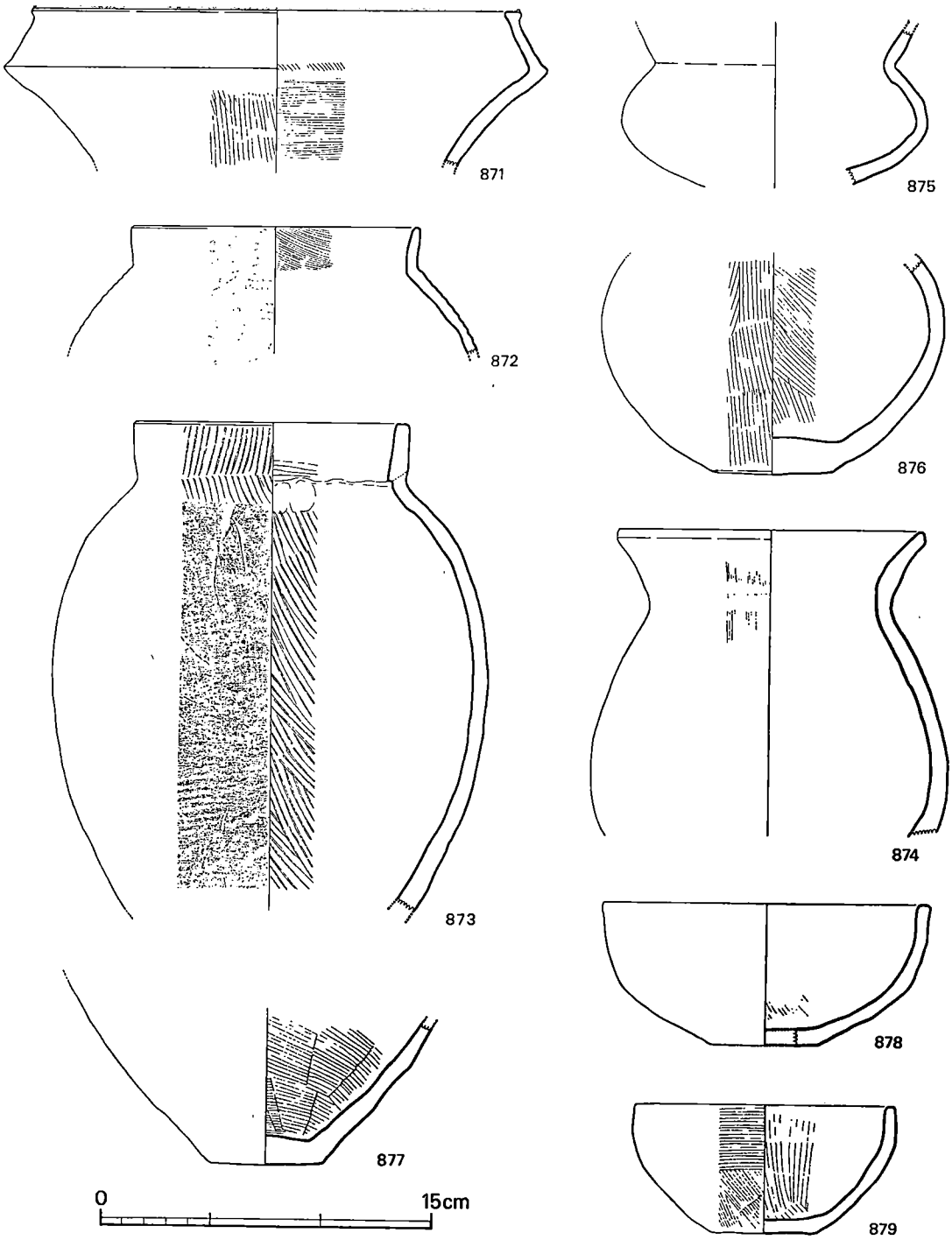
高杯形土器（第228図865・866）　865は口縁部内面を肥厚させた平坦な口縁で，上面はわずかに外傾する杯部の資料である。口径21.2cmを測る。調整は不明。色調は黄褐色を呈す。866は柱状で脚台部付近でわずかに開く脚部の資料である。脚台径11cmを測る。内外とも風化が著しく調整不明。色調は褐色を呈す。

器台形土器（第228図867～870）　上下に開く器台である。867は上端径10cm，下端径12.8cm，器高16.8cmを測る。868・869は下半の破片資料で，下端径868が10.4cm，869が9.3cmを測る。調整は869が外面刷毛，内面ナデ仕上げの他は器面の風化がはげしく不明である。色調は867・868が黄褐色，869が茶褐色を呈す。

支脚形土器（第228図870）　下半の資料で，脚台径9.5cmを測る。器肉は厚く，器面には指頭圧痕を多く残す手捏的な土器である。色調は淡橙褐色を呈す。

≪**後期の土器**（図版100，第229～231図）

壺形土器（第229図871～877）　871は内傾する複合口縁の壺の口頸部破片資料で，復原口径21.9cmを測る。頸部内外面とも刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁端部はヨコナデにより外方にわずかにつまみ出されている。色調は黄褐色を呈す。872・873は直口する短口縁の壺で，胴部は長胴で卵形を呈す。口径は872が13cm，873が12.3cmを測る。調整は872が外面粗いタタキ目，胴部内面ナデ，口縁部内面刷毛，873は胴部外面粗いタタキ目，内面粗い刷毛，口縁部内外は粗い刷毛のあと軽くヨコナデして仕上げている。頸部内面には接合面と指頭圧痕を顕著に残している。色調は872が黄褐色，873が茶褐色を呈す，874は「く」字状に外反する単口縁の壺で，胴部最大径を下位にもつしもぶくれの胴部をもっている。口径13.8cm，胴部最大径16cmを測る。胴部内外とも刷毛のあとナデ，口縁部内外は刷毛のあとヨコナデして仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。875は「く」字状に外反する広口の小形壺で，胴部は扁平な球形をなす。調整は内外とも風化が著しく不明。色調は黄褐色。876・877は胴下半の資料である。876は球形の胴部に丸味をもつ平底がつくもので，底径5.5cmを測る。調整は外内面



第229図　包含層出土土器実測図 6 (1/3)

とも刷毛，底部内外はナデて仕上げている。色調は外面黄褐色，内面暗灰色を呈す。877は底径5.1cmを測る丸味をもった平底で，胴部への移行は直線的である。長胴の壺であろう。外面粗いタタキのあとナデて仕上げ，内面は刷毛のままで，色調は茶褐色を呈す。

甕形土器（第230・231図880～883）　880・881は口頸部付近の破片資料である。880は内面にわずかにつまみ出した「く」の字状口縁部をもち，上面は内彎気味である。また，口縁下に1条の三角凸帯を付していて胴部は大きく張る。復原口径42.6cmを測る。内外面ともナデ，口縁部内外はロコナデで仕上げた褐色を呈す土器である。881は880より小形の甕である「く」の字状に大きく外反する口縁部と口縁下に低い1条の三角凸帯を付すものである。内面刷毛，外面ナデ，口縁部外面はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色，882は「く」の字状に外反する口縁部に長胴の楕円形を呈す胴部がつくもので，底部は丸味をもった小さい平底である。口径27.2cm，器高34cm，底径5.9cmを測る。調整は胴部外面刷毛のあと下半（底部付近を除く）はナデて仕上げ，内面上半を粗い刷毛，下半はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し，胴部外面上半には煤の付着がみられる。883は胴上半の破片資料で，復原口径22.5cmを測る。胴部内外面刷毛，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は黄褐色。

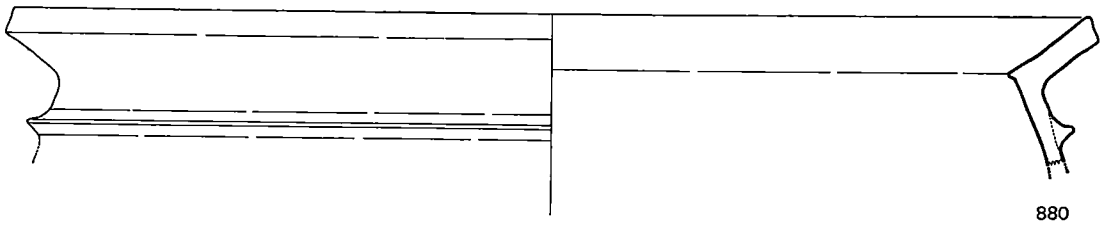
鉢形土器（第231図884・885）　884は球形の胴部「く」の字状に外反する口縁部がつく大形の鉢である。復原口径27.6cmを測る。胴部外面刷毛のあと下半のみナデて仕上げている。内面上半刷毛，下半はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し，焼成は良い。885は底部を欠く小形の鉢である。尖底をなすと思われる底部から内彎気味に外反する単口縁の鉢で，復原口径13.1cmを測る。外面縦位のヘラ磨きで仕上げ，内面風化のため不明であるが，器壁の薄い作りの良い土器である。色調は黄褐色を呈す。

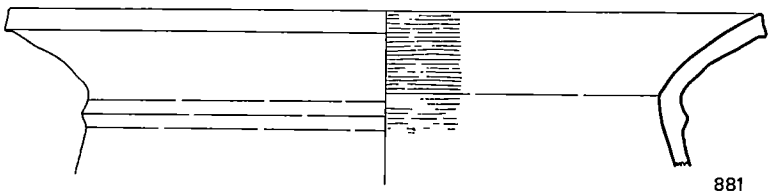
脚付鉢形土器（第231図886・887）　886は杯部上半，887は脚部の破片資料である。886は丸味をもった体部にゆるやかに外反する口縁部がつく浅い杯部の資料で，復原口径14.8cmを測る。体部外面ナデ，内面刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面淡茶褐色，内面暗茶褐色を呈す。887は復原脚台径13.6cmを測る低く大きくラッパ状に開いた脚部の資料で，中位に円孔が2個穿たれている。内外ともナデて仕上げた黄褐色を呈す土器である。

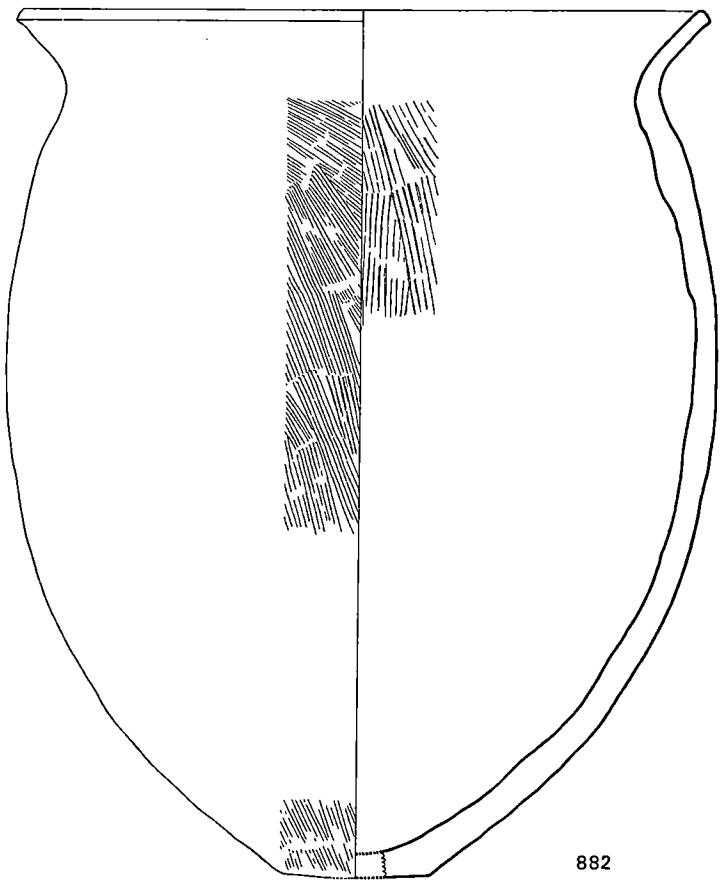
椀形土器（第229図878・879）　平底の底部から内彎気味に立ち上がり，口縁部は直口する単口縁の椀である。口径は878が14.8cm，879が11.7cmを測る。調整は878が外面ナデ，内面刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。879は内外とも刷毛仕上げで，外底部は刷毛のあとナデて仕上げている。色調は878が淡茶褐色，879が茶褐色を呈す。

器台形土器（第231図888）　頸部が細くくびれた上下に大きく開く器台で，上端を欠く資料である。内外ともナデて仕上げた器肉の薄い淡黄褐色の土器である。脚台径22.2cmを測る。

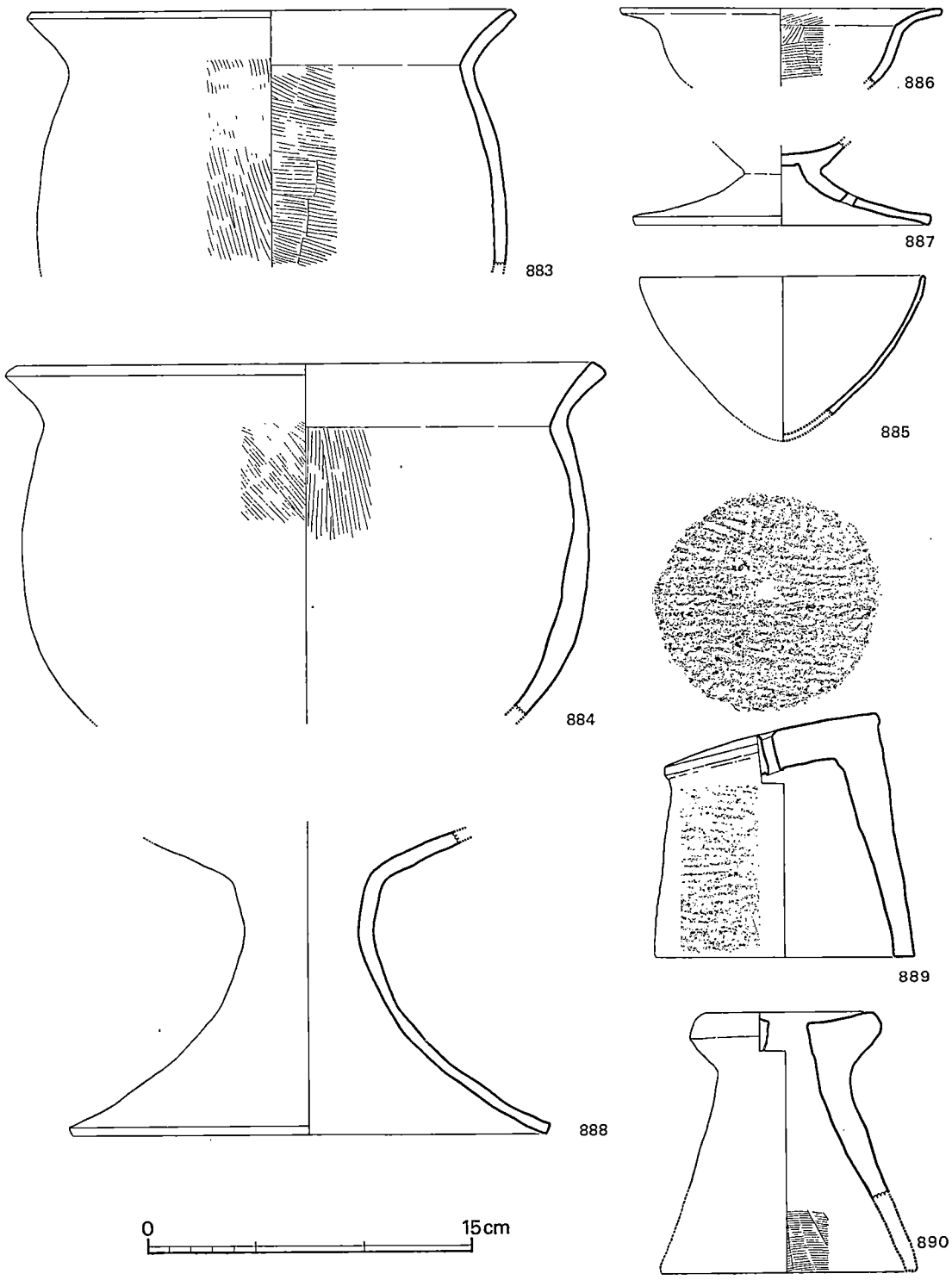
支脚形土器（第231図889・890）　889は上面が傾斜する沓形状を呈す支脚で，上面中央に1つの円孔があく。内面はナデて仕上げ，指頭圧痕を顕著に残している。外面は粗いタタキのま







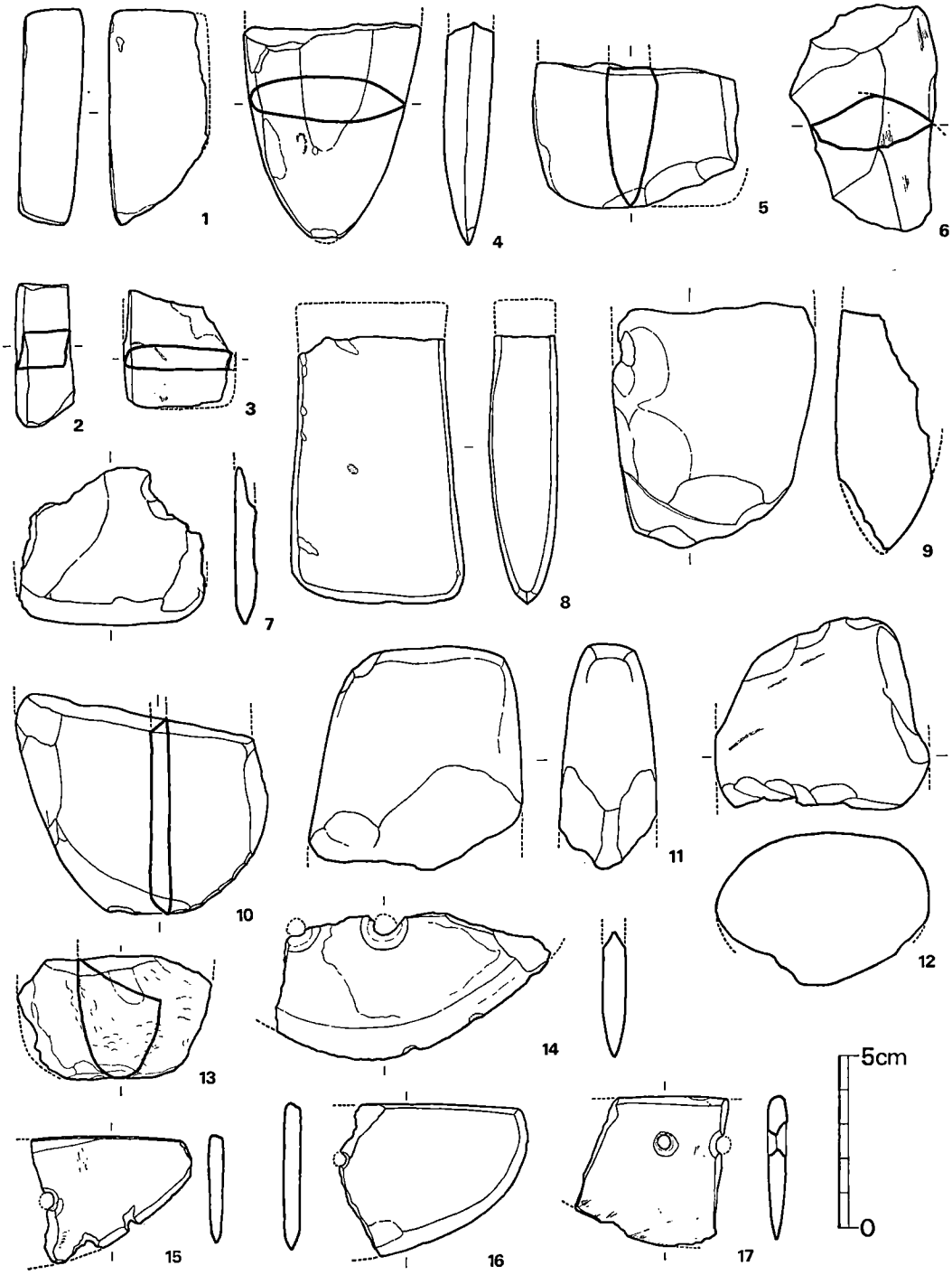
第230図　包含層出土土器実測図 7 (1/3)



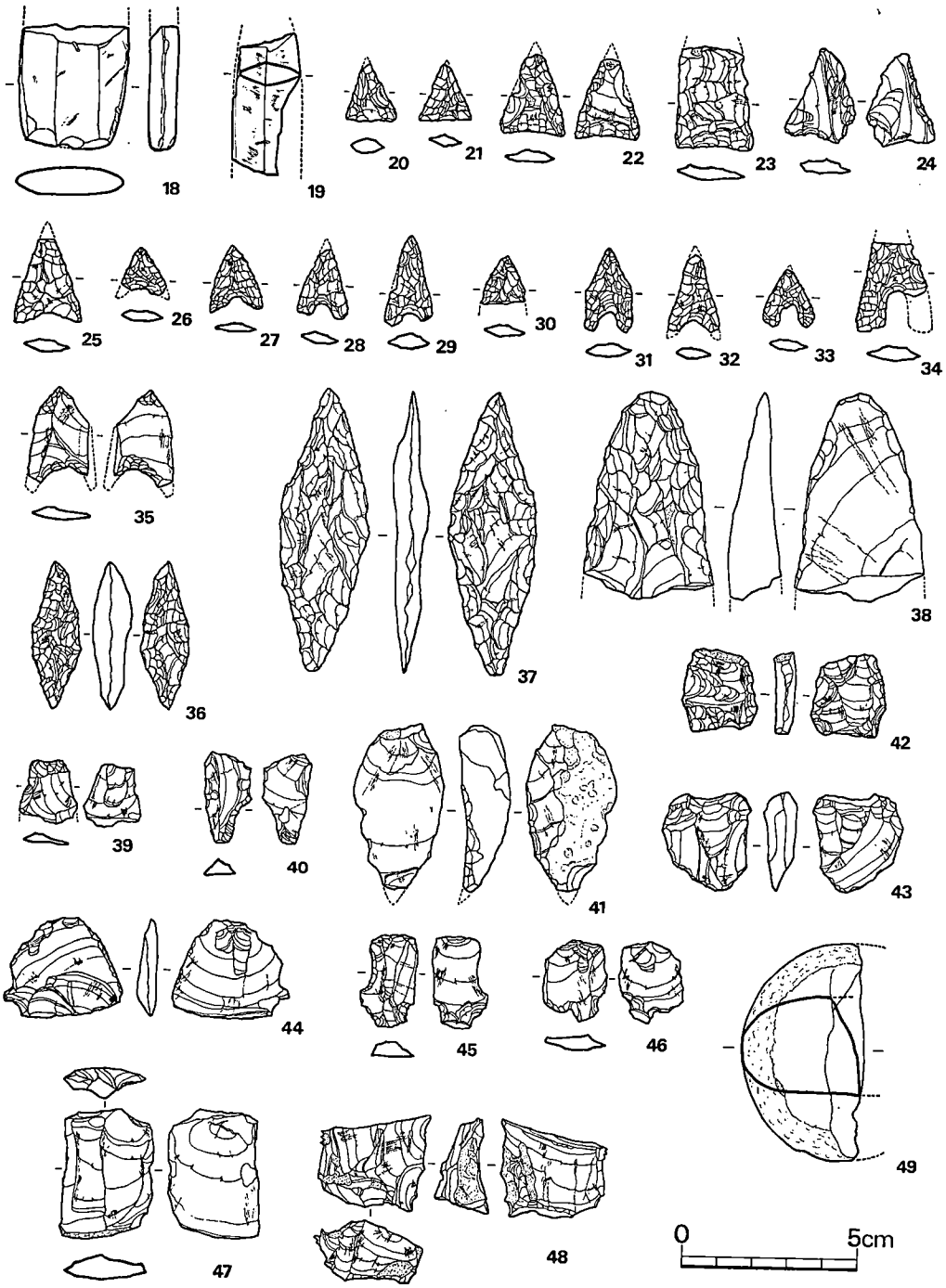
第231図　包含層出土土器実測図 8 (1/3)

まである。色調は暗茶褐色。890は上端がわずかに開いて器受部をなす上部に「ハ」の字状に開く脚部がつく支脚である。器受部上面中央には1つの円孔が穿たれている。脚部下半に刷毛がみられる他はナデて仕上げている。色調は褐色を呈す。（井上）

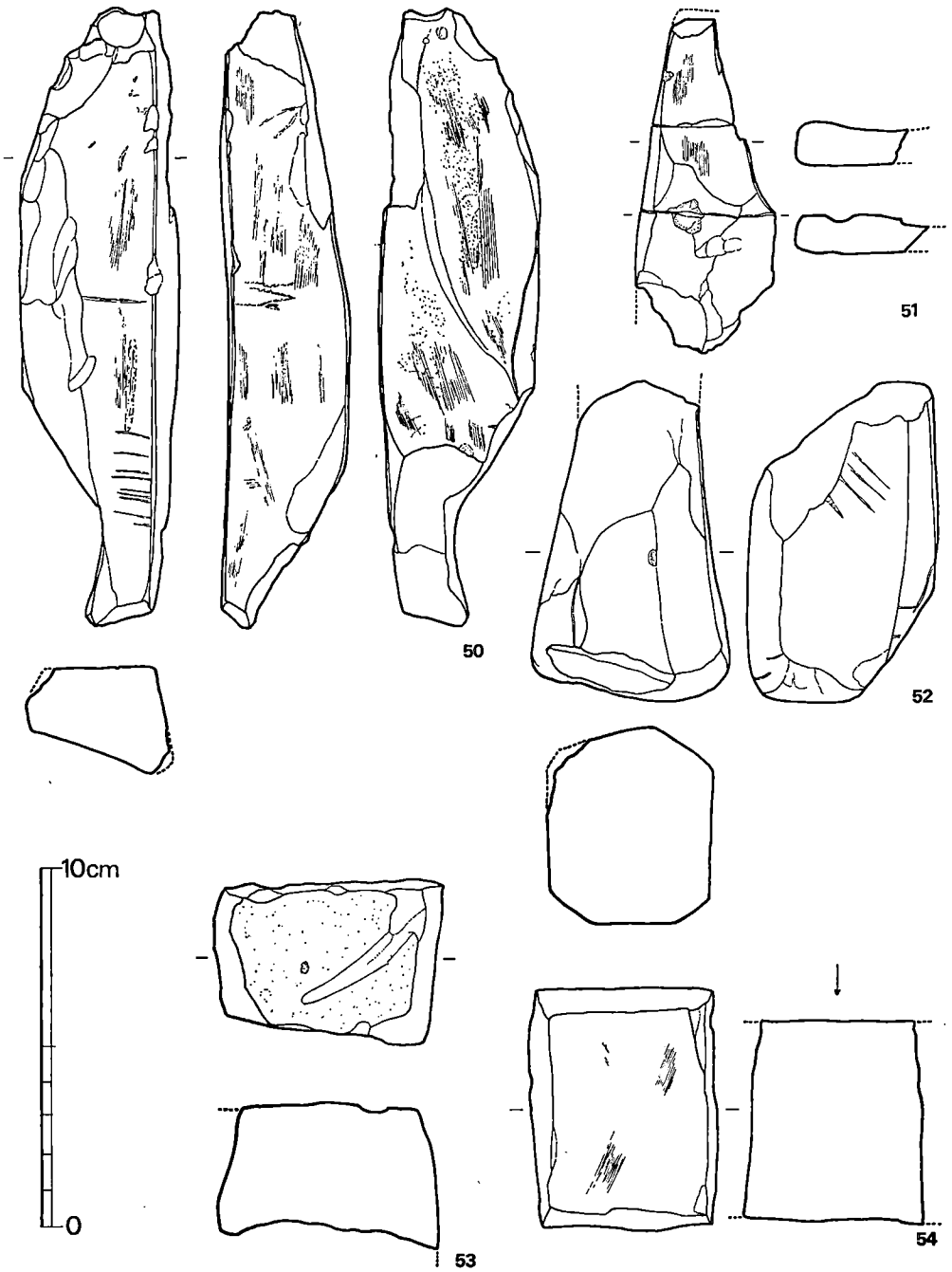
石　器（図版55～57，第232～236図）　1はF 6-6区3層出土の小形の柱状片刃石斧で右縁の一部を欠損している。長さ6.2cm，幅2.85cm，厚さ1.72cm。2は方柱状の片刃石斧片で油質頁岩製。3は硬砂岩製の小破片で左辺に稜が走る。扁平片刃石斧の破片か。辻田3号墳石室内攪乱土出土。5～9は磨製石斧。5は1.45cmと薄手の刃部破片でD 3-7区2層出土。玄武岩質。6は花崗岩質の胴部破片。C 5-21区表土層出土。7は扁平磨製石斧の刃部破片で砂岩製で表採品。幅0.7cm。8は茶褐色，凝灰岩製で頭部を欠損する。形態は撥形を呈し，刃部は鈍い。9は胴部から刃部破片で側縁は比較的よく研磨されているが，体部は凹凸が目立つ。D 2-14区2層出土。10は扁平片刃石斧で蛇紋岩製。厚さ5mm前後で刃部は形成されていない。D 2-20区4層出土。11，12は玄武岩製の太型蛤刃石斧で前者は頭部，後者は胴部破片。C 6-16区ピット内及び2層出土。13は全体に細かい打痕がみられる資料で刃部はまだ形成されていない。D 2-20区4層出土。4は流紋岩製。全体は研磨仕上げで，膨らみのある胴部から鈍い先端部へ移行する。片縁はかなり鋭利である。石戈とされる破損品であろうか。14～17は石庖丁片。14は刃部破片で粘板岩製。E 4トレンチ3層出土。15は輝緑凝灰岩製で厚さ4.5mmと薄手。刃部鋭くD 6-3区2層出土。16は中央部で欠損している。厚さ0.5mmと薄手。辻田2号墳北西周溝覆土出土。17は凝灰岩質の石材を用いたもので，背縁は斜めである。F 6-21区3層出土。18は磨製石剣の基部破片。背に2本の稜が走る。基部幅3cm，厚さ0.8cmで砂岩製。19は磨製石鏃で先端，基部を欠損するが先端に近い資料。断面は0.65cmと部厚い。斜行する研磨痕が顕著。硬質粘板岩製。20～35は打製石鏃で20～23が平基無茎式で他は凹基無茎式。23は先端を欠損するが大形の石鏃で幅2.2cm。24は黒曜石製の不定形剝片を利用し，縁辺に軽い二次加工を加える。それに対し35は縦長剝片を利用し，先端部と基部のみに二次加工を施し，縁辺は剝片の鋭利な面のまま。31は有肩の完形品で類品は19号袋状竪穴に見られ，長さ2.34cm，幅1.35cm，厚さ0.37cm，重さ0.9g。33・34は抉部の深いもので，縄文時代まで遡る可能性が大きい。黒曜石製20～22，24～28，30～35で32は乳白色で姫島産であろう。23・29はサヌカイト製。36は黒曜石製の尖頭器で部厚い。37はサヌカイト製の石槍で柳葉形を呈す。先端は薄く尖り，基部は平坦になる。時期的には縄文時代の所産であろう。F 6-23区3層出土。38は1号墳の敷石中より出土した尖頭状の石器で主要剝離面はそのままで，背面は荒い剝離を施している。39～44は削器。41は原面をもつ部厚な剝片を利用し，44は扇形に近い幅広の剝片の一縁辺に二次加工を加えている。41がサヌカイト製で他は黒曜石製。45・46はつまみ形石器で，46は寸づまりである。長さ2.3cm，幅1.75cm，重さ1.8g。F 4-25区3層出土。47は幅広の刃器で打面は他の刃器と異なり幅8mmと広い。パティナ古く先土器時代の所産か。48は角礫を原材と



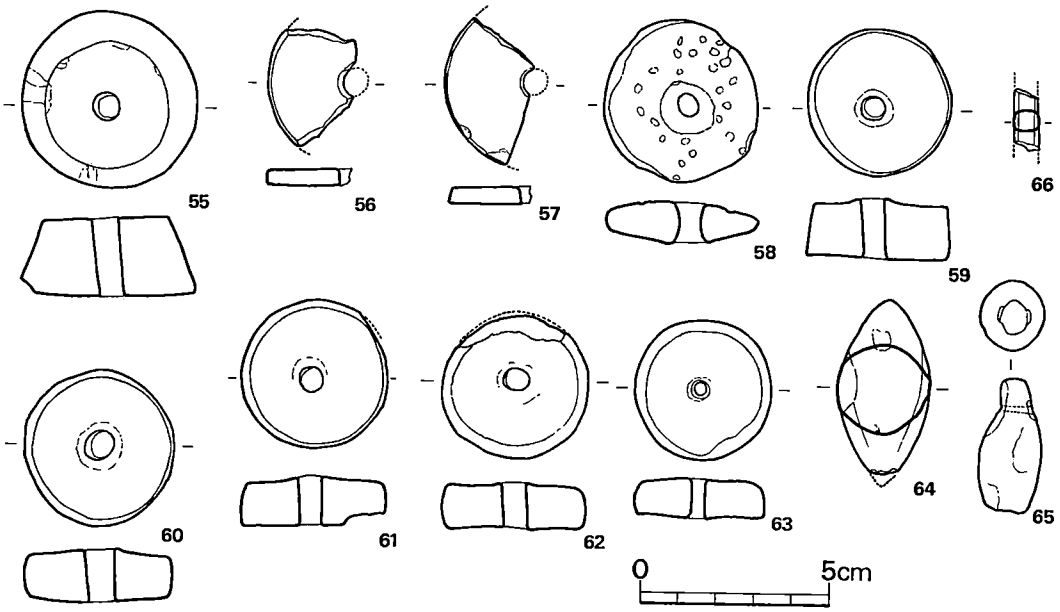
第232図　包含層出土石器実測図 1 (1/2)



第233図　包含層出土石器実測図 2 (1/2)



第234図　包含層出土石器実測図 3 (1/2)



第235図　包含層出土石器・土製品・骨製品実測図 (1/2)

する石核。C5-23区2層出土。45～48は黒曜石製。49はB7-16区表土層出土の砂岩製磨石の半欠品。径6.1，厚さ2.65cm。50はD6区表採資料で研磨面三面を有す砥石。当初は方柱状であったと思われる。粘板岩製の仕上げ砥で長さ17.1cm。51は板状の砥石で，中央部にへこみが見られる。C5-5区表土層より出土。52は層灰岩？と思われる方柱状の原材を八角形に面取りされた石器で，砥石として使用されたものである。53は砂岩製の砥石破片。D5区2層出土。54は花崗岩を利用した方形の砥石で，研磨面一面で反対側は原面を残す。55は滑石製の紡錘車で径4.5cm，厚さ2.05cm，孔径0.7cmを測る。56・57は緑泥片岩製の破片資料で55より古いであろう。他に石斧12，石庖丁6，石鏃28，削器7，石核9，磨石2，ガラス小玉1等が出土している。

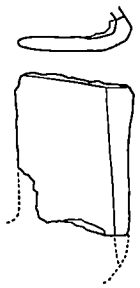
土製品（第235図56～62，65・66）　56～62は紡錘車。58は径4cm，厚さ1.1cm，重さ14.5gで両縁が薄く丸みを有す。片面のみに径1.5mmほどの刺突文が施され，文様効果をあげている。淡赤褐色を呈し焼成普通，C7区表土出土。59は1.55cmと部厚なもので，周縁が直線的，63は完形品で径3.65cm，厚さ1.15cm，重さ15.9g。赤褐色を呈し脆弱。D2-14区4層出土。64は暗褐色を呈す投弾で，下端を若干欠損する。長さ4.4cm，厚さ2.6cm。体部は軽い面取りがみられる。65は4号住居跡に多く出土する有孔の土製品。

骨製品（第235図66）

棒状の骨品。体部は火を受け黒変している。径6.5㎜。　（木下）

青銅製鋤先（図版100，第236図）

Ｂ８-16区１層出土のもので，時期不明。一方の袋部の破損した半分の資料で，袋部上端の幅３㎝，厚さ約4.5㎜を測る。器面は風化が著しく表面の細部観察は不可能である。柳田康雄氏分類のⅡ型に属す（註２）。　（井上）



第236図　包含層出土鋤先実測図 (1/2)

註１　木太久守「Ⅶ-1」『馬場山遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会　1975
浜田信也「花聳遺跡」『津古内畑遺跡―第２次―』小郡町教育委員会　1971

２　柳田康雄「第2-5青銅製鋤先」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』５　福岡県教育委員会　1977

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 7 集

昭和 53 年 3 月 31 日

発　行　　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲 6-29

印　刷　　福岡印刷株式会社
福岡市博多区那珂 142